大坂城跡

Ⅶ

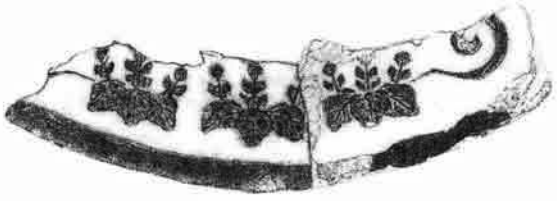


2003.7

財団法人 大阪市文化財協会

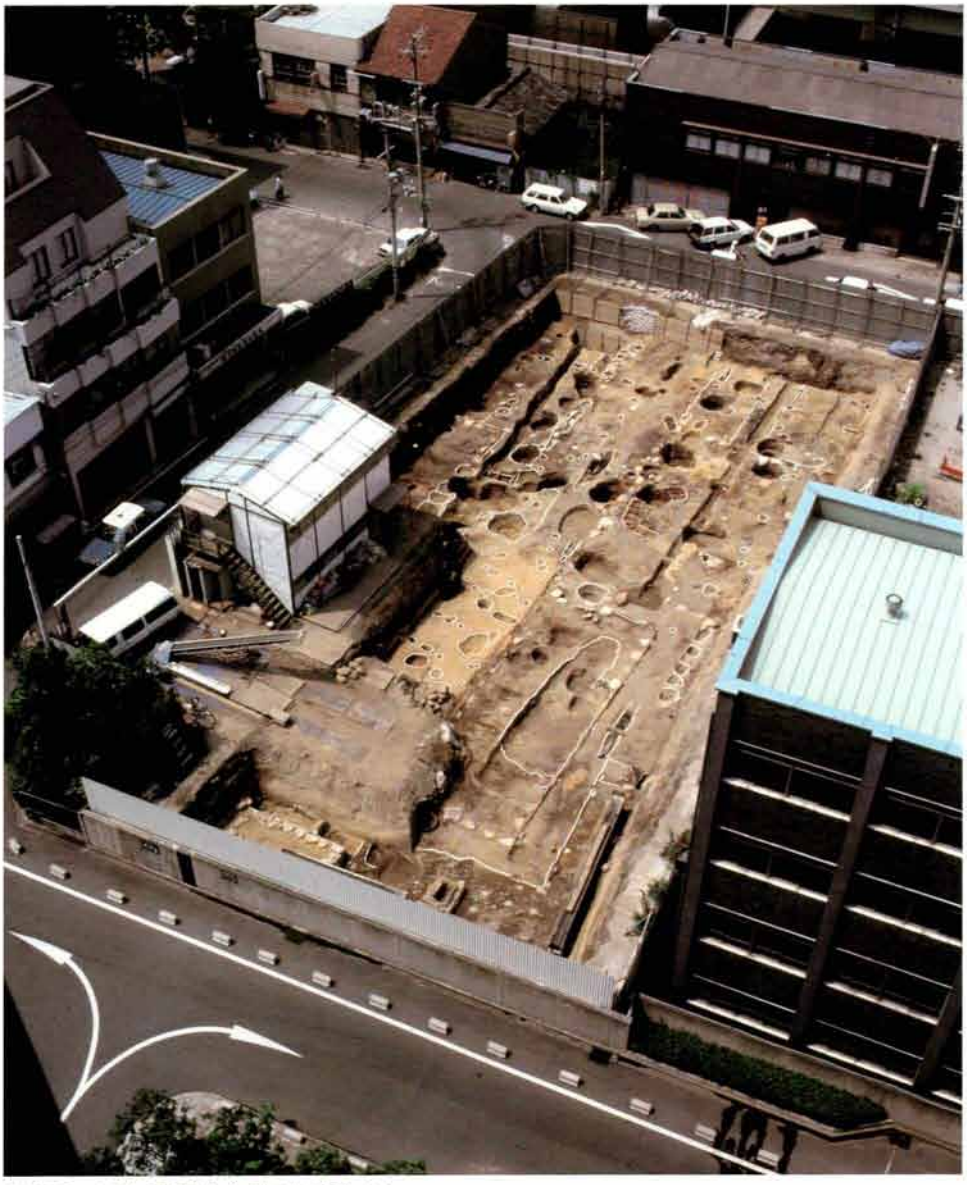
大坂城跡

Ⅶ



2003．7

財団法人 大阪市文化財協会



OS87－40次調査地全景(北東から)

大坂城跡

Ⅶ



2003.7

財団法人 大阪市文化財協会

序　　文

現在の大阪城天守閣は大阪市民の寄付によって豊臣秀吉の天守閣を模して造られたもので、その土台の石垣が徳川氏によって再建されたことを知る人は意外に少ない。豊臣秀吉が築いた2.2㎞四方もの広さを誇った「天下無双の城」は、大坂夏ノ陣を経て徳川幕府によって大きく改変され、当時の三ノ丸や惣構は城下町に変わり、今ではそこは大阪を支える官庁街・ビジネス街となっている。

大坂の景観は秀吉の大坂城築造を画期に大きく変貌した。旧来の町を取り込み、新しい城下町を出現させた。特に、慶長３(1598)年の三ノ丸造成では、高所を切り崩し、谷や湿地を埋めるといった大土木事業が行われ、「大坂」という名の由来ともなる起伏に富んだ地形を改変し、巨大な近世都市が誕生した。この都市は大坂夏ノ陣で焼け落ちたが、当時の街区が現在の基本になっていたことが明らかになった。まさに都市大阪の原型がこの時期にできたことを物語っている。

このような変遷が見えてきたのは、大坂城跡の数多く行われてきた調査の蓄積によるところが大きい。１件や２件の調査では見えてこない発掘調査の集大成を通じて、近世都市の研究に寄与し、さらに多くの市民に歴史の具体像を伝えていくことを目指したい。

最後に、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、種々のご協力を頂いた各関係機関の皆さま方に、心より御礼を申し上げる。

2003年７月

財団法人　大阪市文化財協会
理事長　脇　田　　修

例　　言

一、本書は大阪市中央区・天王寺区に所在する大坂城跡の発掘調査報告である。1985～95年度にかけて行った91件の調査を報告する。

一、発掘調査と報告書作成の費用は、第Ⅰ章の表３～６に記した各調査の原因者の負担による。

一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会企画課長中尾芳治(当時、現帝塚山学院大学)・同八木久栄(当時)、調査課長永島暉臣慎(当時)の指揮のもと、第Ⅰ章の表３～６に記した担当者によって行われた。

一、本書の執筆は調査研究部研究資料課課長代理松尾信裕、同課平田洋司(当時、現調査第２係)・寺井誠が行った。執筆は現場担当者と協議の上で進め、文責は各節の最後に示し、編集はおもに松尾・寺井が行った。この中で金属関係の遺物については同課伊藤幸司が、木簡の釈文については同課鳥居信子が担当した。

一、金属器・木器の保存処理と整理は、伊藤・鳥居が行なった。

一、遺構写真の撮影はおもに各調査担当者が行い、一部は徳永圀治氏・佃幹雄氏に委託した。

一、図版48－２・５の金属器の写真は、大阪城天守閣より提供を受けた。

一、発掘調査で得られた遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。

一、発掘調査や報告書作成に当っては、大阪府教育委員会・大阪府文化財センター・堺市立埋蔵文化財センター・大阪城天守閣・大阪市立大学・大阪市立自然史博物館など各方面の研究機関や研究者、大坂城研究会に参加された数多くの研究者の方々より貴重なご指導とご教示を賜った。多数のためご芳名は省略させていただいたが、衷心より御礼申し上げる。

一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には職員および補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表する。

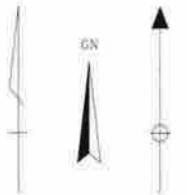
凡　　例

1．調査次数に冠せられるアルファベットについて、OSは大坂城跡、OJは大坂城下町跡、NWは難波宮跡、MRは森の宮遺跡の略号で、たとえばOS98－３という調査は1998年度の３番目の大坂城跡の調査であるということを示す。

2．遺構名の表記は、石垣(SW)、塀・柵(SA)、建物(SB)、柱穴(SP)、土壙(SK)、溝(SD)、堀(SM)、井戸(SE)、そのほかの遺構(SX)の略号を冠した。

3．遺構番号および遺物番号は、掲載したすべてに対して、各節ごとで通し番号を付した。

4．本書で用いた方位には、磁北・座標北・真北の３種類がある。これらの区別は右図の指北記号によって示した。また、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±○mを記した。



5．本書に報告する調査はいずれも平成14年３月以前のものであり、座標北および座標値はそれらの調査で使用した旧来の日本測地系(国土平面直角座標第Ⅵ系)を用いている。

6．本書で用いた土器編年と器種名については、古墳～飛鳥時代の須恵器は[田辺昭三1966・1981]に、飛鳥・奈良時代の土器は[佐藤隆2000]、豊臣期の青花・国産陶器は[森毅1992]に従い、煩雑を避けるため本文中では引用を割愛した。これら以外の文献に依拠したばあいはそのつど明記した。

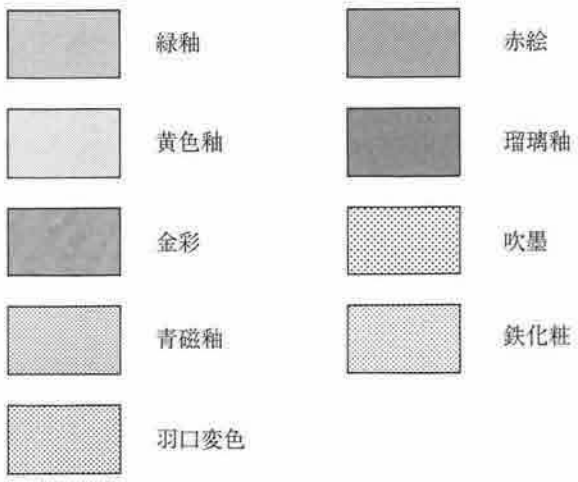
7．註は各節末に、引用・参考文献と索引は巻末に掲載した。

8．本報告書で使用する中・近世の時期区分については、これまでの大坂城跡・大坂城下町跡の調査成果をもとに下記の区分を採用している。これは一般的な時代区分とは異なるが、記録に残る火災や築城に伴う大規模開発に対象しうる地層を鍵層にして出土遺物を検討した結果得られたものであり、遺跡を解釈する上で設定した時期区分である。

大坂本願寺期	本願寺創建(1496(明応５)年)から焼亡(1580(天正８)年)まで
豊臣前期	本願寺焼亡より大坂城三ノ丸築城開始(1598(慶長３)年)まで
豊臣後期	三ノ丸築城より大坂夏ノ陣(1615(慶長20)年)まで
徳川氏大坂城期(徳川期)	大坂夏ノ陣以降

9．これまで大坂城二の丸や三の丸、あるいは大坂冬の陣・夏の陣の用語についてはひらがなの「の」を用いていたが、本報告では文脈の読み取りやすさと単語として認識しやすいように、二ノ丸、三ノ丸あるいは大坂冬ノ陣・夏ノ陣と、カタカナで記載した。

10．本書に掲載した国産陶磁器に施されている釉および彩色は、右図に示した網を掛けて表現した。



本 文 目 次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　今回報告する調査と地区の概要 …… 1

第Ⅱ章　C地区の調査 …… 7
第1節　OS86－6次およびその周辺の調査 …… 7
1）調査地と周辺の概要 …… 7
2）調査の結果 …… 7
3）まとめ …… 14
第2節　OS87－26次およびその周辺の調査 …… 17
1）調査地と周辺の概要 …… 17
2）調査の結果 …… 17
3）まとめ …… 25
第3節　OS88－113次およびその周辺の調査 …… 27
1）調査地と周辺の概要 …… 27
2）調査の結果 …… 27
3）まとめ …… 36
第4節　OS85－28次および87－78次調査 …… 38
1）調査地と周辺の概要 …… 38
2）調査の結果 …… 38
3）まとめ …… 57
第5節　OS86－38次および87－81次調査 …… 61
1）調査地と周辺の概要 …… 61
2）調査の結果 …… 61
3）まとめ …… 64
第6節　OS86－22次およびその周辺の調査 …… 66
1）調査地と周辺の概要 …… 66
2）調査の結果 …… 67
3）まとめ …… 93

第７節　OS88－56次および89－148次調査 …… 98
1）調査地と周辺の概要 …… 98
2）調査の結果 …… 98
3）まとめ …… 103

第Ⅲ章　D地区の調査 …… 105
第１節　OS90－50次およびその周辺の調査 …… 105
1）調査地と周辺の概要 …… 105
2）調査の結果 …… 106
3）まとめ …… 124
第２節　OS93－20次およびその周辺の調査 …… 129
1）調査地と周辺の概要 …… 129
2）調査の結果 …… 129
3）まとめ …… 132
第３節　OS90－51次およびその周辺の調査 …… 133
1）調査地と周辺の概要 …… 133
2）調査の結果 …… 133
3）まとめ …… 142
第４節　OS87－133次および91－70次調査 …… 143
1）調査地と周辺の概要 …… 143
2）調査の結果 …… 143
3）まとめ …… 145
第５節　OS87－147次および91－16次調査 …… 147
1）調査地と周辺の概要 …… 147
2）調査の結果 …… 147
3）まとめ …… 150
第６節　OS87－33次およびその周辺の調査 …… 151
1）調査地と周辺の概要 …… 151
2）調査の結果 …… 151
3）まとめ …… 156
第７節　OS92－19次およびその周辺の調査 …… 157
1）調査地と周辺の概要 …… 157
2）調査の結果 …… 158
3）まとめ …… 167
第８節　OS90－64次およびその周辺の調査 …… 169
1）調査地と周辺の概要 …… 169
2）調査の結果 …… 169

3）まとめ …… 174
第9節　OS93－47次およびその周辺の調査 …… 175
1）調査地と周辺の概要 …… 175
2）調査の結果 …… 175
3）まとめ …… 196
第10節　OS87－100次および90－31次調査 …… 199
1）調査地と周辺の概要 …… 199
2）調査の結果 …… 199
3）まとめ …… 210

第Ⅳ章　E・F地区の調査 …… 211
第1節　OS90－130次および91－32次調査 …… 211
1）調査地と周辺の概要 …… 211
2）調査の結果 …… 211
3）まとめ …… 221
第2節　OS86－35次およびその周辺の調査 …… 223
1）調査地と周辺の概要 …… 223
2）調査の結果 …… 223
3）まとめ …… 240
第3節　OS87－152次およびその周辺の調査 …… 243
1）調査地と周辺の概要 …… 243
2）調査の結果 …… 244
3）まとめ …… 261
第4節　OS89－6次およびその周辺の調査 …… 263
1）調査地と周辺の概要 …… 263
2）調査の結果 …… 263
3）まとめ …… 273
第5節　OS91－64・93次調査 …… 275
1）調査地と周辺の概要 …… 275
2）調査の結果 …… 275
3）まとめ …… 287
第6節　OS85－36次およびその周辺の調査 …… 291
1）調査地と周辺の概要 …… 291
2）調査の結果 …… 291
3）まとめ …… 297
第7節　OS87－14次およびその周辺の調査 …… 299
1）調査地と周辺の概要 …… 299

2）調査の結果 …… 299
3）まとめ …… 316
第8節　F地区の調査 …… 321
1）調査地と周辺の概要 …… 321
2）調査の結果 …… 321
3）まとめ …… 324

第Ⅴ章　遺構と遺物の検討 …… 325
第1節　豊臣氏大坂城惣構内の町割 …… 325
1）はじめに …… 325
2）城下町前史 …… 325
3）上町地域にある街区方位の検討 …… 327
4）豊臣期の遺構の方位 …… 329
5）豊臣期城下町の町割の復元 …… 334
6）おわりに　－徳川期城下町へ－ …… 338
第2節　大阪市内出土の金箔瓦 …… 339
1）はじめに …… 339
2）金箔瓦の概要 …… 339
3）金箔瓦の出土地 …… 344
4）まとめ　－分布状況から見た金箔瓦－ …… 354

引用・参考文献 …… 367

あとがき・索引

英文目次

報告書抄録

原色図版目次

1　豊臣後期の礎石建物、門・築地塀
　上：OS87－78次SB401・SA401と
　　東側の南北道路(北から)
　下：OS86－22次SB601・602、SX601、
　　SD601(南から)

2　奈良三彩・マジョリカ陶
　上：奈良三彩
　下：マジョリカ陶アルバレッロ

図　版　目　次

1　OS86－6・93－54次調査の遺構
　上：OS86－6次SX501
　中：OS86－6次SM401断面(西壁)
　下：OS93－54次SK201

2　OS87－26次調査の遺構
　上：SD502・503(北から)
　中：SD502・503(南東から)
　下：第4層上面検出状況(北から)

3　OS90－47・92－68次調査の遺構
　上：OS90－47次全景(東から)
　中：OS90－47次SD504(南東から)
　下：OS92－68次全景(東から)

4　OS88－113・91－82次調査の遺構
　上：OS88－113次全景(東から)
　中：OS88－113次SK508(南西から)
　下：OS91－82次全景(南から)

5　OS90－20次調査の遺構
　上：全景(南から)
　中：SK501(北から)
　下：SK501壁の構造(北西から)

6　OS85－28次調査の遺構(一)
　上：北部全景(東から)
　中：SM701(南東から)
　下：SB602(西から)

7　OS85－28次調査の遺構(二)
　上：SD606(西から)
　中：SB404(東から)
　下：SB404礎石検出状況(北東から)

8　OS87－78次調査の遺構(一)
　上：第6層上面全景(西から)
　中：SB601およびSA401(南から)
　下：SB401・SA401と南北道路の位置関係(北から)

9　OS87－78次調査の遺構(二)
　上：SB401(北から)
　中：第4層上面西部(西から)
　下：SB403(北から)

10　OS86－38・87－81次調査の遺構
　上：OS86－38次遺構検出状況(西から)
　中：OS87－81次第6層上面検出状況(南から)
　下：OS87－81次第4層上面検出状況(南から)

11　OS86－22次調査の遺構
　上：第10層上面検出状況(東から)
　中：第6層上面検出状況(南から)
　下：SD501・SB503(東から)

12　OS87－40次調査の遺構
　上：第5層上面検出状況(北東から)
　中：SB505・507・510・511(北から)
　下：第3b層上面検出状況(北西から)

13　OS92－1次調査の遺構
　上：第6・5層上面検出状況(北から)
　中：第3b層上面検出状況(北から)
　下：第3a層上面検出状況(北から)

14　OS88－56・89－148次調査の遺構
　上：OS88－56次第3層上面検出状況(南から)
　中：OS88－56次SX501(南から)
　下：OS89－148次SB302(西から)

15　OS87－29・88－1・88－31次調査の遺構
　上：OS87－29次SE503断面
　中：OS88－31次古代の遺構(北から)
　下：OS88－1次SM401(南西から)

16　OS90－50次調査の遺構(一)
　上：遺構検出状況(東から)
　中：SB503(西から)
　下：SB506(西から)

17　OS90－50次調査の遺構(二)
上：SB507(南から)
中：SK505断面
下：SE502
18　OS93－20・89－58次調査の遺構
上：OS93－20次SA201(西から)
中：OS93－20次全景(北東から)
下：OS89－58次SX101
19　OS90－51次調査の遺構
上：第３・４層の堆積状況
中：第５層内遺構検出状況
下：柱根が残る柱穴
20　OS87－133次調査の遺構
上：谷地形の堆積状況
中：SB201・202(東から)
下：SD202断面
21　OS87－147次調査の遺構
上：徳川期遺構検出状況(南から)
中：SX601・SW601(北から)
下：SD603・604断面(東壁)
22　OS87－33・93－25次調査の遺構
上：OS87－33次第4層(古代)の堆積状況
中：OS87－33次SE201
下：OS93－25次SW201
23　OS92－19次調査の遺構
上：地層
中：SX401(南から)
下：第2c層基底面検出状況(調査地西側：南から)
24　OS90－142次調査の遺構
上：三ノ丸造成以前の礎石(第2c層上面)
中：北西炉群検出状況
下：SD104・105断面
25　OS90－15次調査の遺構
上：SD702(北東から)
中：SD702を埋める焼土
下：SW501(南から)
26　OS93－47次調査の遺構(一)
上：Ａ地区南壁断面
中：SM1101遺物出土状況(B地区：東から)
下：SE1101(A地区)
27　OS93－47次調査の遺構(二)
上：SM901断面(Ｂ地区東壁)
中：SB701検出状況(A地区：南から)
下：SD701検出状況(C地区：北から)
28　OS87－100・90－31次調査の遺構
上：OS87－100次西壁南半断面
中：OS87－100次SE914検出状況
下：OS90－31次SE901
29　OS91－32次調査の遺構
上：完掘状況(調査地西側)
中：SA501(南から)
下：SK101(東から)
30　OS86－35・87－69・89－86次調査の遺構
上：OS86－35次遺構検出状況(北東から)
中：OS87－69次SD502(東から)
下：OS89－86次SD504～507(東から)
31　OS87－37・87－56・90－108次調査の遺構
上：OS87－37次中世包含層分布状況(南から)
中：OS87－56次調査地全景(西から)
下：OS90－108次SB501(南東から)
32　OS89－７・92－６次調査の遺構
上：OS89－７次北区遺構検出状況(南から)
中：OS89－７次南区遺構検出状況(東から)
下：OS92－６次SX1002(南から)
33　OS92－12次調査の遺構
上：豊臣前期遺構検出状況(東から)
中：豊臣前期SB505～508(北から)
下：豊臣後期遺構検出状況(東から)
34　OS89－19次調査の遺構
上：第５・４層相当層上面検出状況(北西から)
中：第３層相当層上面検出状況(北西から)
下：SW202・SD203(南東から)
35　OS87－152・92－22次調査の遺構
上：OS87－152次SD202(南東から)
中：OS92－22次第５層上面検出状況(北から)
下：OS92－22次SW201・SD201(南東から)
36　OS92－112次調査の遺構
上：SD201(東から)
中：SX501(東から)
下：SX501(北から)
37　OS89－6・91－４・91－34次調査の遺構
上：OS89－６次SX201(北から)
中：OS91－４次SD501(南から)
下：OS91－34次SX301･302､SD203･204(南から)
38　OS91－64・91－93次調査の遺構
上：OS91－64次遺構検出状況(西から)
中：OS91－64次遺構検出状況(北から)
下：OS91－93次整地層内の礫集積(南から)

39　OS85－36・89－149・90－1次調査の遺構
　　上：OS85－36次徳川期石組穴蔵(西から)
　　中：OS89－149次深掘りトレンチ(北から)
　　下：OS90－1次徳川期遺構検出状況(東から)
40　OS89－41・91－53次調査の遺構
　　上：OS89－41次SW501・SX501(南から)
　　中：OS89－41次SA501(東から)
　　下：OS91－53次SD401・402(南から)
41　OS87－18次調査の遺構
　　上：SE601検出状況(東から)
　　中：SE601井戸枠遺存状況(西から)
　　下：SE601土居組(西から)
42　OS87－14・89－23次調査の遺構
　　上：OS87－14次SM301(北東から)
　　中：OS87－14次SD101(西から)
　　下：OS89－23次調査地全景(南から)
43　OS89－33・93－28次調査の遺構
　　上：OS89－33次調査地全景(南から)
　　中：OS93－28次北側調査地(南から)
　　下：OS93－28次南側調査地(東から)
44　OS90－27・88－73次調査の遺構
　　上：OS90－27次南壁断面
　　中：OS90－27次第3層上面完掘状況(東から)
　　下：OS88－73次礎石検出状況(北から)
45　OS90－50・87－29次出土墨書土器・SE503出土土器
46　OS90－50次出土遺物
47　OS87－100・90－31次出土瓦・OS93－47次出土イギリス陶器
48　OS85－28・87－40・87－78・89－148・92－1次出土遺物

挿　図　目　次

図1　大坂城跡の位置 …… 1
図2　地区割りおよび調査地位地図 …… 2
図3　OS86－6次などの調査地位置図 …… 7
図4　各調査地断面図 …… 8
図5　OS86－6次遺構配置図 …… 8
図6　OS86－6次出土遺物 …… 9
図7　OS93－54次調査地山上面遺構配置図 …… 10
図8　OS93－54次出土遺物(1) …… 11
図9　OS93－54次豊臣期遺構配置図 …… 12
図10　OS93－54次出土遺物(2) …… 13
図11　OS90－66次豊臣期遺構配置図 …… 13
図12　OS93－54次徳川期遺構配置図 …… 14
図13　本願寺期の溝と地形との関係 …… 15
図14　OS87－26次などの調査地位置図 …… 17
図15　OS87－26次層序模式図 …… 17
図16　OS87－26次第5層上面遺構配置図 …… 18
図17　OS90－47次地山上面遺構配置図 …… 18
図18　OS87－26次第4層および
　　第3層上面遺構配置図 …… 19
図19　OS87－26次出土遺物 …… 20
図20　OS90－47次第1層上面遺構配置図 …… 21
図21　OS90－47次SE102出土遺物 …… 23
図22　OS89－76次遺構配置図 …… 24
図23　OS92－68次遺構配置図 …… 25
図24　OS88－113次などの調査地位置図 …… 27
図25　OS90－20次東壁断面図 …… 27
図26　OS90－20次出土遺物 …… 28
図27　分銅 …… 28
図28　OS90－20次出土瓦と
　　瓦に見られる記号の拓本 …… 29
図29　OS90－20次第5層上面遺構配置図 …… 30
図30　OS90－20次SK501実測図 …… 30
図31　OS88－113次第5層上面遺構配置図 …… 31
図32　OS88－113次SK508出土遺物 …… 32
図33　OS88－113次第3層上面(豊臣期)
　　遺構配置図 …… 34
図34　OS88－113次第1層基底面(徳川期)
　　遺構配置図 …… 35
図35　OS88－113次SK101実測図 …… 35
図36　OS88－113・90－20・91－82次遺構配置図 … 37
図37　OS85－28次および87－78次調査地位置図 … 38
図38　OS87－78次東西壁断面図 …… 39
図39　OS87－78次各層出土遺物 …… 40
図40　OS87－78次各層出土瓦 …… 41
図41　OS87－78次各層出土金属器・骨角器 …… 42
図42　OS87－78次各層出土木器 …… 43

図43　OS87－78次第５層出土木簡 …… 44
図44　OS85－28次各層出土遺物 …… 45
図45　OS85－28次第７層上面遺構配置図 …… 47
図46　OS87－78次第６層上面遺構配置図 …… 48
図47　OS87－78次SK601出土木簡 …… 48
図48　OS85－28次第６層上面遺構配置図 …… 49
図49　OS87－78次第４層上面遺構配置図 …… 51
図50　OS85－28次第４層上面遺構配置図 …… 53
図51　OS85－28次SB404断面概略図 …… 53
図52　OS85－28次第２層上面遺構配置図 …… 53
図53　OS85－28次各遺構出土遺物 …… 54
図54　OS87－78次第２層上面遺構配置図 …… 56
図55　OS85－28・87－78次豊臣前期遺構配置図 … 58
図56　OS86－38次および87－81次調査地位置図 … 61
図57　OS87－81次北壁断面図 …… 61
図58　OS87－81次遺構配置図 …… 62
図59　出土遺物実測図 …… 63
図60　OS86－38次平面図 …… 64
図61　調査地関係図 …… 64
図62　OS86－22次などの調査地位置図 …… 66
図63　調査地断面図 …… 68
図64　第2b層出土遺物（１） …… 70
図65　第2b層出土遺物（２） …… 71
図66　第３・４層出土遺物 …… 72
図67　第４層出土遺物（１） …… 73
図68　第４層出土遺物（２） …… 74
図69　第４層出土遺物（３） …… 75
図70　第４層出土遺物（４） …… 75
図71　第４層出土遺物（５） …… 76
図72　第４層出土遺物（６） …… 77
図73　第４層出土遺物（７） …… 78
図74　第５層出土遺物 …… 79
図75　第10層および第10層上面遺構出土遺物 …… 81
図76　OS86－22次第10層上面遺構配置図 …… 82
図77　第６層上面遺構配置図 …… 83
図78　第５層上面遺構配置図 …… 86
図79　SB510礎石抜取穴出土土師器 …… 89
図80　第3b層上面遺構配置図 …… 91
図81　第3a層上面遺構配置図 …… 93
図82　大坂夏ノ陣直前の遺構配置図 …… 95
図83　現在の街区における建物配置図 …… 96
図84　OS88－56次および89－148次調査地位置図 … 98
図85　OS89－148次断面図 …… 98
図86　OS88－56次断面図 …… 99
図87　OS88－56・89－148次出土遺物 …… 99
図88　OS89－148次第７層出土遺物 …… 100
図89　OS89－148次第８層上面・第３層上面
　　遺構配置図 …… 102
図90　OS88－56次遺構配置図 …… 103
図91　竈SX501実測図 …… 104
図92　OS90－50次などの調査地位置図 …… 105
図93　OS87－29・88－１次断面図 …… 106
図94　OS90－50次遺構配置図 …… 108
図95　OS90－50次遺構断面図 …… 109
図96　OS90－50次出土遺物（１） …… 110
図97　OS90－50次SE502出土墨書土器 …… 111
図98　OS90－50次出土遺物（２） …… 113
図99　OS88－31次遺構配置図 …… 114
図100　OS88－31次出土遺物 …… 115
図101　OS91－54次遺構配置図 …… 116
図102　OS91－54次遺構出土遺物 …… 116
図103　OS87－29次SE503実測図 …… 117
図104　OS87－29次SE503出土土師器（１） …… 118
図105　OS87－29次SE503出土土師器（２） …… 119
図106　OS87－29次SE503出土
　　須恵器・緑釉陶器・墨書土器 …… 120
図107　OS87－29次SE503出土製塩土器 …… 121
図108　OS88－１次大坂本願寺期・豊臣期の遺構 … 122
図109　OS88－１次大坂本願寺期・豊臣期の遺物 … 122
図110　OS90－50次調査で検出した柱穴列 …… 123
図111　OS87－29次遺構配置図 …… 123
図112　旧地形復元図 …… 124
図113　OS90－50次とその周辺の古代の遺構 …… 125
図114　OS93－20次などの調査地位置図 …… 129
図115　OS87－66次平・断面図 …… 129
図116　OS95－19次遺構配置図 …… 130
図117　OS93－20次遺構配置図 …… 131
図118　OS93－20次SA201実測図 …… 131
図119　OS89－68次遺構配置図 …… 132
図120　OS89－58次遺構配置図 …… 132
図121　OS90－51次などの調査地位置図 …… 133
図122　OS90－51次および87－39次断面図 …… 134
図123　OS90－51次奈良時代遺構配置図 …… 135
図124　OS90－51次SK501・第５層出土遺物 …… 136
図125　OS90－51次第５層出土遺物 …… 137
図126　OS90－51次豊臣前期遺構配置図 …… 138
図127　OS90－51次SX301出土瓦 …… 139
図128　OS90－51次SK401・第3a層出土遺物 …… 139

図129　OS87－39次豊臣期遺構配置図 …… 140
図130　OS90－51次豊臣後期遺構配置図 …… 140
図131　OS90－51次SK301出土遺物 …… 141
図132　OS90－51次徳川期遺構配置図 …… 142
図133　OS87－133次および
　　91－70次調査地位置図 …… 143
図134　OS87－133次断面図 …… 143
図135　OS87－133次豊臣前期遺構配置図 …… 144
図136　OS87－133次SD202断面図(北壁) …… 145
図137　OS87－133次調査地周辺の豊臣前期の遺構・146
図138　OS87－147次および
　　91－16次調査地位置図 …… 147
図139　OS87－147次東壁断面図 …… 147
図140　OS91－16次豊臣後期以前の遺構配置図 …… 148
図141　OS87－147次豊臣後期遺構配置図 …… 148
図142　OS91－16次徳川期遺構配置図 …… 149
図143　OS91－16次SK301出土
　　丁銀形土製品拓影 …… 149
図144　OS87－147次徳川期遺構配置図 …… 149
図145　OS87－147次およびOS91－16次調査地と
　　現在の街区との関係 …… 150
図146　OS87－33次などの調査地位置図 …… 151
図147　OS87－23・33次断面図 …… 151
図148　OS87－33次第４層出土遺物 …… 153
図149　OS87－23・33次遺構配置図 …… 154
図150　OS93－25次遺構配置図および
　　SW201立面図 …… 155
図151　OS87－33次および93－25次
　　豊臣前期出土遺物 …… 155
図152　OS92－19次などの調査地の位置 …… 157
図153　OS92－19次断面図の位置 …… 158
図154　OS92－19次断面図 …… 158
図155　OS92－19次出土遺物(１) …… 160
図156　OS92－19次中世以前の遺構配置図 …… 161
図157　OS92－19次出土遺物(２) …… 162
図158　OS92－19次豊臣期
　　(第2c層基底面)遺構配置図 …… 164
図159　OS92－19次出土遺物(３) …… 164
図160　OS92－19次豊臣後期・徳川期
　　(第1c層基底面)遺構配置図 …… 165
図161　OS92－19次SK201イヌ骨出土状態 …… 165
図162　OS92－19次出土遺物(４) …… 166
図163　OS90－64次などの調査地位置図 …… 169
図164　OS90－64次南壁断面図 …… 170
図165　OS90－64次および91－６次
　　中世～豊臣前期遺構配置図 …… 171
図166　OS90－142次徳川期遺構配置図 …… 173
図167　OS90－142次における
　　遺構と地層の関係 …… 173
図168　OS93－47次などの調査地位置図 …… 175
図169　OS93－47次層位断面図 …… 176
図170　OS93－47次出土土器 …… 177
図171　OS93－47次出土円筒・朝顔形埴輪 …… 178
図172　OS93－47次出土靭形埴輪 …… 179
図173　OS93－47次出土形象埴輪(靭形埴輪以外) … 180
図174　OS93－47次SE1101実測図 …… 181
図175　OS93－47次SE1102～1105断面図 …… 181
図176　OS93－47次第11層上面遺構配置図 …… 182
図177　OS93－47次第11層上面遺構出土遺物 …… 183
図178　OS93－47次SM1101出土遺物 …… 184
図179　OS93－47次SM1101断面図 …… 185
図180　OS93－47次および92－16次出土瓦 …… 185
図181　OS93－47次第10層上面遺構配置図 …… 186
図182　OS93－47次SK1001・1002出土遺物 …… 187
図183　OS92－16次第10層上面遺構配置図 …… 187
図184　OS93－47次SM901断面図 …… 187
図185　OS93－47次第９層上面遺構配置図 …… 188
図186　OS93－47次SK901・902・
　　第８層出土遺物 …… 189
図187　OS93－47次第７層上面遺構配置図 …… 190
図188　OS93－47次第６層出土遺物 …… 191
図189　OS92－16次第６層基底面遺構配置図 …… 192
図190　OS90－15次第７層上面遺構配置図 …… 192
図191　OS90－15次SD702出土遺物 …… 193
図192　OS93－47次第５層上面遺構配置図 …… 194
図193　OS92－16次第６・５層上面遺構配置図 …… 195
図194　OS93－47次および92－16次
　　徳川期出土遺物 …… 195
図195　OS90－15次第５層上面遺構配置図 …… 196
図196　豊臣後期・徳川初期の遺構配置図比較 …… 197
図197　OS87－100次および
　　90－31次調査地位置図 …… 199
図198　OS87－100次層序模式図 …… 200
図199　OS87－100および90－31次
　　大坂本願寺期以前の遺構配置図 …… 201
図200　OS87－100および90－31次井戸断面図 …… 202
図201　OS87－100次中世以前の出土遺物 …… 203
図202　OS87－100次出土瓦 …… 204

図203　OS90－31次出土遺物 …… 205
図204　OS87－100および90－31次
　　惣構普請以前の遺構配置図 …… 207
図205　OS90－31次第７層出土遺物 …… 208
図206　OS87－100および90－31次
　　惣構普請以後の遺構配置図 …… 209
図207　OS90－130次および
　　91－32次調査地位置図 …… 211
図208　OS91－32次層序模式図 …… 212
図209　OS90－130次古代の遺構配置図 …… 212
図210　OS90－130次SD502出土遺物 …… 213
図211　OS91－32次古代および
　　豊臣前期の遺構配置図 …… 214
図212　OS91－32次各遺構出土遺物 …… 215
図213　OS91－32次SK501出土遺物 …… 216
図214　OS90－130次豊臣後期以後の遺構配置図 …… 218
図215　OS91－32次豊臣期以後の遺構配置図 …… 219
図216　OS91－32次SK101実測図 …… 220
図217　OS90－130・91－32次近世出土遺物 …… 221
図218　OS86－35次などの調査地位置図 …… 223
図219　各調査地断面図 …… 224
図220　OS87－69次第４層出土遺物 …… 224
図221　OS92－12次第４・５層出土遺物 …… 225
図222　OS89－７次調査地の位置および
　　南区遺構配置図 …… 225
図223　OS92－６次古代および中世遺構配置図 …… 226
図224　OS89－７次SK901・902出土遺物 …… 226
図225　OS92－６次SX1002出土遺物 …… 227
図226　OS86－35次中世遺構配置図 …… 229
図227　OS86－35・92－６次出土遺物 …… 230
図228　OS87－37次中世包含層分布範囲図 …… 231
図229　OS87－56次平・断面図 …… 231
図230　OS90－108次豊臣前期遺構配置図 …… 232
図231　OS92－12次豊臣前期遺構配置図 …… 233
図232　OS87－69・89－86次
　　豊臣前期遺構配置図 …… 234
図233　OS92－12次豊臣後期遺構配置図 …… 235
図234　OS92－12次出土遺物（１） …… 236
図235　OS92－12次出土遺物（２） …… 237
図236　OS92－12次出土遺物（３） …… 238
図237　OS89－７次北区豊臣前期遺構配置図 …… 239
図238　OS90－108次豊臣後期遺構配置図 …… 239
図239　OS89－７・89－86次出土遺物 …… 239
図240　OS89－７次南区徳川期遺構配置図 …… 240
図241　OS87－152次などの調査地位置図 …… 243
図242　調査地断面図 …… 244
図243　各層出土遺物 …… 245
図244　OS92－22次第５層上面遺構配置図 …… 247
図245　OS92－22次第４層上面遺構配置図 …… 247
図246　OS92－22次第３層上面遺構配置図 …… 248
図247　OS89－19次第５・４層相当層上面
　　遺構配置図 …… 250
図248　OS89－19次第３層相当層上面遺構配置図 …… 251
図249　OS92－22次SW201実測図 …… 253
図250　OS87－152次遺構配置図 …… 254
図251　OS92－22次SD401・301・201出土遺物 …… 254
図252　OS89－19次豊臣後期遺構配置図 …… 255
図253　OS89－19次SW202・SD203実測図 …… 256
図254　OS92－60次遺構配置図 …… 257
図255　OS92－60次SK201出土遺物 …… 258
図256　OS92－60次SK202出土遺物 …… 258
図257　OS92－22次第１層上面遺構配置図 …… 259
図258　OS92－22次SK101出土遺物 …… 260
図259　石垣および石組溝推定線 …… 262
図260　OS89－６次などの調査地位置図 …… 263
図261　OS90－112・89－６・91－34次断面図 …… 264
図262　OS90－112次古代遺構実測図 …… 265
図263　OS91－４次溝SD501実測図 …… 265
図264　OS91－34次古代遺構配置図 …… 266
図265　OS90－112次SX501・SK501・503
　　出土遺物 …… 267
図266　OS91－34次SX502出土遺物（１） …… 268
図267　OS91－34次SX502出土遺物（２） …… 269
図268　OS90－112次中近世遺構実測図 …… 271
図269　OS91－34次遺構出土遺物 …… 272
図270　OS90－112次SD201断面図 …… 272
図271　OS89－６次中近世遺構実測図 …… 273
図272　OS91－34次中近世遺構実測図 …… 273
図273　OS91－64・93次調査地位置図 …… 275
図274　OS91－64次調査地断面図 …… 276
図275　OS91－64次第４層上面遺構配置図 …… 277
図276　OS91－64次第２層基底面遺構配置図 …… 278
図277　OS91－64次第１層内遺構配置図 …… 280
図278　OS91－64次SX102・104実測図 …… 281
図279　OS91－93次調査地遺構配置図 …… 282
図280　OS91－64次出土遺物(1) …… 283
図281　OS91－64次出土遺物(2) …… 284
図282　OS91－64次出土遺物(3) …… 285

図283　OS91－64次出土遺物(4) …… 286
図284　油煙受皿と土師器皿 …… 287
図285　現在の敷地方位と調査地の位置図 …… 288
図286　OS85－36次などの調査地位置図 …… 291
図287　調査地断面図 …… 292
図288　豊臣前期遺構配置図 …… 293
図289　SW501立面図 …… 294
図290　OS89－41次豊臣後期遺構配置図 …… 295
図291　各層および遺構出土遺物実測図 …… 296
図292　OS85－36次徳川期遺構配置図 …… 297
図293　OS87－14次などの調査地位置図 …… 299
図294　OS89－23次断面図 …… 300
図295　OS87－14次断面図 …… 300
図296　OS87－18次遺構配置図 …… 302
図297　OS87－18次SE601・602平面図 …… 302
図298　SE601構造復元図 …… 302
図299　OS87－18次SE601・602断面図 …… 302
図300　OS87－18次SE601部材 …… 303
図301　OS87－18次SE601ほか出土遺物 …… 304
図302　OS89－23次遺構配置図 …… 305
図303　OS87－14次調査位置およびSM301実測図 …… 306
図304　OS93－28次遺構配置図 …… 307
図305　OS89－23次SE101出土磁器 …… 307
図306　OS89－33次遺構配置図 …… 308
図307　OS93－28次SD103出土遺物 …… 309
図308　OS93－28次SE102・SK101出土遺物 …… 310
図309　OS93－28次SK102～104・盛土出土遺物 …… 311
図310　OS93－28次SK105出土遺物(1) …… 312
図311　OS93－28次SK105出土遺物(2) …… 313
図312　OS93－28次出土金属生産遺物 …… 314
図313　OS93－28次盛土出土硯 …… 314
図314　F地区の調査地位置図 …… 321
図315　F地区の地層柱状図 …… 321
図316　OS90－27次南壁断面図 …… 322
図317　OS90－27次遺構配置図 …… 323
図318　OS88－73次豊臣期遺構配置図 …… 323
図319　OS89－40次遺構配置図 …… 324
図320　OS91－73次遺構配置図 …… 324
図321　大阪城西側の市街地 …… 328
図322　豊臣期の遺構方位 …… 331
図323　推定される豊臣期町割と
　　元和期の伏見町人再開発地 …… 337
図324　金箔瓦出土調査地 …… 340
図325　金箔押棟飾り瓦(1) …… 341
図326　金箔押棟飾り瓦(2) …… 342
図327　金箔押滴水瓦 …… 343
図328　A地区出土金箔瓦 …… 344
図329　B地区出土金箔瓦 …… 346
図330　C・D地区出土金箔瓦 …… 347
図331　E・F地区出土金箔瓦 …… 348
図332　G地区出土金箔瓦(1) …… 350
図333　G地区出土金箔瓦(2) …… 351
図334　H地区出土金箔瓦 …… 353
図335　城下町出土金箔瓦 …… 354
図336　豊臣期の金箔瓦出土地点 …… 355
図337　徳川期以後の金箔瓦出土地点 …… 356
図338　桐文・菊文の金箔瓦出土地点 …… 357

表目次

表1　『大坂城跡』Ⅵ・Ⅶで報告する調査地一覧（A～F・H地区）…… 3
表2　G地区調査地一覧 …… 3
表3　C地区調査地一覧表 …… 4
表4　D地区調査地一覧表 …… 5
表5　E地区調査地一覧表 …… 6
表6　F地区調査地一覧表 …… 6
表7　OS87－78次第5層およびSK601出土木簡一覧表 …… 46
表8　出土分銅の法量一覧 …… 79
表9　OS90－50次の掘立柱建物 …… 107
表10　開元通寶出土遺跡一覧 …… 127
表11　古代・中世の検出井戸一覧 …… 202
表12　油煙受皿と土師器皿出土一覧表 …… 287
表13　金箔瓦出土調査地一覧 …… 340
表14　金箔軒丸瓦一覧（1） …… 359
表15　金箔軒丸瓦一覧（2） …… 360
表16　金箔軒平瓦一覧 …… 361
表17　金箔飾り瓦一覧（1） …… 362
表18　金箔飾り瓦一覧（2） …… 363
表19　金箔飾り瓦一覧（3） …… 364
表20　金箔飾り瓦一覧（4） …… 365
表21　金箔飾り瓦一覧（5） …… 366

写真目次

写真1　OS90－50次現地説明会前の取材風景 …… 105
写真2　OS94－50次完掘状況 …… 106
写真3　OS90－50次SB506の柱穴で見つかった根石 …… 109
写真4　OS90－50次SD502断面 …… 109
写真5　OS90－50次出土新羅土器 …… 112
写真6　OS90－50次不明土製品14 …… 112
写真7　OS90－50次SK506遺物出土状況 …… 112
写真8　OS90－50次SE502深掘作業 …… 113
写真9　OS88－31次出土銭貨X線写真（実物大） …… 115
写真10　OS88－31次出土開元通寶（実物大） …… 115
写真11　OS89－102次完掘状況 …… 133
写真12　OS91－70次検出の柱穴 …… 143
写真13　OS86－17次検出の礎石建物 …… 157
写真14　OS91－25次礎石建物 …… 157
写真15　OS91－27次遺構検出状況 …… 157
写真16　OS92－19次SD301遺物出土状況 …… 162
写真17　OS92－19次足跡完掘状況 …… 163
写真18　OS92－19次SD302検出状況 …… 163
写真19　OS91－78次ゆりかす出土状況 …… 167
写真20　OS93－47次SB701の壁の状況 …… 189
写真21　OS87－100次SX901出土鬼瓦 …… 204
写真22　OS90－130次SP502の底に置かれた板石 …… 213
写真23　SK107 金属生産遺物出土状況 …… 315
写真24　OS93－2次で検出した石組穴蔵の基礎 …… 324

第Ⅰ章　今回報告する調査と地区の概要

大坂城跡は大阪市の中央を南北に延びる上町台地の北端に位置している(図１)。その範囲は豊臣氏大坂城の惣構の範囲と、北東部の現在の城見と呼称する旧猫間川と平野川右岸の京橋口定番下屋敷地一帯を含んでいる。豊臣氏大坂城惣構の範囲は北は大川、南は空堀通商店街付近、東は旧猫間川、西が東横堀川までの範囲である。現在、行政的に大坂城跡の指定範囲内に難波宮跡や森の宮遺跡があるが、上町台地北端の歴史を考えるうえでは一連の遺跡として考えるべきであろう。

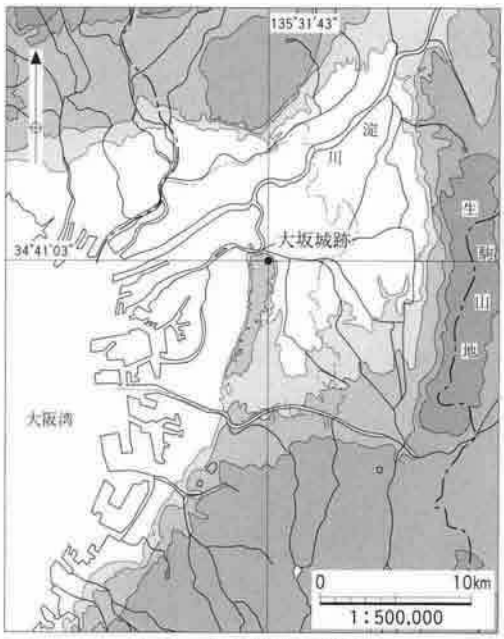


図１　大坂城跡の位置

大坂城跡では難波宮跡や森の宮遺跡を含むと、大阪市文化財協会が設立された1979年から2003年３月までに約400件の調査が行われている。これらの調査の概要については、『大坂城跡』Ⅲ～Ⅵで整理されている[大阪市文化財協会1988・1999a・2002a・2002b]。

本書は『大坂城跡』Ⅵの続編に当り、前書を編集するに当って定めた地区割(図２)のＣ～Ｆ区、つまり谷町筋より西側の調査を報告対象とする。これは豊臣氏大坂城の惣構西部に当り、徳川期には城下町として繁栄するところである。これらの調査は1985年度から1995年度にかけて行われ、その数は91件に上る。以下で各地区の概要を記す。

Ｃ地区は北が大川、南が島町通、東が谷町筋、西が東横堀川までの範囲で、19件の調査を対象とする(表３)。豊臣氏大坂城の西側惣構の最北部に当り、北端に近世京街道の延長部である土佐堀通が延びている。この道路は大坂城の北にある京橋から城下町にある今橋までを繋ぐ、当時でも重要な交通路となっていた。また、土佐堀通より２本南の道路は高麗橋通であり、豊臣氏大坂城の天守を見通せる通りであるといわれ[宮本雅明1989]、豊臣期にはすでに建設されていたと推定されている。この地区の西端部には大名屋敷が２個所確認されており、重要な一画を占めていたと推定できる。

Ｄ地区は北が島町通、南が大手通、東が谷町筋、西が東横堀川までの範囲で、35件の調査を対象とする(表４)。豊臣氏大坂城の西側惣構の北部に当るが、豊臣氏大坂城の遺構群とともに古代の遺構群が発見されている地区である。難波宮跡が位置する法円坂一帯に続く高燥な立地環境であるが、現在では埋没して見えなくなっている開析谷が存在し、その一部は谷町筋地下駐車場建設に伴う調査で確認されている[大阪市文化財協会1999a]。こうした谷は後代の削平を免れ、奈良時代から平安時代の



図２　地区割りおよび調査地位地図

遺構群や遺物が発見されている。こうした谷の窪みは豊臣期大坂城の三ノ丸造成などに伴って埋められ、平坦化していく。当地区の西側は現在の東横堀川に向って急激に低くなっていく。この西端の低地部では古代から中世の遺構・遺物が多く検出されているとともに、豊臣期大坂城の惣構造成時および三ノ丸造成時の整地層が良好に残っているところでもある。

Ｅ地区は北が大手通、南が中央大通、東が谷町筋、西が東横堀川までの範囲で、31件の調査を対象とする(表５)。惣構の西側中央に当り、ここでも上町台地を刻む開析谷がいくつか見つかっている。そうした谷地形は古代や近世初頭の厚い整地層によって埋められ、豊臣氏大坂城関連の遺構群が発見されている。Ｄ地区ほど古代の遺構群は多くはないが、中世の瓦などが発見されている。また、当地区西側の松屋町筋付近でも同様に古代から中世の遺構群や遺物が見つかっている。

表1 『大坂城跡』Ⅵ・Ⅶで報告する調査地一覧(A～F・H地区)

地区	番号	調査次数	地区	番号	調査次数	地区	番号	調査次数	地区	番号	調査次数	地区	番号	調査次数	地区	番号	調査次数
A	1	OS84-17		28	OS93-37		55	OS90-20		82	OS87-23		109	OS87-152		136	NW94-1
	2	OS80-1		29	OS92-41		56	OS91-82		83	OS87-33		110	OS89-6		137	NW82-33
	3	OS80-2		30	OS81-6		57	OS88-113		84	OS90-142		111	OS91-4		138	NW82-45
	4	OS82-16		31	OS88-121		58	OS86-22		85	OS90-64		112	OS91-34		139	OS87-135
	5	OS82-20		32	OS89-90		59	OS87-40		86	OS91-6		113	OS90-112		140	OS88-97
	6	OS86-45		33	OS89-74		60	OS92-1		87	OS91-78		114	OS90-130		141	OS91-3
	7	OS83-5		34	OS86-34		61	OS89-148		88	OS86-17		115	OS91-93		142	OS92-7
	8	OS83-14		35	NW82-24		62	OS88-56		89	OS89-154		116	OS92-60		143	OS93-3
	9	OS83-3		36	OS87-123	D	63	OS88-31		90	OS91-25		117	OS89-19		144	OS88-118
	10	OS81-2		37	OS86-49		64	OS90-50		91	OS92-19		118	OS89-23		145	OS88-12
	11	OS81-8		38	OS87-112		65	OS94-50		92	OS91-27		119	OS87-14		146	OS89-146
	12	OS83-18		39	OS88-88		66	OS91-54		93	OS92-16		120	OS87-18		147	NW89-15
	13	162		40	OS86-9		67	OS88-1		94	OS93-47		121	OS89-33		148	NW88-14
	14	158-5		41	OS89-8		68	OS87-29		95	OS90-15		122	OS93-28		149	NW86-25
	15	OS88-23		42	OS87-155		69	OS89-68		96	OS90-31		123	OS91-64		150	NW82-7
	16	OS86-32		43	OS83-1		70	OS95-19		97	OS87-100		124	OS90-1		151	MR94-5
	17	OS82-19	C	44	OS93-54		71	OS90-51	E	98	OS91-32		125	OS89-41		152	OS90-83
	18	OS83-20		45	OS86-6		72	OS89-102		99	OS87-37		126	OS89-149		153	MR84-6
	19	OS92-74		46	OS90-66		73	OS89-58		100	OS87-56		127	OS91-53		154	MR85-3
	20	OS94-49		47	OS87-26		74	OS93-20		101	OS86-35		128	OS85-36		155	OS94-20
B	21	OS87-93		48	OS89-76		75	OS87-66		102	OS92-12	F	129	OS88-73		156	OS93-7
	22	OS88-78		49	OS92-68		76	OS87-133		103	OS90-108		130	OS89-40		157	MR94-6
	23	OS90-58		50	OS90-47		77	OS91-70		104	OS87-69		131	OS93-2			
	24	OS94-33		51	OS86-38		78	OS87-39		105	OS89-86		132	OS93-6			
	25	OS89-80		52	OS87-81		79	OS91-16		106	OS92-6		133	OS90-27			
	26	OS89-92		53	OS85-28		80	OS87-147		107	OS89-7		134	OS91-73			
	27	OS86-2		54	OS87-78		81	OS93-25		108	OS92-22	H	135	OS92-57			

表2 G地区調査地一覧

番号	調査次数	番号	調査次数	番号	調査次数	番号	調査次数	番号	調査次数	番号	調査次数
A	NW85-44	J	NW93-4	S	NW85-32	b	NW82-58	k	NW90-2	t	OS89-89
B	NW84-40	K	NW93-12	T	NW80-8	c	NW89-20	l	NW87-7	u	NW80-9
C	167	L	NW85-39	U	NW87-21	d	NW93-5	m	NW81-35	v	NW82-10
D	NW80-4	M	NW90-7	V	NW92-12	e	NW93-19	n	NW86-12	w	161
E	NW84-41	N	164	W	NW82-39	f	NW86-2	o	NW89-17	x	NW84-6
F	NW84-46	O	NW80-19	X	NW86-11	g	NW90-20	p	NW92-9		
G	NW83-33	P	NW80-16	Y	NW88-21	h	NW87-47	q	NW82-21		
H	NW85-10	Q	NW88-2	Z	NW81-8	i	NW95-10	r	NW86-23		
I	NW86-24	R	NW90-29	a	NW81-17	j	NW80-15	s	NW94-20		

F地区は北が中央大通、南が空堀通商店街、東が谷町筋、西が東横堀川までの範囲で、6件の調査を対象とする(表6)。指定した地区の面積としては広いものの、調査数が少ない。加えて、当地区南西部が徳川期に瓦の土取り場になっており、それ以前の地層が削平されて残っていない。一方、北部には東から西に延びる開析谷があり、それが近世以降の整地層で埋められていることから、豊臣期以前の地層を検出するのが困難である。しかし、2002年7月のこの谷筋内での調査(OS02－8次)により、豊臣期の瓦窯が発見され、当地の土地利用を知るうえで重要な成果が挙げられた[小倉徹也ほか2003など]。調査数が少ないところであり、今後の調査の進展が期待される。

以上の調査地区は豊臣氏大坂城の惣構西側に当るとともに、古代の遺構も多く分布するところでもある。旧地形は西側に延びる開析谷がいくつもあり、古代以前はきわめて凹凸のある地形であったことがわかる。上町台地の高所に当るD・E区の東側では奈良時代の掘立柱建物があり、D区のOS90

表3　C地区調査地一覧表

番号	調査次数	面積	調査地番	調査の原因	担当者	調査期間	章-節
44	OS93－54	46㎡	中央区谷町１－22	㈱長古堂による建設工事	積山洋・黒田慶一	1994年３月17日～３月31日	2-1
45	OS86－６	100㎡	同　石町１	枡田氏によるビル建設工事	森毅	1986年５月１日～５月17日	2-1
46	OS90－66	170㎡	同　島町１－１－３	大都商事㈱による建設工事	宮本佐知子・上野裕子	1990年８月27日～９月29日	2-1
47	OS87－26	80㎡	同　島町２－27	トーメン不動産㈱による共同住宅建設工事	鈴木秀典	1987年５月11日～５月30日	2-2
48	OS89－76	104㎡	同　島町２－25	建団連地所㈱による建設工事	黒田慶一	1989年９月12日～９月27日	2-2
49	OS92－68	160㎡	同　石町２－23	ニシキ㈱による建設工事	松本啓子	1993年１月５日～１月29日	2-2
50	OS90－47	285㎡	同　島町２－21	㈱明清エンジニアリングによる事務所ビル建設工事	金村浩一	1990年７月２日～７月23日	2-2
51	OS86－38	８㎡	同　石町２－12	㈱安井建築設計事務所による社屋増築工事	宮本佐知子	1986年12月15日～12月18日	2-5
52	OS87－81	65㎡	同　島町２－５	(学)文際学園による大阪外語専門学校建設工事	宮本佐知子	1987年８月17日～９月２日	2-5
53	OS85－28	625㎡	同　石町２－29、２－30－１	日本商事㈱による社屋新築工事	鈴木秀典・森毅・富山直人	1985年11月25日～86年２月28日	2-4
54	OS87－78	478㎡	同　石町２－35－１	㈱大和銀行による労働行政システム中央館（仮称）新築工事	田中清美	1987年８月24日～11月４日	2-4
55	OS90－20	234㎡	同　北浜東２－１	橋本和夫氏による建設工事	松尾信裕	1990年４月23日～５月31日	2-3
56	OS91－82	35㎡	同　北浜東２－18	安藤パラケミー㈱による建設工事	宮本佐知子	1991年12月19日～92年１月22日	2-3
57	OS88－113	320㎡	同　京橋３－７－１（北浜東）	千歳竹三氏による建設工事	松尾信裕	1989年２月27日～３月31日	2-3
58	OS86－22	347㎡	同　京橋３－42・43・44・45(北浜東)	大成建設㈱による大東京火災海上保険大阪支店新築工事	鈴木秀典	1986年８月18日～10月23日 1986年11月17日～12月18日	2-6
59	OS87－40	720㎡	同　京橋３－43(北浜東)	㈱大林組による建設工事	鈴木秀典	1987年６月６日～９月21日	2-6
60	OS92－１	215㎡	同　北浜東42－１他	大東京火災海上㈱・㈱大林組による建設工事	南秀雄	1992年４月３日～５月25日	2-6
61	OS89－148	220㎡	同　東高麗橋15－１・４	㈱大林組による建設工事	黒田慶一	1990年３月22日～５月７日	2-7
62	OS88－56	135㎡	同　高麗橋詰町20（東高麗橋）	光成薬品㈱による建設工事	伊藤純	1988年９月12日～10月15日	2-7

(註)番号がゴシック体になっているものは国庫補助金との按分である。表４～６もこれに同じ。

－50次調査地で検出されたものは平安時代前半まで継続する。

一方、低所である台地西側では古代以降の遺物が多量に出土する。特に中世の中国製白磁・青磁が目立ち、奈良時代の難波宮が廃絶して以後も、大川沿いには流通拠点としての役割が継続して保たれていたようで、中世の「窪津」や「渡辺津」との関連が考えられる。

豊臣期になると、特に低所である台地西側で惣構造成時と三ノ丸造成時の厚い整地層が検出されるようになる。これらの整地層によって、豊臣氏大坂城の拡張過程を知ることができる。また、溝や建物が豊臣後期において今の街区と同じ方向で検出されるところが多くあり、現在の街区の原型を考える手がかりとなる。

（松尾信裕・寺井誠）

表4　D地区調査地一覧表

番号	調査次数	面積	調査地番	調査の原因	担当者	調査期間	章-節
63	OS88－31	75㎡	中央区釣鐘町１－２	鳥居正太郎氏による事務所ビル建設工事	京嶋覚	1988年７月４日～７月16日	3-1
64	OS90－50	1,500㎡	同　島町１－21	大阪市教委による(仮称)第29高等学校建設工事	伊藤純	1990年７月17日～11月11日	3-1
65	OS94－50	55㎡	同　釣鐘町1－32～34	ベストライフ通商㈱による建設工事	積山洋	1995年２月17日～２月21日	3-1
66	OS91－54	115㎡	同　島町１－16・17	㈱大乃やによるビル建設工事	松本啓子	1991年９月24日～10月11日	3-1
67	OS88－１	90㎡	同　釣鐘町１－23	㈱コンフォート有楽によるホテル建設工事	京嶋覚	1988年４月５日～４月16日	3-1
68	OS87－29	136㎡	同　島町１－７・８	北川氏による事務所ビル建設工事	櫻井久之	1987年５月18日～６月２日	3-1
69	OS89－68	47㎡	同　船越町１－２－７	角田豊太郎氏による建設工事	植木久・宮本佐知子	1989年８月17日～８月24日	3-2
70	OS95－19	120㎡	同　内平野町１－９－２	㈱ビルドによる建設工事	黒田慶一	1995年６月22日～６月29日	3-2
71	OS90－51	462㎡	同　船越町１－６	㈱レナ天満橋による建設工事	松尾信裕	1990年７月11日～９月16日	3-3
72	OS89－102	52㎡	同　内平野町１－20	豊嶋建設㈱による建設工事	藤田幸夫	1989年11月15日～11月28日	3-3
73	OS89－58	62㎡	同　内平野町１－３－12	萬所三郎氏による建設工事	松尾信裕	1989年７月25日～８月10日	3-2
74	OS93－20	240㎡	同　内淡路１－４－２	室谷㈱による建設工事	平田洋司	1993年７月19日～８月13日	3-2
75	OS87－66	28㎡	同　内淡路町１－29	㈱竹中駒二郎商店による竹中ビル新築工事	京嶋覚	1987年７月20日～７月25日	3-2
76	OS87－133	400㎡	同　谷町２－６	関産業㈱によるビル新築工事	森毅・高井健司	1988年１月20日～12月27日	3-4
77	OS91－70	45㎡	同　大手通１－３	㈱ラグラックス信和による建設工事	松本啓子	1991年11月８日～11月19日	3-4
78	OS87－39	194㎡	同　船越町２	宮崎氏による(仮称)宮崎船越マンション建設工事	松尾信裕	1987年６月８日～７月８日	3-3
79	OS91－16	223㎡	同　内淡路町２－58－１	坂東敏男氏によるビル建設工事	松本啓子	1991年６月４日～７月４日	3-5
80	OS87－147	112㎡	同　内淡路町２－２・４、３－１・２	不二建設㈱による事務所ビル建設工事	高井健司	1988年２月24日～３月12日	3-5
81	OS93－25	16㎡	同　釣鐘町２－41－３・４	河野富佐子氏による建設工事	黒田慶一	1993年８月17日～８月24日	3-6
82	OS87－23	166㎡	同　釣鐘町２－41	松栄不動産㈱による西松ビル新築工事	宮本佐知子	1987年４月28日～５月12日	3-6
83	OS87－33	42㎡	同　釣鐘町２－14	福島氏による共同住宅建替工事	宮本佐知子	1987年５月25日～５月30日	3-6
84	OS90－142	150㎡	同　内淡路町２－４－10	㈱三和産業建設による建設工事	清水和明	1991年３月４日～５月８日	3-8
85	OS90－64	215㎡	同　内淡路町２－16	恵口薬品㈱による建設工事	金村浩一	1990年９月３日～10月12日	3-8
86	OS91－６	60㎡	同　大手通２－39	㈱東洋産産商による建設工事	清水和	1991年４月26日～５月15日	3-8
87	OS91－78	160㎡	同　船越町２－46・47	大日医科産業㈱による建設工事	松本啓子	1991年12月10日～12月26日	3-7
88	OS86－17	53㎡	同　船越町２－41	石黒建設㈱によるニュー東ビル建設工事	川村紀子	1986年７月18日～８月２日	3-7
89	OS89－154	84㎡	同　石町２丁目～常盤町２丁目	関西電力㈱による地中線工事	長山雅一	1989年12月18日～90年３月31日	3-6
90	OS91－25	25㎡	同　高麗橋２－３－８	大阪興業㈱による建設工事	清水和	1991年７月１日～７月13日	3-7
91	OS92－19	588㎡	同　内平野町３－21－１	㈱カプコンによる建設工事	松本啓子	1992年７月13日～10月17日	3-7
92	OS91－27	23㎡	同　内平野町３－22	㈱山薬による建設工事	鈴木秀典	1991年７月５日～７月11日	3-7
93	OS92－16	110㎡	同　内平野町３－28	山本硝子建材㈱による建設工事	清水和	1992年６月９日～７月18日	3-9
94	OS93－47	1,070㎡	同　内平野３、内淡路３	㈱カプコンによる建設工事	豆谷浩之・黒田慶一	1994年２月７日～７月７日	3-9
95	OS90－15	350㎡	同　内淡路町３－１－２	南海自動車工業㈱による建設工事	伊藤純	1990年４月17日～５月17日	3-9
96	OS90－31	255㎡	同　東高麗橋52、53、53－２	アーバンライフ㈱による建設工事	宮本佐知子	1990年５月22日～７月21日	3-10
97	OS87－100	640㎡	同　豊後町１（内平野町３－２）	大阪薬業健康保険組合による大阪薬業保険センター新築工事	鈴木秀典・今津啓子	1987年10月26日～88年１月６日	3-10

表5　E地区調査地一覧表

番号	調査次数	面積	調査地番	調査の原因	担当者	調査期間	章-節
98	OS91－32	700㎡	中央区大手通１－６他	㈱大和銀行による事務所ビル建設工事	植木久・伊藤純・大成町乃	1991年７月15日～10月19日	4-1
99	OS87－37	38㎡	同　北新町１－１	千倉千代子氏による(仮称)千倉ビル建設工事	宮本佐知子	1987年６月３日～６月５日	4-2
100	OS87－56	137㎡	同　谷町２－16	井上清㈱による事務所ビル建設工事	宮本佐知子	1987年７月６日～７月31日	4-2
101	OS86－35	50㎡	同　北新町１－40	多田彰造氏による多田ビル建設工事	宮本佐知子	1986年12月２日～12月10日	4-2
102	OS92－12	380㎡	同　南新町１－２	東洋シャッター㈱による建設工事	黒田慶一	1992年６月１日～７月31日	4-2
103	OS90－108	115㎡	同　北新町１－10・11	㈱ユニックスによる建設工事	黒田慶一	1990年11月28日～12月13日	4-2
104	OS87－69	68㎡	同　北新町１－32	地戸與次郎氏によるビル建設工事	櫻井久之	1987年７月21日～８月３日	4-2
105	OS89－86	130㎡	同　南新町１－10－１・３	坪内凍氷燃料㈱による建設工事	伊藤純	1989年10月５日～10月23日	4-2
106	OS92－６	114㎡	同　南新町１－32－35	椿本㈱によるビル建設	黒田慶一	1992年４月27日～５月16日	4-2
107	OS89－７	18㎡	同　徳井町１－39－１	内外通商㈱による建設工事	鈴木秀典	1989年４月11日～４月14日	4-2
108	OS92－22	195㎡	同　内本町１－２－９	㈱ヤマガタによる建設工事	南秀雄	1992年７月13日～９月１日	4-3
109	OS87－152	30㎡	同　内本町１－40	風間繁春氏による事務所ビル建設工事	宮本佐知子	1988年３月14日～３月23日	4-3
110	OS89－６	70㎡	同　内本町１－12	成起産業㈱による事務所ビル建設工事	南秀雄	1989年４月７日～４月19日	4-4
111	OS91－４	60㎡	同　内本町１－13－１・２	モリタ建設㈱による建設工事	清水和	1991年４月12日～４月23日	4-4
112	OS91－34	200㎡	同　内本町１－18	㈱近畿建築設計事務所・双葉実業㈱によるビジネスホテル建設工事	積山洋	1991年７月25日～８月３日	4-4
113	OS90－112	460㎡	同　内本町１－27	㈱長谷工コーポレーションによる山森・住友生命ビル建設工事	松尾信裕・清水和	1990年11月30日～91年２月７日	4-4
114	OS90－130	170㎡	同　大手通２－２	和泉豊氏による建設工事	佐藤隆	1991年２月４日～２月27日	4-1
115	OS91－93	238㎡	同　大手通２－７・８	㈱トーンアップによる建設工事	松本啓子	1992年１月31日～２月29日	4-5
116	OS92－60	177㎡	同　徳井町２－１－10	安藤芳子氏による建設工事	南秀雄	1992年12月３日～93年１月13日	4-3
117	OS89－19	526㎡	同　内本町２－21－24	清水建設㈱による(仮称)内本町住友生命・大西ビル建設工事	鈴木秀典	1989年５月10日～８月31日	4-3
118	OS89－23	87㎡	同　檜屋町２－７	井上ヨシエ氏による建設工事	黒田慶一	1989年５月16日～５月26日	4-7
119	OS87－14	36㎡	同　常盤町２－７	松下興産㈱による事務所ビル建設工事	鈴木秀典	1987年４月17日～４月22日	4-7
120	OS87－18	150㎡	同　常盤町２－47・48	村垣氏による店舗付共同住宅建設工事	松尾信裕	1987年４月22日～５月19日	4-7
121	OS89－33	180㎡	同　常盤町２－10	三信㈱による建設工事	伊藤純	1989年６月７日～６月17日	4-7
122	OS93－28	385㎡	同　常盤町１	㈱藤木工務店による建設工事	豆谷浩之	1993年９月１日～10月19日	4-7
123	OS91－64	435㎡	同　大手通16－１・２	(学)文際学園による建設工事	松尾信裕	1991年11月５日～12月27日	4-5
124	OS90－１	130㎡	同　南新町２－36	㈱朝日住建による建設工事	伊藤純	1990年４月２日～４月６日	4-6
125	OS89－41	310㎡	同　徳井町２－31	住友信託銀行㈱・宇野又兵衛氏による建設工事	伊藤純	1989年６月26日～８月11日	4-6
126	OS89－149	16㎡	同　徳井町２－34	興紀実業㈱による建設工事	金村浩一	1990年３月23日～３月26日	4-6
127	OS91－53	20㎡	同　徳井町２－４－14他	尾崎一成氏によるビル建設工事	松尾信裕	1991年９月24日～９月30日	4-6
128	OS85－36	170㎡	同　豊後町32－１(本町橋)	大阪府信用金庫による健保会館建設工事	藤田幸夫	1986年２月10日～３月11日	4-6

表6　F地区調査地一覧表

番号	調査次数	面積	調査地番	調査の原因	担当者	調査期間	章-節
129	OS88－73	73㎡	中央区和泉町２－23	川端博氏による建設工事	藤田幸夫	1988年10月25日～11月５日	4-8
130	OS89－40	210㎡	同　和泉町１	国際航業㈱による建設工事	京嶋覚	1989年６月26日～７月15日	4-8
131	OS93－２	100㎡	同　内久宝寺３－１－８	ヒガシ運送サービス㈱による建設工事	清水和	1993年４月２日～５月８日	4-8
132	OS93－６	146㎡	同　粉川町２－12	松崎一郎氏による建設工事	大阪市教育委員会	1993年４月13日～５月１日	4-8
133	OS90－27	88㎡	同　粉川町25－１	スリーピー興発㈱による建設工事	金村浩一	1990年５月14日～５月30日	4-8
134	OS91－73	180㎡	同　粉川町18、19－４・５	三陽㈱による建設工事	伊藤純	1991年11月20日～12月16日	4-8

第Ⅱ章　C地区の調査

第1節　OS86－6次およびその周辺の調査

1)調査地と周辺の概要

本節では谷町筋に面した街区内の3調査(OS86－6・90－66・93－54)を報告する(図3)。地形的には上町台地の最北端であり、この付近から北に向って急激に標高が下がる。また、豊臣氏大坂城期には、谷町筋が三ノ丸と惣構の境界であったと推定されていることから[平田洋司1999]、調査地のある街区は惣構に属することになる。

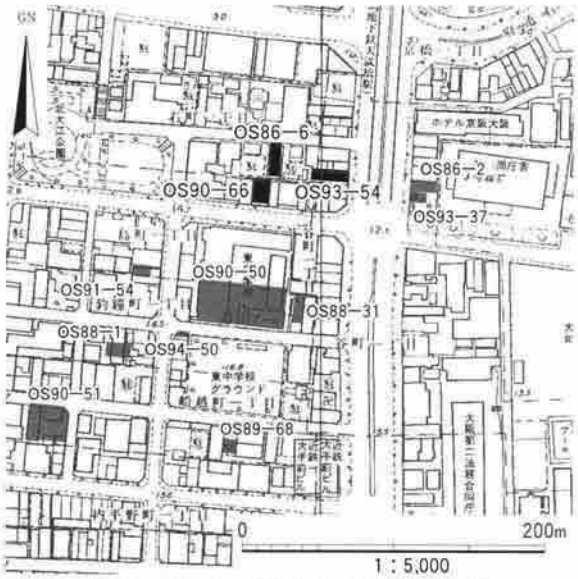


図3　OS86－6次などの調査地位置図

OS86－6次調査では、南で地山が高く検出されたのに対し、北では深さが3mあまりの堀を検出した。また、その堀に切られる15世紀を下限とする段状遺構や古墳時代から古代にかけての遺物を多量に含む落込みを検出した。

南側のOS90－66次調査地では、大坂夏ノ陣の焼土層が検出され、その下で豊臣後期の柵や土壙を検出した。

OS93－54次調査では、豊臣前期の整地層を確認し、掘立柱建物や土壙などの遺構を確認した。また、南東部が低くなる落込みを確認し、そこから12世紀を下限とする遺物が出土した。

2)調査の結果

i)層序

各調査地では図4のような地層を検出した。以下で概要を記す。

第1層：徳川期の地層で、OS86－6次調査地では炭や焼土を多く含んでいた。

第2a層：青花や瀬戸美濃焼、唐津焼の破片を含む豊臣後期の整地層と考えられる。OS90－66次調査地ではこの地層の上面で大坂夏ノ陣の被災面と思われる焼けた面を検出した。

第2b層：OS93－54次調査地の中央部～西部にかけて分布する豊臣前期の整地層で、層厚は10～15cmである。

第2c層：OS93－54次調査地西部に分布する水成層で、層厚は10～25cmある。

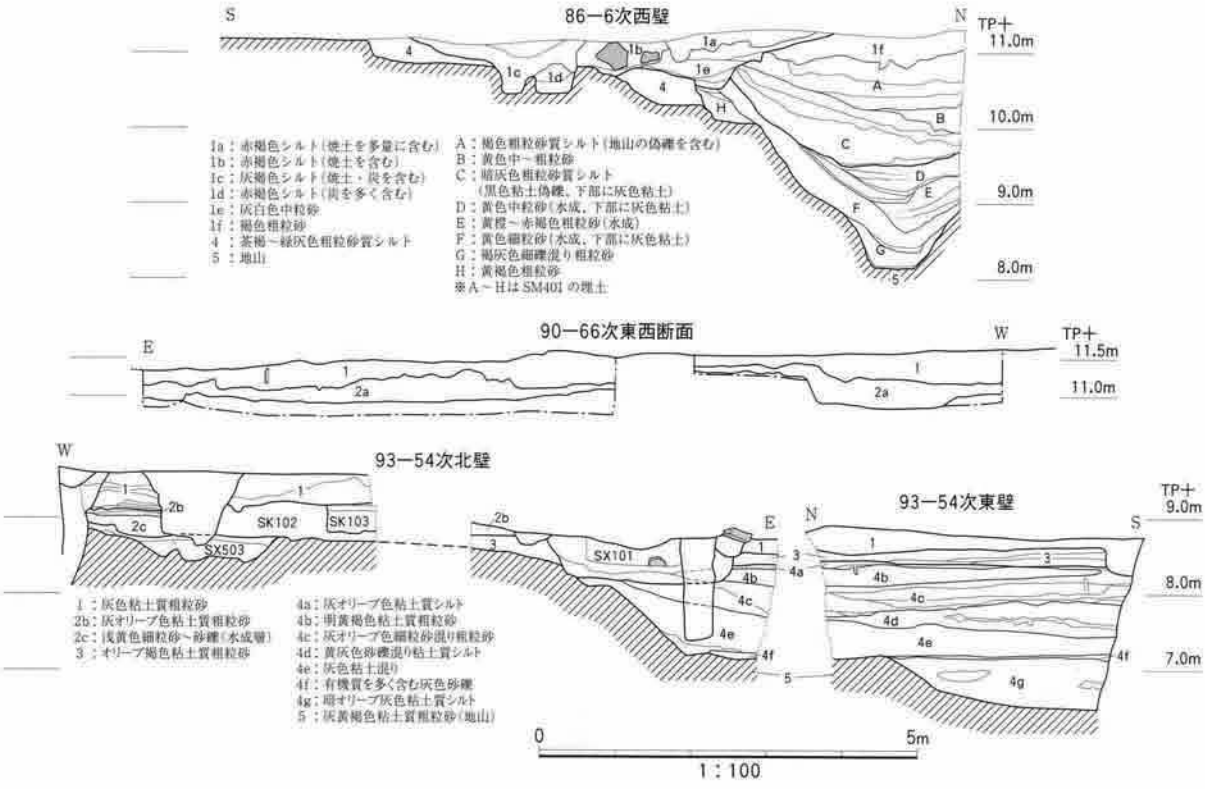


図４　各調査地断面図

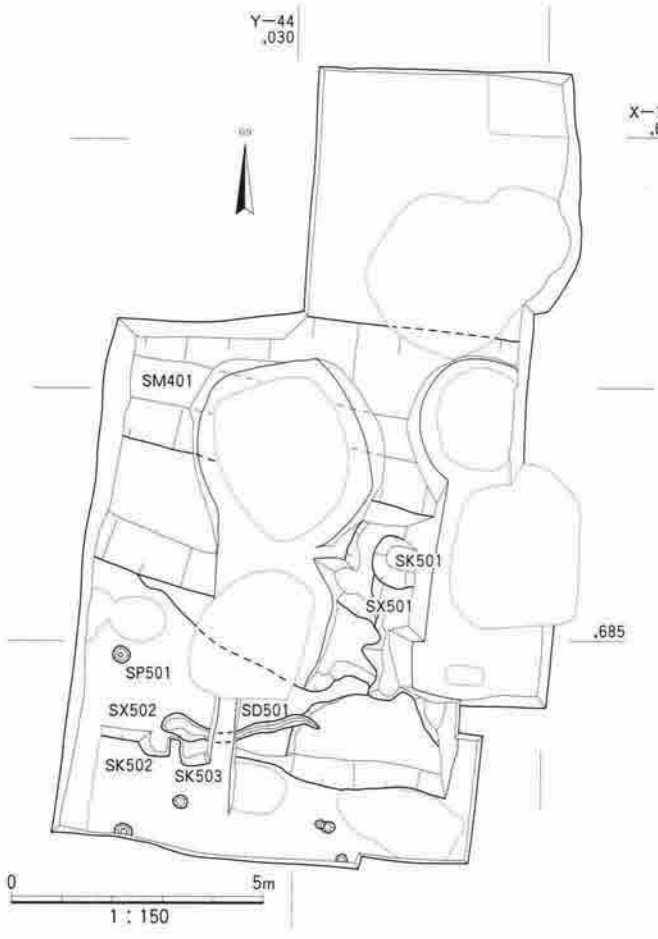


図５　OS86－６次遺構配置図

第３層：OS93－54次調査地の東半分に分布し、層厚は15～30cmある。時期を決定するような遺物は出土しなかった。

第４層：OS93－54次調査地の東側の落込み内に分布する地層である。第4c層からは大坂本願寺期の遺物が出土した。また、第4g層からは12世紀頃の瓦器が出土した。

第５層：地山層である。

ii）遺構と遺物

ａ．古代の遺構と遺物

OS86－６次調査

落込み**SX501**、段状遺構**SX502**を検出した（図５、図版１上）。

SX501　東部に向っての落込みである。上部を**SM401**によって失われるが、検出面からの深さは２ｍ以上あり、完掘することはできなかった。井戸のような

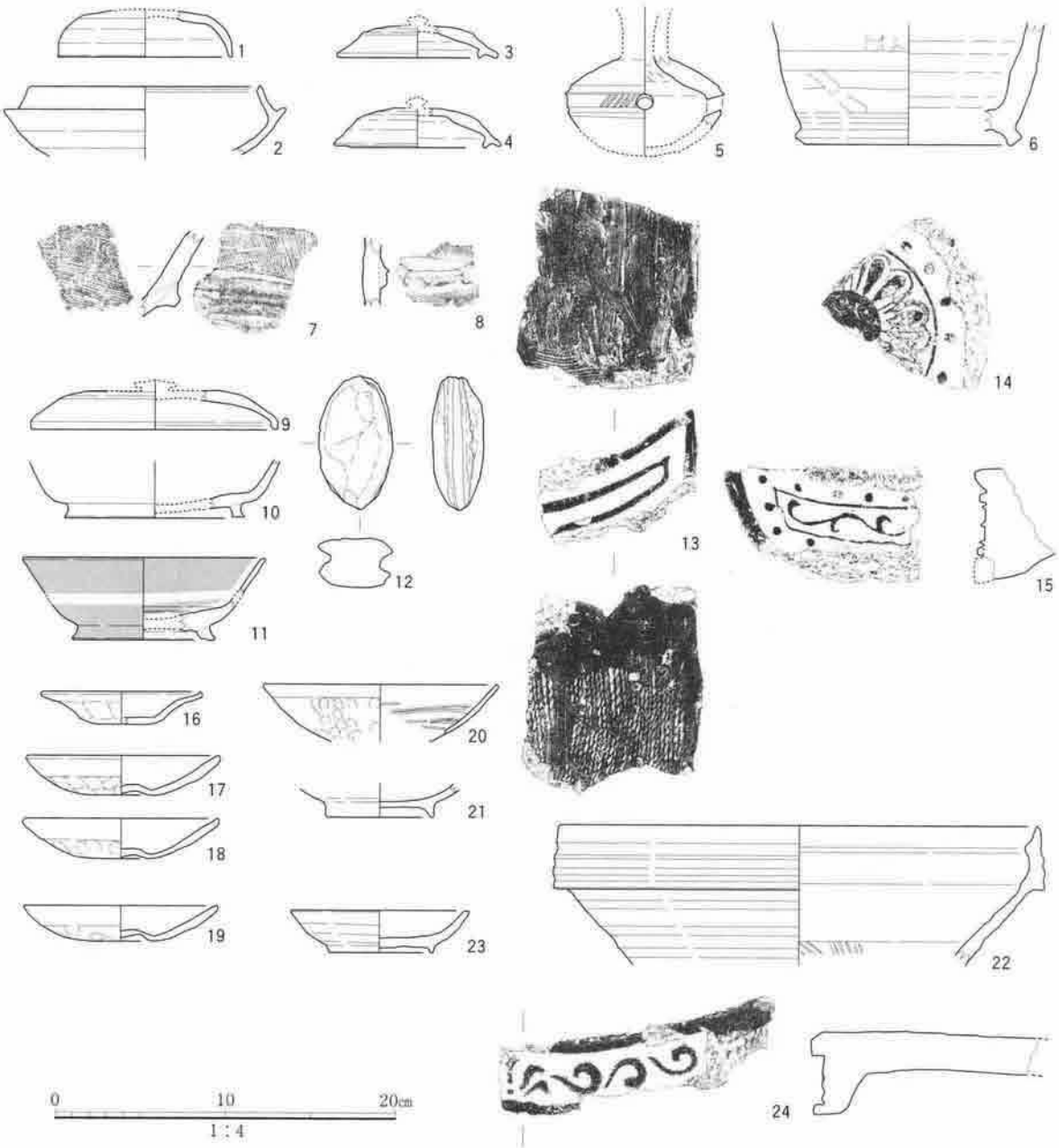


図６　OS86－６次出土遺物
SX501（１～６）、SM401（７～24）

遺構の一部である可能性がある。SX501の中のSK501は一連の遺構の可能性がある。

出土遺物には須恵器杯H蓋1、同身2、杯G蓋3・4、甕5、壺L6がある（図６）。この中で2がもっとも古く６世紀前半頃、6が新しく奈良時代中頃以降のものである。

なお、SM401から朝顔形埴輪7、円筒埴輪8、須恵器杯B蓋9、同身10、緑釉陶器11、有溝土錘12、瓦13～15が出土しているが（図６）、これらも古代の遺物であることから、SX501から遊離した可能性が高いと思われる。7・8はいずれも窖窯焼成である。11は濃緑色の釉が高台端部とその内側以外の全面に施され、近江産と推定される。13は凸面に縄目が残る重圏文軒平瓦で、後期難波宮と同笵の6572型式である［宮本佐知子1999］。14は複弁八葉蓮華文軒丸瓦、15は珠文が巡る均整唐草文軒平瓦で、

これらは平安時代前期のものと思われる。

SX502　段状に地山を削込んだ遺構で、その段差は約0.3mある。北側をSM401に切られる。また、この段に切られるSP501、SD501、SK502・503の埋土は黒色粘土で、黒色土器を含まず、土師器・須恵器の細片が出土することから奈良時代以前と推定される。

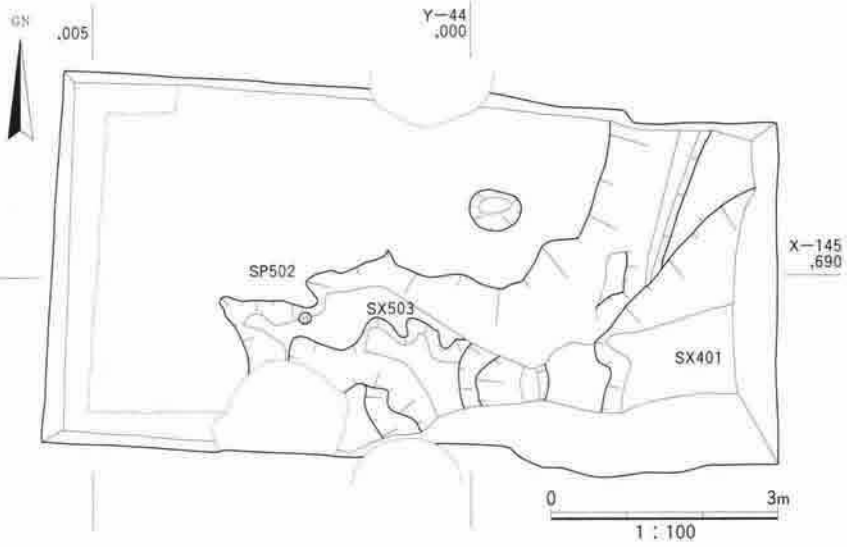


図7　OS93−54次調査地山上面遺構配置図

OS93−54次調査

古代の遺物が出土する落込みSX503を検出した(図7)。この落込み内にあるピットSP502より須恵器杯G41が出土した。東側の谷町筋の方向に向う落込みSX401からは12世紀頃の遺物が出土していることから、それよりも古いことになる。

また、当調査地では、中近世の地層から古墳時代から古代にかけての遺物が多量に出土しており、その量は中近世のものを上回っている。以下ではそれらの遺物を一括して報告する(図8)。

古墳時代の遺物は埴輪25、須恵器杯H身38がある。25は内湾気味に上に伸びることから、朝顔形埴輪の可能性がある。38は復元口径が11.9cmあり、口縁端部が丸い。TK10型式である。

飛鳥時代の遺物には土師器Ⅲ A32、須恵器杯H蓋37、同身39、杯G蓋40、同身41、杯B蓋42・43がある。37・39が難波Ⅲ古段階、32・40・41が同中段階、42・43が難波Ⅳ古段階に該当する。41は底部の外縁に回転ヘラケズリを施すが、底部中央は不調整である。

奈良時代の遺物には土師器杯A26～28、須恵器杯B蓋44、製塩土器47がある。土師器甕34～36もこの時期のものと思われるが、飛鳥時代の可能性も残される。47は内外面にユビオサエが施されていることから、紀伊産と推定される[積山洋1993]。

平安時代の遺物としては、土師器杯A29・31、椀30、鉢33、緑釉陶器45、黒色土器椀46がある。29・30には暗文がなく、平安時代初頭頃のものである。46は高台の形態から10～11世紀頃のものと思われる。33は9世紀頃のものであろうか。

b．中世～大坂本願寺期の遺物

OS86−6次調査

堀状遺構SM401を検出した(図5、図版1中)。

SM401　幅約7m、深さ約3mあり、断面は「V」字形で北側の傾斜に比べて南側上部はやや緩やかである。埋土は底から1.5mまでは水成層で、上部は埋戻し土である。

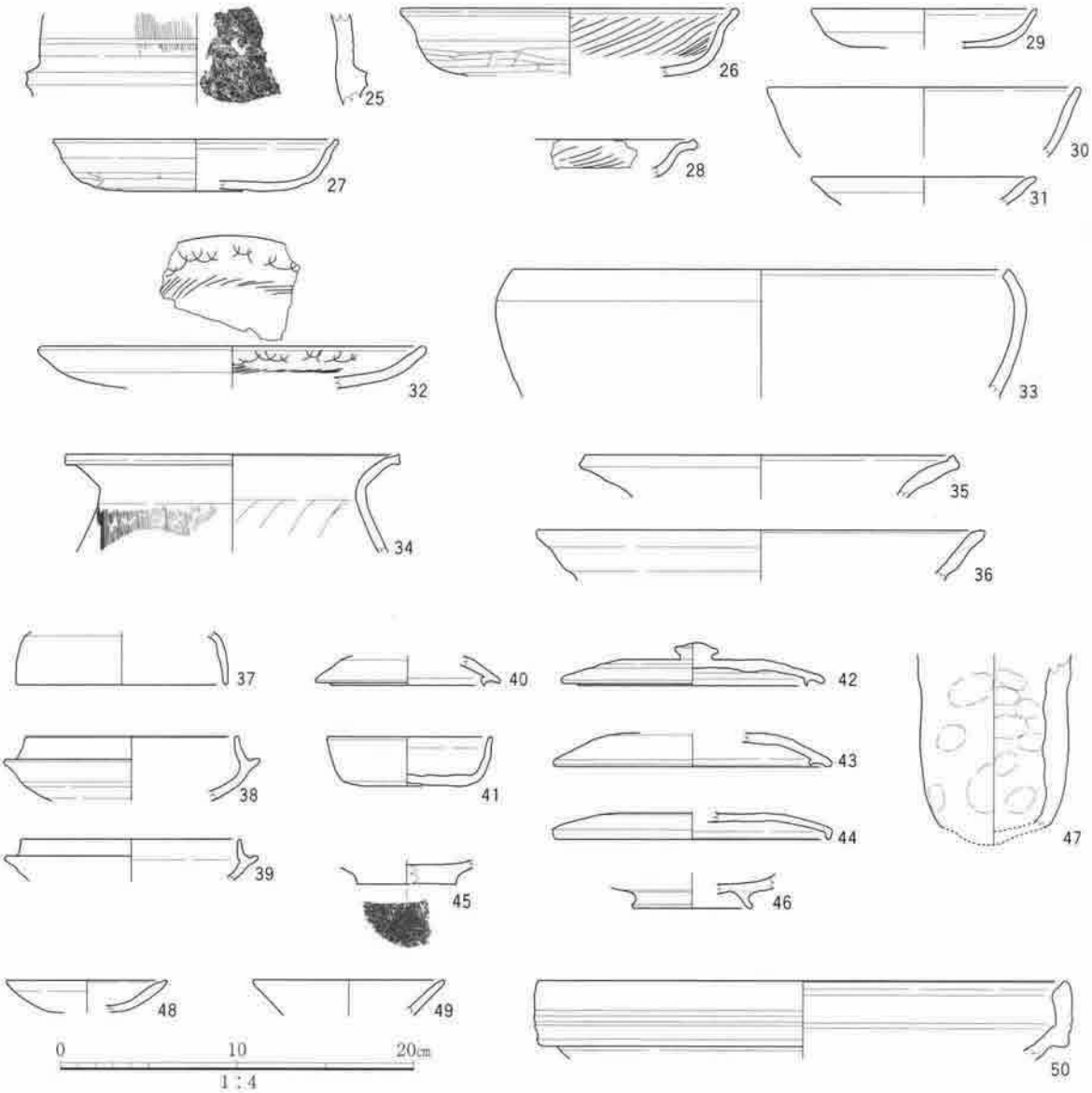


図８　OS93－54次出土遺物（１）

第１層（25・27・33）、第３層（46）、第4c層（43）、第4e層（29・34・36・38～40・42・45）、SP502（30）、SX503（41）、SE201（26・32・44・47）、SX401（27・28・31・35・37）

出土遺物には 前述の7～15に加え、16世紀中頃に比定される土師器皿16～19、瓦器20・21、備前焼擂鉢22、瀬戸美濃焼皿23、軒平瓦24が出土した（図６）。

16～19はSM401の肩部から一括して出土した。16は口径9.6㎝の小型品で、口縁部が外反して伸びる。17～19は口径11.6㎝の中型品である。ほかにも中型のものが出土したが、いずれも口径はほぼ同じであった。22は口縁部が薄く、擂り目は胴部の下半に残る。15世紀中頃のものである。23は下部の水成層から出土した。淡黄緑色の釉が施されており、底部には輪トチの痕跡がある。24は均整唐草文軒平瓦で、脇幅が広く、外縁がしっかりしていることから豊臣前期の様相が見られる。上部の埋戻し土から出土した。

以上の遺物とその出土状況から、SM401は掘削が大坂本願寺期で、豊臣前期になって埋められたと判断される。

OS93－54次調査

12世紀頃の遺物を出す落込みSX401を検出した(図７)。深さは１mあまりで、平面図で判断するかぎり、L字状に曲るようである。本来堀か溝のような遺構で、上部を削平された結果のものである可能性も残されるが、詳細は不明である。

SX401内の第4c層からは48～50が出土している。48・49は土師器の皿、50は備前焼擂鉢である。50の口縁部の内面は同調査地の第2c・2b層から出土している53・62よりやや古い形態かと思われ、本層が大坂本願寺期までさかのぼる可能性を示唆している。

ｃ．豊臣期の遺構と遺物

OS93－54次調査

第2b層基底面では、掘立柱建物・柱穴・埋桶遺構・土壙を検出した(図９)。

SB201　東西6.6m、南北3.0mあり、建物の方向はN8°Eに直交する方向である。柱間は桁側で1.2～1.4mと距離にばらつきがみられる。

SK201・202　SK201は長径0.9m、短径0.6mの南北に長い楕円形の掘形の南に、直径0.4mの桶を据えた遺構で、桶の底は高低差0.2mで南から北に傾斜していた(図版１下)。SK202は掘形が直径0.5mの円形を呈する土壙の東端に、直径0.4mの桶を据えたもので、桶の底は高低差0.03mほどで北から南に傾斜していた。これらはSB201に伴う可能性があるが、後述するように第１層基底面で検出されたSK101の底で検出されていることから、第３層基底面ではなく、本来第１層基底面の検出遺構であった可能性を残す。

SK203　調査地の北西部に位置する東西長1.7mを測る不定形の土壙で、褐灰色粗粒砂含粘質シルトを埋土とし、底面にも凹凸を見せる。

第2c層からは土師器皿51・52、備前焼擂鉢53、瀬戸美濃焼天目碗54、青花碗55、同皿56、白磁皿57が出土した。57は内面を蛇ノ目釉剥ぎしており、55とともに粗製品である。

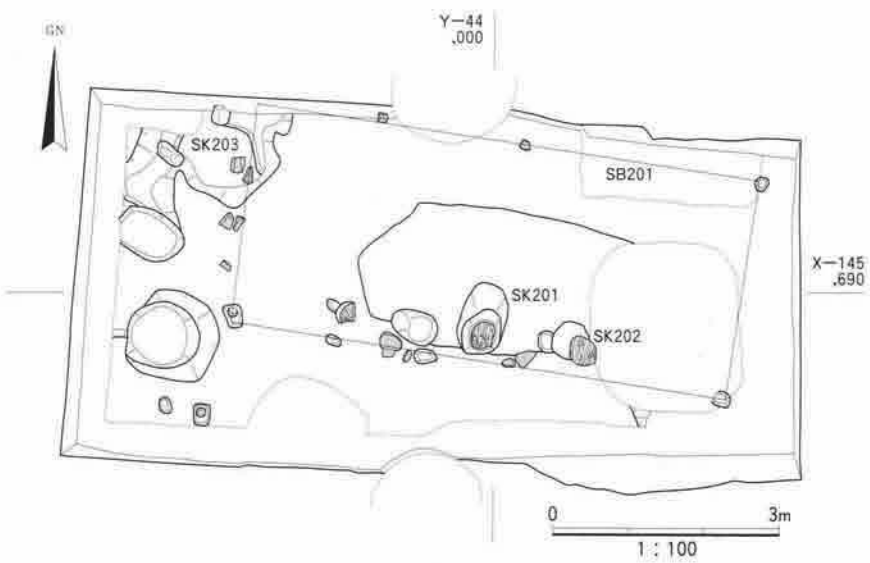


図９　OS93－54次豊臣期遺構配置図

同調査地の第2b層からは土師器皿58～61、備前焼擂鉢62、瀬戸美濃焼皿63～70、同碗71、白磁72、青磁73が出土した(図10)。58～61はいずれも回転台使用の痕跡は見られない。63・64は鉄釉を施したヒダ皿、65は折縁ソギ皿、66は折縁皿、67～70は丸皿である。73は外面に蓮弁文が施される。

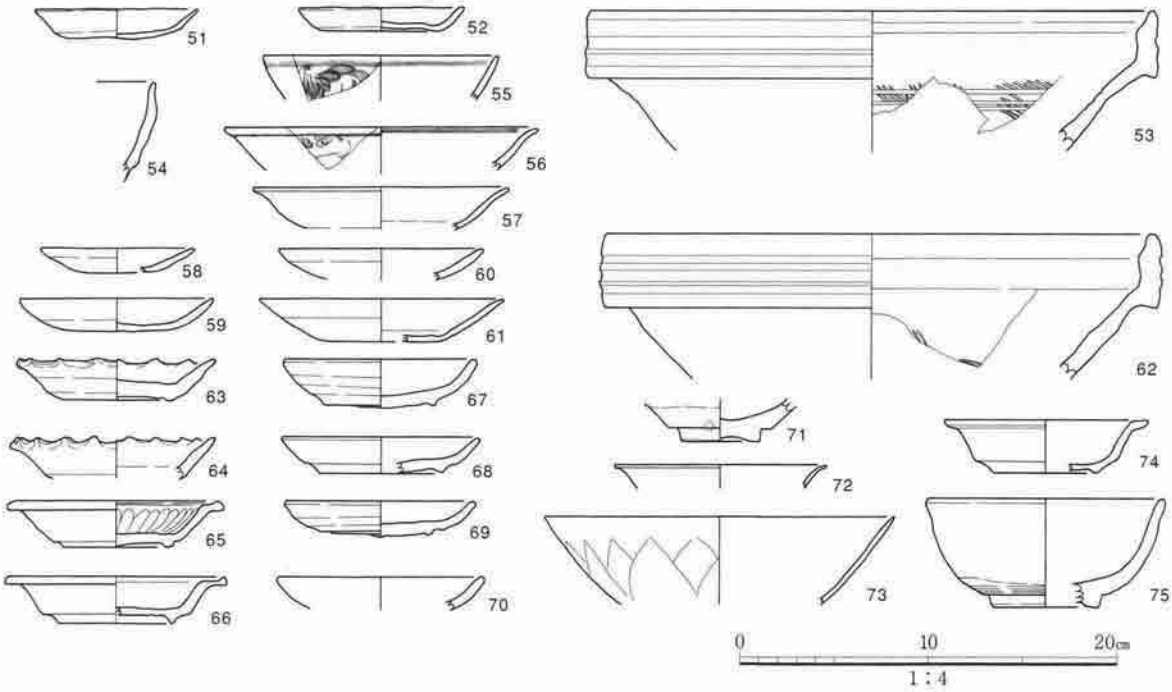


図10　OS93－54次出土遺物（2）

第2c層(51～57)、第2b層(58～73)、SE201(74・75)

以上、第2c・2b層の遺物の時期は、陶磁器に唐津焼をまったく含まないことから、豊臣前期に位置づけられる。

また、同調査地の第1層基底面では徳川期の遺構とともに豊臣前期の遺物を含む井戸SE201を検出した(図12)。井戸の掘形は一辺1.9～2.3mの隅丸方形を呈する。瀬戸美濃焼折縁皿74、同丸碗75、金箔軒丸瓦が出土した。74は器壁が薄くやや深手である。75は口縁部がわずかに端反り気味である。金箔瓦は第Ⅴ章第2節に収録した。

OS90－66次調査

第2a層上面では南北方向の柵SA201・202のほか土壙・溝を検出した(図11)。土壙SK204からは瓦が多く出土した。これらの遺構には唐津焼が含まれ、豊臣後期に位置づけ

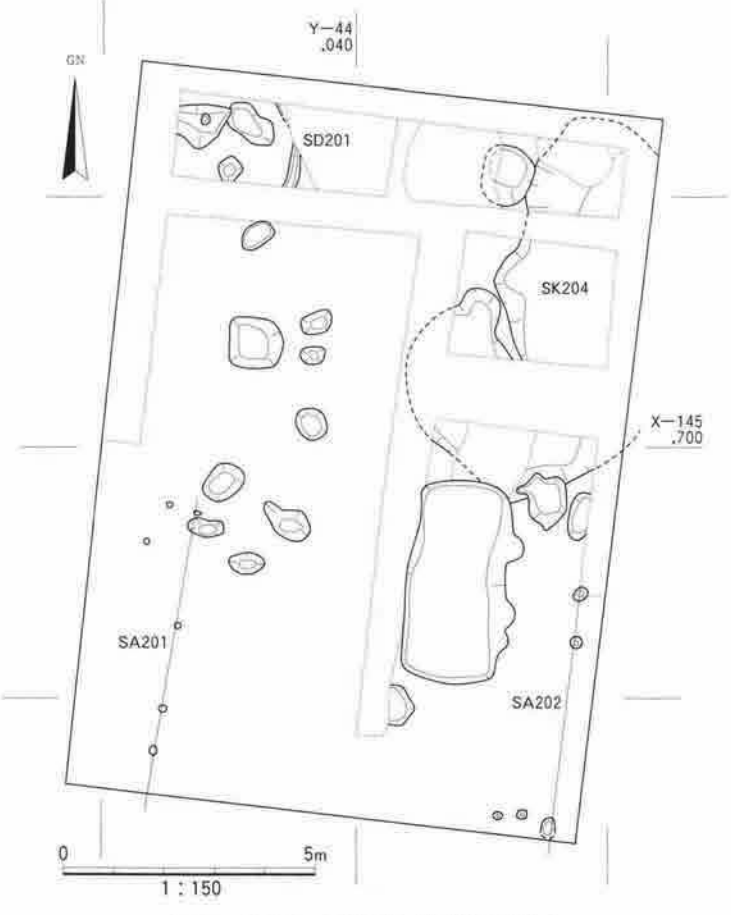


図11　OS90－66次豊臣期遺構配置図

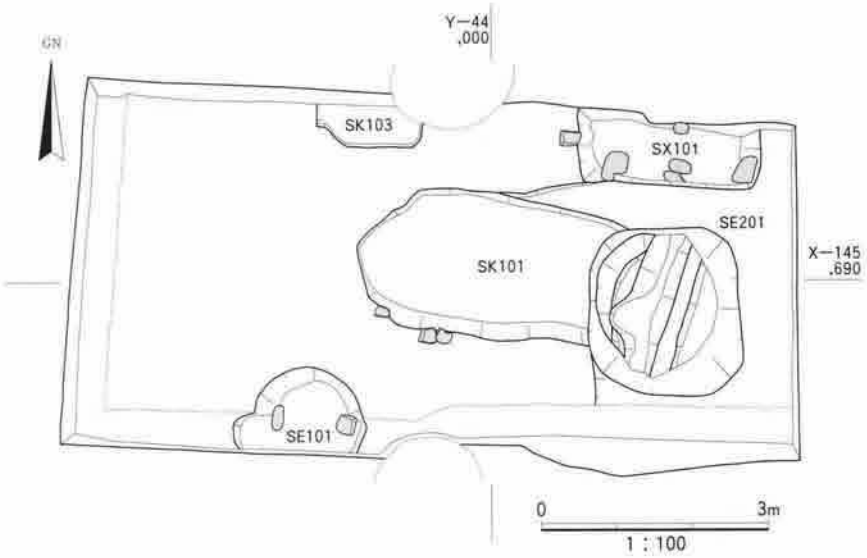


図12　OS93－54次徳川期遺構配置図

られよう。

d．徳川期の遺構

OS93－54次の第１層基底面で徳川期の穴蔵や井戸、豊臣前期の井戸、土壙を検出した(図12)。

SX101　調査地北東部に位置する、東西長2.3mの江戸時代の穴蔵で、造替えが１度あった。当初は土壙の南壁際に、１辺0.2m前後の礎石を心々間0.9mで東西に３個並べていたのが、造替え時に底に厚さ0.2m、褐色粘土含粗粒砂とオリーブ褐色粘土混り粗粒砂を敷いた後、心々間0.85mで礎石を３個据えている。この礎石は隅柱の２個が１辺0.3m前後と大きく、妻柱のものは１辺0.2m前後と小さい。礎石の間には地長押か根太と思われる幅４cmの角材が遺存していた。底に施したのと同じオリーブ褐色粘土混粗粒砂は東壁・西壁際にも分布することから、この土は板壁の裏込めで、造替え後の穴蔵は東西長1.7mと狭くなったと考えられる。

SE101　調査地中央南部の江戸時代の井戸で、直径1.7mを測る。

SK101　長さ3.5m以上、幅約2.0mの楕円形で、深さ0.2mのやや浅い舟底状の土壙で、有機物を多く含む灰オリーブ色粘質シルトを埋土とする。遺物として木片や木製品が出土した。土壙の南の際からは埋桶遺構SK201・202の掘形が検出され、木製品などはこの埋桶遺構の遺物の可能性を残すことから、SK101とこれらの遺構は同時代であるかもしれない。

SK103　東西長1.4m、南北長0.6m以上、深さ0.4mの方形の土壙で、褐灰色粗粒砂混シルトを埋土とする。北壁断面にしか現れないSK102の埋土を切るかたちで存在する(図４)。埋没後、東西長0.9m、南北長1.0m以上、深さ0.1mの明黄褐色粘土を埋土とする、浅い方形の土壙に切られている。

３)まとめ

ｉ)古代

古代では、飛鳥時代の遺物を含む落込みを検出した。また、遊離資料であるものの、飛鳥～奈良時代の遺物が多く出土したことから、近隣に古代の遺構が存在することを予測させる。なお、南約80mの地点で、当調査地より標高が約８m高くなるOS90－50次調査地(第Ⅲ章第１節)では奈良時代を中心とする掘立柱建物群や「厨」の墨書土器が出土した井戸などが集中して検出されており、今回の遺物はこれらの遺構群と無関係ではないと考えられる。

ii)大坂本願寺期

OS86－6次調査では深さが3mある断面V字の堀を検出した。遺物の出土状況から大坂本願寺期である可能性が高い。図13は調査地周辺で見つかっている本願寺期の溝の方向と旧地形の関係を示したものである。地山上面の開析谷は本願寺期までの開発や土砂の堆積によって、元来の傾斜よりも緩やかになっているが、依然として窪みを残している。



図13　本願寺期の溝と地形との関係

本願寺期の溝・堀は本節で報告したSM401（図13の①）のほかに、OS88－1次（第Ⅲ章第1節）のSM401（同②）、OS90－51次（第Ⅲ章第3節）のSM401（同③）、OS87－26次（第Ⅱ章第2節）のSD501～503（同④）、OS85－28次（第Ⅱ章第4節）のSM701（同⑤）がある。各溝・堀については報告の記述を参照されたい。なお、③については断面で確認されたため、正確な方向はわからない。

これで見ると、等高線にほぼ平行に延びる①・④・⑤と、等高線と交差する②・③が存在することがわかる。前者は高まりを取囲むように掘られており、構造的にも防御用と見ていいであろう。後者についてはいずれも谷Aの中にある。高所から谷地形に向っての排水用と考えることもできる一方で、②で幅4m以上、③で幅7mと巨大であることから、①・④・⑤と同じく防御用の可能性も排除できない。

『信長記』には、織田信長が本願寺との戦いに際して「籠の岸（樓の岸）」に砦を築いたという記載がある（註1）。その「籠の岸」の正確な位置は不明であるが、上町台地の北西端付近であろうと推定される。当地に信長の砦があったかどうかは、今後文献とつき合わせてさらに検討しなければならないが、周囲より高く、またその高所を取巻くように堀と呼ぶべき施設が存在することから、砦などの軍事的な拠点があったということは十分考えられる。これに関係するかどうか不明であるが、高所に位置するOS90－50次調査地（第Ⅲ章第1節）では、時期不明の柵SA201（図13の⑥）が検出されている。報告では現在の街区と同じ方向であるということから豊臣期と推定したが、時期が上る可能性もありうる。なお、同調査地から織田信長にゆかりのある永楽通寶紋軒丸瓦が2点出土しているが、横方向の鉄線切り（コビキB）が見られることから、豊臣期以後の時期に位置づけられるため、この時期と結びつけ

るのは難しい。

iii)豊臣期

OS93－54次調査地で豊臣前期の整地層と遺構が確認されたことは、周辺での従来の調査成果をみると当然のことといえ、上町台地最先端のこの地が連綿と人々の生活圏となっていたことをよく示している。

豊臣期の遺構では、この街区の南側の島町通と同じ方向をもつ建物SB201や柵SA201が見つかった。島町通が豊臣期から方向を変えずに現在まで残っている道路である可能性は高い。島町通は船場地域の高麗橋通と一直線に繋がり、豊臣期の天守閣を見通す道路であるため、豊臣期大坂の都市開発の基準になった道路と考えられている[宮本雅明1989]。建物SB201は豊臣前期段階、柵SA201は後期段階の遺構であり、豊臣期を通じて同一方向である。[宮本雅明1989]のいう都市計画が施工されていた可能性もある。

調査地は三ノ丸外郭線と推定されている谷町筋の西側で、惣構地域に当る。ただ、調査範囲が狭く遺物も少ないため、今回見つかった遺構の性格を決するのは難しく、町屋の一角なのか、また武家屋敷にあたるのか、定かではない。

また、周辺の調査では起伏のある原地形に対して、谷町筋に向って階段状にテラスによって生活面を造り出していることが明らかになっている。そうした地形や居住環境の復元なども、今後の重要な課題となるであろう。

（寺井）

註）

（1）『信長記』の元亀元年９月８日項に、「９月８日ニ、大坂十町斗西ニろうの岸と申地御取出被相構。斎藤新吾・中川八郎左衛門・稲葉伊豫兩三人被入置、云々」、『總見記』にも「籠ノ岸ト云フ處ニ取出ノ城ヲ被構」とある。同様の内容が『足利季世記』にも「一揆モ駈催シ、同十三日夜樓岸・河口二ヶ所ノ取出へ勢ヲ出シ、鐵炮ヲ放カケケリ」と見える。

第２節　OS87－26次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

ここに報告する調査地はOS87－26・89－76・90－47・92－68次の４個所である。これらは上町台地の北西端部の台地上に位置する。南から続いてきた台地は、ここのすぐ北で比高８ｍほどの斜面となって、大川に向って急激に低くなり、西には東横堀川へと徐々に低くなっている。

OS87－26次調査地付近はTP+13mほどの高台であるが、西のOS90－47次調査地付近はTP+10mほどになり、次第に低くなっている斜面地である(図14)。

これらの調査地では試掘調査の結果、近世と考えられる遺構が検出されたため調査を実施することとなった。重機による掘削は近年の盛土のみとし、以下は人力により進めた。

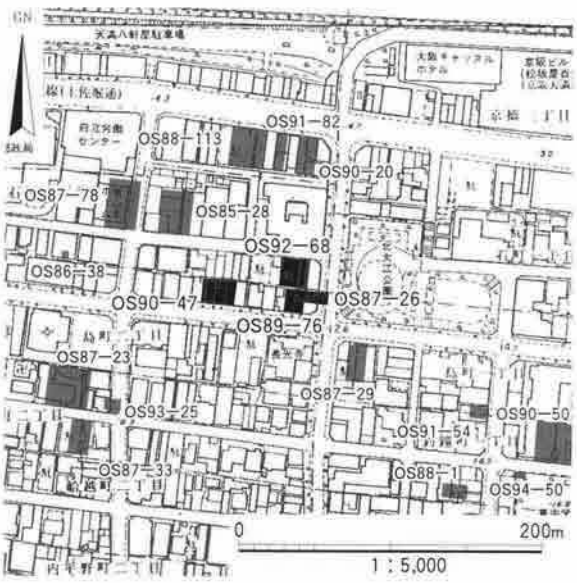


図14　OS87－26次などの調査地位置図

２）調査の結果

ｉ）層序

OS87－26次調査地を代表として記す(図15)。

第１層　江戸時代の整地層である。層相から４層に細分できる。第1a・1d層は焼土層で、第1b・1c層は整地層である。

第２層　大坂夏ノ陣の焼土層である。

第３層　オリーブ色砂混りシルトからなる整地層で層厚70mである。大きく４層に分れる。西から整地しているように観察できた。

第４層　豊臣期の整地層で複数に細分できそれぞれに生活面がある。

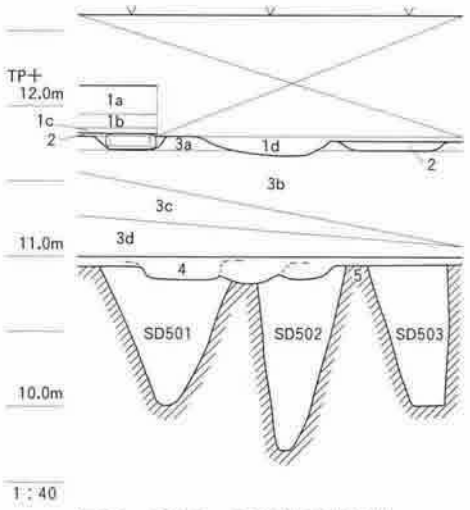


図15　OS87－26次層序模式図

第５層　砂の粒径や色調の違いにより、細かい平行の縞状を呈する。平行の縞は南から北へかなりの傾斜をもつ。遺物は出土せず、これより下位には遺構面は確認できなかった。地山であろう。

ii）遺構と遺物

OS87－26次と90－47次調査地では大坂本願寺期や豊臣期の遺構が見つかったが、OS89－76次・

92－68次調査地では徳川期の削平が著しく、豊臣期の遺構もなくすべて徳川期の遺構であった。大坂本願寺期の遺構から記述する。

a．大坂本願寺期の遺構と遺物

第５層上面の遺構である。OS87－26次調査地では南西から北東方向の溝を３条(SD501～503)(図版２上・中)、OS90－47次調査地では北西から南東方向の溝を１条(SD504)検出した(図16・17)。

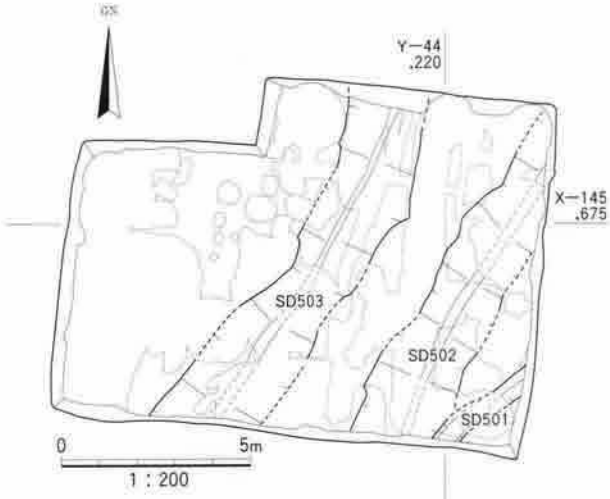


図16　OS87－26次第５層上面遺構配置図

SD501　幅0.7m、深さ1.2mで、埋土は上部が黄褐色粘土質シルト、下部が褐色砂礫混りシルトと灰白色砂礫の互層である。遺物は出土しなかった。

SD502　幅2.5m、深さ1.3mで、埋土は灰白色砂礫である。図示していないが、輸入白磁四耳壺と皇宋通寶が出土した。

SD503　幅2.5m、深さ1.1mである。埋土はSD501と同じで、上部が黄褐色粘土質シルト、下部が褐色砂礫混りシルトと灰白色砂礫の互層である。16世紀前半に位置づけられる瓦質土器羽釜片が出土した。

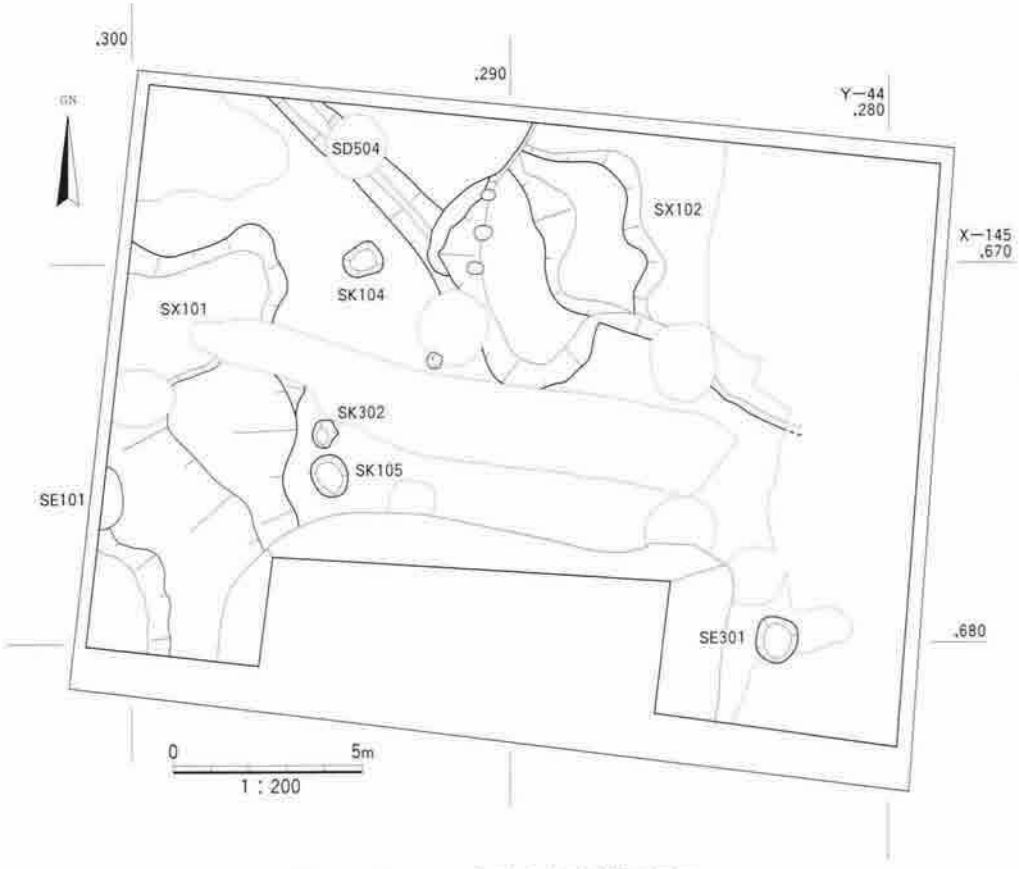


図17　OS90－47次地山上面遺構配置図

SD504　OS90－47次調査地で検出した(図17、図版3上・中)。上部の削平が著しく、幅1.0m、深さ0.4mしか残っていなかった。埋土は先の溝の下部と同じく、中～粗粒砂が互層に堆積している。土師器・須恵器の細片が出土したが、年代を決める手がかりはなかった。

この溝だけが方向が異なり北西から南東方向に延びるが、先の3条の溝に直交する方位でもあり、同時期の遺構であると判断した。調査地東側の高台を囲う性格のものであった可能性がある。

b．豊臣前期の遺構と遺物

OS87－26次調査地で確認した。敷地の中央東寄りに溝や土壙が集中する。東寄りに南北溝が、中央に土壙が重複している。いずれも南北方向の軸をもつ。本願寺期の遺構が北で東に振る方位だったのが、この時期には現在の街区の方位に近い方向に作られており、豊臣前期に城下町が整備されるなどの大きな改変があったと想定できる(図18上、図版2下)。

SD401　幅1mの南北方向の溝で、敷地を貫通する。豊臣前期の陶磁器が出土している(図19)。1～5は瀬戸美濃焼で、1・2は鉄釉天目碗、3は灰釉丸皿、4・5は灰釉折縁ソギ皿である。6～9は輸入青花で、6・7は碗、8・9は皿である。10～14は土師器皿、15・16は瓦質土器擂鉢である。このほか、羽口や鉄滓も出土している。

SK401　敷地西端で数10個体の土師器皿が出土した。

これ以外にSD401の東西には小規模ではあるが同じ方向の溝や土壙が集中している。それらからは鉄滓や羽口が多く出土している。

c．豊臣後期の遺構と遺物

OS87－26次調査地で確認した(図18下)。

厚さ0.7mもある第3層の上面で検出した。豊臣前期の遺構面とは遺構の密集度が異なり、敷地の利用のされ方が変化している。礎石と土壙SK301が残っていた。土壙SK301は焼土によって埋る。

前代は溝やゴミ穴が集中するところであったが、後期になると礎石建物が建つ場所となっている。

d．徳川期の遺構と遺物

OS87－26次調査地では西部で大きな土壙が重なっており、東端に

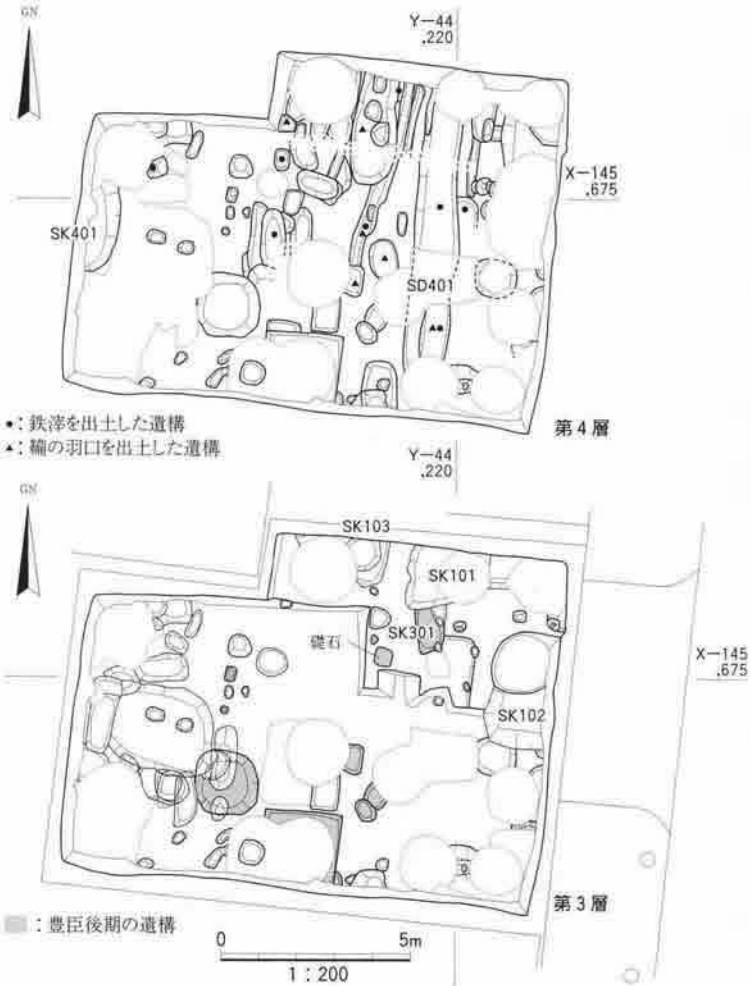


図18　OS87－26次第4層および第3層上面遺構配置図

は穴蔵が2基見つかった(図18下)。

SK101　北東角で検出した穴蔵である。深さ1.5m以上である。18世紀前半の火災の後、埋められている。

SK102　SK101の南にある穴蔵である。SK101の後に造られている。南北2.5mで、深さは2.1m以上である。18世紀前半以降のものである。南北に穴蔵が造替えられており、この上部に建物があったと考えることができる。

SK103　北端にあり、17世紀前半の陶磁器が出土した(図19)。17～22は肥前磁器で、17・18は一重網目文の染付碗、19は鉄釉の碗である。20は染付皿、21は青磁皿、22は染付仏飯具である。23は中国製白磁碗、24は青花の碗である。

OS90－47次調査地では第5層上面で豊臣期から徳川期頃のSK302・SE301や、徳川初期のSK105やSE101、SX101を検出した(図17)。後世の削平や攪乱が多く、敷地内の遺構配置を復元できない。

SX101　敷地南西部で検出した落込みで、南西方向に低くなっている。埋土の基底面で徳川期初頭の井戸SE101が検出された。

第1層上面でもSE102～105やSK106を検出したが、同様に、敷地内の構成は復元できなかった(図20)。

SE102　陶器生産に係わる窯道具と、生産された陶器類や未成品、窯道具類が多量に出土した(図

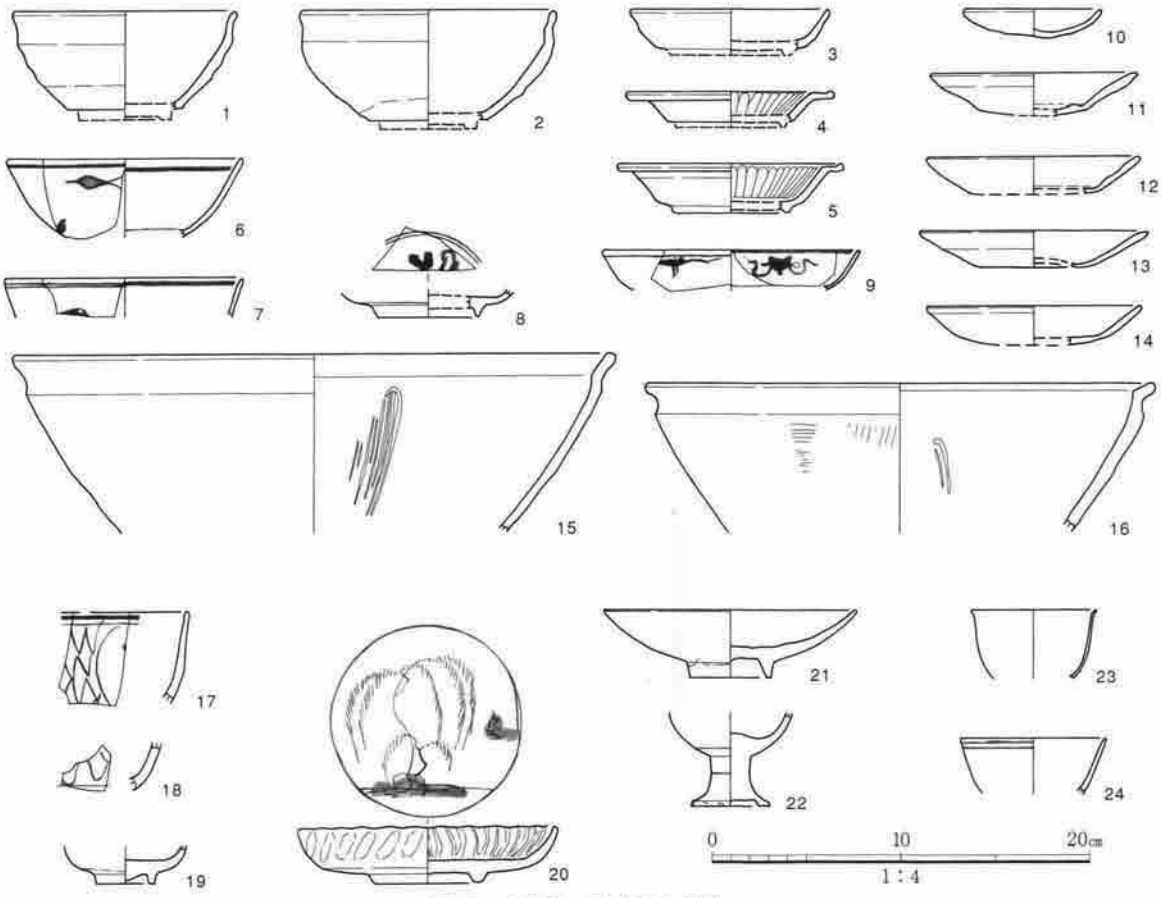


図19　OS87－26次出土遺物
SD401(1～16)、SK103(17～24)

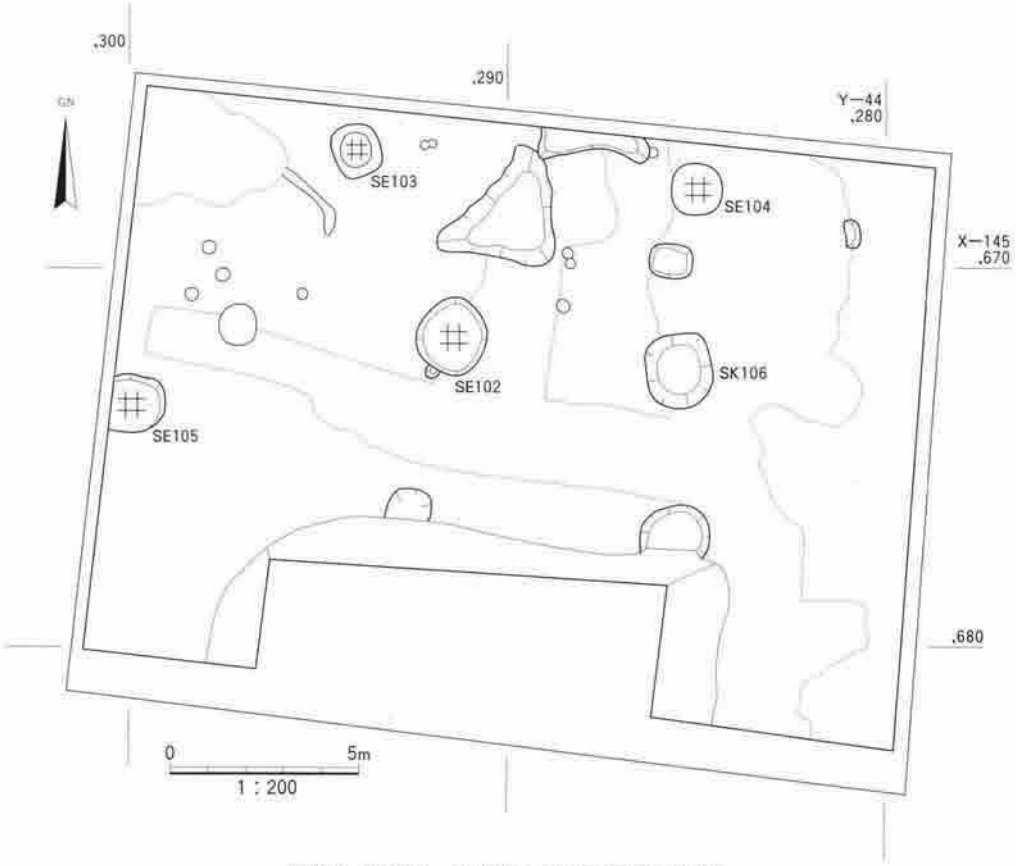


図20　OS90−47次第１層上面遺構配置図

21)。一緒に出土した遺物から18世紀のものと考える。25～44は製品あるいは素焼きのままの未成品である。

25～27は軟質施釉陶器碗で、漆黒色の釉を掛ける。25の外面には全面に掛けた釉の下に縦方向のケズリ調整が認められる。高台内には逆時計廻りの兜巾がある。高台端面には３個所に目跡が残る。高台に目跡があることや内面に目跡が残っていないことから、正立した状態で焼成したものと考える。胎土は灰褐色で、きめが粗い。口径9.3cm、器高7.3cmの小型の碗である。26・27も同様の釉調で、胎土も同じである。この２点は25よりやや大振りの碗で、口径が12cmである。

28～30は素焼きの碗である。28は内面を横方向にケズリ調整し、外面は上半部を縦方向に、下半部を横方向にケズリ調整する。復元される口径は12cmである。29・30は素焼きの碗の高台で、29の高台内の兜巾は時計回り、30は逆時計回りになっている。これらの胎土は灰褐色で、製品である25～27と同様のものである。

31～33は蓋付碗34～37の蓋であろう。素焼きのままである。形態は同じであるが、口径は31が12.6cm、32が14.2cm、33が14.9cmと小型、中型、大型の３種がある。31は蓋部が直線的に広がっており、外面にはカンナケズリの跡が残っている。他の蓋とは形態が異なっている。最も小型であり、小振りの碗の蓋になる可能性がある。内外面に白化粧をしている。胎土は灰褐色に近い。32・33は蓋の端部がやや緩やかな曲線を描く。口径が31よりは大きく、鉢の蓋と推定する。32は内外面とも朱色の化粧を行っている。胎土は褐色を呈し、砂粒の混入はない。33は内外面に白色の化粧を行っている。胎土は灰褐色を呈し、砂粒の混入はない。この２点の高台径は後述する鉢の蓋38・39のそれと同じである。

34～37は碗で、先の蓋31～33とセットになると考える。素焼きの状態である。34～36は体部が直線的に広がるが、37は緩やかな曲線を描いている。これらにも２種の形態がある。いずれも胎土は灰褐色で、砂粒の混入はない。このうち34は口径15.8cm、器高6.4cmの大振りの碗である。内外面にケズリ痕跡があり、白化粧を行っている。

38・39は鉢の蓋であろう。素焼きの状態である。高台径は先に述べた碗の蓋32・33と同じであるが、蓋部が厚く、平坦であることから、大きな器種の蓋と推定した。外面には、高台の際に圏線を彫り、その周囲を３分割して葉を丸鑿で彫刻している。内外面には暗褐色の鉄サビを施している。

40は鉢の底部である。素焼きの状態である。碁笥底状の底部をつくり、その３個所に抉りを入れ、割り高台風にしている。内外面には赤い化粧を施している。胎土は褐色で、砂粒の混入はない。

41は筒状のもので、素焼きの状態である。外面にのみ赤い化粧を施す。内面には細かなロクロメが残る。内面の調整がそのまま残っており、花生や徳利のような器種となろう。

42・43は方形の箱の蓋と身であろう。いずれも完形ではないため、全体の大きさや形状は不明である。蓋と考えた42は両端が残る１辺が12cmで、他３辺は欠損しているため、長さが判明しない。白化粧を施し、白色の釉を施している。一部緑色を呈しており、全体に銀化しているようである。胎土は褐色を呈し、砂粒の混入はない。43は方形の箱の身である。高さ６cmである。底面には断面長方形の脚を貼付けるが、全体が残っておらず、隅の４個所に脚が付くのか、相対する辺に長い脚が付くのかはわからない。42の身になる可能性がある。白化粧を施し、白い釉を掛ける。この２点は製品であるのか、素焼きの状態なのか判断しにくい。

44も方形の箱である。器壁は１cmほどで、口縁端部は厚くなる。外面端部は面取りしている。外面は赤く化粧し、白色の釉を掛けており、一部銀化している。内面は口縁端部から７cmほどまでしか施釉しておらず、その下部は褐色の素地のままである。火鉢のような製品であろう。

45～51は窯道具である。45は皿状になる匣鉢の蓋と推定した。その根拠は、皿状にした場合の口縁部上端は平坦で、そこから内面にはガラス質になった自然釉が多く掛かっている。口縁部の下端には突起が巡る。口縁部の側面や突起の下面には自然釉が掛かっておらず、図示したような状態で窯内で使用したものと推定した。46の匣鉢の口径に近いことも、根拠の一つである。胎土内には砂粒の混入が多い。

46・47は匣鉢で、46は口径19.7cm、深さ13.6cm、内部の径は17cm、深さは11.5cmである。体部には径１cmほどの円孔が２～５cm間隔で、５段巡る。円孔は水平もしくは、内側が下向きに穿たれている。底部は体部から1.5cmほどを残して中央部に復元径14cmほどの孔が開いている。また、縁の３個所には自然釉が掛かっていない所があり、そこに棚板を差し渡してその上に製品を置いていたのであろう。47も同じ形態の匣鉢であるが、これには底部に大きな孔はなく、径１cmほどの円孔が全面に穿たれている。また、これには底部に径４cmほどの脚が貼付けられていた痕跡がある。この大きさの匣鉢で25～27の碗は十分納まる。48は上下ともに欠損しているが、上にした部分には横方向の突起が取付いている。上端は円形に剥離しており、匣鉢の底部に貼付けられていた脚と推定できる。

49は径８cmほどの円孔があり、片面には高さ１cmほどの直線的な突帯を貼付けている。こちらの面

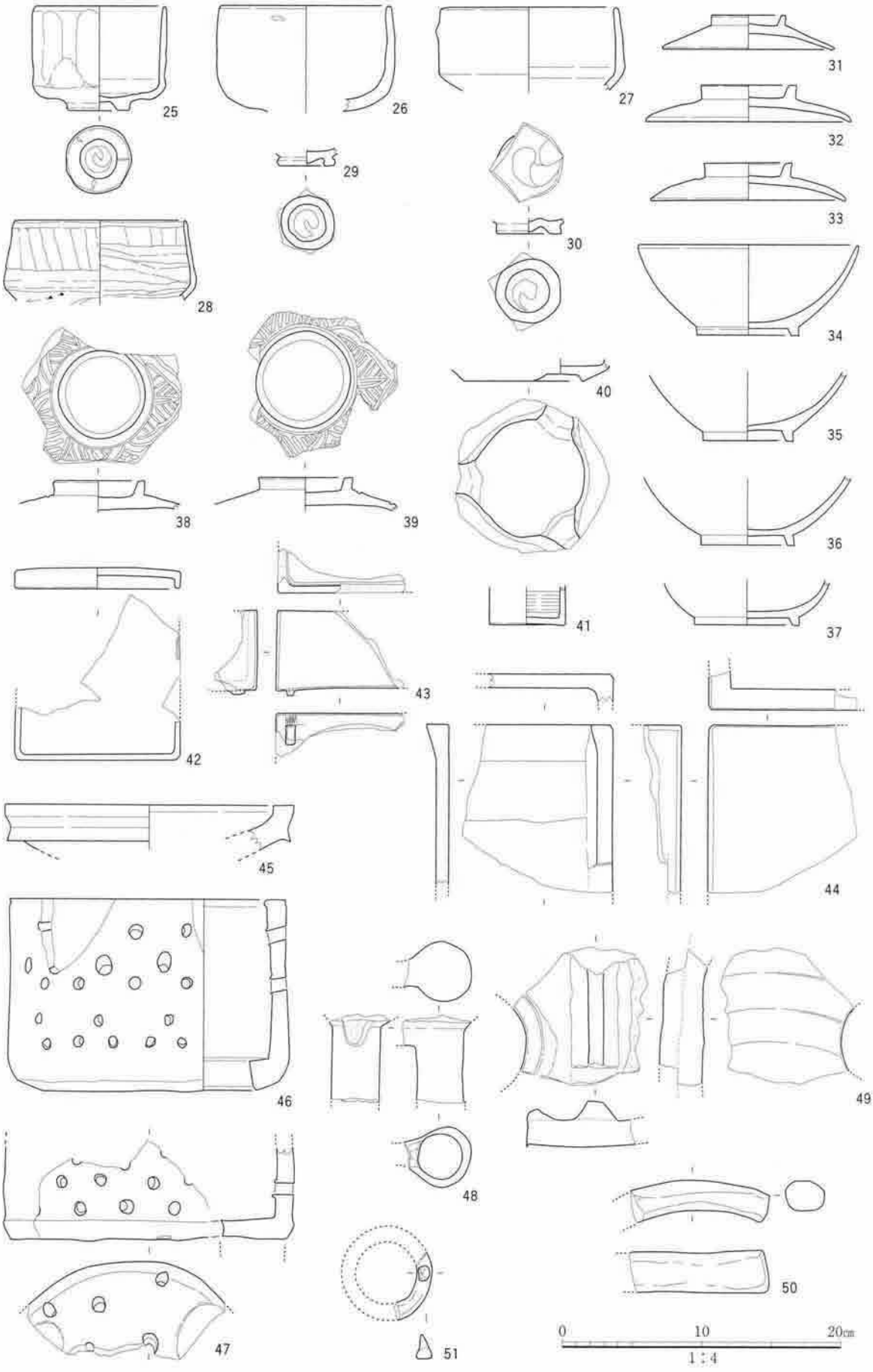


図21　OS90－47次SE102出土遺物

が焼けているが、ガラス質にはなっていない。他面にはナデ調整が施されているだけである。ナデ調整を施した側に緩やかに湾曲し、自然釉は掛かっていない。この形状や釉の掛かり具合が使用方法の決め手になるのであろうが、現状ではわからない。50は棒状のものである。右端は欠けておらず、左端は欠損している。上図左端の前から下の辺りにかけて少し自然釉が掛かっており、窯内での置き方が想定できる。

51は円錐ピン付の環状トチンである。25の碗には高台に小さな目跡が残っており、この円錐ピンの上で碗を焼成したのであろう。ただ、ピン部の径は約5㎝である。先の碗(25～27)の高台径が3～4㎝で、大振りの碗や鉢31～39の高台径も6～7㎝ほどであることから、このトチンを使用した製品は出土していないようである。

OS89－76次調査のSK109～111・SE106はいずれも18世紀前半に属する(図22)。SK109からは多量の焼土・陶磁器・瓦が出土しており、火災後のゴミ穴と考えられる。出土遺物からは1724(享保9)年の妙知焼が想定できるが、OS92－68次調査では焼土が確認されておらず、局部的な火災であった可能性もある。

OS92－68次調査では洪積層まで削平がおよび、徳川期の地層しかなかった。遺構は洪積層の地山上面とその上位の整地層の上面で検出された。以下、地山上面から記述する(図23､図版3下)。

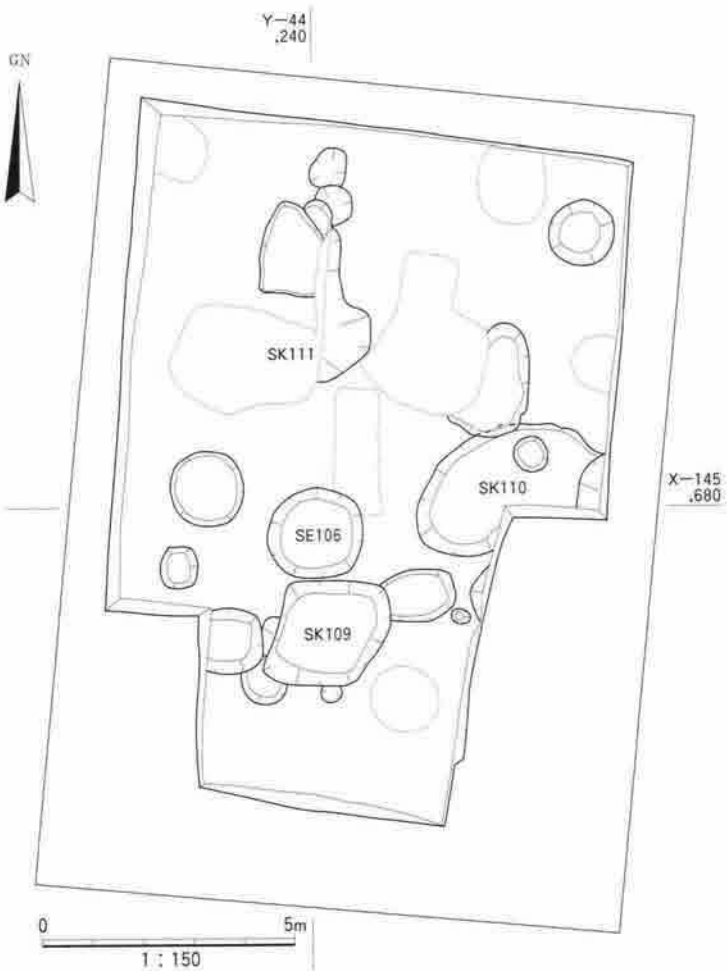


図22　OS89－76次遺構配置図

SB101・102　礎石建物と考えるが、2棟とも礎石は抜取られており、SB102が後出する。方位はN8°E前後である。SB102に平行して杭列SA101があり、庇の可能性がある。

ほかには井戸や多数の土壙がある。

SK108　イヌの骨が1頭分出土した。中型犬に属し、骨には病気によると推定できる変形が認められる。病死したイヌを埋葬した土壙であろう。

これらの遺構の時期は17世紀末～18世紀中頃と考えられる。

この上層の上面でも礎石建物を検出した。

SB103・104　方位がN8°E前後になる礎石建物である。南には肩部に石を配した南北溝のSD101と瓦組の暗渠SD102がある。前後関係は直接明

らかでないが、礎石の遺存状況からSB103よりSB104が後出すると推定される。

これらの遺構の時期はほかの土壙などの出土遺物から18世紀後半と考えられる。

図示していないが、最上面では井戸、土壙、埋甕、漆喰を用いた貼床などを検出した。19世紀代の遺構群である。

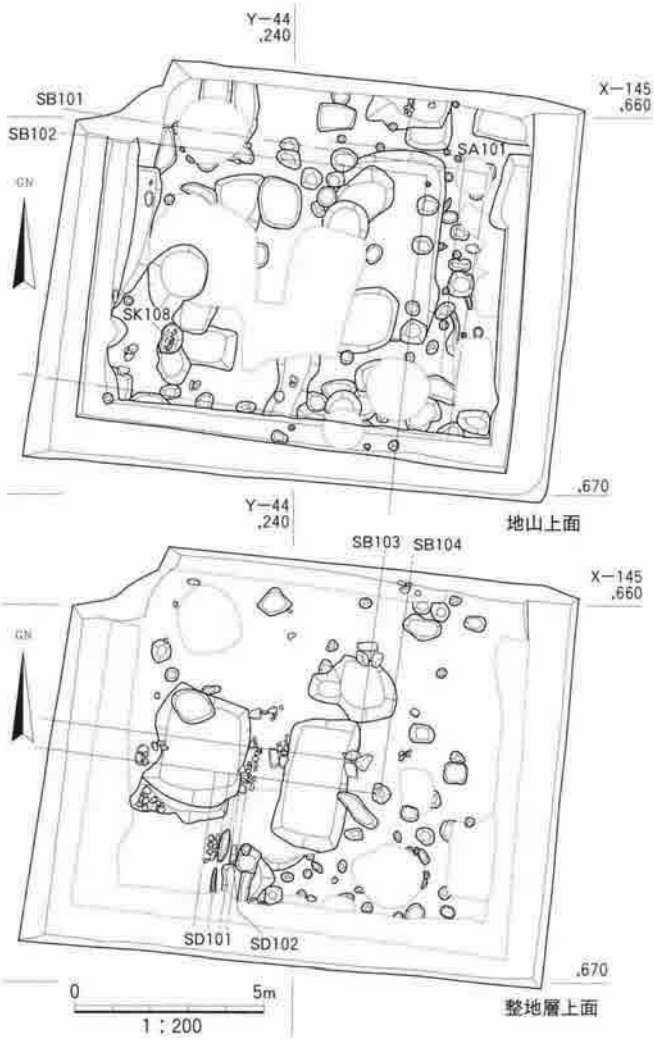


図23　OS92−68次遺構配置図

3）まとめ

i）大坂本願寺期

OS87−26次調査地では3条、OS90−47次調査地では1条の斜行する溝を検出した。前節でも触れたように、この付近は本願寺と織田信長の戦いの際に築かれた砦である「籠の岸」があったと推定される所でもある。この調査地の東には本章第1節で報告したOS86−6次調査で大坂本願寺期の堀状遺構SM401が見つかっている。その堀は南側の高台一帯にある施設を防御したものと推定できる。

本節で報告した斜行した溝群もその施設の西側を画する防御用の溝群である可能性もあろう。

ii）豊臣期

この街区の南側の島町通は、豊臣期の都市計画の基準になっていたとされる道路である[宮本雅明1989]。この地区では豊臣前期と豊臣後期の遺構群がOS87−26次調査地で検出されたが、豊臣前期の遺構は東西道路に直交する方位の南北溝や土壙が集中し、それらの中からは羽口や鉄滓が出土している。豊臣前期には金属生産や加工を行う住人が居住した場所であった可能性があり、後期にはそうした遺物が出土しないことから、金属生産関連の住人はいなくなったのではなかろうか。

前期の遺構面の上には70cmもの整地層があり、その整地を境に敷地の性格が変化している。しかし、厚い整地を行った後も遺構の方位に変化がなく、前代の道路の方位が踏襲されていることがわかる。ほかの調査地では徳川期以降の開発によって削平を被っているため、豊臣前期の街区方位が後期まで踏襲されていたのかどうかを検証することはできなかった。

iii）徳川期

この時期には町屋の敷地となっているが、井戸から多量の陶器生産に関連する遺物が出土している。また製品や未成品を見ると、普段使いの食器としての陶器ではなく、黒楽茶碗を模倣した軟質施釉の

茶陶や、蓋付の碗や鉢などを生産している窯のようである。器形からみると、煎茶用の器ではなく、抹茶用の器であり、その会席で用いられる食器類である。ここの調査を行うまではこうした遺物が出土したことがなかった(註１)。江戸時代の大坂には、「高原焼」や「難波焼」などの陶器の名前が残っているが、ここで出土した陶器もそうした大坂の陶器窯の一つで生産されたものであろう。しかし、その生産期間はさほど長くはないようで、生産量も限られていたのではなかろうか。

窯の年代は同時に出土した陶磁器から18世紀初頭ころと考えられるが、その時期になると、日本各地でも小規模の陶磁器生産が始まり、それまで陶磁器の主体であった肥前陶磁器や瀬戸美濃陶器の中に混って出土するようになる。

（松尾）

註）

（１）1998年度に行った福島１丁目所在遺跡の調査で、18世紀初頭に属する３基の陶器窯を発見した。窯構造は[大阪市文化財協会1999c]を参照されたい。薄手の茶碗や向付・鉢などの茶陶製品のほか、土鍋や擂鉢などの生活道具も生産している。

第３節　OS88－113次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではOS88－113・90－20・91－82次調査を報告する。これらの調査地は京街道と推定される土佐堀通に面し、現在の地表はTP+4.5m前後である(図24)。すぐ北を西流する大川によって形成された狭い沖積地に位置し、南の敷地より現状で３～５mほど低くなっている。南側の高台は上町台地に当り、それとの境界が崖面となっている。本調査地の南西には豊臣期の武家屋敷のほか、室町時代以前の遺構・遺物が検出されたOS85－28・87－78次調査がある(本章第４節)。

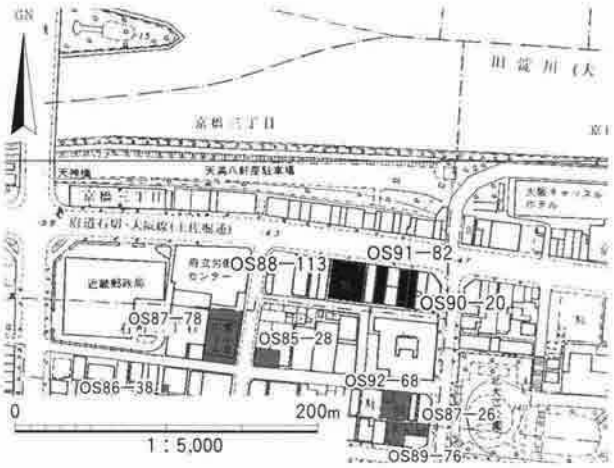


図24　OS88－113次などの調査地位置図

OS88－113次調査では、平面的には後述の第４層上面までを調査し、以深は部分的な深掘りにより確認したのみである。OS90－20次調査では調査開始以前に上部が削り取られており、後述の第４層途中からの調査となった。OS91－82次調査は、工事により破壊される部分のみを対象とした小面積の調査である。

２）調査の結果

ｉ）層序と遺物(図25・26)

第１層　江戸時代以降の地層である。

第２層　大坂夏ノ陣に比定できる焼土層である。OS88－113次調査でしか確認できなかった。

第３層　黄褐色から灰オリーブ色と色調は様々であるが、総じて黄灰色を呈する。シルト質細粒～シルト質粗粒砂層によって構成される。部分的にラミナが観察できる所もあるが、豊臣後期の整地層である。OS88－113次調査ではこの上面が焼けており、礎石建物が検出される。瀬戸美濃焼の灰釉

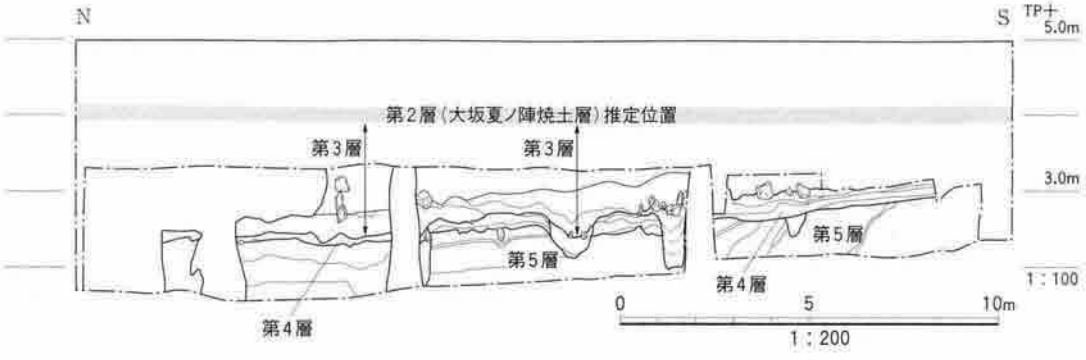


図25　OS90－20次東壁断面図

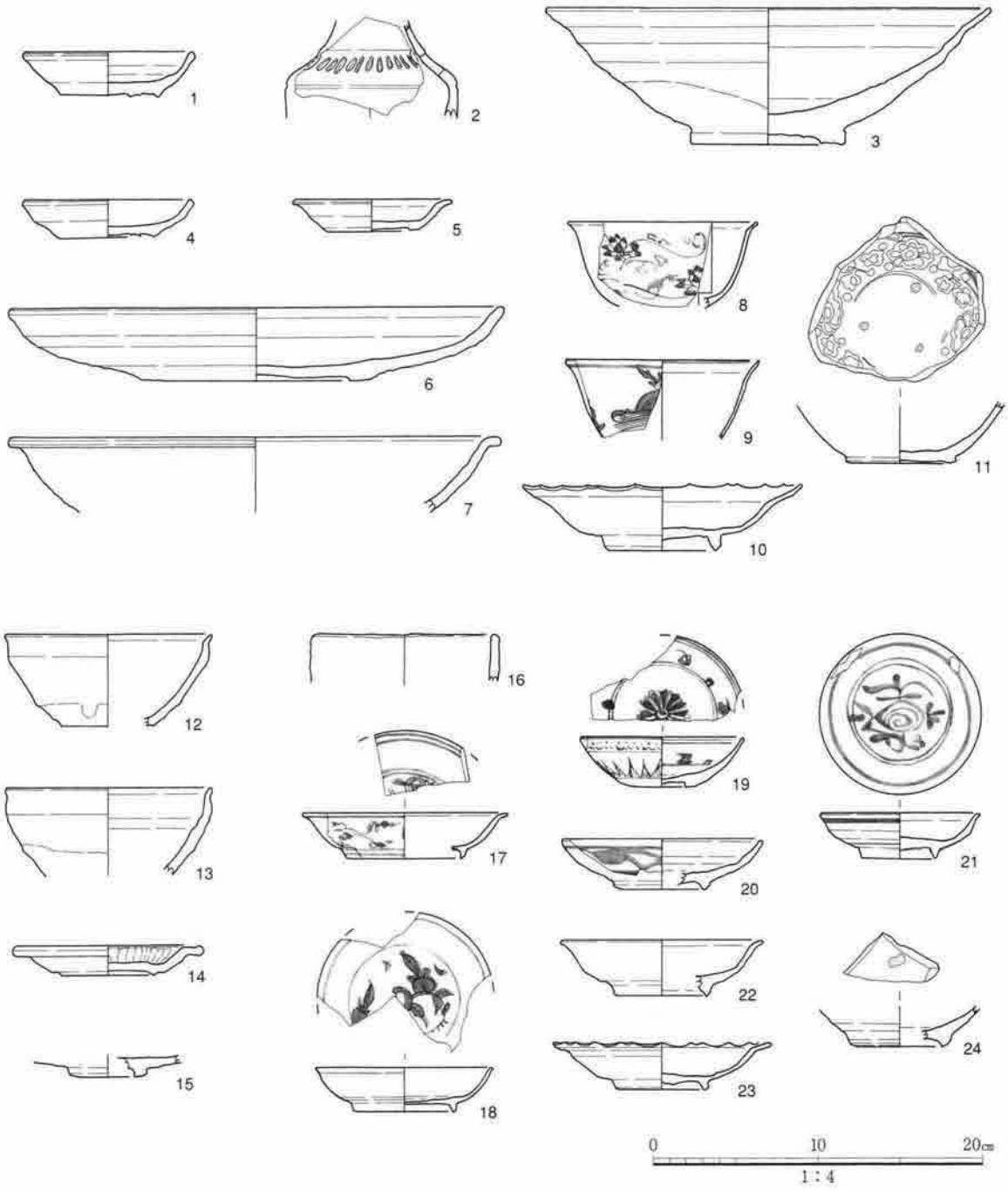


図26　OS90－20次出土遺物

第3層(1～3)、第4層(4～11)、SB502(12～15)、SK501(16～24)

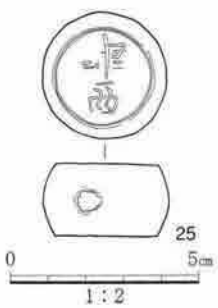


図27　分銅(25)

丸皿1と唐津焼香炉2・大皿3が出土した(図26)。

第4層　OS88－113次調査では灰色～暗灰色を呈する砂質シルト～粘土質シルト層で、有機物を含む。OS90－20次調査では炭化物を含む灰色砂質シルトからなる整地層で、南部では複数の薄層に分けられるが、北部では単層になっている。瀬戸美濃焼4～7、色絵磁器8、青花9、白磁10、ベトナム製と推定される白磁碗11がある(図26)。この層の上面から太鼓型の片面に「肆両」と打刻された分銅25が出土している(図27)。このほか大型の桐文軒平瓦26や、同じく大型の平

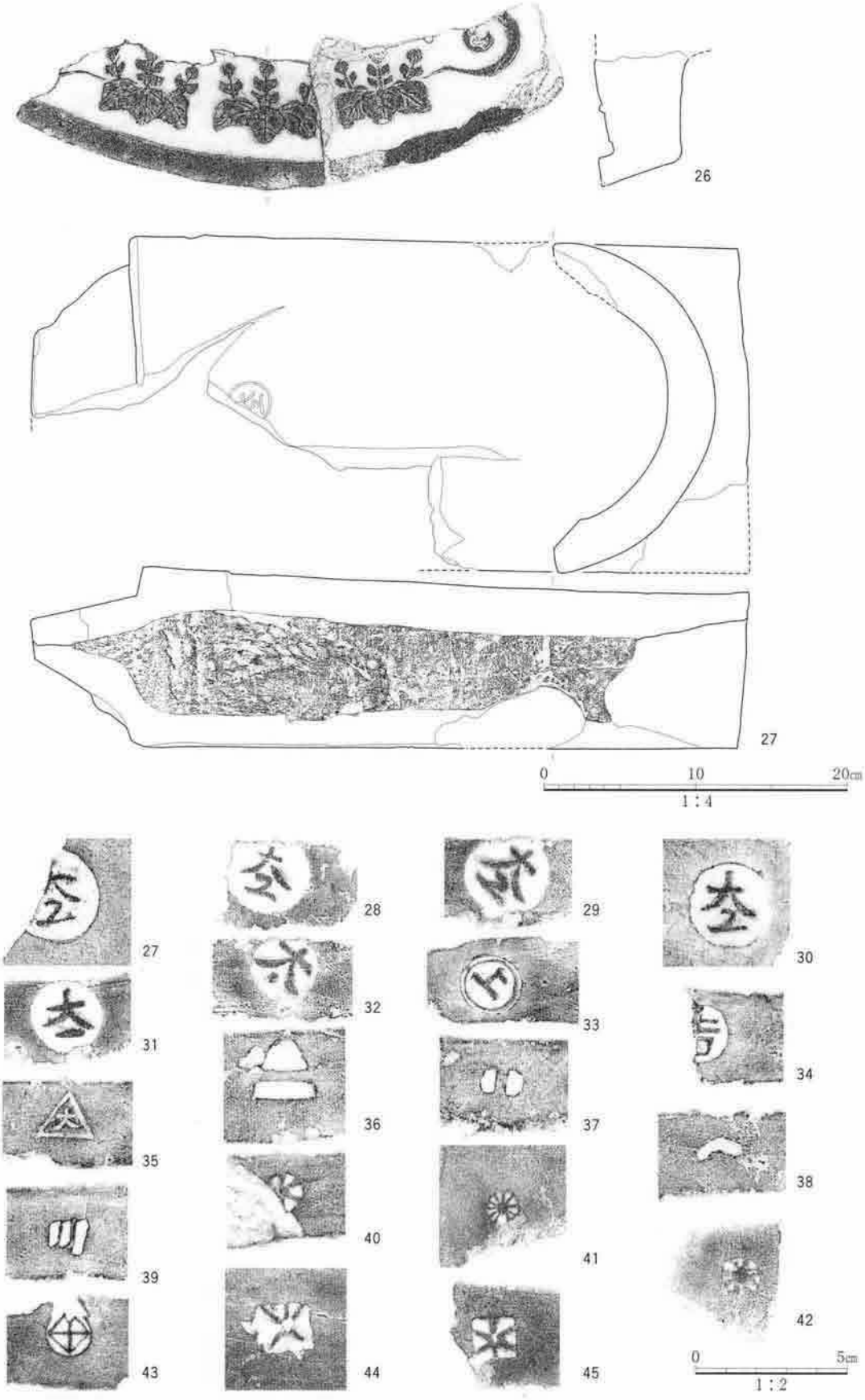


図28　OS90－20次出土瓦と瓦に見られる記号の拓本

第4層(26・28・30～32・35～38・40～43・45)、第4～5層(29・33・34・44)、第5層(39)、SB501内土壙(27)

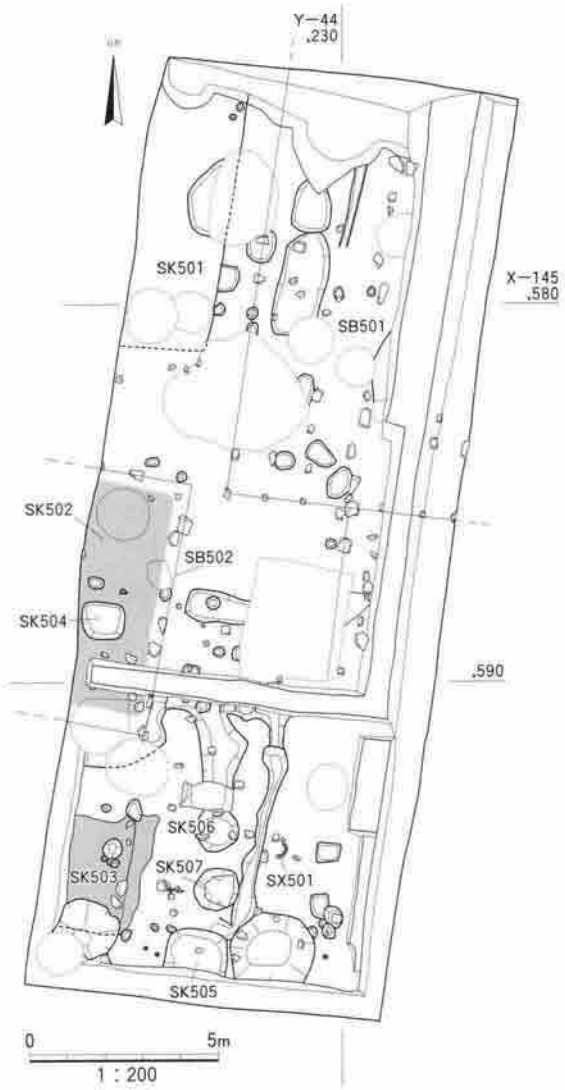


図29　OS90−20次第５層上面遺構配置図

瓦・丸瓦27が出土している。それらには「大工」「大一」「太」「上」「吉」などのほか、各種の記号が刻印されている(図28)。豊臣前期に位置づけられる。

第５層　この地域の最終遺構面を構成する砂層で、南から北に向って整地されている。シルト偽礫が混る。

ii)遺構と遺物

ａ．豊臣前期の遺構と遺物

第５層上面の遺構である。この上面の遺構はOS90−20次調査で建物や穴蔵が整然と見つかったが、OS88−113次調査ではトレンチで穴蔵と考える落込みが、OS91−82次調査では礎石と溝が見つかっただけで、敷地の構造までは明らかにできなかった。

OS90−20次調査の遺構から先に述べる(図29、図版５上)。

SB501　北東部に検出した南北11m以上、東西６m以上の礎石建物である。南側には礎石が約１m間隔で並ぶが、西側柱の礎石は動いているようで等間隔ではない。内部にも礎石状の石が並んでいる。また、この南にも南北に並ぶ石が見つかっており、南に建物が広がる可能性がある。方位はN8°Eである。

SB502　SB501の南西にある礎石建物である。SB501の西側柱から約１m離れた位置に東側柱がある。南東隅の礎石の上には９㎝角の柱が遺存していた。方位はN8°Eである。建物内は周囲より約0.1〜0.2m低くなっている。東西セクションの北側でも壁土と考える粘土が厚さ約５㎝、高さ約10㎝地上に立上っていた。さらに、北側の礎石にも同じ粘土が残っていた。また、この建物の下層には５層を切るSK502がある。SK502の埋土

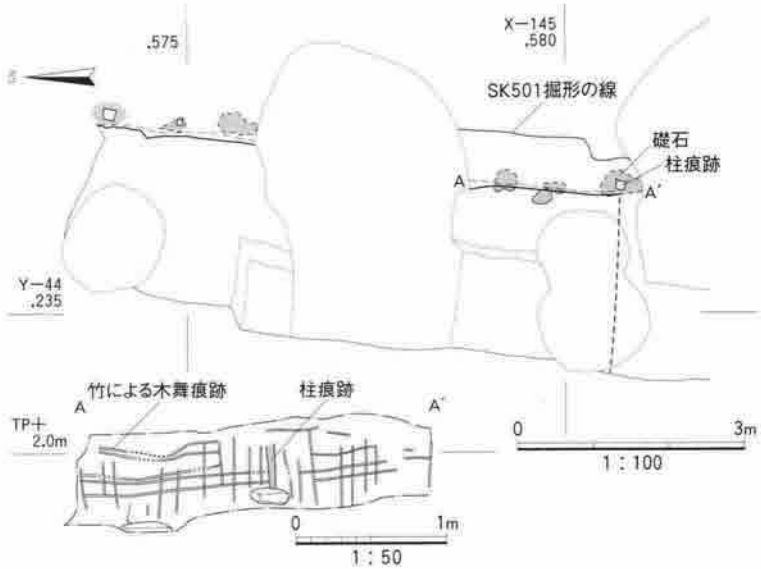


図30　OS90−20次SK501実測図

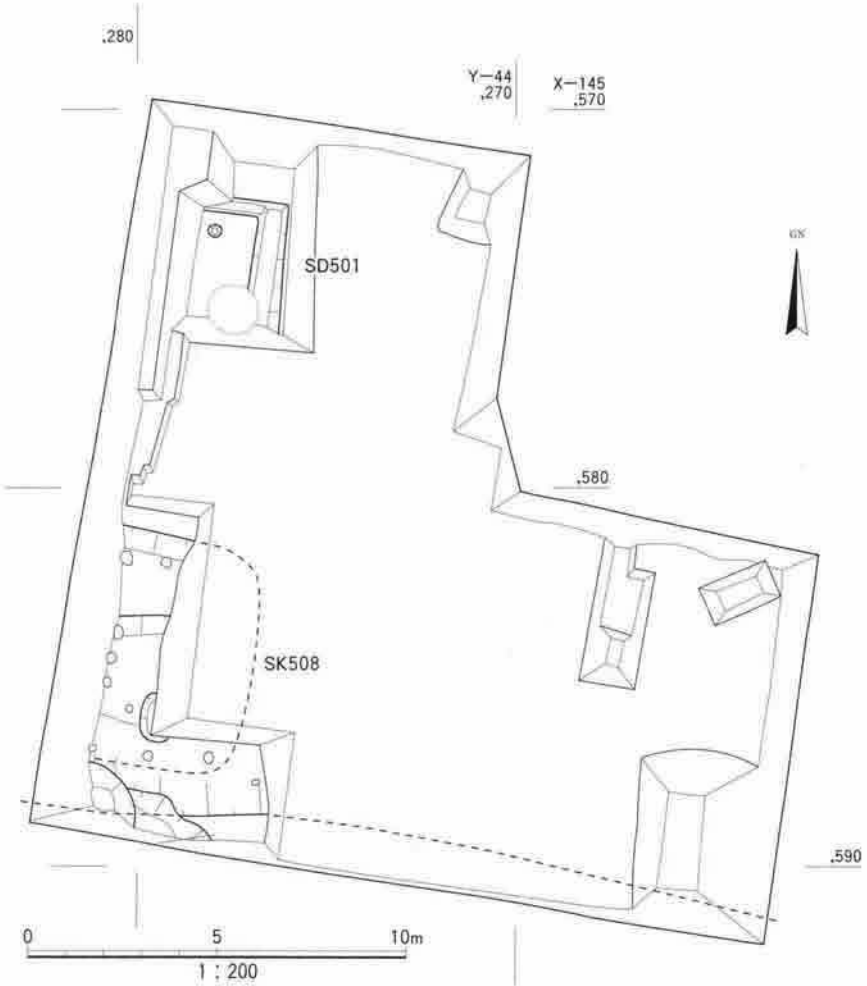


図31　OS88－113次第５層上面遺構配置図

の上にはSB502の礎石があり、SB502はSK502が埋没してから建てられている。

SK501　南北７ｍ以上、東西２ｍ以上の方形の穴蔵である(図版５中・下)。先述したSB502東側柱筋の北側延長上に落込みの東肩が見つかる。SB502下層の穴蔵とほぼ同じ位置にある。深さ0.6ｍあり、壁面には粘土が５～10㎝程度貼られている。粘土内には木舞の痕跡が確認され、底には柱痕跡を残した礎石が壁際に約１ｍ間隔で検出された。礎石の高さはまちまちで、北側が低くなっている。南東角と北端の礎石上には0.14ｍ角の柱痕跡がある(図30)。壁際の礎石が建物の柱を支えていた、半地下式の建物とも考えられる。

SK502　SB502の下層にある穴蔵である。東壁には木質の痕跡があり、板を壁に貼付けていたようである。SK501とは異なり、粘土の壁がない。工事のため掘削深度に制限があり、調査は底まで達しなかった。

SK503　SB502の南側で検出した。SB502の東側柱の南延長上に東肩があり、同じ計画のもとに築かれたと考えられる。東壁際には木質の痕跡があり、壁際に板が貼付けられていたと考える。この埋土の上部には礎石状の石や礎石の抜取穴と考えられる穴があり、埋った後、礎石建物が建てられている。SK502・503はSK501とは壁の構造が異なっている。

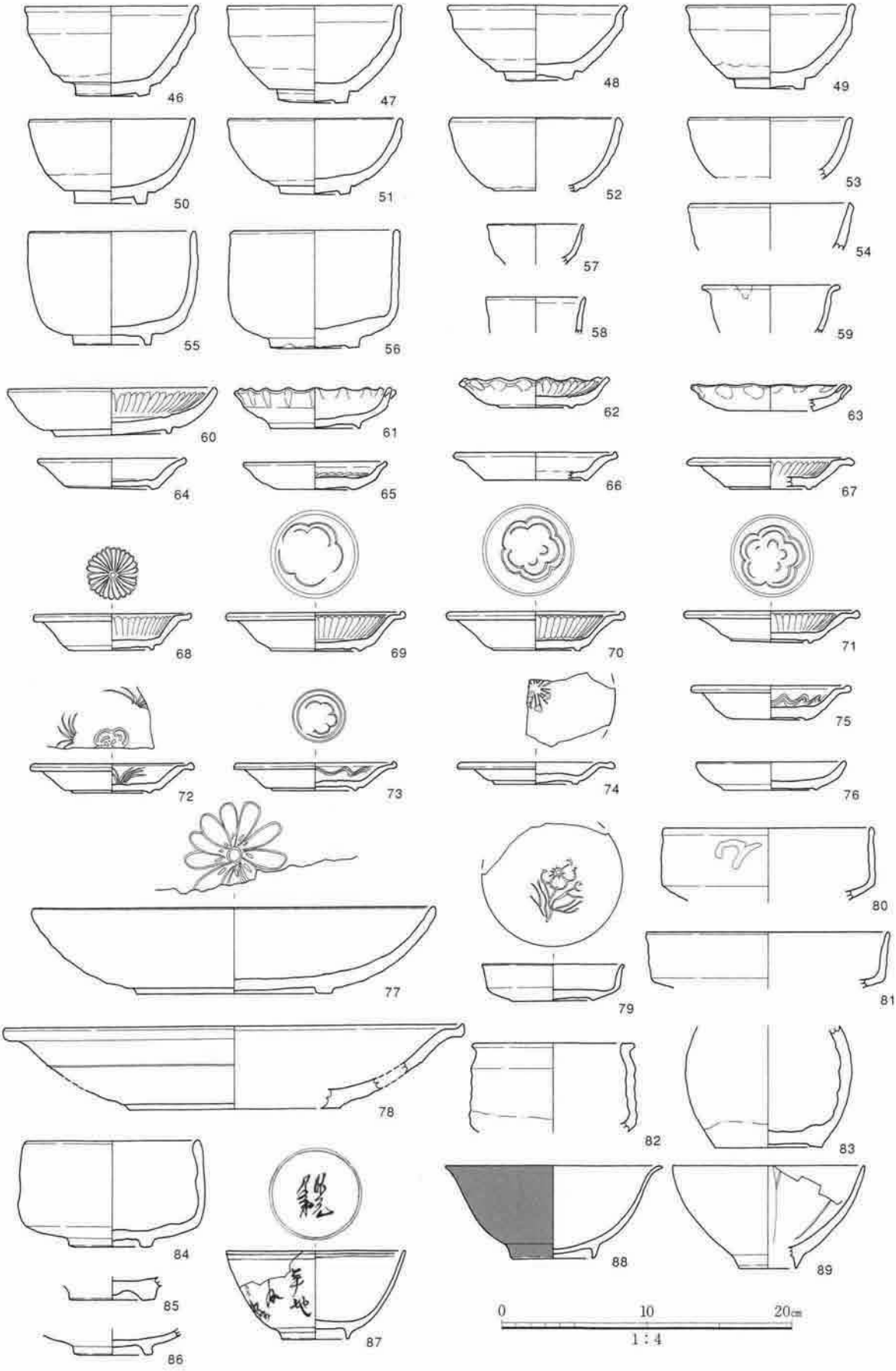


図32　OS88－113次SK508出土遺物

SB501の南部では溝や土壙SK505～507、竈SX501を検出した。土壙SK507には一抱えもある花崗岩が据わっていた。

SB502から瀬戸美濃焼12～14、楽系の黒色を呈する軟質施釉陶器15、SK501から楽系の黒色を呈する軟質施釉陶器16、青花17～21、白磁22・23、李朝磁器24が出土した。

SB501と502の側柱列は約1m離れて建っており、ほかの遺構も同じ位置で分かれている。この間が敷地境であった可能性が高い。

OS88－113次調査では下位の地層を確認するためのトレンチで、溝と穴蔵状の落込みを確認した(図31、図版4中)。

SD501　鉤形に曲る溝である。南北方向の部分は幅1m、深さ1mで西肩がほぼ垂直であるのに対し、東肩は傾斜がある。東西方向の部分は幅0.6m、深さ0.8mで、板組の痕跡が認められた。

SK508　正確な形状は不明であるが、深さ1mで平面形は方形と推定される。埋土は3層に分かれ、このうちの下部を中心に多量の遺物が出土した。壁際には木質の痕跡があり、板を貼付けていた可能性がある。礎石状の石が1個確認された。調査時は土壙か落込みと考えていたが、OS90－20次調査で検出したSK501～503と同様の遺構ではないかと考えられる。

埋土下部から出土した遺物は瀬戸美濃焼が多かった(図32)。46～83は瀬戸美濃焼である。46～49は鉄釉天目碗、50～54は丸碗であるが、50～52が鉄釉で、53・54は灰釉である。55・56は黒灰色の釉を施した半筒碗である。57～59は灰釉の小杯、60～76は皿である。60は灰釉の丸皿で、内面にソギがある。61～63は口縁部を摘んで波状にする丸皿で、63は鉄釉である。64は灰釉の稜皿、65は鉄釉の稜皿である。66～75は折縁皿である。66・67は鉄釉で、67には内面にソギがある。68～71は灰釉のソギ皿で、内底面に菊文や木瓜文の印花がある。72～75はソギの代わりに草や波状文を施す。76は灰釉丸皿である。77は内底面に菊文の印花のある大皿で、78はサビ釉を施した大皿である。80は向付で鉄釉を施した上から白釉で文様を描く。84～86は軟質施釉陶器の碗で、85は白色、他は黒色を呈する。87～89は輸入磁器である。87は青花で内底面に「状元及第」の字款がある。外面にも文字があるが判読できない。88は外面に瑠璃釉を施した碗である。89は青磁碗である。この一群の陶磁器は大坂城跡の豊臣前期の資料として既に紹介されている[鋤柄俊夫・森毅1999]。

OS88－113次調査とOS92－20次調査の間に位置するOS91－82次調査では、豊臣前期の遺構面をごく一部でしか調査できなかった。そこには礎石と考えられる石を1基確認した(図36)。

b．豊臣後期の遺構と遺物

第3層上面の遺構が相当する。OS91－82次調査では、礎石と溝を検出した(図版4下)。

OS88－113次調査ではSB301、SA301・302、SD301・302、SK301などがある(図33、図版4上)。

SB301　東列および北列の礎石の一部が良好に遺存する礎石建物であるが、他は明らかでない。礎石と考えられる石が散乱する西側が建物内部と考えられる。方位はN8°Eである。

SA301・302　SA301は東端に、SA302は北西部に検出した南北柱列である。方位はSB301同様、N8°Eである。

SD301　SA301の西1mの位置にある南北溝である。SA301とともに屋敷境の可能性がある。これ

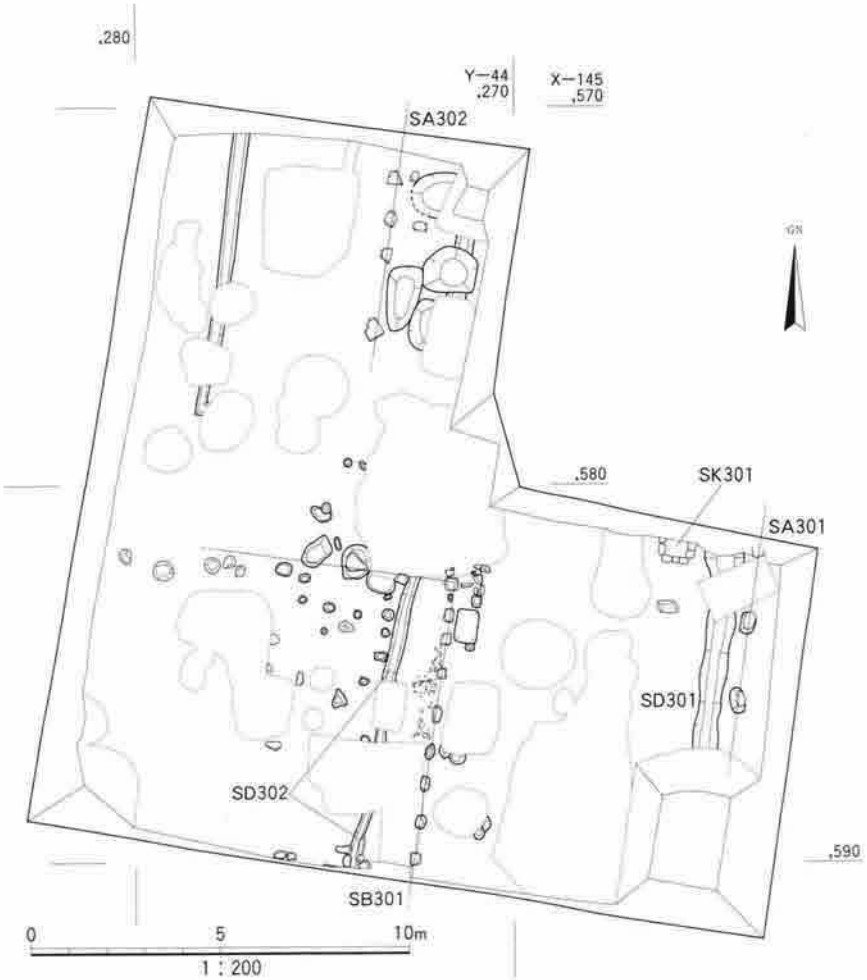


図33　OS88－113次第３層上面（豊臣期）遺構配置図

らの建物・柵・溝の方位はN8°Eで、現在の土佐堀通に直交する。

SD302　SB301の内部にあり、建物方位よりやや東に振る。SB301に先行する遺構で、溝の東側には直径２～３㎝程度の小穴が無数に認められた。

SK301　上部のみを石で囲ったものである。埋土は焼土であるが、石の下半には焼けた痕跡が認められないことから、被災時には土壙内に何らかの内容物があった可能性がある。土壙はほかにも数基あり、唐津焼が出土している。

豊臣後期の遺構面はOS88－113次調査でしか検出できず、東のOS91－82次調査地では徳川期の削平によって失われ、OS90－20次調査地では遺構面は重機によりすでに失われており、詳細は不明である。

ｃ．徳川期以降の遺構と遺物

第１層内の遺構が相当するが、OS88－113次調査では第３層上での検出となったため、ある程度深いものしか遺存していない。SK101、SX101、SD101・102のほか井戸を５基検出した（図34）。

SK101　内法が南北3.8m、東西1.8m、深さ1.6mにもなる石組の穴蔵である。0.2～0.3m大の川原石を積上げている。北側の東半分は床面から0.5mの高さまでで石積みが止まっており、穴蔵への進入口となっている。石積みには漆喰などによる目地を埋めた痕跡はなかった（図35）。

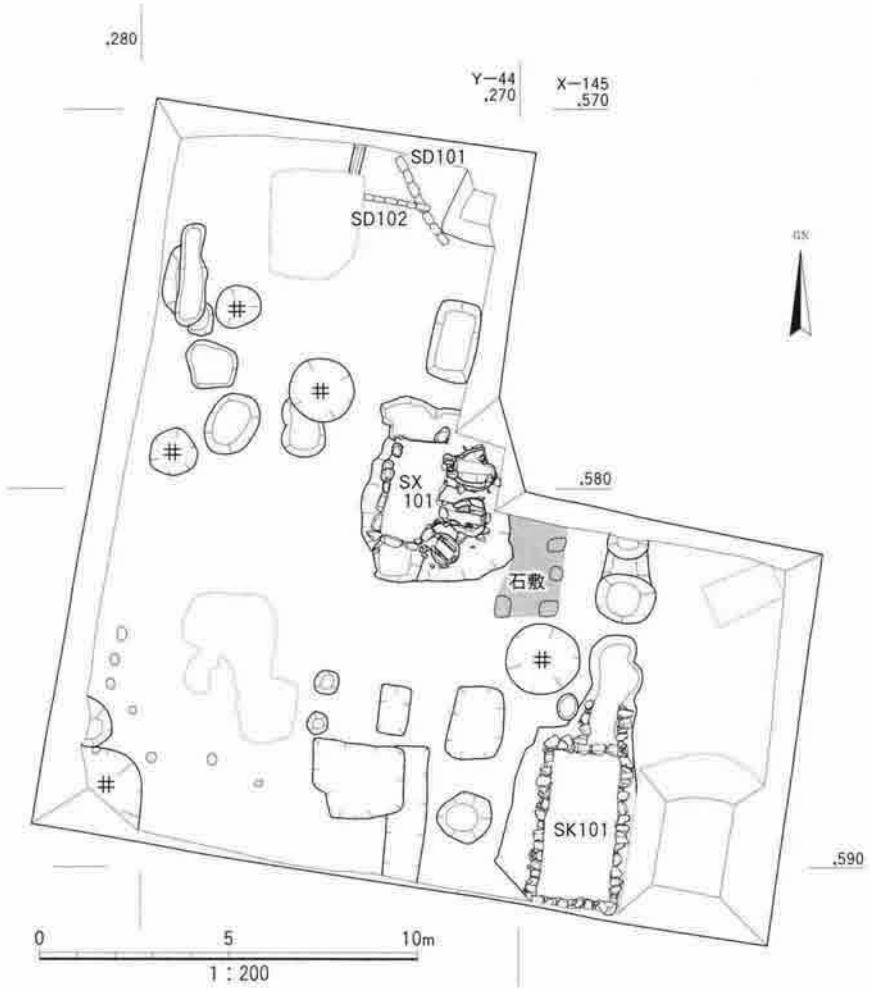


図34　OS88－113次第１層基底面(徳川期)遺構配置図

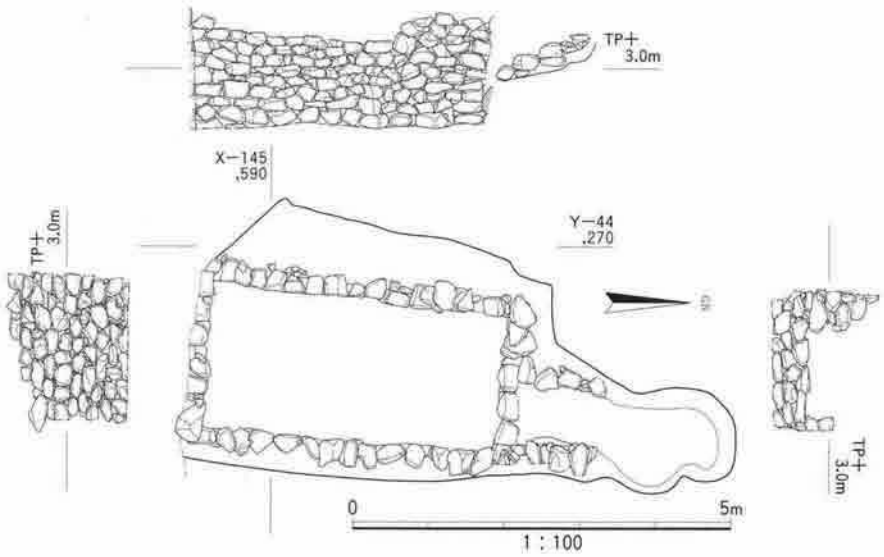


図35　OS88－113次SK101実測図

SX101　作業場と三連の焚口をもつ竈である。作業場は石で区画され、床面には灰や炭が堆積していた。焚口は作業場からみて南側のものが一段高く、いずれも石によって灰の掻出し用の溝が築かれている。内径は北側が1.1m、中央が1.0m、南側が0.8mである。

SD101・102　北部で検出した瓦組暗渠である。SD101が古く、SD102がSD101を壊している。SD101は瓦製の土管を使用しているが、SD102は丸瓦を組合わせている。

3)まとめ

i)大坂本願寺期以前

ここで報告した3個所は大川南岸の土佐堀通に面した調査地で、その南は3～5m程の高低差がある崖面となっている。崖の上面が上町台地の北端であり、調査地はそれに貼付くように形成された沖積地に立地する。いずれの調査地でも、豊臣期遺構面の下層では砂による整地層が南から北へと造成されており、豊臣期よりさかのぼる遺構や遺物は出土していない。調査地一帯には徳川期に「八軒屋」と呼ばれる船着きがあったことから、豊臣期やそれ以前にもこの付近に船着きが存在していたようにいわれているが、今回の調査ではそうした証拠は見出せなかった。同様の状況を示した調査地として、『大坂城跡Ⅵ』(第Ⅲ章第3節)で報告したOS89－80・92次調査地がある。そこでもさかのぼって本願寺期までの遺構しか見つかっていない。東のOS89－80・92次調査地辺りから西の本調査地付近までは、豊臣期に敷地が造成されるまでは大川の攻撃面となっていて、集落が立地できる所ではなかったと推定される。

ただ、OS88－113次調査地の南西50mにあるOS85－28次調査地には中世の地層や遺物があった。そこは標高もTP＋6mと高く、上町台地の西側斜面に当り、本節で報告した調査地とは立地の違いがある。南側の上町台地上や台地が低くなっていく西側斜面には、OS85－28次調査地で確認されるような中世や古代にさかのぼる遺構が存在しているようである。

大坂本願寺期までの集落は、西ではOS85－28次調査地付近から東横堀川を越えて北浜付近までの一帯、東ではOS83－15次調査地や『大坂城跡Ⅵ』(第Ⅲ章第1・2節)で報告したOS87－93・88－78次調査地付近からOS90－58・94－33次調査地付近に存在していたと考える。両者は上町台地によって限られる別の集落であろう。前者が天満天神社や東横堀川分流地点を核として形成された古代から中世の「窪津」・「渡辺津」と呼ばれる港湾集落であり、後者が本願寺寺内に属する「寺内之浦」ではないかと推定する。

ii)豊臣期

この地区の調査で特筆すべきは豊臣前期の遺構と遺物であろう。OS90－20次調査の礎石建物は規模が大きく、半地下式の穴蔵も築かれている。また、この調査地の礎石建物の間には敷地境と推定できる空間がある。これが敷地境となれば、現在とは異なった位置に豊臣前期の敷地境が存在することになる。ただ、敷地や建物の方位は現在と同じである。さらに大型の瓦はこれまで出土例が少なく、規模の大きな建物に葺かれていたと推定できる。また、瓦に施されていた刻印から、生産地や工人集団の特定などが可能であるが、今後の課題である。



図36　OS88−113・90−20・91−82次遺構配置図

OS88−113次調査のSK508で見つかった豊臣前期の陶磁器は瀬戸美濃焼が大半を占め、輸入陶磁器や軟質施釉陶器が含まれる。SK508は穴蔵とも考えられる落込みであり、この遺構が廃絶した際に、一括投棄されたものであろう。京街道と推定する土佐堀通や大川に面した立地であることを含め、豊臣前期に屋敷をもっていた住人の性格を考えるうえで興味深い資料である。

図36のように、土佐堀通の南側には現在と同じN8°Eの方位の地割があったことが確認できる。豊臣前期段階には土佐堀通に面した屋敷が建ち並んでいたことがわかる。ただ、これらの調査地の南には急峻な崖があり、敷地の南端はその崖の下端までしかなかったと推定できる。

iii)徳川期

徳川期の遺構ではOS88−113次調査地の竈SX101や石組穴蔵SK101がある。竈SX101は焚口が3連になるもので、『大坂城跡Ⅵ』(第Ⅳ章第2節)で報告したNW86−25次調査地の竈SX101とは、焚口の数が異なる。焚口が2口のものは他に中央区島之内1丁目の住友銅吹所跡[大阪市文化財協会1998]や本書第Ⅳ章第5節のOS91−64次調査でも検出しており、一般的な竈であろう。焚口が3口の竈は他に検出例がない。この形態の竈は作業室などが半地下式になる産業用の竈であり、それを使用する業種の屋敷がここに存在していたのであろう。

SK101は徳川期に多くなる穴蔵の一つの構造を示すもので、本例は玉石積みである。石の隙間に漆喰を塗込めて、水が浸入しない工夫をしている穴蔵もあり、様々な構造の穴蔵が造られている。ここでは漆喰は塗込めていない。石を使った穴蔵には切石を積むものが住友銅吹所跡で見つかっている[大阪市文化財協会1998]。

(松尾)

第４節　OS85－28次および87－78次調査

１）調査地と周辺の概要

本節で報告するOS85－28・87－78次調査地は、上町台地の西側斜面の裾部に立地している（図37）。第２節で報告した東側のOS89－76次調査地周辺では現地表面がTP+11m前後であるが、この付近はTP＋６ｍ前後と低く、比高が５ｍもある（図37）。

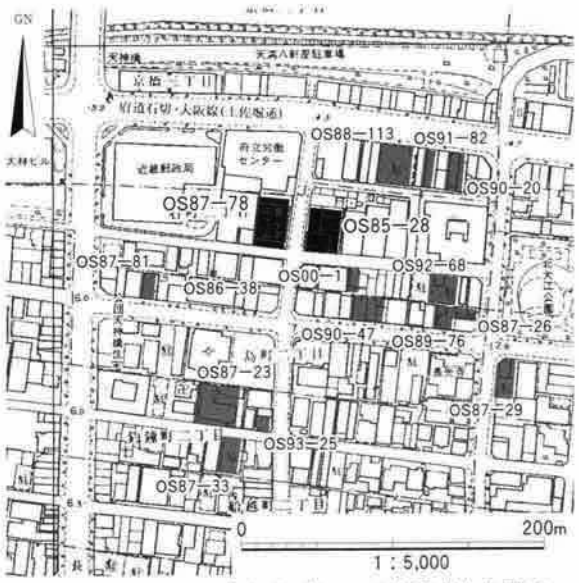


図37　OS85－28次および87－78次調査地位置図

この地区は惣構北西部に位置し、西には大規模な武家屋敷群が検出されたOS86－22・87－40・92－１次調査がある（本章第６節）。また、北東には本章第３節で報告したOS88－113次調査があり、豊臣前期を中心として多量の遺物と遺構が出土している。

OS85－28次調査は大坂城跡で惣構地域を対象とした最初の調査で、当初は暗中模索の状態であった。次第に、溝や礎石、焼け残った建物の壁や柱などが確認され、焼土層からは多量の陶磁器が出土して、豊臣期の町屋が姿を現してきた。それまでは大阪の都心部で近世の町屋が良好な状態で埋もれていることなど予想しておらず、大阪の近世遺跡に対する認識を大きく変えるものであった。

OS87－78次調査は、旧建物基礎による攪乱のある敷地北西部を除いた範囲を対象に行った。各時期の遺構の遺存状況は良好であり、なかでも大坂夏ノ陣によって焼亡した遺構群は、築地塀と門を伴う礎石建物群からなる武家屋敷として貴重な成果となった。このため1987年９月15日に現地説明会を開催し、多数の市民の参加を得た。なお、検出された築地塀は移築復元され、出土遺物の一部とともに現地にて公開されている。

２）調査の結果

ｉ）層序と出土遺物

OS85－28次とOS87－78次調査は南北道路を挟んで隣接するが、下部の中世以前の地層の層相が異なっている。これはOS85－28次調査地が上町台地の末端の洪積層の上に立地しているのに対し、OS87－78次調査地では洪積層が深くなっているため、それを覆う沖積層が厚くなっているものと考えられる。OS87－78次調査地の堆積状況を示す（図38）。

第０層　重機により除去した地層を一括する。

第１層　黄褐色シルト質砂礫～オリーブ黄色砂礫質シルトからなる整地層で、層厚は70cmある。1620

(元和６)年から1629(寛永６)年にかけて行われた徳川氏による大坂城再建時の整地層と考えられる。

第２層　第３層の焼土偽礫を多く含む整地層で、層厚は20～30cmある。大坂夏ノ陣直後の整地層に相当し、本層上面で礎石建物や耕作痕跡を確認した。OS87－78次調査で出土した陶磁器には唐津焼片口1・徳利2や軟質施釉陶器の水滴3、青花碗4・5のほか、土師器皿6・7、ミニチュアの羽釜8、焼塩壺10・11・同蓋9がある(図39)。焼塩壺は積山洋分類のＢ類である[積山1994]。金属器では釣針42～44、匙48、火箸49、煙管50～52が(図41)、木器には下駄57がある(図42)。

第３層　大坂夏ノ陣の焼土層で、層厚は20cm前後ある。OS87－78次調査地で出土した陶磁器は唐津焼14～17を主体とし、瀬戸美濃焼18・19が混る。焼塩壺12・13は第２層出土のものより体部が膨らんでいる(図39)。12には「志本徒□(しおつ□)」と墨書がある。また、SA401やSB401周辺から大量の瓦32～38が出土している(図40)。木器では下駄58・59がある(図42)。OS85－28次調査でも焼土層から瀬戸美濃焼99・100や備前焼擂鉢101、丹波焼大平鉢102のほか青花碗103、土師器皿104・105、釘106が出土した(図44)。このほか、門の扉を取付ける壺金具が出土している(図版48－５下)。大きさは長さ37cm、最大幅9.3cm、先端部の幅7.6cm、厚さ1.8cmで、直径6.7cmの軸受部には3.3cmの軸受の孔が貫通する。

第４層　層厚40cm前後の黄褐色砂礫質シルトおよび黄褐色砂礫からなる第4a層、層厚10cmの灰～暗黄褐色砂礫質シルトからなる第4b層、層厚50cm前後の黄色粘土偽礫を含む黄橙色砂礫～明黄褐色砂礫の第4c層に大別できる整地層である。惣構または三ノ丸築造の際の整地層と考えられる。OS85－28次調査地でも３層に分かれ、それぞれの上面に豊臣後期の遺構面が存在する。本層から出土した陶磁器には瀬戸美濃焼20・21(図39)、軒平瓦39・40、分銅45(図41)、下駄60(図42)がある。OS85－28次調査では瀬戸美濃焼107～110、備前焼111、土師器皿112、軒瓦113・114、釘115、小柄116～120、庖丁121・122、鋤先123、鉢124が出土した(図44)。軒丸瓦113は瓦当文様や瓦当裏面の調整から、平安時代にさかのぼると考えられ、この周辺に平安時代の寺院が存在していたことを推測させるものである。これと同系統の瓦が四天王寺にもあり、平安時代前期とされる[四天王寺文化財管理室1986(四天王寺古瓦聚成168)、宮本佐知子1999]。第４層出土の遺物には古代にさかのぼるものもあるが、瀬戸美濃焼が多く豊臣前期に近い組成である。ただし、下層の第５層から唐津焼が出土している。

第５層　有機物を多く含む黒～黒褐色砂礫質シルトで、層厚は30cmある。

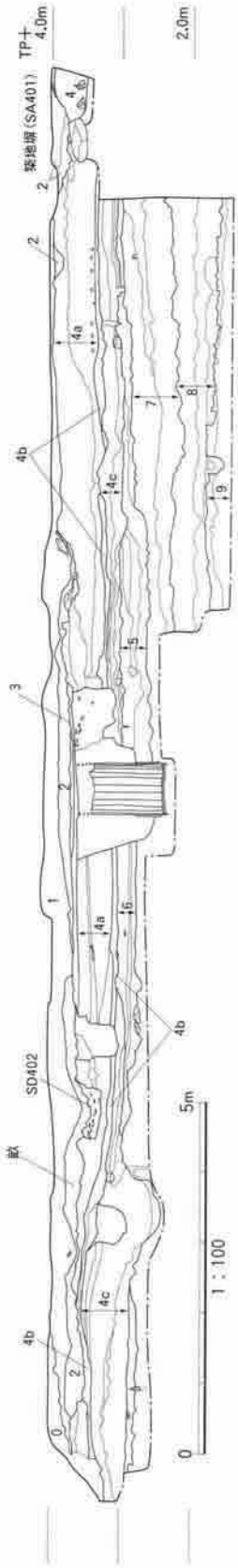


図38　OS87－78次東西壁断面図

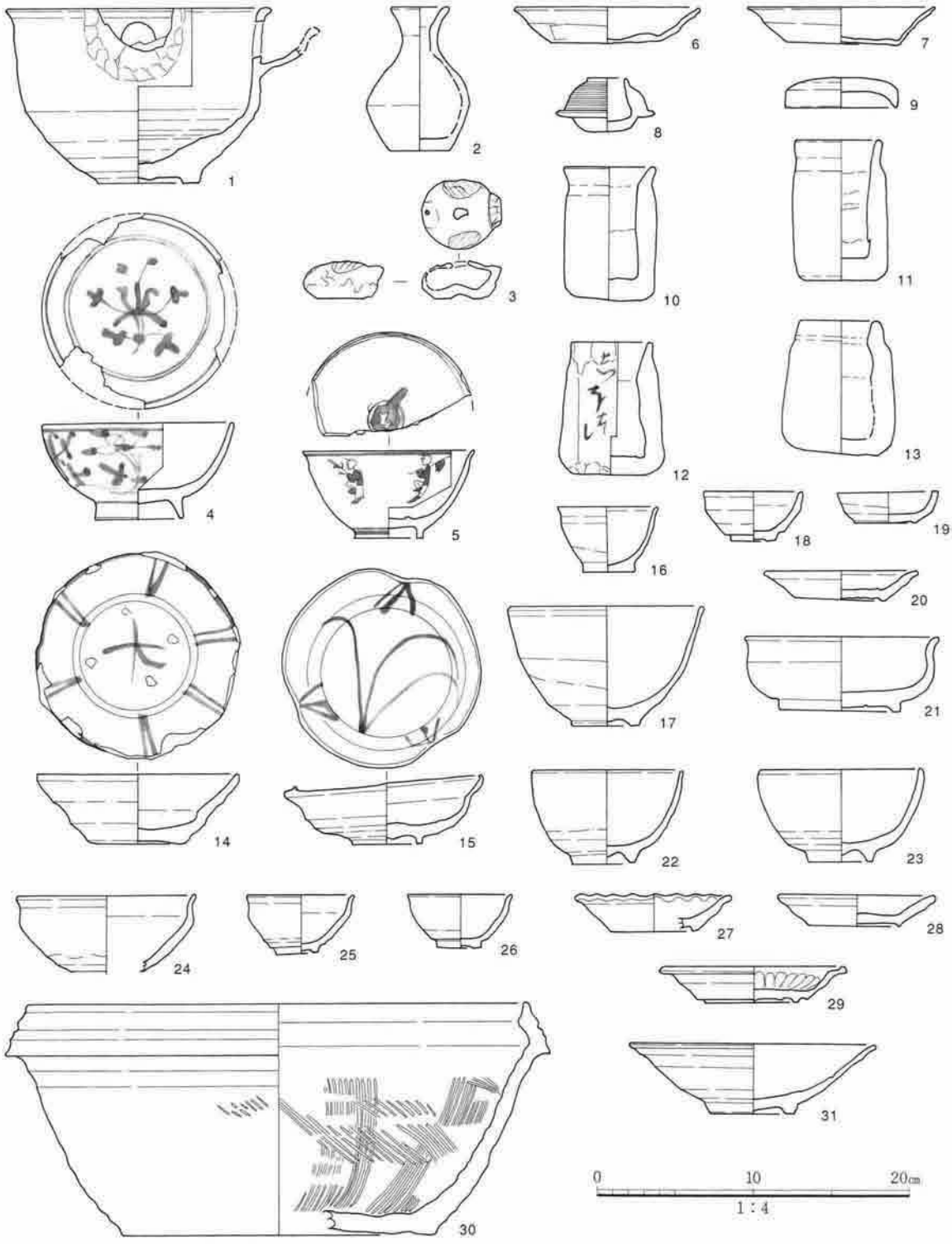


図39　OS87－78次各層出土遺物

第２層（１～11）、第３層（12～19）、第４層（20・21）、第５層（22～31）

室町時代から豊臣前期の陶磁器のほか多量の木製品が出土した。部分的にラミナが認められ、低湿な環境下にあったと推定できる。本層では陶磁器以外にも、金属器や木簡など多くの遺物が出土している。陶磁器には唐津焼22・23や瀬戸美濃焼24～29、備前焼擂鉢30のほか、李朝磁器31がある（図39）。金属器では小柄46・47のほか、刺股54、鎌55、鋤先56があり（図41）、木器では漆塗盆61、篦64、刀

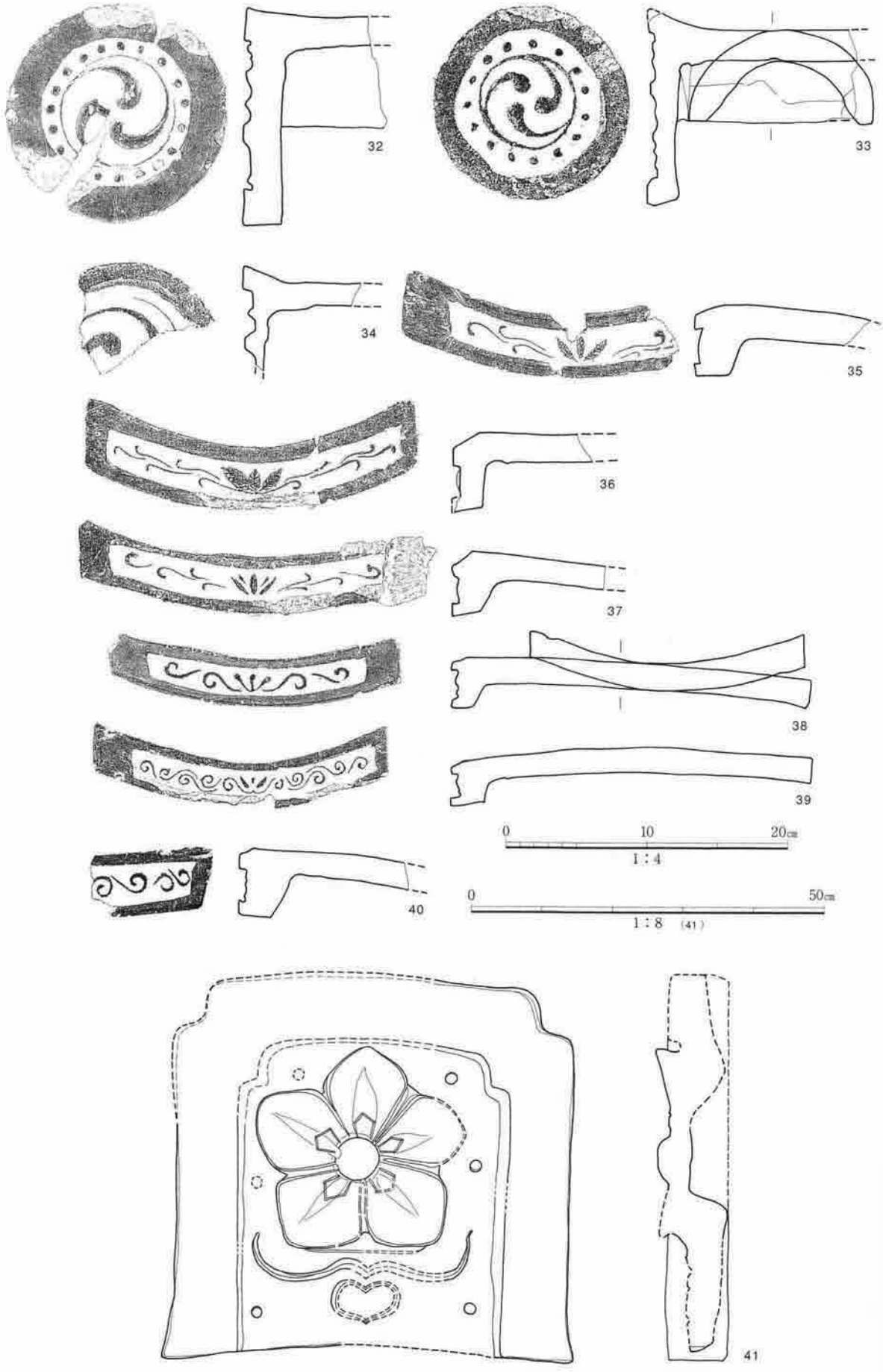


図40　OS87－78次各層出土瓦

第3層(32～38)、第4層(39・40)、SX201(41)

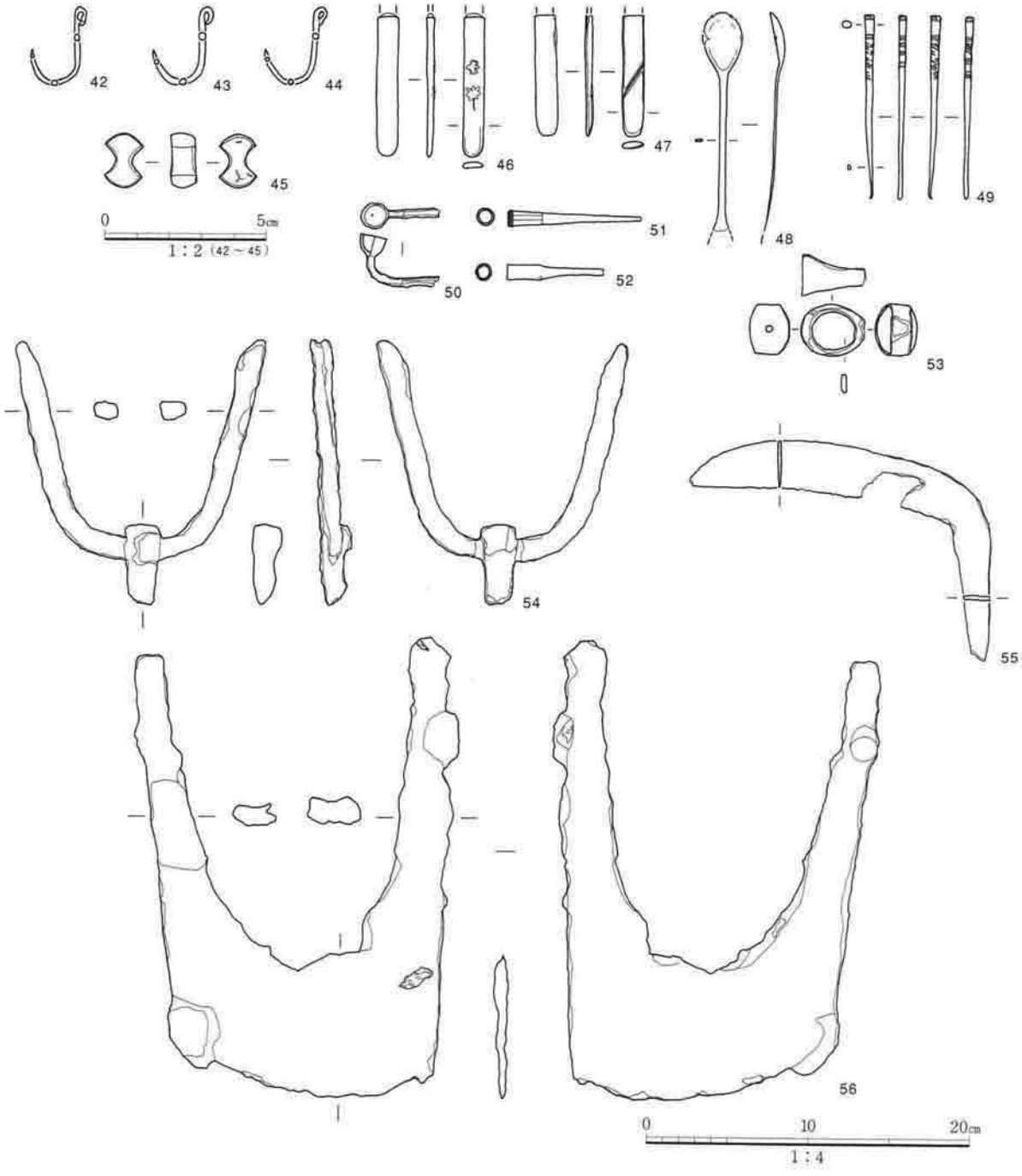


図41　OS87－78次各層出土金属器・骨角器

第２層（42～44・48～52）、第４層（45）、第５層（46・47・54～56）、SK601（53）

形65、錐66・67、鞘形木製品68がある（図42）。木簡は30点図示した（図43）。いずれにも魚名やその数量などを記しており（表７）、この一帯に魚市場が存在していた可能性がある。魚市場は豊臣後期になって東横堀川の西に広がる大坂城下町跡の中央区道修町１丁目付近に存在していたことが確認されているが、ここではそれよりややさかのぼる時期に魚市場が開設されていた可能性が高い。第５層には２点の唐津焼が含まれており、上層の整地が行われたのが豊臣後期初頭頃である可能性がある。

第６層　黄褐色シルト質細粒砂を主体とする整地層で、層厚は30～60cmある。本層以深は部分的な掘削のため、少量の土師器・瓦片が出土したものの時期は不明である。上面が豊臣前期の遺構面と

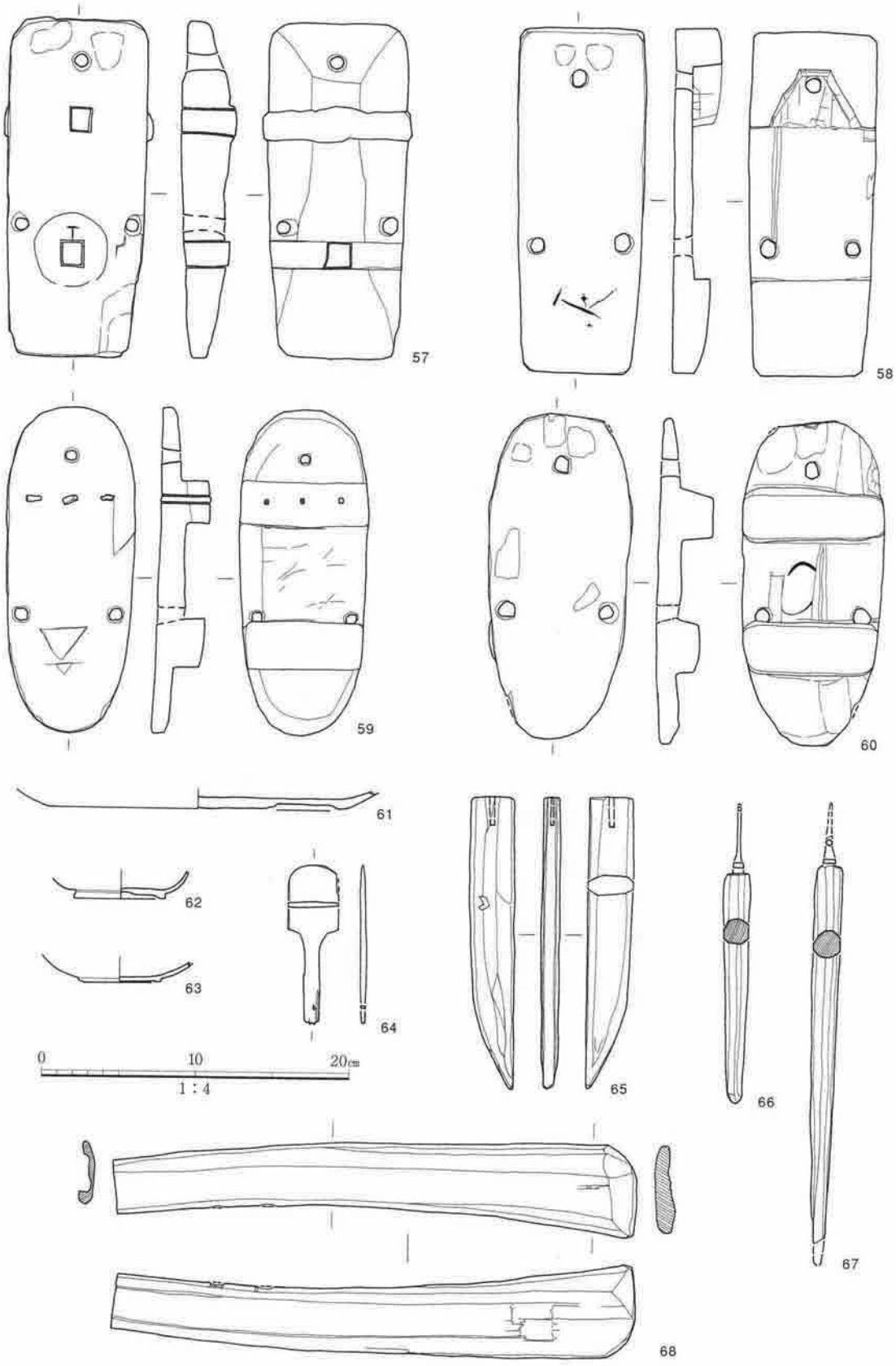


図42　OS87－78次各層出土木器

第2層(57・63)、第3層(58・59)、第4層(60)、第5層(61・64～68)、不明(62)

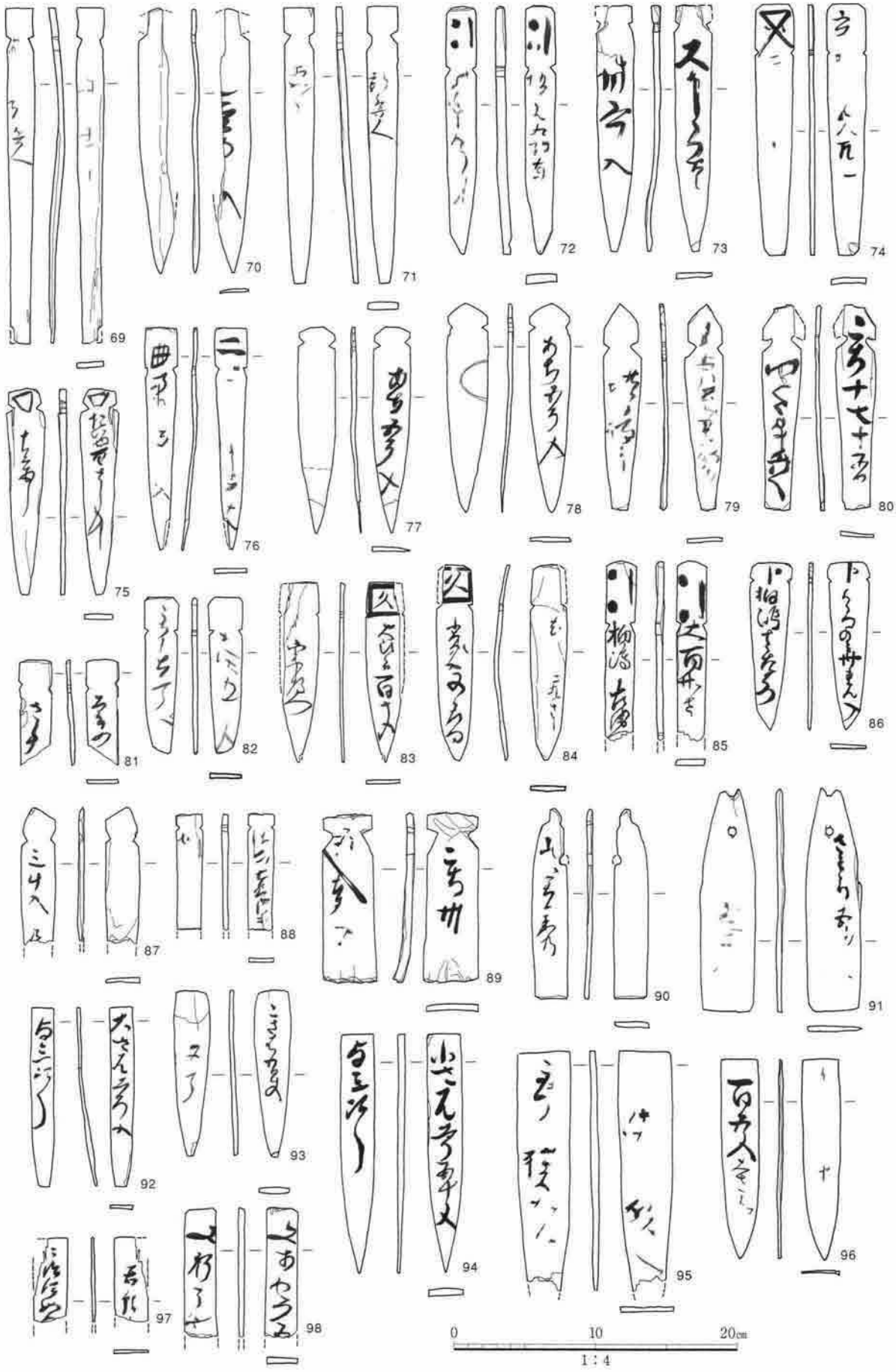


図43　OS87－78次第５層出土木簡

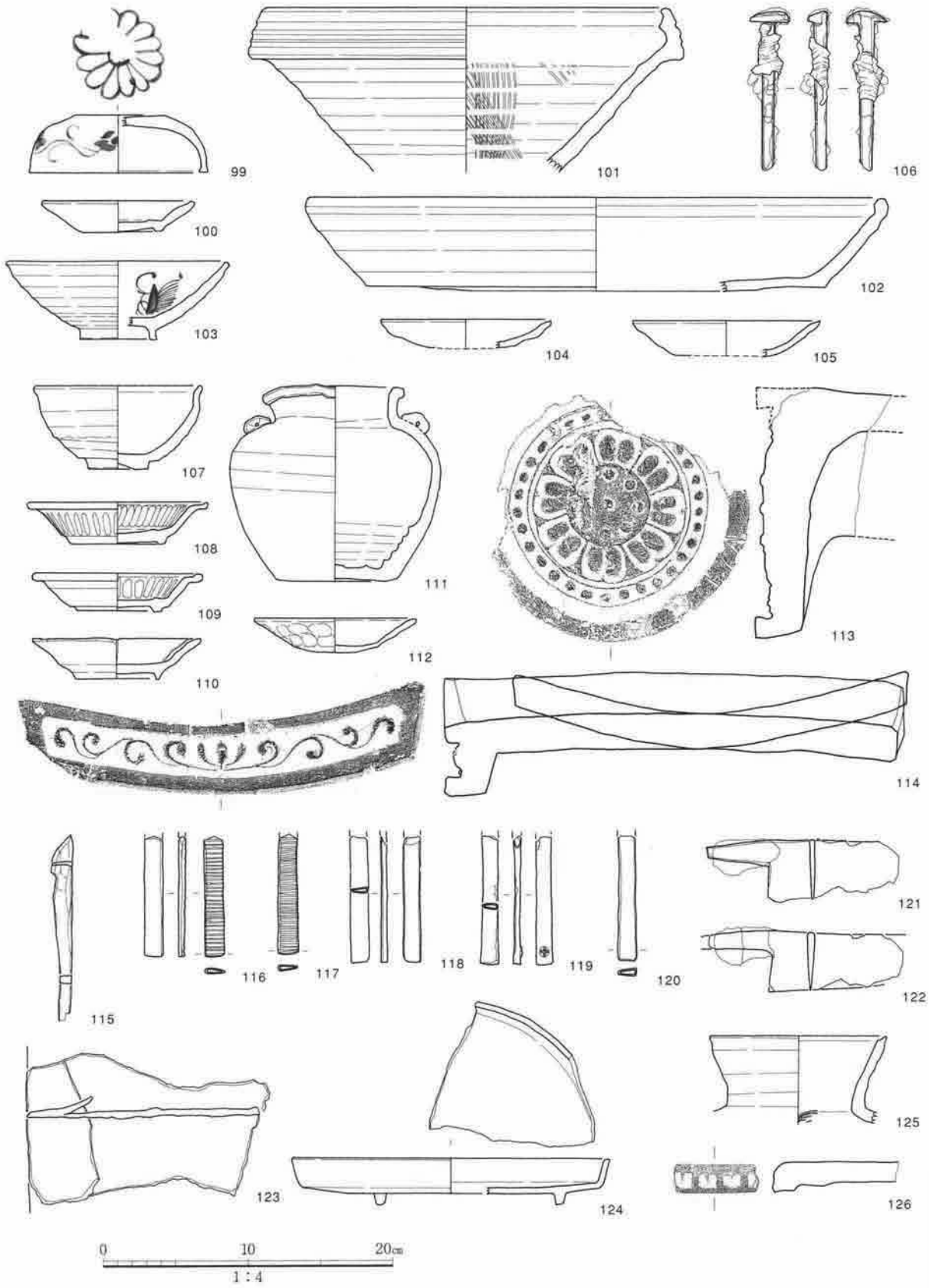


図44　OS85－28次各層出土遺物

第3層(99～106)、第4層(107～124)、第7層(125・126)

表7　OS87－78次第5層およびSK601出土木簡一覧表

層名・遺構名	遺物番号	左　面	右　面
第5層	69	「＜□兵衛」	「＜　」
	70		「＜　」
	71	「＜　」	「＜　□兵衛」
	72	「＜　」	「＜　」
	73	「＜卅六入」	「＜大かしら　」
	74	「＜　」	「＜　」
	75	「＜口□二五郎」	「＜口たい四百さし入」
	76	「＜　百入」	「＜二　」
	77		「＜あち五百入」
	78		「＜あち五百入」
	79	「＜　」	「＜　」
	80	「＜　兵衛」	「＜こち十七十　内」
	81	「＜さ□」	「＜こなめ」
	82	「＜こち十七一郎右衛門」	「＜　□　」
	83	「＜　左衛門」	「　大ひらめ百十入」
	84	「＜　又左衛門尉」	「＜　九さし」
	85	「＜　柏嶋左衛門×」	「＜　大百廾さし×」
	86	「＜　柏嶋真左衛門」	「＜　のみ卅れん入」
	87	「＜三十入　×」	
	88	「＜　×」	「＜　×」
	89	「＜　」	「＜こち卅」
	90	「　秀」	
	91	「　」	「　さわら五　」
	92	「与三郎」	「大さは二百入」
	93	「又一郎」	「こさは五十入」
	94	「与三郎」	「小さは二百五十入」
	95	「こち　」	「　兵衛」
	96	「百五入大さは」	「　」
	97	「　×」	「　×」
	98	「新　×」	「あわ百五×」
SK601	127	「＜七十九入　」	「＜六郎左衛　」
	128	「＜千入　物」	「＜　」
	129	「×物」	「×　四十五れん入」
	130	「＜新」	「＜大さは七十入」
	131	「＜　」	「＜又四郎」

なる。

第7層　シルトや粘土の偽礫による整地層で、OS85－28次調査ではこの層の上面で堀SM701を検出した。図44に示した須恵器壺125や剣頭紋軒平瓦126など、室町時代以前の遺物を含む。剣頭紋軒平瓦は神社で使用されることが多く、北隣の坐摩神社の存在を示す資料の可能性があるが、神社を想定できる遺構が判明しておらず、鎮座していた場所は不明である。

第8層　上部はオリーブ灰色粘土偽礫を含む暗オリーブ灰色細粒砂からなる水成層で、層厚は40cmある。下部は暗緑灰色細粒砂質粘土からなる水成層で、層厚は10～20cmある。古墳時代後期の土師器や須恵器片が出土した。OS85－28次調査地では本層に比定できる地層は検出していない。

第9層　黒色シルト質細粒砂～細粒砂質シルトからなる水成層で、上部はシルト、下部は砂礫へと漸移する。層厚は60cm以上ある。上面には葦と考えられる植物遺体が多量に認められた。

第10層　OS85－28次調査地の南東部で検出した。上部が黄灰色～緑灰色粘土で、下部は黄灰色粗粒砂、さらに下部では青灰色砂礫であった。洪積層の地山であろう。西側のOS87－78次調査地では検出できなかった。

ii)遺構と遺物

a．大坂本願寺期ならびにそれ以前の遺構と遺物

OS85－28次調査地の狭いトレンチで検出した遺構で、地山上面では西に低くなる落込み、第7層上面では南北方向のSM701があった(図45、図版6中)。

SX1001　地山を掘込む落込みで、西側に低くなる。全体の規模や形状は不明であるが、東側の上端は北で東に振っている。肩部は緩やかな傾斜であるが、底近くではほぼ垂直になり、底面は平坦に

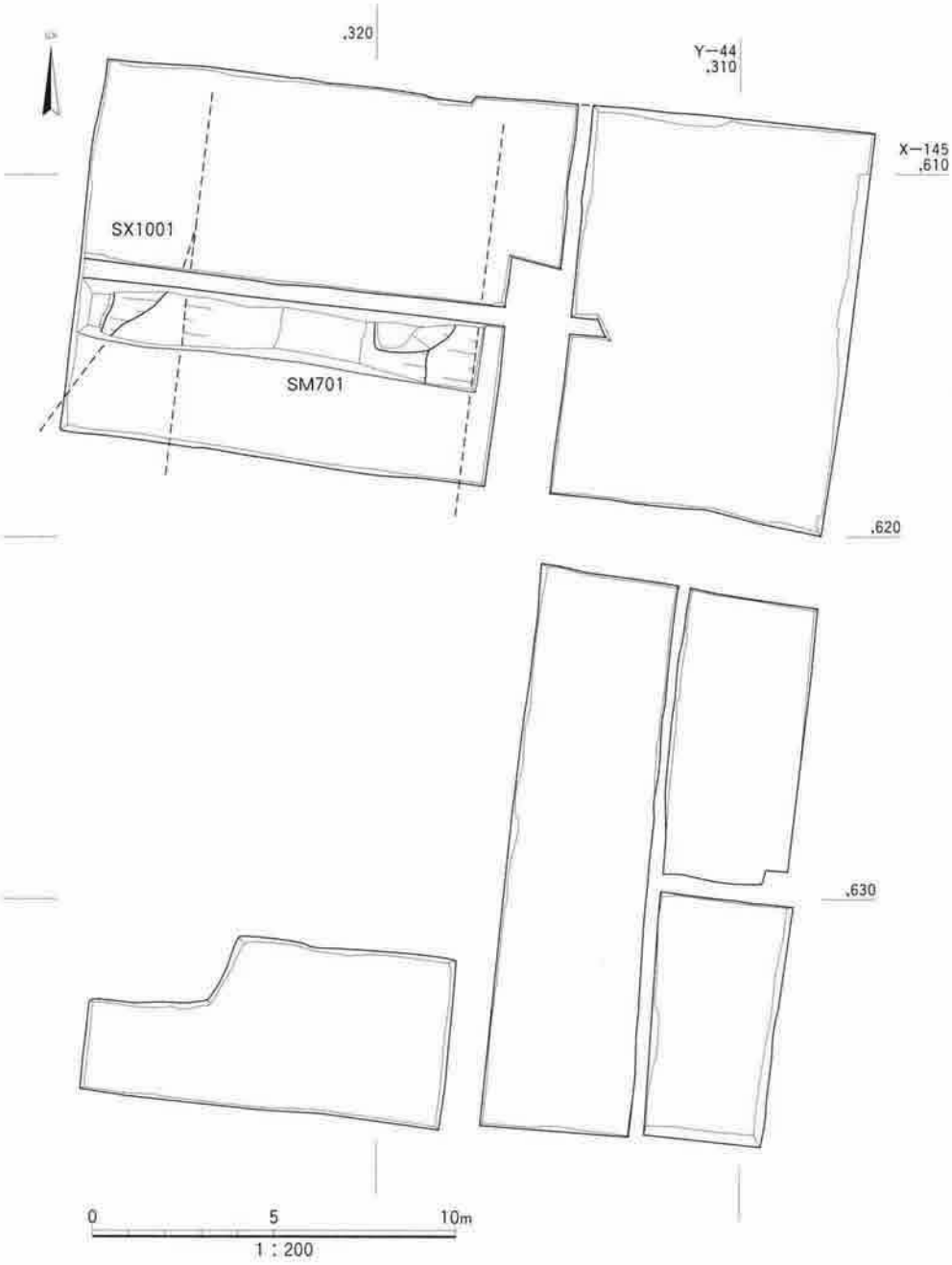


図45　OS85－28次第７層上面遺構配置図

なっている。断面の形状から、人為的な落込みと推定した。埋土の最下層からは奈良時代の遺物が出土した。

SM701　敷地の西部で検出した堀状遺構である。幅８ｍ、深さ２ｍで、断面形が逆台形を呈している。埋土の最下層にはラミナが観察できる細粒砂が堆積しており、水が流れていたと考えられる。それより上位は人為的な埋戻し土である。最初に西から埋め、その後は全体にならしている。形状から区画あるいは防御用の堀と推定する。狭い調査範囲であったが、堀の両肩の方位はＮ7°Ｅであり、現在の敷地の方向に近似している。

ｂ．豊臣前期の遺構と遺物

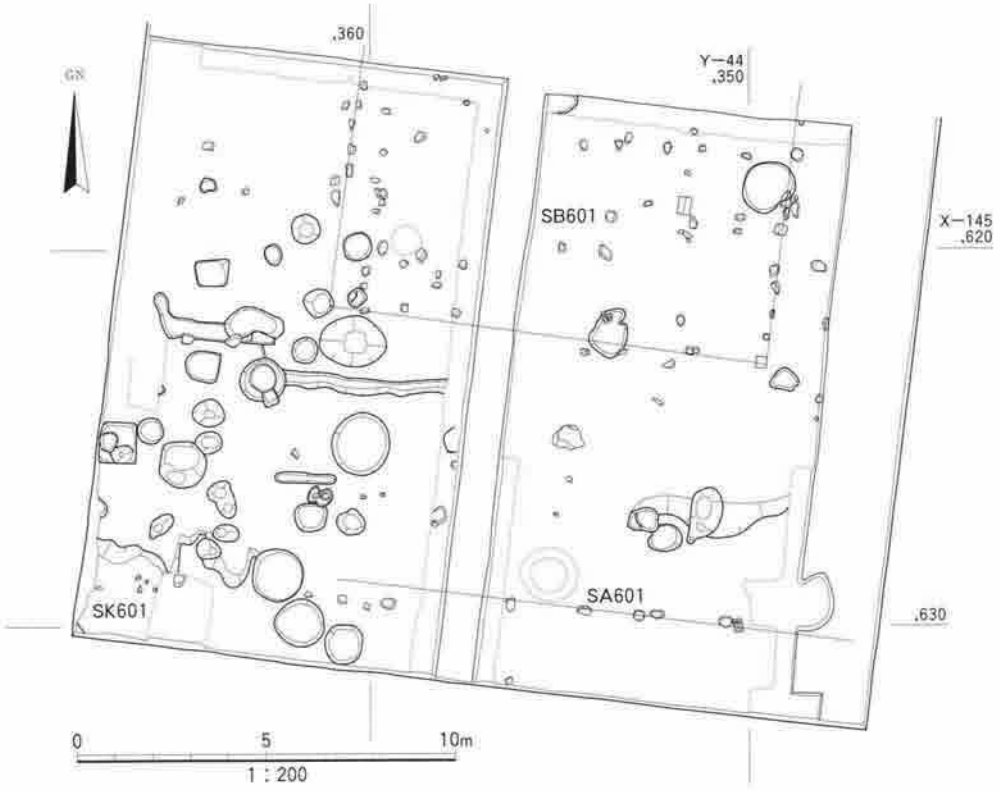


図46　OS87−78次第６層上面遺構配置図

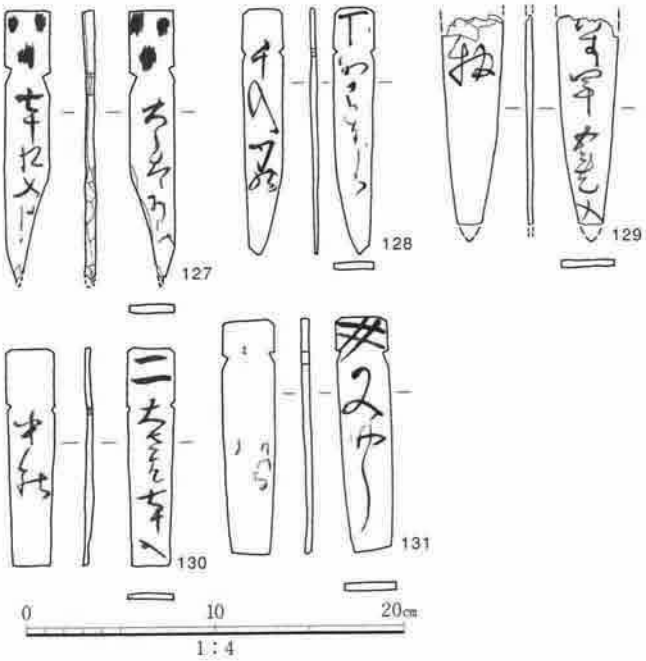


図47　OS87−78次SK601出土木簡

OS87−78次調査地の第６層上面遺構が相当し、礎石建物・溝・土壙を検出した(図46、図版８上・中)。

SB601　礎石が抜取られているところもあって、正確な規模・形状は不明であるが、東西11.7m以上、南北6.3m以上と考えられる。西側にも礎石状の石が点在しており、さらに西に延びるかもしれない。方位はN7°Eである。

SA601　SB601の南にも礎石が東西に並んでいる。塀と考えたが、建物になる可能性もある。方位はE7°Sである。

SK601　OS87−78次調査地の南西角で検出した土壙群の一つである。深さ0.6mあり、陶磁器片・加工木片とともに魚名の書かれた木簡が出土した(図47)。この付近には土壙が集中しており、東側に存在した建物の奥に作られていたゴミ穴と考えられる。

SB601の内外および遺構面を覆う第５層からは、多量の陶磁器・木製品とともに魚名の書かれた木簡、銅銭、鉄製品が出土している。

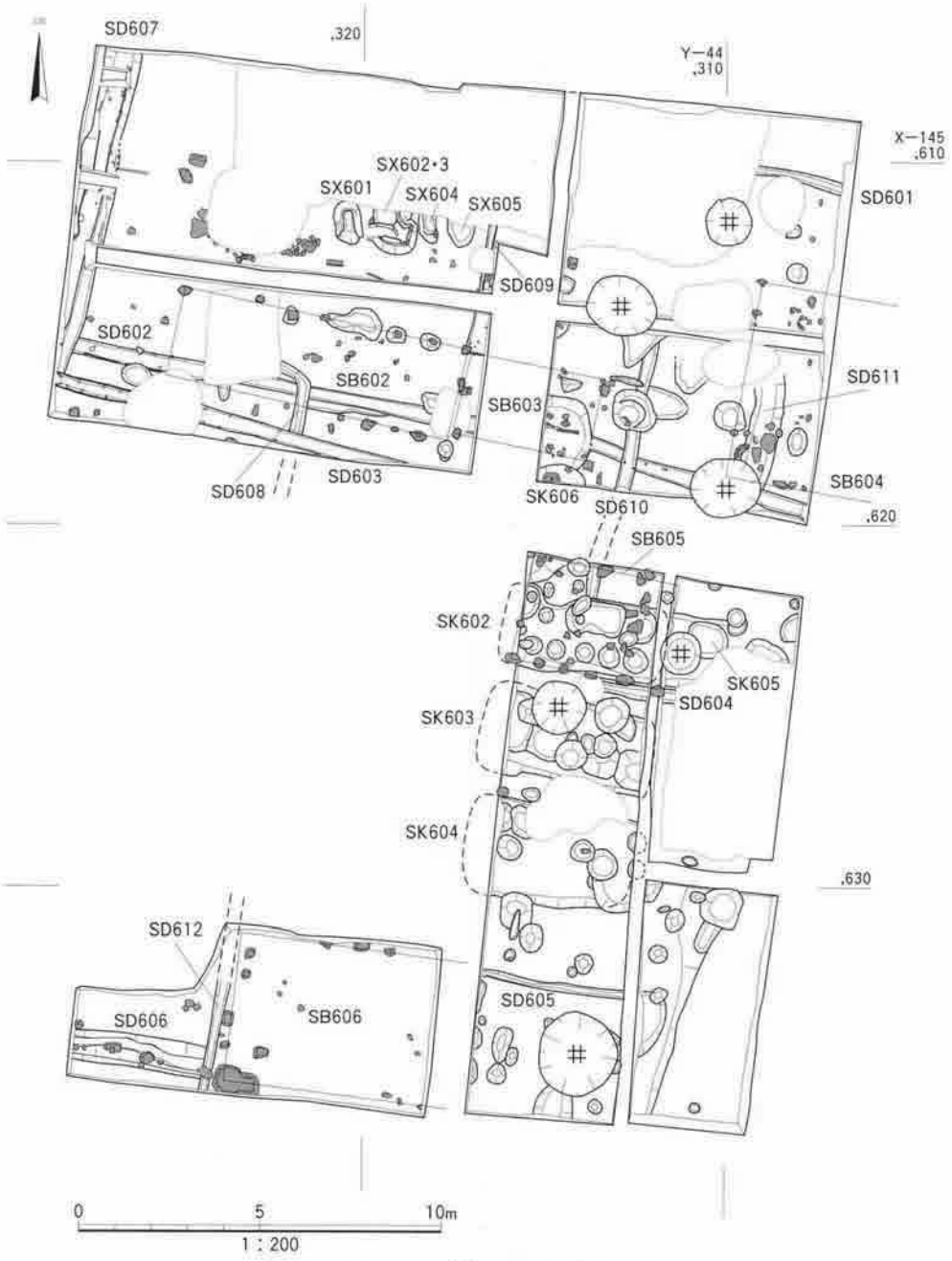


図48　OS85−28次第６層上面遺構配置図

第６層は厚い整地層で、整地が惣構造成に係わるものであれば豊臣前期の最末期となり、三ノ丸築造時のものであるとすれば豊臣後期の早い段階の遺構となる。

OS85−28次調査地では礎石建物・蔵・埋甕遺構(蔵？)・溝・土壙などが密集して検出された(図48、図版６下・７上)。

SB602　敷地北部に検出した東西方向の礎石建物で、東西８m、南北2.6mと細長い。建物内にも礎石状の石が点在しており、床束の礎石の可能性がある。棟の方位はE12°Sである。

SB603　SB602の東に接して検出した東西方向の礎石建物である。SB602とは礎石が接している状態であるが、北側の柱筋が揃っており、同時に存在していたと考えられる。東西3.7m、南北2.4mである。棟の方位はE12°SとSB602と同じである。

SB604　SB603の東に復元した礎石建物である。敷地の東端に礎石状の石が点在しており、建物と考えた。東西２ｍ以上、南北5.5ｍとなる。棟の方向は定かではないが、SB602・603とかわらない。

SB605　SB603の南で検出した東西方向の礎石建物で、東西４ｍ以上、南北３ｍである。建物内にも礎石状の石が点在しており、床束の礎石と考えた。棟の方位はE12°SとSB602と同じである。

SB606　調査地の南端に復元した東西方向の礎石建物で、西側と北側には礎石状の石が並んでおり、これらを側柱として復元した。南西隅には大きな礎石が置かれており、この位置を南端と推定すると、東西5.5ｍ以上、南北４ｍ程になる。南西隅の礎石は、直径66㎝の柱座と長さ35㎝の地覆座が高さ７㎝ほど造出されている。形態から奈良時代前後の建物の礎石と考えられ、周辺に存在していた古代にさかのぼる寺院の礎石を転用したものと考える。棟の方位はE10°Sである。

SK602～604　SK602はSB605の下層で検出した土壙である。この南にも同規模、同形態の遺構が２基検出された。東西が４ｍ以上、南北２ｍ以上の浅い窪みの中に、円形の落込みが東西に５基以上２列に並んでいた。落込みは２列が１単位で、底には甕の底部の痕跡が見つかり、大きな甕が埋められていたと推定した。これらの周囲には礎石状の石は検出できなかったが、本来は建物内の埋甕遺構と推定できる。建物の規模は５基２列の単位毎に建物があったのか、５基２列の３単位全体を覆うものかどうかは不明である。方位は他の遺構群と同じくE12°Sである。

SK605　SK602の東に隣接している。瀬戸美濃焼天目碗141や、備前焼の甕や擂鉢142・143のほか、硯144・小柄146などが出土している(図53)。

SK606　SB603の南に隣接している。漆椀や下駄139・140などの木製品が出土している。

SD601～606　東西方向の溝群で、北端のSD601から南に約8.5ｍの位置にSD602があり、それより南１～1.5ｍの位置にSD603がある。SD602とSD603には土留めの矢板や矢板を止めた杭が残っていた。SD602の方位はE10°S、SD603のそれはE14°Sである。

SD604はSB605の南にある東西方向の溝で、SD602から南６ｍの位置にある。方位はE12°Sである。SD605はSD604の南8.3ｍの位置にある東西方向の溝で、方位はE10°Sである。SD606はSD605の南3.5ｍにある東西方向の溝で、方位はE11°Sである。土留め矢板や杭が残っていた。いずれも敷地を南北に分ける区画境の溝であろう。SD606からは羽釜132や漆椀133が出土した(図53)。

SD607～612　南北方向の溝群で、西端には矢板を伴うSD607がある。方位はN13°Eである。それより東７ｍの位置に北端が西に曲っているSD608がある。この南延長部にSD612があり、同じ溝の可能性がある。方位はN8°Eである。SD612は東西溝SD606を切っている。SD609はSB602の北にある南北溝で、杭が残っており、矢板を伴っていた可能性がある。SB602の北で東に折れ曲がるようで、南北軸の方位はN10°Eである。SD610はSB603の東にある南北溝である。SD602を切り、SK602に切られる。方位はN13°Eである。備前焼甕134や瀬戸美濃焼皿135・136のほか、木製品138が出土した(図53)。SD611は敷地東端にある南北溝で、矢板を伴っている。方位はN10°Eである。

SX601～605　SB602の北側にある竈群である。東西方向に並んでいるが、２基が切合っている。いずれも北端を上層のSW401によって切られている。その位置関係から、SB602に伴うものと考える。西端のSX601は良好に残り、長軸1.2ｍ、短軸0.6ｍ、深さ0.22ｍである。焚口はSB602のある南

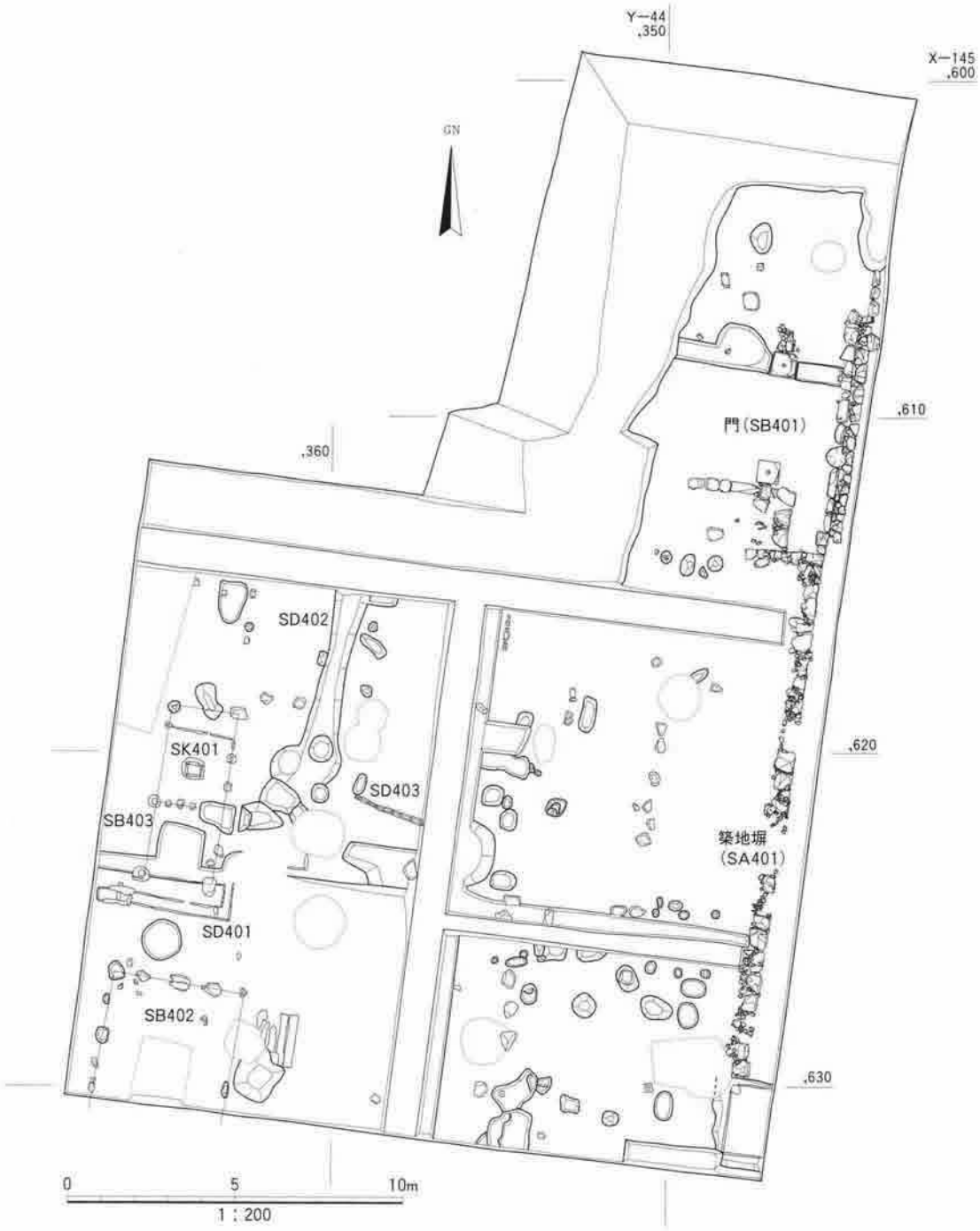


図49　OS87−78次第４層上面遺構配置図

方向を向いている。壁をスサ入りの粘土によって構築している。その東側のSX602は西に焚口をもつ竈が、南に焚口をもつ竈に造替えられている。

c．豊臣後期の遺構と遺物

OS87−78次調査地の第4a層上面遺構が相当する。大坂夏ノ陣によって被災する。後述するように本層の遺構群は武家屋敷の可能性が高い(図49、図版８中・下、９)。

調査地東壁に沿って築地塀SA401と門SB401を検出し、ここが屋敷の東端に当る。内部にはSB402・403・SD401・402がある。

SA401　南北23mにわたって検出した築地塀である。すべて基底石しか残っていなかった。小口面を横にする。石材の9割は六甲山系の自然石で、内1点には「○」および「十二之内」の墨書が認められる。周辺から壁土とともに多量の瓦類が出土したことから瓦葺きと考えられる。方位はN10°Eである。

SB401　徳川期の整地事業およびSE201により一部破壊されているものの、ほぼ旧状を残す門である。主柱間は3.3mある。北側礎石は平安時代の傘塔の礎石、南側礎石は室町時代の灯籠の台石がそれぞれ転用されている。門の両側には脇門があり、木戸門あるいは棟門に類似する。門前には2段の石段がある。上の石段は築地塀の石垣に面を揃えるが、小口面を縦にしており、積み方が異なっている。方位はN10°Eである。

SB402　南西部で検出した礎石建物で、調査区外に延びるため規模は不明であるが、桁行4間(3.7m)以上、梁行4間(4m)ある。建物周辺からは焼け壁のほか瓦類が出土し、瓦葺きであったと推測できる。また、建物の東には板を心材とした長さ1.6m、幅約0.2mの壁が炭化して検出され、火災によって倒壊した状況を呈していた。

SB403　SB402の北に位置する礎石建物で、東桁柱は礎石、西桁柱は掘立柱という特殊な構造である。桁行5.1m、梁行2.1mの南北方向の建物で、外周には腰板が巡らされている。建物内には間仕切りと考えられる小礎石が配され、内部を大きく2分している。また、北部の区画北端付近にも東西方向に炭化材が認められ、北部の区画がさらに細分されていた可能性がある。床面には藁と考えられる炭化物が厚さ5cmで認められたが、敷物か屋根に用いたものかは明らかでない。

SK401　SB403北部の区画中央の平面方形を呈する土壙である。幅0.1mの4枚の板で蓋をした35cm×50cmの底のない箱状の木組みが埋められていた。また、屋内からは鉄釜および青銅製の鉄瓶把手が出土している。

SD401　SB403南東角から南端に沿う東西方向の木組溝である。深さ15cm程度で、建物南西端の位置で枡状になる。蓋材の可能性がある板が落込んだ部分もあり、暗渠であった可能性が高い。建物に係わる排水施設と考えられよう。

こうした構造や出土遺物からSB403は茶室であった可能性がある。

調査地南東部でも礎石の抜取穴と考えられる小穴が、中央東側で礎石列が検出されていることから、礎石建物はほかにも存在していたと推定できる。SD403は瓦を用いた暗渠である。

OS85－28次調査地でも火災に遭った建物がある。

SB404　敷地の北端に検出した東西方向の礎石建物である。この敷地が南東から北西方向に低くなる地形であるため、建物の南側と東側には石垣SW401・402を、西側にも石列SW403を築いて区画としている。北側は調査地外になるため、規模や周囲の形態は不明である(図版7中・下)。

東西12間、南北3間以上で、規模は東西10.2m、南北2.5m以上となる(図50・51)。SB404は、外壁の柱筋の位置に幅0.8～1.2mの溝を巡らし、そこに0.9m間隔で礎石を並べる。その後、礎石上に0.15～0.2mの柱を建て、溝を埋戻し整地を行った後、壁を作る。壁の構造は「中塗仕上げ」と呼ばれるもので、柱の外側に木舞を組み、0.1～0.16mの荒壁を貼り、その上から厚さ0.01mの中塗りを内外に施している。壁が地面に接する部分には外側に板を立てていたと推測され、固定のために釘が壁

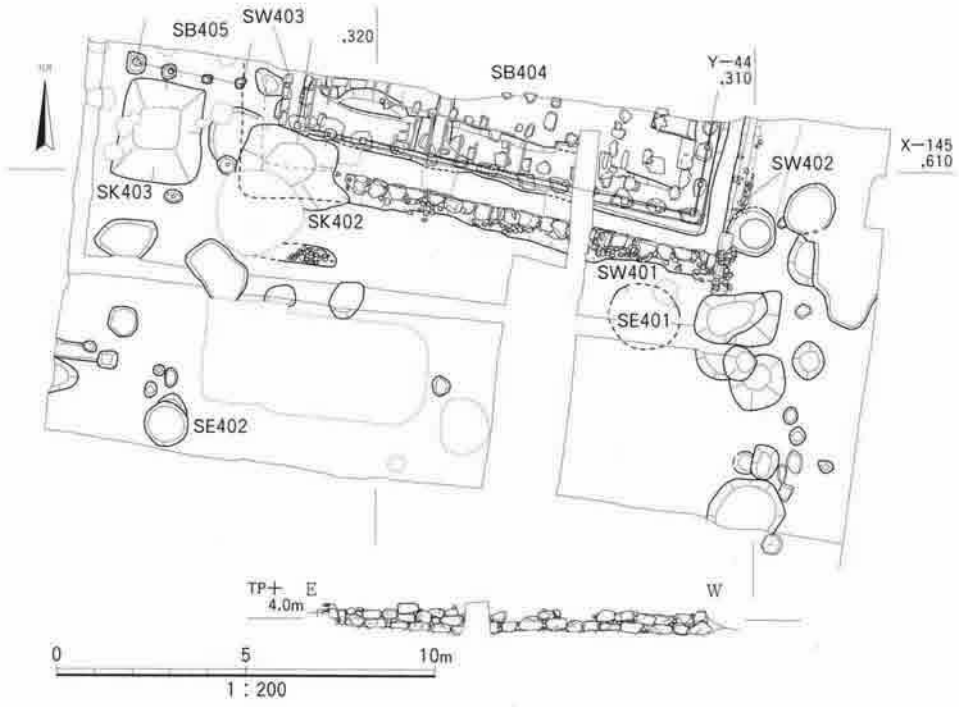


図50　OS85－28次第4層上面遺構配置図

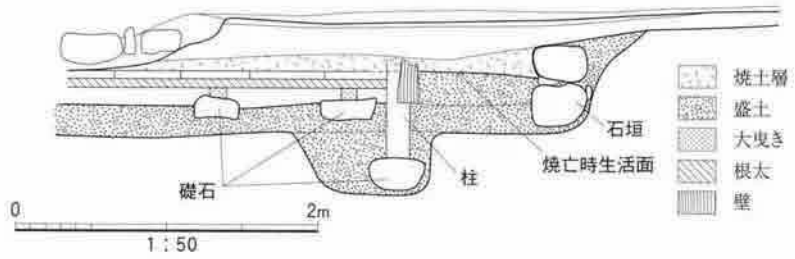


図51　OS85－28次SB404断面概略図

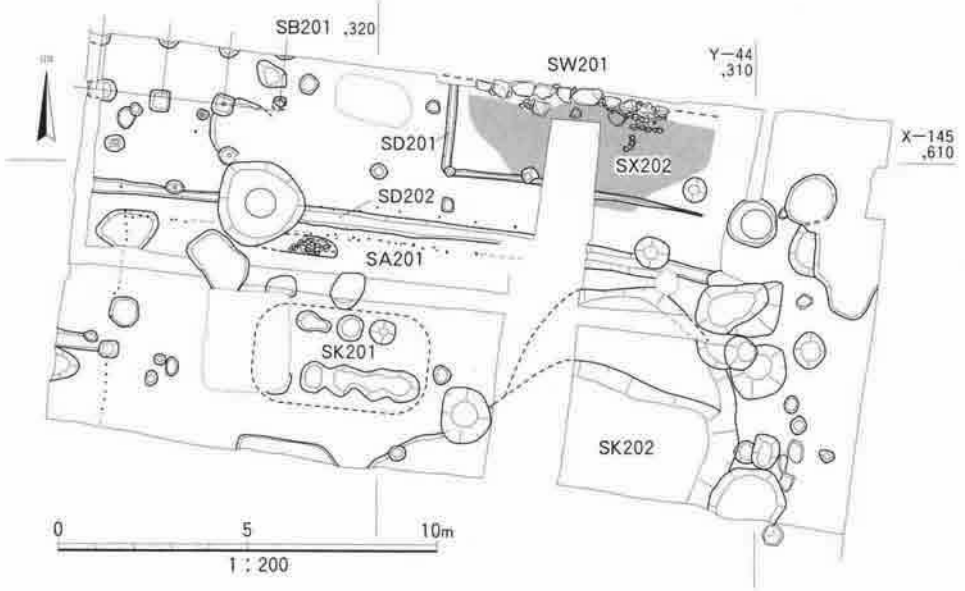


図52　OS85－28次第2層上面遺構配置図

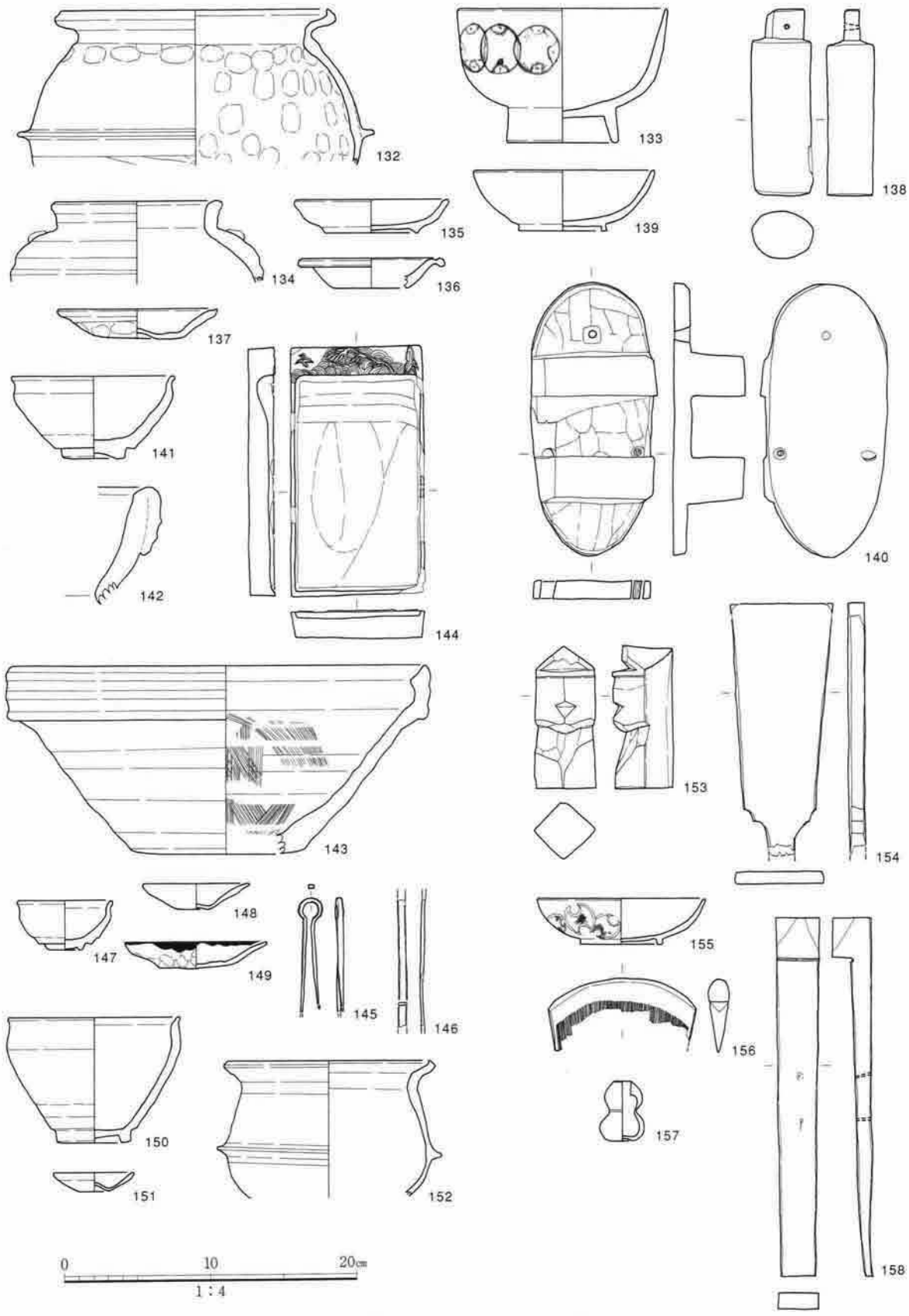


図53　OS85－28次各遺構出土遺物

SD606(132・133)、SD610(134～138)、SK606(139・140)、SK605(141～146)、SB404下層(147)、SK402(148・149)、SK403(153～158)、SK202(150～152)

に打込まれていた。建物内の構造は東西方向に筋が通るように、0.4～0.5m間隔の礎石列を南北に平行に並べる。この上に東西方向の大曳きを通し、上に南北方向に根太を渡し、幅広の板を敷いている。こうした構造から、このSB404は蔵と考えられる。南側礎石列の方位はE12°Sである。構築時の整地層から瀬戸美濃焼小天目147が出土した(図53)。SB404の周囲には石垣や石列があり、それらを先に記述する。

SW401　SB404の南側0.5mの位置にある石垣である。北側に面を揃え、2段残っていた。建物と同じ方位で築かれており、建物を建てる場所を低い北西部と同じ高さになるよう雛壇状に削平した後、築かれた石垣であろう。

SW402　SB404の東側0.5mの位置に存在した南北方向の石垣である。石垣の基底部の痕跡である溝状の窪みと、その中に栗石が散在していたので、ここにもSW401と同様の石垣が築かれていたと想定できる。

SW403　SB404の西側0.5mの位置に築かれた南北方向の石列である。石列の面は西側を向いており、西側の低い部分と東側のSB404の場所を雛壇状に区画するものであろう。

SB405　SB404の西に検出された礎石建物である。SW403から約1m西側にある。南側礎石列の方位はE12°Sである。

SK402・403　敷地北西隅に検出した土壙である。SK402はSW401とSW403を切っている。SK403は北辺がSB405と同じ方位になる。人形153・羽子板154・漆椀155・櫛156・小型の瓢箪形木製品157などの木製品が出土した(図53)。

SB405やSK402～404はSB404より上位面で検出されており、豊臣期でも新しい遺構群である。

これら以外にも、多くの土壙やピットを検出した。

d．徳川期の遺構と遺物

第2層上面検出遺構が相当する。礎石建物・井戸4基・集水枡1基・土壙のほか、畠の畝と推定できる遺構を検出した。

OS87－78次調査では井戸以外に建物を復元できる痕跡は見つからなかった。しかし、井戸の付近には建物が存在したと考えられる。

SX201　OS87－78次調査中央部で検出した集水枡と考えられる平面方形の遺構で、下部が石を主体に、上部では瓦を主体にして壁を築く。深さ0.5mほどが遺存していた。瓦の一つには桔梗紋鬼瓦41がある(図40、図版48)。同一個体の破片が第4層から出土していることから、第4層上面の建物に使用されていた可能性がある(図54)。

SE201　豊臣期の門SB401に使用された石材の一部を利用して構築されている。

OS85－28次調査ではこの面の遺構群は下層のそれに比べ、現在の敷地の方位に近くなっており、大坂夏ノ陣以降の再開発によってこの敷地一帯の街区が再編されたと考えられる(図52)。

SB201　敷地北西隅に検出し東西3間以上、南北1間以上の掘立柱建物である。東西の柱間隔は1.6mで、南側柱列より北1.5mの位置にも掘形が東西に並んでおり、総柱建物である可能性がある。方位はE6°Sである。

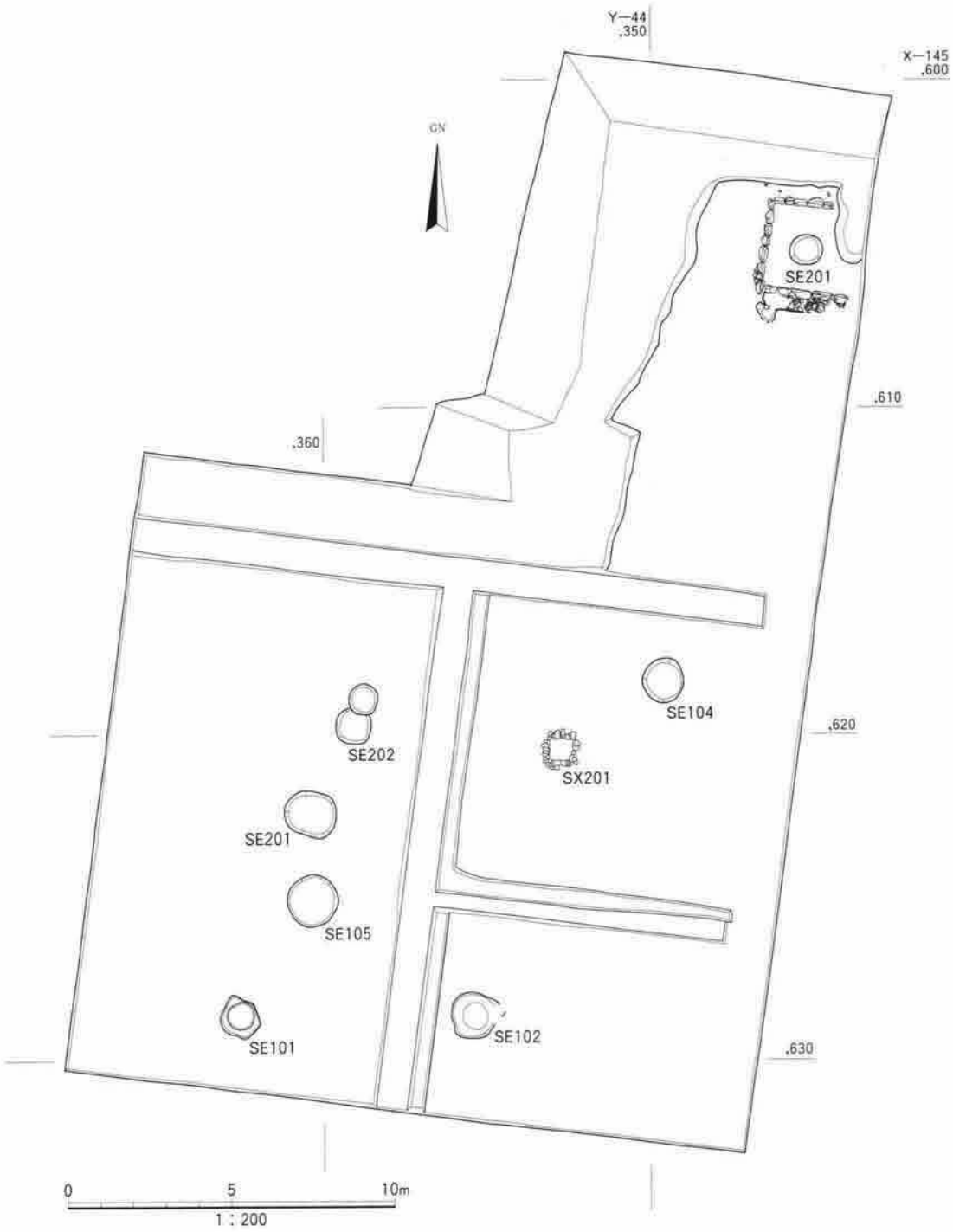


図54　OS87−78次第２層上面遺構配置図

SW201　敷地北端に検出した石垣である。北側に面をもち、最大２段遺存していた。北側の敷地との境界となるもので、北側敷地が低くなっていると推定される。西側の延長部は確認できなかったが、そこにはSB201があり、SB201の手前までしか延びないのであろう。東側延長部も石垣が残っておらず、どこまで延びていたのかは不明である。石垣面の方位はE7°Sである。

SX202　SW201の南に広がる瓦敷である。後述するSD201に囲まれるように広がっており、それと何らかの関係があると推測されるが、性格は不明である。

SD201　SX202とSW201を囲むようにL字状に曲る溝で、南北部の方位はN5°E、東西部の方位はE8°S前後である。

SD202　SD201の南にある東西方向の溝である。北側と南側の敷地を分ける区画溝の可能性がある。東西部の方位はE7°S前後であるが、東端ではSD201と並行するように次第に南に曲っていく。この間が通路であった可能性がある。

SA201　SD202に平行して東西に延びる杭列である。西端では南に折れ、南北に延びている。また、SD202の北側にもそれに沿って杭が東西に並んでおり、溝だけでなく杭列でも区画していたようである。

SK201　SD202の南で、SA201に囲まれた中に検出した甕を埋めた土壙群である。2列5基の土壙が整然と並んでおり、先に述べたSK602～604と同様の遺構である。甕はすべて抜取られており、残っていなかった。これにも覆屋などの施設は見つからなかった。

SK202　敷地北部に検出した大型の土壙である。この南側は調査できなかったため、全体の規模は不明である(図52)。瀬戸美濃焼天目碗150などが出土している。この天目碗は丈が高く、連房式登窯の製品と考えられ、徳川期に属するものであろう(図53)。

3)まとめ

i)大坂本願寺期およびそれ以前

ここでは奈良時代や平安時代の遺構や遺物が出土し、古代から開発が進んでいたことがわかった。ただ、大坂本願寺期以前にさかのぼるSX1001については、調査範囲が狭小であったため、詳細な時期は明らかにできなかった。今後、さらに検討を加えることでこの時期の開発の実態が明らかになるであろう。この一帯は南東から北西に向けて遺構面が低くなっており、OS87－78次調査地で見たように、低いところでは水成堆積層が広がっており遺構が存在していない。この辺りから西側には大川が形成した後背湿地が広がっている可能性がある。しかし、OS85－28次調査地を含む東側では地山が検出されSX1001もあることから、生活空間となっている。本書第Ⅲ章第1節で報告するOS90－50次調査を中心とする一帯には、奈良時代から平安時代の建物や井戸が見つかっており、それら遺構群から続く北西端の一角に当るのであろう。

大坂本願寺期にはOS85－28次調査のSM701がある。この遺構も狭小な範囲での調査であったため、出土遺物も少なく、確実な時期は定かではないが、遺構の切込面から本願寺期と推定した。SM701は幅8m、深さ2mもあり、断面形が逆台形を呈している。方向は現在の敷地に近く、南北方向に延びている。その形態や規模から、東側の高台の施設を区画、あるいは防御していたものではないだろうか。本章第1節でも述べたように、本願寺期にはこの一帯にいくつかの堀や大溝が存在しており、いわゆる「石山合戦」の際に織田信長方が大坂(註1)の10町ばかり西に砦を築いたという記録もある(註2)。この一帯の堀や大溝については、今後とも規模や詳細な時期を検討していくべきであろう。ただ、SM701がこのまま北に延びているのであれば、北側敷地に鎮座している坐摩神社御旅所境内の中を横切ることになる。坐摩神社御旅所は坐摩神社が近世初頭に遷座する前の旧社地であるとの説があ

る(註３)が、神社がその位置に存在していたのかどうかも再検討する必要があろう。ただ、神社で使用されることの多い剣頭紋軒平瓦が出土しており、この付近に存在していた可能性は高い。また、この御旅所付近を熊野九十九王子の第１王子である窪津王子とする説もある[平凡社地方資料センター編1986a]。

ii)豊臣期

豊臣期は前期と後期の遺構群を検出した。

豊臣前期にはOS87－78次調査地ではTP＋３m付近に東側の道路に面した小型の礎石をもつ建物があり、その南側にも敷地が存在していたようである。南側敷地では奥の土壙から魚の名前を記した木簡が出土しており、魚市場であったことが推測される。魚市場と推定される個所は、大坂城下町跡である船場地域北部の道修町１丁目で豊臣後期属する遺構が検出されている。船場地域で豊臣後期になってあらたに魚市場として形成される所がある一方、今回の調査地では１mもの盛土によって、魚市場から武家屋敷へと変化している。ただ、ここでは同じ地層から唐津焼碗が出土している。上層からの混入の可能性も考えるが、地層の堆積からこの遺構面は前期に含まれると判断した。前期段階には武家屋敷ではなく、町屋が集中する所であったと考えられよう。



図55　OS85－28・87－78次豊臣前期遺構配置図

また、OS85－28次調査地では、TP+4.2m付近で南北道路に面した屋敷地が復元できる。敷地を東西方向の溝で区画し、建物や埋甕遺構がそれぞれの敷地に展開している。建物配置から考えて、西側の南北道路に面した町屋と推定できる。埋甕遺構は3連あり、それぞれが建物内の遺構と推定できることから、ここにはかなり大きな町屋が存在していたのであろう。

豊臣前期は両調査地間の南北道路を挟んで向い合う敷地が南北に並んでいる景観が復元できるが、東側敷地が1.2mほど高くなっている。南北道路の幅を推測する材料として、OS87－78次調査地のSB601の東側柱筋と、OS85－28次調査の南北溝SD607がある。この間が当時の道路幅であった可能性がある。復元幅は約20mとかなり広くなる。また、この時期の遺構群の方位は現在の街区とは異なり、北で東に振っている。さらに第3節で報告したOS88－113・90－20次調査でも豊臣前期にさかのぼる町屋があり、土佐堀通一帯には早くから町屋が建ち並んでいたことがわかる。土佐堀通は大坂城築城当時から設置された街道で、そこには町屋が集中していたのであろう。

豊臣後期にはOS87－78次調査地に武家屋敷が築かれている。前期段階には町屋が広がる一画を、1mほどの盛土事業を行い、TP+4m前後まで嵩上げして武家屋敷に改変している。OS86－22・87－40・92－1次調査地と同様、惣構北西隅という重要な位置には武家屋敷が築かれたのであろう。屋敷の住人について推測する材料はあまりにも少ないが、上層遺構から出土した桔梗紋鬼瓦は屋敷地の住人を推測する手掛かりとなる[田中清美1989a]。また、注目すべきは築地塀の位置および方向であり、現在ある南北方向の通りの方向とはわずかながら方向が異なっているように見えるが、同じ位置に道路が存在しているのがわかる。豊臣期の道路が検出された例が少ないことから、現在の道路下に当時の道路が存在していると推測される傍証の一つとなるであろう。

OS85－28次調査地では、敷地の北端に堅牢な基礎構造の蔵が建てられていた。蔵は斜面を雛壇状に造成し、段には石垣を築いて周囲と区画し、平坦な一画を確保している。前期段階にはこうした造成工事はなく、後期の城下町再編工事が地形を改変させるものであったことがうかがえる。しかし、1mの盛土事業を行っても、屋敷地やそこに展開する建物などの方位は前期と大きく変化がなく、道路を付替えるほどの造成事業ではなかった。また、前代に存在していた魚市場がなくなっていることから、別地点に移住させた可能性がある。この地点の西側は大川の北から続く松屋町筋と京へと続く土佐堀通との交差点であり、きわめて重要な地点と思われる。惣構を構築した際に、この位置の重要性を考え武家屋敷を配置したのかもしれない。

iii)徳川期

徳川期はOS87－78次調査地では建物を復元する材料は少なかったが、OS85－28次調査地では現在の街区方位と同じ方位の遺構群を検出している。北部には北側敷地との境界であるSW201がある。北側敷地との雛壇状の境界であろう。この石垣の西延長部にはSB201があり、そこまでで終わっているのであろう。東延長部は見つかっていない。前代のSB404の時の段差を解消するための石段であろう。また、SD202は南側敷地との境界となる区画溝で、溝の両側にも杭列があり、溝と杭列によって敷地を画していたと考える。南側には埋甕遺構があり、この敷地内の蔵であったと推定する。この段階で現在の道路や街区の方向になり、現在にいたっている。　（平田・松尾）

註)

(1)大坂本願寺および寺内をさしていると考える。

(2)本章第1節で報告した地区にも堀などの防御施設が存在するが、そこでは高台を巡るような構造になっていたため砦を想定した。「籠(樓)の岸」といわれる地名は「大江岸」と同一とされる[平凡社地方資料センター1986b]。最近では藤田実が「渡辺津」に近い東側の高台一帯に面した川岸とし、第1節で報告した一帯よりやや北西の「渡辺津」に接する付近を想定して、そこには「浄土堂」があったとしている[藤田実2000]。また、仁木宏も「渡辺津」と「上手堂」が同一地であり、「上手堂」は重源が建立した「浄土堂」の転訛ではないかとしている。となれば、「渡辺津」に接するか、あるいはその内部に「浄土堂」があることになるが、この地区で出土している瓦などはその「浄土堂」に係わるものである可能性も出てくる。これらは港湾集落である「渡辺津」の推定地である東横堀川分流地点よりも東の、上町台地北西部のこの高台を指していた地名なのであろう。

(3)[平凡社地方資料センター編1986a]による。これ以外にも[志賀剛1977]や[式内社研究会編1977]で同じ説を採用している。

第５節　OS86－38次および87－81次調査

１）調査地と周辺の概要

両調査地は同一街区に位置する（図56）。試掘調査の結果、地表下２ｍにおいて大坂夏ノ陣と考えられる焼土層が確認されたため本調査を実施することとなった。ともに小規模な面積であり、また、工事敷との関係からOS86－38次調査では地表下３ｍまで、OS87－81次調査では地表下3.7ｍまでしか調査できなかった。

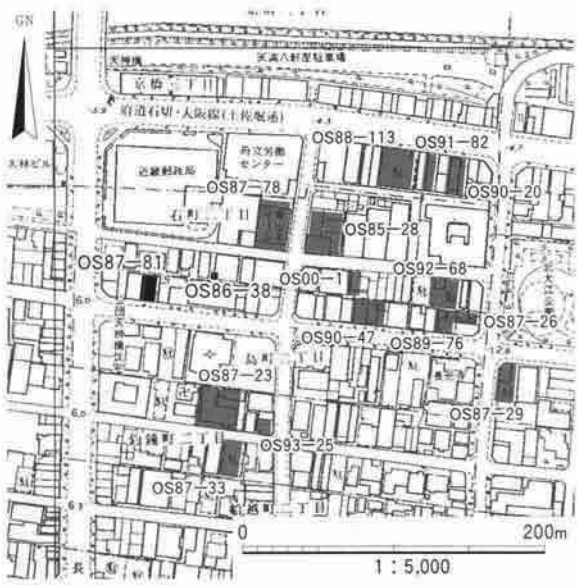


図56　OS86－38次および87－81次調査地位置図

２）調査の結果

ｉ）層序と遺物

OS87－81次調査を中心に記述する（図57）。

第１層　江戸時代以降の地層で、層厚は約２ｍである。

第２層　大坂夏ノ陣に比定できる焼土層で、部分的に遺存する。

第３層　複数の生活面を間に含む整地層で、層厚は約40㎝ある。瀬戸美濃焼1～9、備前焼10、青花11～13、白磁14などが出土した（図59）。豊臣前期に属する遺物がほとんどであるが、図化できていない遺物には唐津焼も含まれており、地層の一部は豊臣後期に下る可能性がある。

第４層　豊臣前期と考えられる地層で、層厚は約30㎝ある。瀬戸美濃焼20が出土した（図59）。OS86－38次調査ではこの層から１ｍ程掘下げたが、地山は検出できなかった。

第５層　層厚約30㎝ある。瓦器15～18、土師器19・21、青磁22・23、白磁24などが出土した（図59）。14世紀代に位置づけられる。瓦器15～18は尾上実氏編年のⅣ－４にあたり［尾上実1983］、実年代は14世紀前半に位置づけられる［森島康雄1992］。

第６層　層厚30㎝以上ある。土師器・須恵器・常滑焼・備前焼などが出土しており、14世紀代の

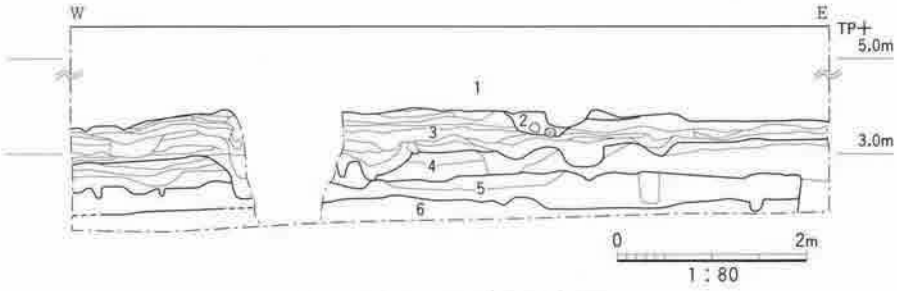


図57　OS87－81次北壁断面図

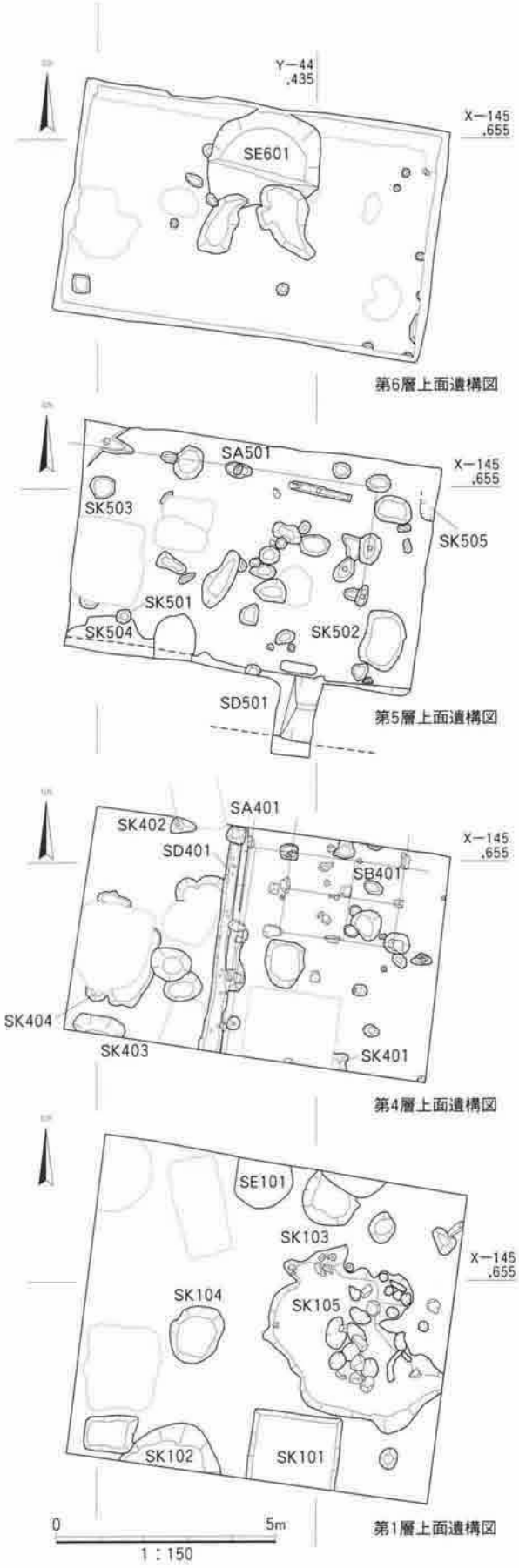


図58　OS87−81次遺構配置図

地層であろう。

ii)遺構と遺物

a．室町時代の遺構と遺物

OS87−81次調査で第6層および第5層の上面で検出された。第6層上面ではSE601のほか柱穴と考えられる小穴を検出した(図58、図版10中)。

SE601　完掘していないが直径2.4mの井戸である。瓦器椀28〜30や古瀬戸灰釉花瓶Ⅰ類31[瀬戸市埋蔵文化財センター1997]などが出土した(図59)。瓦器椀は尾上編年のⅡ−3で、12世紀後半のものであるが、第6層からは常滑焼や備前焼なども出土しており、14世紀代の遺構と考えられる。また、攪乱からの出土ではあるが、巴の印花文を施した古瀬戸鉄釉瓶子Ⅱ類の体部34が出土している(図59)。

第5層上面ではSD501・SA501のほか土壙・柱穴と考えられる小穴が多数見つかった(図58)。

SD501　幅2.1m、深さ1.2mの東西方向の溝で、断面は「V」字形である。底から0.3mは滞水の痕跡があり、それより上層は埋戻し土である。調査範囲の南端に設定したトレンチで、わずかに検出したにすぎないが、方位はE8°Sと現在の街区とほぼ同じである。どこまで延びるのかは明らかではない。土師器皿・瓦器の細片が出土している。

SA501　SD501に平行する柵である。東で南に屈曲すると復元したが、そのまま東に延びる可能性もある。

SK501　直径0.3m、深さ0.11mの小型の土壙で、27のほか管状土錘28点が出土した。管状土錘はほかの土壙からも少量出土しており、大型のものも含まれる。これらの遺構から出土した遺物には、ほかに土師器・瓦器・常滑焼・瀬戸

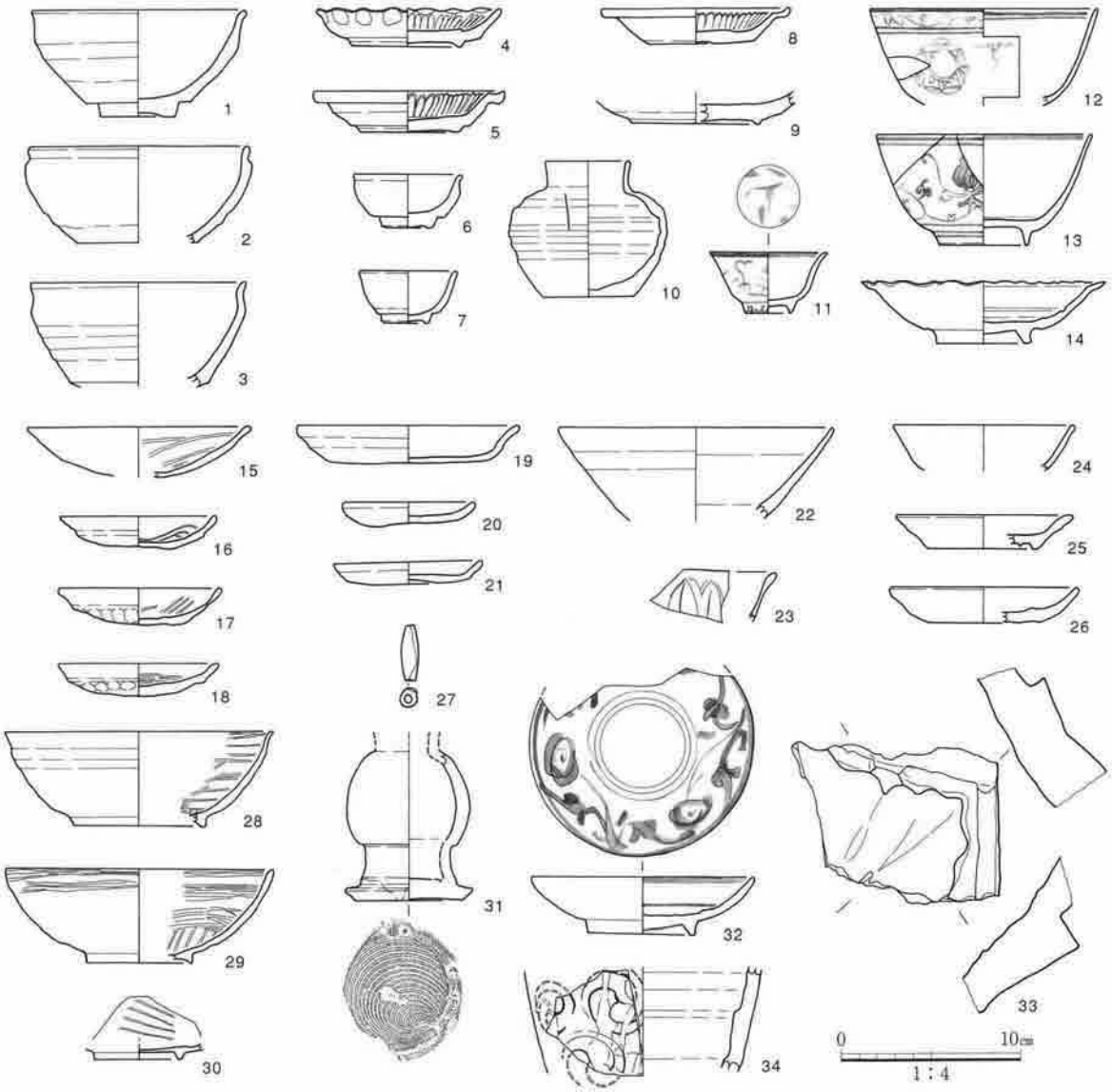


図59　出土遺物実測図

第3層(1～14)、第4層(20)、第5層(15～19・21～24)、SK403(25)、SK404(26)、SK501(27)、SE601(28～31)、SK505(32)、SK401(33)、攪乱(34)

美濃焼・瓦などがある。おおむね16世紀代に位置づけられよう。出土遺物の特徴からは漁業に係わる生業を営んでいた可能性が高い。

SK505　敷地北東部で一部検出した土壙で、規模は不明である。青花32が出土した(図59)。

b．豊臣前期の遺構と遺物

OS87－81次調査の第4層上面の遺構が相当する。礎石建物**SB401**およびその西側の南北方向の柵**SA401**、板組溝**SD401**などがある(図58、図版10下)。

SB401　東西2間、南北2間以上の礎石建物である。南北方向の柱間は約1mであるが、東西の柱間は約1.5mと長い。礎石には0.2～0.4mの石を用いる。周辺には石が散乱しており、建替えられた可能性がある。方位はE8°Sである。建物南にある**SK401**からは桔梗紋金箔押飾り瓦**33**(K128)が出土している(図59)。

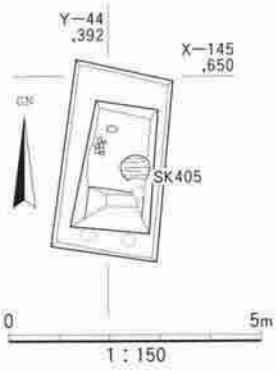


図60　OS86−38次平面図

SA401　礎石建物SB401の西にある南北方向の柵である。１ｍ間隔で礎石が並び、建替えが認められる。

SD401　SA401の西に接するようにある南北溝で、深さ約0.1ｍである。内部に側板を留めたと考えられる杭が残存している。両者は敷地境であった可能性がある。SD401の西に位置するSK402からは鉱滓が多数出土している。

このほか、SK403からは瀬戸美濃焼灰釉稜皿25が、SK404からは鉄釉丸皿26が出土している(図59)。ほかの遺構から出土した遺物は多くないが豊臣前期に位置づけられよう。

OS86−38次調査では北から南に下がる地形となっており、埋桶SK405を検出した(図60、図版10上)。

3)まとめ

この地区では14世紀代の遺構を検出できた。また、調査深度内では地山が検出できておらず、下層にはさらにさかのぼる時期の地層が堆積していることも予測される。瓦器椀など12世紀代の遺物も多く含まれており、中世前期あるいは古代にまでさかのぼる可能性が高い。14世紀代の遺物には井戸SE601から出土した古瀬戸花瓶Ⅰ類31や攪乱出土ではあるが古瀬戸瓶子Ⅱ類の体部34がある。これらは古瀬戸編年の中Ⅱ期に属するものであろう。また、鎬蓮弁文青磁碗23も当該期の遺物である。古瀬戸瓶子や花瓶などはステータスシンボルであったとされ[藤澤良祐2002]、調査地周辺にそうしたものを所持する施設あるいは階層が存在していたことを物語る。

OS87−81次調査の第５層上面で検出した東西方向のSD501は、14世紀代の遺物を含む地層の上面にあり、それ以降から豊臣前期までの遺構である。この調査地の南の島町通は、豊臣前期に建設され

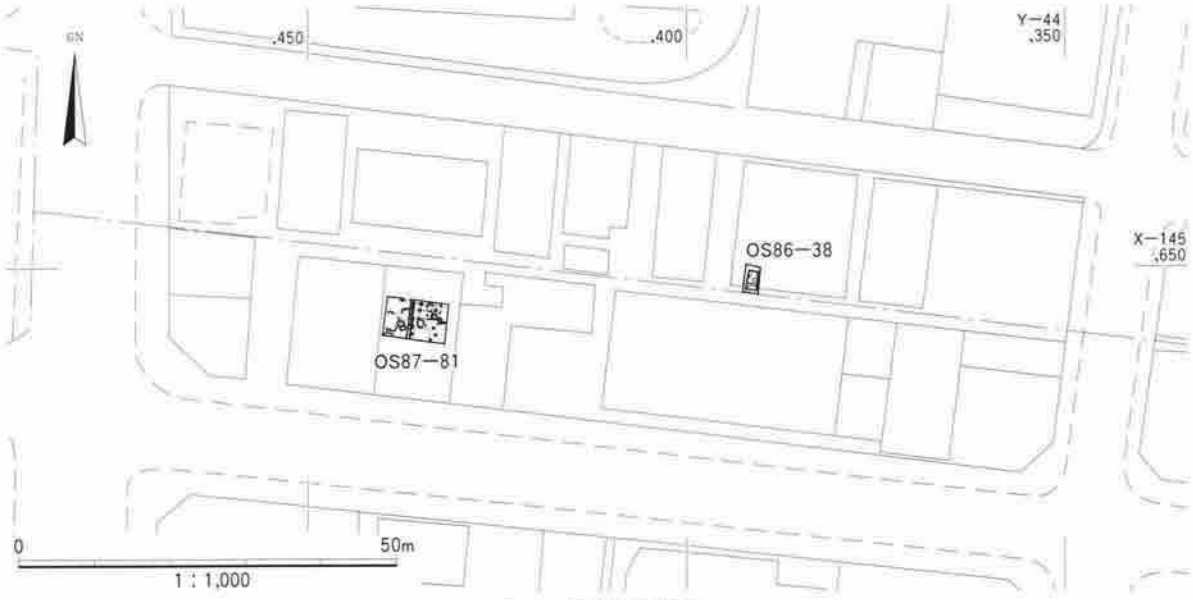


図61　調査地関係図

た上町城下町の基本軸ではないかと想定されている道路である[宮本雅明1989]。豊臣期以前とした遺構群はこの道路とほぼ同じE8°S前後に傾いている。

SD501の位置は道路に近いところではなく、敷地の中央部に街区方位に沿っているように掘られている。小面積でしか確認していないが、北側にあるSA501も同様の方位と復元できる。ただ、この調査地の東側に位置するOS90－47次調査地やOS89－76次調査地ではこの溝の延長となる溝はなく(第2節)、OS90－47次調査地までの間で途切れるか、曲っているのであろう。

SD501は出土遺物が少ないため、時期が今一つはっきりしないが、同一面上にある土壙SK501からは瓦器・常滑焼・瀬戸美濃焼・瓦などの14～16世紀代に位置づけられる遺物が出土しており、その組成から豊臣期以前と考えられる。

大坂城とこの地区を直線で結ぶ方向であることから推測すれば、SD501はさかのぼっても大坂本願寺寺内町成立以後ではないかと想定する。島町の東西道路がある所は、上町台地から西側に長く尾根が延びている高台である。そこは、台地上にある大坂本願寺寺内町と東横堀川分流点付近に存在する集落を結ぶ道路が存在していてもよい場所である。そうした尾根などの自然地形に規制された道路があって、それが豊臣期にも踏襲されたのではなかろうか。

SD501の北側にはSA501や管状土錘が29点も出土したSK501などもあり、この一角の住人は漁業に係わる生業を営んでいたと推定できる。SD501は集落を取囲む施設の一部である可能性もあり、大川沿いの景観を復元するうえで重要な知見である。また、OS86－38次調査地では、豊臣期の遺構面の下位には泥質の黒灰色シルト質砂層が厚く堆積し、地山は検出できなかった。谷あるいは湿地状の地形となっていたのであろう。

この地区は大川(旧淀川)の南岸にあり、東横堀川の分流地点の東側にあたる。東横堀川は豊臣前期までは上町台地とその西の長柄砂州との間に形成されたラグーンであったと考えられる。そのラグーンは、中世段階には大川を利用する水運の舟溜まりや船着きが設置されていたとも推測される地点でもある[日下雅義1991]。この港湾施設をもつ集落が「渡辺」と考える。前節では「籠の岸」の推定地として上町台地の北端部の高台を想定したが、「籠の岸」の西側には「渡辺」が広がっていたといわれている。ラグーンの東に位置するこの地は、「渡辺」の東端に位置していたのではなかろうか。

また、西方の東横堀川やその東の松屋町筋に面するいくつかの調査地では古代や中世の遺物や地層を確認しており、上町台地を西に下りた一帯には中世の集落が埋もれている可能性がある。

また、豊臣前期の遺構は小面積でありながら敷地境と方位のわかる好例であり、少なくともこの場所では現在の道路と同じ方向の町割がなされているといえる。

(松尾)

第6節　OS86－22次およびその周辺の調査



図62　OS86－22次などの調査地位置図

1）調査地と周辺の概要

本節で報告する3個所の調査地は惣構北西角の、大川から東横堀川が分流する地点の南に位置している（図62）。この一帯は上町台地の北西端より西に降りたところで、現在の地表面の高さはTP+5.2m前後である。周辺の調査成果から判断すれば、上町台地の西側裾部に広がる沖積地であろうと推定できる。

本節の調査地より東へ150m離れた第5節の調査地では、TP+2.4mまで台地を構成する洪積層は検出されなかった。また、東に250m離れた第4節のOS85－28次調査地ではTP+3.9mで洪積層が検出されたが、その西側のOS87－78次調査地ではTP+1.4mまで掘削しても洪積層は検出できなかった。第4節の調査地の間で洪積層が深くなっていることがわかる。

第5節でも述べたが、上町台地の西側には大阪湾岸流によって形成された長柄砂州が南北に延びていたとされ[梶山彦太郎・市原実1972・1985]、本節調査地付近は上町台地と長柄砂州の間に広がるラグーンにあたると推定されるところである[日下雅義1991]。

この地域の開発は、第4・5節でも報告したように下位層では古代の土器が出土し、その上位では鎌倉時代から室町時代にかけての遺構や遺物が出土していることから、かなり早くから始まっている。東側の上町台地上でも奈良時代から平安時代の建物群が広がり（第Ⅱ章第1節）、難波宮が遷都されて以降もその一帯には公的施設と推定できる建物が存在していたことが明らかになっている。

その後も中世前期の鎌倉時代初頭の輸入白磁なども出土し、古代以降中世を通してこの一帯には都市的な場が形成されていることが判明する。さらに豊臣期になって大坂城の城下町として整備されていったようである。調査地の西側の東横堀川は、長柄砂州背後のラグーンを利用して豊臣期の1594（文禄3）年に開削された人工的な堀川であり、大坂城の惣構内に含まれたところでもある。

1986年に行ったOS86－22次調査では豊臣期の礎石建物を検出し、その下層から本願寺期やそれ以前にさかのぼる地層と遺構を検出した。

1987年に行ったOS87－40次調査では、武家屋敷の一角と想定できる建物群を調査地全面で検出した。建物群は出土遺物から武家屋敷と推定され、先に行ったOS86－22次調査で検出した礎石建物と同じ敷地に当ることが判明した。大阪ではこれほどまでの巨大な武家屋敷はこれまで見つかっておら

ず、豊臣期の武家屋敷の実態を示す好例と判断し、９月15日に東側のOS87－78次調査地と共に現地説明会を開催した。さらに1992年に行ったOS92－１次調査では先の両調査地と同じ敷地に建設された礎石建物を検出し、改めてこの武家屋敷の規模を見せてくれることになった。この調査地で検出した大坂夏ノ陣で焼亡した武家屋敷の概要は、[鈴木秀典1987・1989]や[松尾信裕1994b]などで既に紹介されている。

なお、この３個所の調査地で検出された豊臣期の礎石建物群はすべて砂で埋戻され、調査終了時の状態で地下に保存されている。

２)調査の結果

ｉ)層序

この調査地付近の地表面の標高は、北側の土佐堀通ではTP＋５ｍ、南側の道路ではTP＋６ｍと北が低くなっている。これは北側の大川に向って低くなる地形を残しているのであろう。この３個所の調査地では、OS86－22次調査では下層の堆積と遺構の存在を確認するため深掘りを行ったが、OS87－40次調査およびOS92－１次調査では豊臣期の遺構面までの調査しか行わず、下位の地層は確認していない。大坂夏ノ陣で焼亡した地表面以下は、OS86－22次調査地の堆積状況である。以下に３個所に共通する地層を基にこの敷地の層序を概観し(図63)、その後に各層から出土した遺物を報告する。

第０層　近世末以降の整地層である。

第１層　近世後半の整地層である。

第２層　1724(享保９)年の妙知焼の焼土とその直後に行われた復旧のための整地層である。焼土を覆う整地層を第2a層、妙知焼焼土層を第2b層とする。

第2b層の焼土はOS87－40次調査地の北壁で観察できるように、深さ１ｍ前後、幅１ｍ前後の落込みが連続している中に見つかる。その落込みは西側がもっとも古く、東側が新しくなるような切合い関係がある。これは妙知焼の焼け跡を片付ける穴を西側から順に掘って、瓦礫を処分していった作業過程を示すものと考える。その後に第2a層によって整地し、新たな遺構面が作られていったのであろう。また、その落込みはOS87－40次調査地の西端から東端まで連続して広がっており、この調査地全体が同じ作業を行える一つの敷地であったと考えられる。この調査地は豊臣期から18世紀前半まで、細かく分割されずに伝わった広大な屋敷地であったことを示している。

第2b層からは18世紀前半の陶磁器が大量に出土した。それらは中央区島之内１丁目に所在する住友銅吹所跡のⅣ2期の妙知焼焼土層から出土した陶磁器群と共通するものである[大阪市文化財協会1998]。

第３層　大坂夏ノ陣以降、妙知焼までの間の整地層である。上下２層に細分できる。上部を第3a層、下部を第3b層とする。OS86－22次調査地とOS87－40次調査地では下部に薄い整地を行うが、OS92－1次調査地ではそれに比べてやや厚い整地を行っている。

第４層　1615(慶長20)年の大坂夏ノ陣の焼土層である。OS86－22次調査地とOS87－40次調査地

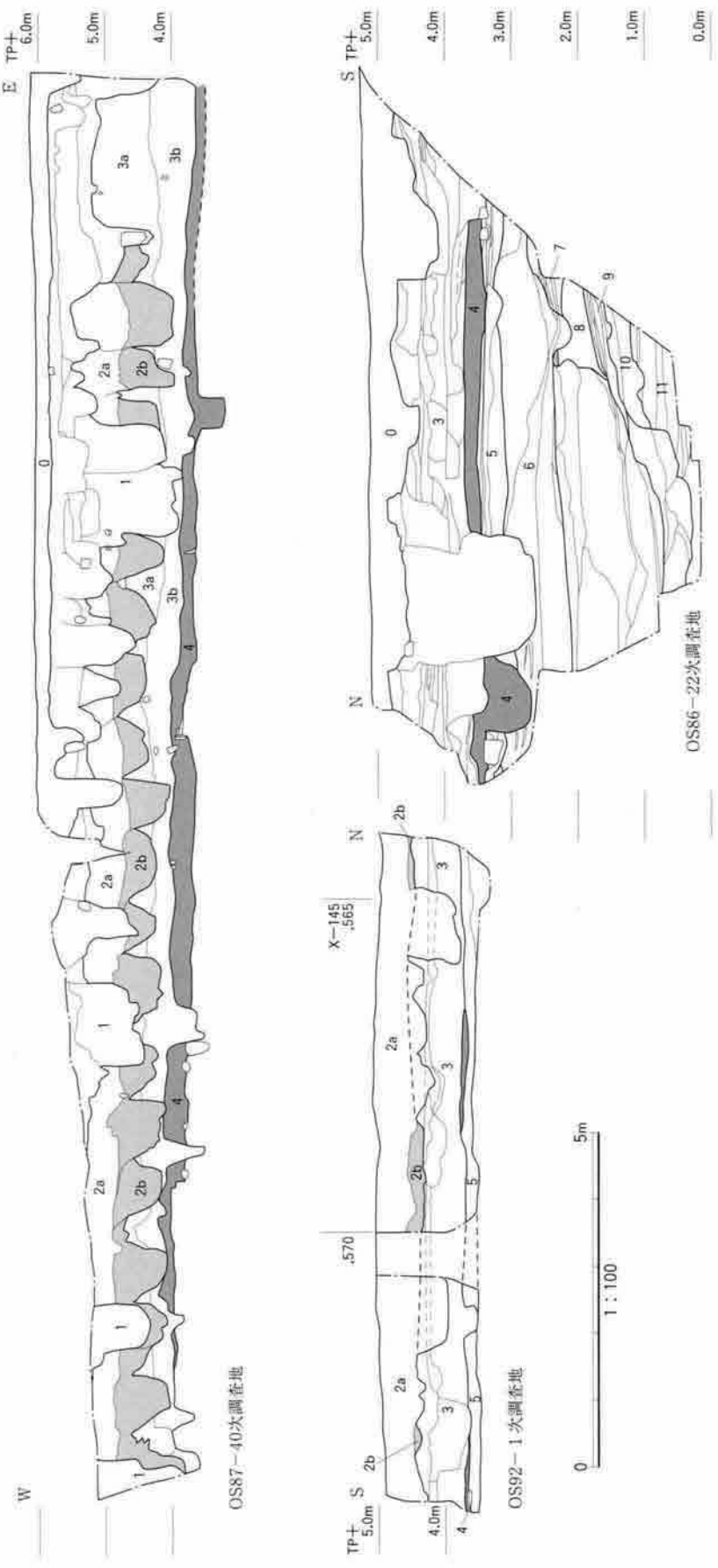


図63　調査地断面図

では20～30㎝と厚く堆積しているが、OS92－１次調査地では10㎝以下であった。敷地全域に広がっている。

第５層　大坂夏ノ陣で焼亡する遺構面をなす整地層である。数枚の薄い地層を整地している。

第６層　豊臣期と推定される80㎝の厚い整地層で、層内には花崗岩の巨石が含まれる。

第７層　薄層によって構成される整地層で、下部に焼土層が介在する。この層以下が本願寺期になろう。この調査地付近まで本願寺寺内町が広がっていることは考えられず、焼土は1580(天正８)年の寺内町焼亡時の火災層とは考えられない。室町時代後半にはこの一帯にも家屋が建ち並んでいたことを裏付ける。上面には礎石状の石が点在していた。

第８層　黄白色を呈する砂礫による整地層である。上位層や下位層とは異なり、30～60㎝と厚く堆積している。

第９層　第７層と同様に薄い層で構成される。それぞれの層の上面が遺構面になると考える。本層以下は南が高く、北に低くなっている。

第10層　黄褐～灰緑色の砂礫混りシルトの整地層で、第８層同様に厚い。上面には溝や土壙が密集する。標高は南でTP+1.6m前後であり、北は削平され本来の高さは確認できないが、低くなっているようすが看取できる。

第11層　黄白～灰白色を呈するシルト～砂礫混りシルトである。上面は上位層によって削られているが、その標高はTP＋１mほどである。細片であるが平安時代以前の遺物が出土した。

ii)各層出土の遺物

ａ．第2b層出土遺物

第2b層から出土した陶磁器のうち、上質の肥前磁器と京焼を図示する(図64・65)。火災の熱で釉薬が溶けて流れており、文様は鮮明ではない。また、重ねて収納されていたものは上下の器の痕跡があり、溶着した状態で出土しているものもある。

1～5は碗の蓋で、1は色絵である。3～5には手描き五弁花があしらわれている。6～10は丸碗で、6は蓋1とセットになる色絵碗である。11～13は口縁が開く猪口で、11は三方が高くなる波状を呈し、端部は輪花状になっている。体部内面には型押しの文様がある。14・15は直線的な猪口で、14は十方が高くなる波状の口縁部となる。

16～22は皿で、16は内面に色絵の菊文を描き、その周囲には吹墨技法を用いる。外面には唐花文を巡らし、高台内には「大明萬暦年製」の銘とハリササエの痕が１個所ある。菊の色遣いは被熱しているため本来の色は不明である。これとよく似た文様の皿が住友銅吹所跡で出土しているが[大阪市文化財協会1998、図面15－216]、その例には菊文のほか、曇を描いており、若干異なっている。同一の窯の製品と推定される。

18は中央に僧形の人物を描いているが、別個体では頭に頭巾を被っている。上半分には漢詩を、下半分には山水文を描く。漢詩の内容は「壬戌之秋七月」から始まり、二行目から三行目にかけては「蘇子与客泛舟遊於赤壁之下」と、最終行には「飄々乎如遺世獨立」と続いており、北宋の詩人蘇軾(蘇東坡)の「赤壁賦」の一部を書こうとしていることがわかる。ただ、一部に漢字の間違いや元字に似せて書い



図64　第2b層出土遺物(1)

肥前磁器色絵(1・6・16)、肥前磁器染付(2～5・7～15・17～22)

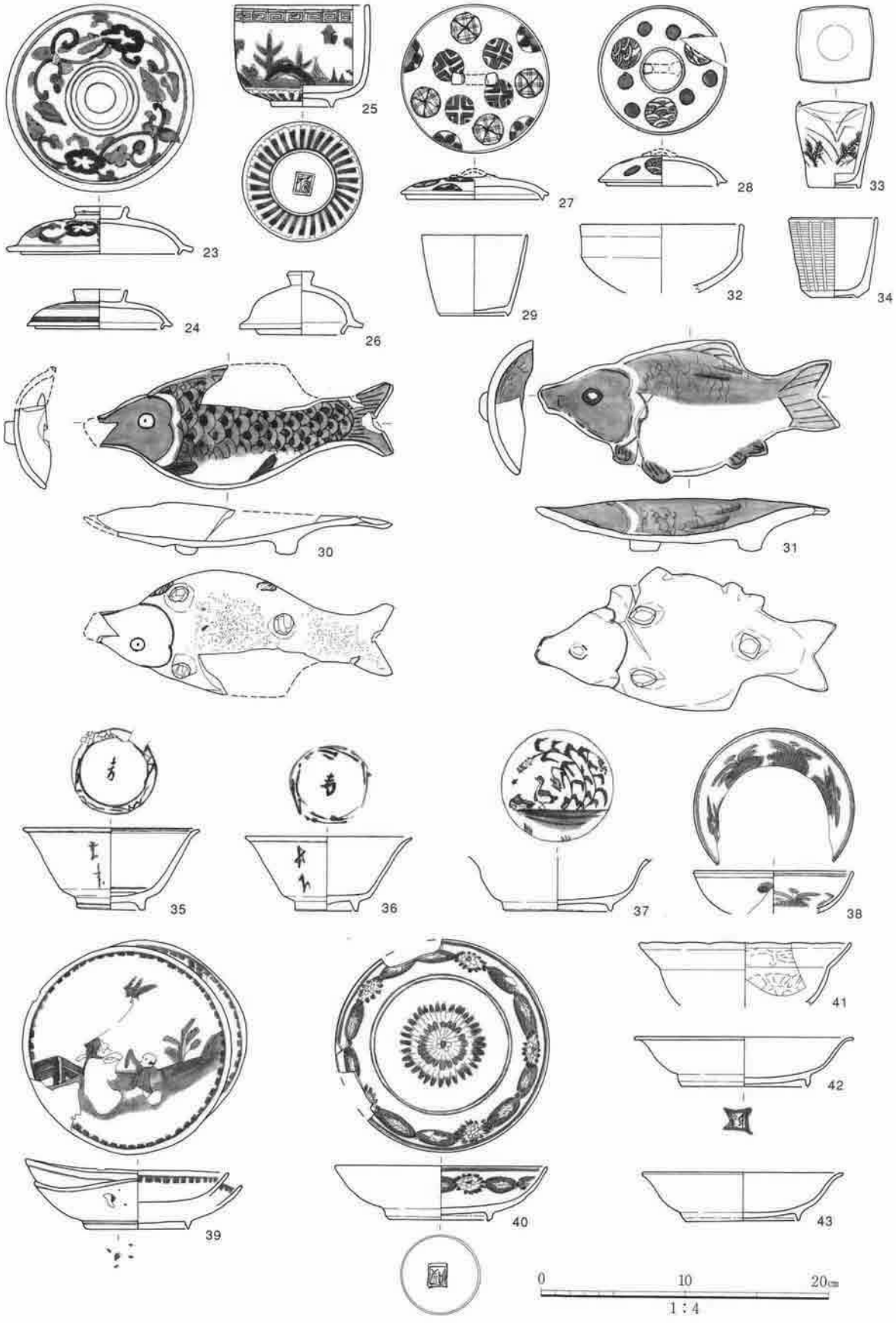


図65　第2b層出土遺物(2)

肥前磁器(23～29)、産地不明磁器(30・31)、関西系陶器(32～34)、輸入磁器(35～43)

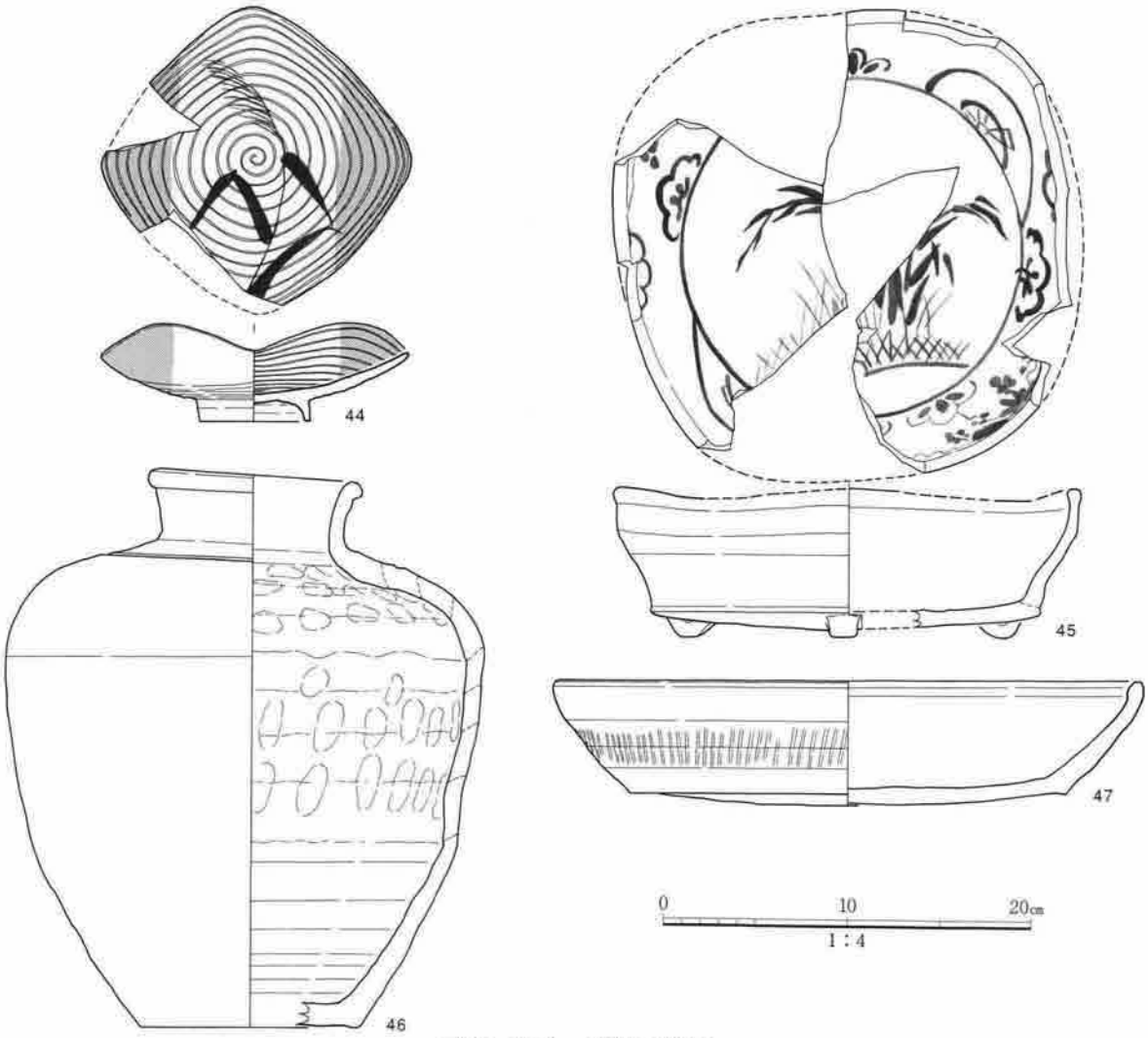


図66　第3・4層出土遺物

瀬戸美濃焼織部(44)・志野(45)、丹波焼(46・47)

てある所も見られる。20～22は同じ器形の皿で、20が水仙と梅を、21が菖蒲とホウズキを、22は茄子と唐辛子を描いているように見え、それぞれ、春、夏、秋の山野を彩る花や野菜を描いているのではなかろうか。23・24は香炉の蓋であろう。25は口縁部の釉を剥いでおり、香炉になる。26は白磁の壺蓋である。27・28は重鉢の蓋であろう。29は白磁の猪口である。32～34は京信楽系の陶器である。33は平面方形になる猪口で、外面には錆絵染付があり、34は平面円形になる猪口で、型による横方向の模様の上から縦方向に鎬を入れている。33・34は複数個体ずつ出土している。

30・31は魚形の皿であるが、細部の表現が異なっている。30は鱗部分が広く、腹鰭を腹の上に描き、背面には吹墨技法が用いられているが、31は鱗部分が狭く、鰭は外側に作り出し、吹墨技法はない。器壁は厚く、重量感がある。背面には小さな突起が3個所にあり、脚となっている。両方とも被熱しており、本来の釉調や呉須は判然としないが、中国製の古染付である可能性がある。

35～43は輸入磁器で、35・36は景徳鎮窯の製品ではなく、中国南部漳州窯の製品と考える。同じ器形であるが、わずかに法量が異なっている。37～40は景徳鎮窯の青花で、39は同じ皿が溶着した状態で出土した。41～43は白磁の皿で、41は内面に型押し文様がある。42・43は豊臣前期によく見

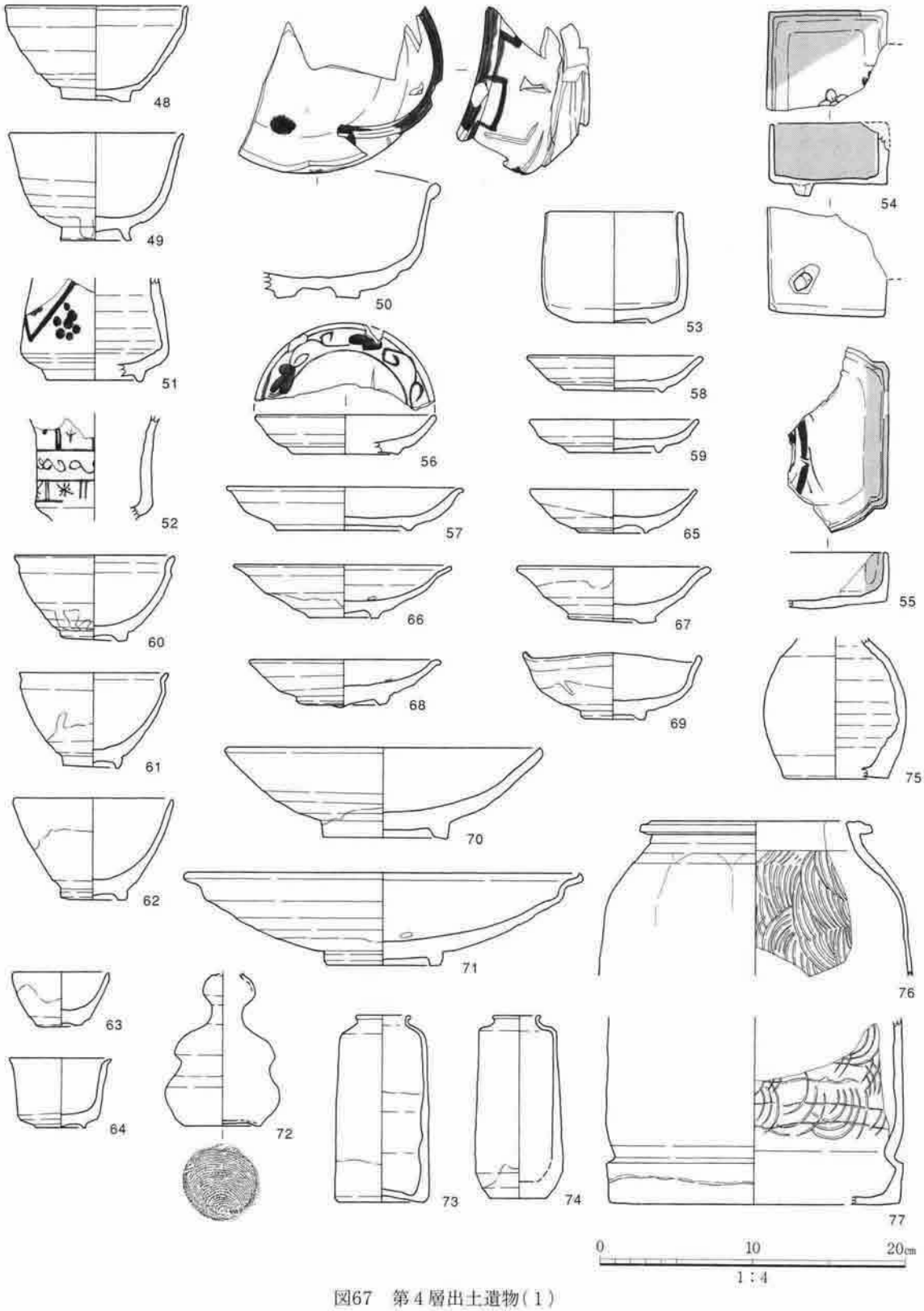


図67　第４層出土遺物（１）

瀬戸美濃焼（48～59）、唐津焼（60～77）

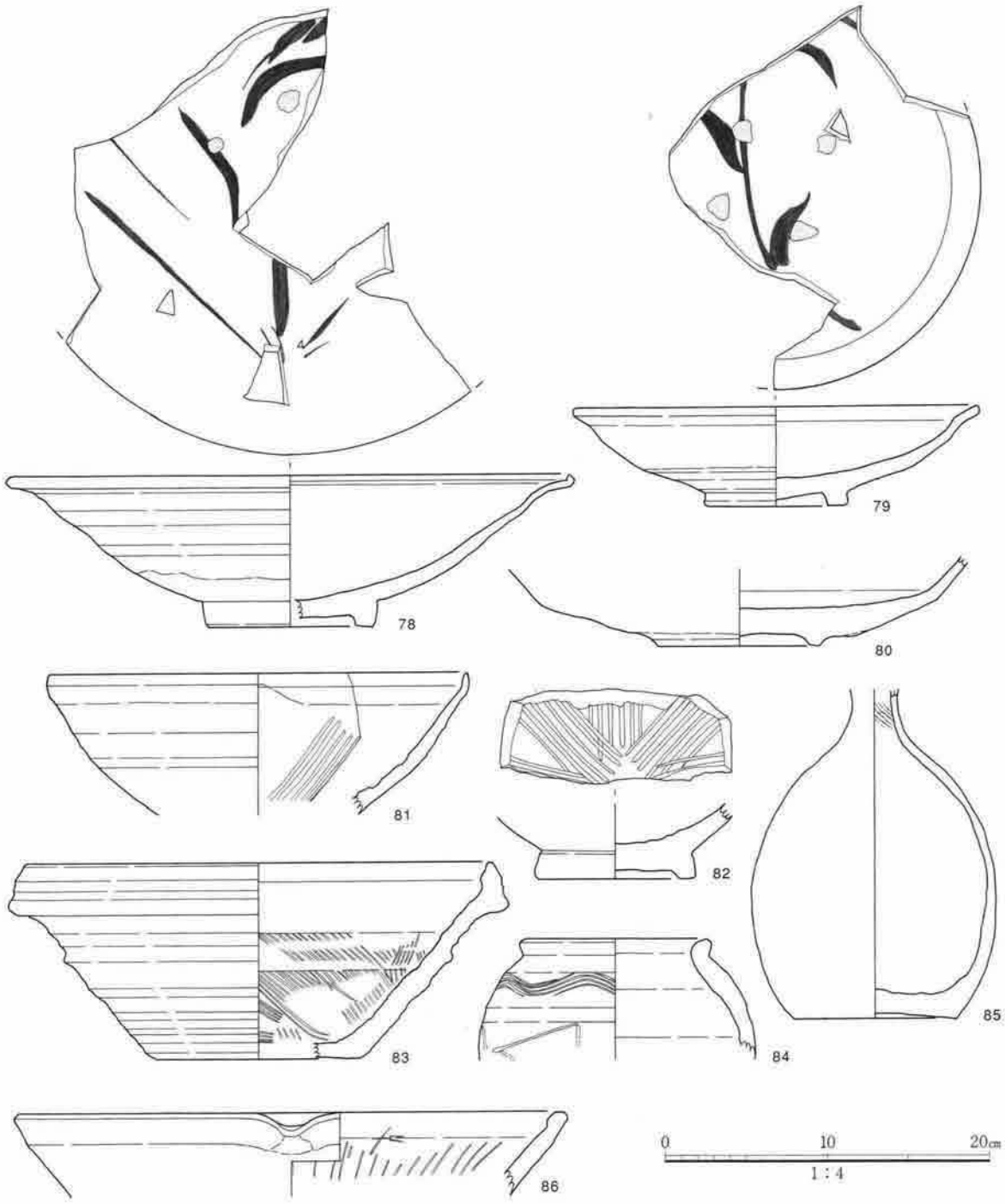


図68　第4層出土遺物(2)

唐津焼(78～82)、備前焼(83～85)、丹波焼(86)

る器形の皿であり、時期がさかのぼるものであろう。

b．第3層出土遺物

OS92－1次調査地からは瀬戸美濃焼織部向付44や志野鉢45のほか、丹波焼の壺46・大平鉢47がある(図66)。これらは下位の第4層も同時に掘削した際に出土しており、第4層に帰属するものの可能性もある。

c．第4層出土遺物

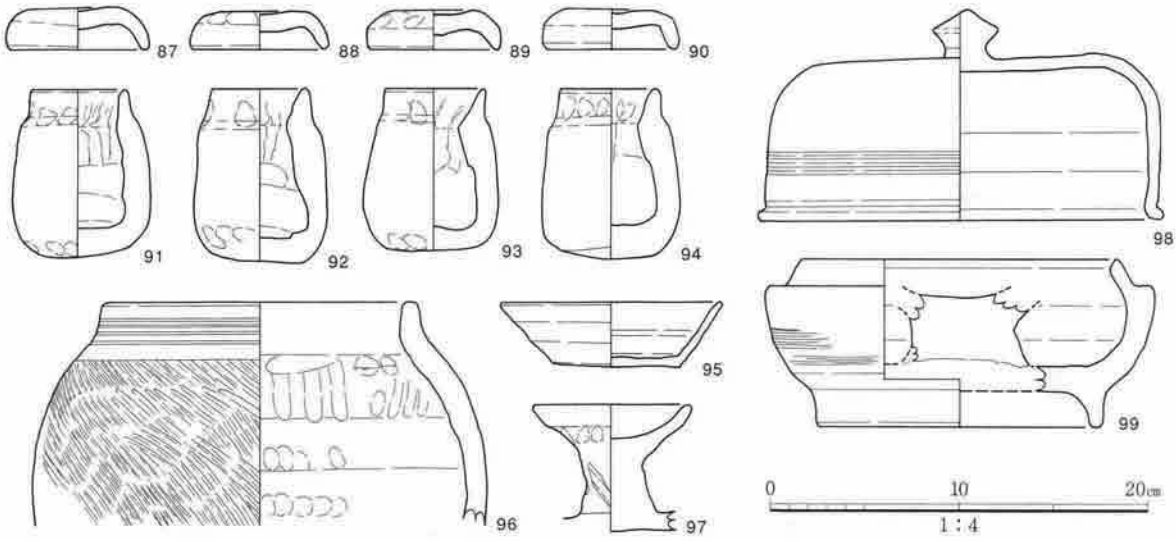


図69　第4層出土遺物(3)

土師器(87～96)、瓦質土器(97～99)

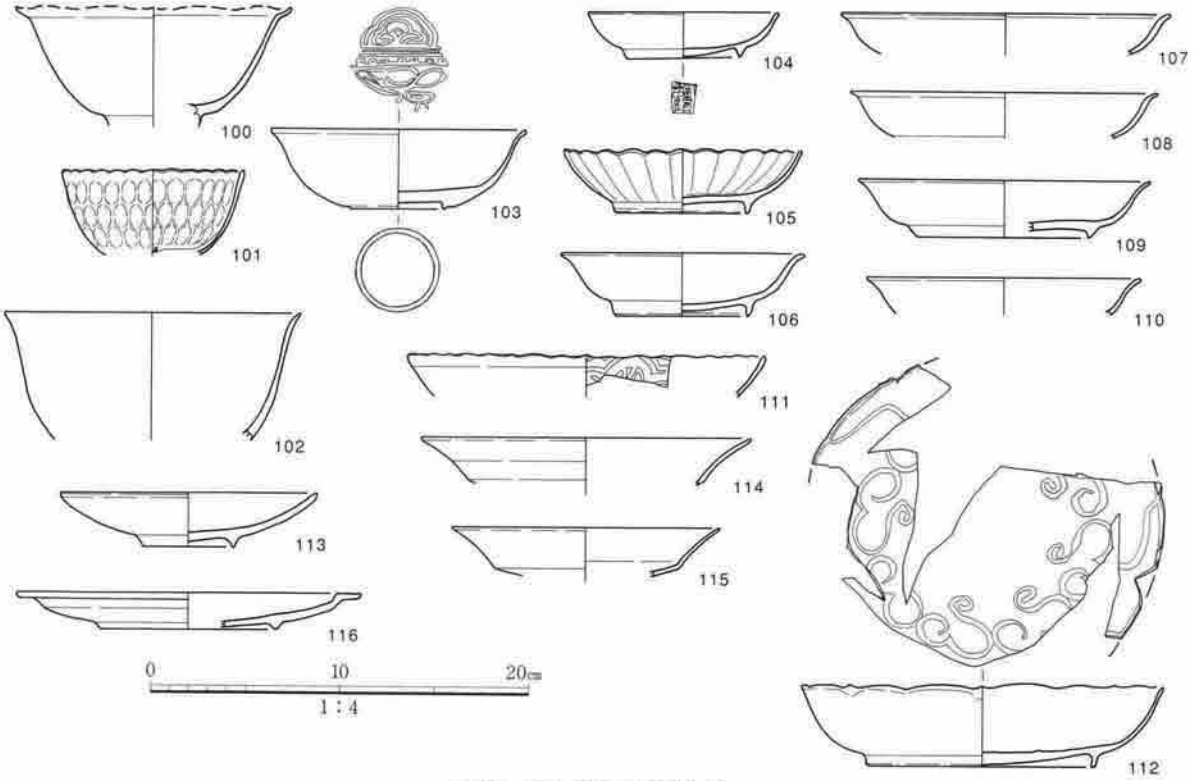


図70　第4層出土遺物(4)

輸入磁器中国白磁(100・101・103～115)、李朝白磁(102・116)

第4層の大坂夏ノ陣の焼土層から多くの遺物が出土した(図67～73)。

国産陶器(図67・68)では瀬戸美濃焼よりも唐津焼の出土量が多い。48～59は瀬戸美濃焼で、48が天目碗、49が総織部茶碗、50が織部沓茶碗である。51～53が志野向付で、51・52の鉄絵文様や釉薬の融け具合から、志野でも新しい時期のものと考える。54・55が織部向付である。56～58は志野皿、59は灰釉の皿である。



図71　第4層出土遺物(5)

輸入磁器中国青花(117～143)

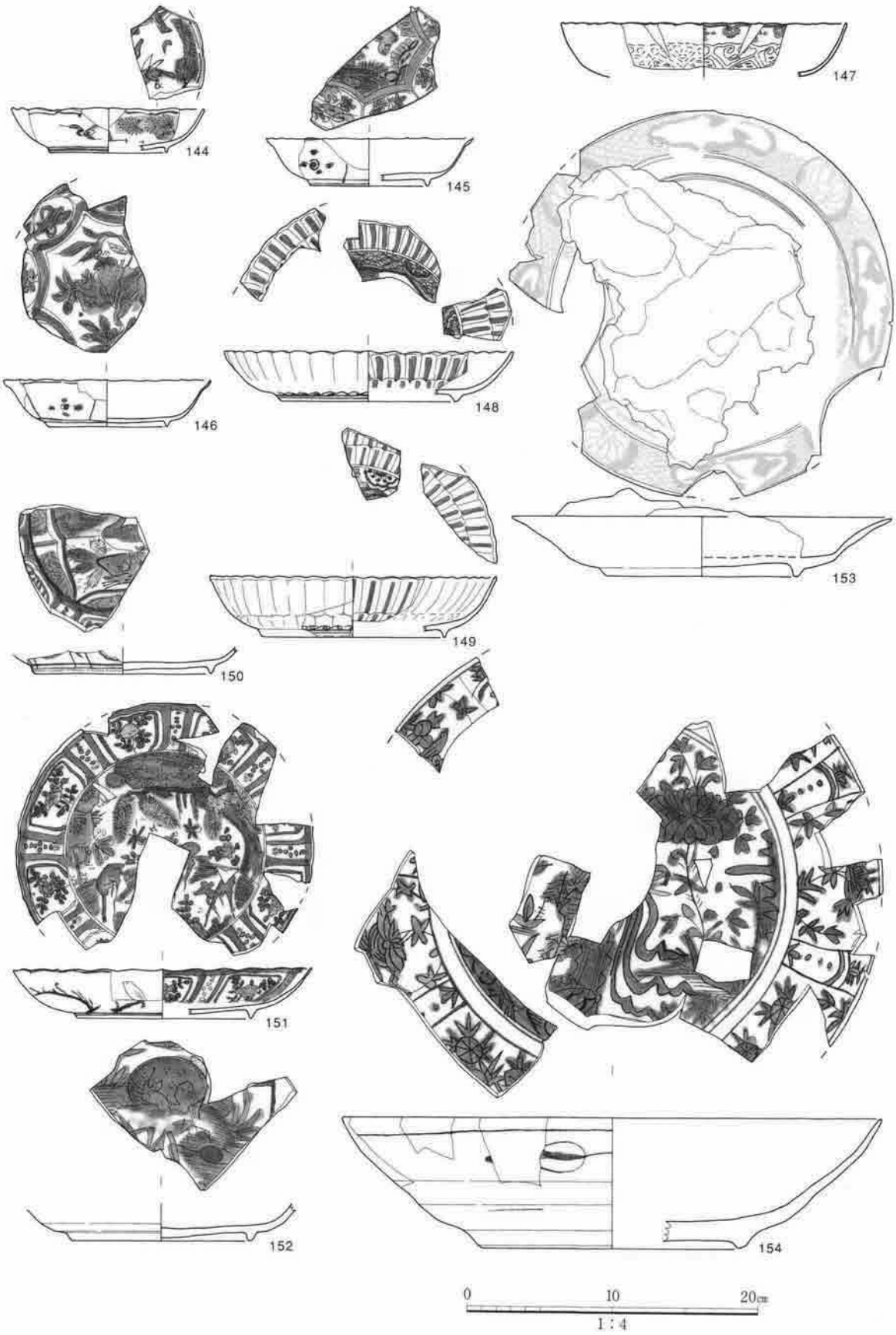


図72　第4層出土遺物(6)

輸入磁器中国青花(144～154)

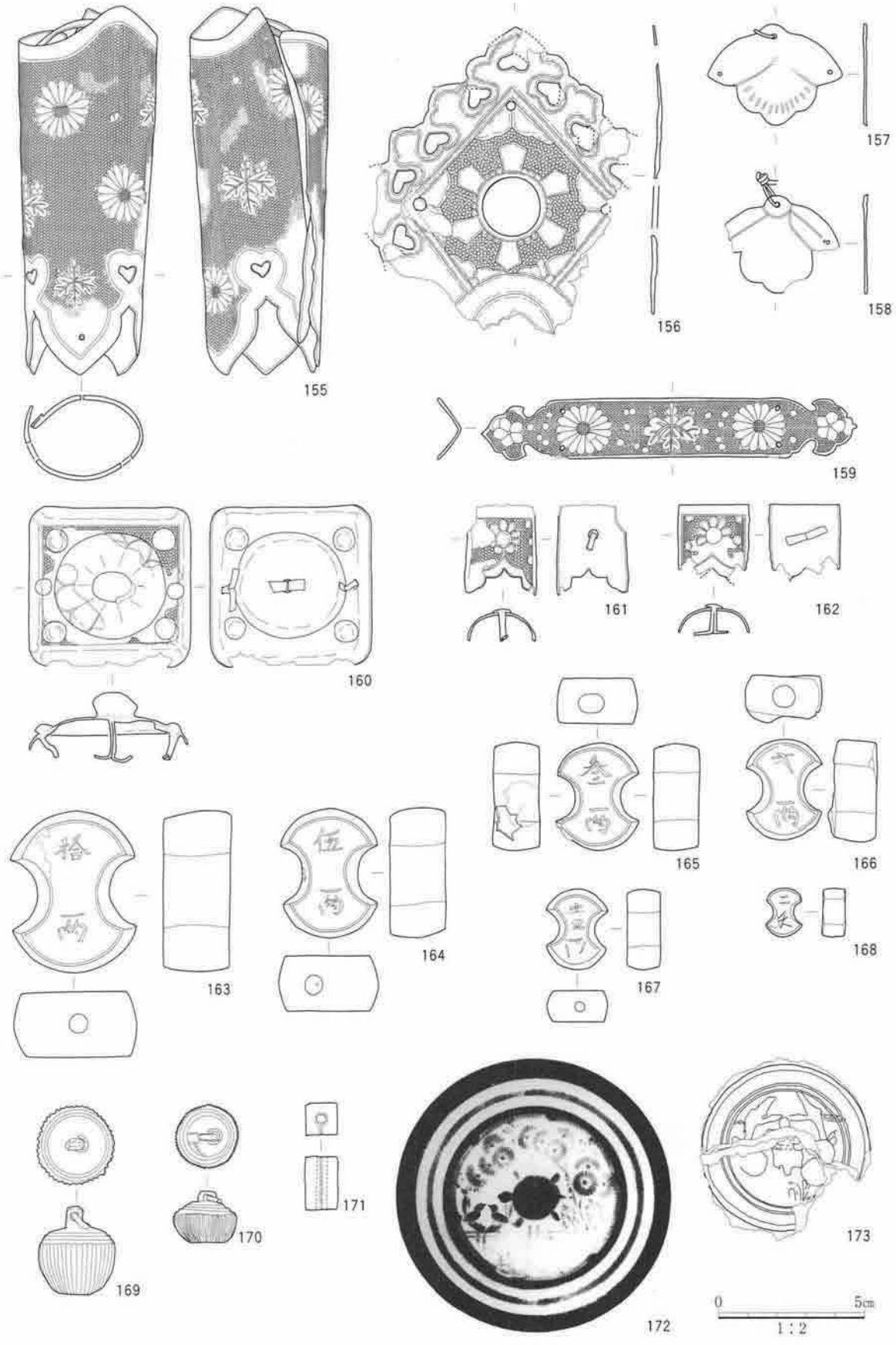


図73　第4層出土遺物(7)

飾り金具(155~162)、分銅(163~168)、錘(169~171)、和鏡(172・173)

60～82は唐津焼である。60～62は碗で、60・61は口縁部に返りがあり、天目形になっている。63・64が小碗、65～69が皿、70・71が中皿である。口縁部が外反するものはあるが、溝縁皿はない。72～74は茶入で、72は瓢箪形を呈している。底部には糸切り痕がある。73・74は肩衝の茶入で、かなり長い胴部となっている。75は壺で、76・77は内面に当て具痕跡のある甕である。78～80は大皿で、78・79には鉄絵の文様が描かれている。81・82は擂鉢で、81は外面と内面上部に釉が掛かる。82は鉢のような厚い底部に高台をもつ擂鉢である。83～85は備前焼で、86は丹波焼の擂鉢である。

図69の87～90は焼塩壺の蓋、91～94は焼塩壺である。SB501の中央の部屋からまとまって出土したものの一部である。95は土師器の皿で、体部が直線的に開き、底部が平坦な器形である。96が土師質土器の火入れ、97・99は瓦質土器の瓦燈、98は瓦質土器の蓋である。

図70は輸入白磁である。100・101は中国製の白

表8　出土分銅の法量一覧

番号	種類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
163	拾両	55.7	42.3	23.9	81.24	中空
164	伍両	44.8	33.2	19.4	39.66	中空
165	参両	38.6	28.1	16.8	48.84	中空
166	弐両	35.2	26.8	15.1	71.39	捻れ
167	不明	28.2	20.8	12.2	35.14	
168	二匁	17.7	13.0	8.3	8.79	

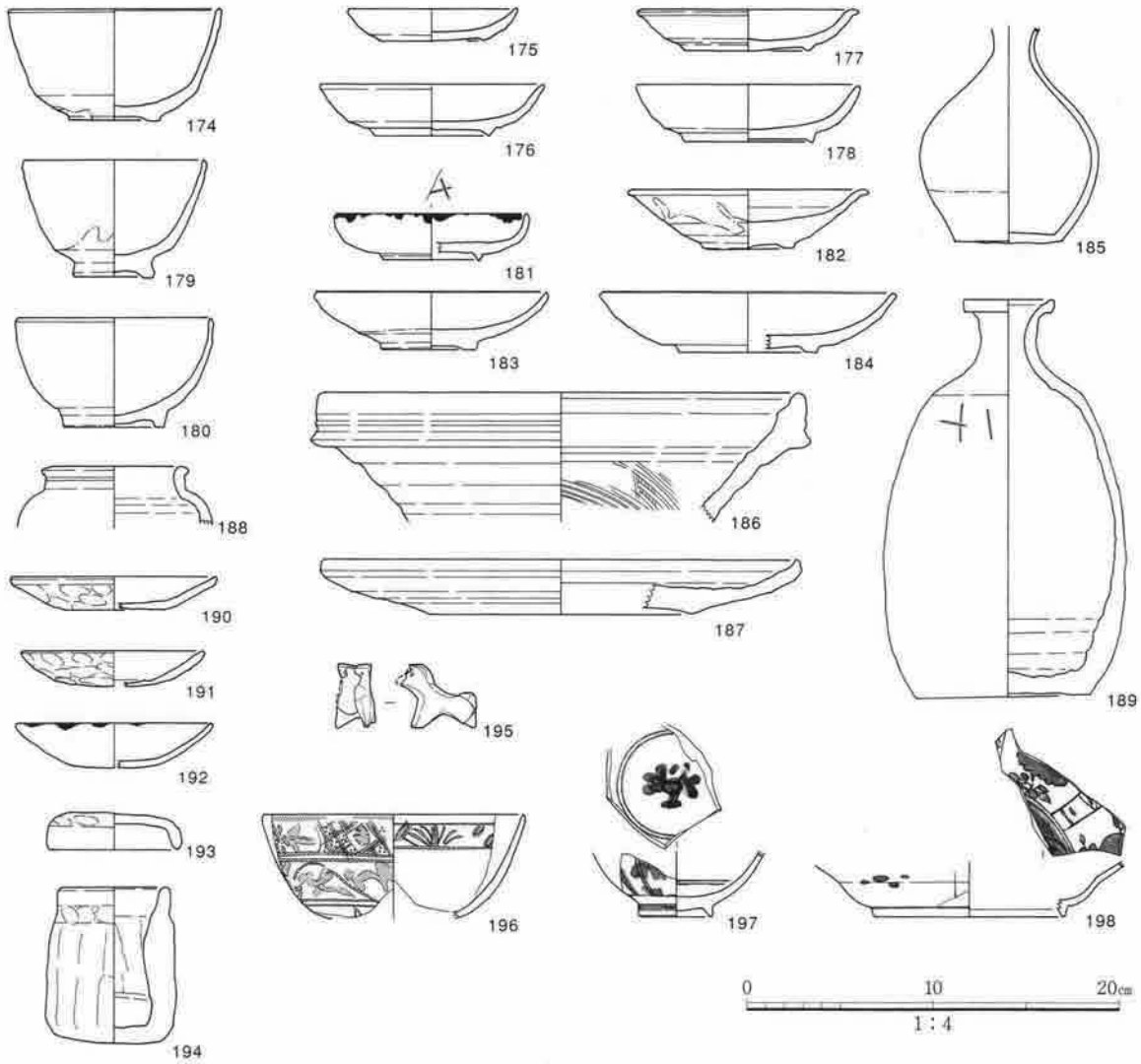


図74　第5層出土遺物

瀬戸美濃焼(174～178)、唐津焼(179～185)、備前焼(186～189)、土師器(190～195)、輸入磁器青花(196～198)

磁碗で、102は李朝の白磁碗である。103は内面に型押し文様のある深皿で、104は高台内に銘款のある白磁皿、105は型押しの輪花皿、106～110は端反りの皿である。109・110は釉がやや青みを帯びている。111・112は内面に型押し文様がある。113は断面三角形になる高台と浅い体部の皿で、出土例の少い皿である。114・115も腰より上半の体部が外反する器形の皿で、この器形も出土例が少い。116は李朝磁器の皿である。

図71・72の117～154は中国製の青花である。117～124は碗で、117・118は景徳鎮窯、119～124は漳州窯の製品である。125・126は景徳鎮窯の小碗で、127～130は碁笥底になる深皿である。

131・132は内外面に唐草文様を描く端反りの皿で、時期がさかのぼるものであろう。133は外面に唐草文を描く皿である。134も内外面に唐草文を描いており、やや時期がさかのぼるものであろう。135～140は直口の皿で、141・142は端反りの皿である。143は鍔皿で、口縁部がやや波状になる。144は直口の口縁部であるが、端部は波状を呈する。145・146は口縁部が外反し波状になる皿である。147～149は端部が波状になる皿で、内面には型押しの文様がある。148・149は型押しの上から文様を描く。150～152は芙蓉手の皿である。127～152の青花は景徳鎮窯の製品である。153は色絵の皿で、内面に火災によって鉄の溶着があり、文様が判明しない。154は芙蓉手の大皿である。153・154は漳州窯の製品である。

第4層から出土した金属器には調度の飾り金具や分銅・和鏡などがある。出土層位が不明のものもあるが併せて報告する(図73・図版48)。155はSB505内に広がる焼土層から出土した槍の飾り金具で、上下の縁以外には魚子を全面に施し、その中に菊文と桐文を散らしている。上端は3個所が高くなり、下端はその逆の位置を尖らせる。156は菱形の主文部に円形の孔を作り、その周囲には剣形を六方に配置し、その周囲には魚子を施す。菱形の周囲には瓔珞文を連続させており、その間がハート形のスカシ孔となっている。図の下端には円形の文様があり、そこで折れている。この折れた円形部分を対称にして菱形文が対になっているものと考える。扁平な金属板で、調度の飾り金具と推定する。菱形文の三方の角に釘孔があり、1個所釘が残っていた。出土地点は不明である。

157・158は花弁状の瓔珞で、上端部の中央に孔を穿ち吊下げる金具を取付ける。両脇の花弁には中央に直線を刻み、先端に小さな孔を開ける。中央の花弁には短い刻みを連続させる。SB507の上層から出土している。

159は長軸に沿ってほぼ直角に折れ曲った飾り金具で、周囲を縁取りし、その中には魚子を刻み、魚子の中に桐文と菊文を配置している。また、両端部には桔梗のような花を配置する。桐文の配置から長軸方向を横に使ったものであろう。左右ある菊文の外側に釘孔がある。調度の飾りと考える。出土地点は不明である。160は方形の飾り金具で、表が膨らんでいる。図の上下端より左右端が長くなっており、この金具の左右幅より幅の狭い縦方向の材に飾ったものであろう。また、釘が金具の上下端より8㎜ほど下に出た所で曲げられており、取付けられる材が8㎜前後の厚さとわかる。中央に菊文を大きく配置し、その周囲に魚子を刻む。四隅には半球形に打ち出した膨らみがある。中央と左右に釘が残る。第4層からの出土である。161・162は断面半円形の飾り金具で、中央に菊文を配置し、周囲には魚子を刻む。菊文の中央には釘がある。釘の長さや上端が水平になっていることから、半裁

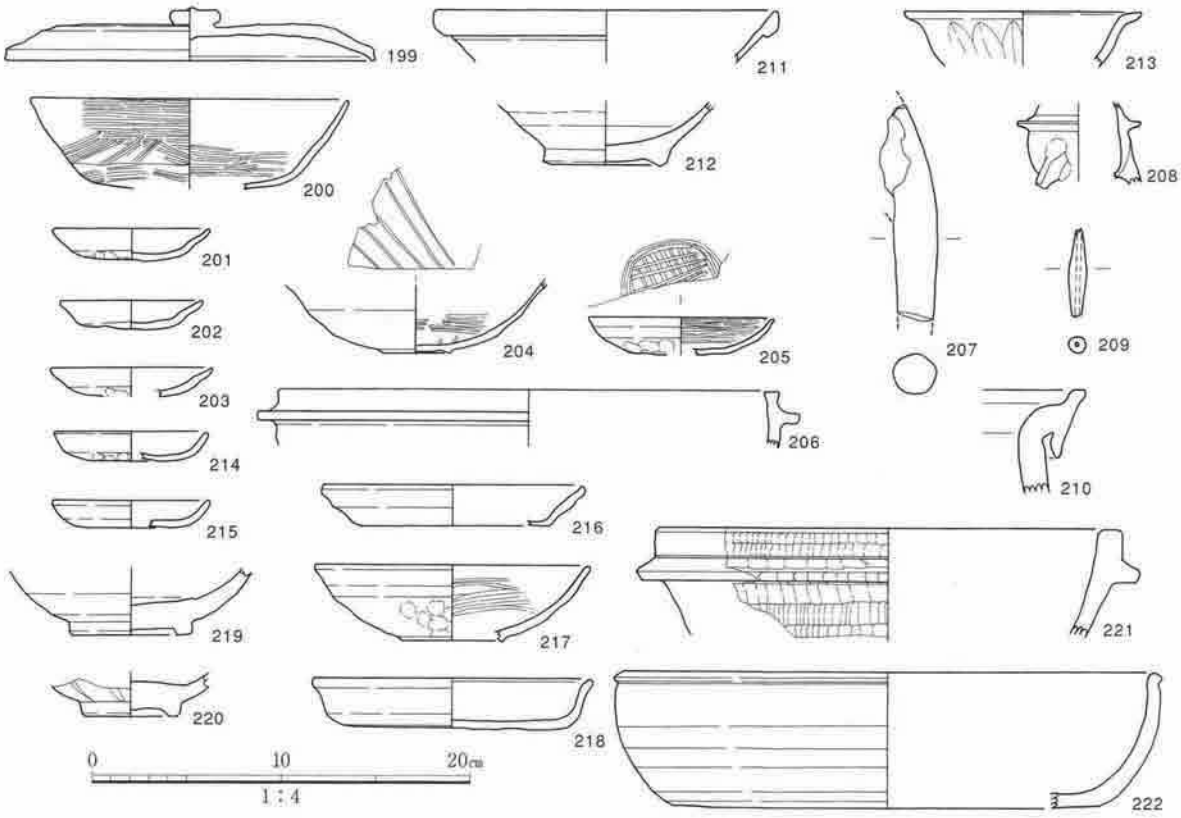


図75　第10層および第10層上面遺構出土遺物

第10層(199～213)、SK1001(214・216・217)、SD1001(218～221)、SD1002(215・222)

した丸棒状の材を飾るものと考える。160と同様の文様である。SB507の上層から出土している。

163～168は分銅である。163は「拾両」、164は「伍両」、165には「参両」、166には「弐(？)両」、167には「壱(？)両」、168には「二匁(？)」と打刻されている。168以外は側面に直径４～７㎜の象嵌がある。163～165は一部が破れて内容物が流失し、中空になっている。また、これらの分銅の周辺からは流れて固まった形の鉛が見つかっている。このようなことから、分銅の外形を銅合金で鋳造して、側面の孔から鉛を流し込んで重量を調整して孔を塞ぐ、という方法で製作したものと考えられる。通常見られる同一材で鋳造された分銅とは一線を画するものである。166は熱によって歪んでいる。この分銅の法量を表８に示す。このほか、錠や引き手などが出土している(図版48－２)。錠の大きなものは全長21.7cm、最大幅５cm、最大厚さ3.5cmで、腐食が著しい。

169～171は錘である。169・170は球形の体部の上に吊下げるための孔のある突起をもつ宮本佐知子分類のＡ－１類で、171は同分類のＤ類である[宮本佐知子1994]。

172・173は和鏡で、172は直径9.5cmの籬菊双雀文鏡で、鏡背面には外側に二重圏線を入れる。二つの圏線の間と外側には櫛歯文があって、内圏線の内側には６個所に円形の突出部があり、それを繋ぐように櫛歯文が巡る。二重圏線の中心にある鈕は亀を象っており、頭を左に向けている。紐孔は縦方向に開いている。鈕の下側には籬を配し、左に双雀、右から上方にかけて菊を散らしている。文様やデザインなどから室町時代中期の作と考えられ、大坂夏ノ陣の時まで伝世したものである。

173は直径5.2cmの菊花接双鶴文鏡である。遺存状況が悪く、Ｘ線撮影したものを図化した。鏡背面

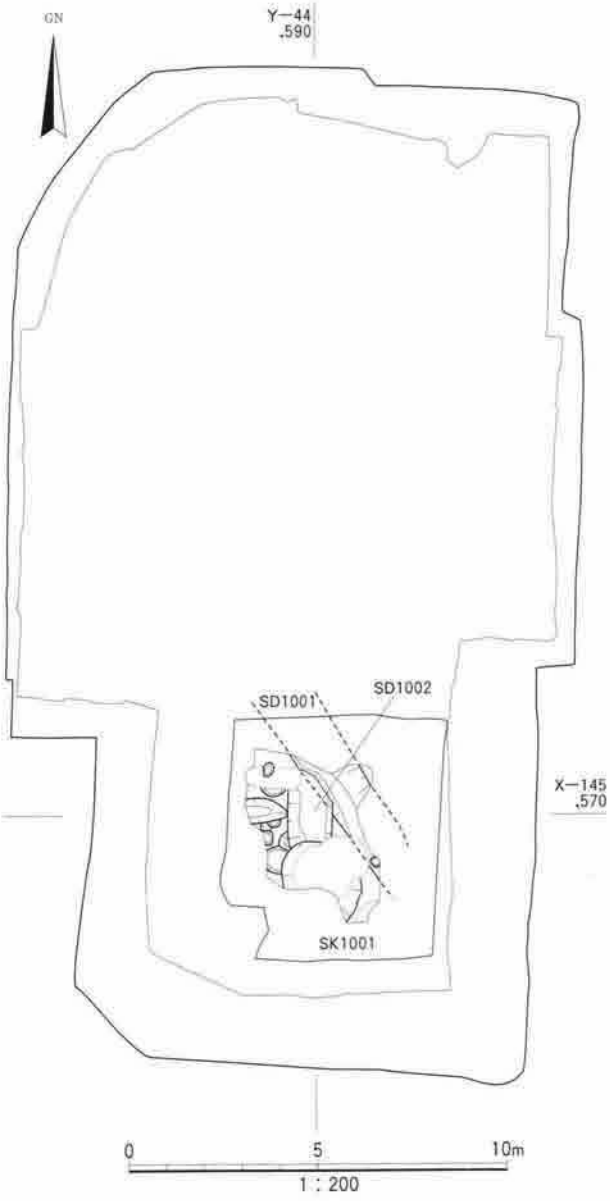


図76　OS86−22次第10層上面遺構配置図

には二重圏線を入れ、圏線内の中央に上向きの亀を象った鈕があり、その上方に向合う２羽の鶴が配されている。下方にも円形と草花のような文様があるが、判別できない。172と比較すると小さく、鶴が嘴を接するように配置されており、後出のものといえよう(註１)。

ｄ．第５層出土遺物

本層から出土した遺物も豊臣後期に属する陶磁器が多い(図74)。174～178は瀬戸美濃焼で、174が灰釉碗、175は灰釉皿、176～178は志野皿である。179～185は唐津焼で、179・180が碗、181～184が皿、185が壺である。186～189は備前焼で、186が擂鉢、187が大平鉢、188・189が壺である。190～195は土師器で、190～192は皿、193は焼塩壺蓋、194が焼塩壺、195が犬形土製品である。196～198は中国製で、196が色絵碗、197が青花碗、198が青花皿である。

ｅ．第10層出土遺物

本層から出土した遺物には奈良時代の須恵器も含まれるが、多くは中世の遺物である(図75)。199は８世紀後半に属する須恵器の蓋である。200は土師器杯で、内外面にヘラミガキが施される。９世紀代の遺物であろう。201～203は土師器皿である。いずれも内面と外面の口縁部直下に横方向のナデ調整を行い、口縁部が外反する。204は断面三角形の小さな高台をもつ瓦器椀で、内面には体部に粗いヘラミガキ、底面に平行するヘラミガキを行っている。205は瓦器皿で、内面上半部には密な螺旋状のヘラミガキ、底面には格子状のヘラミガキがある。204は尾上編年のⅢ－３にあたり[尾上1983]、13世紀前半のものであろう[森島1992]。206～208は瓦質土器で、206は鍋、207は足釜、208は小型の足釜である。209は土錘、210は常滑焼の甕である。211・212は輸入白磁碗、213は竜泉窯の青磁碗で、口縁部が外に開いており、13世紀末から14世紀前半とされる鎌倉光明寺裏遺跡出土例に近似する[上田秀夫1982]。199・200を除けば、おおむね13世紀代前半から14世紀代にかけてのものである。

iii)遺構と遺物

ａ．大坂本願寺期ならびにそれ以前の遺構と遺物

この時期の遺構は、OS86－22次調査地の南半部に設定したトレンチ調査による。そのため、下位

になるほど調査面積が狭くなり、検出した遺構の性格などの解釈が難しくなっている。溝や土壙・礎石状の石が点在する面があるが、詳細は不明である。第10層の上面では狭い範囲に溝や土壙が密集して検出された(図76、図版11上)。

SK1001　第10層上面に検出された土壙で、直径２ｍほどの円形を呈する。上位からの攪乱によってそのほとんどが削平されていた。

214の土師器小皿の口縁部直下の内外面に横方向のナデを施し、外部下半にはユビオサエが残る。216は内面全体と外面の口縁部付近を横方向にナデ調整し、体部下半との境に稜がある土師器皿で、14世紀前半のものであろう。217の瓦器椀は内面上半部に螺旋状の暗文があるが、下半部には暗文は見えない。外面にはユビオサエが口縁部直下まで施されている。尾上編年のⅣ－１～２にあたり、13世紀中葉から後半の遺構であろう。

SD1001　第10層上面に検出された溝である。狭い範囲であるが、方向はN30°Wである。

218の土師器皿は８世紀後半のものであろう。また、219・220の竜泉窯青磁碗が出土した。220の体部外面には、鎬蓮弁文の一部が見える。221の石鍋は鍔がやや下向きに付いており、13世紀後半に属するものであろう。SD1001も13世紀から14世紀代の遺構であろう。

SD1002　SD1001に切られる溝で、ほぼ南北に延びる。土師器小皿215と古瀬戸の洗222が出土し

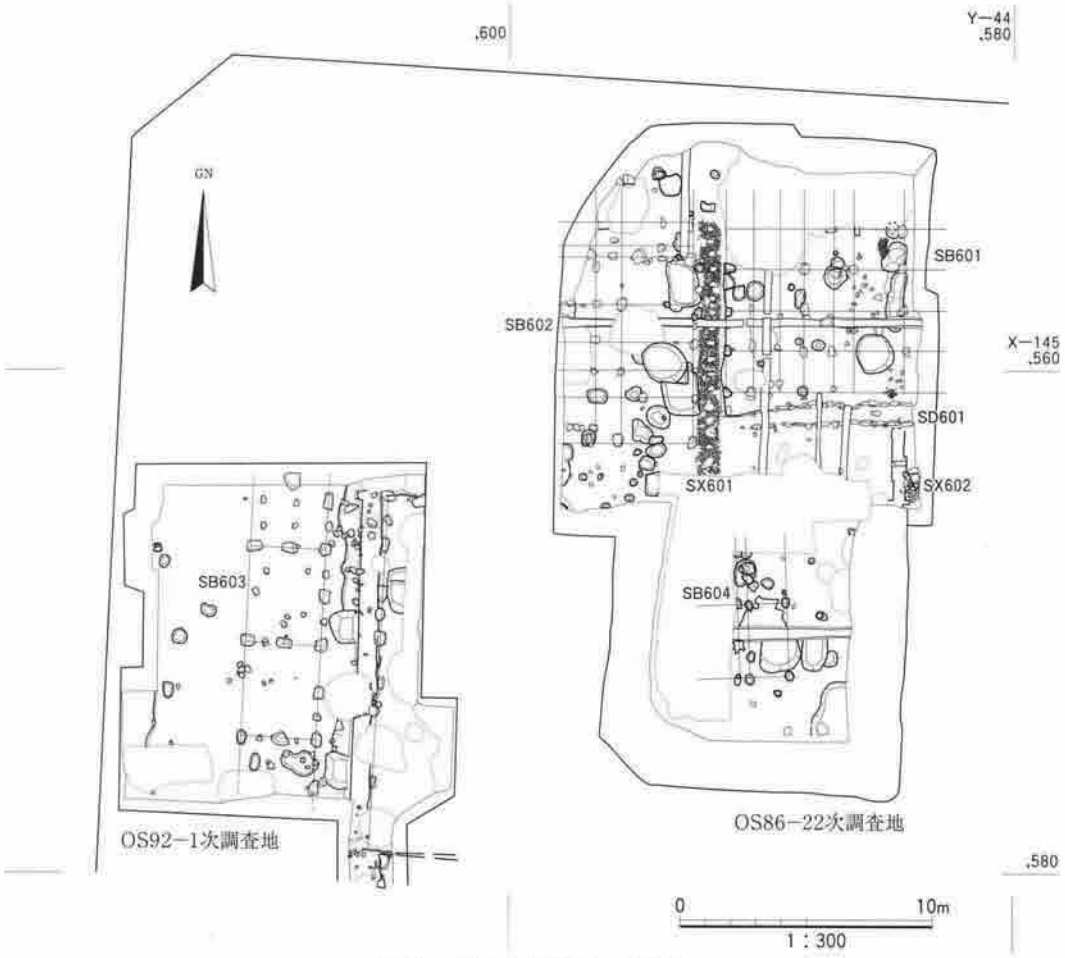


図77　第６層上面遺構配置図

た。

215の土師器小皿は口縁端部に小さな平坦面があり、体部は緩やかな曲線を描いている。口縁部付近のナデも強くない。底部中央がやや高くなるようである。222は復元口径28㎝、復元器高７㎝で、口縁部は外側に折り返され小さく突出する。体部は緩やかな曲線を描き、底部は平坦である。内面と体部外面上半は横ナデ、下半部はケズリ調整である。灰白色を呈し体部外面上半と内面には薄く釉がかかる。このタイプの洗は形態的には洗のＡ類で、11世紀末から12世紀初頭の古瀬戸前Ⅰa期に属するとされる[藤澤良祐1995]。

これら以外にも土壙やピットが重なっており、かなりの頻度で造替えが繰返されている。

ｂ．豊臣期の遺構と遺物

豊臣期には大坂夏ノ陣によって焼亡した遺構面とその下層の遺構面の２面を調査したが、OS87－40次調査地では大坂夏ノ陣焼亡時の遺構面を保存することになったため下層は調査対象とせず、OS86－22次調査地の北半部とOS92－１次調査地の中央部での調査となった。第６層上面遺構から記述する(図77、図版11中・13上)。

SB601　OS86－22次調査地の北東部で検出した礎石建物である。南北6.5m以上、東西７m以上になる。方位は正方位に近い。南北方向の礎石は1.6～1.7m間隔で並び、東西方向は西から４間目と５間目が1.2mと0.8mとばらついているが、それ以外は約１m間隔で並ぶ。西側は後述するSX601に接し、南側は石組のSD601に接する。この二つの遺構に囲まれるように配置されている。

SB602　OS86－22次調査地の北西部で検出した礎石建物である。後述するSX601の西に接し、SB601と同じ方向に礎石が点在している。規模は南北10m以上、東西４m以上になる。SB601の南側柱より約２m付近に大きな礎石が東西に並んでおり、そこが南端になるのかもしれない。北と西側は調査範囲を越えて広がるように見える。南北柱間は南から1.7m、1.1m、1.1m、1.5m、1.9m、0.5m、1.0mと一定せず、東西方向の柱間はさらに違いが大きい。複雑な間取りの建物であった可能性がある。方位は正方位に近い。

SB603　OS92－１次調査地中央に検出した南北に長い礎石建物である。方位はN3°Eである。南北は12m以上あり、東側柱筋は約1.8～1.9m間隔で大きな礎石が置かれ、その間にひとまわり小型の礎石が配置されている。西側柱筋は3.7～3.8m間隔で大きな礎石が並んでいる。東西方向には南北に並んでいる大型の礎石の間に、大型の礎石が１個とその中間に小型の礎石が配置される。東西幅は約３mである。南北3.8m、東西３mの部屋が南北に並ぶような構造である。各部屋にも小型の礎石が柱筋を揃えて並んでいることから、床を張った建物であろう。大きな礎石の中には十字形に墨縄の痕をとどめているものがあった。

SB604　OS86－22次調査地の南半部で検出した礎石建物である。南北７m以上、東西２m以上になろう。方位はN1～2°Eとわずかに西に振る。柱穴は深さが10～20㎝で、礎石の抜取穴としては深い。柱位置の確認が出来ておらず、掘立柱建物なのか礎石建物であるのか定かでない。南北方向に半間間隔で柱穴が並び、東西方向では東端の柱間が1.5m、その西側が0.5mである。南北方向の建物であろう。

SX601　OS86－22次調査地の北半部、SB601とSB602の間に検出した南北方向の通路状遺構である。幅0.8m、南北10mにわたって黒色を呈する数㎝大の玉石を敷き、58～60㎝間隔で扁平な石を配置し、飛石としている。南半部では飛石が抜取られており、その部分には玉石がないので、飛石を置いた後、玉石を敷いているのがわかる。調査範囲の南端部には検出されず、途中で終わっているようである。このような通路状遺構はこれまでの調査では見つかっていないが、その場所が1mほどしかない建物の間に作られており、茶室や便所などの施設へ続く通路であった可能性もある。

SX602　OS86－22次調査地の中央東端、SD601の南に検出した石敷遺構である。北端に大きめの石を置き、西側は面を揃えるように並べている。南東方向に広がるのであろう。集水施設のようなものと考える。

SD601　SB601の南を限る溝状遺構で、SB601の建物の周囲を囲う施設であろう。先のSX601と同じ高さに築かれている。

その他、土壙やピットをいくつか検出したが、それぞれの性格はわからない。

第5層上面では、大坂夏ノ陣で焼亡した大規模な武家屋敷の建物群を検出した(図78、図版11下、12上・中、13上)。

SB501　OS86－22次調査地の南半部に検出した礎石建物で、周囲を後述のSD501が巡る。溝が巡る建物はこの1棟だけである。南北約12m、東西約6mで、礎石は約1m間隔で配置される。南から約4mの位置に東西方向に礎石が並び、柱跡がある。また、それから北へ4mの位置にも大型の礎石があり、ここにも壁があったと推測され、南北に3室に分れると考えられる。南側柱筋から4mの位置の東西柱位置には焼け残った柱の痕跡があった。その距離を測ると西から1.5m、2.0m、3.0m、3.1m、4.0mの位置に見つかった。また、南側の柱筋にも1.5mの距離を置いた2個の柱痕跡があった。これらから、1間が2mと推定でき、6尺6寸となる(註2)。

北と中央の部屋は根太を通して床を張る構造で、南の部屋は床束の礎石と推定する石が点在していることから、この部屋の床は北と中央の部屋より一段高くなっていたものと考える。北側の部屋には大甕を抜取ったと思われる穴がある。中央の部屋では数100個もの焼塩壺や陶磁器が出土した。南の部屋からは家具などの調度品を飾った金属器や輝安鉱(アンチモンの原石)が出土している。倉庫として利用されていた建物であろう。方位は正方位である。

SB502　OS86－22次調査地の北西部に復元した礎石建物である。調査地の西側中央に東西方向の焼壁があり、それを南の壁として、北に広がる礎石の抜取穴で復元した。南北13m以上、東西5m以上になろう。方位は正方位である。

SB503　OS86－22次調査地の北部に復元した掘立柱建物である。周囲には焼土が分布せず、板壁の建物であったと推定する。東側に簡単な竈SX501を築く。

SB504　OS92－1次調査地東部から、OS92－1次調査の東拡張区・南拡張区に広がる礎石建物である。SB504の規模は南北7間(14m)、東西5間(10m)以上に復元できる。西側柱列は壁内に0.9～1m間隔で礎石が並ぶが、北側柱列では北西角の礎石から1mと9mの位置に2個の礎石を検出した。南側柱列は攪乱のため礎石は見つからなかったが、建物の内部に当る落込みがあり、そこまでを

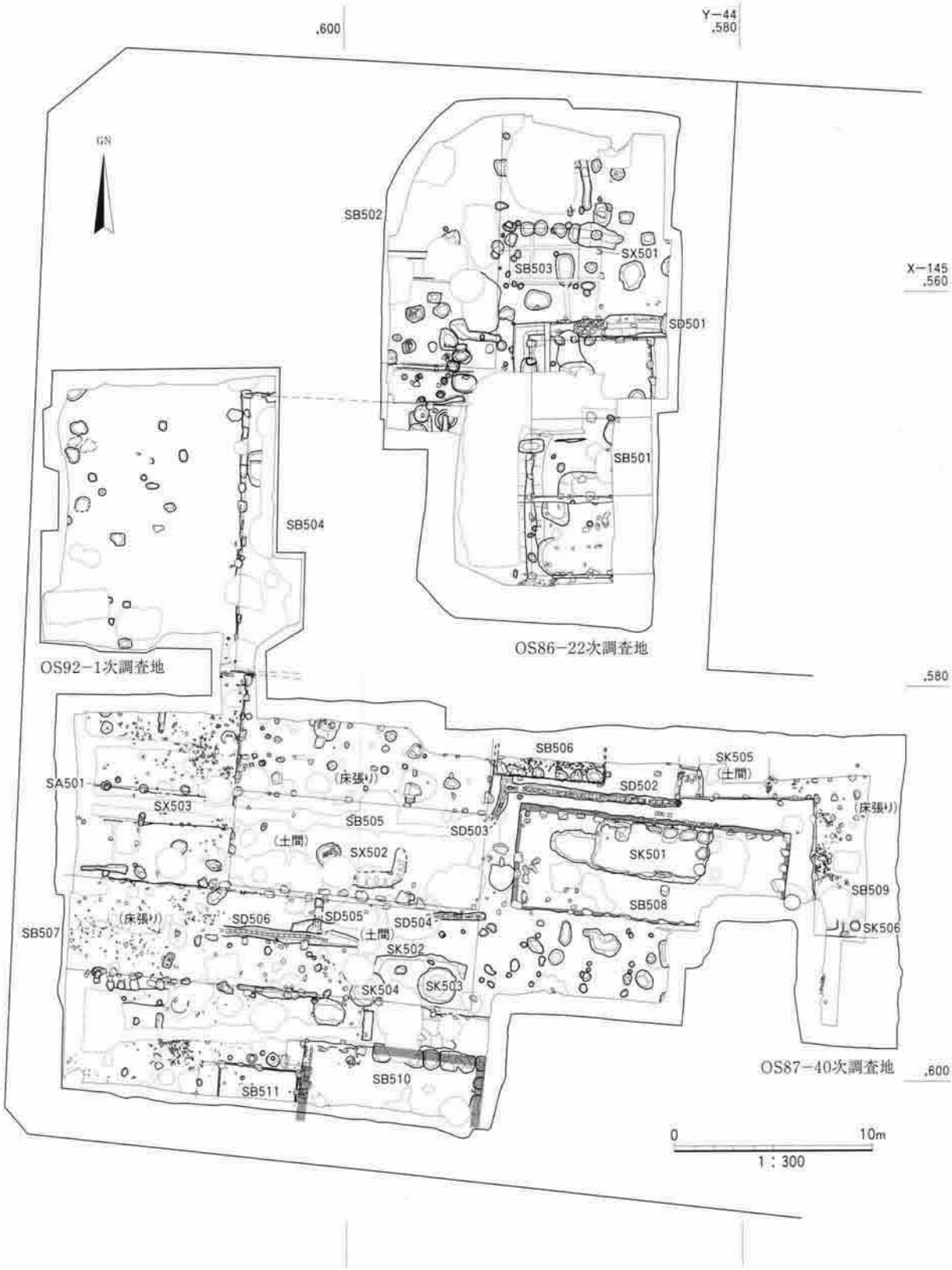


図78　第５層上面遺構配置図

建物範囲とした。南側のSB505との隙間は0.1mほどしかない。方位はN2°Eである。

OS92－1次調査の東拡張区は、OS92－1次調査地東端部で検出した南北礎石列とOS86－22次調査で検出していた遺構群が、どのように広がるのかを確認するために設定したトレンチで、OS86－22次調査地の西端部に重なるように設定した。そこでOS86－22次調査の南壁に隠れていた東西方向の焼壁を検出し、その西側延長部に礎石を2個検出した。南拡張区はOS87－40次調査地で検出していたSB505と同一の建物であるのか、否かを確認するため、先の調査地と繋ぐように設定したトレンチである。その結果、OS87－40次調査の建物と、OS92－1次調査の建物が別のものであることが確認できた。

SB505　OS87－40次調査地とOS92－1次調査南拡張区で検出した礎石建物である。OS92－1次調査南拡張区ではSB505の北西隅の礎石とその南に連続する礎石を検出した。SB505は南北約10.5m、東西約13mで、北側約6mには礎石状の石が点在しており、床を張っていたと推定できるが、南側には礎石状の石もなく、大きな竈SX502が設置されていることから、土間であったと推定できる。北側の床張り部分の礎石は南北1m間隔で東西方向に並んでいるが、南北には柱筋が通らない。この部分から槍・脇差(図版48－3)・扉の壺金具(図版48－5上)・茶臼などが出土している。

扉の壺金具の大きさは長さ68cm、最大幅17.5cm、先端部の厚さ3cmで、直径15cmの軸受部には6.5cmの軸受の孔が貫通する。OS87－78次調査で出土したものよりひとまわり大きい。

外周の礎石は基本的には1m間隔で配置されているが、いたる所に攪乱があり、全周で確認できない。以前に刊行された[鈴木1989]では、この建物の東・西・南面の礎石のない部分を出口として復元しているが、そこには攪乱があり、礎石が無かったのかは判断できない。

この建物の東側からSD503が建物内に延びているが、内部では上位のSD301によって攪乱を受け、ほとんど残っていなかった。しかし、こうした排水施設が建物内を通っていることやSX502があることから、この建物に台所があったと判断できる。棟の方位はE5°Sで、北部の建物群とは方位が異なっている。

SB506　OS87－40次調査地北端中央部で検出した礎石建物である。SB505の東にあり、東西は約5.5mある。南北は調査範囲で1mしか検出できておらず、規模は不明である。南壁に沿って約1m間隔で直径0.5～0.8mの穴があり、礎石の抜取穴と考える。壁は火災に遭って固く焼けた状態で残っていた。厚さ10cmあり、壁内には塼を床下に2段、床上部分に1段以上塗込めている。西壁はSB505とかなり接している。建物内部には2～4cm大の礫を多量に混ぜた粘土を厚く敷いて、外部より0.1～0.2mほど高くし、また床下には、SB505の床下にも続くSD503が延びてきており、SB506の北に水を使う施設や液体の貯蔵施設が存在していた可能性がある。さらに、この建物はSB505と同様にSD503の上位に建設されており、当初はSD503の位置と重ならないように建物が存在していて、その後に下水暗渠に重なるように建物が建設されたという可能性もある。内部から輸入陶磁器のほか、炭化米が多量に出土した。壁の構造などから蔵であろう。南壁の方位はE5°Sである。

SB507　OS87－40次調査地の中央部、SB505の南に接して存在する礎石建物で、南北5m、東西21m以上になる東西棟である。棟方位はE6°Sである。後述するSB508の南には礎石が見つからない

ため、この建物はSB508の南には広がらないと推定され、東端はSK502をSB507内の遺構とみなして復元した。西は礎石が調査地西壁まで連続するので、さらに延びると考える。北側柱列はSB505の南側柱列から0.3～0.5m離れているだけで、かなり近接している。礎石の間隔は東部も西部も１mであるが、SB505の西側柱筋付近では礎石間隔が4.5mあり、この間のどこかで礎石間隔が0.5mか1.5mとなっているのかもしれない。南側柱筋は礎石が南北に２列接して並んでいる。南にある礎石列は別の建物の可能性もあるが、SB507の南には礎石状の石が見つからなかったため、建替えによるとも考えられる。南側柱筋の二つの礎石列は北側柱筋の西部の礎石とはある程度対応しているが、東部の礎石とは対応するところが少ない。

建物内には東側のSK502付近では礎石状の石がなく、土間であったと推定される。土間部分にはSD504～506の３条を検出した。西側ではSK504の西端付近から礎石状の石が建物の南部に点在しており、この付近から西に床が張られていたと推定できる。図78では[鈴木1987・1989]の復元よりは床の部分を東に広げた復元とした。また、その部分でも北側には礎石がないため、SD506の西端付近まで土間であったと推定している。床束の礎石は西では小さなものが散在している状態で、東では比較的大きめの石が見つかる。床の構造に違いがあると考えられる。

SB508　OS87－40次調査地の東部にあり、SB505の東、SB506の南に検出した礎石建物である。南北5.2m、東西13.7mにもなる東西棟の蔵である。西側柱筋では北側に入口が設けられていたようで、その部分には礎石がない。南半部には柱筋上に礎石が１個存在するが、それ以外にも周囲に点在しており、元の位置をとどめていない。東側の礎石は北から１m間隔で３個並び、その南は調査範囲外になる。北側柱筋は１m間隔で15個の礎石が並ぶ。礎石の多くには柱が焼けた状態で遺存しており、正確な柱位置が判明する。焼け残っていた柱は北側柱筋に７個所あったが、その距離は5.75mであった。この距離を柱間６間で割ると0.95～0.96mとなる。これを２倍した長さは1.91～1.92mで、１間は６尺３寸３分前後となる(註３)。その外側に0.2mほどの厚さで焼け残った壁が検出された。南側も同様の構造である。棟の方位はE7°Sである。内部には甕を埋めていたと推定できるSK501がある。西半部では炭化米が多量に出土しており、ここにも北側のSB506と同様、米が貯蔵されていたことがわかる。

SB509　OS87－40次調査地の北東隅で検出した礎石建物である。平面形はSB508を囲むように逆Ｌ字状になる。東西礎石列の方位はほぼ正方位で、わずかに西で南に振る。OS87－40次調査地のSB505～508・510・511とは方位が揃わず、北部のOS86－22・92－1次調査地の建物群とよく似た方位をとる。この建物の南北棟部分と東西棟の東半分には礎石が広がっている。礎石は東西棟の南側柱筋や南北棟の西側柱筋では１m間隔で並んでおり、１間が２mと推定できる。南北棟内部の礎石は南北には柱筋が通るが、東西にはばらつきがある。東西棟の西部では礎石が見つからず、礎石のない所が土間になっていた可能性がある。土間の西端は建物内部よりも更に低くなっており、庇になっていた可能性がある。そこにはSK505があり、南北棟の南端ではSK506が見つかった。SK506の南側では、ほかでは見つかった壁の痕跡が見つからず、桶があるところには壁が作られていなかったと考える。こうしたことから、この桶は便所であったと考える。

この南側は上層のSB301を残したため、その下位に建物があったのかは不明であるが、後述するように、上層の第3b層上面ではこの面の建物と同位置に建てられているものがあり、SB301に先行する建物が存在した可能性はある。

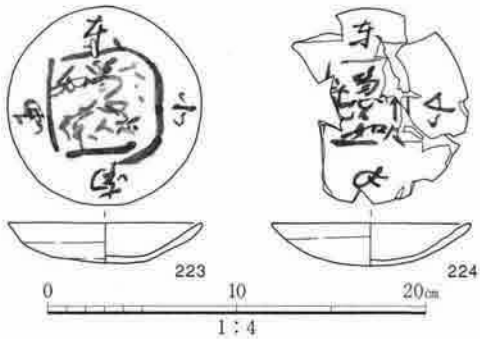


図79　SB510礎石抜取穴出土土師器

SB510　OS87－40次調査地の南端中央部にあり、西側と北側の柱筋を検出した礎石建物である。西側柱筋の南半には60㎝大の礎石が近接して３個見つかった。礎石上の柱位置は約0.8～0.9m間隔と推定する。北半には約１mの間に礎石がなく、入口と推定できる。そこには平瓦を２列に並べて積上げている。瓦の端から端は0.4mあり、入口の下部を強固にするための造作であろう。また、北西隅の外側に１基、入口南端の西側１mにも１個の大きな礎石状の石が存在する。入口に作られた庇の礎石であろうか。ただ北東と南西にしかなく、北西隅には見つからなかったので、攪乱によってなくなったのかもしれない。北側の柱筋では西半は厚さ約0.4mの壁が残り、壁内には塼が立てて塗込められていた。その下に礎石が0.9m間隔で見つかった。その東には礎石の抜取穴が７基続いている。そのうちの東から２基目の抜取穴から「急々如律令」と墨書された土師器皿が２枚出土した(図79)。地鎮に用いられたものであろう。東端に検出した抜取穴の南にも同様の穴が南北に２基あり、それらも礎石の抜取穴であろう。そこが東壁に当る。建物の方位はN8°Eである。

内部は土間になっており、よく焼けている。そこからウマの足の骨が２本出土した(註４)。ウマの骨が出土したことから[鈴木1989]ではSB510を馬屋としたが、礎石が密にあり、壁も0.4mと厚いなどといった建物構造から判断して、蔵と推定する。ウマの骨は大坂夏ノ陣時の混乱で紛れ込んだものと考える。

SB511　OS87－40次調査地の南端中央部、SB510の西に接して検出した礎石建物である。東西に４個の礎石と、東端の礎石の南に１個、さらに西端の礎石から南１mのところに抜取穴状の穴、その南に礎石状の石がある。以上から東西５間、南北２間以上の礎石建物と考える。[鈴木1987・1989]では東西４間と復元したが、ここでは西に１間広くした。礎石はほぼ１m間隔で並んでいる。建物の方位はSB510と同じN8°Eである。内部から陶磁器と炭化した米が出土した。この建物も蔵の可能性がある。

SA501　OS87－40次調査地で検出したSB505の西にある東西方向の掘立柱列である。SB505の西には後述するSX503が西側に延びており、その北端に沿って２m間隔で３個見つかった。同時に存在していたのか判然としないが、この北一帯には礫が散在しており、さらに西端の柱穴の北３mには柱穴が１個、SA501を東に２m延長したSB505に接する所から北３mにも柱穴状の穴があり、これらによって構成される建物の可能性もある。

SD501　OS86－22次調査地の南半部のSB501を囲むL字状に曲る溝である。SB501にかなり接近しており、雨落溝であるなら軒の出は短い。北側の東西溝と南側西端には礫が集中するところがある。

SD502　OS87－40次調査地で検出した瓦組暗渠で、SD503に繋がる。SB506とSB508の隙間にそれらに平行して作られている。溝の中に丸瓦を上下に組んだ排水管を埋設する。東端には集水枡がある。

SD503　OS87－40次調査地で検出した瓦組暗渠で、SB506の床下からSB505の床下に続いている。SB506を出たところでSD502が接続する。

SD504　OS87－40次調査地のSB507の北東隅付近で検出した瓦組暗渠で、推定した東壁の外側に集水枡があるところが東端で、西は後述のSD506の方向に続くと考える。

SD505　SB507の北側柱から南に続く瓦組暗渠である。北端に集水枡があり、そこから南に延びる。後にSD506ができることで中央部以南が造替えられている。

SD506　SB507の中央部で検出した瓦組暗渠で、東から西に延びる。SD505を壊して造られている。

SK501　OS87－40次調査地SB508の内部で検出した東西６ｍ、南北３ｍほどの隅丸長方形の大きな土壙である。底には埋めていた大甕を抜取ったと推定できる直径80㎝ほどの痕跡がある。推定される甕の数は15～21個であろう。液体の貯蔵を行っていたようである。それらの甕は夏ノ陣時点では抜取られ、砂で埋められていた。

SK502　OS87－40次調査地SB507の南東隅付近で検出した。SB507の方向と同じように掘られている。平面形が方形の東西4.6ｍ、南北2.3ｍほどの浅い落込みで、性格は不明である。

SK503・504　SK502と重なるようにある井戸状の遺構である。

SK505　OS87－40次調査地SB509の東西棟の西端で見つかった埋めた箱である。そのほとんどが調査範囲外にあり、規模は不明である。水溜の可能性がある。

SK506　OS87－40次調査地SB509の南北棟の南端にある便所と推定される埋桶である。この南側は壁が作られていないようで外から見えており、人糞を汲出せるようになっていたと考えられる。

SX501　OS86－22次調査地SB503の東で検出した簡易な作りの竈である。長径0.28m以上、短径0.23ｍと小型で、平面形は楕円形を呈する。両脇には平瓦、奥には丸瓦を立てて外壁としており、内部には粘土を貼って燃焼室を作る。内径は長径が0.23ｍ以上、短径が0.20ｍである。

SX502　OS87－40次調査地SB505の内部で検出した大型の竈である。北側に開く焚口が弧を描くように築かれ、燃焼室は11個復元できる。東側の燃焼室が小さく、西側ほど大きな燃焼室を築く。竈の壁は粘土で構築したもので、火によって赤変し固くなっている。西端の燃焼室内には平瓦が敷かれており、そこが灰落し部分であったと推定できる。

SX503　OS87－40次調査地SB505の西で見つかった通路状遺構である。幅約1.5ｍほどで西の調査範囲外に延び、北側にはSA501が平行する。板を敷いた痕跡がある。

ｃ．徳川期の遺構と遺物

大坂夏ノ陣焼土層（第４層）を覆う整地層（第3b層）と、その上の整地層（第3a層）の上面で検出した。第3b層上面の遺構群は下層の第５層上面遺構群とよく似た配置で、第3a層上面は1724（享保９）年の妙知焼で焼失した遺構面であろう。下層の第3b層上面の遺構から記述する（図80、図版12下・13中）。

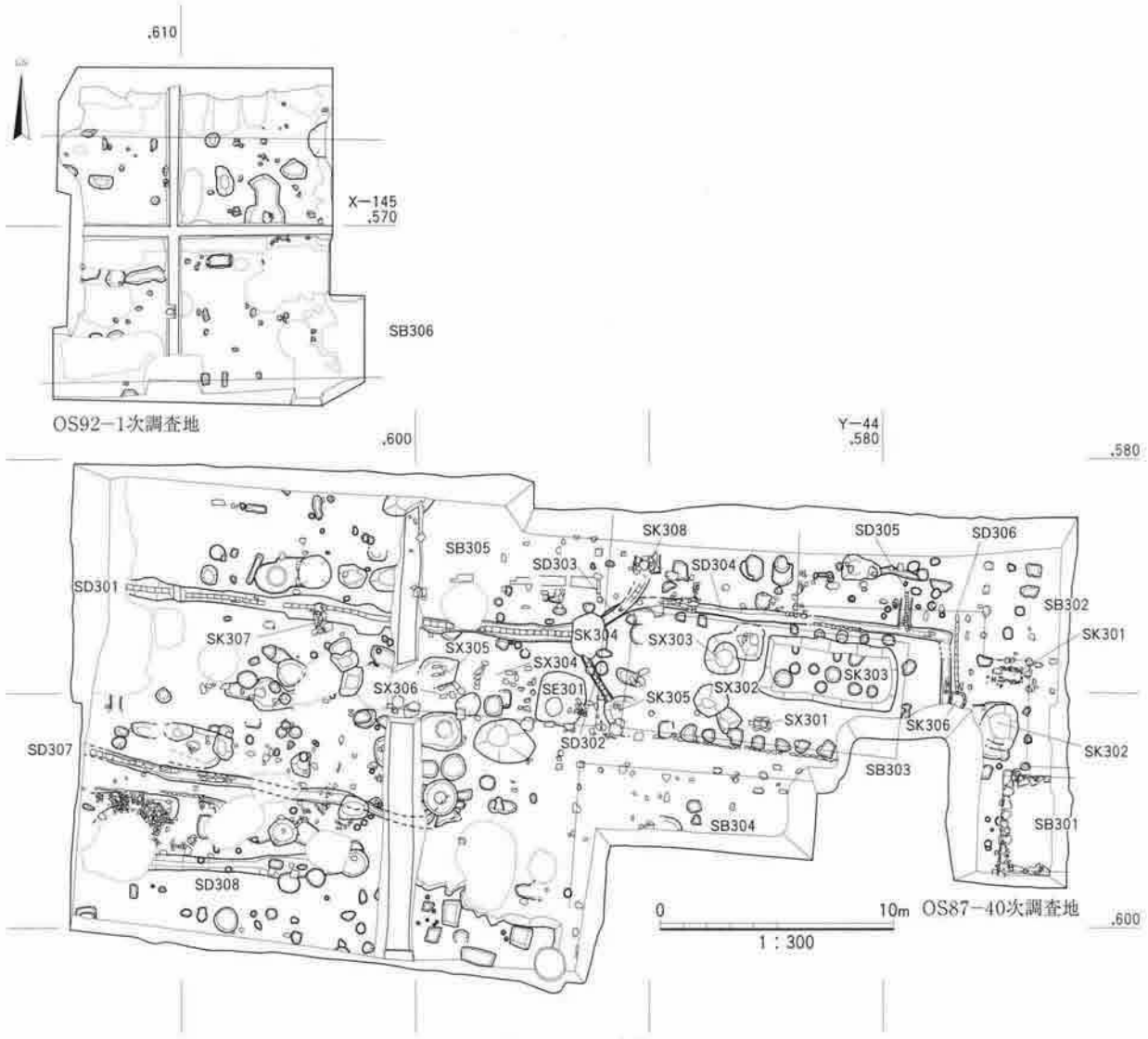


図80　第3b層上面遺構配置図

OS87－40次調査地の東部では下層の遺構群とほぼ重なるように建物遺構が検出され、比較的復元が可能である。それに対し西部では小規模の土壙やピット、小型の礎石状の石が散在しており、建物の復元はむずかしい。ただし、中央部には竈が築かれており、それを覆う建物があったと思われるが、礎石や柱穴が見つかっておらず、建物は復元できなかった。

SB301　OS87－40次調査地の南東端で検出した礎石建物で、周囲の基礎部分に石が巡り、蔵と推定できる。柱の礎石は周囲の石を利用している。

SB302　OS87－40次調査地の東端で検出した礎石建物で、第５層の**SB509**に重なるように存在する。北東部の礎石は１ｍ間隔で並ぶが、南東部の礎石は0.9～1.2ｍ間隔になる。また、西部では礎石と推定できる石や抜取穴と推定する穴が散在するが、柱筋は復元しにくい。下層の建物を踏襲したものと推定し、Ｌ字状の形態に復元したが、**SK301**や**SK302**を取り囲むようにあり、細部には違いがある。

SB303　下層の**SB508**を踏襲した礎石建物で、同じように蔵になろう。南北約５ｍ、東西約12ｍに

復元できる。周囲の礎石は抜取られているが、その外側には壁を保護するかのように拳大から人頭大の石を巡らせている。抜取穴から柱間隔は１ｍと推定できる。内部には下層建物と同じ位置に同様のSK303と、SX301～303が造られている。

SB304　SB303の南に広がる礎石状の石で復元した。それらは約１ｍ間隔で並んでいる。

SB305　下層のSB505に重なるように点在する礎石状の石で復元したが、西側は不明である。内部にSX304～306やSE301がある。

SB306　OS92－1次調査地の全域に広がる礎石状の石で復元した建物である。東西南北に石が並ぶが、プランは復元できない。２棟以上になる可能性もある。

SD301　OS87－40次調査地の北西部を東西に走る瓦組暗渠である。敷地西端から中央部まで直線的に続いてSB305の中を通り、その東端でSD302とSD303が接続する。途中に南からの溝と接続する会所SK307がある。接続する部分にはSK304があり、この中に会所があったものと考える。

SD302　SB303の南西端のSK305から続く瓦組暗渠である。SK304の会所でSD301に接続する。

SD303　SB305の北東から続く瓦組暗渠である。北端に方形の集水枡SK308がある。SK304の会所でSD301に接続する。

SD304　SB303の北と東側を巡るように作られた瓦組暗渠である。SB303の東で南に折れ、調査地外に延びる。西端はSK304の方向に曲ろうとしているが、SD303によって削平されている。

SD305　SB302の中を通る南北方向の瓦組暗渠である。南端部はSD304に重なるようにあるが、SD304が廃絶した後に、北に流れるように設置された可能性もある。すべてを調査していないため確実ではない。

SD306　SD304の東側にある南北方向の瓦組暗渠である。南端にはSK306が作られている。この溝もSB302の中を通り、北へと延びている。

SD307　SD301より南約7.5ｍの所にある東西方向の瓦組暗渠である。土壙間を蛇行するように見つかった。東端はSB305の南付近に延びる。

SD308　OS87－40次調査地の南西部を東西に走る溝である。

その他、西部には多くの土壙やピットが掘られているが、どのように利用されていたのかは不明である。これらの時期は17世紀代と考えられる。

第3a層上面の遺構は上層に焼土層（第2b層）が埋土になる土壙が広がっており、1724（享保９）年の妙知焼で焼失した遺構面であろう。加工した石を組み合わせた暗渠は18世紀後半に下るなど、一部には時期の下る遺構もある（図81、図版13下）。

礎石建物や石組遺構・溝・井戸、小規模な土壙など各種の遺構があるが、OS87－40次調査地では幅１～２ｍほどの長い土壙が東西方向にいくつも掘られている。この土壙群は焼土が埋土になっており、火災後の後片づけのための廃棄土壙であろう。このような土壙は住友銅吹所跡でも見つかっており［大阪市文化財協会1998］、火災後の片付けの際には、敷地内に穴を掘り瓦礫を処分するのが一般的な方法であったことがわかる。また、OS92－１次調査地でも同様に焼土を含む土壙が、礎石が抜取られたような配置で見つかっており、そこには建物が存在していた可能性がある。また、その内部

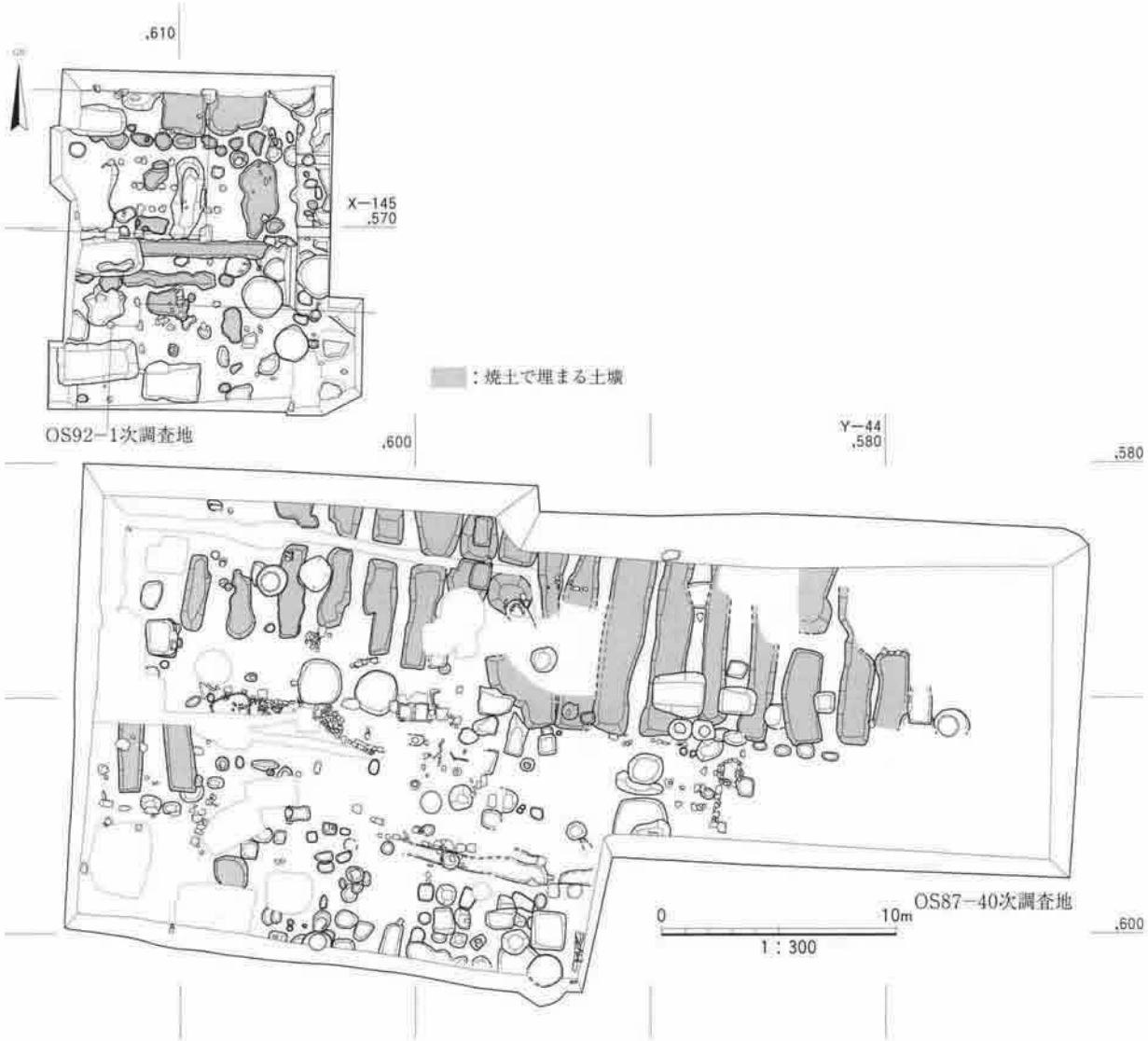


図81　第3a層上面遺構配置図

や北側にはOS87－40次調査地で見つかったような土壙があり、ここでも同様な廃棄土壙が作られている。層序の項でも述べたように、廃棄土壙の配置を見ると、この敷地全域が豊臣期以降、継続して広く占有されていたことが明らかである。

3）まとめ

i）大坂本願寺期およびそれ以前

奈良～平安時代の土師器や須恵器などが出土しているが、調査範囲が狭かったため、遺構の広がりなどは明確にできなかった。本節の調査地周辺部は、大川の後背湿地や東横堀川の前身となるラグーンが広がっていたと推定されるところでもあり、「難波津」の推定地とされているところでもある[日下1991]。本章第４節で報告したOS85－28次調査地や、東のOS90－50次調査地には奈良～平安時代の遺構が広がっており（第Ⅲ章第１節）、南東250ｍのOS87－33次調査地では飛鳥時代の遺物も多く出土している（第Ⅲ章第６節）。この地区が上町台地上に展開している建物群への上陸地点であった

可能性は高い。今後、こうしたことも念頭に置きながら、この地区の古代の地形環境を復元していく必要がある。

中世前期には、希少な例である11世紀末から12世紀初頭の古瀬戸前期の洗が出土し、13世紀代前半の瓦器や白磁も出土している。古代以降も流通に係わる集落が存在している模様である。さらに、室町時代にはかなり狭い範囲に遺構が密集していることがわかった。青磁や瓦質土器も出土していることから、古代以降、中世後期まで連綿と集落が営まれているようである。ただ、一部しか調査しておらず、当該期の実態には迫れない。

今回紹介した遺物はごく一部に過ぎないが、様々な地域の陶磁器がこの地域に運ばれてきていたことがわかる。輸入磁器や東海地域の古瀬戸前期の陶器や、第５節で報告した14世紀代の古瀬戸の瓶子や花瓶も見つかっており、この地域において活発な商業活動が行われていたものと推測できる。

東横堀川が開削される以前には、ここにその前身であるラグーンが形成されていたと推定され、それを取込んだ港湾施設があったと推定されている。東横堀川が開削されるまでのラグーンは、現在とは異なり、南方から北の大川へと続く水域であったと考える。東横堀川分流地点より南750ｍの現在の本町橋付近では、奈良時代の遺物が出土する水成層が堆積し、湿地帯のような状況であったと推定されている[古市晃1999]。また、南1.7㎞付近にある住友銅吹所跡でも古代から中世の地層は滞水状態で堆積した水成層であった[大阪市文化財協会1998]。こうした東横堀川流域の調査成果から、少なくとも1.7㎞南までは湿地帯の様相を呈した水域であったと考えられる。ただ、舟が入って行ける水域がどこまで広がっていたのかはわからない。

このように推定される地形環境から、この地域では自然地形をうまく利用しつつ、前代から引き続いている港湾機能を十分に活かしながら、集落が形成されていたと推定できる。この集落は明応２年の『御陣図』に記載されている「ワタナヘ(渡辺)」と考えられ、その中心となる場所が大川に向ってラグーンが取付くこの一帯なのであろう。今後、この地域の再調査が行われることで、そうした大坂本願寺期以前の様相が明らかとなろう。

調査地の東側を南北に走る現在の松屋町筋は、豊臣期以前には主要な道路となっていたと想定している[松尾1999]。京から続く大川とそれに直交する南北道路、さらには舟溜りとなる東横堀川の前身ラグーンという周辺環境は、集落が形成される要素として十分であり、交通の結節点として、また交易の場所として繁栄していたのではなかろうか。

ii)豊臣期

大坂の城下町の形成は四天王寺までの上町台地脊梁部の平野町地域がもっとも早く、その後、大川の北側の天満地域が城下町となっていく。大坂城の西側の上町地域も大坂城築城工事とともに早くから整備されたと考えるが、上町台地の西側裾部一帯は1594(文禄３)年の惣構造成によって平坦面が形成され、その後の三ノ丸造成以後に建物が建ち並ぶと想定される(第Ⅲ章第９節)。惣構の西端部の市街地化は大坂城周辺部より遅れるようである。

豊臣前期の遺構は全域では調査できていないため、前期の様相については復元がむずかしい。しかし、この地域が北側の土佐堀通や東側の松屋町筋に近いことから、早くから城下町として整備されて

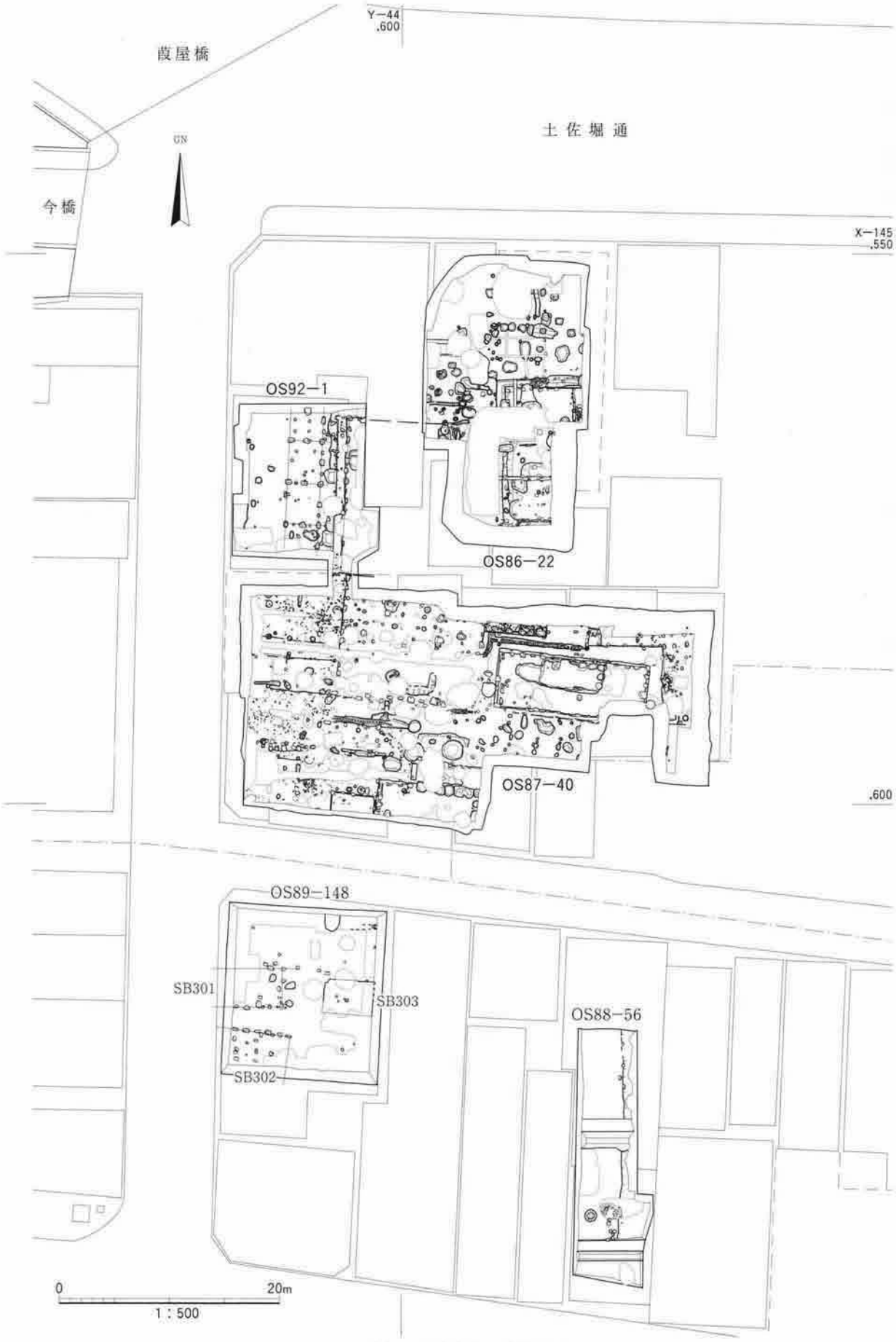


図82　大坂夏ノ陣直前の遺構配置図

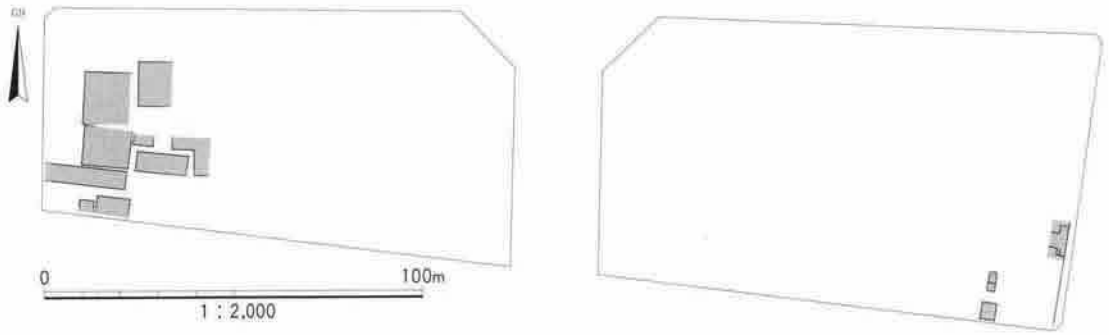


図83　現在の街区における建物配置図

いた可能性はある。

豊臣後期にはかなり規模の大きな武家屋敷が建設されている。建物の配置やその性格、出土遺物などから武家屋敷の台所や蔵が集まる奥向きの一角と推定できる。建物群は北側の土佐堀通から南側の道路まで隙間なく配置されている。これを屋敷の奥とすれば、現在の敷地の西側三分の一ほどの広がりがあり、東側の大きな事務所ビルが建設されている三分の二ほどの場所に、この屋敷の中心部分である表部分が広がっていたと推定できる。

敷地全体を一つの屋敷地と仮定すれば、現在の敷地面積が7,500㎡(2,270坪)以上となる。道路の拡幅を勘案すれば、豊臣期には現在の道路部分にも敷地が広がっていたと考えられ、それ以上の面積になるであろう。8,700坪以上と推定されている大坂城三ノ丸にあった豊臣前期の武家屋敷には及ばないが[大阪市文化財協会1992a]、街区をすべて占有していることからかなり大きな規模の武家屋敷といえる。

敷地内の建物の方位には二群あり、正方位を示す建物群はOS86－22・92－1次調査の建物群とOS87－40次調査地北東隅のSB509で、敷地の北部に広がり(図82)、これらを北群と呼ぶ。別の一群はOS87－40次調査地のSB505～508・510・511のように、東で南に5～7°振る方位の建物で敷地の南部にあり、これらを南群とする。

北群と南群の方位の違いは、それぞれが面する北側と南側の道路に規制された可能性も考えられる。OS87－40次調査の東端で検出したSB509を含め、それより東側の建物は東側の松屋町筋の方位に規制されている可能性がある。北群の建物間隔は南群に比べやや広いが、南群はかなり近接して建てられている。また、北群には豊臣後期の遺構面が2枚存在し、そのいずれもが正方位で、後期の前半段階と同じ設計基準がある。ただ、南群では下層の調査が行われておらず、豊臣後期前半の遺構面が存在するのかどうかが判明していない。徳川期の建物も豊臣後期の建物の方位を踏襲しており、敷地南半部は南側道路と同じ方位の建物が建設されている。

また、この敷地の東側の松屋町筋は惣構の北側から大坂に入る南北幹線道路である。北側の土佐堀通はこの時期には、本章第3節で見たように道路に直交する地割があり、建物も建ち並んでいたことが判明しており、京からの街道として整備されていたと考えてよい。このような主要幹線道路が交わる場所に、大規模な武家屋敷を配置して、惣構の防衛に当っていたのであろう。第4節で報告したOS87－78次調査地の武家屋敷もその街区全域を占めていた可能性もある。その場合、面積は9,400㎡

(2,850坪)以上となろう。こうした想定が許されるなら、松屋町筋を挟んで二つの大きな武家屋敷があったと考えられる(図83)[松尾1994b]。

iii)徳川期

徳川期になっても、この敷地南半は豊臣期と同じような建物配置であり、OS87－40次調査の範囲は一つの敷地として利用されている。豊臣期と同じ位置に同規模の蔵があり、その東側にも別の蔵や建物が建っている。また、敷地全体の排水を目的とする暗渠が張り巡らされている。このような遺構の配置から徳川期になってもこの広い敷地が一つの敷地として利用されていたようである。徳川期の住人は特定できていないが、元禄期の絵図を見ればこの敷地が北組に属していることがわかる。かなり上級の町人の敷地だったのであろう。これはその後の遺構面でも確認できる。1724(享保9)年の大火である妙知焼でこの敷地も被災しているが、災害復興のための廃棄土壙が、敷地全体に東西に並んで発見されている。このように利用できるのは、やはりこの時期までここが一つの敷地として所有されていたことにほかならない。この土地所有形態は、昭和初期まで踏襲されていたことが地図などで明らかである[清水靖夫編1995]。

層序の項で報告した出土遺物から、この屋敷には上質の陶磁器が所持されていたことがわかる。金襴手の肥前磁器の色絵や、揃いで所持されていた肥前磁器の染付類や京焼は、住友銅吹所跡の妙知焼焼土層から出土した陶磁器に遜色ない。また、中国製青花も出土しており、遺構の配置と相まってかなり富裕な町人の屋敷地と想定できる。

(松尾)

註)

(1)和鏡に関しては大阪市立博物館(調査時)の前田洋子氏より御教示を頂いた。

(2)柱位置は1：50の図上で測り、1尺を30.303cmとして計算した。

(3)柱位置は1：20の図上で測り、1尺を30.303cmとして計算した。

(4)足の骨は同定しておらず、どの部位かは判明していない。

第７節　OS88－56次および89－148次調査

１）調査地と周辺の概要

OS88－56・89－148次調査は大規模な武家屋敷が検出されているOS86－22・87－40・92－１次調査（本章第６節）と道路を隔てた南の街区に位置する（図84）。試掘調査の結果、地表下1.5～1.7mにおいて大坂夏ノ陣と考えられる焼土層が確認されたため調査を実施することになった。両調査とも焼土層までを重機により除去し、以深は人力による掘削を行った。OS88－56次調査では第３層以下は部分的な調査である。



図84　OS88－56次および89－148次調査地位置図

２）調査の結果

ｉ）層序と遺物

OS89－148次調査の所見を中心に記述する（図85）。

第１層　徳川期以降の堆積層で、層厚は150～170cmある。

第２層　大坂夏ノ陣に対比できる焼土層である。OS88－56次調査では唐津焼皿1や瀬戸美濃焼の志野皿2・向付3が出土した（図87）。

第３層　にぶい黄色粘土質砂層からなる整地層で、層厚は10cmある。OS88－56次調査では第３・４層を一括している。上面の標高はOS88－56次調査では西でTP+3.9m、東でTP+3.6mと東が低くなる。OS89－148次調査では上面が遺存していない部分が多いが、TP+3.7mとほぼ平坦である。

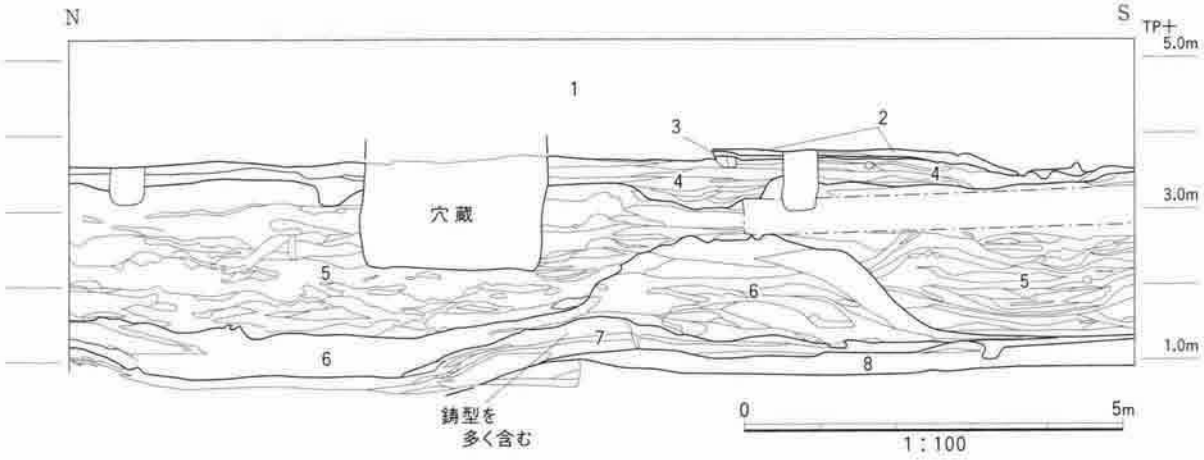


図85　OS89－148次断面図

OS88－56次調査では志野丸皿4が、OS89－148次調査では繭型分銅19が出土した(図87)。錆のため明瞭でないが、表面に「肆両」、裏面には「後藤」と「極」の線刻がある。豊臣後期の整地層と考えられる。

第４層　OS89－148次調査ではオリーブ褐色粘土質粗粒砂・黄褐色細粒砂などの薄層からなる整地層で、層厚は20～30㎝ある。

第５層　OS88－56次調査では第5a層と第5b層に分かれ(図86)、第5b層の上面に竈SX501が見つかった。第5a層は小礫～粗粒砂からなる層厚約80㎝の整地層で、瀬戸美濃焼鉄釉折縁皿5や唐津焼碗6の他、青花碗7が出土した。第5b層は礫混り粗～中粒砂で、下部にはラミナが観察される。瀬戸美濃焼灰釉丸皿8、土師質羽釜10、青花皿9が出土した(図87)。OS89－148次調査では第5a層と第5b層の違いが確

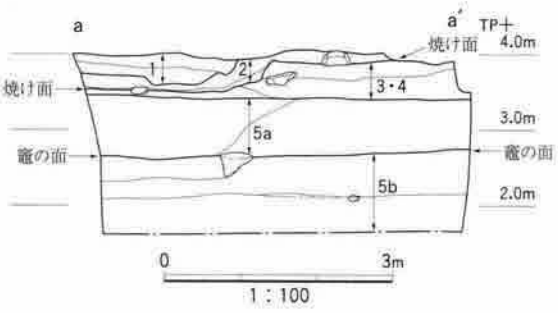


図86　OS88－56次断面図

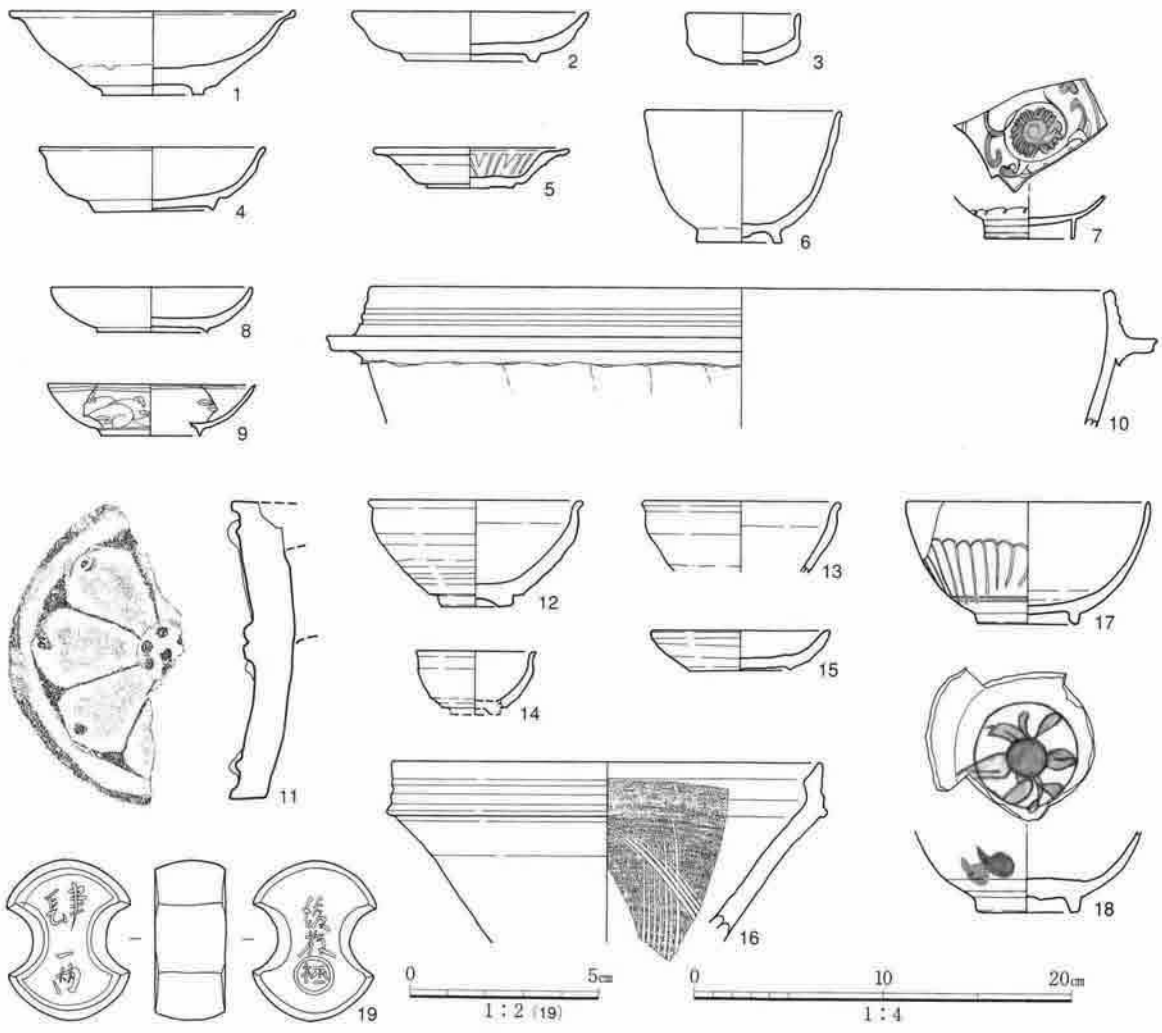


図87　OS88－56・89－148次出土遺物

OS88－56次調査地第２層(１～３)、第３層(４)、第5a層(５～７)、第5b層(８～10)、
OS89－148次調査地第３層(19)、第５層(11)、第７層(12～18)

認できなかったが、上部の整地土は比較的厚く、それがOS88－56次調査地の第5a層に相当すると考える。OS89－148次調査の第５層は層厚が約200㎝にも及び、有機物を含むシルト・砂礫およびこれらの偽礫からなる整地層である。下位の第６層による堤状盛土SX601を厚く覆い、平坦にしている。第5b層および第５層の下部は1594(文禄３)年の東横堀川の開削、あるいは1598(慶長３)年の三ノ丸造成に伴う整地層であろう。時期を示す遺物ではないがOS89－148次調査では本層中から四天王寺創建瓦と同笵の無子葉単弁八葉蓮華文軒丸瓦11が出土した(図87)。

第６層　砂礫からなる整地層で、高さ1.5ｍの東西方向の堤状盛土SX601を築いている。第５層の整地に係わる地業の可能性もある。平面的に調査していないため上層との間にどれだけの時間的間隙があったかは不明である。

第７層　シルト～粗粒砂の薄層および炭層からなる地層で、層厚は20㎝前後であるが、北西部では厚くなり植物遺体を多く含むなど湿地状の堆積物となっている。炭層からは後述のように多くの鋳造

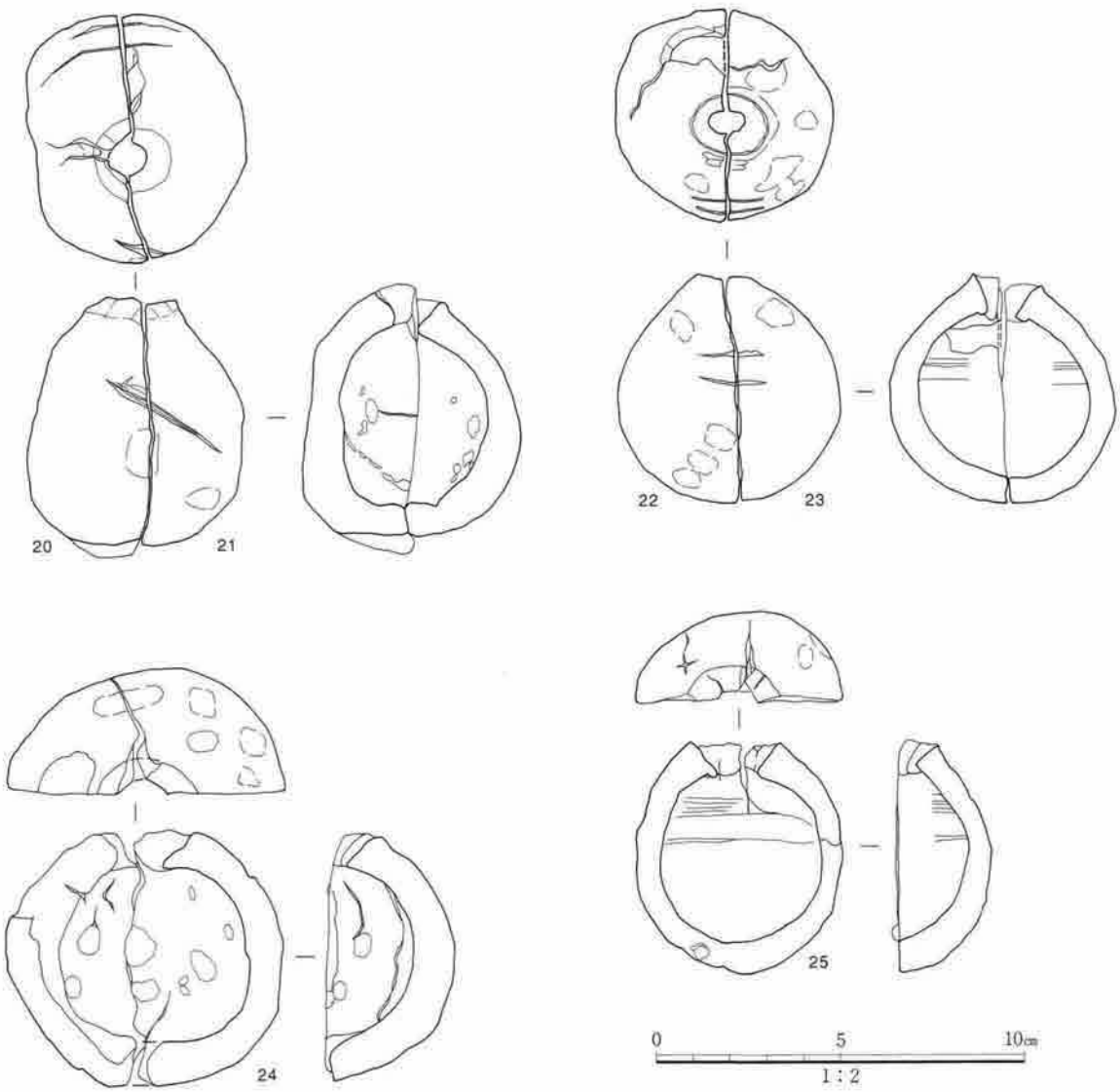


図88　OS89－148次第７層出土遺物

関連の遺物が出土している。豊臣前期に位置づけられる。

OS89－148次調査では本層から瀬戸美濃焼12～15、備前焼擂鉢16、白磁碗17、粗製の青花碗18が出土した(図87)。これらの陶磁器類のほか多量の鋳型片が出土している。鋳型でもっとも量の多いのは半球形をしたもの(20～25)で、100個体以上が出土した(図88)。洋梨を縦割りし、内部を刳貫いた形をしている。2つが合わさり球状となって出土したものもある。焼成は堅緻で、ヘラ描きによる合印と湯口を有する。中子を支える部分が認められないことから直径4.3～4.8cmの金属球をつくるための鋳型と考えられる。鋳型にはスラグが付着しており、理化学的な分析は行っていないが鉄滓と考えられる。これらの鋳型外面には珪酸質の粗粒砂混り粘土が付着しており、型を合わせたのちに包み込んだものであろう。また、内部に火膨れを起こしたものや、変形したものも多くある。内面に布目のほか、条痕が認められるものがある。この条痕は球形の模型にある筋が鋳型の整形時に残されたものと考えられ、模型が木製であった可能性を示すものである。これらの鋳型から作りだされた製品としては砲弾が考えられる[黒田慶一1994]。鋳型にはほかに鍋・釜があり、鞴羽口・焼成支脚などの鋳造に係わる遺物が多く出土している。

第8層　粗粒砂および砂礫層で遺物は出土しなかった。OS89－148次調査では上面の高さがTP＋1.3mである。

ii)遺構と遺物

a．豊臣前期の遺構と遺物

OS89－148次調査では第8層上面・第7層上面の遺構が相当する(図89上段)。

第8層上面では礎石建物SB801、土壙SK801・802、竈SX801がある。これらの遺構は少し高くなった調査地東部に認められる。

SB801は一部の検出にすぎないが、柱列の並びはN10°Eである。

SK801・802は東西に並ぶ。それぞれの検出面からの深さは0.9m、0.6mで、SK801の壁面には薄く粘土が貼られている。SK802の埋土には焼土をレンズ状に含む。

SX801　東に焚口がある竈で、床面は平瓦、壁面は拳大の石と瓦片を用い、外側面は粘土で補強している。遺存状態は悪い。

第7層上面では高さ1.5m、上端幅3.0m、下端幅5.0mの東西方向の第6層の堤状盛土SX601がある。1596年の惣構築造に際して築かれた可能性が高いが、断面での検出であったため詳細は明らかでない。また、一定期間高まりとして存在していたのかどうかも不明である。整地の際に最初に運ばれてきた造成土であった可能性も考えられる。

b．豊臣後期の遺構と遺物

OS89－148次調査の第3層上面では礎石建物SB301・302、塀列建物SB303、暗渠SD301、井戸SE301がある(図89下段、図版14下)。

SB301　敷地西部に検出した礎石建物で、方位は正方位に近い。

SB302　SB301の南にある礎石建物で、方位はN8°Eである。

SB303　SB301の東で検出した塀列建物である。北西角は塀一枚分入角となっている。方位はN6°

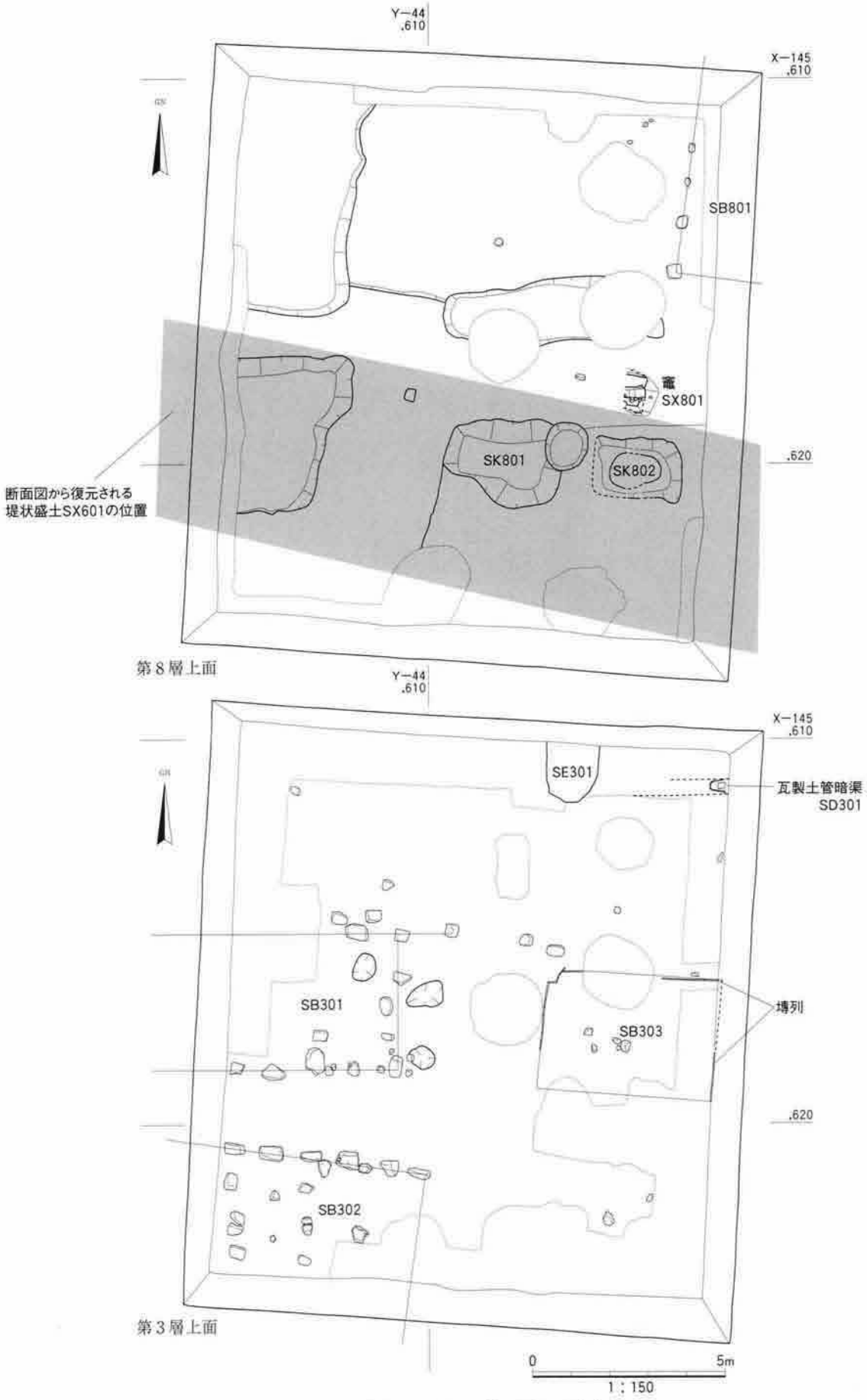


図89　OS89−148次第８層上面・第３層上面遺構配置図

Eである。調査地の東壁内に東端となる塼列を確認した。

SD301　平面では一部を確認したのみであるが、瓦製土管を使用した東西方向の暗渠である。

SE301　溝SD301と重なって検出した井戸であるが、切合い関係については明らかにできなかった。

焼土層に覆われる第3層上面では遺構面が遺存してない個所もあり、2.5～3.0mの範囲に廃瓦を用いた瓦敷遺構を検出したのみである。

OS88－56次調査では第5b層上面で竈SX501を検出した(図90・91、図版14中)。

SX501　東西約2m、南北1.4mの南に焚口をもつ二連式の竈である。基底から0.45mが遺存していた。焚口の構造は底に平瓦を並べ、側面には平瓦を立て、さらに上部に丸瓦を載せている。手前には石が据えられている。竈の壁はスサを含む土を高さ約10cmの単位で瓦を混えながら築いている。

この上位の第3層上面では西側が東側より0.3mほど高くなるよう段が設けられていた(図90、図版14上)。高い部分については削平を受けた個所が多く明瞭でないものの、段の両側には礎石と考えられる石が複数認められた。また、底部に「太」の線刻がある備前焼大甕を用いた埋甕遺構SK301がある[伊藤純1989]。備前焼の大甕は口径66cm、復元高102cm、底径43cmで、口縁部の傾きや国内出土の備前焼大甕にある「太」字の線刻例との比較から、慶長期の製品と推定される。

c．江戸時代以降の遺構

ほとんどが第1層内に掘込み面があるもので、OS89－148次調査では多くの井戸のほか、下層の豊臣後期遺構群と同じ方位の東西溝を検出した。

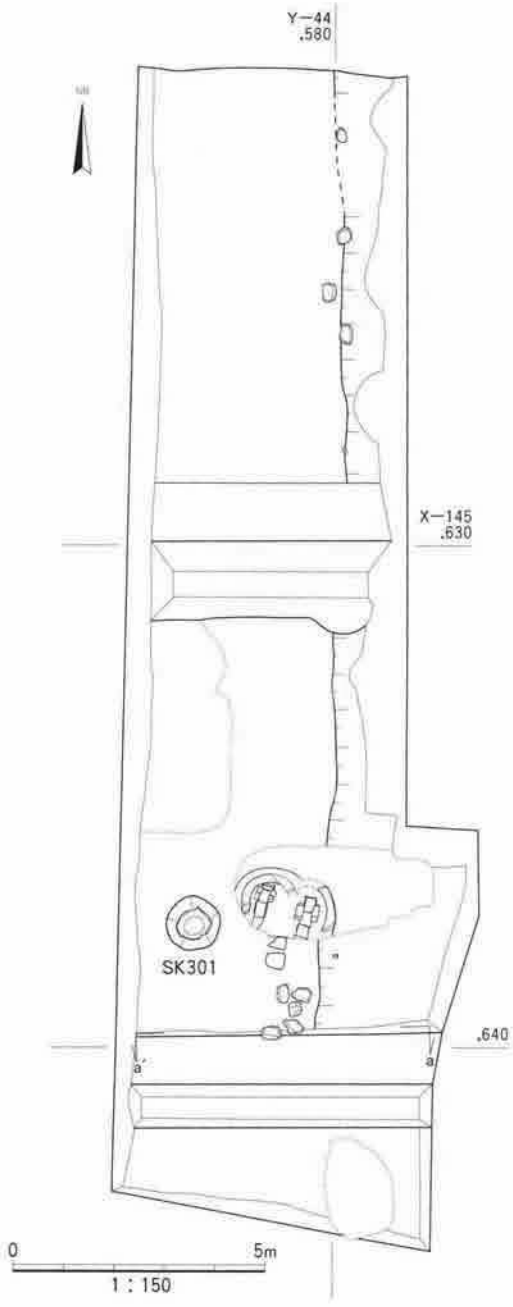


図90　OS88－56次遺構配置図

3)まとめ

ここで報告した2個所の調査地は東横堀川に近接しており、東横堀川開削以前の地層や景観を明らかにするには格好の地点であった。しかし、調査がその深度にまで達せず、豊臣期以前の遺構や遺物についての詳細は不明である。第5層から出土した四天王寺創建瓦と同笵の無子葉単弁八葉蓮華文軒丸瓦11は、第5層の土砂を供給した所のもので、当調査地に存在していたものとは考えられない。ただ、第5層の土砂が東横堀川を開削したものであれば、この調査地の近隣にその瓦が埋っていたと考えられる。これと同笵の瓦は東横堀川を西に越えた高麗

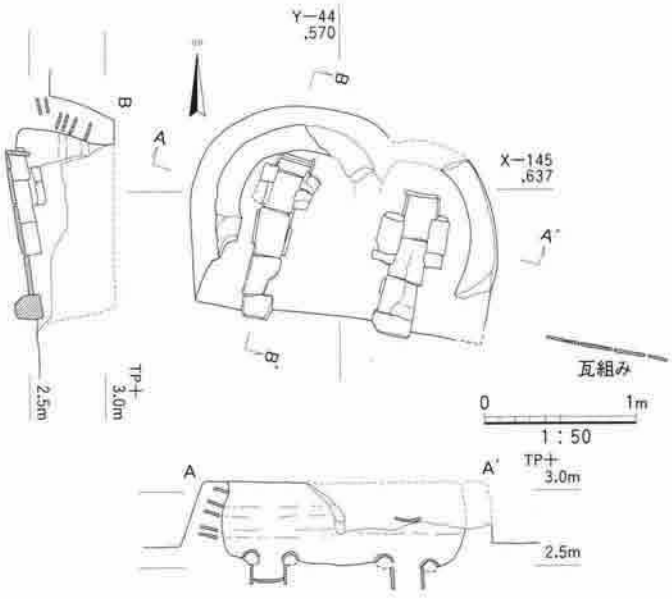


図91　竈SX501実測図

橋１丁目でも建設工事に伴って出土しており[大阪市文化財協会1999g]、東横堀川分流地点を挟んだ一帯のどこかには未発見の古代の寺院が埋もれている可能性もある。

豊臣期にはOS89－148次調査で前期に位置づけられる鋳造関連の遺物が多数出土した。遺構については明らかでないが同種の鋳型が多数含まれることから、ごく近隣にこの鋳型に係わる施設があったことはまちがいない。豊臣前期の鋳造関係の遺構は東横堀川を隔てた大坂城下町跡でも検出されており、一帯に鋳造を生業とする職人が多数居住していたことがわかる。これらの施設は豊臣後期には撤去されており、東横堀川の開削あるいは三ノ丸築造に伴う厚い整地によって土地利用のあり方が大きく変化したといえよう。

また、道路を隔てた北側の調査地(本章第６節)では豊臣後期の大規模な武家屋敷があったが、ここではそこで見つかった遺構と関連する遺構はなかった。このことから、北側にある東西方向の道路は豊臣後期段階にはすでに存在していたと考えられる。

OS89－148次調査地の遺構の方位は、前期では北で東に振っているが、後期になるとそれ以外に正方位に近いものもある。また東のOS88－56次調査地では正方位の段がある。この地区では前期段階には北で東に振る方位であったものが、後期になると正方位に変化しているように見える。この地区の北と南にある道路は東で南に振っているのに対し、街区内の敷地境は東西にある南北道路と同じように正方位となっている。

この地区より東の多くの調査地や北の調査地では北で東に振る方位の遺構が多く、その方位を豊臣期の街区方位と想定している。北のOS87－40次調査地でも南端の建物SB510・511は、この地区との間の東西道路と同じ方位に傾いている。しかし、ここでは大坂夏ノ陣直前の遺構が東西道路の方向に沿わない屋敷割となっている。この街区だけが敷地割の基準として南北道路の方向を採用したのか、あるいは後期のある時期に屋敷割の基準線が変更されたのであろう。

(平田・松尾)

第Ⅲ章　D地区の調査

第１節　OS90－50次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節では中央区島町１丁目・釣鐘町１丁目に所在するOS90－50次およびその周辺のOS87－29・88－１・88－31・91－54・94－50次調査を報告する(図92)。当調査地一帯は以前から、外交官庁としての「難波大郡」、斎王の宿所である「大江殿」[天坊幸彦1957]、さらに摂津国の官庁としての「摂津職」・「摂津国府」や「鴻臚館」の候補地として考えられてきたところである。

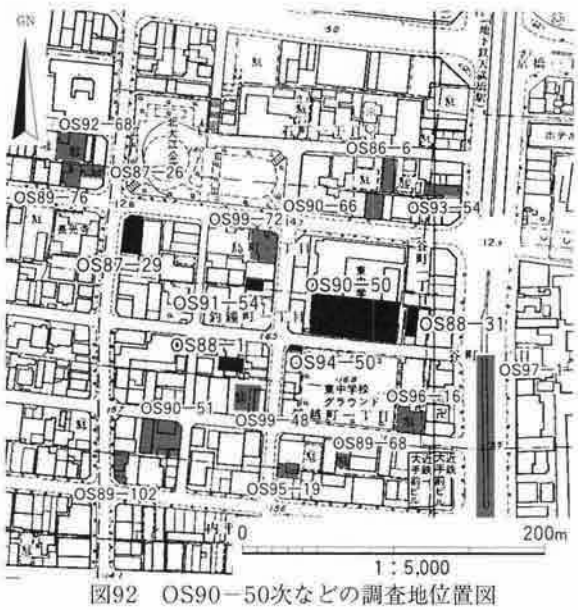


図92　OS90－50次などの調査地位置図

各調査の概要は以下のとおりである。

OS87－29次調査地は北大江公園の南側に位置する。表土下に第２次大戦で焼失した礎石建物、江戸時代の穴蔵・井戸・石列、豊臣期の土壙・柵・溝、奈良時代の井戸を検出した。奈良時代の井戸からは奈良三彩小壺や墨書土器が出土している。なお、当調査の内容は[櫻井久之1987・1989]で報告されているが、本節ではその内容に一部加筆して報告することにする。

OS88－1次調査地は試掘において、GL－1.5mで豊臣期に先行する時期の遺物包含層が確認されたので、本調査にいたった。本調査では豊臣期の土壙・溝、大坂本願寺期の堀などを検出した。

OS88－31次調査地は試掘で大坂夏ノ陣の焼土層を検出し、本調査を行うこととなった。しかし、重機掘削の際に焼土層が除去されてしまい、古代の遺構の調査に重点が置かれた。その結果、古代の遺構や包含層から和同開珎や隆平永寶、開元通寶が出土した。なお、本調査については[京嶋覚1990]で報告されている。


写真１　OS90－50次現地説明会前の取材風景

OS90－50次調査は中央区釣鐘町１丁目の東中学校跡地(現中央高校敷地内)で行われた。後述するように周囲より標高が高いところに位置し、古

代の掘立柱建物・井戸・溝など多数の遺構および遺物を検出するにいたった。これらの成果は1990年11月10日に現地説明会によって公開され、調査の概要は[伊藤純1991a]で記されている。

OS91－54次調査地はOS90－50次調査地の道を挟んで西隣に位置する。古代の柱穴・溝・土壙を多数検出した。



写真２　OS94－50次完掘状況

OS94－50次調査地はOS90－50次調査地の道を挟んで南隣に位置し、古代の遺構が多数残っていることが予想された。小面積であったため、古代の遺構は柱穴を５基検出したに留まったが(写真２)、近世の整地層から金箔瓦が３点出土した(第Ⅴ章第２節)。

このほか本書で対象としない調査でも遺構・遺物は多く検出されている。東側のOS97－１次調査では古代の掘立柱建物・井戸、豊臣氏大坂城三ノ丸の西外郭と考えられる大規模な塀・柵を検出した[大阪市文化財協会1999a]。OS99－48次調査では古代の３間×２間の総柱建物をはじめとする掘立柱建物が３棟が検出された[黒田慶一2002]。また、OS99－72次調査では奈良～平安時代の柱穴・溝が検出され、統一新羅の土器が出土している[辻美紀2002c]。

２)調査の結果

ｉ)層序(図93)

OS88－31・90－50・91－54次調査地では、包含層がわずかしか残っておらず、現代盛土を除去すると地山であった。OS87－29・88－１次調査地では古代から豊臣期にかけての包含層・整地層が残っていたため、それを基本に当地域の層序をまとめ、層相は図93の各断面図の注記に示した。

第１層　近・現代の盛土である。

第２層　徳川期の整地層で、OS87－29次調査地では複数の層に細分することができた。

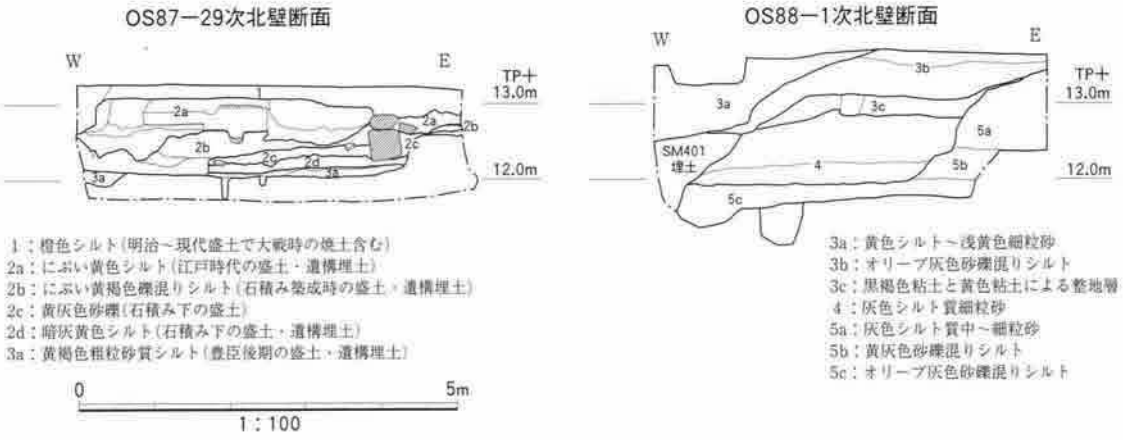


図93　OS87－29・88－１次断面図

第3a層　唐津焼を含む豊臣後期の整地層である。OS88－1次調査地では西に低くなる地形を埋めていた。また、OS87－29次調査地では上位の層との間で焼土層が認められる個所があった。これは大坂夏ノ陣に伴う焼土層の可能性がある。

第3b層　豊臣前期の盛土で、OS88－1次調査地では60cmの厚さで残っていた。

第3c層　OS88－1次調査地で確認した整地層である。下位の古代の包含層や地山の偽礫で構成され、SM401を掘削した際の排土で整地したと思われる。大坂本願寺期に該当する。

第4層　古代の遺物や瓦器が出土する地層である。

第5層　奈良～平安時代初頭の土器を含む包含層である。OS88－1次調査地では3層に細分することができた。

地山の標高はもっとも高いところがOS90－50次調査地の南東でTP＋14.5m、もっとも低いのがOS88－1次調査地の西側でTP＋11.5m以下であった。後者の調査地の標高が低いのは、OS90－51次などで見つかった開析谷の傾斜面にかかっているためと思われる(本章第3節)。

ii)遺構と遺物

a、古代の遺構と遺物

OS90－50次調査(図版16・17)

掘立柱建物・溝・土壙・井戸など多数の遺構を検出した(図94、図版16・17)。ここではおもな遺構について取り上げる。

掘立柱建物**SB501～509**　調査地内では多くの柱穴が検出されたが、組合わせを確認することのできた掘立柱建物は表9のとおりである。いずれの建物の方位も正方位か5°以内の差でおさまることから、正方位指向であったといえよう。梁間が確認できる建物はいずれも2間で、桁行の柱間隔よりも広い傾向がある。

SB501はほかの建物よりも正方位から振っていることと、近接して飛鳥時代の遺物を出す**SE501**や**SK501**があることから、7世紀後半頃の建物であると推定される。ただ、柱穴の配置や大きさは奈良時代に位置づけた建物と類似する。

SB502・503・505～509については、柱穴の形状や方位がほぼ同じで、かつ正方位に近いこと、ほぼ正方位の溝**SD501**から奈良時代中葉の遺物が出土していること、**SB505・509**がそれぞれ奈良時代

表9　OS90－50次の掘立柱建物

遺構番号	東西間数(長さ)	南北間数(長さ)	方位	柱穴の形状	備　考
SB501	4間以上(7.0m以上)	2間(3.6m)	N5°E	0.7m×0.6mの方形で柱痕跡残る	
SB502	4間(8.6m)	2間？(4.6m)	正方位	1.0m×0.8mの方形	
SB503	4間(10m)	2間(4.8m)	N2°E	1.0m×0.9mの方形	図版16中
SB504	5間(10.5m)	2間(4.4m)	N2°E	直径0.5m前後の円形で柱痕跡残る	SB503の柱穴を切る
SB505	2間？(4.4m)	2間以上(3.8m)	正方位	1.0m×0.7mの方形で柱痕跡残る	SK504に切られる
SB506	6間(14.2m)	3間以上(5.2m以上)	N1°E	1.0m×1.0mの方形で柱痕跡残る	図版16下
SB507	2間(3.8m)	2間(4.1m)	N2°W	0.8m×0.8mの方形で柱痕跡残る	図版17上、総柱建物
SB508	1間以上(2.4m以上)	2間以上(5.0m以上)	N1°W	0.8m×0.8mの方形	
SB509	1間以上(2.5m以上)	2間以上(3.6m以上)	N1°E	0.8m×0.8mの方形	SK507に切られる

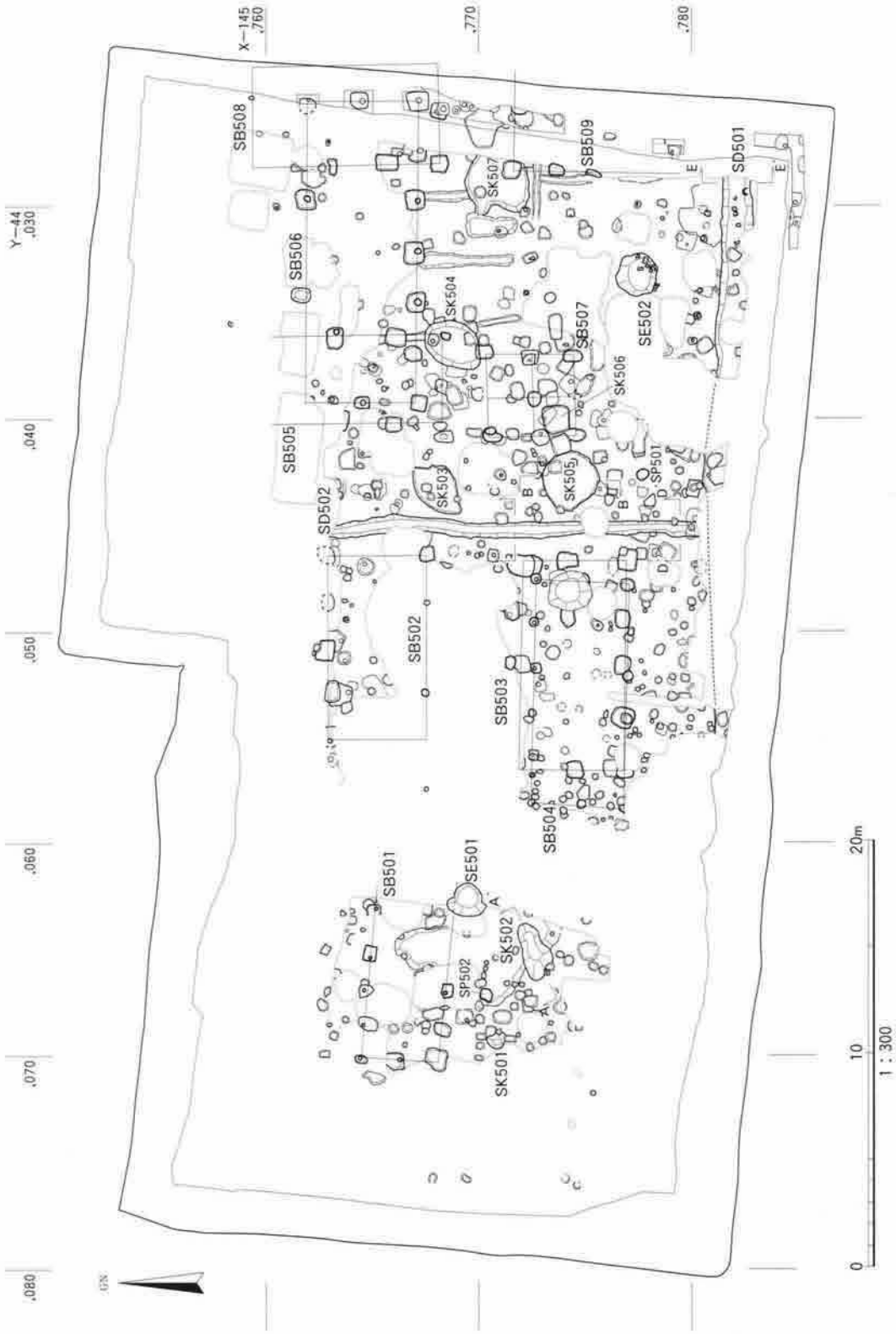


図94　OS90－50次遺構配置図

末から平安時代初頭の遺物が出土したSK504・507に切られていることから勘案すると、奈良時代中～後葉におさまるものと思われる。ただし、SB505・506・508は重複関係にあるため、これらの建物は同時存在はしない。写真3はSB506の柱穴で見つかった根石である。

SB504は確認された建物の中で唯一柱穴が円形を呈し、大きさも小振りである。SB503の柱穴を切っていることから平安時代初頭以降の建物と想定される。

SD501　調査地の南端で東西方向に延びる溝で、幅1.4m、深さ0.3mある(図95)。東側ではN85°Wの方向に延び、さらに西側にいくと正方位に近い方位に延びている。

埋土から土師器杯A3・4、須恵器杯B蓋7、鞴羽口12が出土した(図96)。3は暗文がなく、ヨコナデで仕上げ、底部にはユビオサエののちヘラケズリが施される。4は内底面に連弧状、内側面に1段の放射状の暗文が施される。7はつまみのくびれがほとんどないものである。12は先端にスラッグが付着している。これらの遺物は難波Ⅴ古段階に該当する。

SD502　調査地中央東寄りを南北方向に延びる溝で、幅0.65m、深さ0.25mある(図95、写真4)。緑釉陶器31が出土した(図98)。軟質の焼成で、底部は糸切り痕が残る。9世紀中頃のものと思われる。



写真3　OS90－50次SB506の柱穴で見つかった根石



写真4　OS90－50次SD502断面

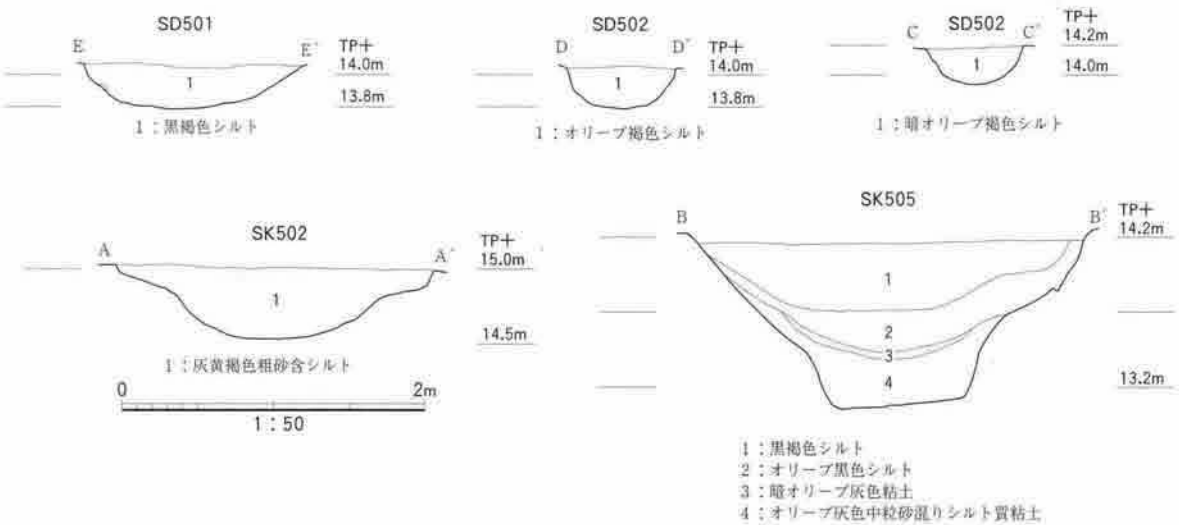


図95　OS90－50次遺構断面図

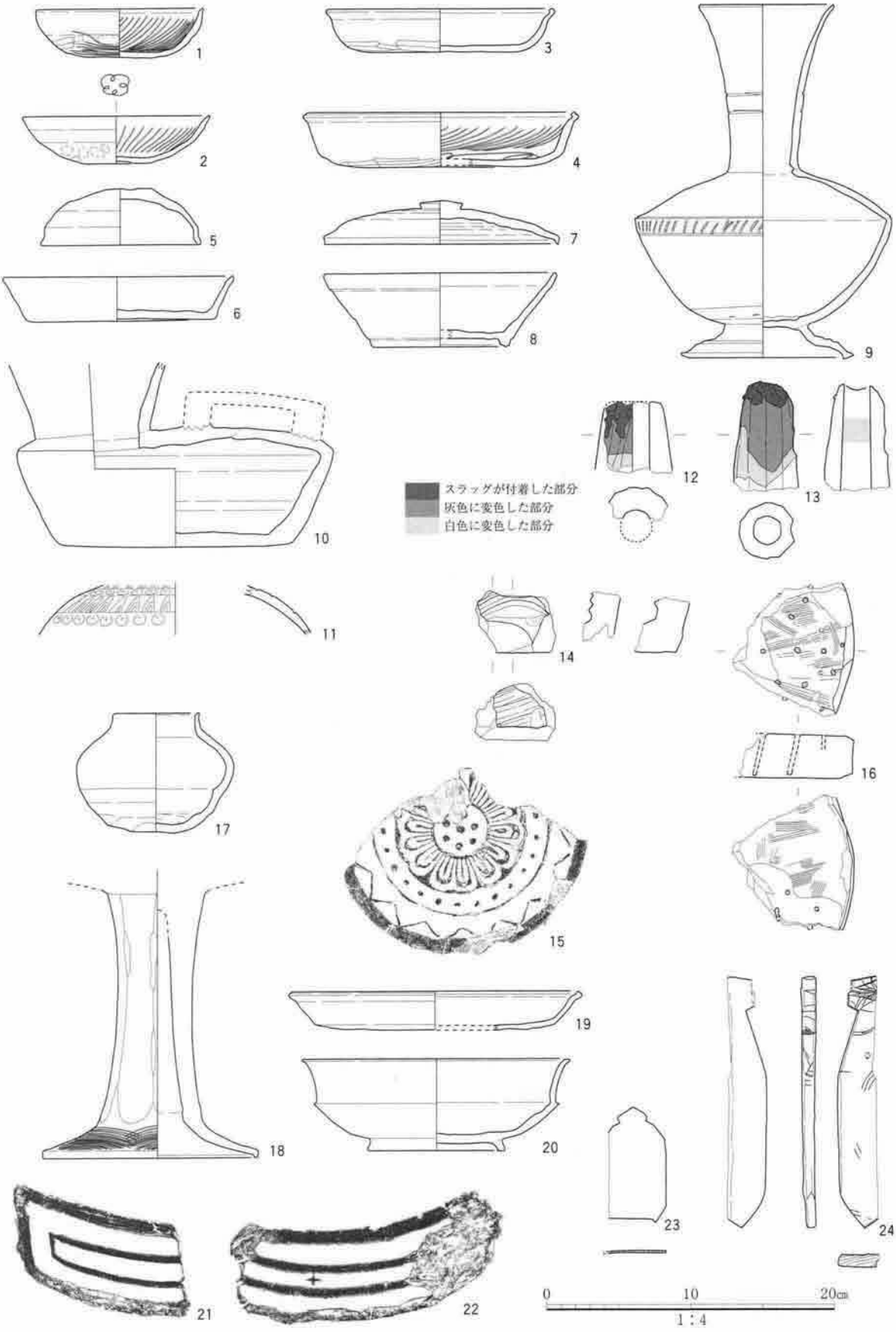


図96　OS90－50次出土遺物（1）

SD501（3・4・7・12）、SK501（1）、SK502（11）、SK503（5）、SK504（8・14・15）、SK505（10）、SK506（9）、SK507（6）、SE501（2）、SE502（18～24）、SP501（16）、SP502（13）、包含層（17）

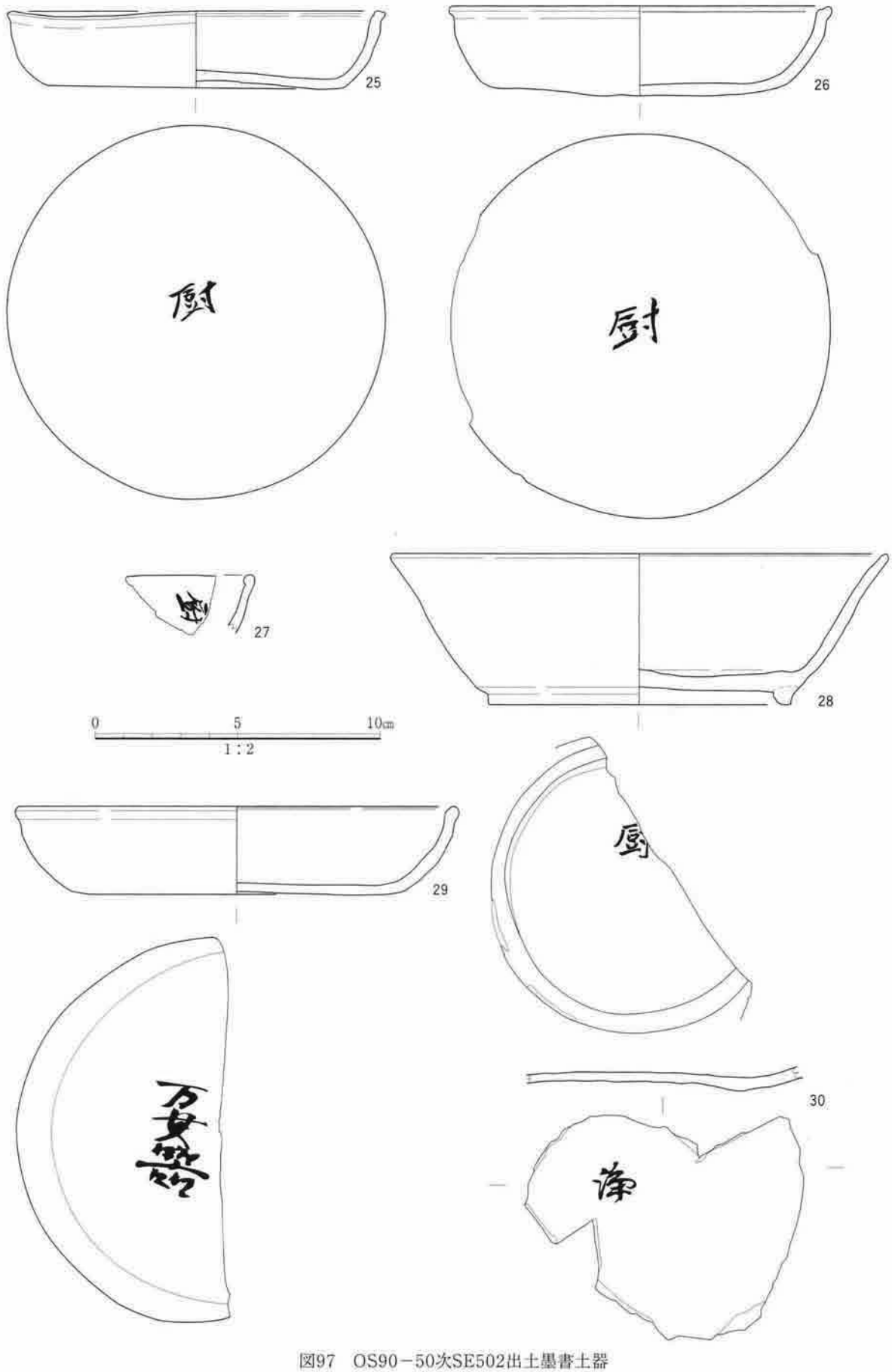


図97　OS90－50次SE502出土墨書土器

SK501　SB501の南約２mの地点で検出された東西0.8m、南北1.0m、深さ0.3mの土壙である。７世紀後葉～末の土師器杯C1が出土した(図96)。

SK502　調査区西側にある土壙で、南北2.8m、東西1.2m、深さ0.4mある(図95)。統一新羅の土器片が２点出土した(図96-11、写真５)。いずれも印花文が施され、壺の肩に当る部分と思われる。写真５のａには緑釉が施されている。

SK503　調査区中央付近に位置する東西2.1m、南北2.0m、深さ0.1mの土壙である。７世紀前半に位置づけられる須恵器杯H蓋5が出土している(図96)。口径11.1cm、器高3.9cmあり、難波Ⅲ古段階に属するものと思われる。また、ここからは平瓦の破片も出土している。

SK504　東西2.1m、南北2.5m、深さ0.2mの土壙である。埋土は黒褐色シルトで、須恵器杯B8、不明土製品14、複弁蓮華文軒丸瓦15、緑釉陶器片が出土した(図96)。8は高台が底部の端に付けられる形態で、８世紀末～９世紀初頭に位置づけられる。14は巴文のような隆起した筋が２条あるが、下部は平らでハケメとユビが触れた跡が見られるため、軒丸瓦ではない。縦断面を見るかぎり、傾いている。胎土には２㎜大の長石やチャートの角礫が含まれ、色調はにぶい黄褐色であるが、一部赤変している。性格は不明で、図で十分表現できていない危惧もあるため写真６を掲載した。15は中房は細い圏線を巡らした中に１＋６の小さな蓮子を配している。珠文帯は小さく低い珠文を24個配し、外縁は斜向縁に線鋸歯文が巡る。瓦当周囲と裏面はケズリが施されている。河内国分寺跡や河内国府跡で出土したものと同文である[宮本佐知子・佐藤隆1996]。

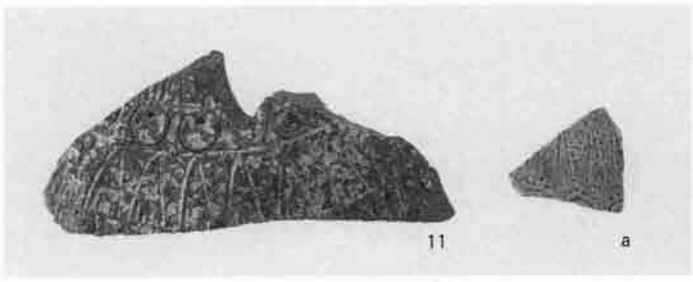


写真５　OS90－50次出土新羅土器

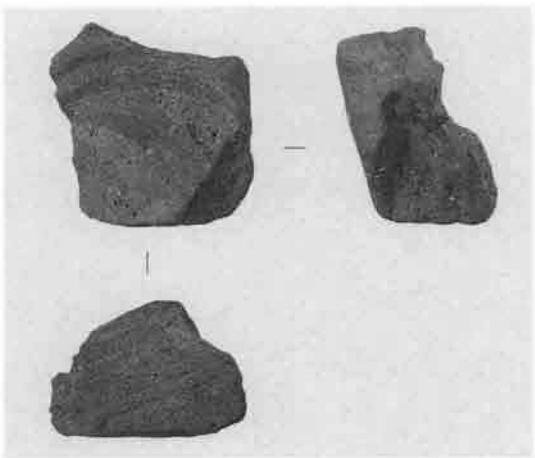

写真６　OS90－50次不明土製品14(実物の約１／２)


写真７　OS90－50次SK506遺物出土状況

SK505　直径2.6m、深さ1.4mの土壙である。埋土は４層に区分することができる(図95、図版17中)。最下層はオリーブ灰色粘土に中粒砂が介在し、須恵器平瓶10が出土した(図96)。難波Ⅴ古段階に位置づけられるものと思われる。

SK506　SK505の東約１mのところに位置し、一辺1.1m、深さ0.2mの方形の土壙である(写真７)。須恵器長頸壺9、鞴羽口の細片が出土した(図96)。9は口径9.3cm、器高24.7cm、最大径17.9cm、脚裾径11.9cmあり、頸部に２条の沈線、最大径部に沈線２条とその間

に櫛描列点文を施す。難波Ⅲ新段階に位置づけられるものと思われる。

SK507　調査地東端に位置する土壙で、南北3.0m、東西2.5m以上、深さ0.1mある。9世紀初頭に位置づけられると思われる須恵器杯A6が出土した(図96)。

SE501　調査地西側で検出した井戸で、直径1.5m以上、深さ6m以上あり、重機を用いて掘削したものの、底を検出することができなかった。井戸側の痕跡が見られなかったため、素掘りであったと思われる。土師器杯C2が出土した(図96)。口径12.9cm、器高3.4cmで、径高指数は26である。難波Ⅳ古段階で、7世紀後葉～末に位置づけられるものと思われる。

SE502　調査地南東隅近くで検出した。直径2.0m、深さは



写真8　OS90－50次SE502深掘作業

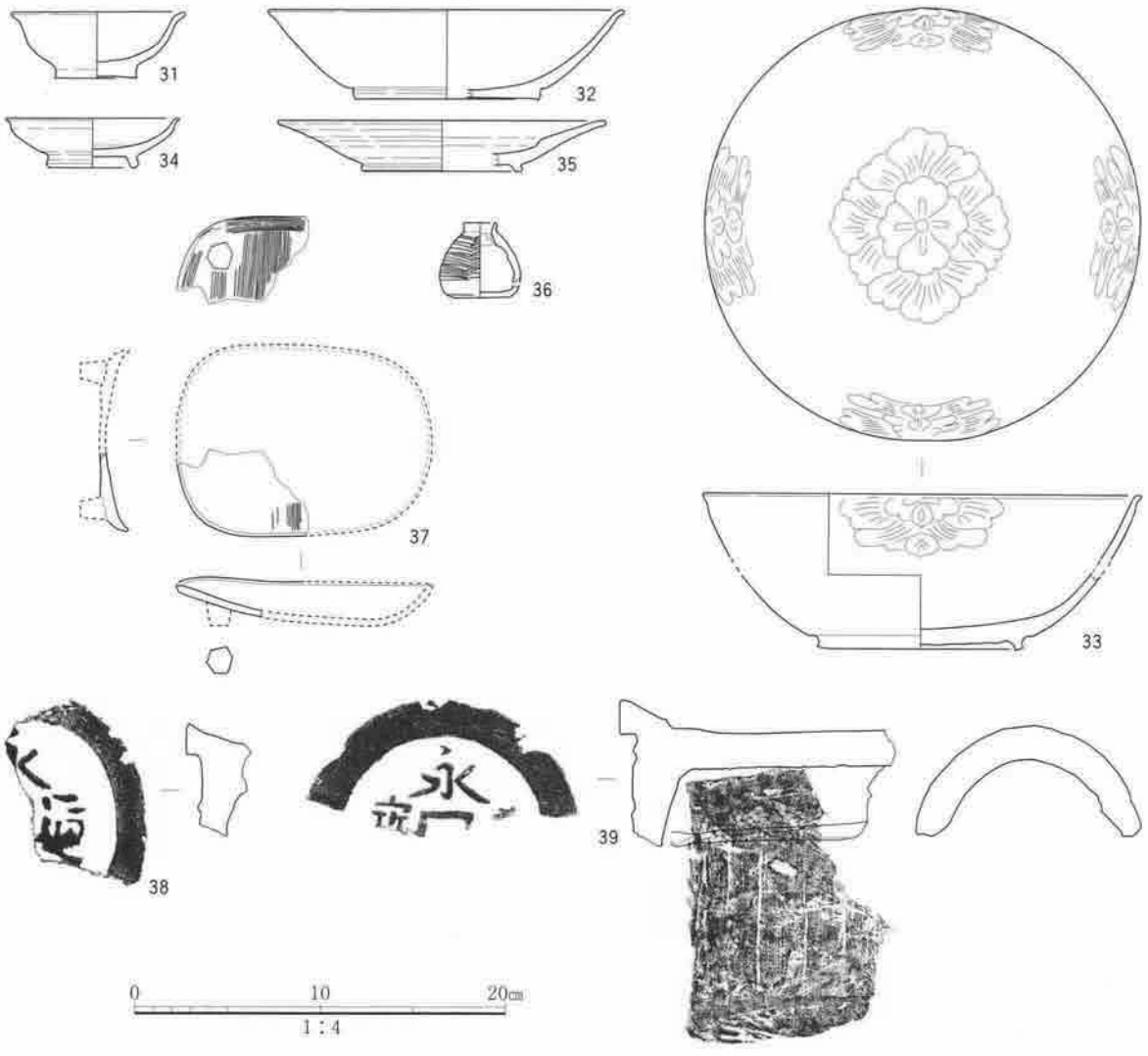


図98　OS90－50次出土遺物(2)
SD502(31)、包含層(32～39)

5m以上あり、重機で掘削したが、底を出すことはできなかった(図版17下、写真8)。井戸側の痕跡が見られなかったため、素掘りであったと思われる。土師器杯A25～27・29、皿A19、高杯18、須恵器杯B20・28、重圏文軒平瓦21・22、木製品23・24、神功開寶が出土した(図96・97、図版46)。25～28には「厨」、29には「万女器」、30には「浄」という墨書が底部に見られる(図97、図版45)。21は6572A型式であり、22は6572型式で、2本の弧線があり、その間に「十」という陽字がある[宮本佐知子1999]。23は図の上端部分に切込みが入れられている札状の木製品である。24は馬を象ったものと思われる。土師器杯Aや皿Aにはいずれも暗文が見られないこと、皿Aの体部が直線的に伸びること、須恵器杯Bの高台が底部の端に付いていることから、これらは難波Ⅴ新段階に該当する。

このほか、SP501から拒鵲鴟尾の破片16、SP502から鞴羽口13が出土した(図96、図版46)。16は[中尾芳治1995]で概要が紹介されている。厚さ3.0cmあり、側面は円弧を描いている。上面・側面・下面にはハケメが部分的に施されている。円孔は上面に8個あり、破断面に5個の痕跡が残る。円孔は径0.2～0.3cmで、1.6～2.4cm間隔で外傾ぎみに直線的に配置されている。計測可能な孔でもっとも深いものは3.0cmで、厚さと同じ数値であるが、外傾しているため貫通していない。また、下面で表面が剥離した部分でも孔が見えるが、本来は貫通していなかったものと思われる。上面には円孔と同じ大きさの凹みが3個所で見られる。色調はにぶい黄褐色であるが、一部橙色となり被熱したと思われる部分がある。[中尾1995]によると、側面の円弧から復元径約22cmの円盤状のものになり、羽曳野市の善正寺跡出土のものを類例として挙げている。なお、善正寺例は中央に直径1.7cmの釘孔と思われる円孔があるが、16は外縁付近の破片のためその有無は確認することができない。

13は先端にスラッグが付着している。SD501出土の12とともに蛍光X線分析(非破壊)を行ったところ、いずれも多量の鉄(Fe)を検出した(註1)。

また、包含層から須恵器壺17、緑釉陶器碗32・33、灰釉陶器皿34・35、黒色土器水滴36、風字硯37が出土した(図96・98、図版46)。36・37は[伊藤純・佐藤隆1991]で紹介された資料である。36は口径1.6cm、器高4.0cmあり、外面に横方向の密なヘラミガキが施される。37は全体の1／4程度が残っている。内外面とも密なヘラミガキを施しており、裏面には六角形の脚が剥れた痕跡がある。

32は底部も含めて全面に施釉されている。33は口径23.6cm、底径11.2cm、器高8.5cmに復元することができる。見込みと口縁部内面に花文が施される。花文などの特徴から猿投窯で10世紀初頭前後に焼かれたものと推定されている[伊藤純1991c]。

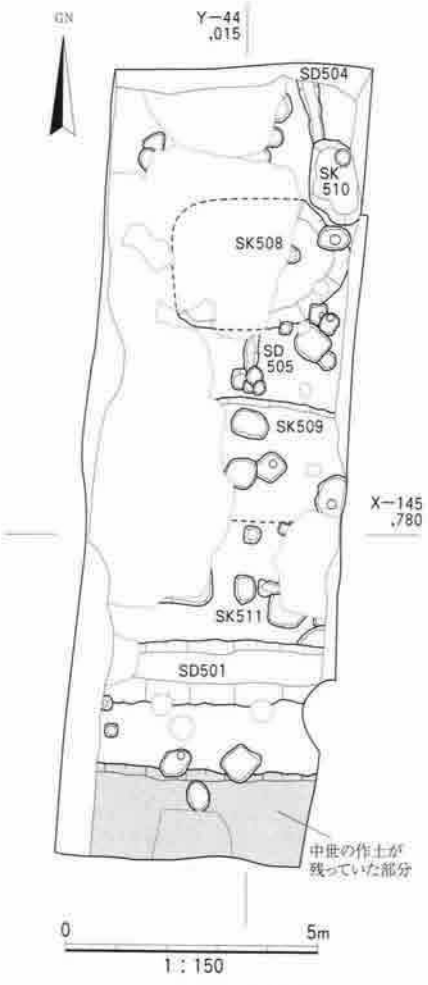


図99　OS88－31次遺構配置図

なお、本調査地の南西に位置するOS94－50次やOS88－1次調査地でも古代の柱穴や土壙が検出されているが、調査面積が狭かったため、建物を復元するにはいたっていない。

OS88－31次調査

第5層を除去して検出した遺構である。多数の柱穴・ピットのほか溝3条、土壙4基を検出した(図99、図版15中)。柱穴出土の遺物は小片が多いものの難波Ⅲに位置づけられるものが多く、飛鳥時代前半に属するものが多数を占めると考えられる。建物として復元することはできなかったが、柱穴の方向は北で東に振るものが多い。また少数ながら奈良時代の土器を出土するものもあり、この時期の柱穴も含まれている。以下、おもな遺構について説明する。

SD501　幅1.3m、深さ0.2～0.3mの東西方向の溝である。西側に延長するとOS90－50次調査地のSD501と重なることから、一連の溝として報告し、遺構番号も同じものを用いた。土師器杯A41、甕44、須恵器杯H46が出土した(図100)。41は難波Ⅳ古段階に該当すると思われる。

SK508　南北2.5m、東西3.0m、深さ0.1mの楕円形を呈する土壙である。土師器甕43(図100)のほか隆平永寶(写真9左)が出土したことから8世紀末葉～9世紀前葉と考えられる。

SK509　南北2.5m、東西2m以上、深さ0.1mの隅丸方形になると思われる土壙である。この土壙

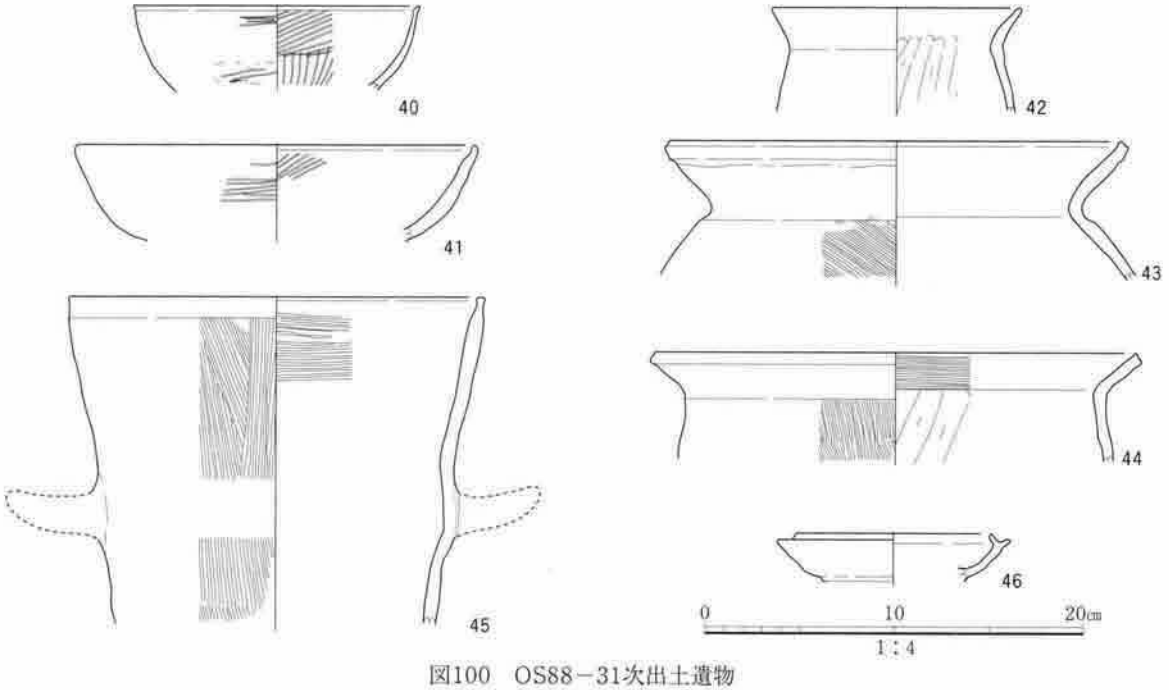


図100　OS88－31次出土遺物

SD501(41・44・46)、SK508(43)、SK511(40・42・45)



写真9　OS88－31次出土銭貨X線写真(実物大)

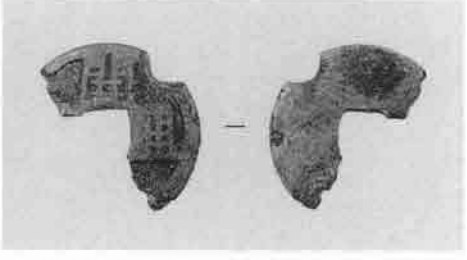


写真10　OS88－31次出土開元通寶(実物大)

から和同開珎が出土した(写真９中)。また、この土壙の近くの第５層中から開元通寶が出土した(写真９・10)。この開元通寶は「開」と「通」の部分が残り、他は破損して残っていない。「開」の上側と「通」の左側が磨耗している。また、孔も紐擦れによるのか、磨耗して弧を描いていることから緡銭で使用されていたことが推定される。

SK511　一辺0.7m、深さ0.1mの方形の土壙である。土師器杯C40、甕42、甑45などが出土した(図100)。40は径高指数が38あり、難波Ⅲ古段階に該当するものと思われる。

このほか第４層から飛鳥～奈良時代の土師器・須恵器が出土している。

OS91－54次調査

当調査地では地山上面で多数の柱穴を検出した(図101)。この中で建物を３棟抽出し、図101ではそれぞれを網掛けで分けて表示した。

SB510　東西方向に並ぶSP503～506と、これらを結ぶ直線と直交してSP505から延びる直線上にあるSP517で構成される掘立柱建物である。東西6.8m(３間)以上、南北4.9mあり、東西柱列の方位はN85°Wである。柱穴は一辺0.6～0.9mの方形を呈し、深さは残存状況が良好なもので0.3mある。確認することのできた柱痕跡は直径0.15～0.32mであった。柱穴の大きさと柱間が東隣のOS90－50次調査地の掘立柱建物と類似し、その成果を参考にするなら、南北２間、東西４～６間の建物であったと思われる。

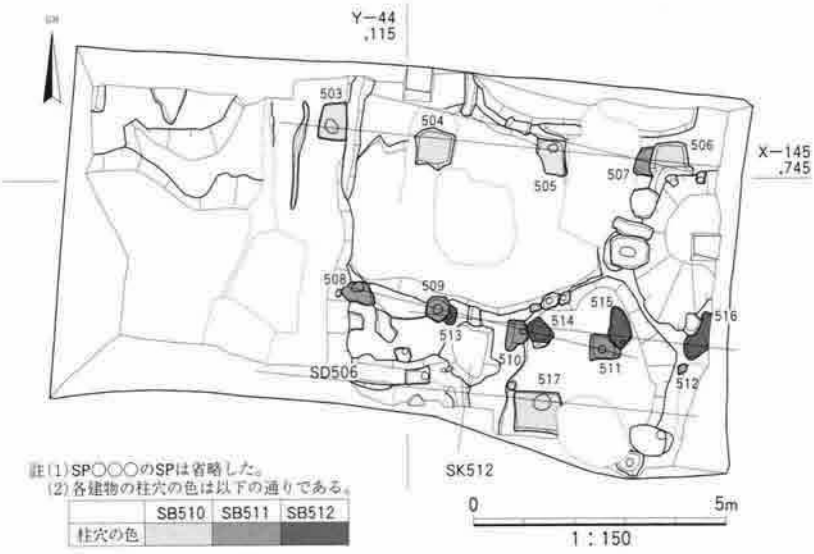


図101　OS91－54次遺構配置図

SB511　SP508～512と、これらを結ぶ直線と直交してSP511から延びる直線上にあるSP507で構成される掘立柱建物である。東西6.5m(４間)以上、南北3.8mあり、方位はN76°Wである。柱穴は長辺0.6m、短辺0.5mの長方形で、すべての柱穴に直径0.12～0.20mの柱痕跡が見られた。柱穴のひとつがSB510に切られることから、SB510よ

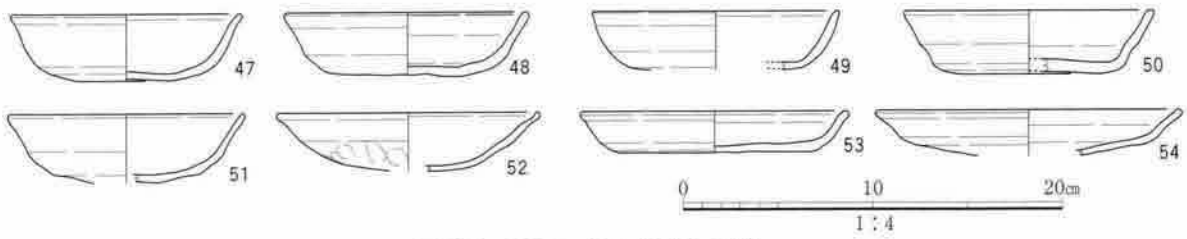


図102　OS91－54次遺構出土遺物
SD506(47～49・51～54)、SK512(50)

り先行する。

SB512　SP514～516で構成される掘立柱建物である。東西５m(３間)以上あり、方位はN82°Wである。柱穴は不整形であり、大きなもので長径0.85m、短径0.5mである。残っていた柱痕跡は直径0.1m前後であった。柱穴の１つがSB511に切られる。なお、SB512については対称の柱列が見つかっていないため、柵である可能性を残す。

以上の掘立柱建物は柱の切合いから、SB512がもっとも古く、SB510がもっとも新しいといえる。

SD506　幅0.6m、深さ0.2mの東西方向の溝である。土師器杯A47～49、椀A51・52、皿A53・54が一括して出土した(図102)。

これらの土師器はナデで仕上げられており、おおむね難波Ⅴ新段階に属するものと思われる。

SK512　東西1.0m、南北1.3m、深さ0.3mの土壙である。土師器杯A50が出土した(図102)。

OS87－29次調査

調査地東側で井戸SE503(註２)を検出した(図103・111、図版15上)。直径1.4mで検出面からの深さは７m以上ある。3.5m以深については重機により掘削したため断面図は作成できていない。埋土の状況から平面が円形の井戸枠があったと考えられる。埋土は灰や灰混りの土が何十層も堆積し、各層に多量の遺物を含むことから、井戸としての機能を終えたのち、一度に埋戻されることなくゴミ捨て場として利用されたのであろう。また、埋土には空洞となる個所があり、ある時期に埋土が陥没したことがわかる。空洞より下位は一度に捨てられる土の量が多く、上位ではごく薄いという違いに原因がある可能性がある。

多くの土師器・須恵器のほか奈

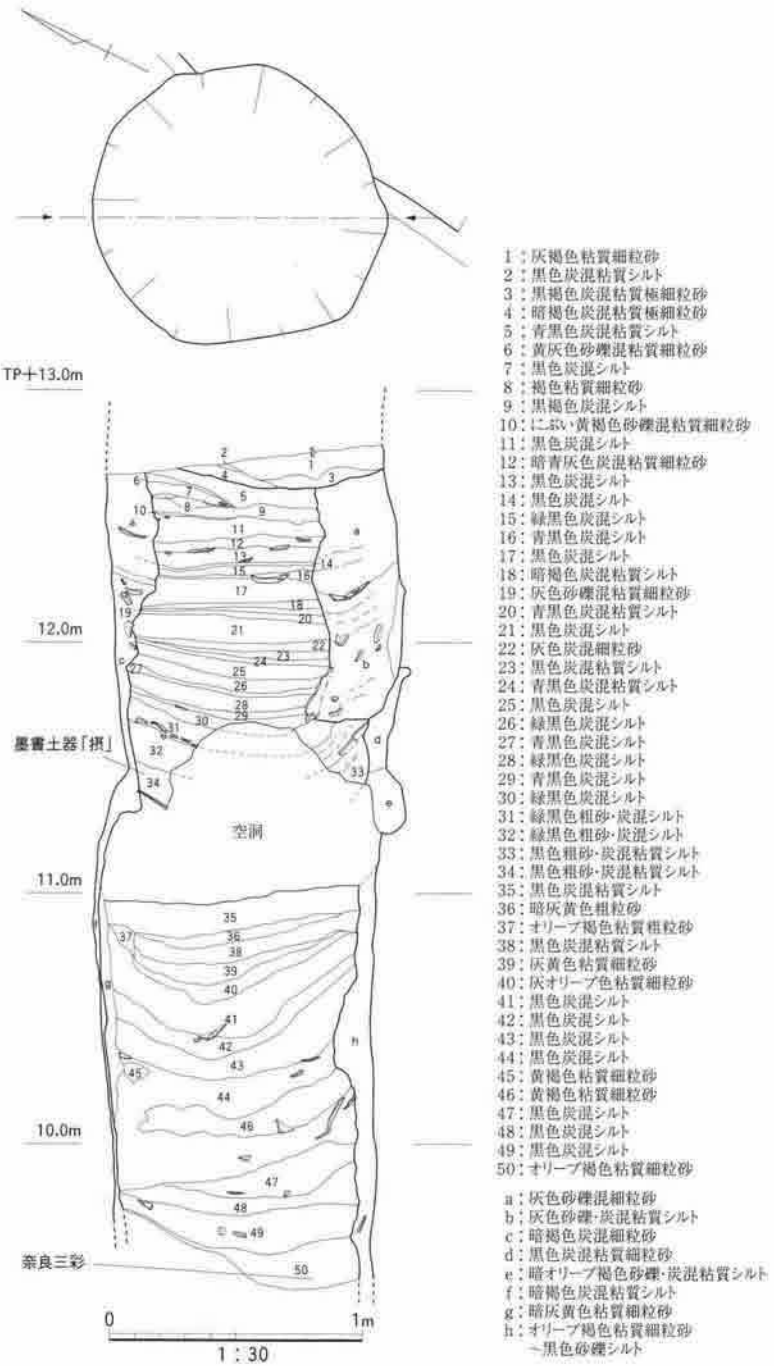


図103　OS87－29次SE503実測図

良三彩・瓦・塼・製塩土器・焼壁が出土した(図版45)。

土師器には杯B55、杯A56～62・92、杯C63・64、杯底部片93・94、椀65、ⅢA66・67、高杯68、甕69～72、把手73、脚部74・75、移動式竈76がある(図104～106)。55には内面だけでなく、底部外面にも暗文が施されている。56～59はナデで仕上げられ、ミガキや暗文は見られない。60・62は外面にミガキが、61は内面に暗文がある。64は底部に針描きがあり、口縁部外面と底部にススが付着する。67の底部外面の線刻は「大」という字と思われる。68は杯部内面に暗文が施されている。

73は孔のある把手の部分と思われる破片であるが、どのような器形になるかはわからない。74・75はやや傾いて伸びる中実円筒形の脚部である。接地面は外側に拡がり、中央はやや凹む。外面には粗いハケメが施される。類例として、長岡京跡第120次調査の溝SD12031で9世紀前半頃の土器とともに出土した三脚付片口鉢がある[向日市教育委員会1986]。76は付け庇の移動式竈で、ほぼ完形で残っ

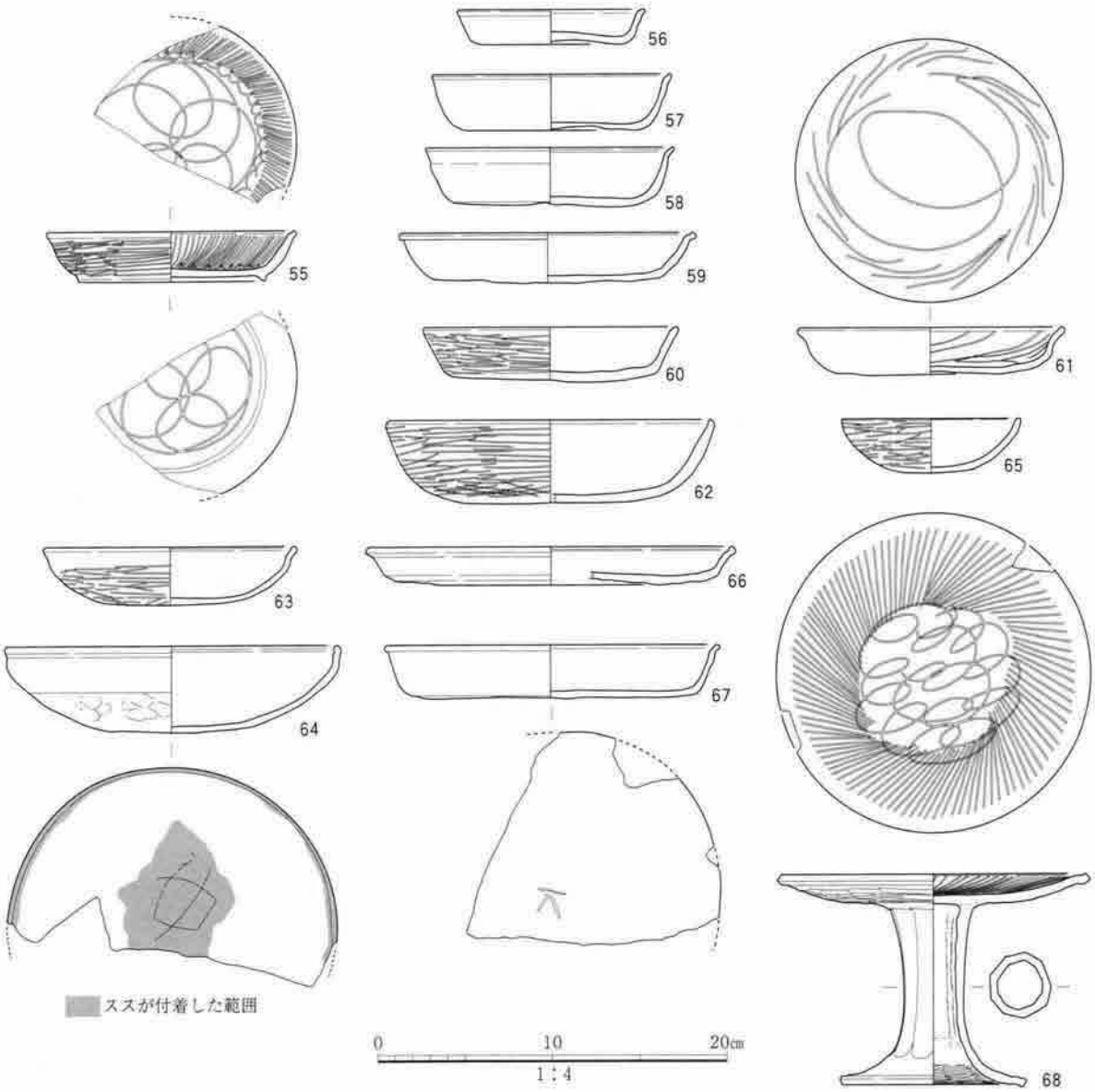


図104　OS87－29次SE503出土土師器(1)

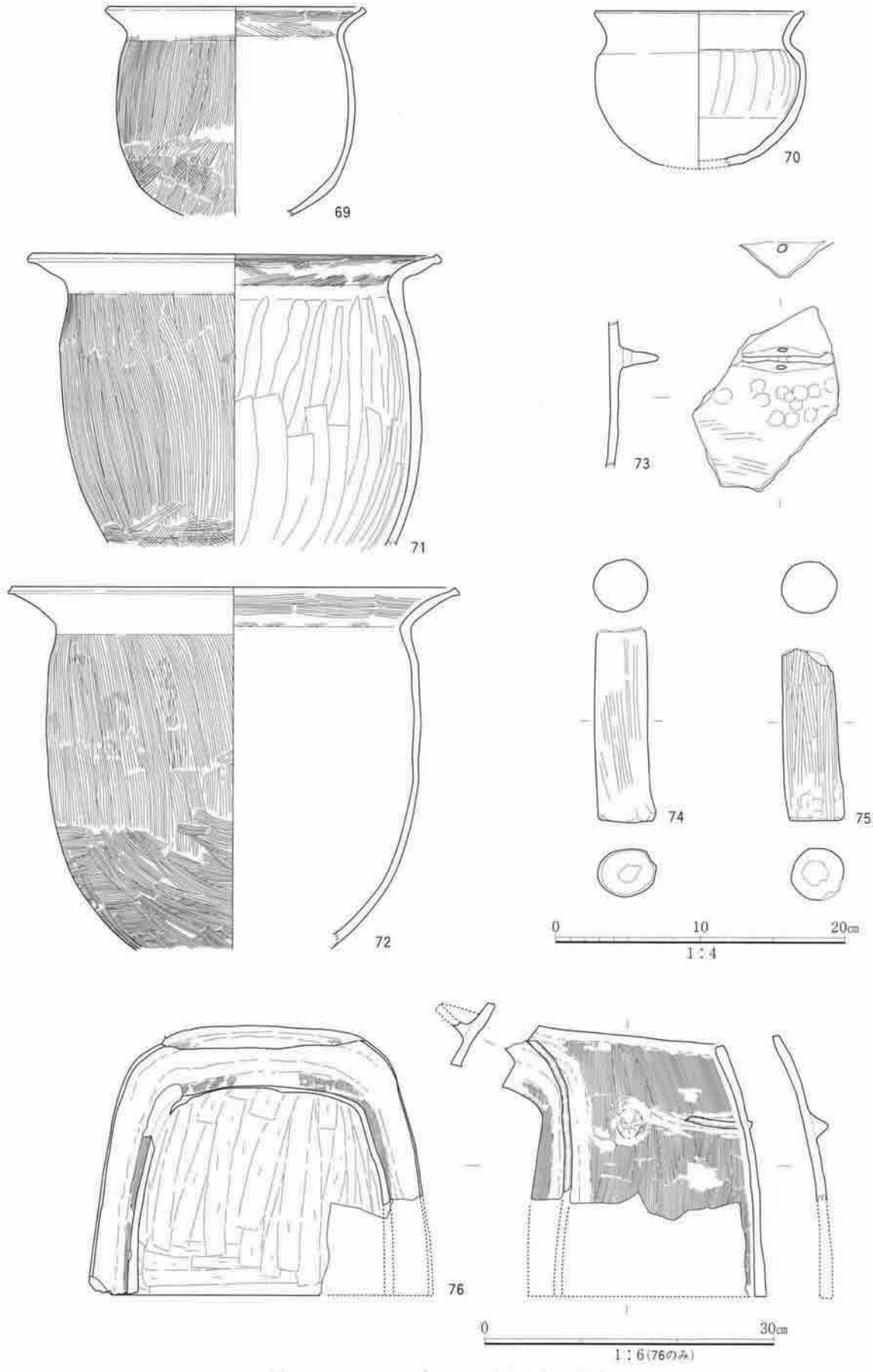


図105　OS87－29次SE503出土土師器（2）

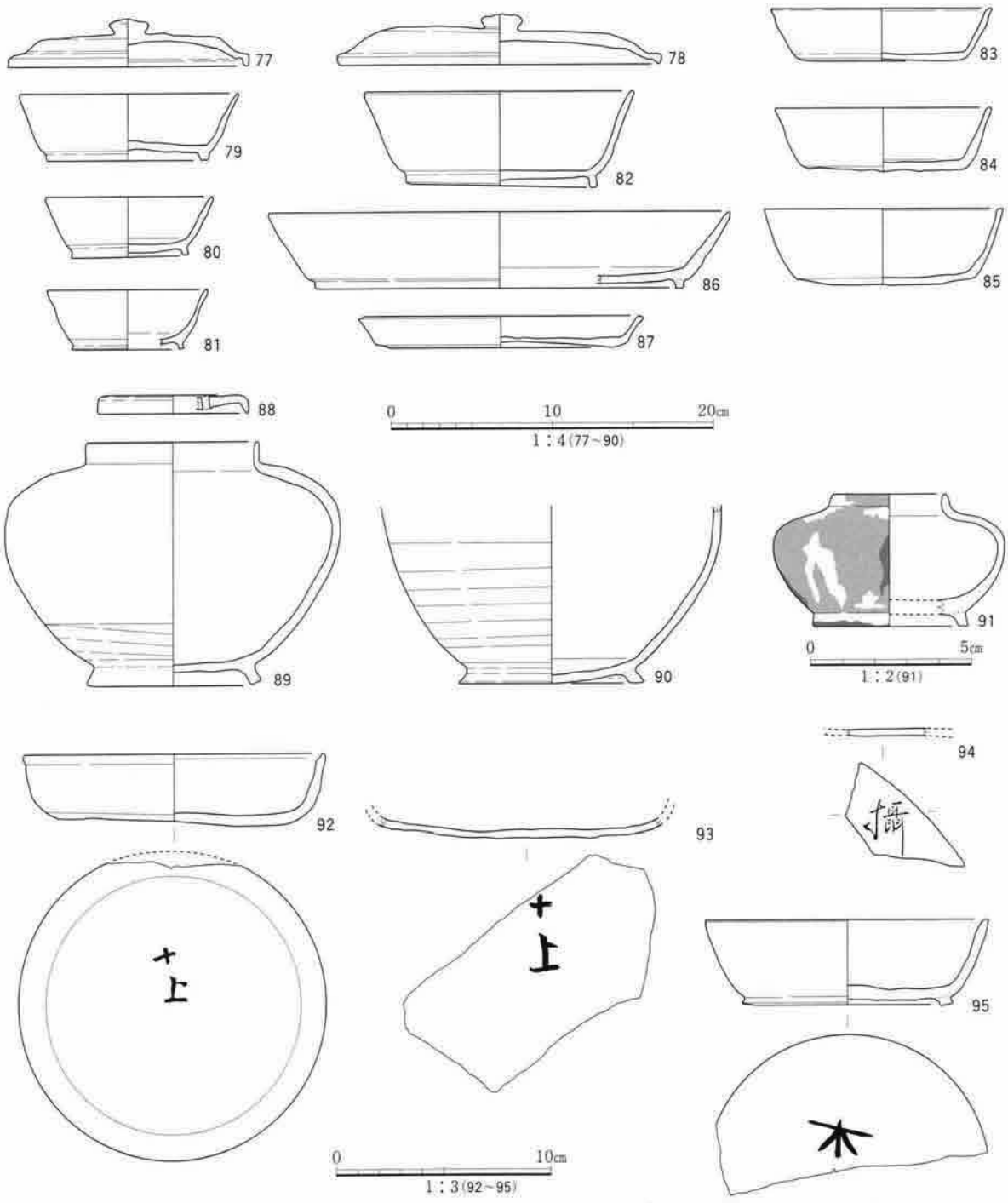


図106　OS87－29次SE503出土須恵器・緑釉陶器・墨書土器

ている。架孔は直径17～18cmあり、焚口の高さ22.5cm、幅24.5cm、器高24.5cmであることから、移動式竈としては小振りな方である。体部の両側に瘤状の膨らみがある。

須恵器には杯B蓋77・78、同身79～82、杯A83～85、皿B86、皿A87、壺蓋88、壺A89・90がある(図106)。杯Bには口径が10cm程度と小振りのものと、14～17cmのものの２種がある。いずれも高台が底部の端に偏っている。88は焼成前に孔が開けられている。89はほぼ完形で残っており、口径10.4cm、体部最大径20.8cm、器高15.2cmである。90は体部下半しか残っていないが、89より大振りになると思われる。

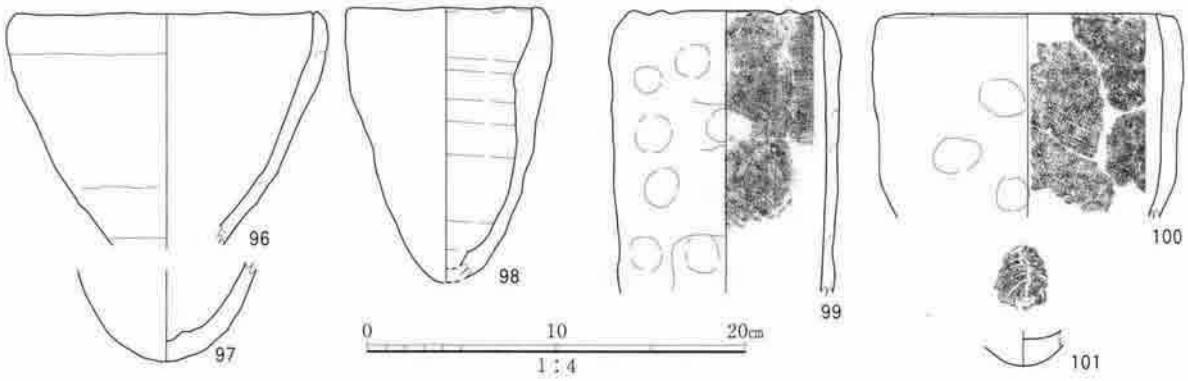


図107　OS87－29次SE503出土製塩土器

91は奈良三彩の小壺である。器高4.3cm、体部最大径は7.1cmある。釉は良好に残り、貫入が認められる。釉は緑、褐、白の順で施され、白釉は内面にも及ぶ。高台は貼付けによるもので、高さ0.5cm、断面は逆台形である。底部は厚く、奈良三彩の小壺のなかでは比較的初期に製作された可能性がある[櫻井1987]。

92～95は墨書土器である(図106、図版45)。92・93は土師器杯Aで、その底部に「十上」と書かれている。94は土師器杯もしくは皿の底部で「攝(摂)」と書かれ、須恵器杯B95には「木」と読める字がある。「木」という墨書は南約600mの地点に位置するOS91－34次調査でも出土している(第Ⅳ章第4節)。

96～101は製塩土器で(図107)、円筒形で内面には布目が残る99～101と、逆円錐形で内面が横方向のナデで仕上げられる98、鉢形で内面が縦方向のナデで仕上げられる96・97に分類できる。それぞれ[積山1993]の1b類・4a類・6a類に当る。96・99は外面に接合痕が見られる。101の内面には布のとじ合わせが見られる。101は100と同一個体と思われる。

以上の遺物については、おおむね難波Ⅴ中段階に位置づけられ、8世紀後葉に廃絶した井戸といえよう。

b．大坂本願寺期の遺構と遺物

OS88－1次調査地では堀と柱穴を検出した(図108上、図版15下)。

SM401　調査地西部で検出した南北方向の堀で、幅2m以上、深さ1.5m以上あり、水成層で埋没している。掘削面は第4層の上面で排土は第3c層の整地土として利用されている。なお、堀の肩を見るかぎり、その方位はN7°Eで、現在の道路の方向とほぼ同じである。肩付近から土師器皿102・瀬戸美濃焼丸皿103が出土しており、大坂本願寺期に位置づけられる(図109)。

SP401～403　SM401に沿って並ぶ3基の柱穴で、第3c層上面から掘られている。柵になる可能性が考えられる。

c．豊臣期の遺構と遺物

OS90－50次調査

柵と思われる柱穴列を2基検出した(図110)。

SA201　ほぼ直角に曲がる柱列で、柱穴の大きさは直径0.3～0.4m、深さは0.2～0.3mである。柱穴の間隔はもっとも短いところで1.2mである。南西にコーナーをもち、東西14m以上、南北14m以

上延びる。南北方向の柱穴列での方向はN7°Eである。

SA202　N88°Wの方向に延びる柱列で、柱穴の規模は**SA201**とほぼ同じである。柱間はほぼ等間隔で、1.8m前後である。

以上の柱列について、柱穴から瓦器や陶磁器の破片が出土しているものの、確実な年代決定の手がかりとなるものはない。ただ、**SA201**の方向は現在の道路の方向とほぼ同じで、豊臣期に位置づけられる可能性がある。

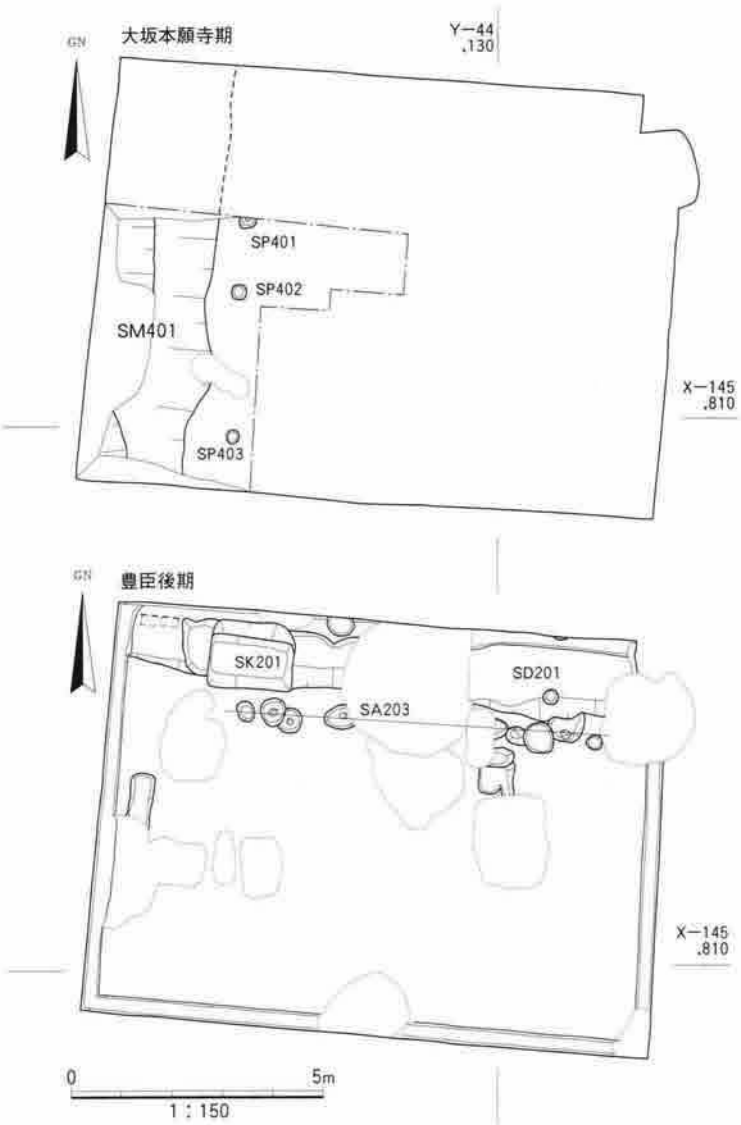


図108　OS88－1次大坂本願寺期・豊臣期の遺構

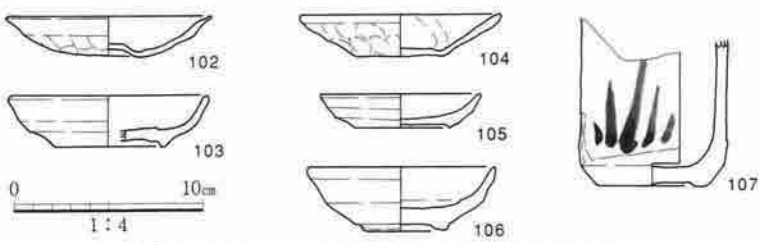


図109　OS88－1次大坂本願寺期・豊臣期の遺物

また、包含層より永楽通寶紋軒丸瓦**38・39**出土した(図98)。**39**は凹面に横方向の鉄線切り(コビキB)が見られることから、豊臣期以後に位置づけられるであろう[森田克行1984]。なお、永楽通寶紋は三河の水野氏が早くから家紋として用いていたが、織田信長も好んで用いたようで、軍功のあった仙石氏(後の信濃上田藩主)などの武将に与えて、それらが家紋となっている[渡辺三男1976]。

OS88－1次調査

第2・3層上面で豊臣後期の溝・柵・土壙を検出した(図108下)。

SD201　北壁沿いに東西方向に延びる溝で、幅はもっとも狭い部分で0.9m、深さ0.3mである。溝の方向はE6°Nで、現在の道路とほぼ同じ方向である。時期を決定するような遺物は出土していない。

SA203　**SD201**に沿って並ぶ柱列である。そのうち4基の柱穴には根石が見られた。**SD201**の北側でも柱穴があることから掘立柱建物である可能性も残される。

SK201　**SD201**を切る長方形の土壙で、南北1.3m、東西1.7m、



図110　OS90−50次調査で検出した柱穴列

深さ1.1mある。土師器皿104、瀬戸美濃焼丸皿105、同志野向付107、唐津焼皿106が出土した(図109)。

OS87−29次調査

豊臣後期の柵・土壙・段などを検出した(図111)。

SX201　東が高く、西が低くなるように整形した段である。北部でのみ遺存し、高さは最大で0.5mある。低い部分では段に沿ってSA204がある。

SA204　SX201の低い側に沿って延びる掘立柱の柵である。柱穴は南北0.7m、東西0.5mの楕円形を呈し、根石が用いられている。SX201とともに屋敷境に係わる施設と考えられる。このほか、柵にはSA205・206もあるが、柱穴が小さく、簡素なものであったと思われる。

また、土壙はSX201とその延長線より西側で多く見られる傾向がある。SK201からは唐津焼大皿が出土した。

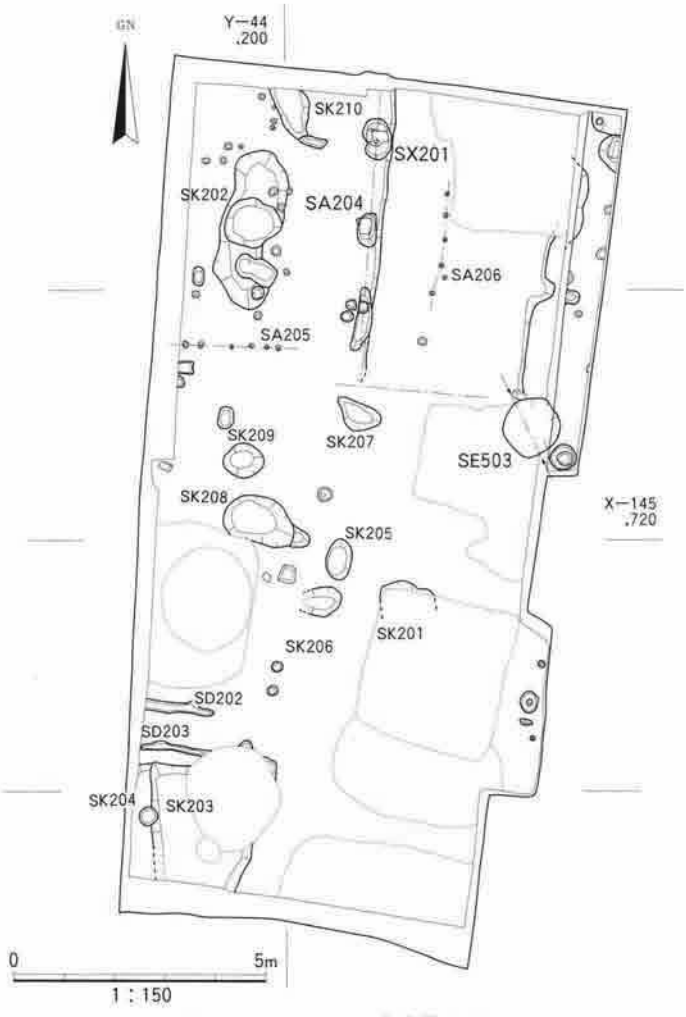


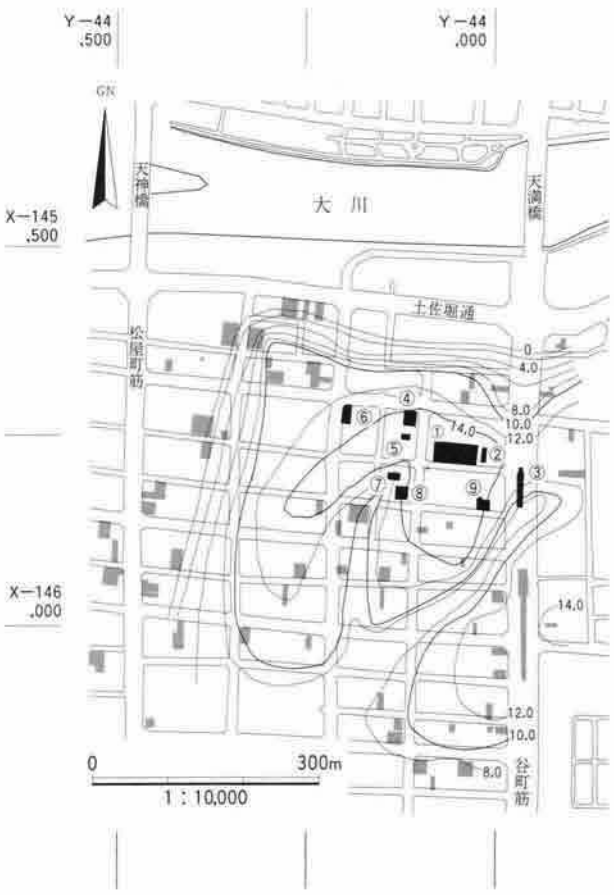
図111　OS87−29次遺構配置図

3)まとめ

本節で扱った地域ははじめにふれた通り、古代において重要な地点であったと考えられており、実際の発掘調査でもそれを示唆するような遺構・遺物が発見された。ここでは調査成果を基にして、当調査地一帯の特徴をまとめたい。

i)立地

まず、当調査地域が旧地形から見てどのようなところに立地していたか検討してみよう。図112はこれまでの調査で得られた地山の標高を基に復元した旧地形図である。これを見ると、当調査地域がTP+14m強で、周囲より高くなっていることがわかる。北側には大川に向って落ちる斜面があり、約150m北の地点で地山の高低差は14mを越える。西側はOS90－50次調査地から200m離れたところから急激に下がるようで、約300m離れたOS87－33次調査地との地山の高低差は14m近くに達する。東側の谷町筋と重なる位置にも緩い開析谷がある。また、調査地の東西には南北方向の開析谷が存在し、OS97－1次[大阪市文化財協会1999a]やOS90－51次調査(本章第3節)などで検出されている。このように周囲よりも高くなっていることから、大阪湾から大川をさかのぼった際、非常に目立つ高まりであったと思われる。



網掛けはこれまでの調査地を示し、番号の調査地は以下のとおりである。
①OS90－50　②OS88－31　③OS97－1(A地区)　④OS99－72
⑤OS91－54　⑥OS87－29　⑦OS88－1　⑧OS99－48　⑨OS96－16

図112　旧地形復元図

ii)検出された遺構と時期(図113)

遺物には古墳時代のものが若干含まれるものの、遺構に伴っているものは飛鳥時代以降である。ただ、奈良時代前半までは遺構は少なく、その時期までの具体像を検討する材料は少ない。

遺構がもっとも多いのは奈良時代後半～平安時代初頭である。建物はOS90－50次調査地で7棟が確認されているのをはじめ、他の調査地でもその時期に該当すると思われる柱穴が検出されている。

OS90－50次調査地の建物や溝はほぼ正方位といってよい。この地点はほとんど傾斜もないことから、地形の制約によるのではなく、正方位指向の結果といってよいであろう。なお、[積山2000]ではSD501を道路側溝と考えている。

井戸は3基検出された。いずれも掘削深度の関係で底を検出することはできなかったが、SE503で深さが4m以上ある。井戸の時期については、SE501が7

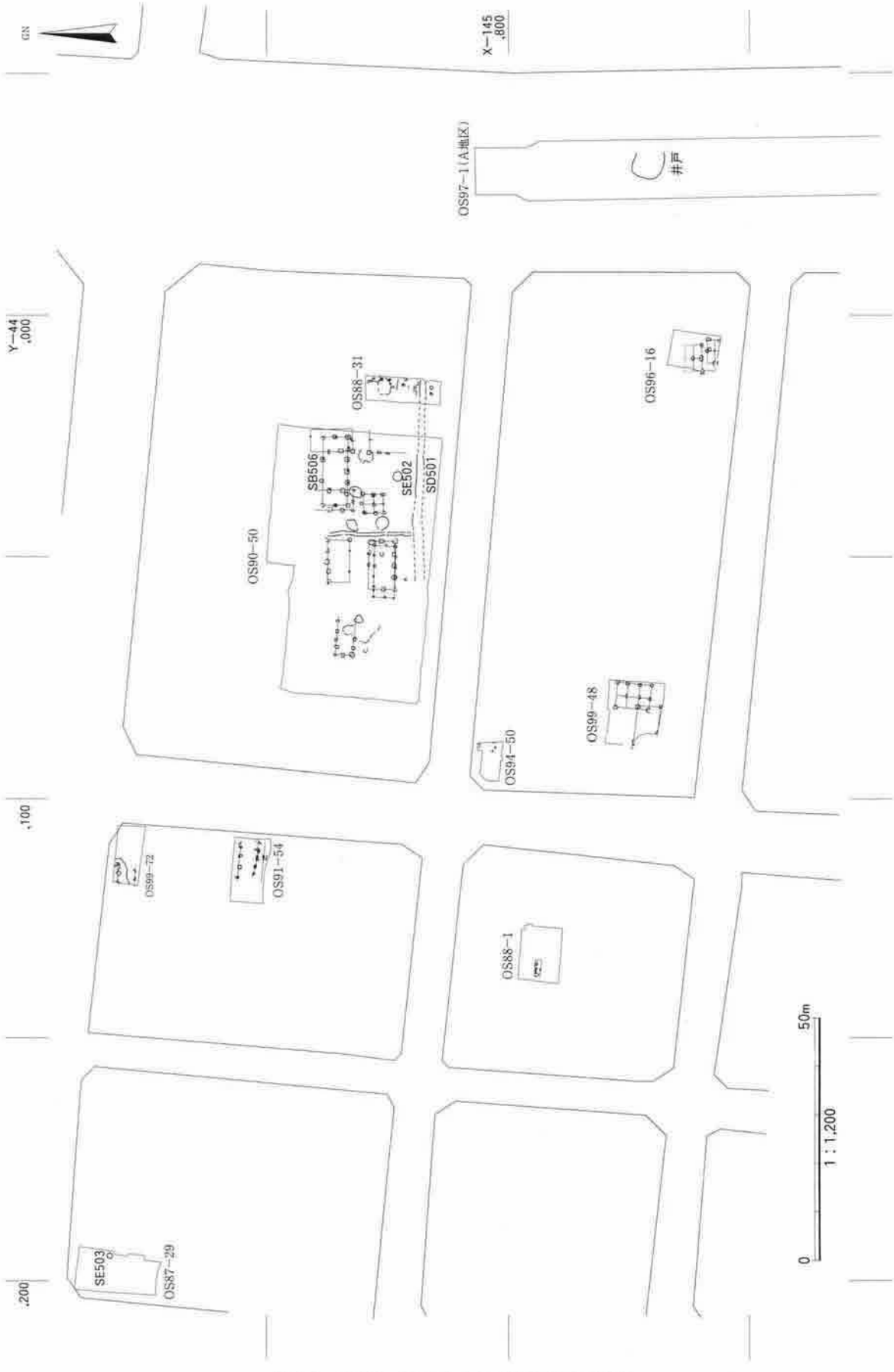


図113　OS90－50次とその周辺の古代の遺構

世紀後葉～末、SE502が8世紀末～9世紀初頭、SE503が8世紀後葉に位置づけられる。SE502・503からは墨書土器や奈良三彩など、この地域の性格を判断する材料となる遺物が多数出土した。なお、今回の報告対象調査以外では、OS88－31次調査地の南東約50mに位置するOS97－1次調査地A区で、一辺1.25mの方形板組井戸が検出され、9世紀前半頃の土師器・須恵器・緑釉陶器が出土している[大阪市文化財協会1999a]。

iii)出土遺物

a．墨書土器

8世紀後葉に位置づけられるSE503から出土した墨書土器は「十上」が2点、「攝」が1点、「木」が1点であり、8世紀末～9世紀初頭のSE502からは「厨」4点、「万女器」1点、「浄」1点出土した。文字が書かれているのはいずれも杯類であり、確認できる範囲ではほかの器種で墨書や墨画はなく、木簡などの文字資料もない。

この中で場所を示すものとしては「攝」と「厨」がある。「厨」はその字のごとく厨房を示しているものと思われる。「攝」については[櫻井1987・1989]ですでに示されているように、「摂津職」の所在を考える上で注目される。

「十上」については、93では上に別の文字が存在する可能性も考えられるが、92はこの2文字で完結する。同じ井戸から2例出土していることから何か意味があるのかもしれないが、詳細な検討はできなかった。また、「万女器」は「万女」という人物の銘々器であろうか。「木」や「浄」は遺物自体が破片であり、損失した部分に続く文字があった可能性が高い。

当調査地域は大坂城跡として指定された範囲でもっとも墨書土器が出土しているところでもある。上町台地の東斜面に位置するOS92－74次調査地でも墨書土器が数点出土しているが[大阪市文化財協会2002b、第Ⅱ章第3節]、これらは8世紀前葉～中葉に位置づけられ、本節で報告したものより古くなる。

b．開元通寶

当調査地域で奈良～平安時代初頭の地層・遺構に伴って出土した銭貨には和同開珎(初鋳708年)、神功開寶(同765年)、隆平永寶(同796年)、開元通寶(同621年)がそれぞれ1点あり、いずれも銅銭である。この中で開元通寶は唐が成立したあと、五銖銭にかわって鋳造された貨幣である。唐が存続している間、一貫して鋳造されており、さらに宋・明代になっても中国国内で流通していた。日本では平安時代末から徳川期初頭にかけて宋銭・明銭に混って多量に輸入されており、大坂城跡や大坂城下町跡の調査でも多く出土している[寺井誠2002b]。ただ、これらの開元通寶の多くは後世の鋳造と考えられ、皇朝十二銭が廃止されてから寛永通寶が鋳造されるまでの通貨として日本で流通していたものである。

しかし、今回の例は皇朝十二銭が鋳造されている段階であり、このような例ははきわめて希少である。表10は琉球列島を除く日本列島で出土した開元通寶の一覧で、その出土遺跡は北部九州と畿内に集中している(註3)。開元通寶の初鋳は621年であるが、年代的にもっとも近い例は福岡市南区柏原古墳群G－1号墳出土のもので、7世紀中頃の土器群の下の敷石間から2枚出土した[福岡市教育委

表10　開元通寶出土遺跡一覧

所在地	遺跡名	遺構・層	枚数	共伴した皇朝十二銭(括弧内は初鋳年)											共伴土器の時期	文献
				和同開珎 708	萬年通寶 760	神功開寶 765	隆平永寶 796	富壽神寶 818	承和昌寶 835	長年大寶 848	饒益神寶 859	貞觀永寶 870	寬平大寶 890	延喜通寶 907	乾元大寶 958		
大阪市中央区	大坂城跡(OS88－1次)	包含層	1													9世紀初頭	本書
大阪市天王寺区	細工谷	SD501	1	○												8世紀第2四半期	大阪市文化財協会1999
堺市	今池	流路50上層	1										○				堺市教育委員会1998
奈良市	平城京左京一条三坊	SD760	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○				9世紀中～後半	奈良国立文化財研究所1974
奈良市	興福寺	須弥壇下	1	○													奈良県教育委員会1955
奈良県明日香村	坂田寺第5次	SK160	1	○	○	○										8世紀後半	奈良国立文化財研究所1986
福岡市東区	海の中道3次	包含層	1		○							○		○		8世紀後半～10世紀代	福岡市教育委員会1982
福岡市中央区	鴻臚館跡	包含層	1													9～10世紀	註5
福岡市南区	柏原G－1号墳	羨道土器群下	2													7世紀中頃	福岡市教育委員会1986
福岡市西区	下山門	包含層	1													9～10世紀	福岡市教育委員会1973
熊本県泗水町	高江出分西	祭祀遺構	2	○		○		○	○	○							櫻木晋一1993

員会1986]。しかし、これ以外はすべて和同開珎の初鋳年である708年以後のものばかりであり、さらに確認できた10遺跡中6遺跡が平安時代の銅銭や土器と共伴している(註4)。また、1遺跡当り1～2枚の出土で、もっとも少ない皇朝十二銭の饒益神寶でさえ畿内で71点出土しているのと比べると[森島康雄2000]、格段に少ないのがわかる。

[原三正1986]では、延暦(元年＝782年)の頃から日本産の銅が不足し始め、隆平永寶以降の皇朝十二銭が小型化するとともに、その不足を補うために唐の開元通寶を輸入し、準公銭として流通していたと考えられている。平安時代に入ると確かに増加傾向はあるものの、皇朝十二銭を補えるほどの量が日本国内で流通していたとは出土事例からは考えがたい。加えて、一枚当りの価値の小さい開元通寶の銅銭は、高級品が多い国際貿易の通貨としては、決済に要する数量があまりにも膨大になるため、適当でなく、その使用を消極的に見る意見もある[栄原永遠男1993]。日本国内での出土量の少なさはこのような状況を反映しているのかもしれない。

本節で報告した開元通寶については、時期が9世紀初頭に位置づけられることから、[原1986]の皇朝十二銭が小型化し、衰退し始める時期に当る。孔が磨耗していることから緡銭(さしぜに)の形で伝来もしくは流通していたようである。大川沿いであるこの一帯は、当時の流通から見ても重要な地点であり、遣唐使船などによって中国から直接運ばれてきたことも考えられる。[木下2000]では、琉球列島以外の開元通寶の出土遺跡が官衙(可能性のあるものも含む)や寺院・墳墓に多いということを指摘しており、当地が摂津職の候補地であることを考えるとこれまでの傾向に合致する。このような傾向は皇朝十二銭の出土遺跡でも指摘されていることであり、特殊な状況とはいえないが、古代東アジアの流通経済史を考えるうえでの鍵となる可能性は十分孕んでいるものである。

c．その他

上記以外にも奈良三彩[櫻井1987]、統一新羅の土器、拒鵲鳩尾などの瓦類[中尾1995]、猿投窯産の灰釉陶器[伊藤純1991c]、鞴羽口など注目すべき遺物が多く、これらはこれまで何度も取り上げられてきた。鞴羽口については2点のみであるが、蛍光X線分析で先端に付着したスラッグから多量の鉄を検出し、当地で鉄加工が行われていたことを示唆する。

iv)まとめ

当地一帯については飛鳥～平安時代前半にかけて公的な重要施設が存在したことは、以前から考えられており、発見された遺構・遺物もそれを裏付けるものと思われる。また、上町台地先端で瘤のように突き出た高地に立地しているため、大阪湾や大川から眺めると非常に目立つ場所であったことは疑いない。

当地はまた、後期難波宮が長岡宮に移されて以後も中心的な役割を継続して担っていたようである。上町台地の奈良時代末から平安時代初頭の変遷をまとめた[積山2002]では、難波宮が長岡宮に移された後、南の四天王寺周辺と北の大川沿岸に遺構・遺物が集中するということを指摘している。大川の南岸に当る当地に集中する背景としては、難波津の水運を通じた物資交流と経済活動によるものと考えられている。

(寺井)

註)

(1)大阪歴史博物館設置の文化財用エネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDAX DX95改良型)を用いて、非破壊で表面の分析を行った。

(2)前報告[櫻井1989]ではSE301と報告された井戸である。

(3)琉球列島では13遺跡80枚の開元通寶が出土しており、九州以東の地域の数を凌駕している[木下尚子2000]。[木下2000]では古代の開元通寶の出土は、九州以東では官衙(その可能性があるものも含む)や寺院・墳墓などであり、琉球列島では貝塚遺跡などの一般集落遺跡であることから、流入背景が異なる可能性を指摘している。ここでは琉球列島を除外している。

(4)表10で示した開元通寶出土遺跡は[木下2000]の集成を基礎に、大坂城跡、細工谷遺跡、今池遺跡を追加したものである。ただし、霊安寺・朝倉橘広庭宮・橋牟礼川の諸遺跡については脱稿までに文献を確認できなかったために掲載していない。また、兵庫県南淡町の平松遺跡[南淡町教育委員会・淡神文化財協会1995]は報告書を見る限り、開元通寶が出土した地層から瓦器が出土していること、香川県善通寺市の金蔵寺下所遺跡[香川県埋蔵文化財調査センター1994]では現代作土から出土しており、かつ同一遺跡で鎌倉時代の遺構・遺物も検出されていることから、皇朝十二銭が廃止され、渡来銭が増加し始める時期以降に当る可能性があり、表10には含めていない。さらに、大阪市天王寺区宰相山遺跡で重圏文軒丸瓦とともに開元通寶が出土したという報告があるが[平林悦治1938]、実態を確認することができなかったため、これも表10には含めていない。一方、今池遺跡については堺市教育委員会の嶋谷和彦氏によると、中世と推定される地層から出土しているものの、古代の遺物が圧倒的に多く、中世に該当する遺物が含まれないこと、寛平大寶(初鋳890年)がいっしょに出土していることから表10に含めた。なお、今回の開元通寶の集成に際し、嶋谷氏よりさまざまな御教示を得た。

(5)福岡市教育委員会の山崎純男氏より御教示を得た。

第２節　OS93－20次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではOS87－66・89－58・89－68・93－20・95－19次調査の成果を報告する（図114）。旧地形では東西両側に谷地形が延びていることから、当地は周囲よりも高くなる。いずれの調査も試掘で豊臣期の地層を確認し、本調査を実施した。なお、これらはすべて既報告であり［京嶋1989、松尾1991b、植木久・宮本佐知子1991、平田1995、黒田1997］、本節ではそれらを要約して再録する。



図114　OS93－20次などの調査地位置図

２）調査の結果

ｉ）層序

OS87－66次調査地の観察結果を基に地層を説明する（図115）。

第１層　徳川期以降の整地層で層厚90cmである。３層に細分可能で、第1b層には地山の偽礫が多く含まれていた。

第２層　黄色細～中粒砂からなる地山の偽礫を主体とする整地層で、層厚は50cmである。上層との間には部分的に焼土がある。三ノ丸造成に伴う整地の可能性がある。

第３層　灰黄褐色含砂粘土質シルト・黄褐色シルトからなる整地層で、層厚は70cmである。４層に細分可能である。本層以下は部分的な掘削であるため詳細は不明である。豊臣期以前にさかのぼる可能性がある。

第４層　地山偽礫を含む暗灰黄色含砂シルト層で、層厚は50cmである。上面には乾痕がある。

第５層　固くしまった地山偽礫を含む褐色含砂シルト層で、層厚は30cm以上ある。第４～５層では６世紀後半から７世紀初頭の土器が出土した。

第６層　黄橙色砂礫の地山層で、北端で一部を確認したにすぎない。

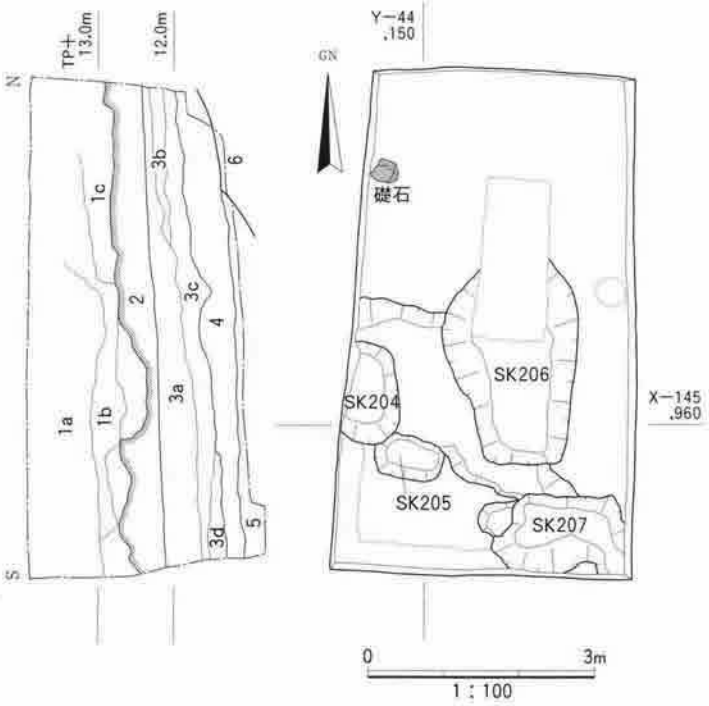


図115　OS87－66次平・断面図

ii)遺構と遺物

a．古代の遺構

OS93－20次調査

地山上面において、南東部で柱穴３基(**SP501～503**)を検出した(図117)。これらの柱穴は南西方向への落込みを埋めた第５層に該当すると思われる層を掘込んでいる。いずれも一辺１m程度の平面方形で柱痕跡は0.2m前後である。組合うものは見つからず西に展開すると考えられる。土師器・須恵器細片が出土したのみで時期を決することはできない。

柱穴群よりも北東では地山層が露出しており、本来の傾斜が急であったことが想定できる。古代の建物群はこの傾斜を造成して建てられたと考えられ、これらより北東において柱穴が見つからなかったのは、さらに高い平坦面より掘込まれており、すでに削平を受けたからと考えられる。

OS95－19次調査

中央部北端にて一部古代の包含層と考えられる黄褐色粘土質砂層が遺存しているほかは全域で地山層が露出しており、遺構はすべて地山層上での検出となった(図116)。

古代に属するものとして20基程度の柱穴を確認した。深さは30cmに満たず、遺存状況は悪い。このうち柱筋の通るものを**SB501**として復元した。東西１間(2.0m)以上、南北２間(4.0m)以上で、柱痕跡は15～20cmである。時期を決する遺物はない。古代の遺物としては包含層および後世の遺構から５～８世紀代の土師器・須恵器が出土している。

他に検出された土壙・溝はいずれも江戸時代以降のものである。

b．豊臣期の遺構

OS93－20次調査(図版18中)

SA201　調査地北部にある東西方向の柵である(図117・118、図版18上)。柱間は1.5～1.7mとまちまちである。南には約１mの距離で平行して２本おきに柱が並ぶ。柱穴の形状は平面が長方形で、

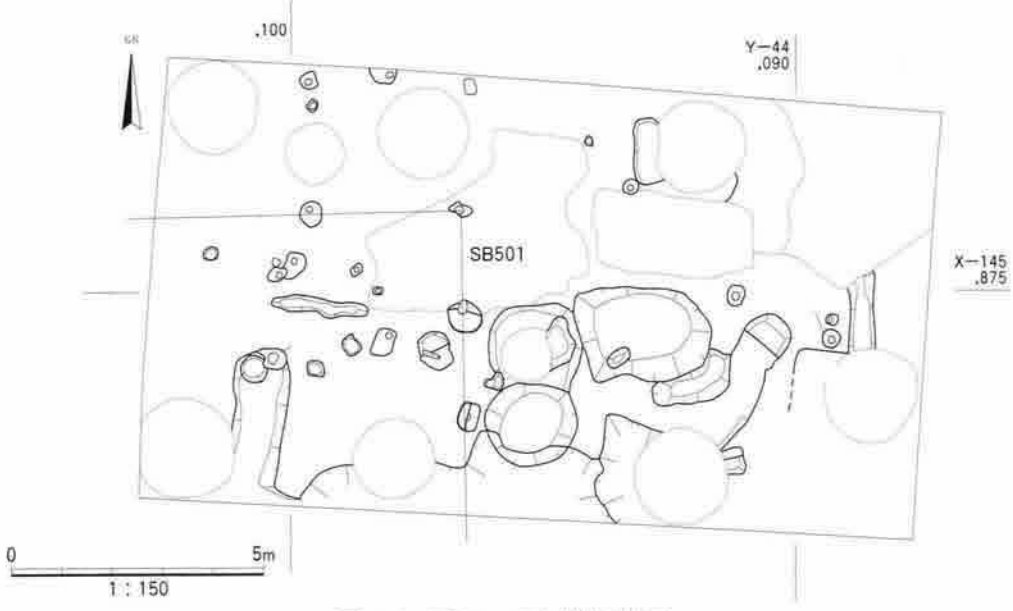


図116　OS95－19次遺構配置図

柱痕跡が約0.4mと太いという特徴がある。類似する遺構としてOS87－112次調査のSA501が挙げられる[大阪市文化財協会2002b、pp.174－176]。瀬戸美濃焼天目碗・志野の破片や瓦片が出土した。

また、北に接して平行する溝SD201があり、同時存在の可能性がある。なお、南側のSA202はSA201の柱穴を切ることから、豊臣後期か徳川期の遺構である。

このほか掘立柱建物SB201、土壙SK201～204も出土遺物および切合い関係から豊臣後期あるいは徳川期初頭に位置づけられるが、SB201はSA201とはやや方位が異なる。このうちSK201は深さ0.7mと形状に比して深い特徴をもつ。SK202・203は平面長方形で、深さ0.8～0.9mと共通することから、地下収納の施設と考えられる。これら一群の遺構は西端のライン

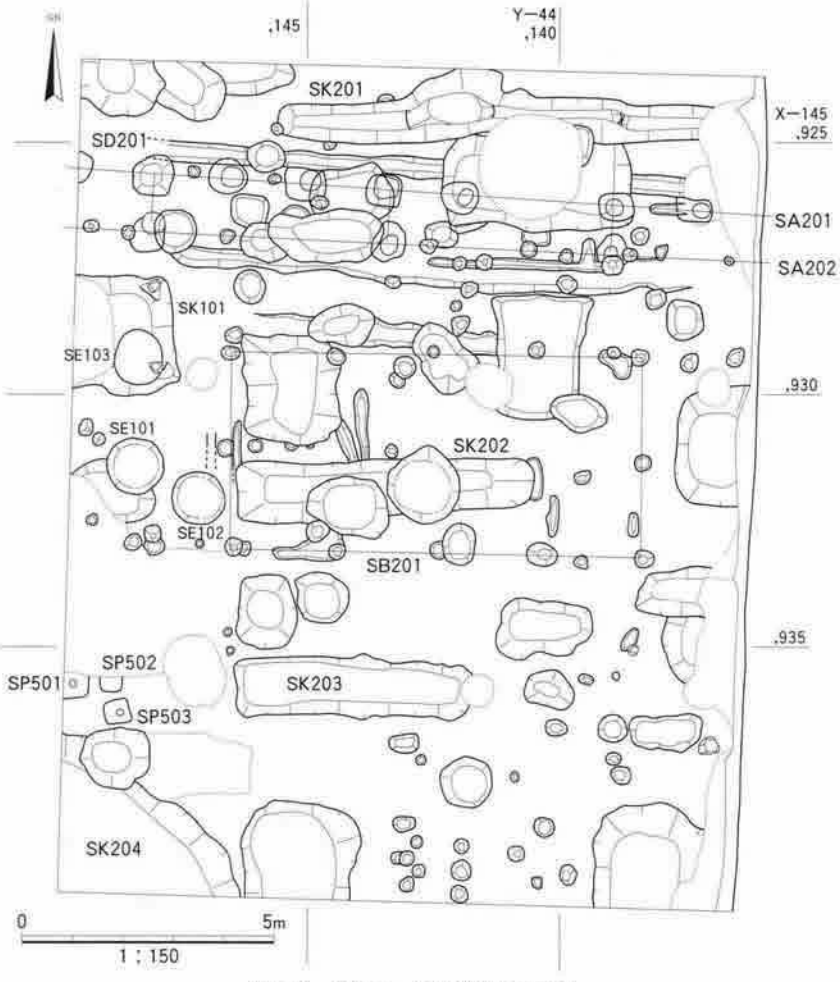


図117　OS93－20次遺構配置図

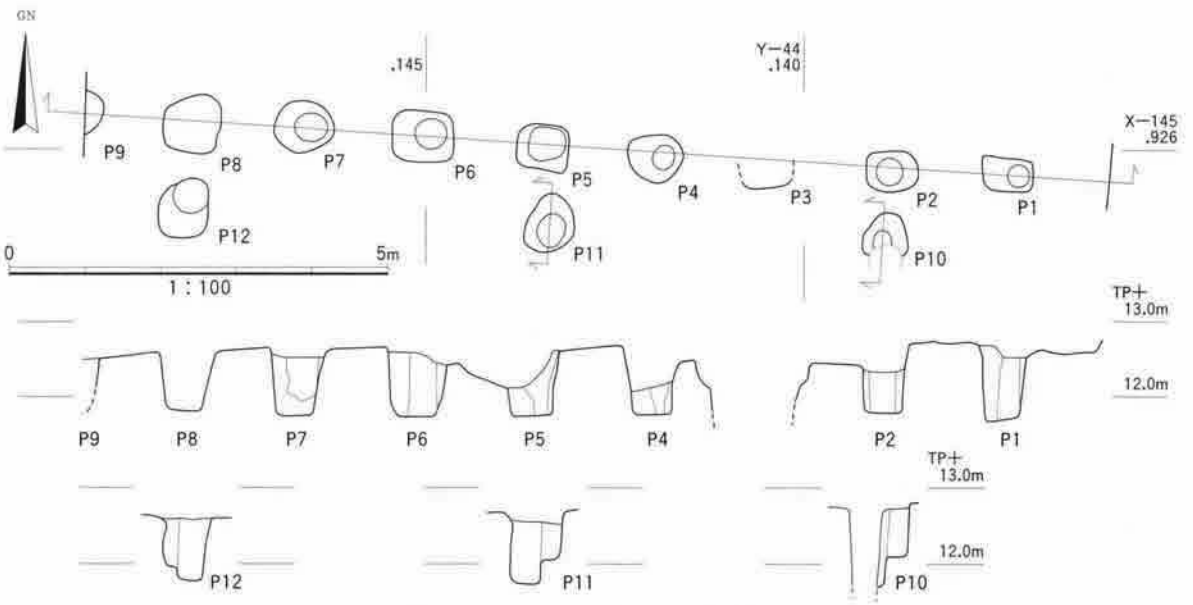


図118　OS93－20次SA201実測図

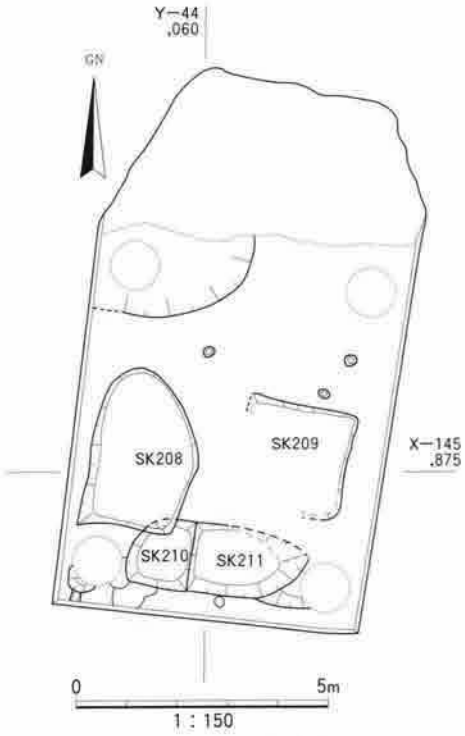


図119　OS89−68次遺構配置図

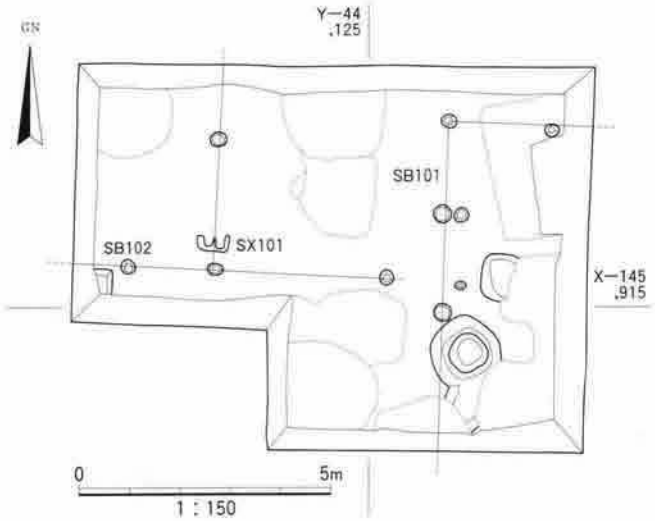


図120　OS89−58次遺構配置図

がほぼ揃っており、同時存在、あるいは極めて近接した時期の遺構と推定でき、揃う位置が屋敷境の可能性もあろう。また、SK204は南西の谷地形につながると思われる落込みで、地山の偽礫を含む。豊臣期の三ノ丸造成に伴う整地の際に埋められたと思われる。

OS87−66次調査

第２層上面で土壙SK204〜207、礎石を検出したが、調査面積が小さく、遺構の広がりはわからない(図115)。

OS89−68次調査

土壙SK208〜211を検出した(図119)。SK208は南北3.1m、東西2.1mあり、最下部が直径1.3m程度の円筒形になることから井戸と考えられる。唐津焼・備前焼が出土した。

ｃ．徳川期の遺構

OS93−20次調査

多くの土壙および井戸SE101〜103、穴蔵SK101を検出した(図117)。18世紀代に位置づけられるものが多い。北部に多く認められる土壙は埋土からゴミ穴と考えられる。SK101は屋内隅に礎石が認められた。

OS89−58次調査

大坂夏ノ陣直後の整地層上で、掘立柱建物SB101・102と竈SX101を検出した(図120)。SB101・102の方向はそれぞれN3°E、N2°Eで、現在の北接する道路の方向と異なる。SX101は２連の焚口をもち、左右いずれも幅0.15m、奥行0.24mである。通常より焚口が小さいのが特徴である(図版18下)。なお、当調査地では豊臣期の遺構はないが、整地層から金箔瓦が出土した(第Ⅴ章第２節)。

3)まとめ

地山上面で、南西が低くなる傾斜面を検出した。これはOS90−51次調査地(本章第３節)などで検出された谷地形と一連のものと思われる。その一方で、標高の高かった調査地では豊臣後期・徳川期ともに削平を伴う整地が行われたため、豊臣期以前の遺構については多くを検出できなかった。

豊臣期の遺構で、SA201は柱も太く、桟敷のような特殊な構造物であったと考えられる。防御施設の性格が高く、この地に武家屋敷が存在した可能性も否定できない。　　(平田・寺井)

第３節　OS90－51次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではOS90－51次および87－39次、89－102次調査を報告する（図121）。概要は以下のとおりである。

OS90－51次調査は試掘で地表下４ｍまで掘削しても地山層にいたらず、谷地形に位置していることが予測された。本調査では試掘で確認できなかった地層から奈良時代の遺物が出土するとともに、浅い部分でも地表下5.1ｍまで掘削しないと地山層に到達しないことが明らかとなった。当初予測していなかった掘削深度に及ぶため、危険が伴うことから、大阪市教育委員会を交え協議し、擁護壁より５ｍずつ離した中央部のみを調査することとなった。結果、奈良時代の建物群が検出された。しかし、調査終盤には長雨が続き、最終日には局地的な豪雨のため排水することもできず、それ以上の調査は断念せざるを得なかった。



図121　OS90－51次などの調査地位置図


写真11　OS89－102次完掘状況

OS87－39次調査地の南にはOS86－70次調査地があり、建物・溝などの豊臣期の遺構が確認されている［鈴木秀典1989］。本調査地でも試掘の結果、豊臣期の地層が確認されたため調査を実施することとなった。重機による掘削は後述の第１層までとし、以下は人力による掘削で進めた。

OS89－102次調査は、試掘の結果に基づき現地表面から1.6ｍまで事前に重機で掘削し、それ以下を人力で掘削した（写真11）。なお、建設予定建物の基礎深度の関係で、平面的な調査はGL－2.5ｍまでとし、それ以深については一部にトレンチを設定してGL－3.3ｍまでの地層堆積状況を確認した。その結果、地山面は調査最下部でも検出されなかった。GL－2.2ｍ前後から徳川期の土壙や瓦溜を検出した。

２）調査の結果

ｉ）層序（図版19上）

OS90－51次および87－39次調査での観察結果をもとに層序の記述を行う。OS90－51次では、連

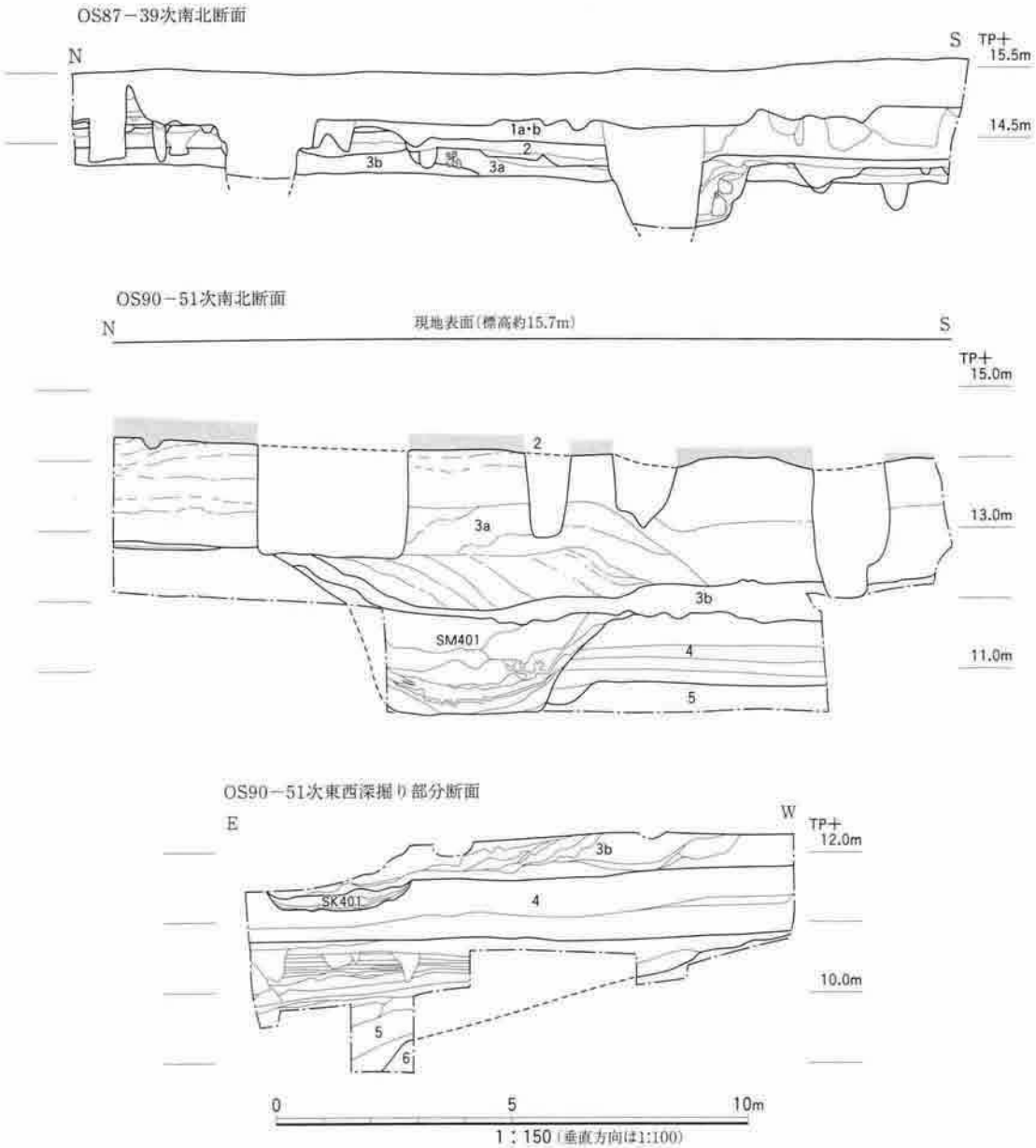


図122　OS90－51次および87－39次断面図

続した断面図を作成することができなかったため、図122の中段は南北方向の断面図を図上で上下を合成したものである。また、深い部分については東西方向の断面図を作成した。

第1a層　黒灰～暗褐色砂質シルト層で、OS87－39次調査地で検出された。層厚は70～80cmあり、遺構を伴ういくつかの層に細分できる。17世紀前葉以降に相当する。

第1b層　炭を少量含む暗灰～黄灰色シルト質細粒砂からなる整地層で、層厚は10～60cmある。OS87－39次調査地で検出された。肥前磁器を含まず、徳川期初頭の大坂城再建時の整地層と考えられる。

第２層　大坂夏ノ陣に相当する焼土層である。

第3a層　黄褐色のシルト・砂の偽礫からなる厚い整地層である。OS90－51次調査地では北から南へと土が投入されており、層厚は厚い部分で2.3mある。三ノ丸造成に伴う整地土と推定できる。

第3b層　黄灰色砂質シルトの豊臣前期の整地層である。層厚は約30cmあり、両調査地で観察された。

第４層　灰オリーブ色砂混り粘土質シルトからなり、層厚は100cmほどである。OS90－51次調査地で観察された。土質から作土の可能性がある。遺物が少ないため、時期は決しがたいが、室町～豊臣前期に相当すると考えられる。

第５層　黒褐色～灰色の砂質シルト層で複数の薄層からなる。OS90－51次調査地で観察された。厚い部分で170cm以上ある。整地層と生活面とが互層になったものと考えられる。後述する遺構群は本層内で検出した。土師器・須恵器が多く出土し、奈良時代に位置づけられる。

第６層　黄褐色砂礫からなる地山層である。OS90－51次調査地では、上面は北西が高く、南東が低くなる。

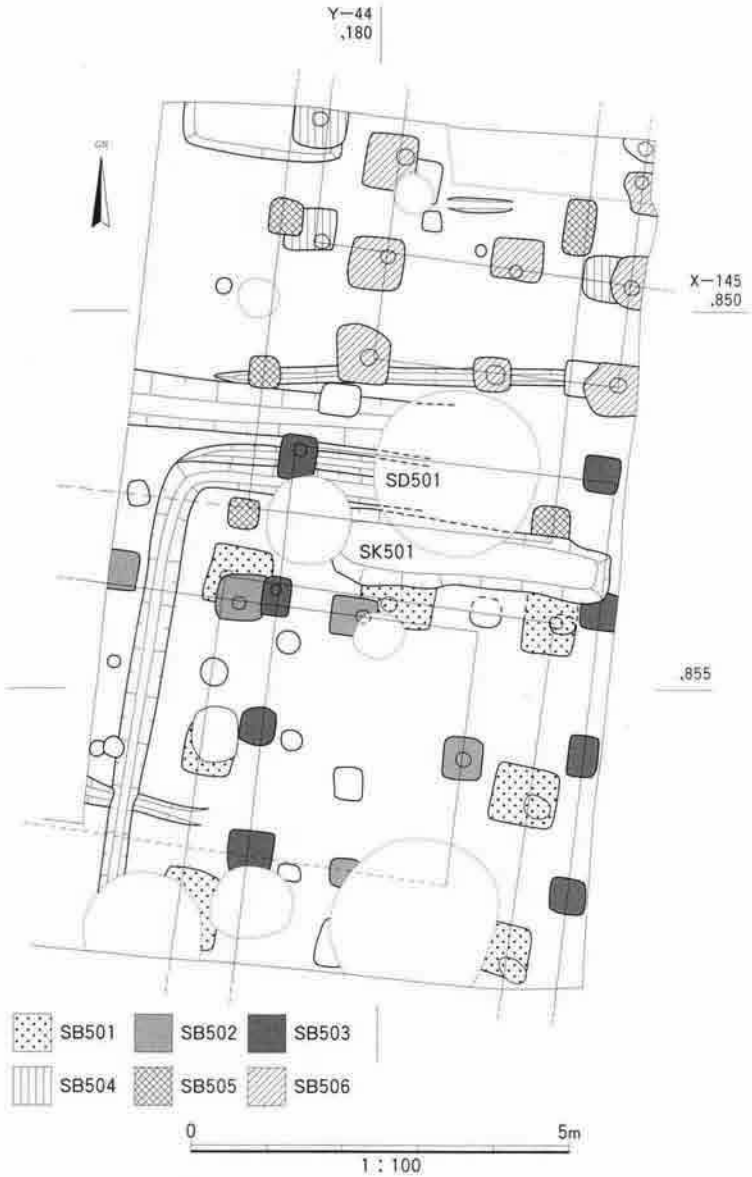


図123　OS90－51次奈良時代遺構配置図

ii)遺構と遺物

ａ．奈良時代の遺構と遺物

OS90－51次調査地の第５層内で多数の柱穴・溝・土壙を検出した(図123、図版19中・下)。部分的な掘削のため詳細は不明であるが、６棟以上の掘立柱建物があったと推定できよう。

SB501　東西２間(4.5m)、南北２間以上(4.5m以上)ある。重複関係からもっとも古く考えられる建物で、柱穴は一辺0.8～1.0mあり、ほかの建物よりも大きい。この建物を溝**SD501**が取囲む。

SB502　東西３間(５m)以上で、南北２間(3.4m)である。柱穴は一辺0.5～0.6mの方形で、**SB501**の柱穴を切る。

SB503　南北３間(5.5m)以上で、東西は２間(4.2m)と推定される。柱穴は一辺0.4～0.5mの方形で、**SB502**の柱穴を切る。

SB504　トレンチの北端で検出された。一辺0.6mの方形の柱穴をもつ。

SB505　東西２間(3.9m)以上で、東西は２間(4.0m)と推定される。

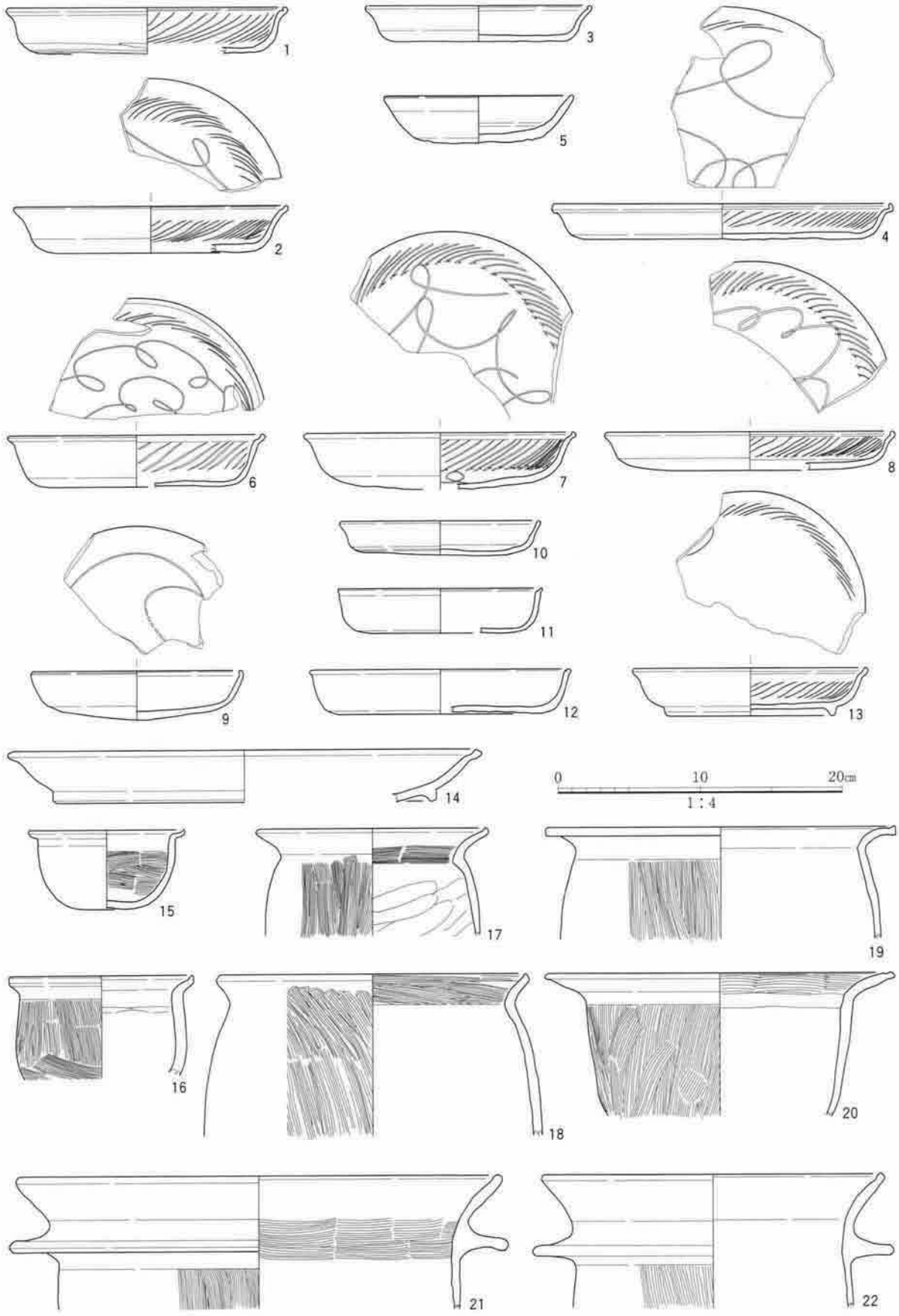


図124　OS90－51次SK501・第５層出土遺物

SK501(１～５)、第５層上部(12～15)、中部(７・11・16・20・22)、下部(８・９・17・18)、最下部(６・19・21)、一括(10)

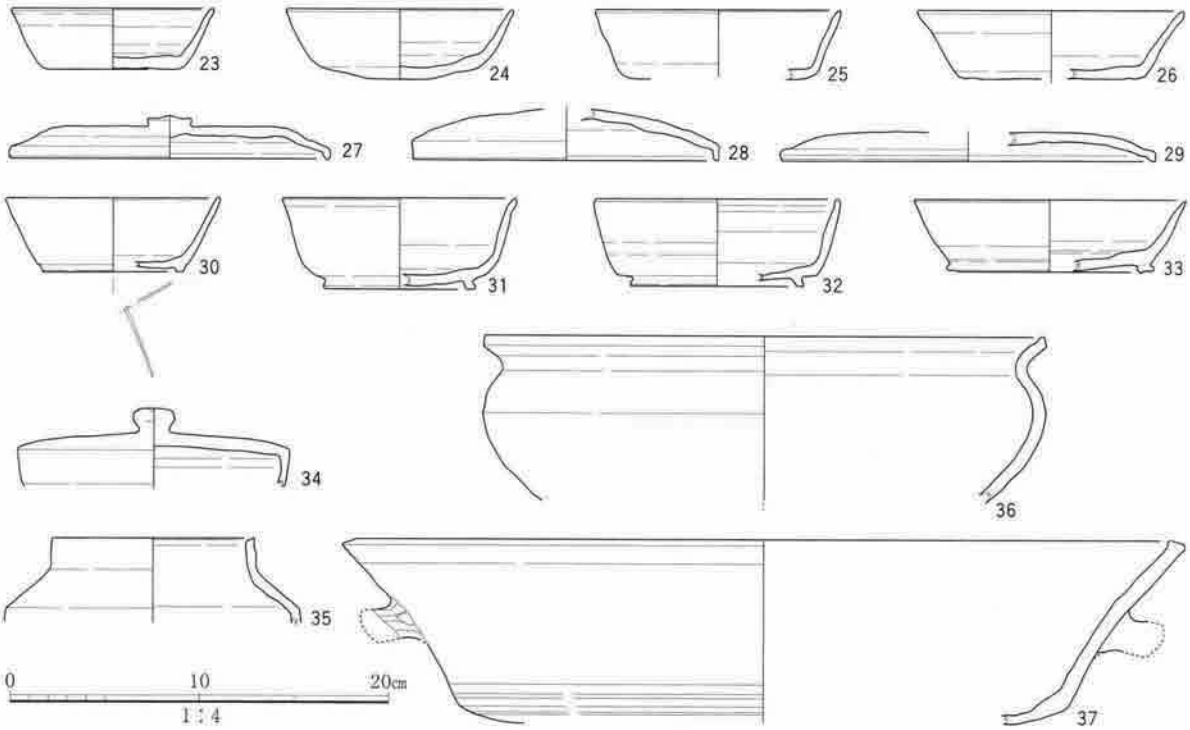


図125　OS90－51次第５層出土遺物

第５層上部(23・27・29・31・35)、中部(25・26・28・33・34)、下部(32・36)、最下部(37)、一括(24・30)

SB506　東西２間(3.2m)以上で、東西２間(2.7m)以上である。

SK501　SB501・503・505の柱穴を切る東西3.7m、南北1.0mの土壙である。土師器杯A1～3、皿A4、須恵器杯A5が出土した(図124)。3の内面はナデで仕上げられ、暗文はない。

また、第５層からは土師器杯A6～12、杯B13、皿B14、甕15～20、羽釜21・22、須恵器杯A23～26、杯B蓋27～29、同身30～33、壺蓋34、短頸壺35、鉢36、盤A37が出土した(註１、図124・125)。土師器杯・皿で施されている放射状の暗文はいずれも１段で、12・14のようにナデで仕上げられ暗文がないものもある。なお、10・11は器面が荒れて暗文の有無は不明である。須恵器杯Bは高台が底部の縁につく30・33と、内側につく31・32がある。30の底部にはヘラ記号が施される。これらの土器は難波Ｖ古段階に属するが、暗文が施されない土師器杯や高台が底部の縁につく須恵器杯Bなどに後出する要素がある。また、第５層掘削の際は４段階に分けて掘削し、上・中・下・最下部と示したが、結果的に上下で時期差は認められない。

SB501・502・503の重複関係から建物の時期は少なくとも３時期以上あるものの、方向はいずれもN7°Eである。この方向は谷地形に規制されたものであろう。また、柱間は1.5～2.2mである。例外もあるが、概して柱穴が小型のものほど新しい傾向にあるといえる。前述の事情により、厳密な時期は決しがたいが、第５層出土土器から見て８世紀中頃の建物群と想定できよう。

注目すべきことは、検出した建物群が谷地形内にあり、周囲の当時の地表面と比較しても３～４m程度は低い位置に当っているという事実である。このことは、周囲の広範囲にわたって同時代の建物群が密集して存在したことを間接的に示すものであろう。

b．大坂本願寺期の遺構と遺物

一部重機により除去したため詳細は不明な部分も残るが、東西方向の堀SM401および土壙SK401を断面で確認した。これらは第４層上面より掘込まれている。

SM401　幅７ｍ、深さ1.5ｍある断面が逆台形の堀で、帯水痕跡が認められる(図122)。大きさや形態から堀と考えられる。溝を隔てて北側の方が1.1ｍ高く、建物が存在したとすれば北側であろう。

SK401　南の低い部分で検出した、有機物を多く含んだ土壙である。位置は図126に示した。出土遺物には土師器皿40～43、瀬戸美濃焼小碗44・碗45・皿46があり、44～46には鉄釉が施されている(図128)。遺物の年代観からこれらの遺構は本願寺期に属すると推定できよう。

ｃ．豊臣前期の遺構

OS90－51次調査

第3b層上面で豊臣前期と考えられる掘立柱列・溝・土壙を検出した(図126)。検出面の地形は北が高く、南が0.5ｍほど下がっている。

SA301　調査地の北側で柱穴を５基検出した。E3°Sの方向に並ぶが、これはSX301の方向とほぼ同じである。北側の調査区外に柱穴が展開して掘立柱建物になる可能性もある。

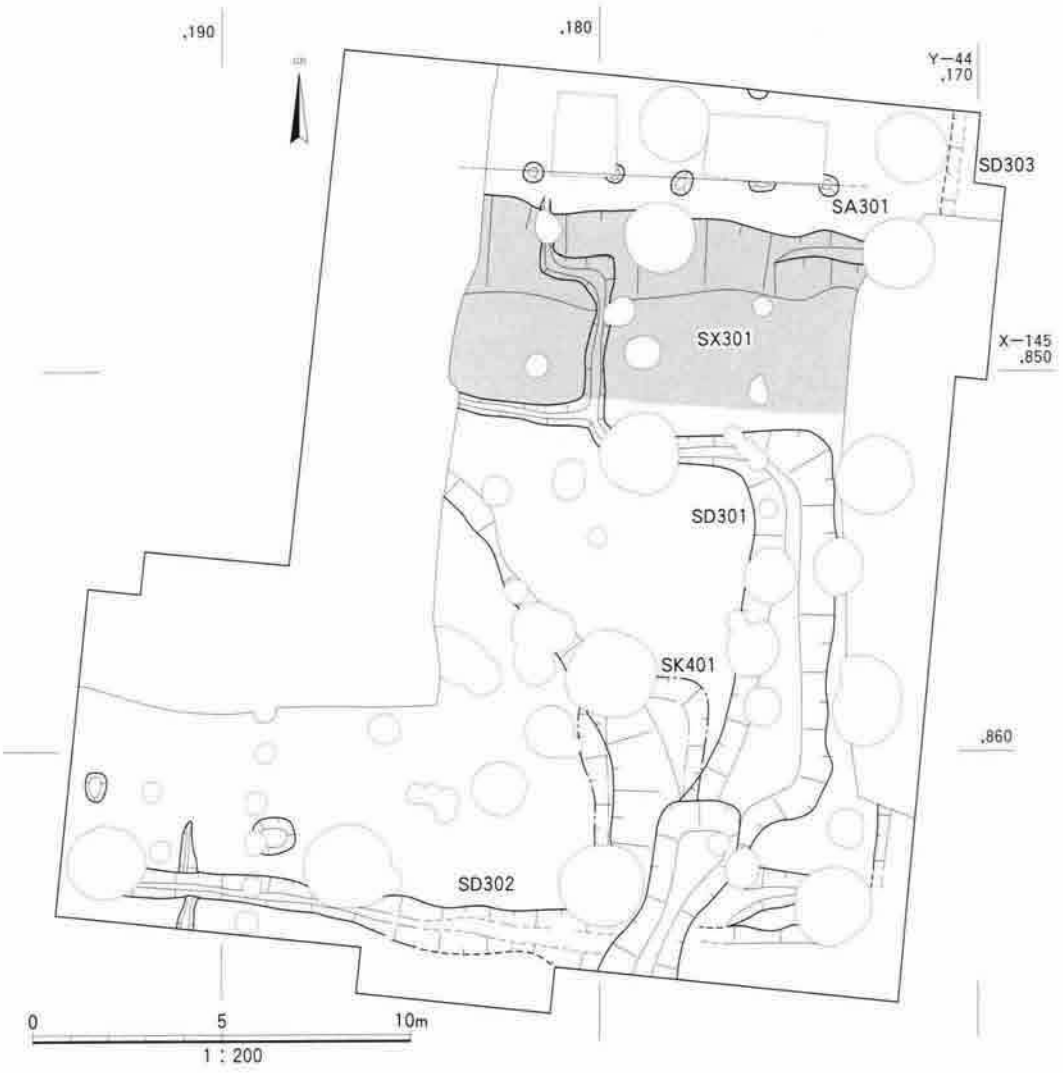


図126　OS90－51次豊臣前期遺構配置図

SX301　SA301の南側にある落込みで、瓦が多く散乱した状態で検出された。北側に瓦葺きの建物が存在したことが予想される。唐草文軒平瓦38、巴文軒丸瓦39はここから出土した(図127)。38は凸面にヘラ描きで草あるいは木が描かれている。

SD301　幾度か屈曲しながら南流する溝である。調査区の南端付近では一段深くなる。

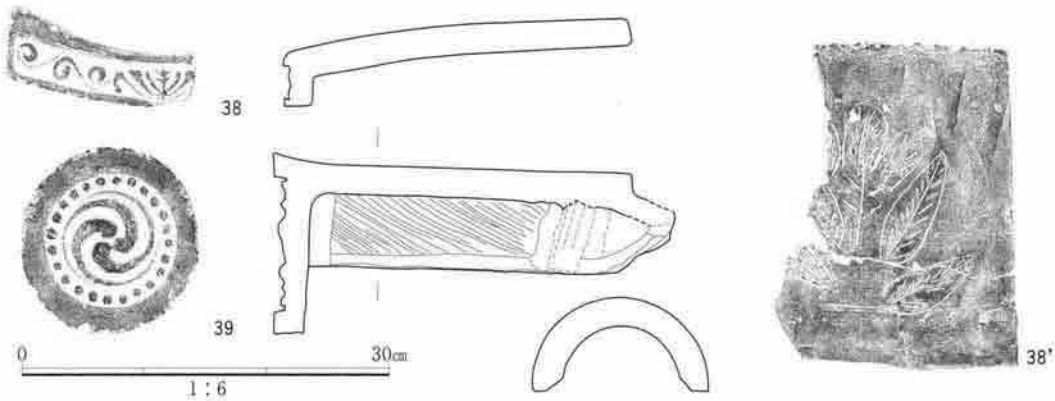


図127　OS90－51次SX301出土瓦

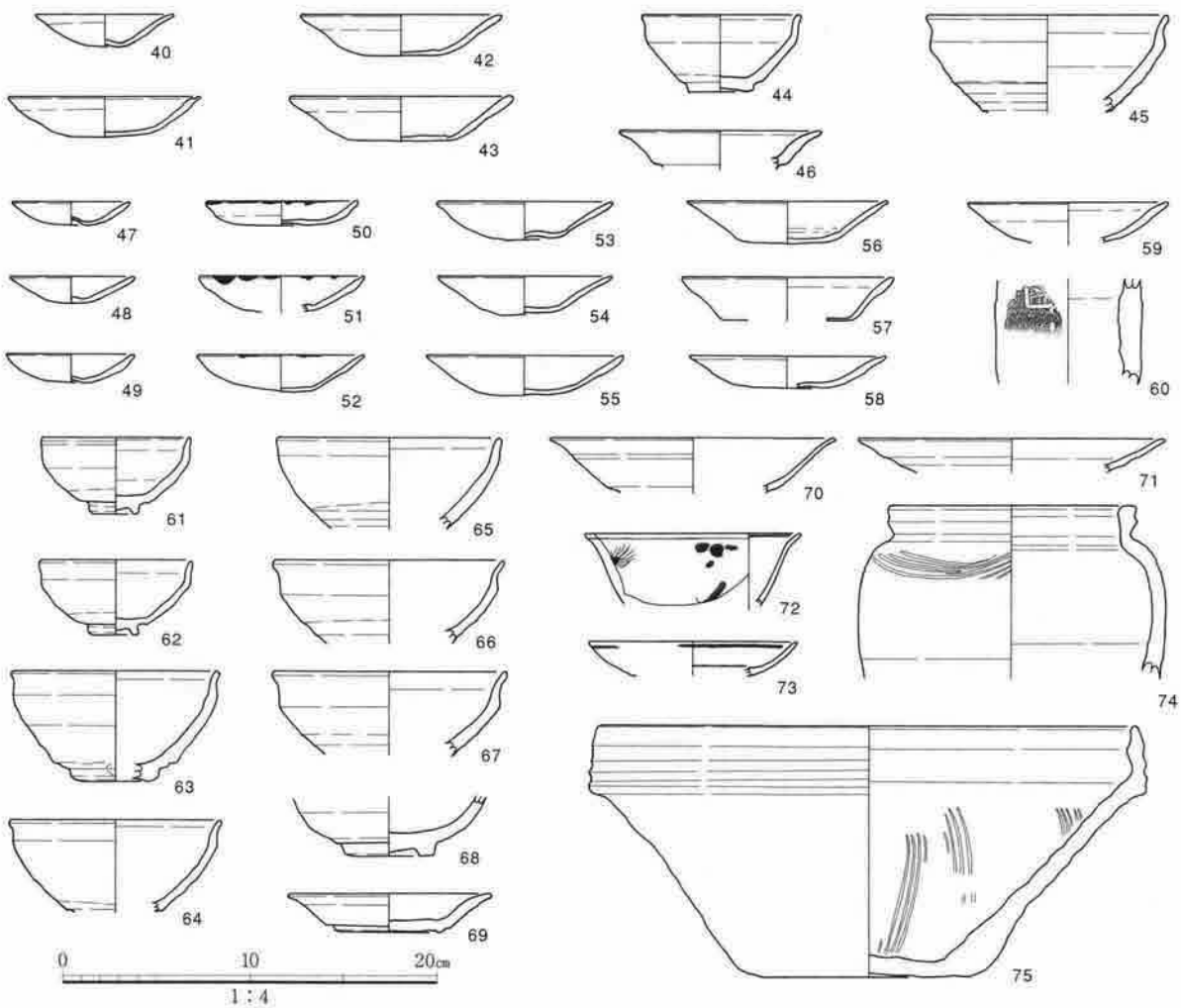


図128　OS90－51次SK401・第3a層出土遺物

SK401(40～46)、第3a層(47～75)

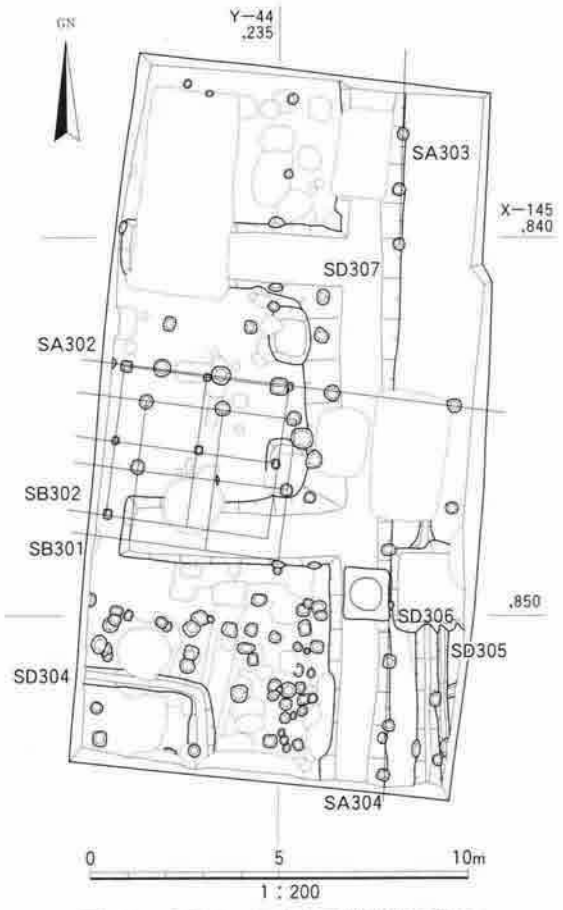


図129　OS87−39次豊臣期遺構配置図

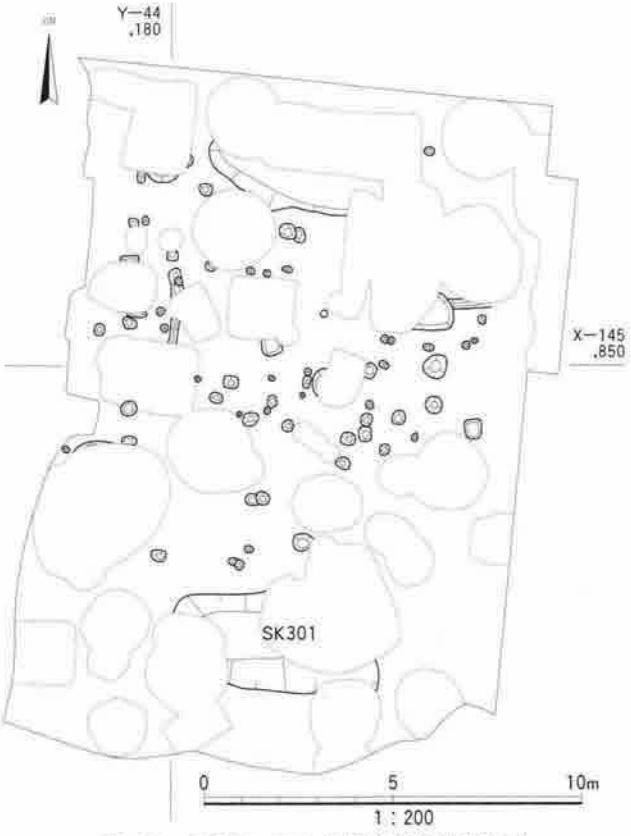


図130　OS90−51次豊臣後期遺構配置図

SD302・303　SD302が東西方向、SD303が南北方向で、直交する。SD302には杭および板による土留めも認められた。方向がN7°Eで、現在の道路と一致する。

なお、本調査地の第3a層下部より金箔押瓦２点(第Ⅴ章第１節)とともに、土師器皿47～59、瀬戸美濃焼碗61～68、同皿69、李朝白磁皿70・71、青花碗72・皿73、備前焼壺74、同擂鉢75、焼塩壺60などが出土した(図128)。60には胴部に刻印があり、最後の１文字は「門」であろう。新しい要素が見られるため、混入の可能性もある。

OS87−39次調査

第3b層基底面で掘立柱建物・溝・柵を検出した(図129)。切合い関係から豊臣前期に属すると考えたのは以下の遺構である。

SB301・302　総柱の掘立柱建物で重複しているが、前後関係はわからない。いずれも南北２間(3.4m)、東西２間(3.8m)以上と同規模で、小型である。SB302の柱穴はSA302に切られる。方向はN7°Eで、現在の道路と一致する。

SA302　SB301・302と平行して延びる柵である。柱の間隔は1.5m前後である。

SD304　調査地の南西隅にあり、L字に曲がる溝である。

ｄ．豊臣後期の遺構

OS90−51次調査

第3a層上面で遺構を検出した(図130)。調査地の南部と西部には地下室があったため、この面の遺構は削平されている。

第3a層上面は大坂夏ノ陣に伴う焼土層で覆われており、豊臣後期に位置づけられる。多くの柱穴のほか土壙が見つかったが、建物として復元することはできなかった。

深さ１mほどのSK301からは土師器皿76～80、同耳皿81、李朝白磁碗86、青花碗87、華

南三彩皿88、瀬戸美濃焼小碗89・90、同碗91・92、同皿93～96、同向付97～100、唐津碗101、同皿102・103、軟質施釉陶器碗104～106、焼塩壺82～84、信楽焼擂鉢107、備前焼擂鉢108、犬形土製品85が出土している(図131)。97～100については、97・98は志野焼で、99・100は黄瀬戸である。軟質施釉陶器碗105は、白色釉上に緑色釉で文様を配したものである。

OS87－39次調査

第3b層基底面で溝・柵を、第3a層上面で溝を検出した(図129)。検出面は異なるが、第３層が薄い

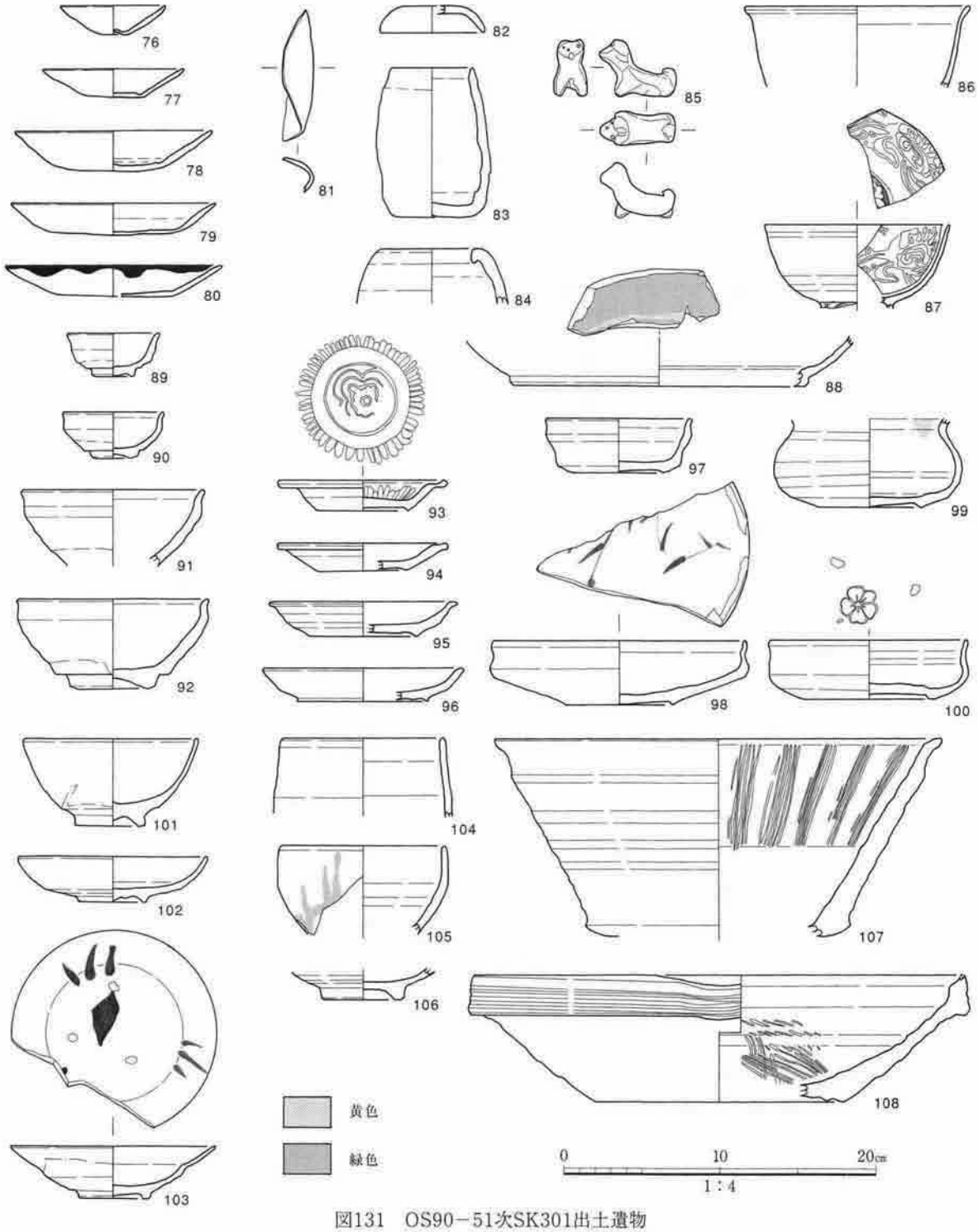


図131　OS90－51次SK301出土遺物

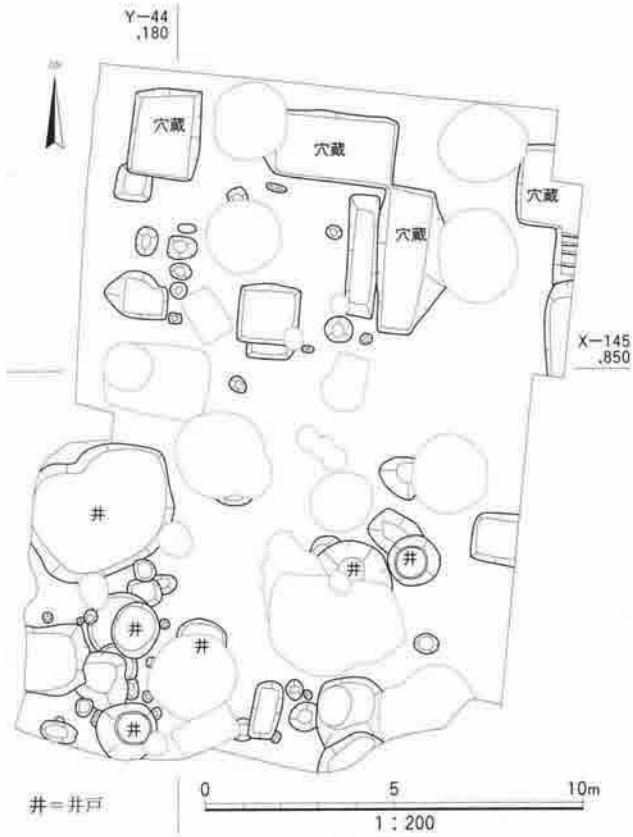


図132　OS90−51次徳川期遺構配置図

ため同時期のものと考えた。

SD307　幅1.5～2.5m、深さ0.6～0.7mの南北方向の溝で、西に2条の溝が5.5m延びる。

SA303・304　SD307の東肩に沿ってN2°Eの方向に並ぶ。一見連続するように見えるが、SD307が派生する部分で途切れており、これらの施設は関連があると考えられる。

この面で検出した遺構については、SD305から唐津焼片が出土したほかは遺物がないため時期は確定できないが、豊臣後期に相当すると思われる。

e．徳川期の遺構

OS90−51次調査地の第2層上面で検出した遺構である(図132)。多くの穴蔵および井戸がある。北部に穴蔵、南部に井戸が集中する傾向にある。当地は埋没した開析谷の上にあり、南側が下流で地下水を得やすいため、このような遺構配置になったのであろう。

3)まとめ

奈良時代の建物群の発見は、当時の景観を考えるうえで重要な資料であるといえる。大坂城西部、大川南岸では奈良時代の建物群が多く検出されているが、ほとんどが標高の高いところであり、削平を受けて消滅したものも少なくないであろう。今回、谷地形内という悪い立地条件にも係らず多数の建物群が見つかったという事実は、周辺にかなりの密度で建物群が存在したことを間接的に示すものであろう。建物群の方位が正方位からややずれるのは地形に左右された可能性が高い。

本願寺期の遺構は周辺でも検出例が少なく、堀と考えられる大規模な溝は本願寺の遺構の広がりの解明への糸口の1つとなろう。

豊臣期においては三ノ丸造成時の大規模な整地のようすが明らかとなった。豊臣前期には谷地形の名残を残す低い地形であったものを平坦に埋め立てている。同様の状況は大坂城全域で認められるものであり、三ノ丸築造に当っての地形の改変の大きさを物語るものであろう。

(松尾・平田・寺井)

註)

(1)これまで第6層出土遺物として紹介されたものである[佐藤1994・2000]。

第4節　OS87－133次および91－70次調査

1）調査地と周辺の概要

本節では谷町筋と大手通の交差点の北西の街区にあるOS87－133次およびOS91－70次調査を報告する(図133)。

OS87－133次調査は試掘立会(OS87－110次)で徳川期の礎石建物と豊臣期の遺物包含層が検出され、本調査にいたった。OS91－70次調査地は大手通に面する。攪乱が多かったため、約30㎡を調査し、古代の柱穴を1基検出した(写真12)。これは南側のOS91－32次調査地(第Ⅳ章第1節)で検出された奈良時代の建物群と一連のものと思われる。

なお、本節の調査地は基準点測量を行っていないため、遺構図は磁北で示した。



図133　OS87－133次および91－70次調査地位置図

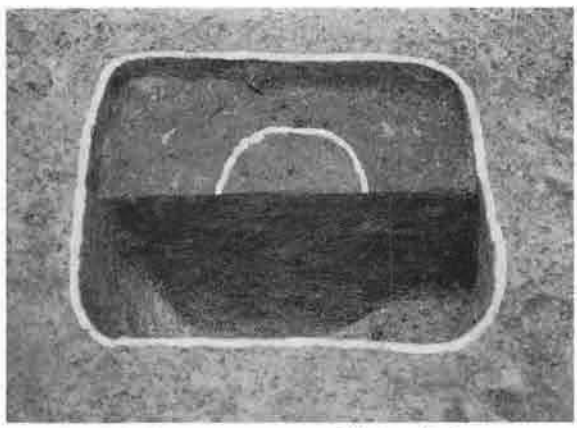


写真12　OS91－70次検出の柱穴

2）調査の結果

i）層序

OS87－133次調査地において、豊臣期の地層までを西壁で、それ以下の地層を調査地中央の東西に掘削したトレンチで観察した(図134)。西側ほど地山が低くなり、OS97－1次調査地で検出されたものと同じ開析谷[大阪市文化財協会1999a]が西側に南北に延びていると推定される。

第1層　暗褐色粘土の偽礫や明黄褐色中粒砂、数㎝大の円礫などで構成される整地層である。三ノ

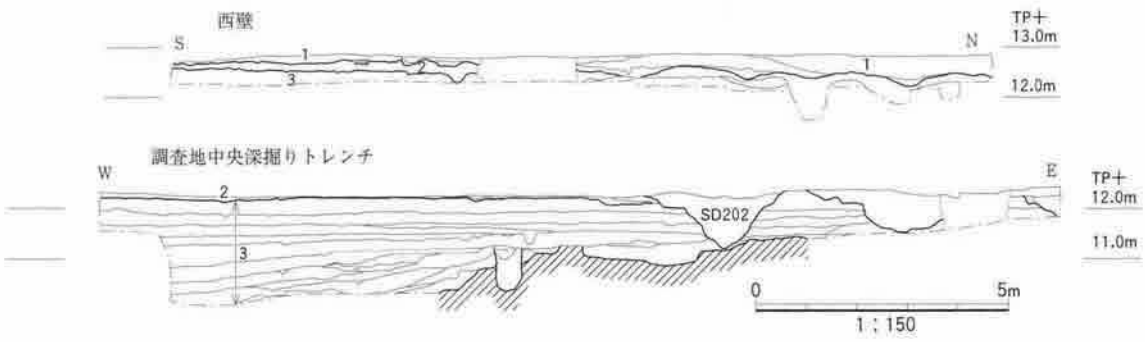


図134　OS87－133次断面図

丸造成時の盛土と思われる。

第２層　灰色シルト層で、部分的に炭を含む。豊臣前期に該当する。

第３層　東西の深掘りトレンチで確認した地層である(図版20上)。上部は水平に堆積しており、わずかながら瓦器を含んでいる。中には作土層と思われるような層もあった。下部は地山の傾斜に沿って堆積し、地山の偽礫が多く含まれる部分もあり、難波Ⅲ中～新段階の土器が多量に出土した。また、断面に柱穴が見られ、飛鳥時代の建物があったと考えられる。

ii)遺構と遺物

ａ．豊臣前期の遺構

礎石建物・溝・土壙を検出した(図135)。

SB201・202　調査地中央で検出した(図版20中)。二つの建物に復元したが、礎石が同じ方向で並んでいることから、同一の建物である可能性もある。**SB201**は南北４間(8.0m)、東西５間(5.8m以上)あり、柱間は東西の方が短い。**SB202**は南北３間(4.8m)、東西７間以上(8.3m以上)に復元される。礎石列は磁北から８°東に振る。

SB203　調査地南側で検出された建物で平面形は不明である。礎石列は磁北から10°東に振れる。



図135　OS87－133次豊臣前期遺構配置図

なお、SB201～203の礎石にはいくつか焼けて赤変しているものがあった。

SD201　調査地中央で東西方向に延びる溝で、幅0.6m、深さ0.3mである。磁北による東方向から南に8°振れ、建物方向とほぼ等しい。

SD202　調査地を南北に延び、幅約2m、深さ1.2mある。埋土は11層に区分することができる(図版20下)。9～11層は水成層で、それより上は2層を除き、埋戻し土である。また、図136の1層は第2層に共通する特徴を有し、SB202の礎石が溝埋没後の上にあることから、建物に先行することがわかる。

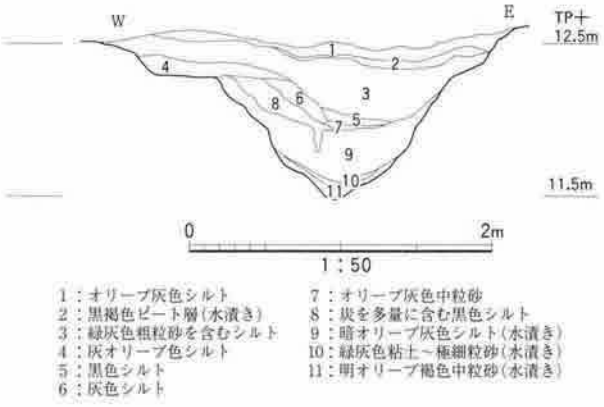


図136　OS87－133次SD202断面図(北壁)

SX201　SD202から枝分かれする深さ約0.2mの窪みである。

3)まとめ

OS87－133次調査地で発見された豊臣前期の礎石建物群の向きは、ほぼ正方位である現在の街区と異なり、磁北から東に8～10°振れている。これについて近隣の調査と対比してみよう(図137)。

東隣のOS97－1次調査地B・D地区では、三ノ丸造成時の整地層の上下で豊臣前期と後期の建物群が見つかっている[大阪市文化財協会1999a]。前期では礎石建物と掘立柱の柵が検出されており、これらの方向はいずれもN7～8°Eに収まる。また、B区の北西では谷地形の落込みが残っているが、この落込みの方向とほぼ等しい。一方、豊臣後期にも掘立柱の柵や礎石建物が現れ、これらはいずれも正方位をとる。なお、前期の検出面の標高がTP+13.6～14.0mで、OS87－133次調査地とは約1mの高低差がある。

谷町筋をはさんで南東約50mに位置するOS88－121次調査地では、豊臣前期の地層の下面で鋳造関係の遺物を含む土壙が、上面で矢板を伴う溝と埋桶が検出され、いずれも豊臣前期に該当する[大阪市文化財協会2002b、p.128]。溝はN7°Eで、OS97－1次調査地の方位とほぼ等しいと同時に、現在の街区の方向とは異なる。なお、検出面の標高はTP+14.2～14.5mである。

1つ南の街区に位置するOS91－32次調査地では、地山上面(TP+13.5m前後)で古代の遺構とともに豊臣前期の遺構が検出されているが、時期決定の手段に乏しい(第Ⅳ章第1節)。三ノ丸造成時の整地層で約0.5mかさ上げされている。

以上の調査地で検出された建物・柵・溝はほぼ谷地形の方向と等しい。そのため、谷地形に建物や柵が規制されたことが想定されるが、その一方で、豊臣後期の惣構北西部で検出されている方向とも近いということは看過できない。三ノ丸造成以前に豊臣後期の街区の原型となる地割が存在した可能性が考えられる。なお、礎石の中で焼けたものがいくつかあった。三ノ丸造成前の火災の跡は、本調査地から東200mの地点にある府立大手前高校内の調査で見つかっている[佐久間貴士1989]。このような火災についての具体的な記述は文献にはないが、[佐久間1989]では慶長の大地震を火災の原因

の可能性に挙げている。ただ、これについては十分な検証が進んでいないため、今後の課題となってくるであろう。

（寺井）

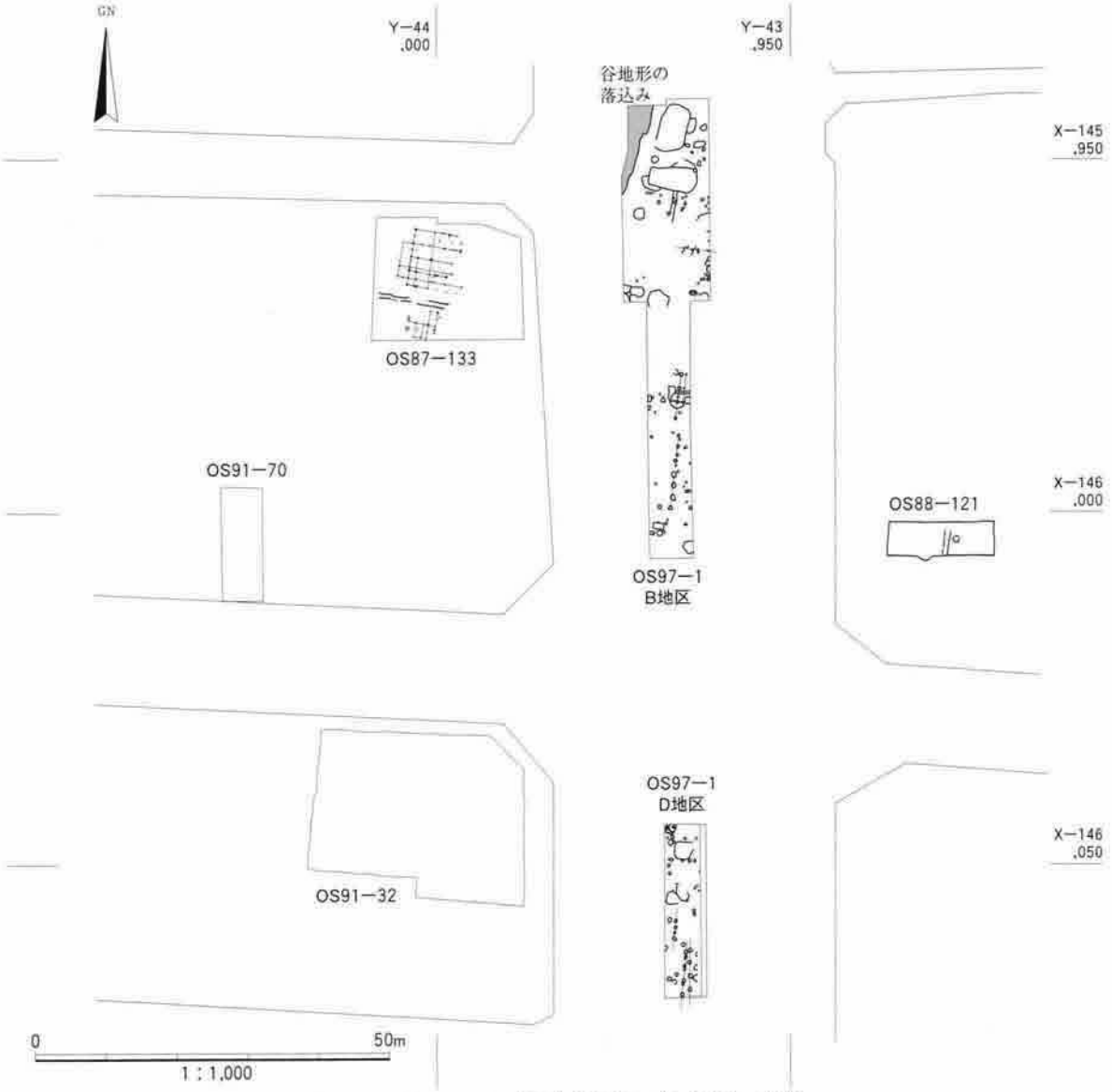


図137　OS87−133次調査地周辺の豊臣前期の遺構

第５節　OS87－147次および91－16次調査

１）調査地と周辺の概要

調査地周辺は比較的地山層が高く検出される地点である。OS87－147次とOS91－16次調査地は道路を挟んで斜め向かいの位置関係にある(図138)。両調査地ともに重機による掘削は現代整地層および攪乱のみとし、以下は人力による掘削で調査を進めた。なお、OS87－147次調査では攪乱が多く、調査地北半にのみ地層と遺構が遺存することが明らかとなったため、北半を中心に調査を進めた。

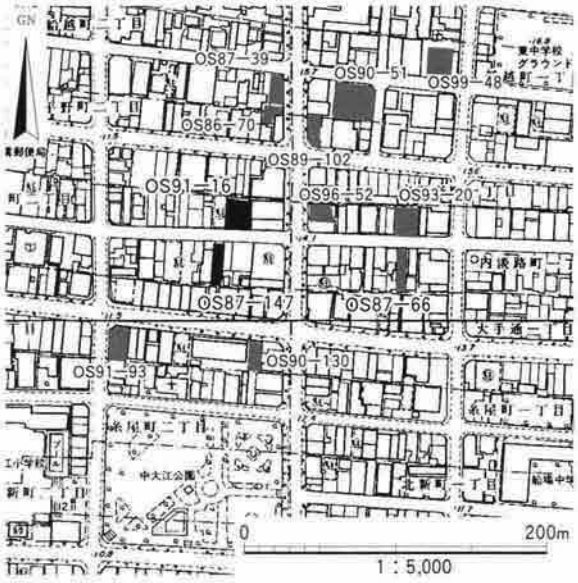


図138　OS87－147次および91－16次調査地位置図

２）調査の結果

ｉ）層序

OS87－147次調査の所見をもとに記す(図139)。

第１層：現代盛土で、層厚は20～40cmである。

第２層：オリーブ灰色シルト層で、層厚は５～10cmである。近世の整地層(第３層)の上に堆積し、盛土後の近世包含層と考えられる。

第3a層：浅黄色の中粒砂からなる。調査地全体に分布が認められ、層厚は20～30cmである。

第3b層：調査地東壁の北側に認められる暗灰黄色シルト層で、偽礫を多量に含む。その下端は一見、遺構の輪郭のような線を描くが、整地土中に混った偽礫である可能性が高い。

第3c層：北壁断面で観察できる黒褐色シルト層で、炭片・焼土を多量に含む。

第3d層：にぶい黄褐色シルト層で、炭片・焼土を含む。層厚は約10cmである。

第4a層：にぶい黄褐色の細粒砂～シルト層で少量の炭片・焼土を含む。

第4b層：粘土質シルト層で炭片・焼土を含む。

第4c層：浅黄色の均質な中粒砂からなり、層厚は５～10cmである。北壁で確認されたため、図139には図示していない。

第4d層：灰色の粘土質シルト層で、炭片・焼土を含む。

第4e層：黒褐色シルト層で炭片・焼土を多量に含む汚れた地層である。本層は、後述する石垣の北面下部を覆う。大坂夏ノ陣に由来する焼

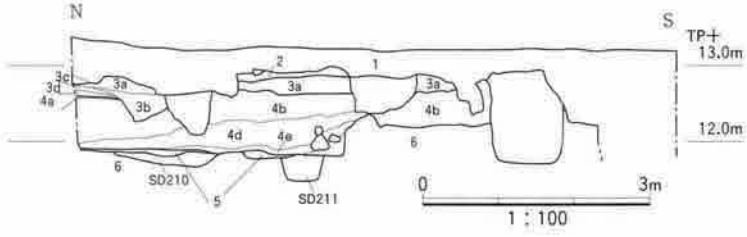


図139　OS87－147次東壁断面図

土層と思われる。

第５層：灰色の細粒砂で、不純物をいっさい含まない。

第６層：黄橙色粘土質シルトで、上町台地一帯で地山と呼ばれている層準に相当する。

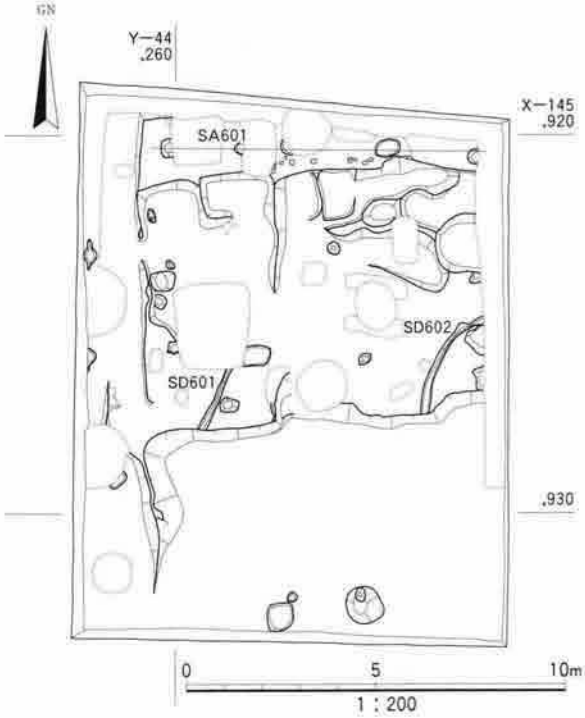


図140　OS91−16次豊臣後期以前の遺構配置図

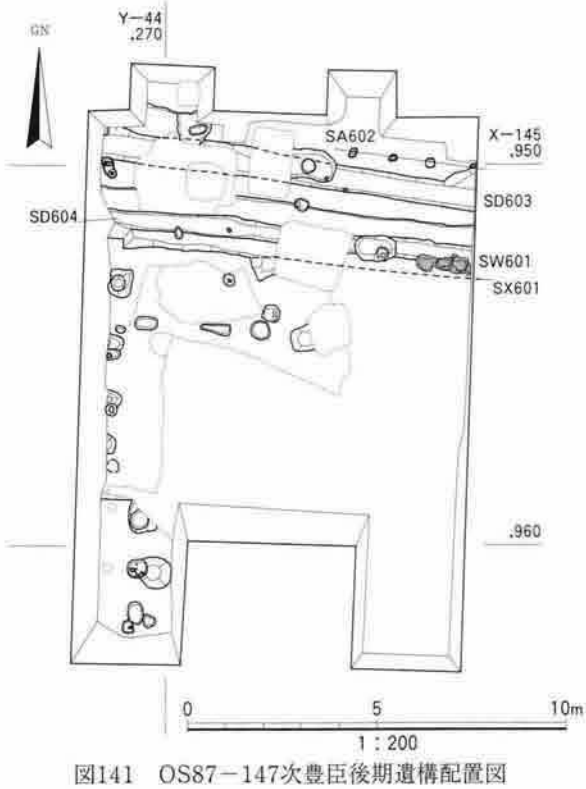


図141　OS87−147次豊臣後期遺構配置図

以上、各層のうち第３・４層は多量のブロックを含んだり、その中に何枚かの薄層が介在することから、整地層と考えられる。それら一括可能な地層を境に上下２枚の生活面が確認でき、下位の生活面の下にはさらに、先行する溝が見つかった。よって、都合３時期の生活面が存在したことがわかる。

ii)遺構と遺物

ａ．豊臣後期以前の遺構

OS91−16次調査

土壙・溝・柵を検出した(図140)。

当調査地は北が高く南が低くなり、高低差は0.9mある。OS87−147次調査とは異なり、地形に凹凸が見られ、方形の穴が多く重複しているようにも見受けられることから、整地目的というよりも土の採取を目的とした遺構の可能性もある。また、埋土に豊臣後期の遺物を多く含むこと、焼土が含まれないことから大坂夏ノ陣以前に埋戻されていたとも考えられる。高い部分、低い部分ともに土壙・柱穴が多数認められた。このうち北端に位置するSA601は埋土が他と異なっており、古代にさかのぼる柵か建物の一部の可能性もある。

OS87−147次調査

第３～５層を除去して、第６層上面で検出した遺構であるため、第３層以下の遺構が含まれる可能性がある。当調査地は地形的には南が高く、北に一段下がる。段状遺構・石垣・溝・柵などを検出した(図141、図版21上)。

SD603・604　SD604は深さ0.3mで断面逆台形であるのに対し、SD603はごく浅い。両者ともに人為的に埋戻されている(図版21下)。段SX601の掘込みと溝の掘削の前後関係は不明であるが、

方向はいずれもE8°Sで近接することから、これの形成とともに溝が掘削されたと思われる。

SX601　高低差が0.7mある段で、ほぼ垂直に掘込まれている(図版21中)。北側の低い部分には平行する２条の溝**SD603・604**がある。

SW601　上記の溝が埋められた後に、段に沿って構築された北面する石垣である(図版21中)。根石付近の一部が遺存するにすぎず、段に沿って全域にあったかどうかは不明である。火を受けており、大坂夏ノ陣時には存在したといえよう。これらの施設は位置関係から豊臣後期の短期間に築かれたのであろう。また、段の境の高い部分、低い部分両方に土壙および柵などが認められることから、これらは屋敷境もしくは一屋敷内での施設と考えることができよう。

ｂ．徳川期の遺構と遺物

OS91－16次調査

OS91－16次調査では、第３層上面で穴蔵・井戸・土壙などの遺構を検出した(図142)。多くは18世紀代のものである。また、多くを重機によって掘削したため、各遺構の正確な平面形態は不明であるが、江戸後期の瓦溜**SK301**からは元文丁銀もしくは文政丁銀を模したと思われる丁銀形土製品**1**が出土した(図143)。

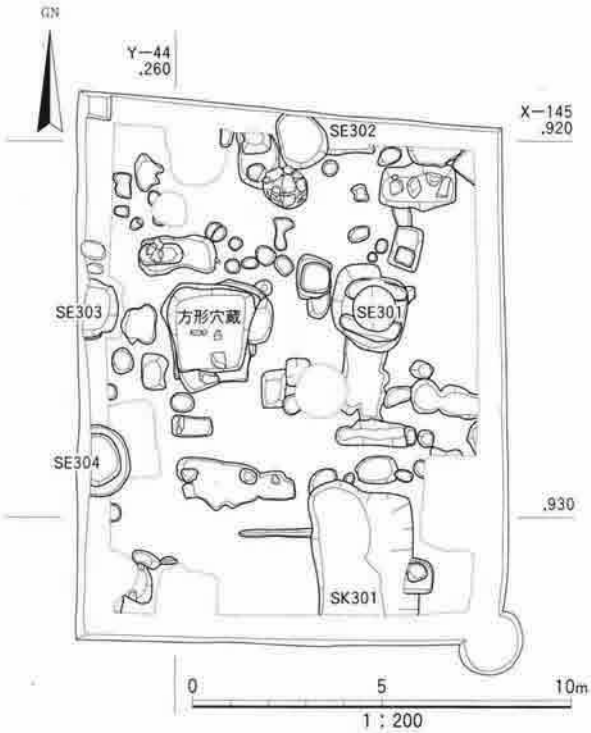


図142　OS91－16次徳川期遺構配置図

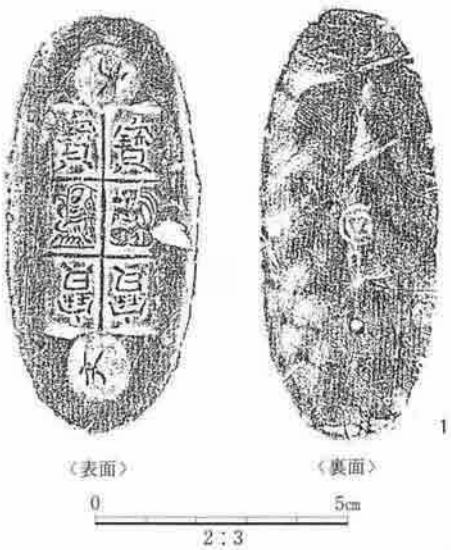


図143　OS91－16次SK301出土丁銀形土製品拓影

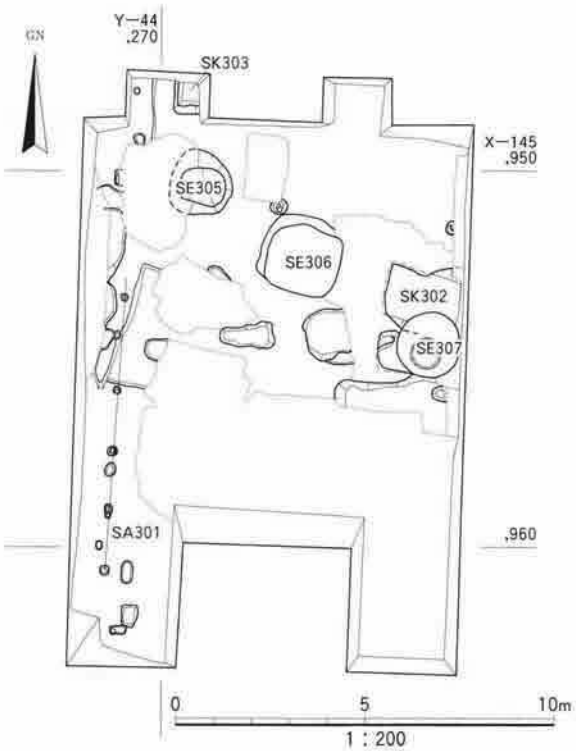


図144　OS87－147次徳川期遺構配置図

OS87－147次調査

夏ノ陣後、石垣などを埋立てて築かれた遺構群である。概略を述べるにとどめるが、17世紀前半以降に相当する柵もしくは建物の一部SA301、17世紀後半の井戸SE305・306、18世紀後半代の穴蔵SK302などがある(図144)。SA301の方向はN4°Eで、豊臣期よりも正方位に近づく。

3)まとめ

調査地周辺は比較的地山が高く検出される地点である。両調査地ともに豊臣後期の段階に地形に改変が加えられている。豊臣前期の遺構が認められなかったことから、この時期の遺構面はさらに高い位置にあったと推測することが可能であろう。豊臣後期の遺構としてはOS87－147次調査の石垣や溝の方位が注目される。東で南に振る方位は現在周辺にある東西方向の道路の方位にほぼ一致する(図145)。この町割は少なくとも豊臣後期にさかのぼる可能性が高い。こうした道路にあって調査地の面する内淡路通のみはほぼ正東西方向であり、異質な感を受ける。正方位の内淡路通がいつ形成されたのかは明らかでないが、検出された遺構で判断するかぎり、少なくとも東で南に振る方位を指向していたことがわかる。本来、内淡路通も東で南に振る方位であったとすれば、より東の調査地内において道路が検出される可能性があるが、現在のところ良好な調査地に恵まれず、今後の課題であろう。

(平田・寺井)

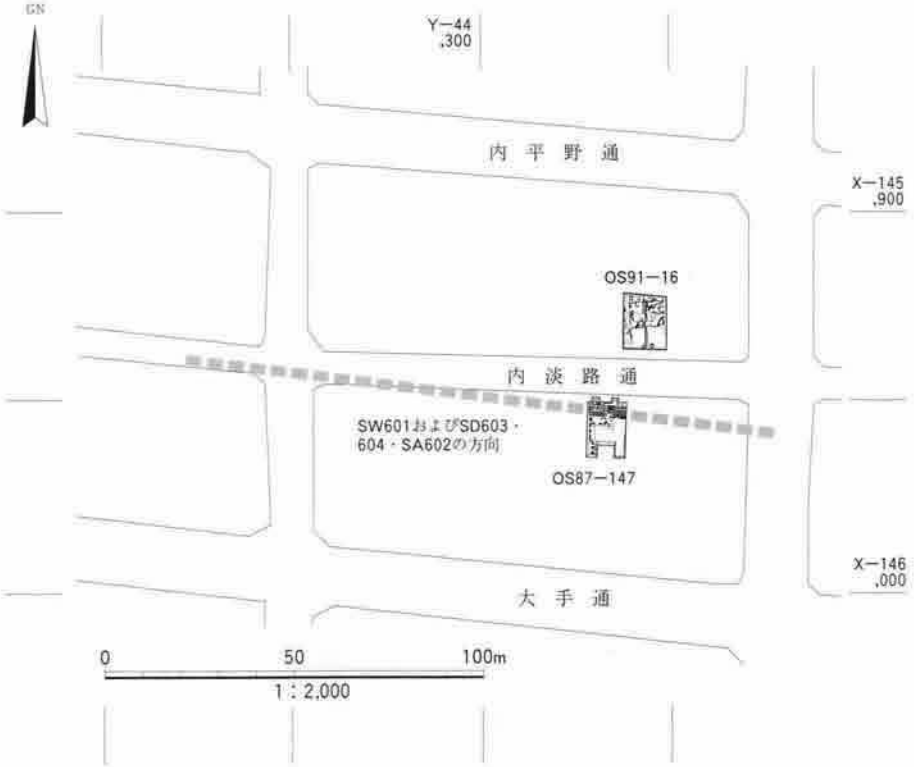


図145　OS87－147次およびOS91－16次調査地と現在の街区との関係

第６節　OS87－33次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節では中央区釣鐘町２丁目に所在するOS87－23・33次および89－154・93－25次調査地の成果を報告する。釣鐘町という町名は徳川期に「市内随一見晴らしのよい所」として釣鐘屋敷が建てられたことに由来し、本調査地の東側の街区にその跡がある（図146の★）。



図146　OS87－33次などの調査地位置図

上記の調査のうちOS87－23・33次および93－25次調査は事前の試掘調査に基づいて本調査が行われた。また、OS89－154次は松屋町筋沿いおよび中央に埋設管を設置するのに伴う夜間調査で、本書のＣ・Ｄ・Ｅ地区にわたり、土佐堀通との交差点から中央大通に突き当たる地点までを３回に分けて行われた。徳川期と思われる石組溝などを検出したが、目立った遺構はなかった。

なお、OS87－33次調査は既に報告されているが[宮本佐知子1989]、近年の成果を基に若干の修正を加えたうえで本節で再報告する。

２）調査の結果

ｉ）層序

OS87－23・93－25次調査では工事深度の関係で豊臣期の地層までしか確認することができなかった。一方、OS87－33次調査ではGL－７ｍまで掘削して層序を確認することができた（図147）。ここではOS87－33次調査地の所見を基に、ほかの２地点の見解を合わせて層序を記述する。

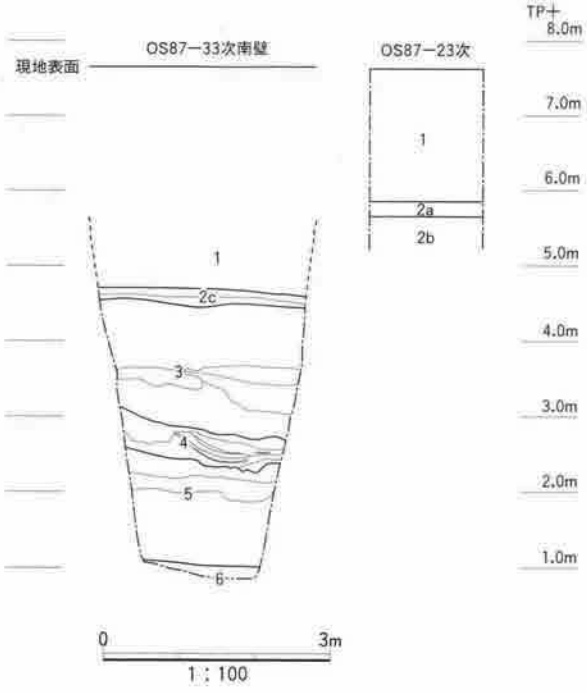


図147　OS87－23・33次断面図

第１層　江戸時代以降の地層を一括して第１層とする。

第2a層　層厚が15㎝ほどの焼土層である。OS87－23・93－25次調査地で検出された。

第2b層　淡黄色シルト質砂からなる厚い整地層である。両調査地の標高で比べると層厚は100㎝

ある。若干の瓦片が出土したのみで時期は確定できないが、三ノ丸造成に伴う整地と思われる。OS87－33次調査では本層の途中まで攪乱のため失われていた。

第2c層　有機質を多く含む黒灰色シルト質砂層で、層厚は約20cmある。OS87－33次で土師器皿30・31、瀬戸美濃焼向付32、同皿33～36が出土し、豊臣前期に位置づけられる。また、犬形土製品37は土手掘削中に出土したものであるが、本来はこの層序に所属したものと思われる。

第3層　黒灰色シルト質中粒砂層で、層厚は160cm前後である。遺物は少なく時期を決することはできないが、豊臣以前にさかのぼる可能性が高い。

第4層　有機物を多く含む暗黒灰色シルト層で、層厚は50cmある(図版22上)。1～25のような古墳～飛鳥時代の遺物が出土した。本層以下の地層については調査時は谷地形の堆積層と考えられたが、当地は上町台地の西斜面に当ることから裾に堆積した地層と思われる(本章第1節の図112)。

第5層　木片を多く含む含礫黒灰色粗粒砂層で、層厚は110cmである。遺物は出土していない。

第6層　礫を含む暗青灰色粗粒砂の無遺物層で、上面はTP＋1.0mである。

ii)遺構と遺物

a．飛鳥時代の遺物

OS87－33次の第4層からは土師器1～13、朝顔形埴輪14、須恵器15～22、坩堝状土製品23、鞴羽口24、木製下駄25が出土した(図148)。

土師器には杯C1～6、高杯7、皿8、甕9・10、甑11、羽釜12、鍋13がある。1～6は口径が10.0～15.6cm、器高が3.2～4.9cmで、径高指数は4がもっとも小さく27、3がもっとも大きく36である。6は正確な径高指数はわからないが、30以下になると思われる。1と8には焼成後に錐のようなものであけられた孔がある。このような例はOS99－16次調査地のSK301出土遺物にもある[大阪市文化財協会2002a、p.30]。

須恵器には杯H身15・16、杯G蓋17、同身18、鉢19、甕20・22、横瓶21がある。15・16は口径がそれぞれ11.8cm、10.6cmあり、底部は回転ヘラケズリで仕上げられる。18は口径9.6cm、器高3.5cmあり、底部はヘラ切りののち、調整が施されていない。

23は胎土に砂粒が多く含まれる。外面は全体的に高熱を受けているが、内面は金属の付着物もなく、使用痕跡を観察することができない。24は先端で表面の残っている部分にスラッグがわずかに付着し、内面先端は被熱により赤変している。孔径は2.4cmに復元でき、残存範囲を見るかぎり、先端部と基部に近い部分は同じ径である。

25は長さ15.8cm、幅7.9cmの小判形を呈し、一木から作られた連歯下駄である。鼻緒孔の前壺は右寄りにある。後壺については裏面で0.3～0.5cm削り込んで、あけられている。前歯は両脇から0.2～0.3cm内側から削り出しているが、後歯は見られない。おそらく摩滅したものと思われる。

以上の遺物のうち、土師器・須恵器はおおむね難波Ⅲ中段階に該当すると思われる。

b．豊臣前期の遺構

OS87－33次調査

第2c層内で井戸SE201を検出した。

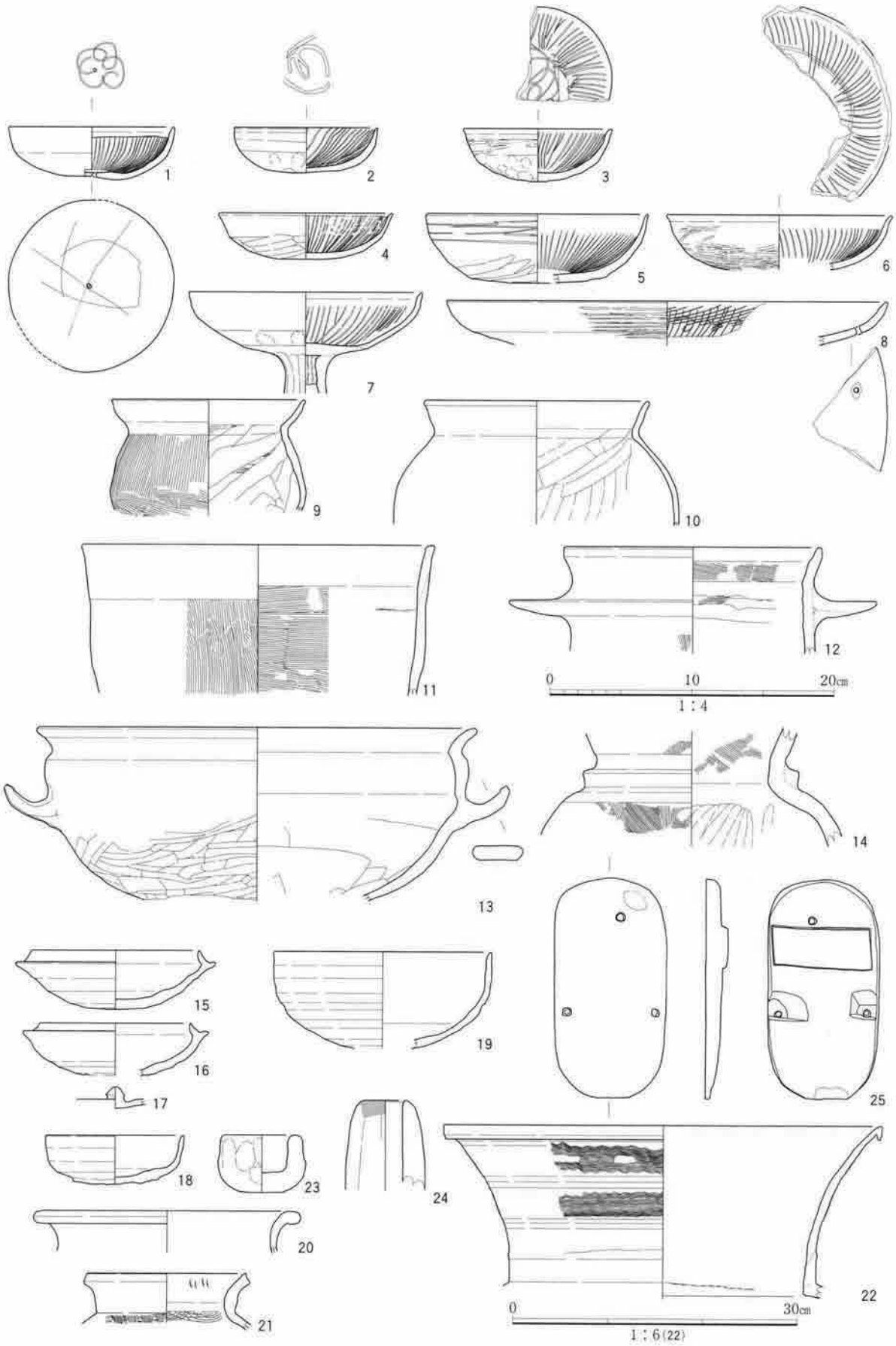


図148　OS87－33次第４層出土遺物

SE201　直径約4.0mの掘形の井戸で、直径0.6m、高さ0.5mの桶を三段組んで側を作っている(図版22中)。青花皿26・備前焼水差27・土師器甕28・唐草文軒平瓦29および金箔菊文軒丸瓦(M184：第Ⅴ章第2節)が出土した(図151)。瓦は比較的小型である。これらは豊臣前期に位置づけられる。

OS93－25次調査

礎石を2基検出した(S1・S2)。礎石間の距離は0.8mと短く、方位も北から東に約45°振っている

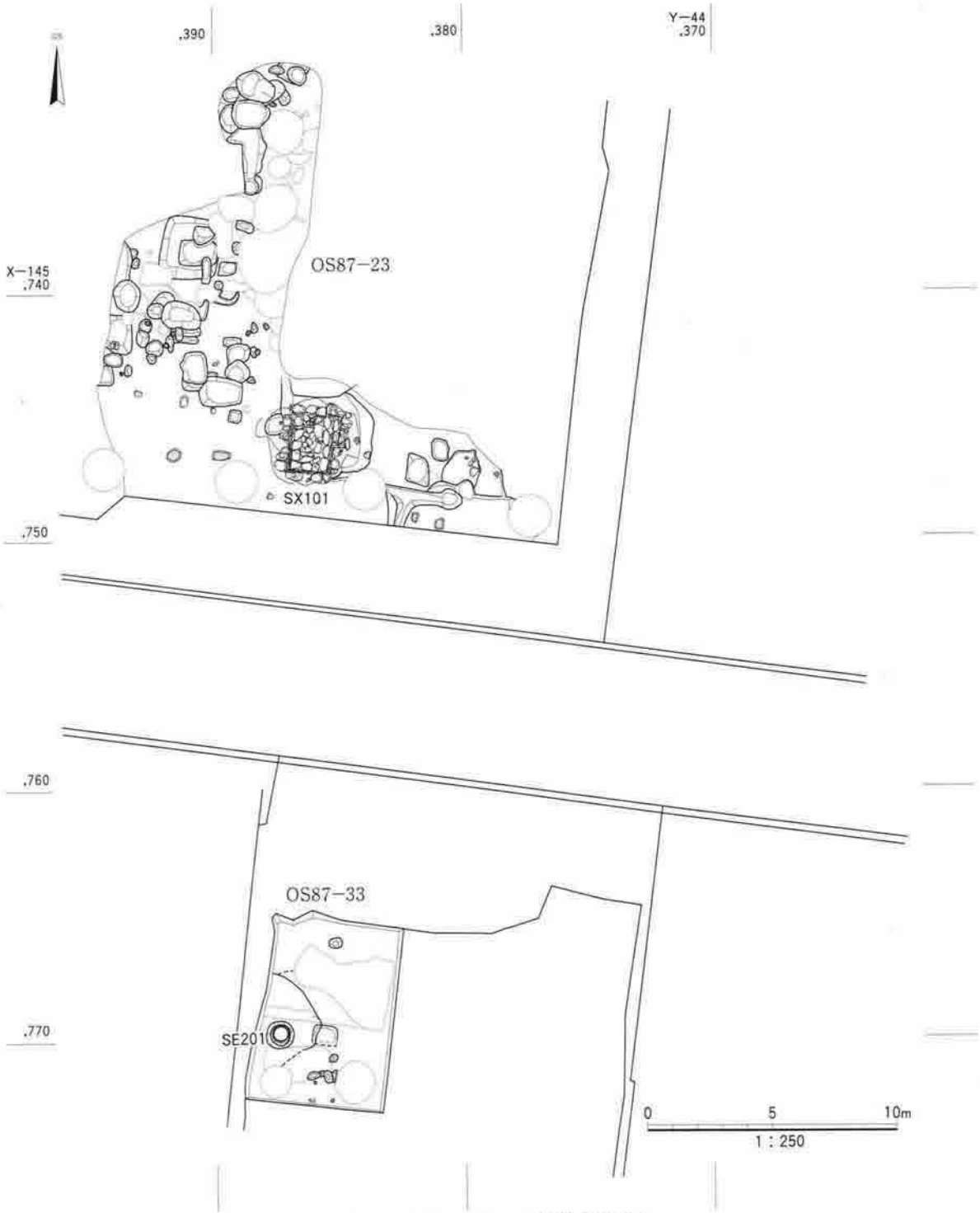


図149　OS87－23・33次遺構配置図

ことから、同一の建物の礎石でない可能性が高い。なお、これらの礎石を覆う地層から38の鳥衾瓦など多くの瓦片が出土したことから、瓦葺建物があったと思われる。

c．豊臣後期の遺構

OS87－23次調査

第2b層上面で礎石を確認したが、組合せはわからなかった(図149)。上位を第2a層で覆われることから、大坂夏ノ陣で焼亡した建物であろう。

OS93－25次調査

東面する石垣SW201を4.8m分検出した(図150、図版22下)。残りのよい部分で2段、高さは0.7mが遺存する。裏込めはない。石には矢穴をもつものもある。北側は江戸時代の溝

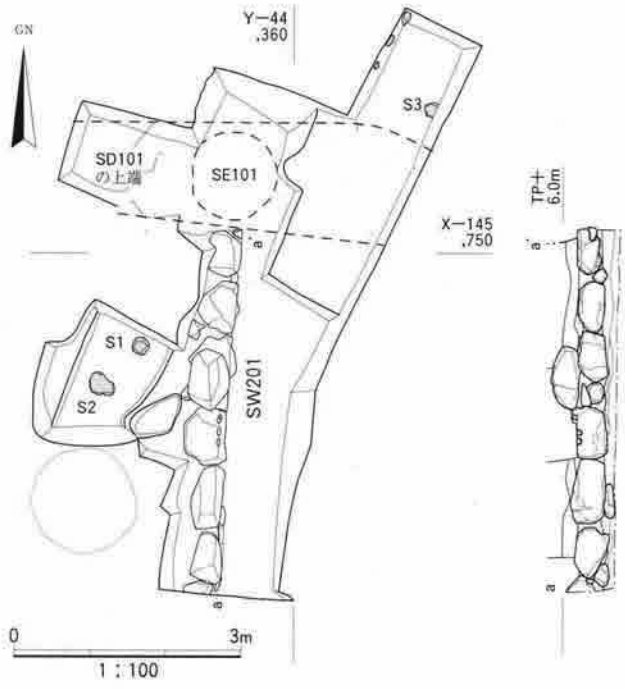


図150　OS93－25次遺構配置図およびSW201立面図

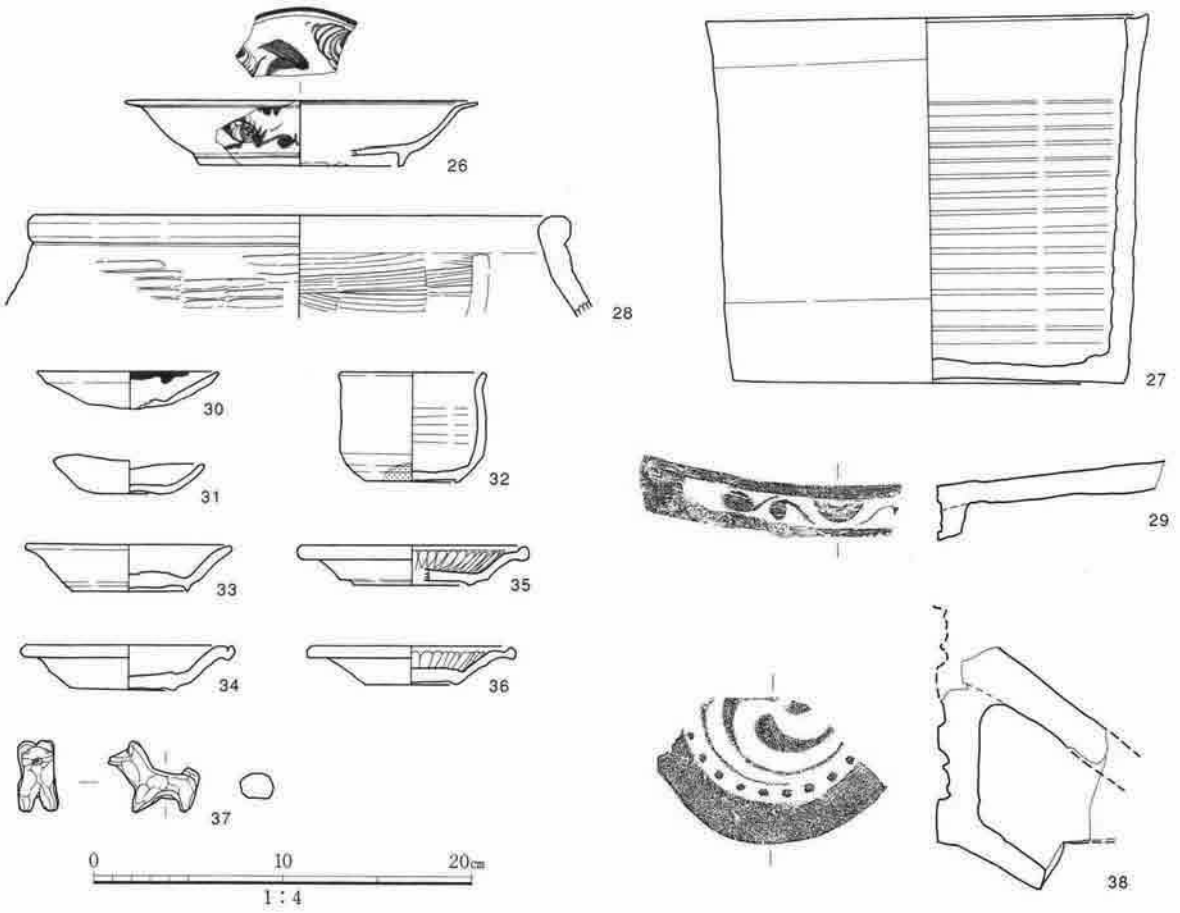


図151　OS87－33次および93－25次豊臣前期出土遺物
OS87－33次SE201(26～29)、第2c層(30～37)、OS93－25次(38)

SD101により失われているが、調査地の北壁部分では石が確認されなかったことから、途中で西に曲がる可能性がある。

時期を決する資料はないが、豊臣後期で三ノ丸造成後に構築された可能性がある。

d．徳川期の遺構

OS87－23次調査

穴蔵SX101を検出した(図149)。SX101は石組で深さ1.4mが遺存する。出土遺物からは18世紀後半に位置づけられる(註１)。

OS93－25次調査

東西方向の溝SD101を検出した(図150)。上端の幅は1.4m、深さは0.7m以上ある。豊臣後期の整地層を切り、17世紀中葉の肥前磁器が出土したSE101に切られることから、時期は徳川期初頭に限定できる。

3)まとめ

OS87－33次調査では飛鳥時代の遺物がまとまって出土した。出土土器はちょうど前期難波宮が造営される頃(難波Ⅲ中段階)に相当する。この遺物群の中で注目されるのが、23・24といった金属加工に係わる遺物である。二次堆積の可能性を重んじるなら、前期難波宮造営前に位置づけられ、近隣に工房があったことが想定される。

この時期に鍛冶工房が存在したか、もしくはその存在が想定されているのは大阪府庁調査地[大阪府文化財センター2002・新海正博2002]や清水谷地域[寺井誠2002a]であるが、いずれも前期難波宮成立段階まで継続しない。また、前期難波宮と併行するのは、当調査地から南約1,300mの地点に位置するNW99－15次調査の鍛冶工房が挙げられる[辻美紀2002a]。

当調査地に想定される斜面の低地部は徐々に埋没し、豊臣前期には居住可能になったようで、SE201などがつくられた。特に、東面するSW201は築造時期は決定できないものの屋敷境の可能性が高い。周辺の地形とは異なり西が高くなっていることから、東は南北方向の道路として利用されていた可能性も否定できない。また、石垣が途中で西に曲がるとすれば、SD101と同じ位置となり、豊臣～徳川期を通じて東西方向の屋敷境であった可能性もある。

(平田・寺井)

註)

(1)この穴蔵は事業者のご好意により地下により保存されることとなり、砂を入れて埋戻した。

第７節　OS92－19次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではOS92－19次および周辺調査(OS86－17・91－25・91－27・91－78次)を報告する(図152)。

各調査の概要は以下のとおりである。

OS86－17次調査は、試掘で徳川期以前の焼土層が確認されたため本調査を実施し、TP＋５ｍと＋3.8m付近で焼土層を検出した。前報告[川村紀子1988]では前者を大坂夏ノ陣に伴う焼土層と認識していたが、後の周辺調査によると妙知焼、後者が大坂夏ノ陣による可能性が高い。このほか徳川期初頭の礎石建物などを検出した(写真13)。

OS91－25次調査は試掘で徳川期以前の遺物包含層を検出したため、本調査を実施することとなった(写真14)。25㎡の小さなトレンチ調査であったため遺構の確認は困難であったが、豊臣期の礎石建物を検出した。

OS91－27次調査は23㎡の小さなトレンチ調査であったが、豊臣期・徳川期の遺構を検出した(写真15)。

OS91－78次調査地では、現地表面から0.7ｍの深さで大坂夏ノ陣の焼土層を検出した。その下位

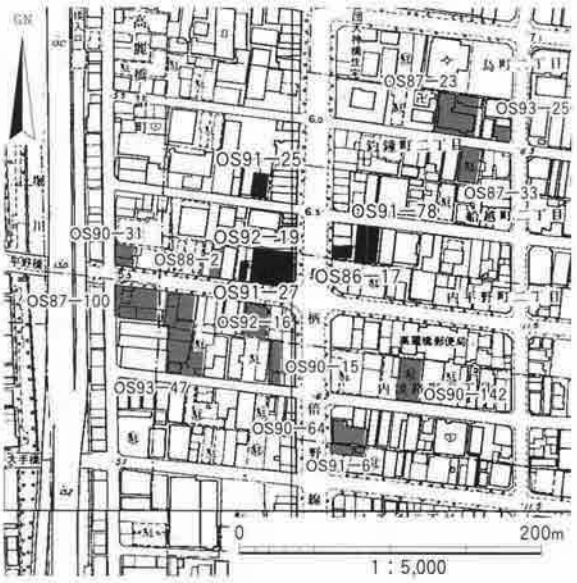


図152　OS92－19次などの調査地の位置


写真13　OS86－17次検出の礎石建物

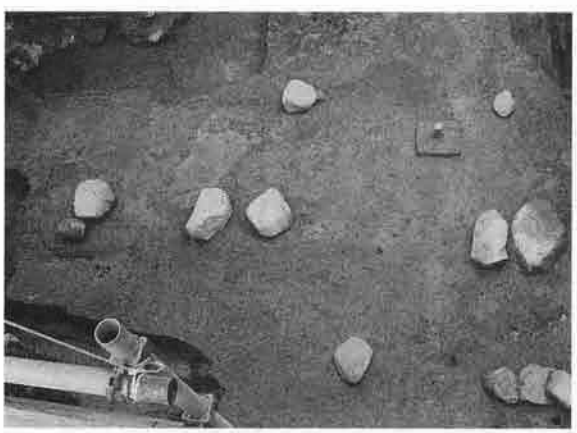

写真14　OS91－25次礎石建物


写真15　OS91－27次遺構検出状況

では豊臣後期・前期の地層を検出したが、掘削深度の問題から豊臣前期の地層以下は調査できなかった。

OS92－19次調査では古代から徳川期にいたるまでの５期にわたる遺構面を調査することができた。この調査で出土したマジョリカ陶については、[松本啓子1999]などによって検討されている。

本節ではOS92－19次調査の成果を中心に報告し、そのほかの調査については小面積であることから、必要に応じてふれることにする。

２）調査の結果

ｉ）層序

OS92－19次調査地では現地表面から約６ｍ下がったTP±０ｍまで掘削し、地層を観察することができた(図153・154、図版23上)。ここではOS92－19次調査地の層序を中心に記述し、周辺調査地で補足する。

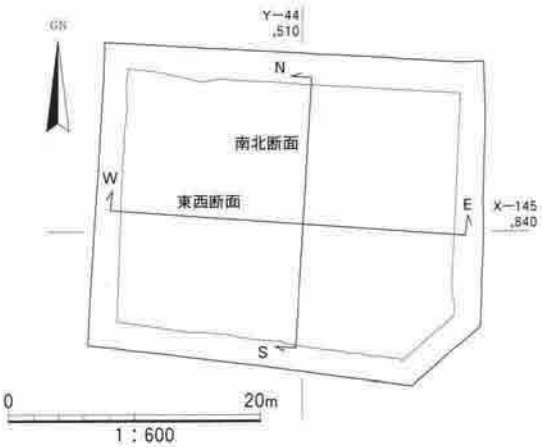


図153　OS92－19次断面図の位置

第1a層　現代から徳川期中頃までの層で、重機により除去した。

第1b層　オリーブ褐色砂礫混りシルトの整地層で、徳川期中頃に該当する。

第1c層　黄褐色砂混りシルトの整地層で、徳川期初頭に該当する。当層基底面で徳川期初頭と豊臣後期の遺構面を検出した。

第2a層　OS86－17次や91－78次調査地で認めら

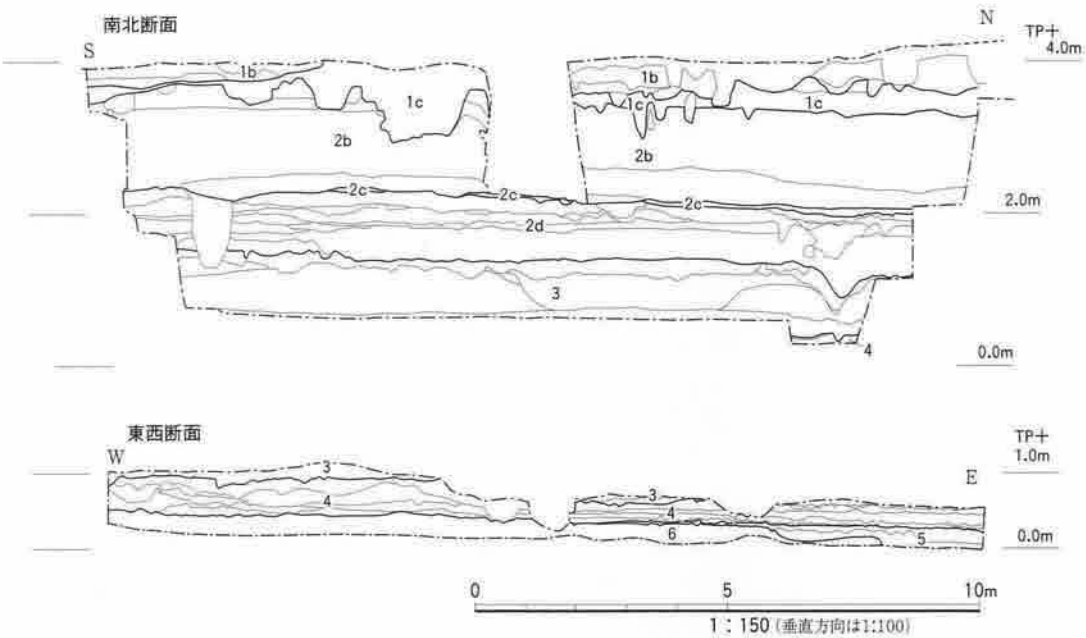


図154　OS92－19次断面図

れた厚さ15～30cmの焼土層で、下面の標高はTP＋3.9mであった。大坂夏ノ陣に伴う焼土層で、OS92－19次調査地では検出されなかった。

第2b層　明黄褐色～浅黄色細粒砂の整地層で、層厚は1.5mである。三ノ丸造成に伴う整地層と考えられる。

第2c層　厚さ10cm未満の灰色砂質シルト層である。断片的であるが、調査地全域に分布する。このような薄層はOS93－47次調査(本章第9節)でも確認されている。おそらく惣構造成から三ノ丸造成までの短期間に形成された生活面であったと思われる。

第2d層　暗灰黄色～黄色の砂礫層とシルト層の互層をなす整地層で、層厚は0.9mである。惣構造成に伴う整地層と考えられる。

第3層　黒色砂礫混り粘土質シルト層で、層厚は1.0mである。中世の遺物を含む。

第4層　オリーブ褐色極細粒砂質シルト層で、層厚は0.5mである。滞水状態で堆積したと思われ、いくつかに細分可能である。奈良時代末～平安時代初頭を下限とする遺物を含む。

第5層　黒褐色極細粒砂質粘土層で、SX501に分布する。須恵器や弥生土器が出土した。

第6層　黄褐色粗粒砂の無遺物層である。

ii)遺構と遺物

a．古代以前の遺構と遺物

SX501　東側で第6層上面が低くなる落込みを検出した(図156上)。埋土は第5層で、滞水状態で堆積したと考えられる。畿内第Ⅳ様式の甕1が出土した(図155)。

b．古代の遺構と遺物

第4層上面で溝SD401および土器溜SX401を検出した(図156中、図版23中)。

SD401　調査地中央部で検出した南北方向の溝で、幅1.2m、深さ0.1mある。

SX401　調査地北西部にて奈良～平安時代の土器などの遺物が多量に出土した。遺物には土師器・須恵器がある。図155には土師器杯A2・3、皿A4・5、甕6、須恵器杯H7、杯B8・9、杯A10、鍋11、壺12を示した。2～5はいずれも内面をナデで仕上げ、暗文は施されていない。7はTK209型式に該当し、底部にはヘラ記号がある。9は金属器を模倣した形態と思われる。以上の土器の多くは難波Ⅴ新段階に位置づけられる。

このほか第4層からは土師器皿A13～15、高杯16、羽釜17、須恵器杯H蓋18・19、同身20、杯B21、甕22、壺23が出土した(図157)。13～15の内面にはいずれも暗文はないが、16には杯部に放射状に暗文がある。13の底部には焼成前のヘラ描きがある。17は10世紀初頭頃のものであろう。21は高台が底部のもっとも端に付けられている。また、第4層上面の精査中に出土した神功開寶25(初鋳765年)もこの一群に属するものと思われる。

なお、近現代の地層(第1a層上部)から、四天王寺式の素弁蓮華文軒丸瓦24が出土した(図155)。

c．中世の遺構と遺物

SD301　第3層基底面で検出したが、本来はさらに上位の面から掘られたと思われる(図156中、写真16)。調査地北西部で屈曲し、幅は一定しない。深さは0.5mある。この溝からは土師器・須恵器・

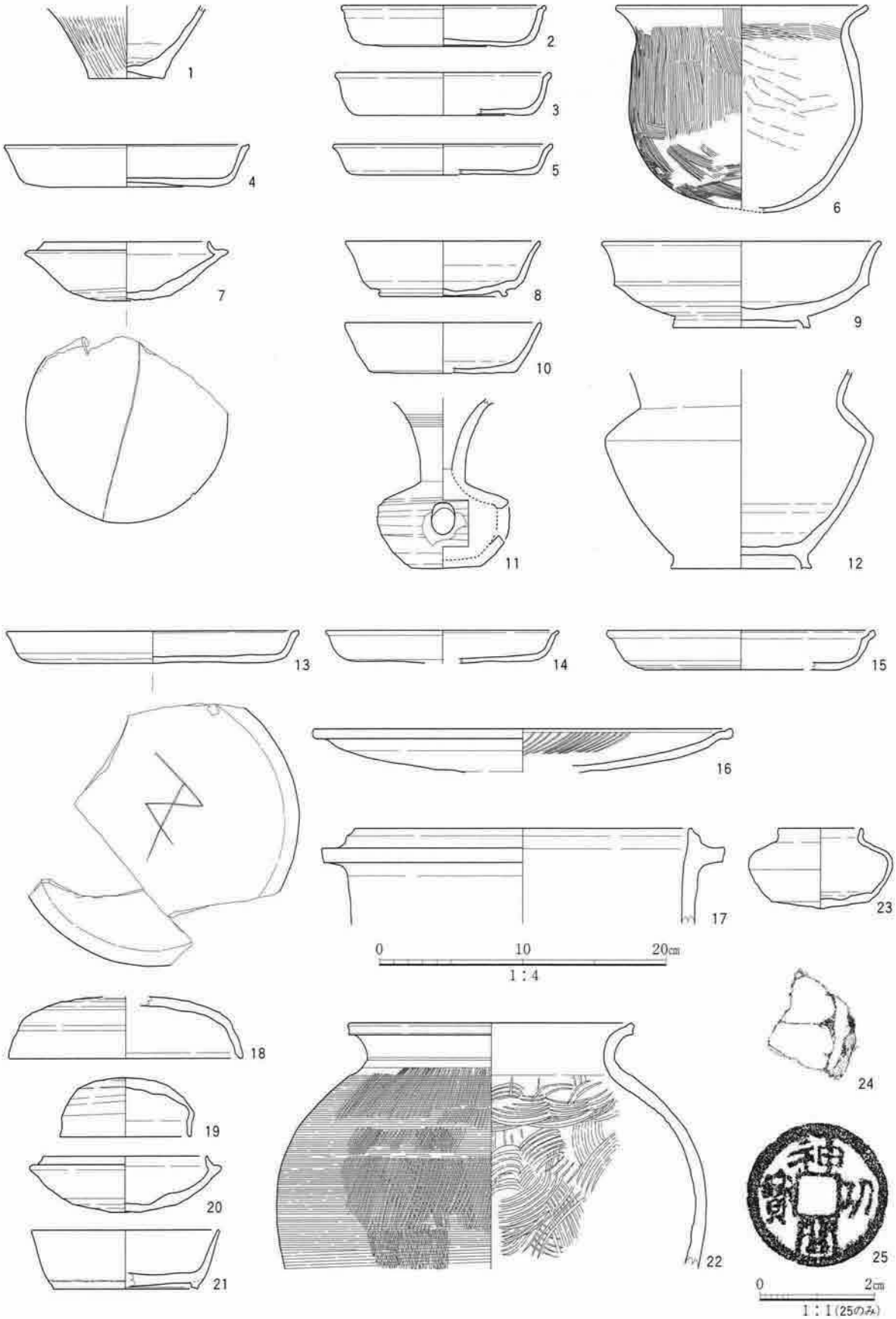


図155 OS92－19次出土遺物(1)
第5層(1)、SX401(2～12)、第4層(13～23･25)、第1a層(24)

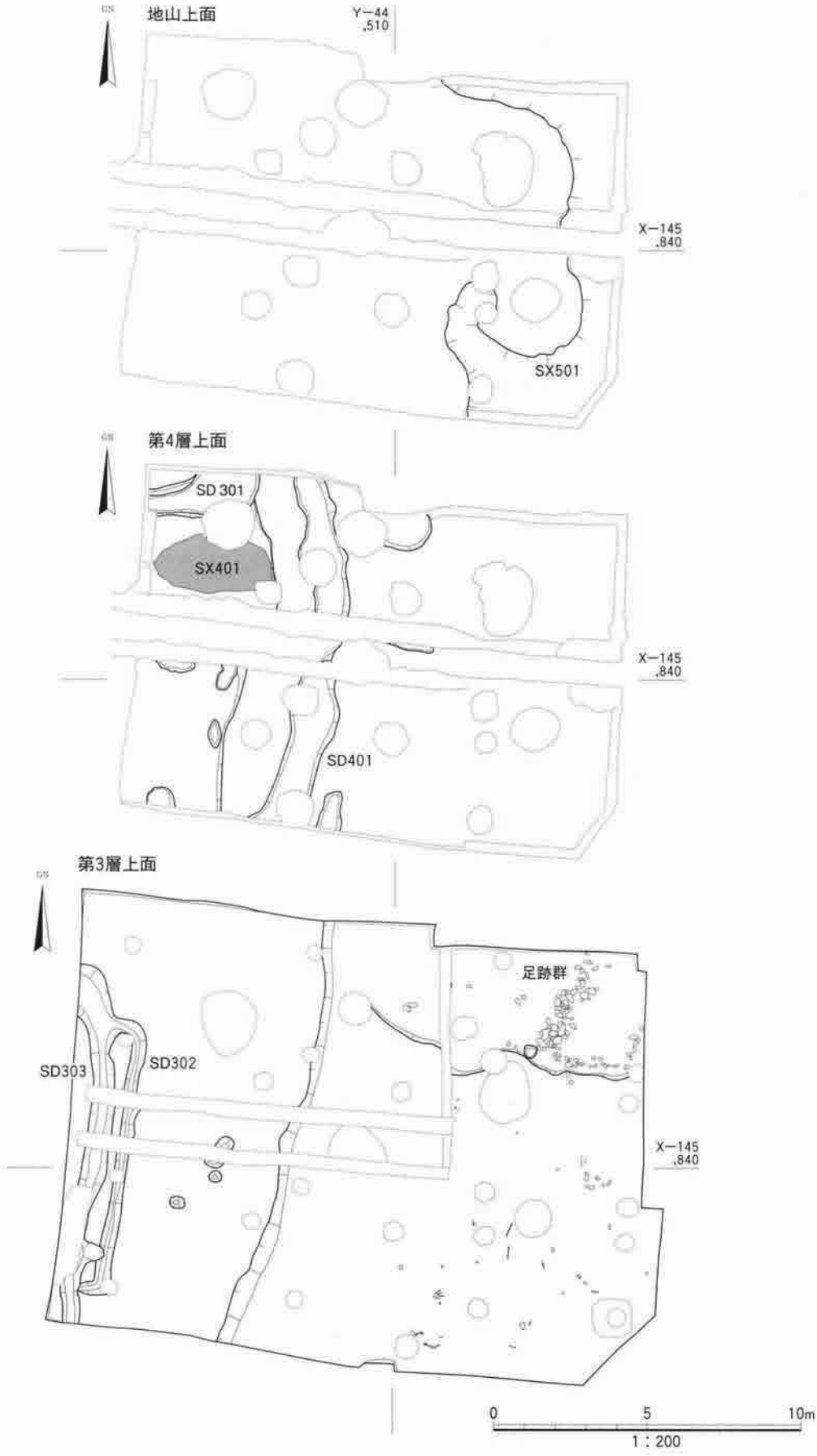


図156 OS92−19次中世以前の遺構配置図

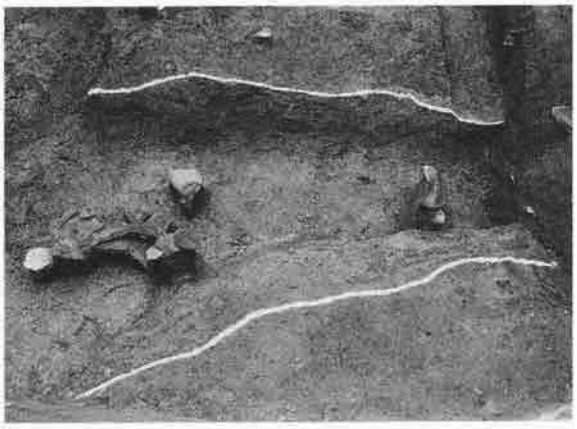


写真16 OS92－19次SD301遺物出土状況

緑釉・青磁・白磁・備前・瓦器・瀬戸美濃焼・瓦などが出土し、土師器皿26、瓦質土器羽釜32・33を図示した(図157)。

第3層上面ではヒトの足跡群(写真17)や浅く枝分かれする溝SD302・303を検出した(写真18、図156下)。第3層上面は、東から西に向って高くなっており、調査区中央より東側は黒褐色粘土が上面に薄く堆積していた。粘土は水成のもので、この粘土の上面で人の足跡群を検出した。SD302

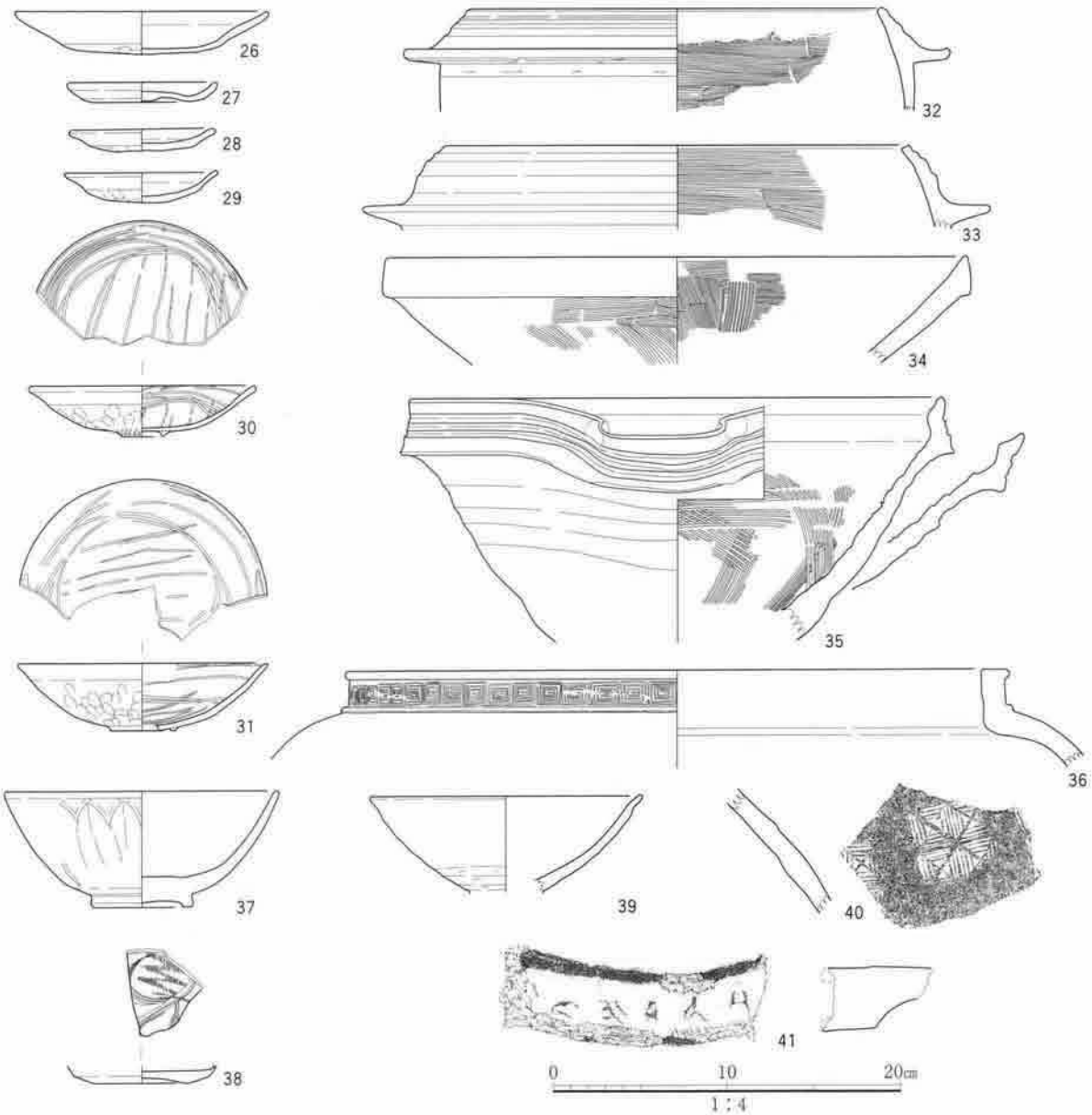


図157 OS92－19次出土遺物(2)
SD301(26・32・33)、SD302(35・36)、第3層(27～31・34・37～41)

は深いところでも５cm程度で、水の流れた痕跡も見られないことから、耕作痕跡ではないかと考えられる。備前焼擂鉢35、瓦質土器火入36が出土した。36はスタンプによって雷文を施している。

また、第３層から出土した遺物には青磁・白磁・緑釉陶器・備前焼・瀬戸美濃焼・瓦器・土師器・須恵器・滑石製石鍋・土錘・蛸壺・瓦・木器(箸・蓋・下駄)などがあり、土師器皿27、瓦器皿28・29、同椀30・31、瓦質土器擂鉢34、青磁碗37、同皿38、古瀬戸灰釉平碗39、須恵器甕40、梵字文軒平瓦41を図示した(図157)。30・31は高台が断面三角形で、高台径がそれぞれ2.2cm、3.6cmである。[尾上実ほか1995]のⅢ－３期(13世紀中葉)に該当すると思われる。37は龍泉系の青磁碗で外面に鎬蓮弁が施される。38は同安系の青磁皿で、見込みにヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を有する。40は肩部にスタンプ文が施される。41には右から「カ(𑖎)」、「ラ(𑖭)」、「バ(𑖪)」、「ア(𑖀)」と読める梵字がある。このような瓦は近隣のOS90－31・93－47次調査地でも出土している[宮本佐知子1991・1999](本章第９・10節)。



写真17 OS92－19次足跡完掘状況

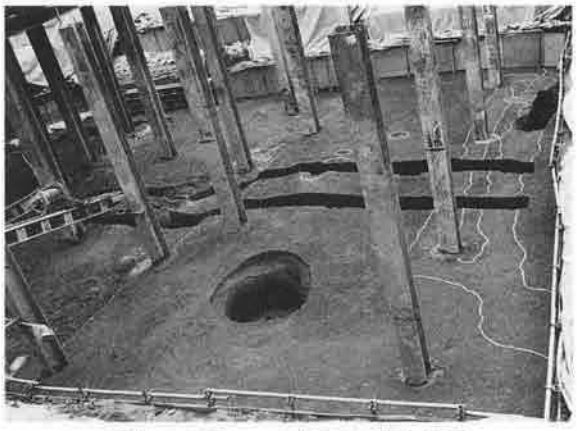


写真18 OS92－19次SD302検出状況

ｄ．豊臣期の遺構と遺物

OS92－19次調査地では第2c層基底面と、第1c層基底面で豊臣期の遺構を検出した。

第2c層基底面では礎石建物、溝、土壙群を検出した(図158、図版23下)。

SB201・202　調査地南西部で礎石やその抜取穴が多数検出された。組合せを抽出するのは困難であったが、ここでは直線上にほぼ等間隔で並ぶものを基に、SB201・202の２基の建物を想定した。これらの柱筋はいずれもほぼ正方位であり、現在の街区の方向とは異なる。また、これらの礎石やその抜取穴が多くある地区に、焼け締まった面SX203があり、この面が生活面と考えられる。

SD201　調査地南東部で検出した溝で、南端で東西方向のものと南北方向のものが交わることから、一連の溝と判断した。幅が約１m、深さは0.1m弱である。

SX201　調査地北西部で検出した南北に並ぶ土壙群とそれに平行して延びる溝を指す。土壙は南北0.6m、東西0.4m、深さ0.2m程度のものが切合いながら数基並ぶ。溝は幅0.6m、深さ0.1mであり、土壙に切られている。

SX202　調査地北東部で検出した「コ」字状に並ぶ土壙群で、大きいもので南北0.9m以上、東西0.9m、深さ0.2mである。石組の構築物の土台の痕跡と想定されるが、詳細は不明である。

第2c層からは土師器皿42、備前焼大平鉢44、瓦質擂鉢45・46、瀬戸美濃焼ヒダ皿47、同丸皿48、

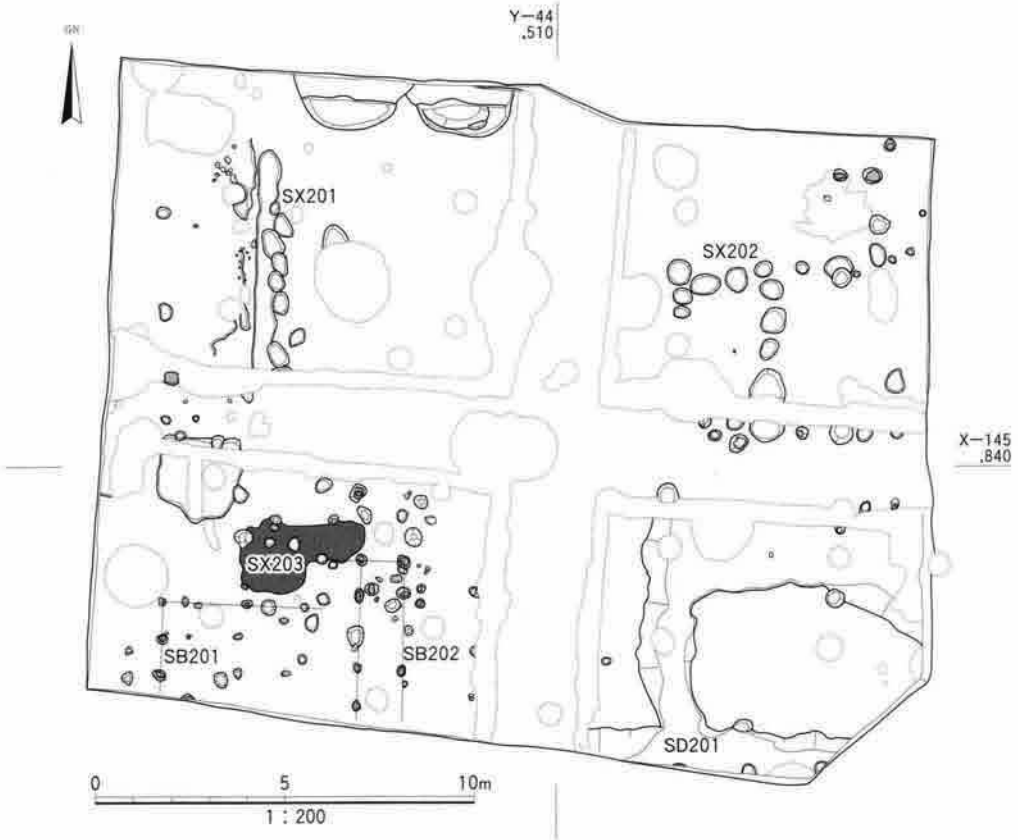


図158 OS92－19次豊臣期(第2c層基底面)遺構配置図

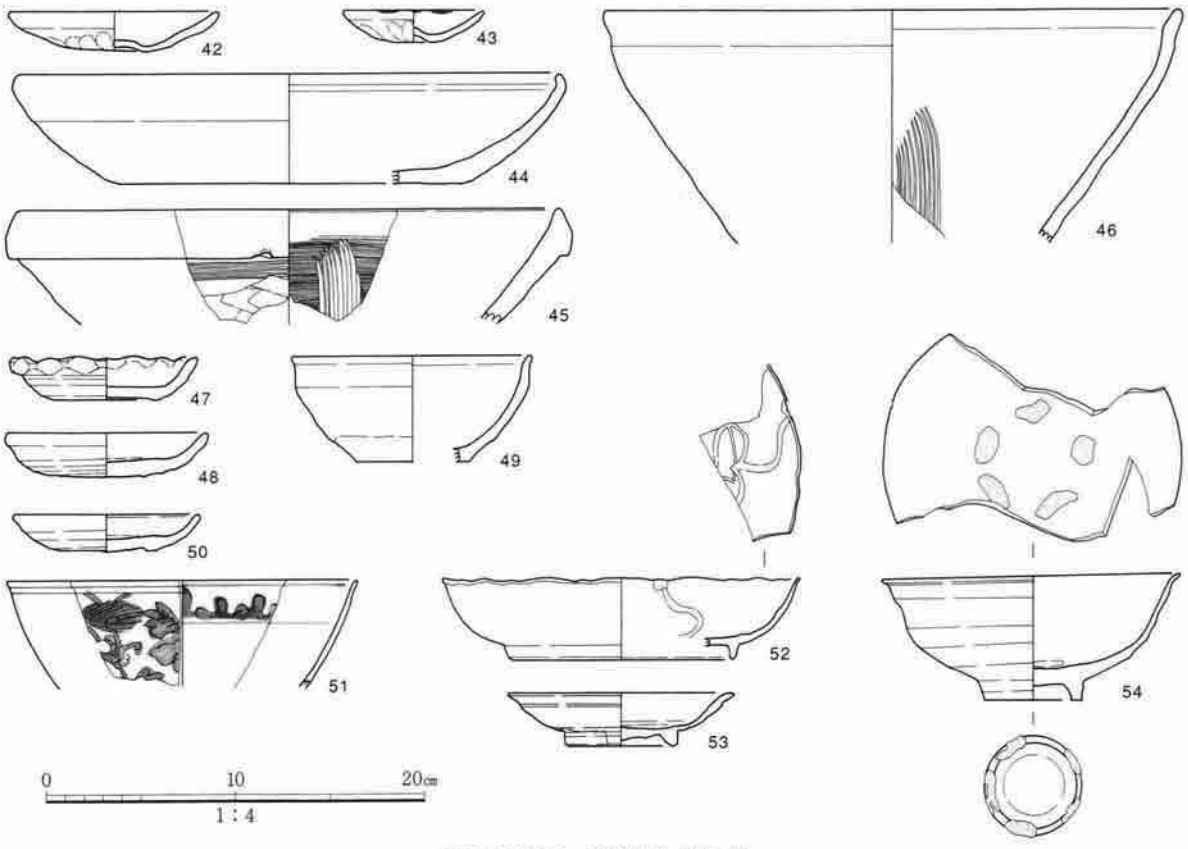


図159 OS92－19次出土遺物(3)
第2c層(42･44～49)、第2c層上面検出時(43･50～54)

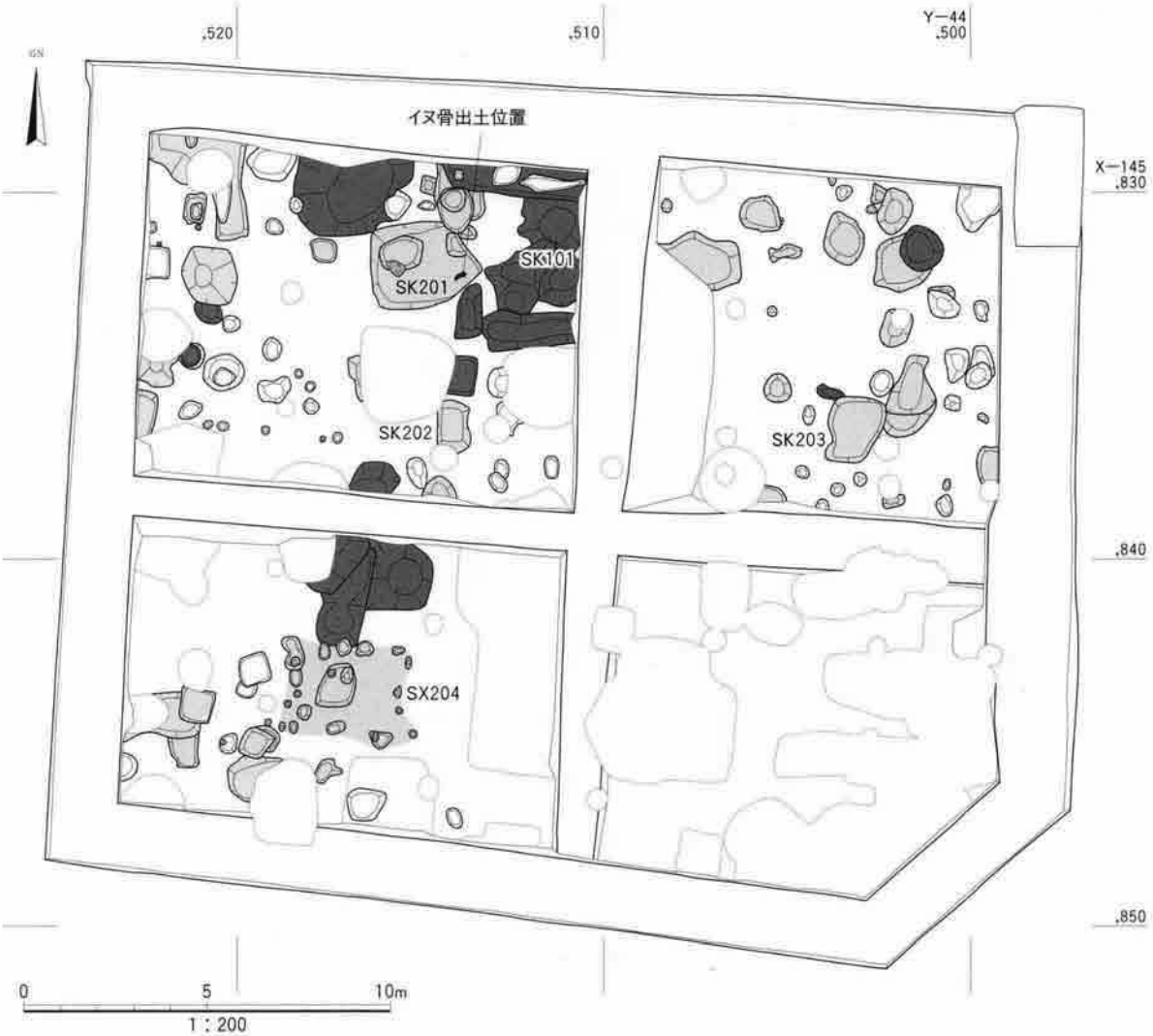


図160 OS92－19次豊臣後期・徳川期（第1c層基底面）遺構配置図

同天目碗49が出土した（図159）。44は口縁端部が内側に肥厚し、底部は無釉である。46は擂目の部分がかなり磨耗している。48は灰釉、47・49には鉄釉が施されている。

また、第2c層上面の遺構検出時に土師器皿43、瀬戸美濃焼丸皿50、中国製青花碗51、白磁皿52・53、李朝白磁碗54が出土した。52は輪花皿で、内面に型打ちによる文様がある。53の見込みには釉剥ぎが施される。54は体部下半が丸みをもって広がり、口縁部が端反りとなる。見込みと畳付けにはそれぞれ5個の砂目跡が残る。A-2類に該当し、大坂では豊臣前期に多いものである［森毅2001］。

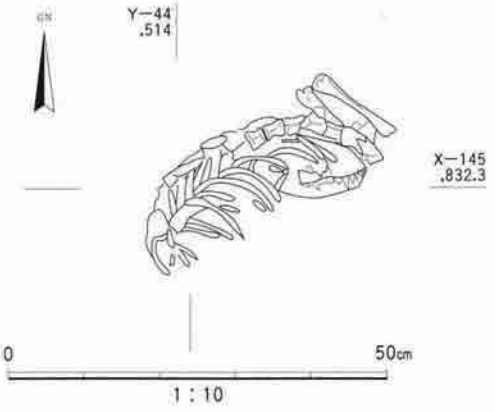


図161 OS92－19次SK201イヌ骨出土状態

第1c層基底面では、豊臣後期と徳川期の遺構を検出した。豊臣後期では土壙・ピット群などがあるが（図160の薄い網掛け部分）、いずれも上部の削平が甚だしく、深い遺構の基底部のみが検出されたにすぎない。以下ではお



図162 OS92−19次出土遺物(4)

SK201(55～59・62・64・65)、SK202(68・69)、SK203(60・61・63・66)、SK101(70～75)、第1c層(67)

もな遺構について記述する。

SK201　調査地北西部で検出した南北2.0m、東西3.2m、深さ0.7mの土壙である。土師器皿55・56、瓦質土器鉢57、瀬戸美濃焼丸皿64、同天目碗65、青花碗58・59、白磁色絵62、金箔飾り瓦(K194：第Ⅴ章第2節)とともにイヌの骨が出土した(図161・162)。このイヌは四肢骨があったため、

食用に供されたものではなく、埋葬されたものであろう。

SK202　調査地中央付近で検出した土壙で、南北1.4m、東西0.8m、深さ1.1mある。瀬戸美濃焼碗68、唐津焼小碗69が出土した。

SK203　調査地東部で検出した南北1.8m、東西1.5m、深さ0.5mの土壙である。瀬戸美濃焼黒織部沓茶碗66、中国製の青花碗60・61、白磁皿63が出土した(図162)。

SX204　「ロ」字状に並ぶピット群である。南北2.5m、東西4.0mの範囲を占める。何かの構築物の跡と思われるが、詳細は不明である。

e．徳川期の遺構と遺物

第1c層基底面で徳川期初頭の遺構を検出した(図160の濃い網掛け部分)。

SK101　調査地北側中央で検出した土壙である。窪みが3個所あることから、本来は3基の土壙が重なっていたと思われるが、調査時は一括して掘削した。南北3.1m、東西2.6m以上で、もっとも深い部分は0.9mある。埋土中から漳州窯産の青花皿70、17世紀後半～末の肥前系磁器皿71～74とともに、マジョリカ陶アルバレッロ75が出土した(図162)。75については[松本啓子1993・1999・2001a]を参照されたい。

なお、OS91－78次調査地では徳川期初頭のゆりかす(註1)が大量につまった土壙が数基検出された(写真19)。当調査地から約80m南のOS90－142次調査地(本章第8節)では銅精錬に係わる遺構・遺物が検出されており、それとの関連が考えられる。

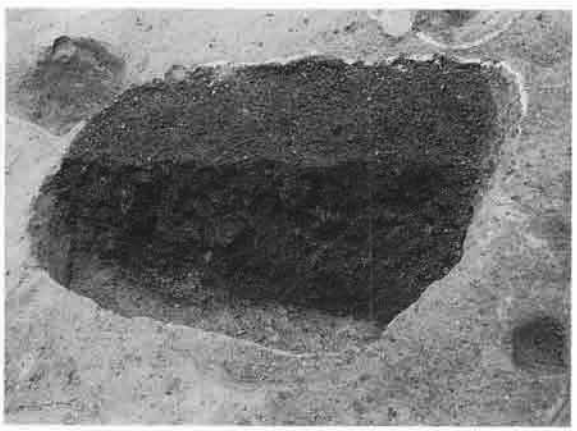


写真19　OS91－78次ゆりかす出土状況

3)まとめ

本調査地では古代以降の地形変遷を明らかにすることができた。まず、無遺物層の第6層上面で東側が低くなる落込みを検出した。第6層は黄褐色粗粒砂の無遺物層であることから、大阪湾岸に形成された砂州堆積層であると思われる。また、この落込みは自然に形成されたラグーンに当るものであろう。このような東側が低くなる地形は中世の第3層が形成される段階まで続いたようである。

このような土地利用における自然地形の制約は惣構造成によって一変したものと思われる。OS93－47次調査(本章第9節)の成果を見ると、三ノ丸造成後に街が整備され、本格的な居住が始まったようであるが、本調査地では徳川期の削平のために、大坂夏ノ陣の焼土層も残っておらず、豊臣後期の遺構の詳細はわからなかった。また、遺構には土壙が多く、建物といえるような遺構は検出されなかったため、ほかの調査で検討したような建物の方向を基にした街区の検討もできなかった。

なお、第4層上面の落込み内から奈良時代末から平安時代初頭頃の遺物が、第3層からは中世の遺物がまとまって出土した。当地には西側で南北に延びる東横堀川の前身となるようなラグーンが存在したことが想定されている。このような地形が水運に利用され、当地のような古代～中世の遺物の集

中の要因となったのであろう。

（寺井）

註）

（1）「ゆりかす」とは、精錬終了後に吹床・坩堝・羽口など銅分の付着したものを粉砕して水中で淘汰し、銅分を回収した後の砂のことである［大阪市文化財協会1998の「近世銅精錬関係用語集」参照］。

第８節　OS90－64次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節では内淡路町２丁目のOS90－64・142次および大手通２丁目のOS91－６次調査を報告する（図163）。

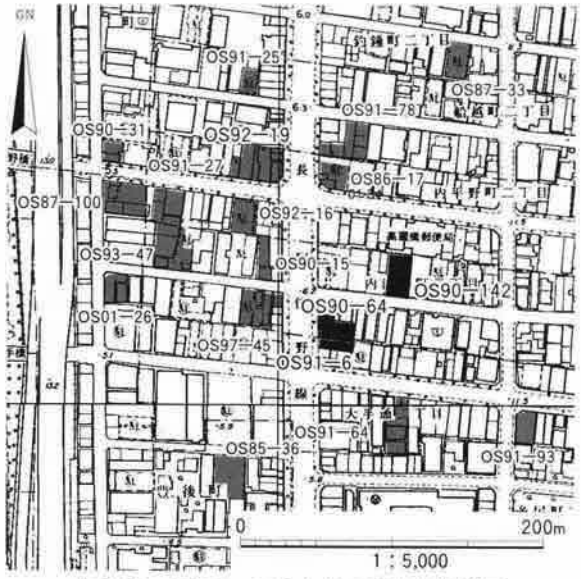


図163　OS90－64次などの調査地位置図

OS90－64・91－６次調査地は南北に隣接し、南北道路である松屋町筋に面している。ともに試掘調査の結果、豊臣期以前の地層が確認されたため調査を実施することとなった。両調査とも徳川期以降の地層を除去してのちに、現地表から４～５ｍ下まで調査し、古代～豊臣期の遺構・遺物を検出することができた。

OS90－142次調査は試掘調査の結果、地表面から1.8mの間に複数の遺構面が検出されたことから調査を実施することとなった。徳川期以降の地層を重機により掘削を開始したところ、途中で多量の銅滓・焼土塊が出土して、銅精錬に係わる遺構の検出が予測された。そのため予定を変更し、この部分についても調査を実施したところ、炉などの遺構が確認された。調査期間の大半はこの面の調査に費やされたが、最終的には豊臣前期の遺構面も調査することができた。なお、本調査の成果についてはすでに[清水和明1992]で公表されているが、本書では要約して再録することにした。

２）調査の結果

ｉ）層序

OS90－142次調査地では第1a～2c層まで確認し、OS90－64・91－６次調査地では第１層は重機で掘削し、それ以下の地層を確認した。ここではOS90－64次の南壁断面図を掲載した（図164）。

第1a層　重機によって除去した地層を一括する。徳川期以降の地層である。

第1b層　小規模な整地層と生活面が互層となる地層である。OS90－142次調査地では、銅精錬に係わる遺構は本層の基底面および本層内に検出された。

第1c層　明黄褐色粗粒砂を主体とする整地層である。第2a層との境は明瞭ではないものの、間に部分的に焼土・炭を介在することから分けた。土師器・瀬戸美濃焼・唐津焼・青花などが出土した。焼土が大坂夏ノ陣に伴うとすれば、徳川期初期の整地層の可能性がある。

第2a層　明黄褐色粗粒砂を主体とする整地層である。層厚はOS90－142次で約150㎝、OS90－64・OS91－６次で約100㎝ある。遺物は出土しなかったが三ノ丸築造に伴う整地土の可能性が高い。

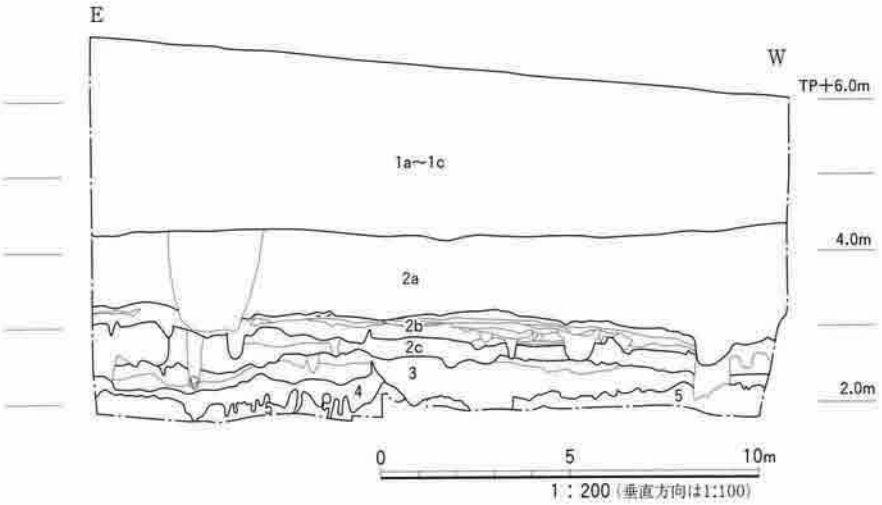


図164　OS90－64次南壁断面図

第2b層　オリーブ黒色細粒砂層の薄い生活面と整地層が互層となり、層厚は約30cmである。豊臣前期に位置づけられる。

第2c層　灰オリーブ色細粒砂主体の整地層で、層厚は約30cmである。土師器・須恵器のほか瀬戸美濃焼が出土した。惣構造成時の整地層の可能性がある。

第３層　茶褐色細粒砂～シルト層で、層厚は40cm程度ある。固く締まる。土師器・須恵器のほか瓦器が出土し、鎌倉～室町時代の層準と推定できる。

第４層　黒褐色粘土質シルト層で、東部にのみに遺存し、層厚は約20cmである。下面には凹凸が多く認められる。古墳時代後期～飛鳥時代初頭の土師器・須恵器が出土した。東に傾斜することから台地裾の窪みの堆積物と思われる。

第５層　褐灰色中粒砂質細粒砂層で、層厚は100cm以上である。土師器・須恵器の細片を含む。

ii)遺構

ａ．中世の遺構

OS90－64次調査では第３層上面にて礎石建物と掘立柱建物、土壙を検出した(図165上)。

SB301　礎石が2.0m間隔で、E9°Sの方向に３基並ぶ。北側に展開するものと思われる。

SB302　OS90－64次調査地内で東西２間(4.0m)、南北２間(4.0m)以上の掘立柱建物を検出した。柱間は約2.0mである。また、OS91－６次調査では断面のみの確認であるが、第３層内にて２m間隔で並ぶ柱穴３基(**SP301～303**)を確認した。**SP301**は**SB302**の一番南側の柱穴から３間分の距離にあることから、この３基の柱穴も**SB302**のものと考えられる。そうすると、建物の南北は５間(約10m)以上になり、方向はN10°Eとなる。

SK301　調査地の西端で検出した。深さは0.4mある。

ｂ．豊臣前期の遺構

OS90－64・91－６次調査

第2b層除去後、第2c層上面で検出した遺構群で、溝、土壙がある(図165下)。

SD201　西端部で検出した板組の溝で、第2c層上面より掘られていた。N8°Eの方向に延びる。

SD202　OS91－６次調査地の中央で検出された。幅0.5m、深さ0.1mで、正南北に延びる。

第2b層内では溝**SD203・204**を検出した。**SD204**はＬ字状に曲る。両溝とも底から礎石と思われる石が出土した。溝の方向はN7°Eであった。

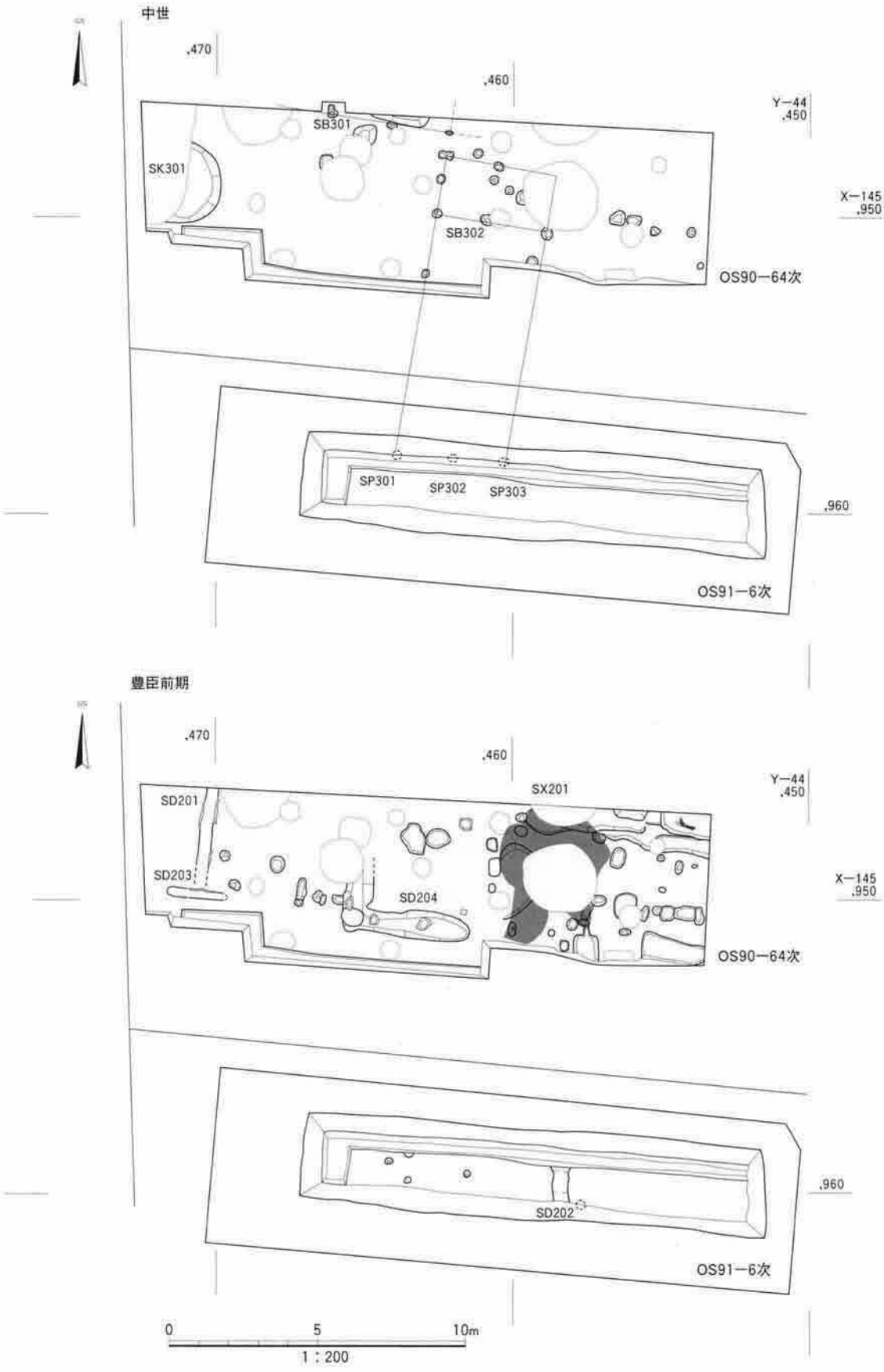


図165　OS90－64次および91－６次中世～豊臣前期遺構配置図

これ以外に柱穴がいくつか検出されたが、組合せはわからなかった。

第2b層上面ではSD201と重なる位置で溝を検出した。第2b層による整地後にも掘直されたようである。また、一定の範囲で瓦が散乱するSX201を検出した。

OS90－142次調査

第2c層上面で、調査区西側にて礎石と考えられる石材を数個確認したが、建物として復元することはできなかった(図版24上)。

c．豊臣後期の遺構

OS90－64・91－6次調査の第1層除去後に検出した遺構群である。柱穴・土壙・井戸がある。多くは江戸時代以降であるが、豊臣後期の遺物しか含まない小穴もあり、豊臣後期の遺構も遺存していたと考えられる。

OS90－142次調査では、遺構面は存在したものの遺構は検出されなかった。

d．徳川期の遺構

OS90－142次調査地では複数の遺構面が存在し、第1b層基底面および層内検出遺構が徳川期のものに相当する。銅精錬に係わる遺構・遺物を多数検出した(図166・167)。

このうち地層の関係からもっとも古いものは調査地北西部で見つかった南北方向の木組の溝SD101である。幅0.2m、深さ0.15mで埋土底には銅滓粒が堆積していたが、調査区内において同時期の精錬に係わる遺構は検出されなかった。遺物は少量であるが、唐津焼・丹波焼・瀬戸美濃焼・白磁などがある。肥前磁器を含まず、唐津焼も胎土目であることから17世紀初頭～前半に位置づけられよう。同一の層準からは土師器の油煙受皿も10点以上出土している。

同じく肥前磁器を含まないやや上位の層準では銅滓・羽口・坩堝・炉壁片の出土量が増えるが、銅精錬に係わる遺構は検出されない。精錬に係わる遺構は肥前磁器の出現以降の時期に確認されている。

炉は調査区北西隅で小型のものが11基、北東にその残欠が5基ほど確認できる(図166、図版24中)。炉には切合い関係が認められ、時間差があるが、調査区北側に東西に並ぶ。いずれも底が擂鉢状になるもので、坩堝を入れて精錬した銅を融かす小吹炉であろうか。ほかに炉の存在を示す遺物として、SK101から南蛮吹・灰吹の炉の蓋が出土している。

炉の南側に、東西に平行して水溜と考えられる木組の施設がある。

SD104(図166・167、図版24下)　幅1.3m、深さ0.9m以上で、7m以上にわたって検出された。南側板の東端は別の板を組合せて内側に屈曲させている。そこから東側は水溜の幅が狭くなるようであるが、土壙群によって壊され詳細は不明である。ただし、調査区の東壁にはこの水溜に続く断面が確認されないので、調査区内にもとの東端があったと考えられる。側板に利用した板は何らかの転用材で、随所に枘孔と釘痕が残るものである。側板の深さは良好に遺存する部分で20cmほどで、側板の内外両面に杭を打つことによって固定し、水溜の底の方は壁が素掘りのままとなっている。底板もない。このような単純な構造のためか、側板を内側から押しつけるつっかえ棒が1個所設けられている。水溜の下半分は銅滓・炭化物の混る砂で埋められており、上半分は銅滓・炭化物の混るシルト質の水

成層で埋る。

SD105（図166・167、図版24下）　SD104の北側の同じ掘形の中に設置された升形の水溜である。約95cm四方の木組の構造で底板はない。SD104と同様に上部は削平され、遺存する深さは約10cmである。埋土の下半分は埋戻し土、上半分は水成の堆積物である点も共通する。SD104の水成層の基底より約10cm浅い。この二つの水溜は同時に設置され、北側の炉群と平行していることから一連の精錬作業に利用されたのであろう。

二つの遺構から出土した遺物は、銅滓、鞴羽口・坩堝・炉壁片のほか、「う」字を記した木簡、陶磁器（唐津焼・瀬戸美濃焼・丹波焼）がある。肥前磁器は出土していないが、層位的には肥前磁器の出現以降に作られたものである。さらに、SD104の掘形をほぼ相似形に取囲む、より古い掘形があり、その北壁西側の一部ではSD104の側板と平行する板が見つかった。ＳＤ１０７としたもので、SD104・105の設置以前に同じ機能をもつ水溜が作られて

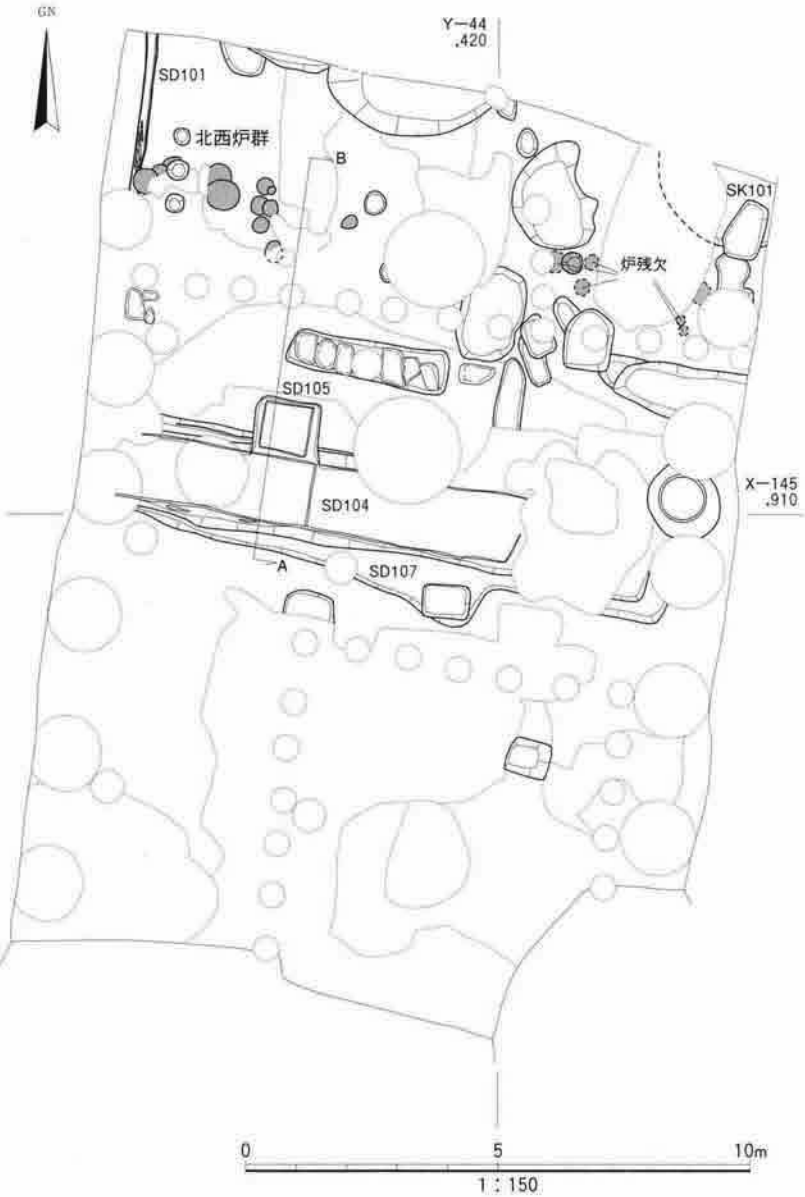


図166　OS90－142次徳川期遺構配置図

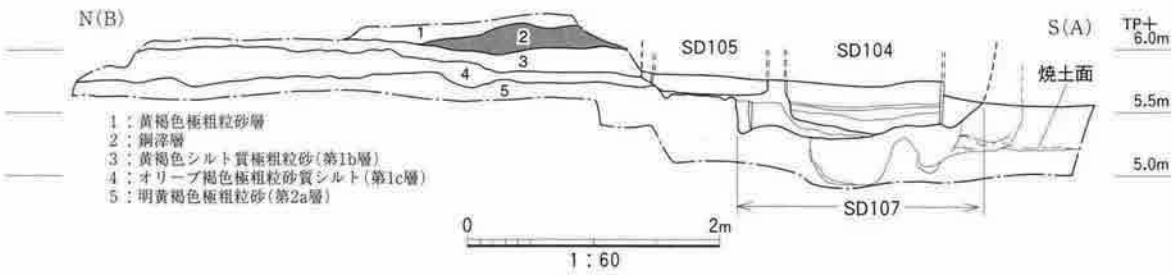


図167　OS90－142次における遺構と地層の関係

いたと考えられる。SD107の掘形の南辺が直線にならないのは、側板を抜取ったためであろう。

これらの水溜施設の東側は先述の土壙群によって破壊されている。狭い範囲で複雑な切合い関係をもち、何度も掘返された場所である。これらの土壙から出土した陶磁器(肥前磁器・唐津焼・瀬戸美濃焼・丹波焼・備前焼・京焼・青磁)は細片が少量であり、年代を決定することは困難であるが、水溜の存続期間は上限を17世紀中葉、下限を18世紀後半とする間の一時期と考えている。

3)まとめ

豊臣期以前の遺構についてはOS90－64・91－6次調査で確認することができた。小規模の調査であるため、各々の遺構のつながりなどは不明であるが、土地改変のようすが明らかとなった。古代には東に下がる谷地形の一部であり、豊臣期以前までは、大きく地形に改変を加えていない。豊臣前期には整地を行っているが、これは狭い範囲に限られるものであろう。西端で見つかった南北方向の溝は豊臣前期を通じて認められ、屋敷境の可能性もある。三ノ丸築造に伴い、大規模な整地が施され、最終的に平坦になったと考えられる。

また、OS90－142次調査では徳川期の銅吹所を確認することができた。これは、中央区島之内1丁目の住友銅吹所跡についで市内では2例目の銅吹所の調査となった[大阪市文化財協会1998]。内淡路町2丁目における銅吹所は17世紀初頭から始まり、終業については確実な証拠を得ることはできなかった。当該地において文献によって比定できる銅吹所はない。調査でもその手がかりになる資料は得られなかったが、遺構・遺物から推測できる銅精錬の内容は灰吹、南蛮吹から小吹にいたるものである。なお、銅精錬に関わる遺物については、理化学的な検討がされておらず、今後の課題である。

(平田・寺井)

第９節　OS93－47次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

本節ではOS93－47次および周辺調査（OS90－15・92－16次）を報告する（図168）。当地は豊臣期は惣構内である。

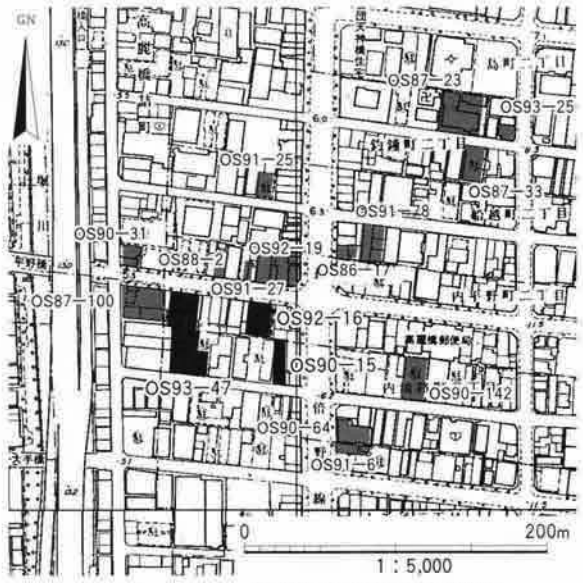


図168　OS93－47次などの調査地位置図

各調査の概要は以下のとおりである。

OS90－15次調査は試掘で大坂夏ノ陣の焼土層と思われる地層が検出されたため、本調査を行うにいたった。工事深度の関係で、一部深掘りができたところを除き、平面的な調査ができたのは徳川期までである。徳川期の遺構としては18世紀頃の穴蔵や17世紀中頃の石列、銅滓が集中する個所がある。また、豊臣後期の遺構は深掘りによって確認され、現在の街区と同じ方向の石組溝を検出した。

OS92－16次調査は試掘で徳川期以前の包含層が検出されたため、本調査を実施するにいたった。本調査ではGL－5.3mまで掘削することができたため、中世以降の変遷を把握することができた。また、おもな出土遺物にはマジョリカ陶アルバレッロがある。

OS93－47次調査は1,070㎡を対象としており、この付近ではもっとも広い調査である。工事の工程の関係で３期に分けて調査を行い、それぞれの調査地区をＡ・Ｂ・Ｃ地区とした（図176など）。本調査では中世以後の遺構が見つかった。中世では五輪塔を転用した井戸［豆谷浩之1996］などが検出された。また、大坂夏ノ陣の焼土層が良好に検出され、戦火で焼けた土蔵が見つかった［黒田慶一・豆谷浩之1994］。遺物で注目すべきものには、19世紀中頃のイギリス陶器［豆谷浩之1995］や、鞆形などの形象埴輪を含む多量の埴輪［櫻井久之2002］がある。

２）調査の結果

ｉ）層序（図169、図版26上）

OS93－47次調査地では11層に大別できる地層を確認した。なお、図169はＡ地区の中央東西畦と南壁で実測した断面図を合成したものである。

第１層　妙知焼の焼土層と考えられる。

第２層　にぶい黄褐色シルトの整地層で、複数の層に区分可能である。層厚は40㎝前後である。

第３層　にぶい黄褐色粗粒砂の整地層で、複数の層に区分可能である。層厚は60㎝前後である。

第４層　褐色粗粒砂の整地層で、複数の層に区分可能である。層厚は60㎝前後である。

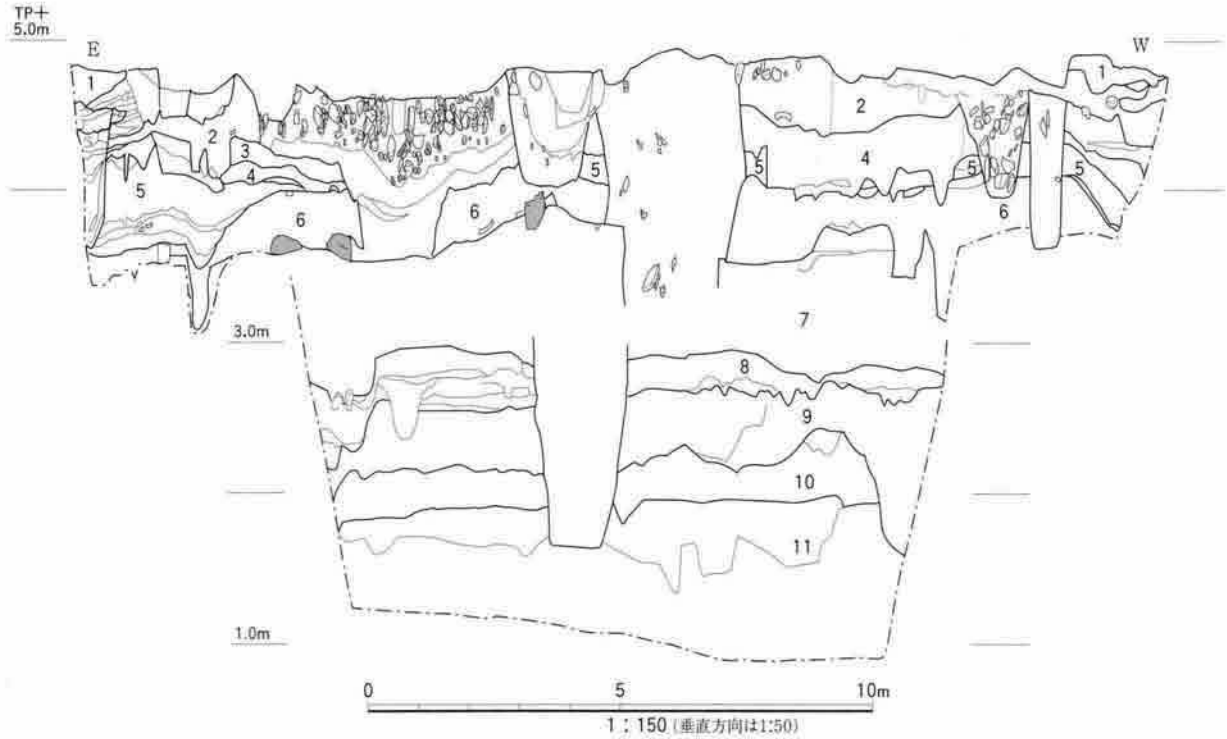


図169　OS93－47次層位断面図

第５層　にぶい黄褐色粗粒砂質シルト層の整地層で、複数の層に区分可能である。層厚は最大100cmである。肥前磁器・唐津焼・瀬戸美濃焼・青花などが出土した。

第６層　大坂夏ノ陣に伴う焼土層である。調査地中央付近がもっとも残りがよく、厚さ約20cmである。瀬戸美濃焼(志野を含む)・唐津焼・青花などが出土している。

第７層　明黄褐色粗粒砂やシルトの偽礫で構成される整地層で、層厚は約120cmである。瀬戸美濃焼・唐津焼・李朝陶磁などが出土しており、偽礫が上町層に由来することから、三ノ丸造成時の整地層と推定される。当層上面では豊臣後期の遺構が検出された。なお、当層よりヒトの頭骸骨・大腿骨・橈骨などが分散して出土している。

第８層　灰色シルト層で、層厚は10～20cmある。

第９層　にぶい黄橙色の礫を含む粗粒砂で構成される整地層であり、もっとも厚い部分で140cmある。瀬戸美濃焼・青花などが出土しており、地層の構成物が粗粒であることから、惣構造成時の整地層と推定される。

第10層　黄褐～褐色の粗粒砂質シルト層で、層厚は40cm前後である。瀬戸美濃焼・青花などが出土しており、大坂本願寺期～豊臣前期に該当すると思われる。

第11層　褐色細礫～粗粒砂層で、厚さは120cm以上ある。瓦器・瓦質土器・常滑焼・備前焼・東播系須恵器・青磁などが出土しており、14～15世紀頃の包含層である。

ii)遺構と遺物

a．古代以前の遺物

OS93－47次調査

第９～11層から弥生土器・古式土師器に加え多量の埴輪の破片が出土した(図170～173)。

1は弥生時代後期から庄内式期にかけての器台もしくは壺の口縁部である。口縁端部は垂下し、竹管文と斜めの直線を組合わせた文様が施されている。胎土に角閃石を含む。2は山陰系の二重口縁の壺で、肩部にヨコハケが施される。3は甕の頸部から体部上半にかけての破片である。櫛描波状文が3条施されている。

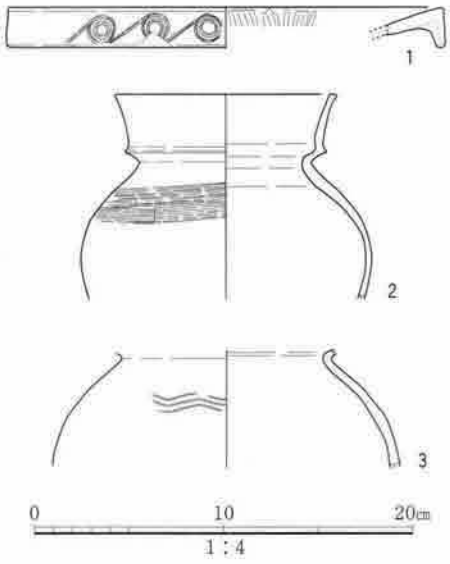


図170　OS93－47次出土土器
SK1101(1)、SM901(2・3)

埴輪はすべて窖窯焼成で、円筒埴輪や朝顔形埴輪のほか、靫・盾・馬形と思われる形象埴輪の破片もある。前述のとおり、すべて中世以降の遺物と共伴していることから遊離資料であるが、SK1102やSM1101、SM901のほか、第9～11層から出土したものについても調査地の南西部に集中する。

4～12は円筒埴輪、13～15は朝顔形埴輪である(図171)。8・11を除きヨコハケで仕上げられている。これらは[川西宏幸1978]のⅣ期に相当すると思われる。

16～22は靫形埴輪の破片である(図172)。いずれも焼成などから判断して同一個体と考えられ、各部位の推定位置については図172の右上で示した(註1)。16は飾板翼状部から筒部にかけての破片で、飾板翼状部には退化した直弧文が、筒部との境界付近には柳葉形の鏃を表現したと思われる曲線の線刻が施されている。17は半円形区画部で、横方向の梯状の線刻が施される。18は飾板翼状部の上につく鰭飾りと想定した。19には円盤部と退化した直弧文があり、図の左上には円孔がある。円の直径が小さいため横につく小さい円盤の可能性も十分考えられる。20は筒部かもしくは飾板に施されていた直弧文の一部と思われる。破片が平坦であること、胎土がほかの靫形埴輪に類似することからここに含めたが、盾形埴輪の一部になる可能性も残す。21・22は飾板台状部に相当する部分である。21には直弧文と筒部の裾部分が表現されていて、一部にベンガラが付着している。筒部の裾部分は段になって垂下することによって表現されている。22にはこの垂下する部分が剥れた跡がある。背後には円筒部が残る。

23～36はそのほかの形象埴輪である(図173)。

23～25は盾形埴輪と思われる。24は盾の左下隅の部分で、外区を画する線刻と鋸歯文と思われる線刻が施されている。26・27・36は形式不明の形象埴輪である。26は線刻が格子状に施され、互い違いの区画を「回」字状の線刻で埋めている。盾形埴輪にこのような文様が施されるが、一区画が3㎝程度と小さいのが疑問に残る。27は鋸歯文状の文様の三角形内の線刻が斜行していることから、盾形埴輪ではなく、水鳥形埴輪など別の形象埴輪の一部と思われる。36は盾形埴輪の可能性がある。28は馬形埴輪の頭部で、図の左側の内面に粘土を絞った跡が見られることから、左側が先端方向と思われる。また、スカシ孔は目、線刻が施された粘土紐は革紐で、その配置から粘土紐は轡に連なるのではなく、頭頂部の辻金具につながり、粘土粒は辻金具の足を表現していると考えられる。

29～35は甲冑形埴輪の草摺部分と思われる。29は円筒部と草摺が接する部分で、円筒部径は22.5

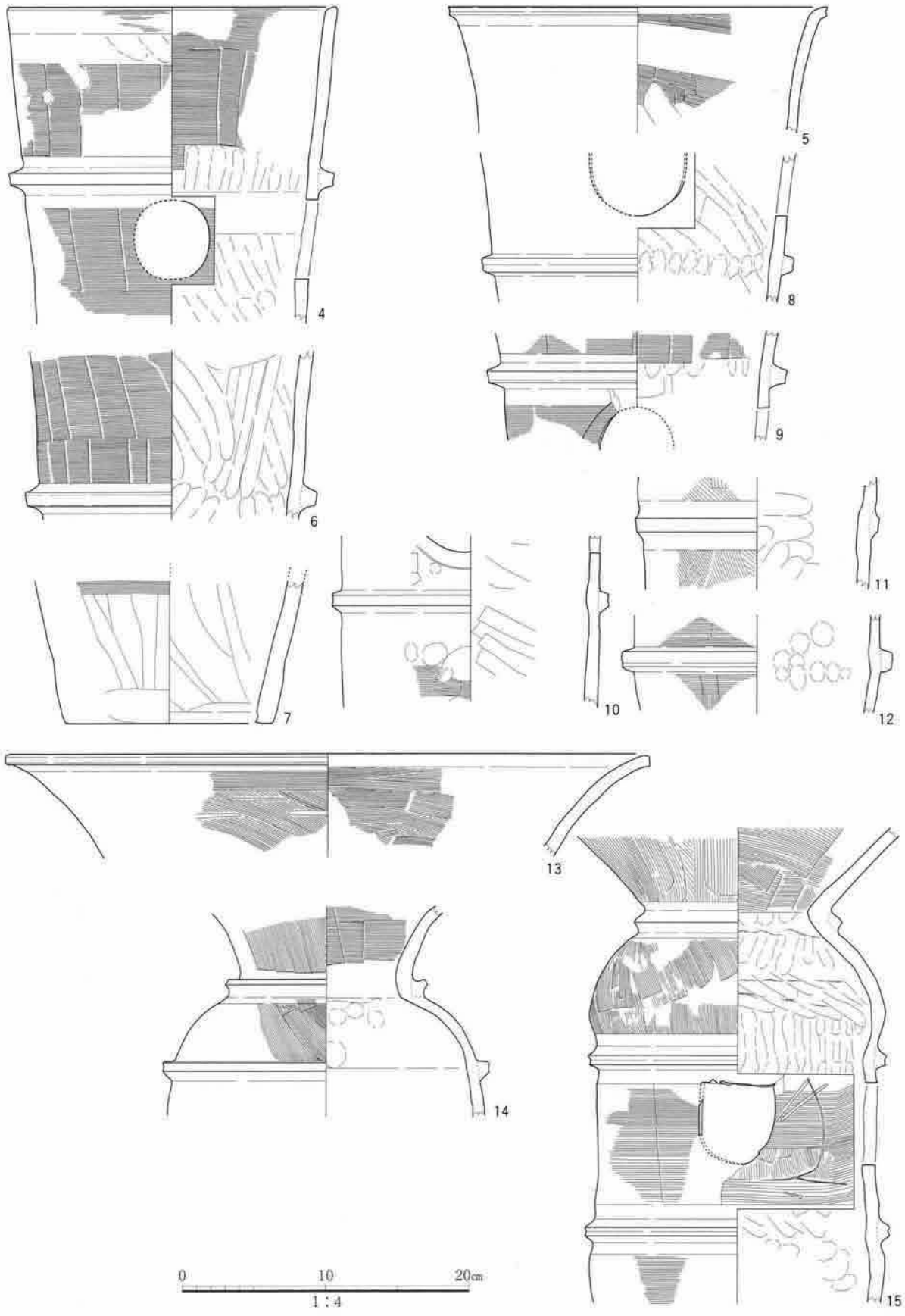


図171　OS93－47次出土円筒・朝顔形埴輪

第10層(4・5・11)、SK1102(6・7・9・12・15)、SM901(8・10・14)、攪乱(13)

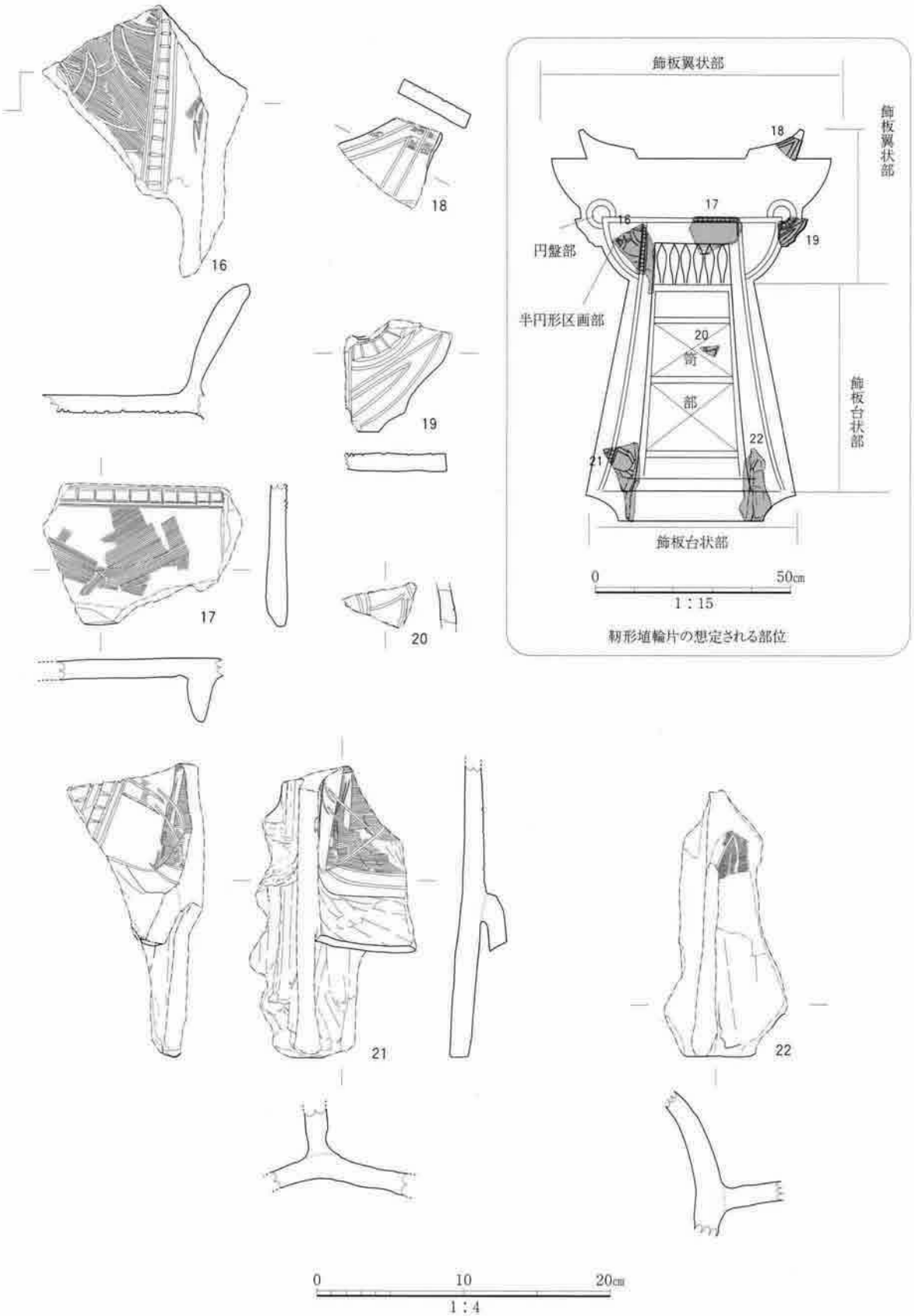


図172　OS93－47次出土靭形埴輪
SM901(16・17・21・22)、SK1102(19)、第10層(18)、第11層(20)

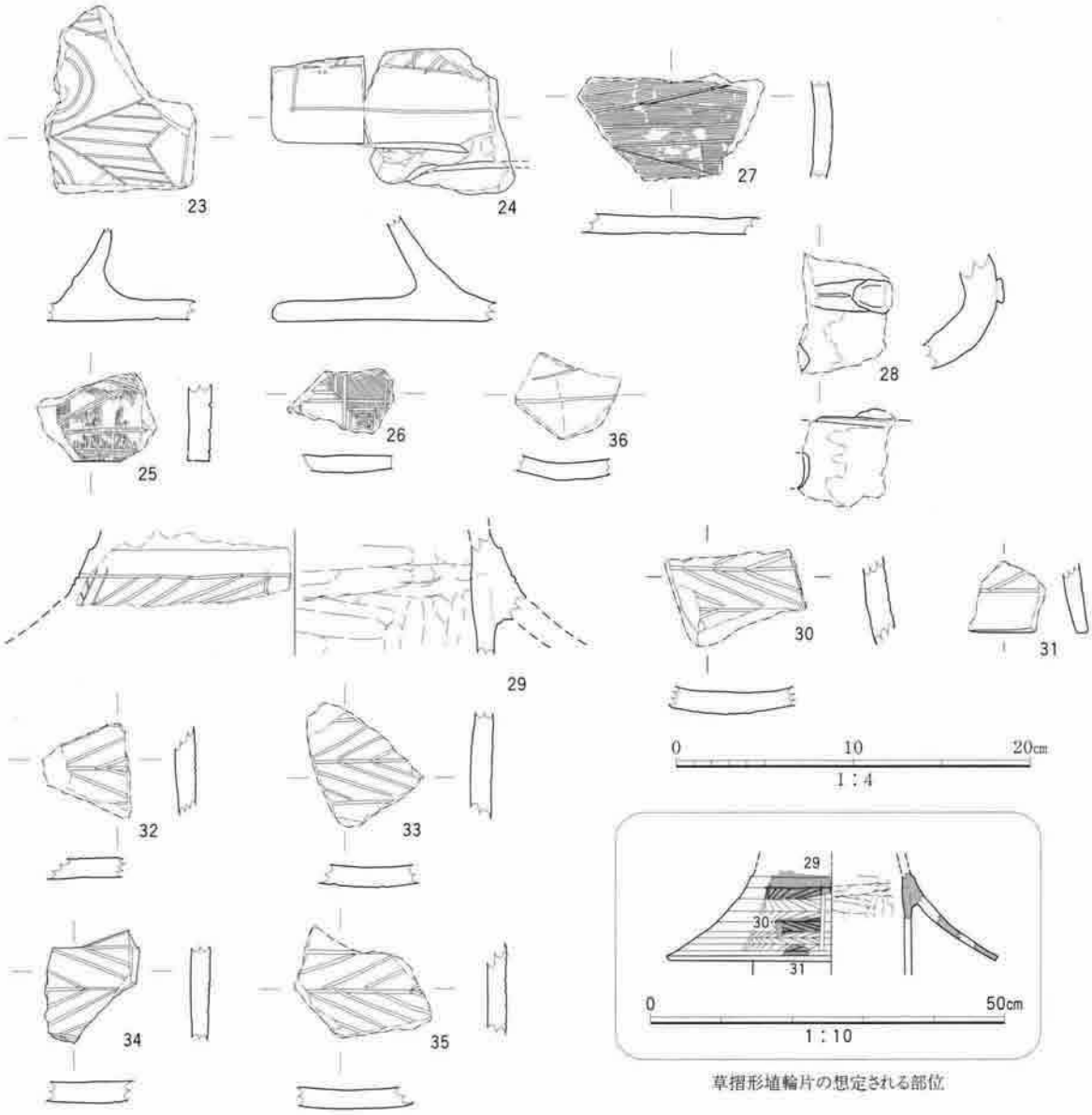


図173　OS93－47次出土形象埴輪(靭形埴輪以外)

SE1106(32)、SM1101(23・26・30・35)、SK1102(25・28・36)、第10層(24・27・33)、第11層(29・31・34)

cmある。外面に縦２条の分割帯と横方向の綾杉文帯が巡るものであろう。30には綾杉文が施され、縦の線が破断面付近に残っている。31は裾の部分であろう。32～35は綾杉文が施されていることから、草摺の一部と考えた。推定される部位は図173の右下に示した。

また、OS92－16次の第11層内から単弁の蓮華文軒丸瓦104が出土した(図180)。

b．中世(大坂本願寺期を含む)の遺構

OS93－47次調査

第11層上面で井戸・土壙などの遺構を検出した(図176)。

SE1101(図174、図版26下)　A地区の北東部で検出した。井戸側は上部は五輪塔の火輪の部分を６つ組合わせて作られ、下部には板材が残っており、桶を転用したものと思われる。土師器羽釜・瓦器椀・常滑焼・青磁などのほか、唐草文軒平瓦87・88、連珠文軒平瓦85が出土した(図180)。15世

紀後半頃に比定される。

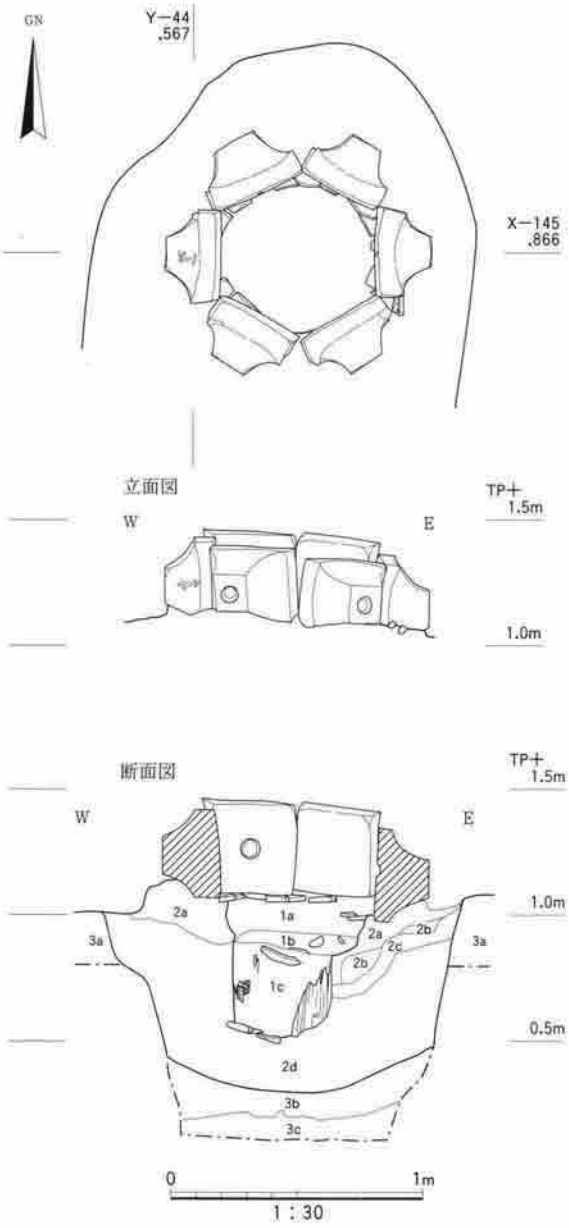
SE1102(図175)　A地区の中央南寄りで検出した井戸である。土師器羽釜を3段積んで井戸側に利用している。SE1103の掘形を切っていることから、それより後出する。羽釜の形態の年代観から14世紀中頃の井戸である。

出土遺物には土師器羽釜45、瓦質土器羽釜44、須恵器甕46、瓦器椀43、口禿げの白磁皿38が出土した(図177)。44・45は井戸側に利用されていたものである。いずれも口縁部が内傾し、口縁端部に面をもつ。45には体部下半にヘラケズリが、44には横方向の強いナデが施されている。46は内面に同心円の当て具痕跡が残っており、破断面は白色である。東播系のものであろう。43は直径4.0cmの低い高台をもつ。ヘラミガキは非常に粗で、[尾上実ほか1995]のⅣ－2期(13世紀第3四半期)に相当し、これが井戸の年代を示すものと思われる。なお、これらの遺物については[佐藤隆1996]で取上げられており、44については大坂でもっとも初期の瓦質土器羽釜と評価されている。

SE1103(図175)　A地区中央で検出した井戸で、曲物を井戸側に利用している。瓦器・瓦質土器・常滑焼・白磁などの遺物が出土した。

SE1104(図175)　羽釜と曲物3段を転用した井戸側を用いている。SK1101に切られ、底の部分しか残っていない。

SE1105(図175)　底は羽釜を転用した井戸側を用いている。SK1101に切られ、底の部分しか



1：井戸側内の埋土
1a：にぶい黄褐色粗粒砂～細礫
1b：にぶい黄褐色細礫を含む細粒砂
1c：にぶい黄褐色細粒砂
2：掘形の埋土
2a：にぶい黄褐色粗粒砂～中礫
2b：にぶい黄橙色粗粒砂～中礫
2c：オリーブ褐色粘土質粗粒砂
2d：黄褐色中礫(掘法不良)
3：SE1101がつくられる以前の地層
3a：にぶい黄褐色細～中礫
3b：褐色粗粒砂～細礫(礫が優勢)
3c：褐色粗粒砂～細礫(粗粒砂が優勢)

図174　OS93－47次SE1101実測図

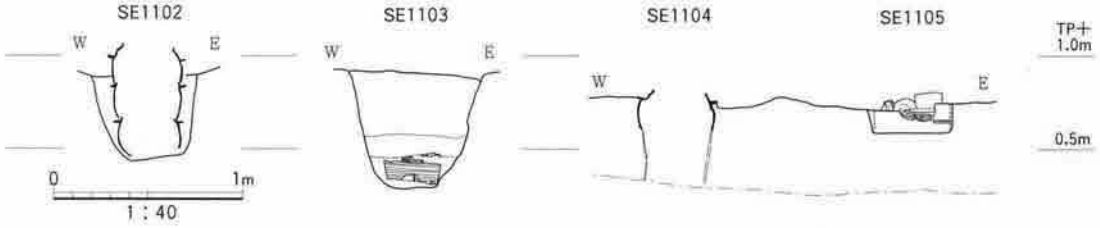


図175　OS93－47次SE1102～1105断面図

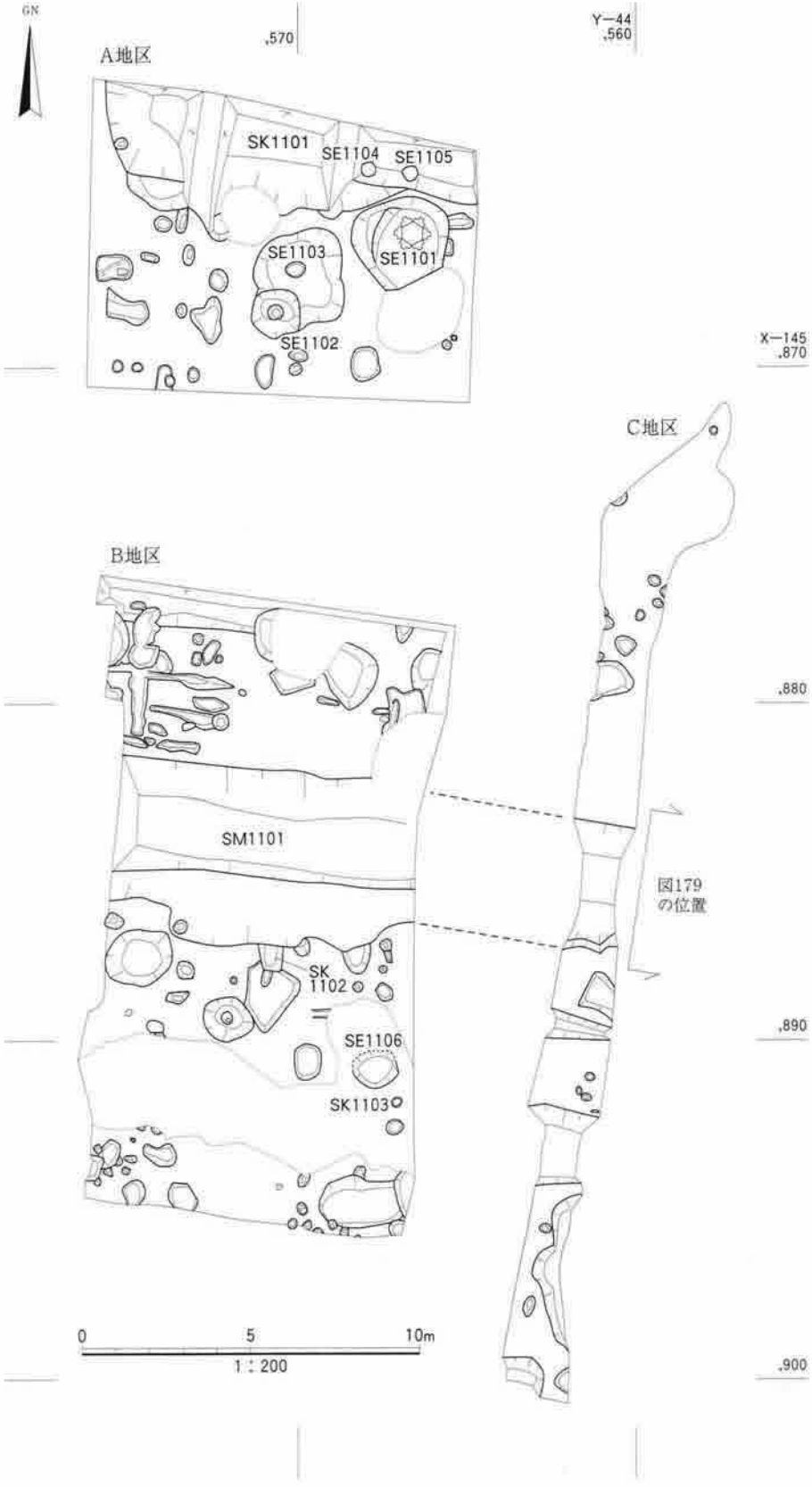


図176　OS93－47次第11層上面遺構配置図

残っていない。中から土師器・瓦器・一石五輪塔のほか、波頭文軒平瓦99・102が出土した(図180)。

SE1106　SM901の底で検出したため形状は不明である。底のレベルはTP＋0.5mであった。瓦器椀41・42が出土した(図177)。42は見込みに格子状にミガキが施される。12世紀中頃のものである。

SK1101　A地区の北側で検出した落込みで、東西11m以上、南北4m以上で、北側と東側が調査区外に延びる。底は平坦で、深さは0.7mを測る。弥生土器1のほか、白磁・青磁・瓦質土器・備前焼・丹波焼・東播系須恵器などが出土しており、土師器皿37・羽釜47・瓦質土器羽釜48・青磁碗39のほか、唐草文軒平瓦90・波頭文軒平瓦101を図示した(図177・180)。47は口縁端部は短く上方に折り曲げられ、直立して尖り気味に丸く仕上げられる。体部内面にはヨコハケが施され、15世紀前半頃に位置づけられるものであろう。

SK1102　B地区の中央で検出し、北側をSM1101に切られる。埴輪が多数出土した。

SK1103　B地区の南東で検出した。直径0.35m、深さ0.20mである。東播系須恵器鉢40が出土した(図177)。40は口縁端部が下方にやや拡がるもので、12世紀頃のものではないかと思われる。

SM1101(図179、図版26中)　幅約3.0m、深さ0.8mの東西方向(E7°S)に延びる堀状の遺構で、埋土は第10層である。瓦片が溝の北肩に沿って帯状に出土した。出土遺物には盾形埴輪23、甲冑形埴輪の草摺部分30・35、形式不明の形象埴輪26(図173)などの遊離資料に加え、青磁53～60、白磁61・62、

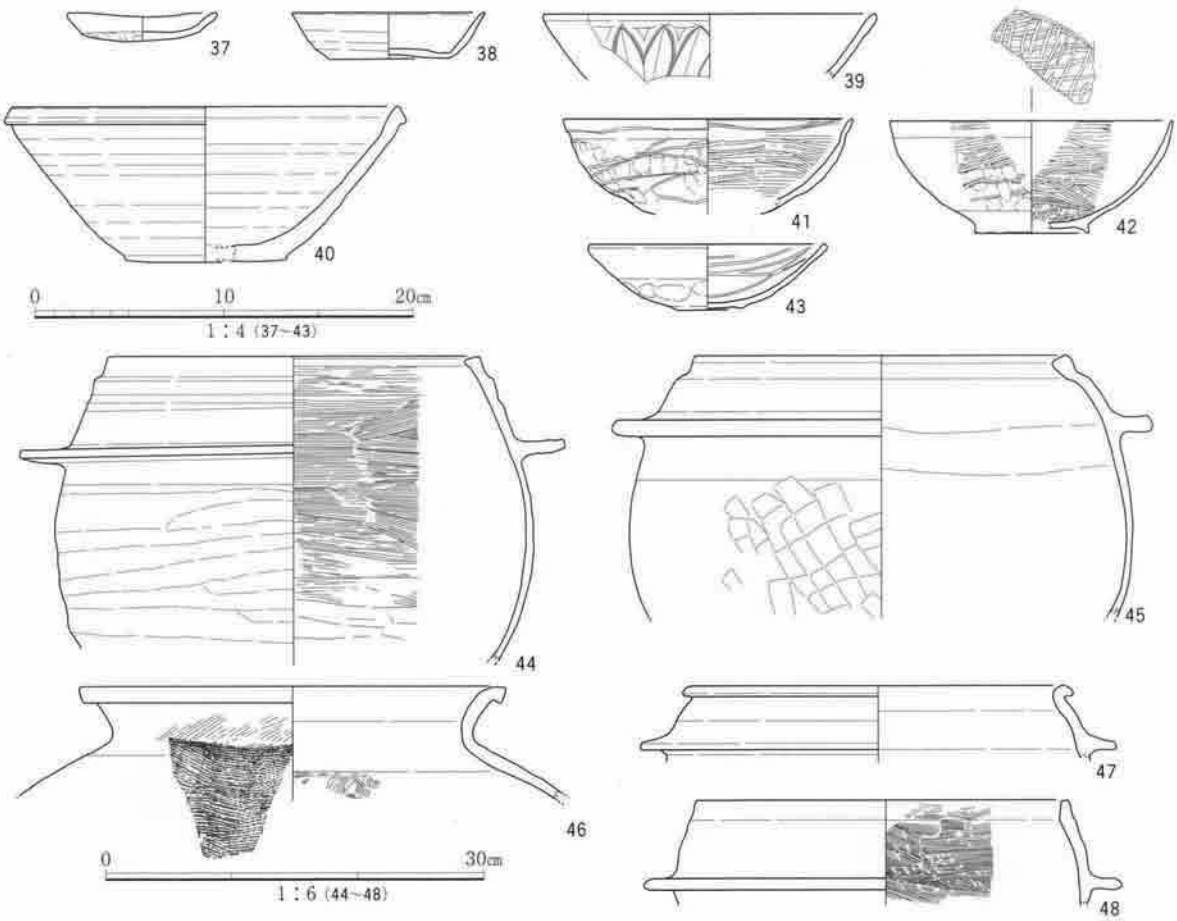


図177　OS93－47次第11層上面遺構出土遺物
SE1102(38・43～46)、SE1106(41・42)、SK1101(37・39・47・48)、SK1103(40)

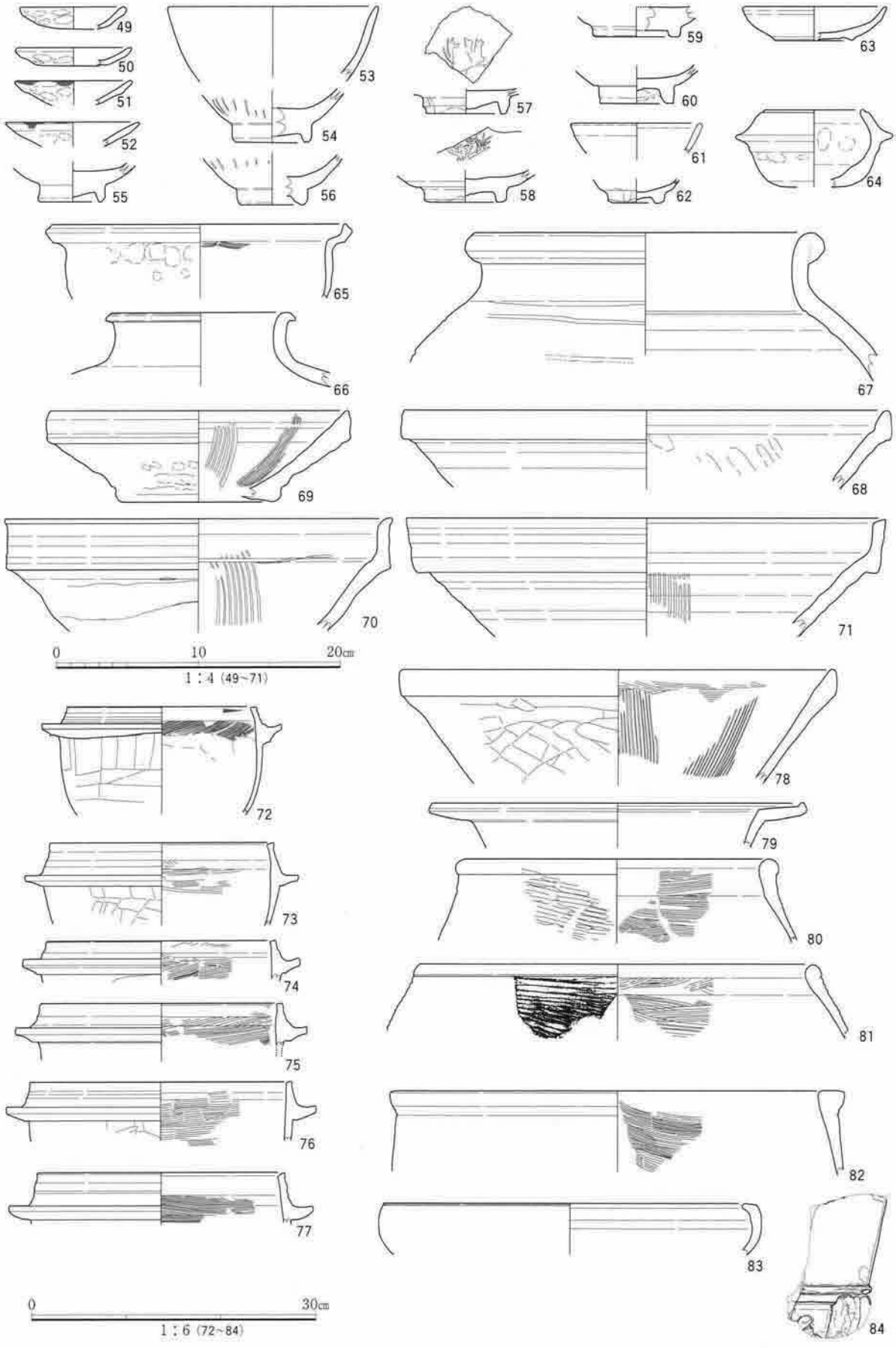


図178　OS93－47次SM1101出土遺物

瀬戸美濃焼灰釉丸皿63、土師器皿49～52、同羽釜73～77、同甕65・81・82、東播系須恵器擂鉢68、信楽焼壺66、備前焼壺67、同擂鉢69～71、瓦質土器小型羽釜64、同羽釜72、同鉢79、同擂鉢78、同甕80、同火鉢83・84がある(図178)。また、出土瓦には唐草文軒平瓦89・91～93、忍冬唐草文軒平瓦86、波頭文軒平瓦100・103、梵字文軒平瓦94～98がある(図180)。

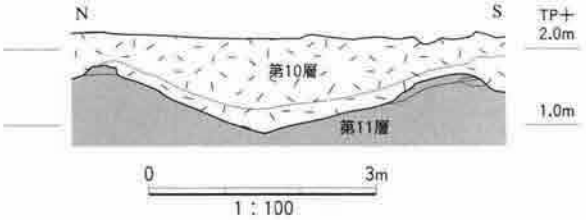


図179　OS93－47次SM1101断面図

62は高台に抉りが入る。備前焼擂鉢は口縁部帯として発達した70・71と、上方への拡張がない69の2種ある。羽釜は土師器・瓦質にかかわらず、口縁部が直立気味に伸び、鍔が短い。体部外面にはケズリ、内面にはハケメが施される。甕は口縁端部が丸く仕上げられるものと、断面が逆台形を呈するものがある。前者には粗い横方向の平行タタキが施される。66は15世紀後半に位置づけられる[木戸雅寿1995]。67は口頸部が直立気味に立ち上がり、口縁端部は折り返して玉縁状に仕上げる。色調は灰色を呈し、13世紀末～14世紀初頭のものであることから混入品であろう。84は平面方形もしくは長方形の奈良火鉢の脚が取付く部分である。

以上の遺物の多くは[佐藤1996]で報告されており、16世紀前半に位置づけられている。

c．大坂本願寺期～豊臣前期の遺構と遺物

OS93－47次調査

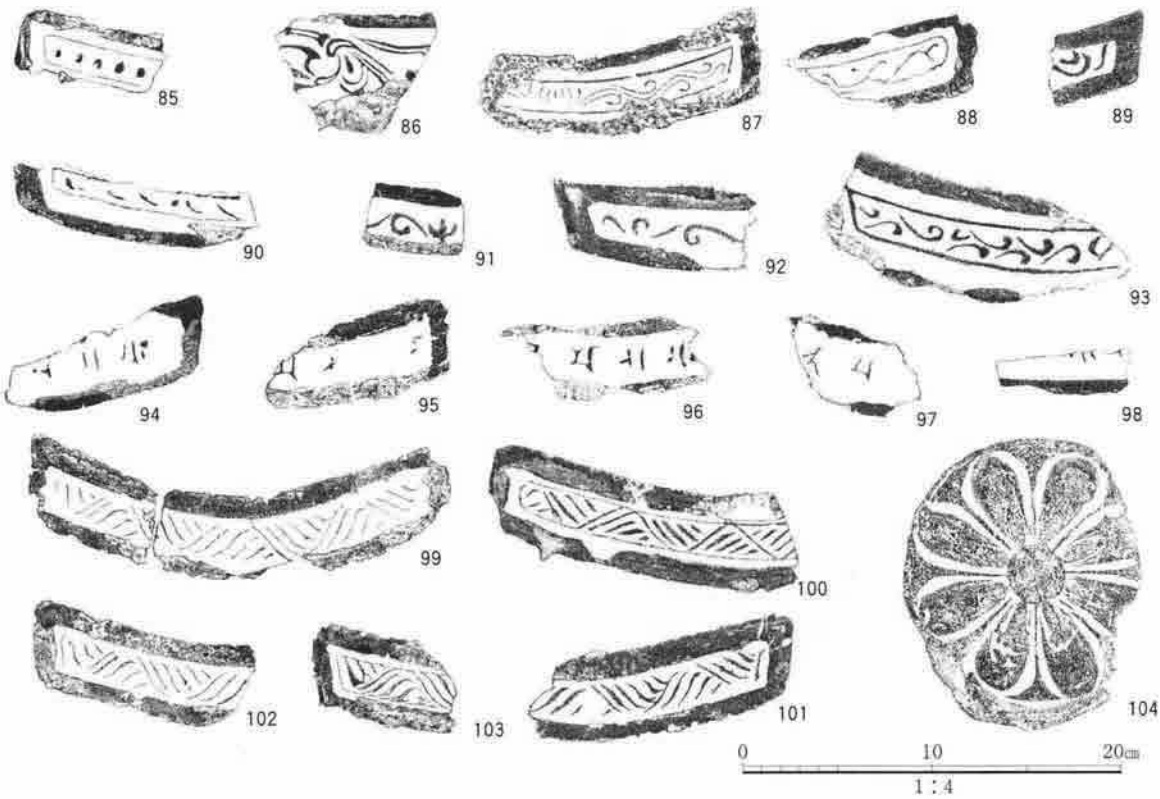


図180　OS93－47次および92－16次出土瓦

SE1101(85・87・88)、SE1105(99・102)、SK1101(90・101)、SM1101(86・89・91～98・100・103)、OS92－16次第11層(104)

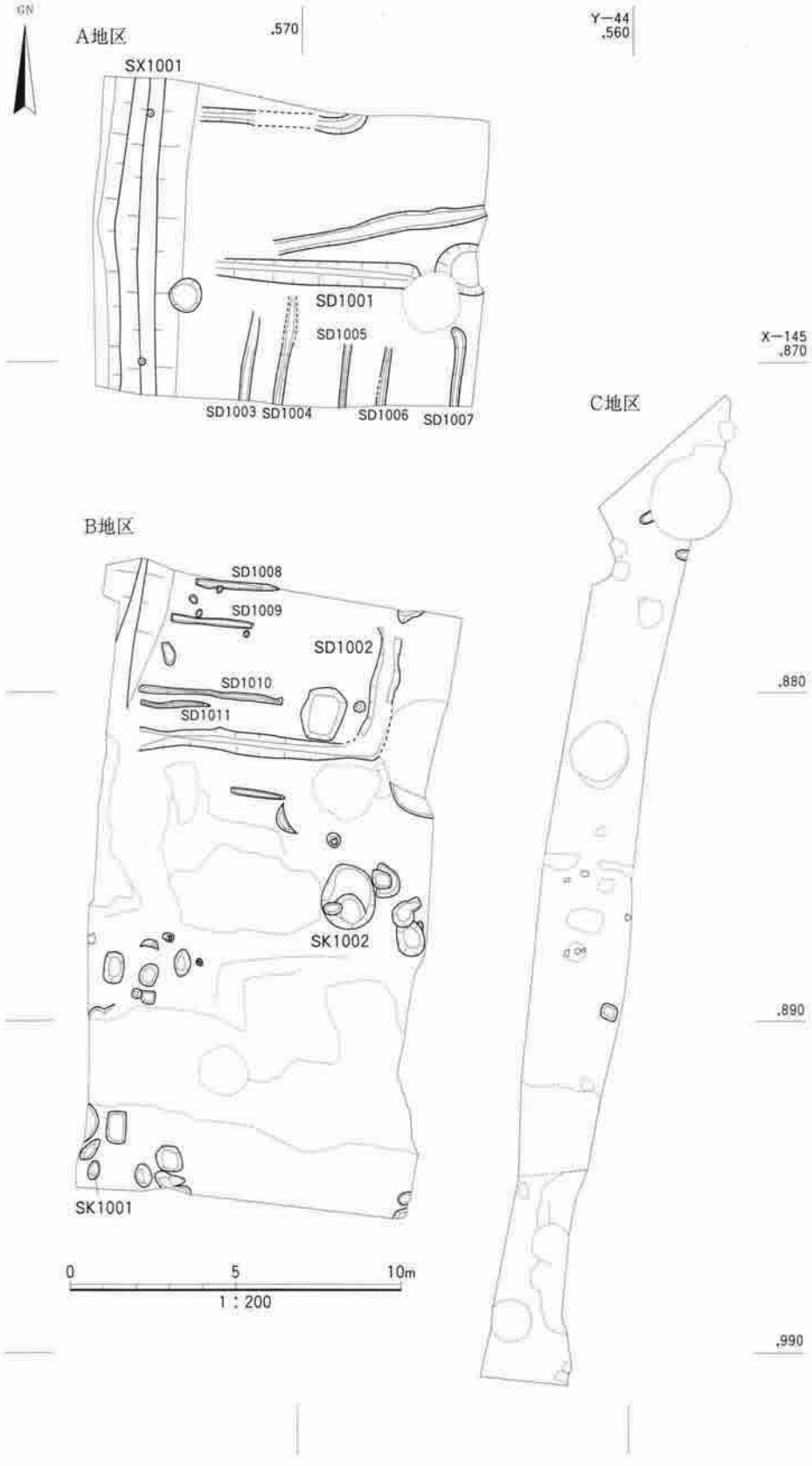


図181　OS93－47次第10層上面遺構配置図

第10層上面で、土手・溝・土壙などの遺構を検出した(図181)。

SX1001　A地区からB地区の北西にわたって南北方向に延びる土手で、高さは0.3mある。西側は平行して延びる溝になるようだが、底は検出できなかった。現状で土手のもっとも高いところからの深さは0.9mある。出土遺物には土師器・瓦器・青花などがあるものの、その数は少ない。

SD1001～1011　A地区で検出した**SD1001**は東西方向の溝で、幅0.7m、深さ0.05mである。B地区の**SD1002**はL字状に曲がり、幅0.7m、深さ0.1mである。これら溝と**SX1001**に囲まれた範囲に幅0.3m前後、深さ0.1mの南北方向の溝**SD1003～1007**、東西方向の溝**SD1008～1011**がある。これらは畠の畝間と考えられる。

SK1001　B地区の南西隅で検出した土壙である。李朝陶磁皿**105**が出土した(図182)。口縁部はまっすぐ伸び、見込みに５個所の目跡がある。

SK1002　B地区の中央部で検出した土壙である。土師器皿**106**、瀬戸美濃焼丸皿**107**、瓦質土器火入**108**が出土した(図182)。

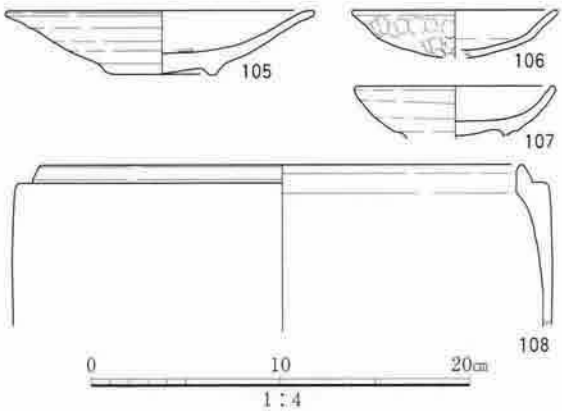


図182　OS93－47次SK1001・1002出土遺物
SK1001(105)、SK1002(106～108)

OS92－16次調査

TP+2.3～2.5mの第10層上面で南北方向の溝を７条検出した(図183)。畠の畝間と思われる。

d．豊臣前期の遺構と遺物

OS93－47次調査

第９層上面で溝・土壙・井戸を検出した(図185)。

SM901(図184、図版27上)　B・C地区で検出された東西方向(E7°S)の堀である。B地区の西側とC地区では幅3.0m、B地区の東側は膨らんで幅6.0mに達し、深さは2.0mある。埋土には第９層に由来する偽礫が堆積していたため、当初は第10層上面遺構として扱っていたが、断面で溝の肩が第９層を切込んでいることから、第９層上面遺構として報告することにした。第９層に由来する偽礫の上には第８層、第７層が順に堆積しており、三ノ丸造成時に完全に埋められたことがわかる。出土遺物には形象埴輪や円筒埴輪に加え、青花・瀬戸美濃焼天目碗などがある。

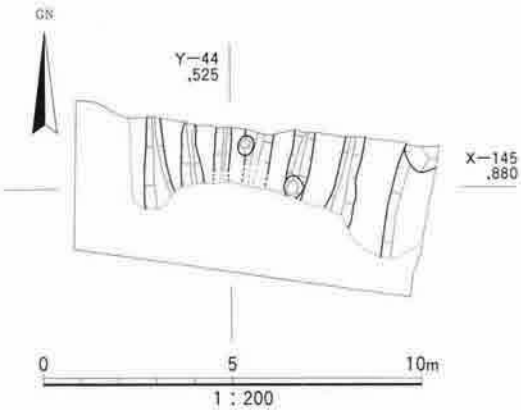


図183　OS92－16次第10層上面遺構配置図

SX901　B地区の西端で検出した落込みで、南北方向に延びる。**SM901**と埋土が共通することから、大きな溝の東肩に

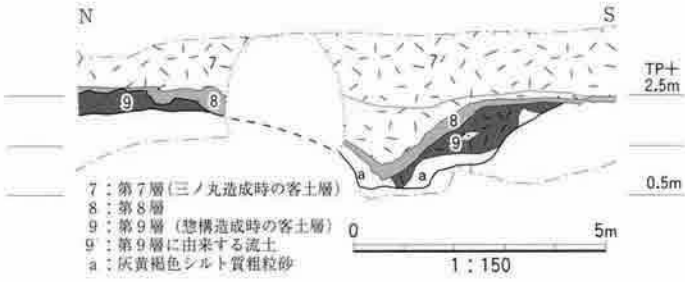


図184　OS93－47次SM901断面図

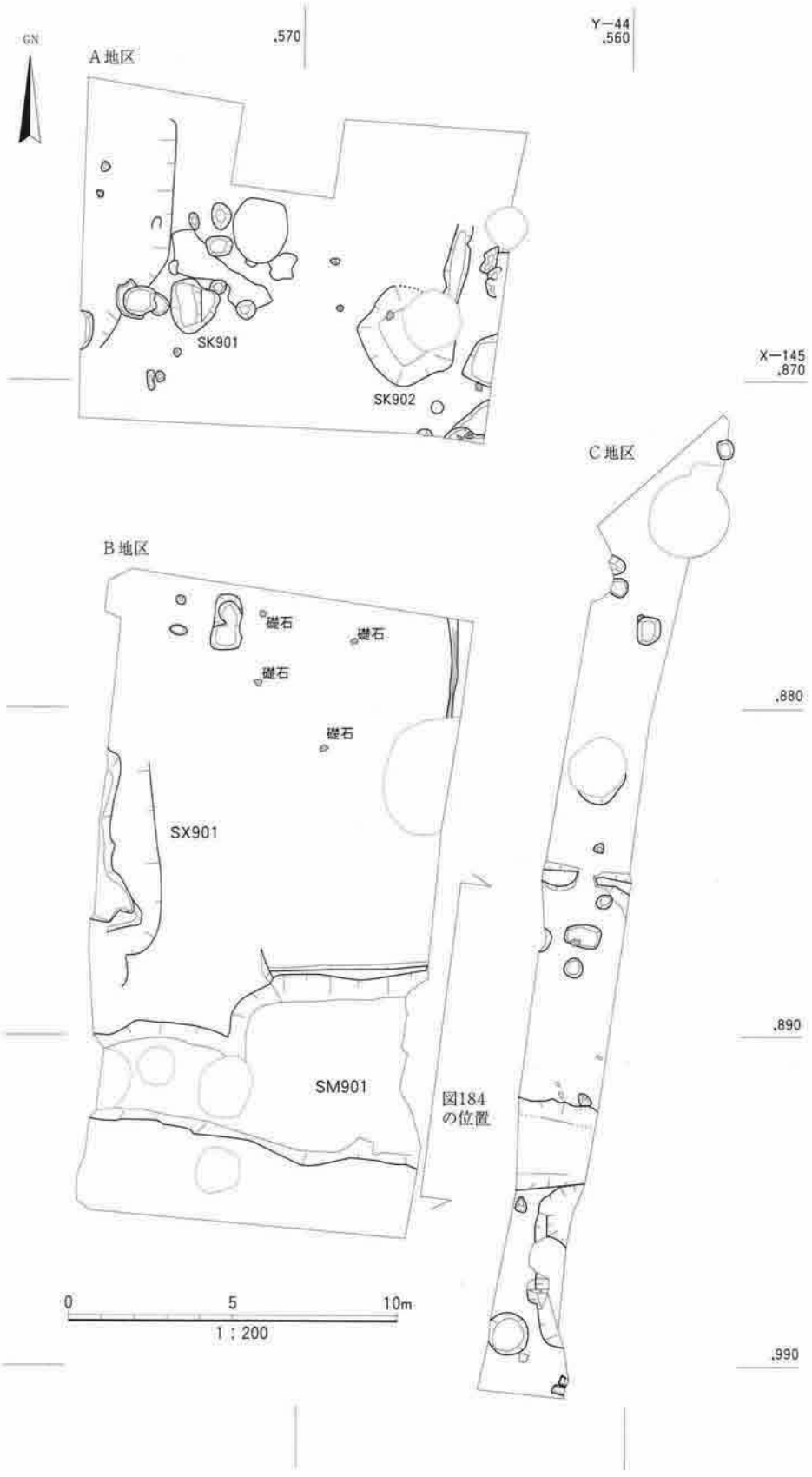


図185　OS93－47次第９層上面遺構配置図

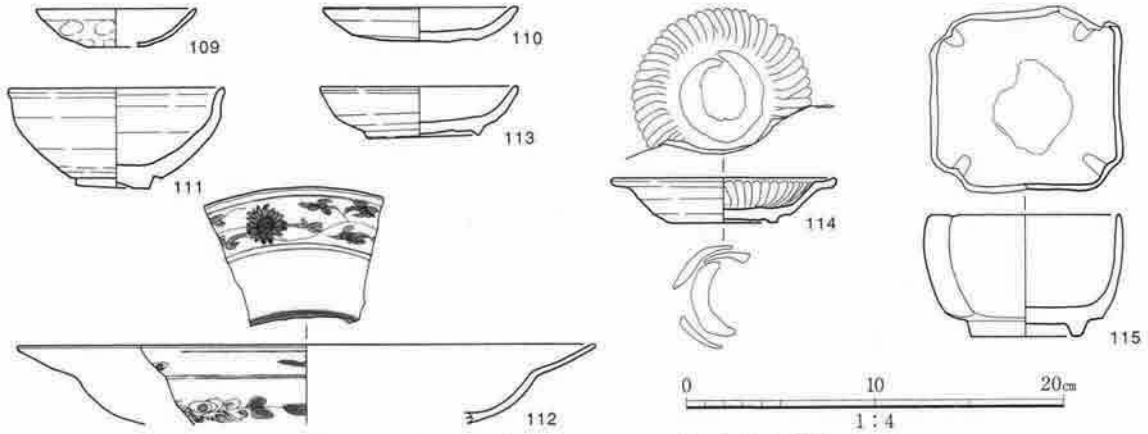


図186　OS93－47次SK901・902・第８層出土遺物
SK901(109～111)、SK902(112)、第８層(113～115)

なる可能性がある。

SK901　A地区の西側で検出された。土師器皿109・瀬戸美濃焼丸皿110・天目碗111が出土した(図186)。

SK902　A地区の東側で検出された。青花大皿112が出土した(図186)。

このほか、礎石と思われる石がB地区の北側で４個検出されたが、建物としての組合せはわからなかった。なお、当遺構面を覆う第８層からは瀬戸美濃焼丸皿113・同折縁ソギ皿114・同鉄釉向付115が出土した(図186)。

ｅ．豊臣後期の遺構と遺物

OS93－47次調査

第７層上面で建物・敷石遺構・石組溝・土壙などを検出した(図187)。この面は大坂夏ノ陣の被災面であるが、図187の網掛けの遺構については少なくとも夏ノ陣の時点ではすでに埋まっていたものである。

SB701(図版27中)　梁行４間(4.0m)、桁行10間(8.9m)以上の総柱の礎石建物で、建物の方向はN7°Eである。建物の周囲には塀が立てて埋め込まれた状態で並び、建物の東側では塀を心材にした壁が焼けて倒れた状態で検出された(写真20)。断面の観察から総塗籠(そうぬりごめ)式の構造であったことがわかる。また、西側では瓦が屋根から落ちた状態で見つかった。なお、この建物については[黒田・豆谷1994]で紹介されており、大坂夏ノ陣で焼けた土蔵であったと考えられている。



写真20　OS93－47次SB701の壁の状況

SB702　SB701の東側で同じ方向(N7°E)の礎石列が検出されており、調査終了後の整理過程で認定した礎石建物である。後述するSX701の抜取跡と考えられる窪みの内側に大小の礎石が分布している。SB701と同様の建物であったと思われる。礎石の上面は赤変していた。

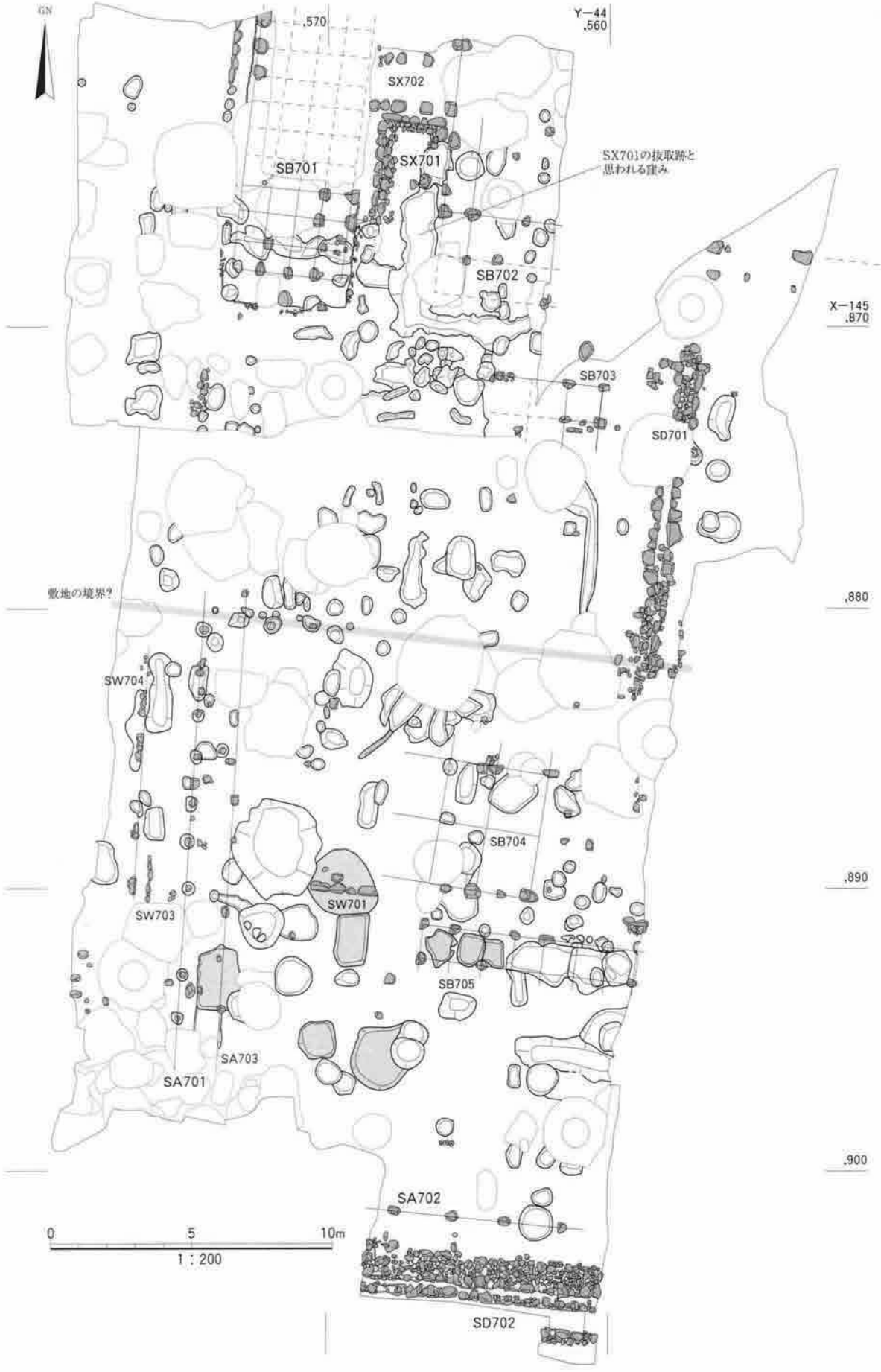


図187　OS93−47次第７層上面遺構配置図

SB703～705　調査終了後の整理過程で、礎石やその抜取穴が並ぶことから認定した建物である。SB703・705はN7°E、SB704はN9°Eの方向であった。SB703・705の礎石には赤変しているものもあったが、SB704については礎石の下に炭を多量に含む土壙があり、大坂夏ノ陣以後に移動している可能性が高い。

SW701　B地区の中央で石が4つ並んで検出された。南側に面を揃える。

SX701　SB701の東側に接して、「コ」字状に延びる敷石遺構である。幅が1m弱で、大坂夏ノ陣後になされたと思われる抜取跡を参考にすると東側の列は南側で「L」字状に曲る。さらに東側の延長線は石組溝SD701の北端に一致する。石の表面は被熱していた。

SX702　SB701とSB702の間にある、幅1.2mの間隔を置いて東西方向に並ぶ石列である。石の上面とともに石列間の土の表面も焼けていることから、SB701・SX701と同時存在したことがわかる。SB701とSB702をつなぐ通路と考えられる。

SD701　C地区で検出された石組溝で、内法の幅は0.3mある。南北方向(N8°E)に延び、北側で西に曲る。この延長方向にSX701の抜取跡と思われる窪みにつながることから、一連のものである可能性も残る。なお、南端は崩れてはっきりしないが、延長部分が検出されていないことから、本来、現状の南端付近で途切れていたものと思われる。

SD702(図版27下)　B地区の南端で検出した石組溝で、方向はW7°Nである。東側の延長線上にOS90－15次調査で検出された石組溝があり、一連のものである。

SA701　N4°Eの方向に延びる礎石列である。礎石の間隔は1.5～1.8mで、一部の石が赤変していた。東側には同じ方向で間隔が一定でない礎石列SA703がある。これはSA701の補助的な役割を果たし、両者が組み合って塀になっていたと思われる。また、西側には板石を埋め込んだ石列SW702、塊石を並べた石列SW703が平行に延びていることから、これらはSA701・703とともに敷地境となった可能性が考えられる。

SA702　SD702と平行して延びる礎石列で、SD702の北側に広がる石敷と組み合って、塀になると

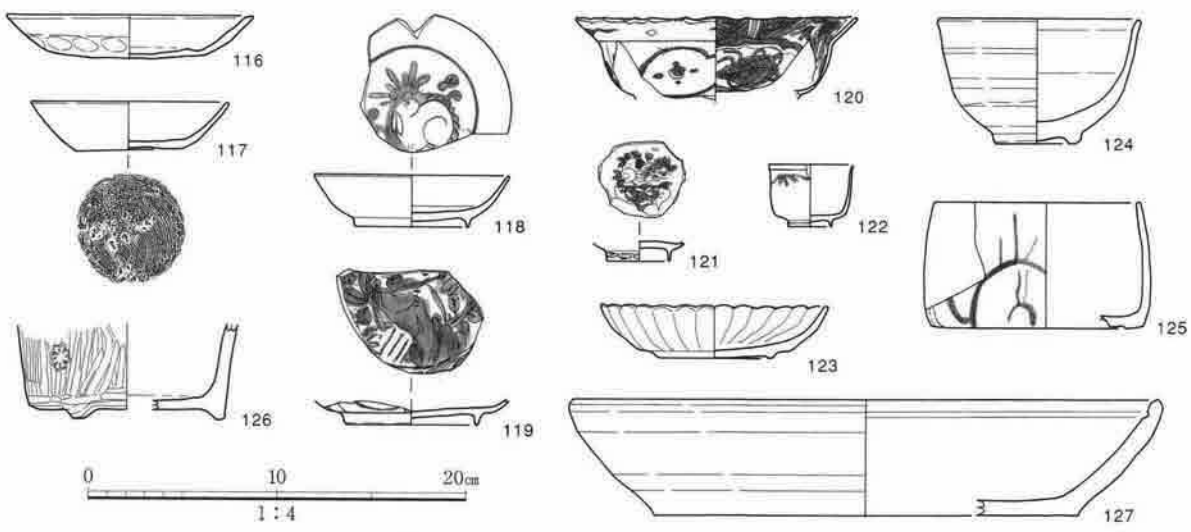


図188　OS93－47次第6層出土遺物

思われる。

以上の遺構については、調査時に認定していたSB701、SX701・702、SD701・702、SA701に加え、SB702～705、SA702は図面や写真を再検討することによって遺構として報告することにした。

なお、当遺構面を覆う第6層(大坂夏ノ陣の焼土層)からは、土師器皿116・117、青花皿118・119、同鉢120、同碗121、同小杯122、白磁輪花皿123、唐津焼碗124、瀬戸美濃焼志野向付125、瓦質土器火鉢126、丹波焼大平鉢127が出土した(図188)。また、豊臣後期～徳川期の地層や土壙から金箔瓦が出土している(第Ⅴ章第2節)。

OS92－16次調査

第6層基底面で、掘立柱建物SB706、掘立柱列SA703を検出した(図189)。

SB706　掘立柱の柱穴を5基検出したが、調査区外に延びるため建物の平面形はわからない。柱筋はN7°Eの方向に並ぶ。柱穴は直径0.8～1.0m、深さは0.2mである。

SA703　調査地西端で検出した掘立柱列で、ほぼ正南北に柱穴が並ぶ。柱穴は直径0.6～0.7m、深さ0.3m、柱痕跡は直径0.2mであった。

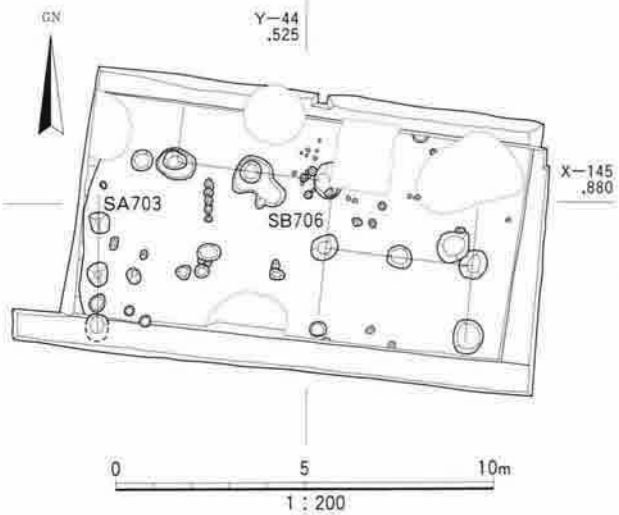


図189　OS92－16次第6層基底面遺構配置図

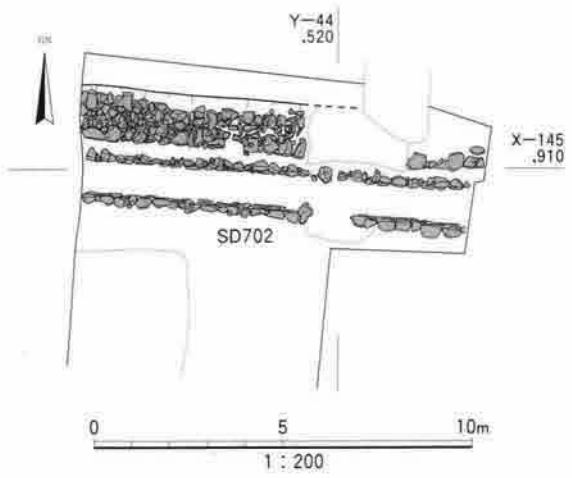


図190　OS90－15次第7層上面遺構配置図

OS90－15次調査

調査地南側の深掘部分において、第7層上面で豊臣後期の石組溝を検出した(図190、図版25上)。これはOS93－47次調査地のSD702と一連のものであるため、ここでもSD702と称することにする。

この溝は火を受け、焼土や焼けた瓦などが落込んだ状態で検出された(図版25中)。溝の北側には1.1～1.2mの幅で石敷があるが、南側にはない。このことから、屋敷の南側を画する溝で、石敷のない南側は道路と考えられる。

この溝からは焼土に混って土師器皿128～132、瓦燈133、焼塩壺134、青花碗135・136、同皿137、瀬戸美濃焼丸皿138、同擂鉢139、唐津焼碗140・141、同皿142・143、同大皿144～146、同徳利147・148が出土した(図191)。

f．徳川期の遺構と遺物

OS93－47次調査

大坂夏ノ陣の焼土層である第6層上面では顕著な遺構は検出されず、第5層上面で礎石建物・溝・土壙・竈などの遺構を検出した

(図192)。

SB501　Ｃ地区で検出した梁行３間(3.0m)、桁行５間(4.5m)の総柱の礎石建物である。建物の方向はN4°Eである。これ以外にも調査地内で礎石列**SA501～503**を検出したが、これらも建物になる可能性がある。

SD501　Ａ・Ｂ地区の東側で検出した溝で、幅１ｍ前後、深さ0.2mある。方向はN4°Eである。この溝の東側は版築状に整地されており、道路であったと思われる。

SD502　Ｃ地区で検出された溝で、肩部に石が並ぶ。Ｂ地区の延長上にも石が並ぶことから一連のものであったと思われる。方向はE7°Sである。敷地の中央を通ることから、敷地境の溝であったと思われる。

SK501　Ａ地区の北東部で検出した土壙で、スラッグが多量に出土した。

SK502　Ｂ地区の中央で検出した土壙で、ベトナム陶器壺**149**が出土した(図194)。

SX501　Ｃ地区の南側で検出した竈で、瓦を利用して作られている。

当層およびその上面で検出された遺構からは瀬戸美濃焼・唐津焼に加え、初期の肥前磁器が出土していることから、遺構面の時期は17世紀前半に該当すると思われる。また、徳川期の遺構については敷地境の溝と思われる**SD501**がN7°Eである以外は、方向はいずれもN4°Eである。豊臣後期のN7°Eの方向から変化していることがわかる。

なお、第１層より上位から掘られた土壙からイギリス陶器**150**が出土しており、すでに[豆谷1995]で紹介されている(図194、図版47下)。1818～46年にかけて操業されていたスタッフォードシャー

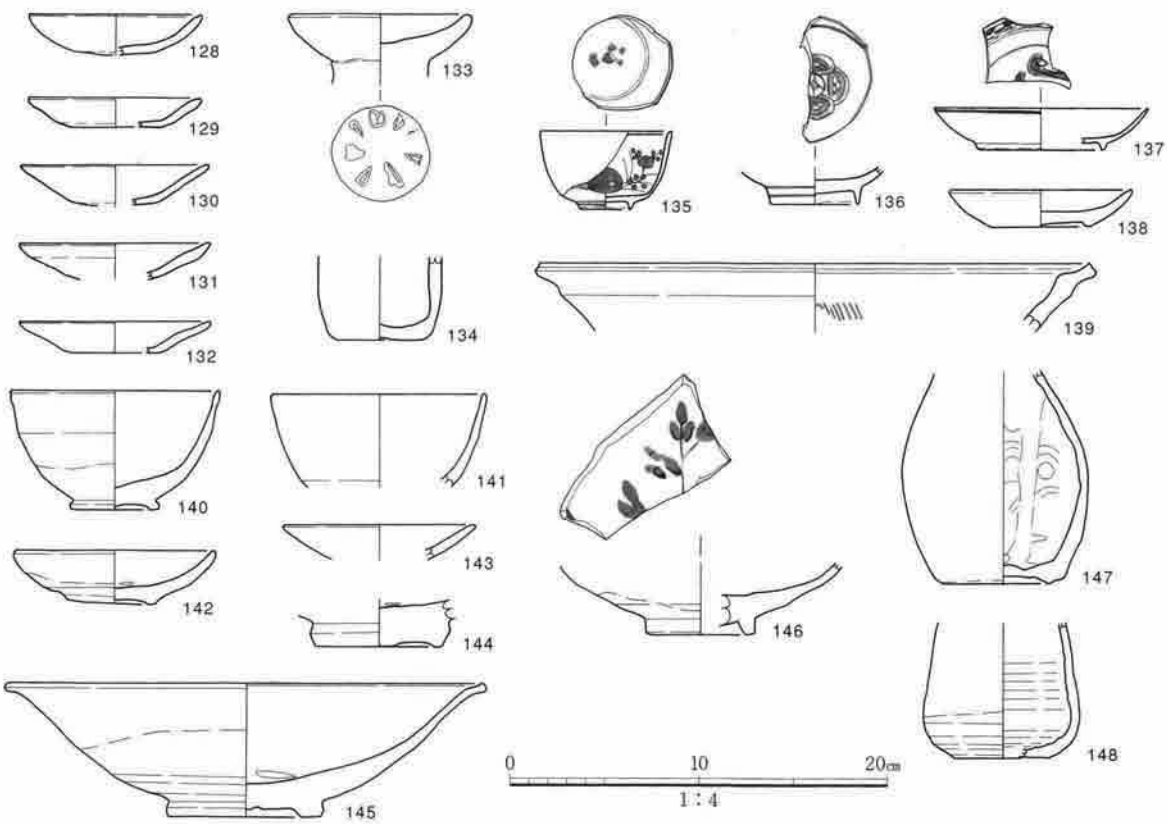


図191　OS90－15次SD702出土遺物

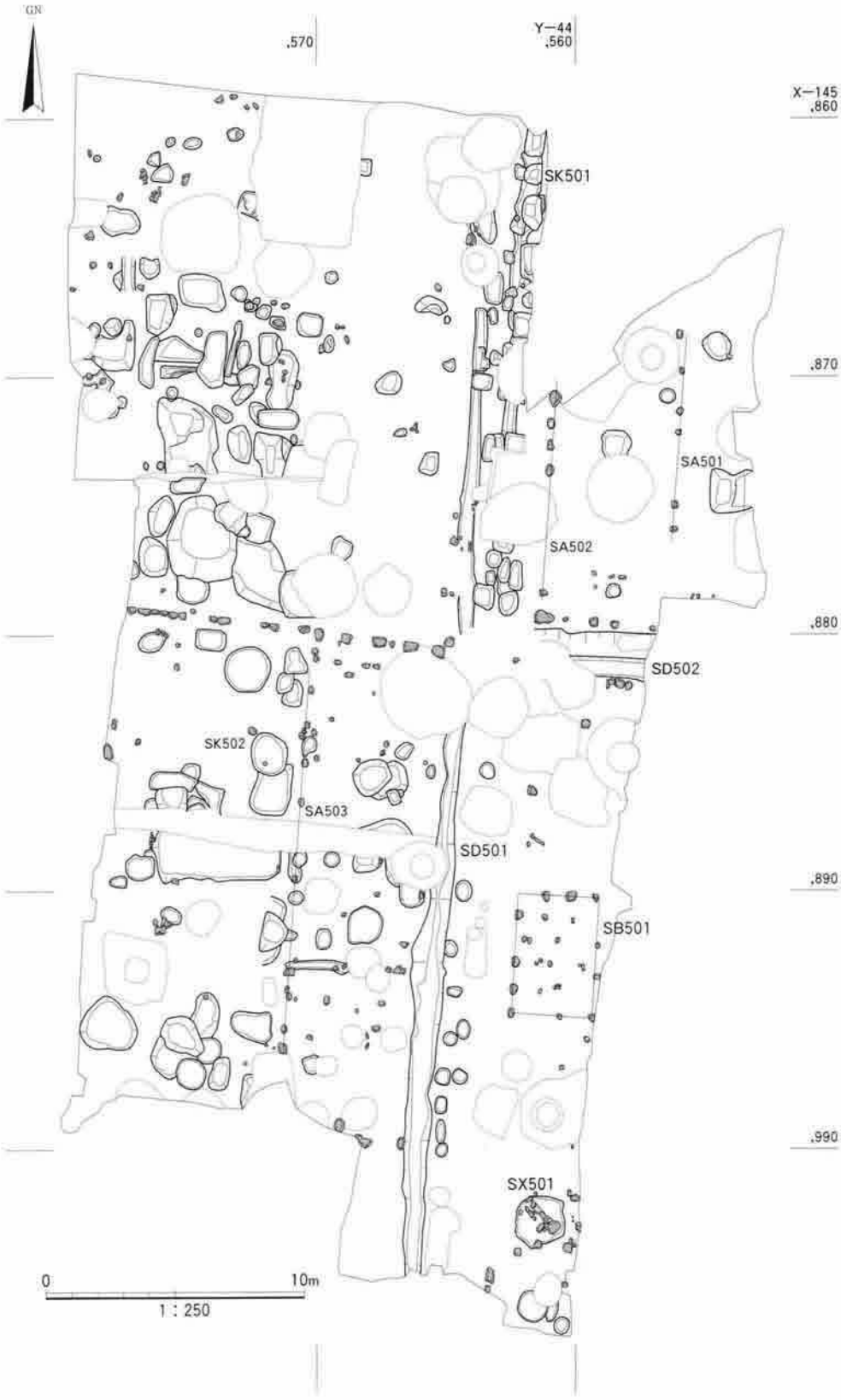


図192　OS93－47次第５層上面遺構配置図

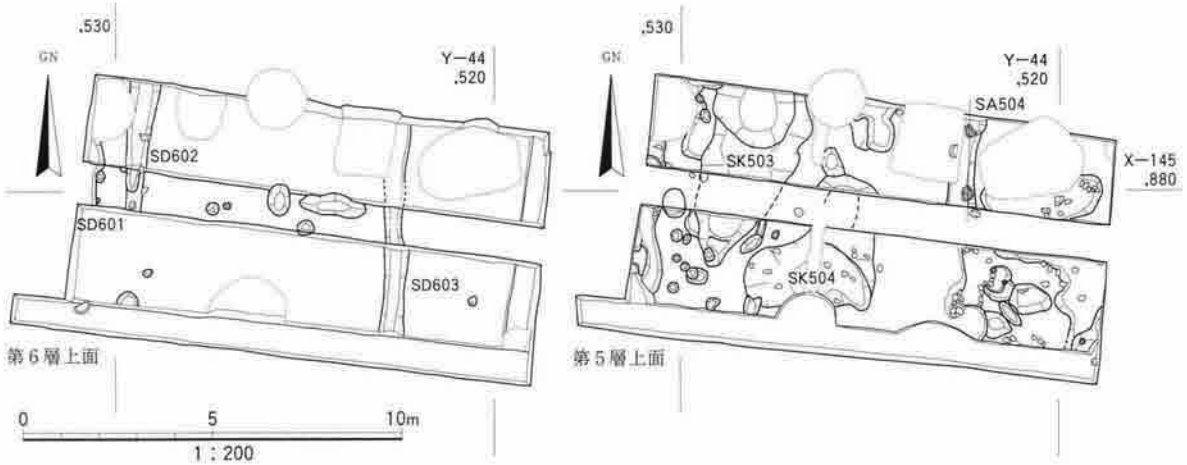


図193　OS92－16次第6・5層上面遺構配置図

の“Enoch Wood & Sons”窯で焼かれ、1850年頃にもたらされたものと推定されている。

OS92－16次調査

第6層上面で溝SD601～603を検出した(図193左)。幅0.5～0.6m、深さ0.15mある。SD603はほぼ正方位であった。

また、第5層上面に相当すると思われる検出面では礎石列SA504と土壙を検出した(図193右)。SA504は礎石を2基しか検出していないことから、建物になる可能性も残す。SK504からはマジョリカ陶アルバレッロの口縁部の破片151が、17世紀中頃の青花152、土師器羽釜153、瓦質土器火鉢154、「壺塩？」と墨書された焼塩壺155とともに出土した(図194)。また、SK503からは荷札木簡が出土したが、残存状況が悪いため記述内容はよくわからない[鳥居信子・豆谷浩之1993]。

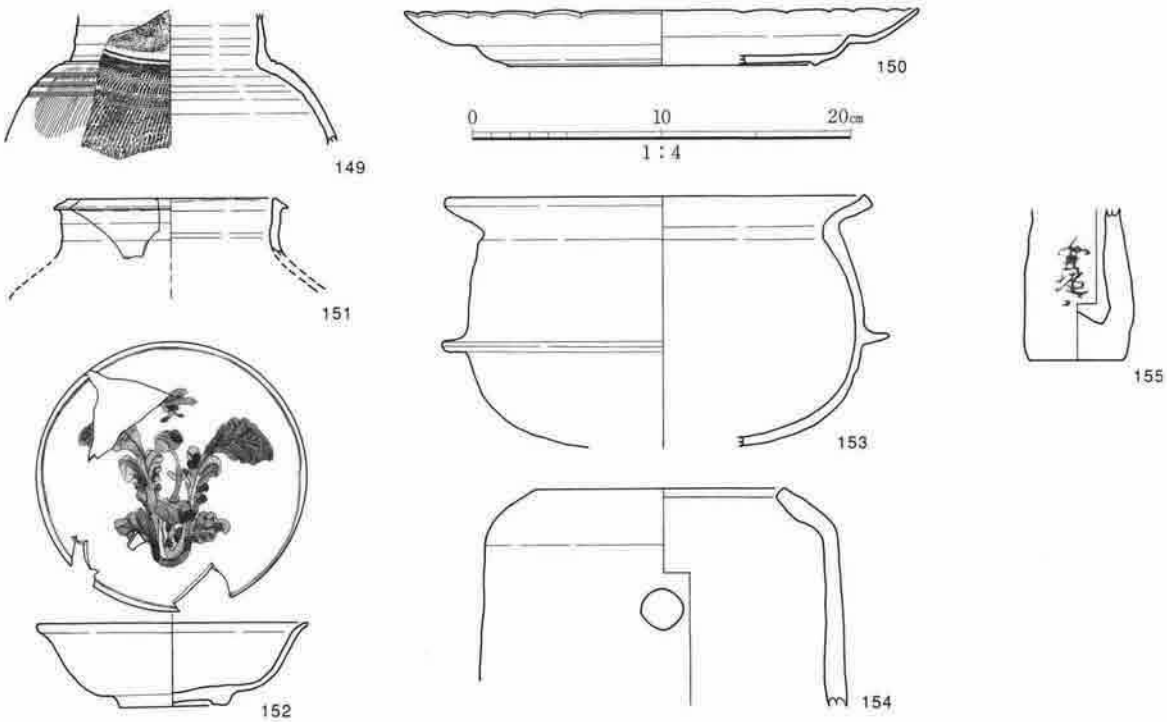


図194　OS93－47次および92－16次徳川期出土遺物
OS93－47次SK502・第1層(149・150)、OS92－16次SK504(151～155)

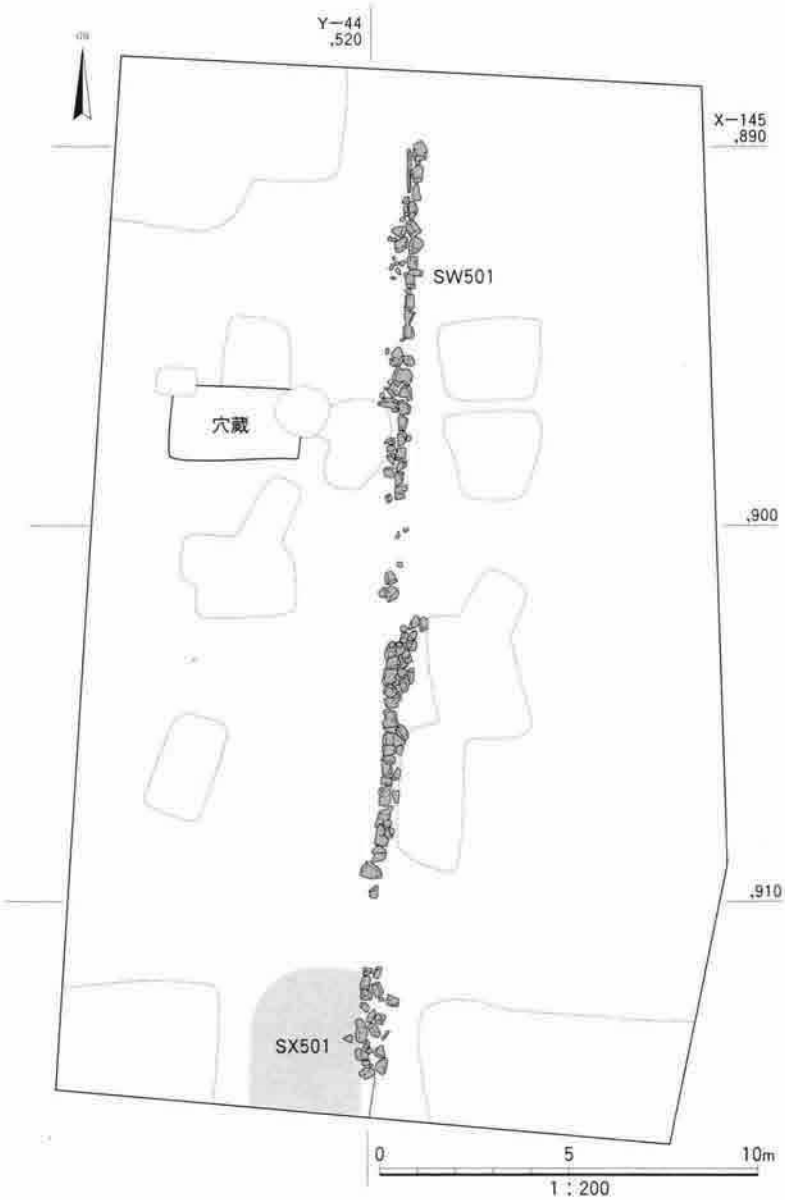


図195　OS90−15次第５層上面遺構配置図

OS90−15次調査

第５層上面で南北方向の石列と銅滓が廃棄された跡を検出した(図195、図版25下)。

SW501　西側の面を揃えて配された石列で、N4°Eの方向に並ぶ。石列をはさんで西側の面が0.3mほど低くなる。

SX501　調査地の南端で検出した、銅滓が廃棄された範囲をSX501とする。石列の西側に分布し、東側では検出されなかった。この銅滓については、OS92−19次調査地(本章第７節)で出土したゆりかすとともに、OS90−142次調査地(本章第８節)で検出された銅精錬遺構との関連が考えられる。

なお、図195で示した穴蔵は18世紀のものである。

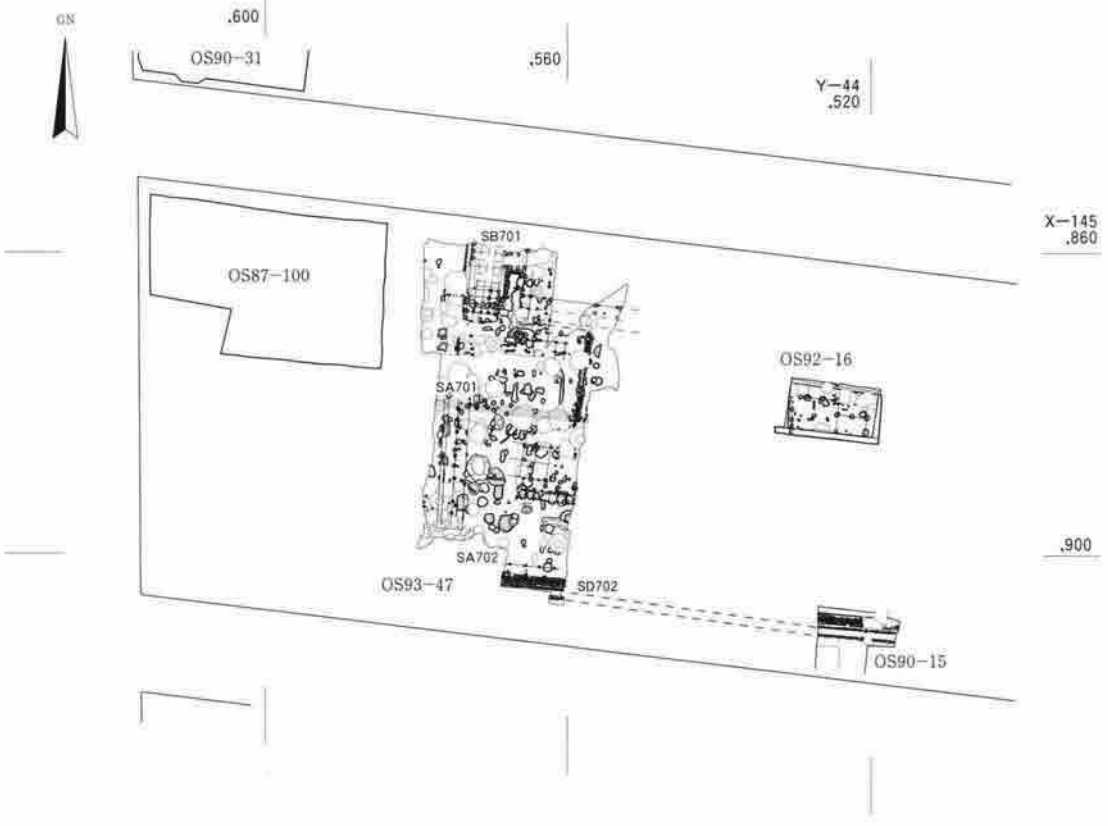
３)まとめ

OS93−47次調査地では円筒埴輪や形象埴輪が大量に出土した。また、調査地内でも南西に偏った部分で集中して出土していることから、古墳自体が当地かもしくはきわめて近隣に存在したことを示唆する。また、中世の遺構が集中して検出されたことも特筆される。本調査地を含む周辺では井戸が多く検出されており、遺物には13〜14世紀代の輸入陶磁器が多くある。当地は中世大坂の交易の拠点として機能していたことがわかる。

大坂本願寺期〜豊臣前期ではSM1101やSM901を検出した。興味深いのはこの堀の方向で、ともにE7°Sの方向に延びる。後述する三ノ丸造成以後にN７〜８°Eと統一された方向で建物や溝が造られ、惣構北西部の街区が同じ方向で整えられるが、その前段階から同じような方向の遺構がある点は、街区の原型を考える上の材料となろう。

また、惣構および三ノ丸造成時の整地層を検出した。しかし、建物などが本格的に展開するのは三ノ丸造成時以後である。検出された遺構のほとんどの方向がN７〜８°Eであるが、唯一SA701のみがN4°Eであり、別の方位を取る。しかし、SA701の礎石や石列の石にも赤変しているものがあること

豊臣後期（第７層上面・第６層基底面）



徳川初期（第５層上面）

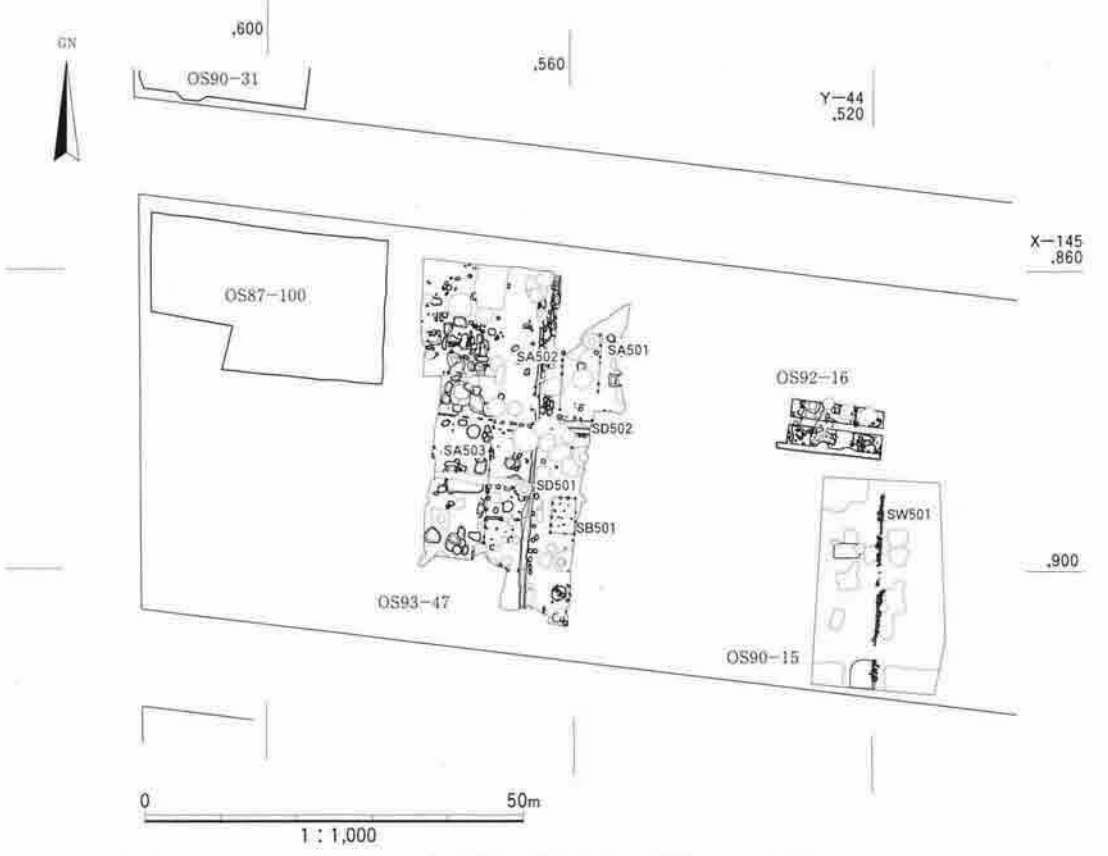


図196　豊臣後期・徳川初期の遺構配置図比較

から、ほかの遺構と同様に大坂夏ノ陣で被災しており、異なる方向のものが並存したことになる。

調査地は南側と北側で現在の道路に面しており、道路の方向は東側で南に約7°振っている(図196)。この方向は調査地で検出された建物や塀、溝の方向と一致する。敷地を南北に二分する線を図187に引くと、ちょうどその付近に検出されたSD701の南端、SA701の北端がくる。夏ノ陣後の攪乱もあり、SD701・SA701は正確な形状を留めていないであろうが、これらの南端・北端は敷地の境を示すものではなかろうか。そうなれば、1つだけ方向が異なったSA701も南側の敷地に収まることになり、南北の敷地にわたるものではないということが考えられる。

徳川期では柵や礎石建物などが検出されている。これらはN4°Eの方向である。時代が下るにしたがって正方位に近づいていることがうかがえる。

(寺井)

註)

(1)本調査出土の靭形埴輪は背後の円筒部の直径が20cm程度になり、直径が30cm程度と推定される京都府宇治市の庵寺山古墳出土の靭形埴輪[高橋克寿1988]の2／3の大きさになる。庵寺山古墳のものとほぼ同規模の萱振1号墳[大阪府教育委員会1992]や宮山古墳[奈良県教育委員会1959]の靭形埴輪が高さ150cm前後になり、背後の円筒部の直径が全体の大きさに比例すると仮定して、図172の右上のような高さ100cmになる靭形埴輪の復元図を作成し、各部位の推定位置を配置した。なお、靭形埴輪の用語については[櫻井久之2002]の図1に従い、今回の破片の中には飾板台状部の小円盤や紐状突帯と認定できる部位がなかったので、復元図には表現していない。

第10節　OS87－100次および90－31次調査

1）調査地と周辺の概要

両調査地は豊臣氏大坂城惣構の西外郭である東横堀川に面し、平野橋より続く道路を挟んで向い合う位置にある（図197）。慶長年間の図を模すと記載のある宝暦２（1752）年発行の『摂州大坂旧地図』および宝暦７（1757）年発行の『大坂内町図』によれば、調査地にはそれぞれ「石田治部家来奉行屋敷」、「石田旧屋敷」と記載されている。また、この屋敷の存在によって平野橋からまっすぐ東に抜けることができなくなっている。両図にどれほどの信憑性があるかは不明であるが、大坂城にとって重要な地点であったことは疑いえない。

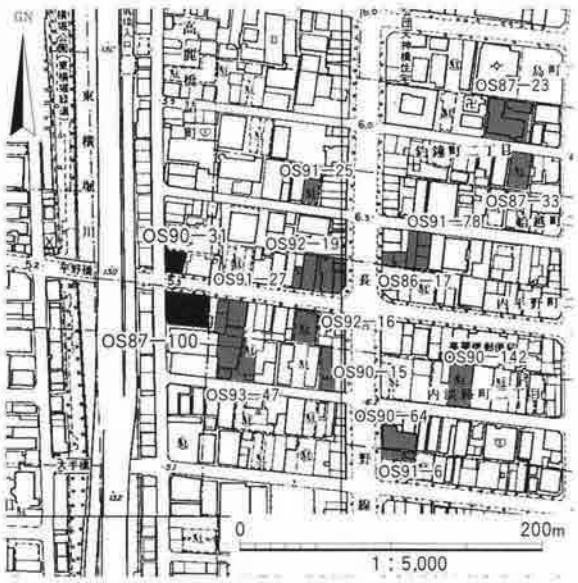


図197　OS87－100次および90－31次調査地位置図

南に位置するOS87－100次調査では試掘調査によって地表下1.35～1.50mにて夏ノ陣の焼土層が確認されたことから、焼土層から地表下４mまでの調査を実施することとなった。ところが、調査開始時にはすでに地表下２mまで掘削が行われていたため、不本意にも実際にはこの深度からの調査となった。掘削は人力と重機とを併用し、層位ごとに遺構の検出を行うよう心がけたが、下位では時間的な制約から不十分な調査とならざるを得なかった。

北に位置するOS90－31次調査は地表下1.5mまで重機により掘削したのちに調査を開始した。以下の掘削は人力と重機を併用した。また、工事敷の関係から西側では地表下3.85mまでの掘削にとどめた。

2）調査の結果

ｉ）層序（図198、図版28上）

おもにOS87－100次調査で得られた知見を基にして作成した層序模式図が図198である。

第１層　徳川氏による大坂城再建後、現代までの地層で、層厚は130～250cmある。第1a・b層に細分できる。第1b層は徳川氏による城下町再建時の整地層と思われるが、厚さは不明である。

第２層　大坂夏ノ陣に伴う焼土層である。

第３層　黒灰色砂礫質シルトで、層厚は10cm程度である。豊臣後期に位置づけられる。

第４層　黄白色砂礫などからなる整地層で、層厚は50cm程度である。三ノ丸造成に伴う整地層と考えられる。

第５層　黒灰～暗灰褐色砂礫質シルトで、層厚は15cm程度である。豊臣前期に相当する。

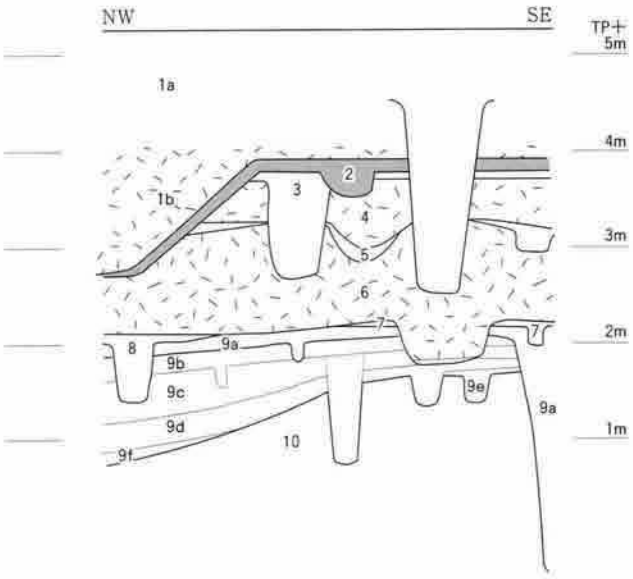


図198　OS87－100次層序模式図

第６層　黄白色砂礫・灰白色粘土などからなる整地層で、層厚は100～170cmである。OS87－100次調査では西から土を盛っていることが確認できた。豊臣前期の惣構造成に伴う整地層と考えられる。

第７層　暗灰色砂礫質シルトで、OS90－31次調査では東側を中心に層厚30cmが遺存し、複数の遺構面がある。OS87－100次調査では、遺構埋土としてのほかはごく薄く遺存するのみである。豊臣前期に相当する。

第８層　淡灰～灰白色粘土層で、OS87－100次調査地の北西部にのみ遺存する。第７層と上下関係が不明のため、逆転する可能性がある。

第９層　灰～黒色を呈する砂礫質シルトからなり、さらに細分できる。OS87－100次調査では第9a～9fの６層に細分した。層位ごとに掘削することはできなかったが、層厚は東端で約50cm、西北端で1.5mある。第9a層は16世紀、第9b・ｃ層は15世紀、第9d～ｆ層は７～14世紀に相当する。

第10層　砂礫の薄層からなる水成層で層厚は100cm以上ある。

ii)遺構と遺物

ａ．大坂本願寺期以前の遺構と遺物

OS87－100次調査

第9b～9f層基底面検出遺構

当調査地では第9b～9f層を一括して掘削し、その基底面で遺構検出を行った。その結果、溝・土壙・柱穴・井戸を検出した(図199)。出土遺物によって以下のように時期を区分して報告する。井戸については図200で断面を示し、表11で形状をまとめた。

９世紀の遺構には井戸**SE902・907**および多数の柱穴・土壙がある。柱穴には７～８世紀にさかのぼるものがあるかもしれないが、時期決定が可能なものはなかった。

SE902　調査地の北東部で検出した。検出面からの深さが0.9mで、底に曲物の痕跡と思われる円形の窪みがある。ここから出土した土師器杯1は口径14.0cm、器高3.8cm、器壁の厚さは0.5cm前後と法量の割には厚い(図201)。外面はユビオサエののち、ナデが施され、口縁部はヨコナデで仕上げられる。

SE907　調査地中央で検出した。上端の直径が1.1mある素掘りの井戸である。

10～11世紀の遺構には井戸**SE914・916**、土壙**SK904**のほか、柱穴がある。井戸はいずれも曲物を使用している。

SE914(図版28中)　調査地の北西で検出した井戸である。曲物を２段重ねて井戸側に用いている。

SE916　調査区の南端で検出した井戸である。土師器小皿8・黒色土器椀9が出土した(図201)。8

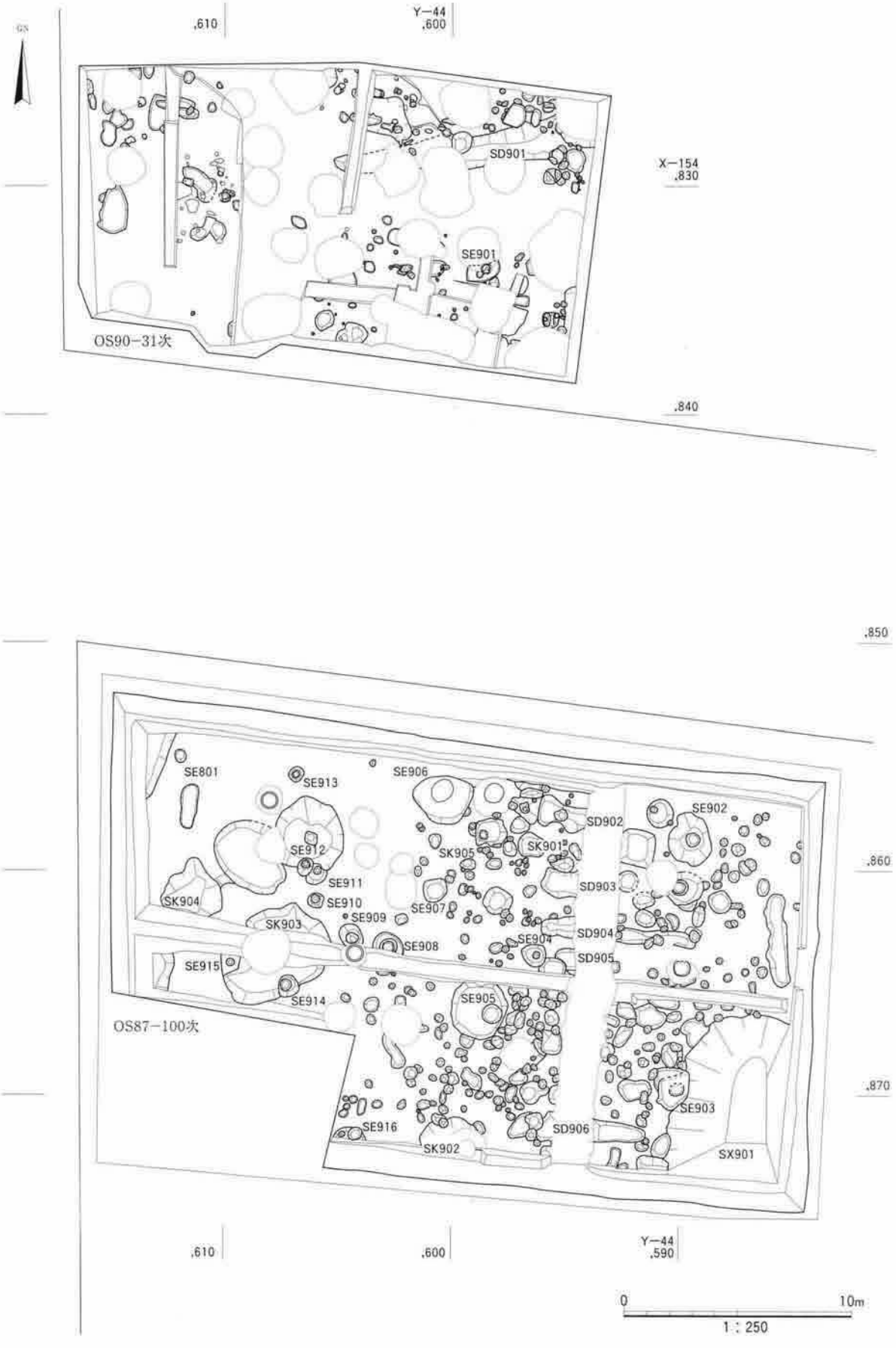


図199　OS87－100および90－31次大坂本願寺期以前の遺構配置図

は「て」字状口縁である。9は黒色土器A類で、内面は密にヘラミガキが施される。これらの遺物は11世紀初頭頃のものと思われる。

12世紀の遺構は井戸SE903および少量の柱穴・土壙があるにすぎない。

SE903　調査区の南東部で検出した。曲物が用いられていたようだが、詳細はわからない。土師器皿2～4、均整唐草文軒平瓦26が出土した(図201・202)。2は口径13.2cm、器高2.8cmあり、完形であった。口縁部は強く外反する。3・4はいずれも大きく歪んでいる。口縁端部は摘み上げはなく、小さな平坦面をもつ。26については後述する。

表11　古代・中世の検出井戸一覧

遺構番号	井戸側の構造	時期
SE901	羽釜6段	13世紀後半～14世紀前半
SE902	曲物？	9世紀
SE903	曲物？	12世紀
SE904	羽釜1段	13世紀後半
SE905	曲物	13世紀後半～14世紀前半
SE906	桶	15世紀
SE907	素掘り	9世紀
SE908	桶2段	15世紀
SE909	曲物？	時期不明
SE910	羽釜	13世紀後半～14世紀前半
SE911	羽釜5段	13世紀後半～14世紀前半
SE912	羽釜2段	13世紀後半～14世紀前半
SE913	曲物1段	時期不明
SE914	曲物2段	10世紀
SE915	羽釜1段	13世紀後半～14世紀前半
SE916	曲物	10世紀

13世紀前半の遺構には井戸SE904がある。ここからは完形の瓦器小椀5、同椀6・7が出土した(図201)。6・7は高台が低く、径は4cm以下である。見込みに平行線のヘラミガキが施されている。

13世紀後半～14世紀前半の遺構には井戸SE905・910～912・915、土壙SK903のほか多くの柱穴・土壙がある。

SE905　調査地中央で検出した曲物を利用したと思われる井戸である。なお、この時期のほかの井戸はすべて土師器羽釜を井戸側として使用している。

SE905からは土師器羽釜10・瓦質土器羽釜11・唐草文軒平瓦27が出土した(図201・202)。10は復元口径が39.0cmあり、外面にススが付着している。11は口径は17.2cm

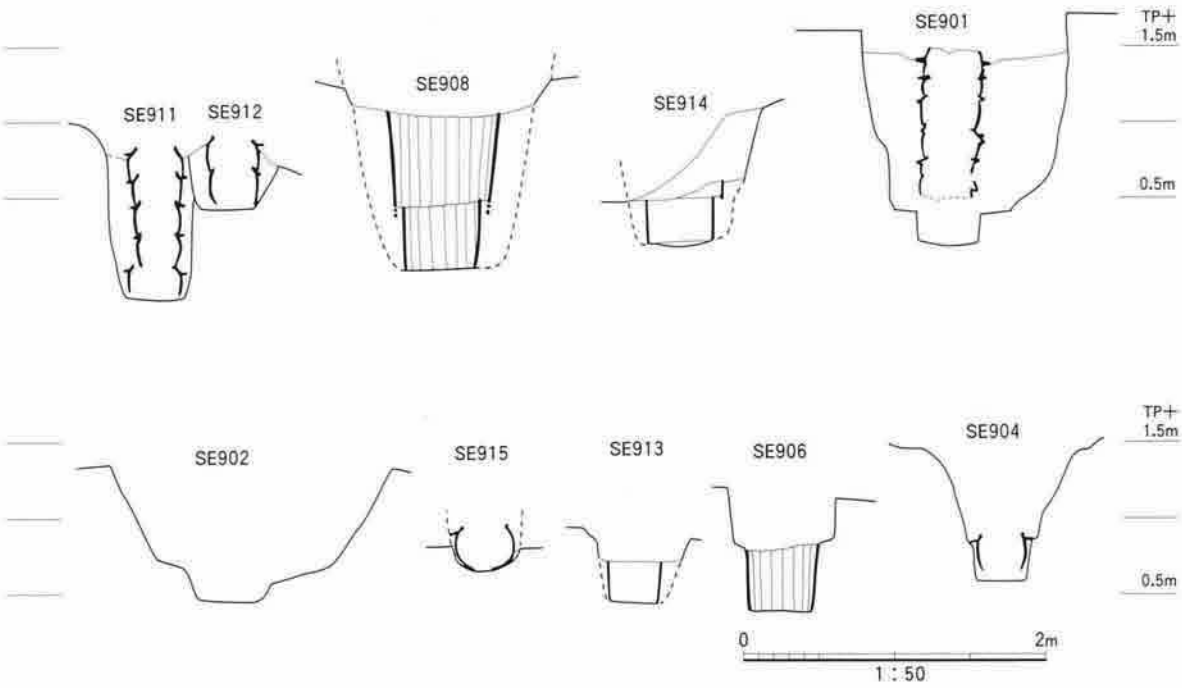


図200　OS87－100および90－31次井戸断面図

あり、鍔が小さい。27については後述する。

15世紀の遺構には井戸SE906・908、溝SD902～906、土壙SK901のほか少数の柱穴・土壙がある。

SE906　調査地北部中央にある。桶を利用した井戸である。土師器小皿12・常滑焼甕13・滑石製石鍋14が出土した(図201)。13は13世紀後半頃に位置づけられるが[中野晴久1995]、12は15世紀初頭頃のものである。

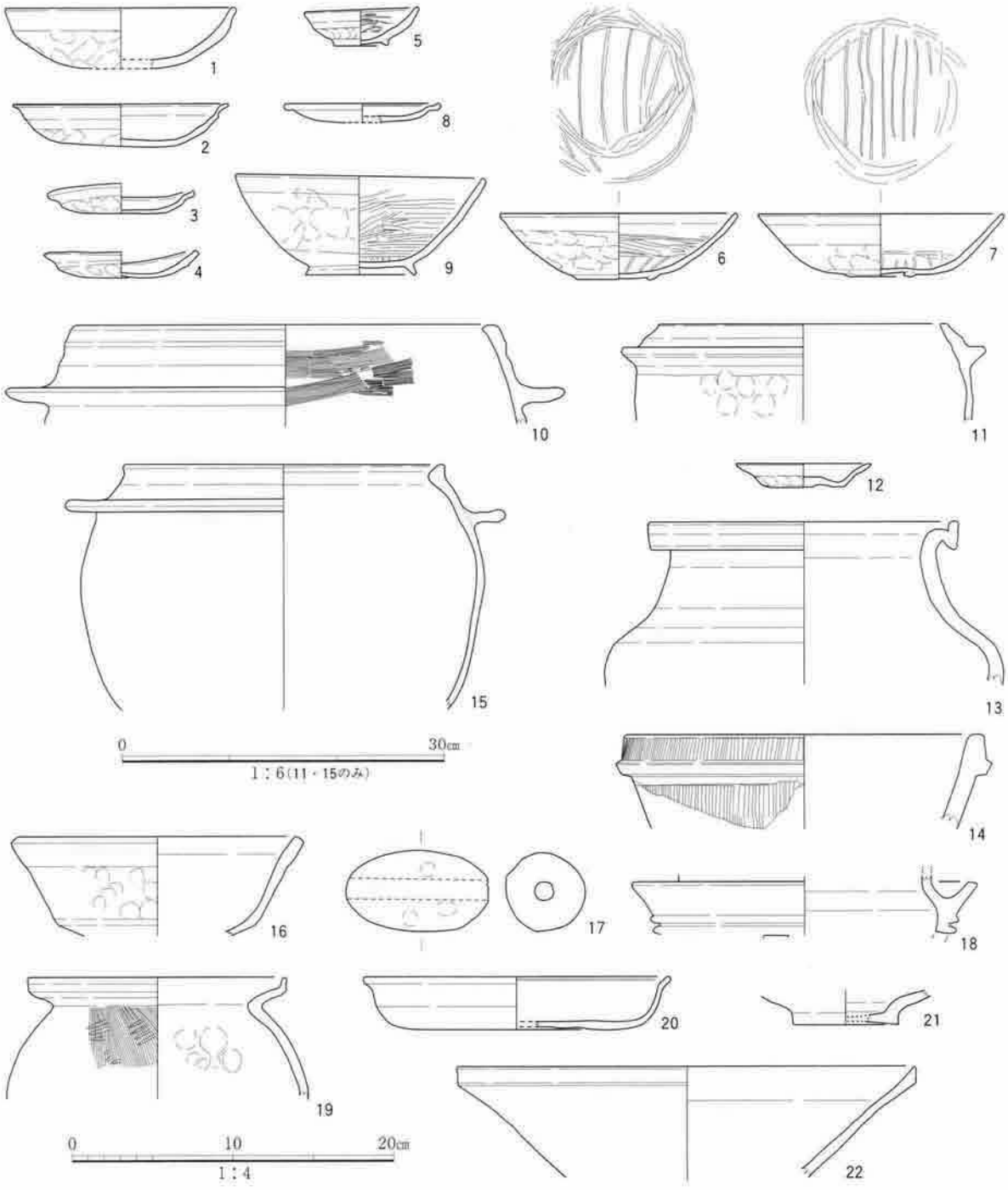


図201　OS87－100次中世以前の出土遺物

SE902(1)、SE903(2～4)、SE904(5～7)、SE905(10・11)、SE906(12～14)、SE916(8・9)、SD902(15)、SK901(16・17)、SK901(18)、第9層一括(19・20)、第9c層(21・22)

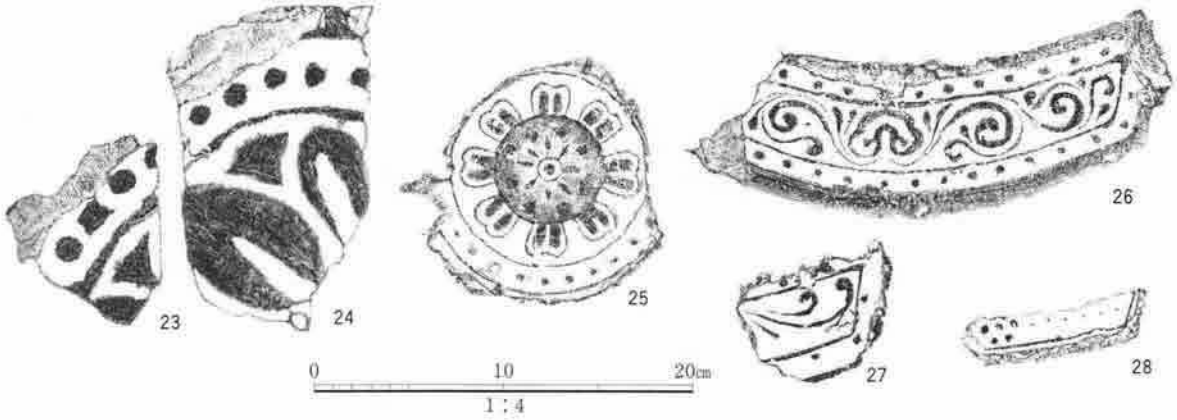


図202　OS87－100次出土瓦
第９層(23・24・28)、SX901(25)、SE903(26)、SE905(27)

SE908　調査地中央で検出した。井戸側に桶を使用した井戸である。また、井戸からは子供の頭ほどの大きさの石が多数出土した。

このほか15世紀の遺構で**SD902**からは土師器羽釜**15**、**SK901**からは瓦質土器鉢**16**・土錘**17**が出土した(図201)。さらに時期不明の土壙**SK905**から古代に属する須恵器硯**18**、第９層を一括して掘削した際に、畿内第Ⅴ様式の弥生土器甕**19**、土師器皿Ａ**20**、第9c層からは土師器**21**・須恵器捏鉢**22**が出土した(図201)。

また、本調査地では蓮華文鬼瓦**23**・**24**、複弁八葉蓮華文軒丸瓦**25**、唐草文軒平瓦**26**・**27**といった古代の瓦があり、これらについては[宮本佐知子・佐藤隆1996]や[宮本佐知子1999]で紹介されている(図202、図版47上)。**23**・**24**は大小の蓮弁を交互に配し、その外側には圏線と大振りの珠文を巡らしている大型の鬼瓦である。このように蓮華文で飾る鬼瓦は奈良時代には例がなく、それ以前の時期に位置づけられる[山本忠尚1998]。**25**は低く平らな中房に１＋８の低い蓮子を配している。中央の蓮子の周囲に細い圏線が巡り、圏線から外へ放射状に線が８本出ている。珠文の内外は細い界線で区画している。四天王寺で同文のものが出土している。**26**は中心に雲文を飾り、３回転の唐草を配している。中心を強調するために中央は大きく、端は小さく表現している。同笵のものがOS92－６次やOS86－35次(第Ⅳ章第２節)で出土しており、奈良時代末から平安時代初頭頃の播磨系の瓦と思われる。**27**は端近くの破片で、唐草の先端は丸く終わっている。**28**は第９層から出土した梅文軒平瓦で、時期は不明である。



写真21　OS87－100次SX901出土鬼瓦

第9a層内検出遺構(図199)

第9a層除去後に遺構を検出した。第9a層が堆積する過程で形成された遺構と考えられる。堀状の遺構**SX901**のほか少数の土壙・柱穴がある。

SX901　調査地の南東隅で一部を検出したにすぎないが、幅５ｍ以上、深さ２ｍ以上ある。湧水層に達しており滞水していたと考えられる。人為的に埋戻されており、瓦を主体とする遺物が東部を中心に出土し

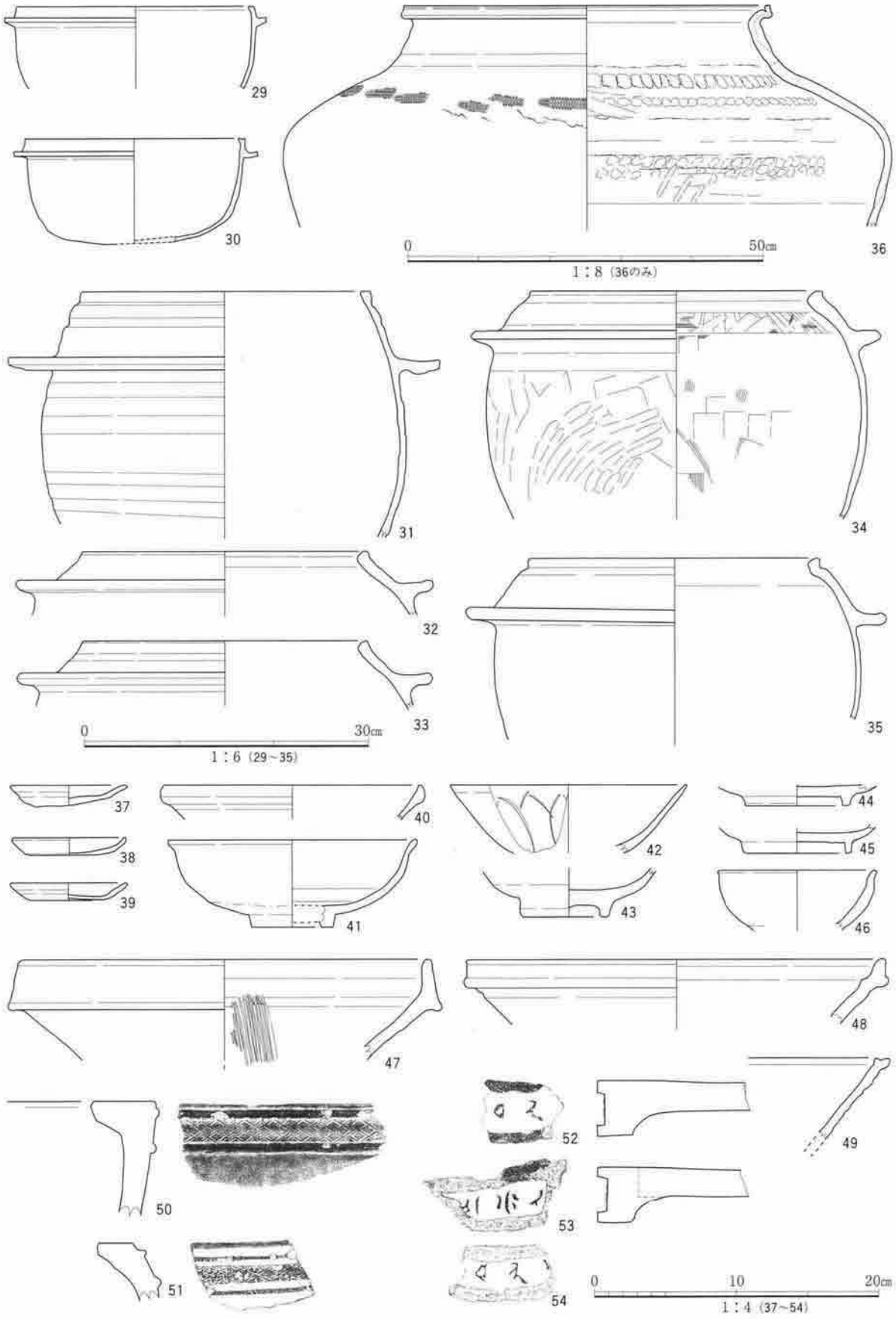


図203　OS90－31次出土遺物

SE901(29～37・42)、SD901(38～41・43～53)、第9層(54)

た。出土遺物には16世紀前～中葉の陶磁器のほか一石五輪塔がある。瓦には平安～室町時代の軒瓦や鬼瓦(写真21)があり、調査地の東側に瓦を用いた建物があったと推定できる。

第9a層上面遺構(図199)

OS87－100次調査でのみ確認した。第9a層上面では第８層を埋土とする井戸SE801を検出した。

SE801　調査地の北西隅で検出した。桶を井戸側とする。出土遺物はなく時期は不明である。層序で記したように第８層と第７層は逆転する可能性もあり、そうすると豊臣前期に下るといえる。

OS90－31次調査

ここでは井戸SE901、溝状遺構SD901を検出した(図199)。

SE901(図版28下)　井戸側として瓦質羽釜31および土師器羽釜34・35などの底を抜いて６段に重ねた井戸で、最上部で常滑焼甕36が出土した(図203)。最下部では曲物の痕跡が残っていた。出土遺物にはほかに土師器皿37、同羽釜32・33、青磁碗42、瓦質土器羽釜29・30がある。

42は外面に鎬蓮弁文が刻まれる龍泉窯の青磁である。29・30は口縁部および鍔が短く、口径に対して器高が低い。精良な粘土が用いられる。34は体部外面にケズリのあとナデが施され、内面はハケメのあとナデで仕上げられる。36は口径51.2cm、体部最大径85.6cmある。口縁部断面がN字状を呈し、肩の接合痕の上に押印文が施される。[中野1995]の6a型式に相当し、13世紀第３四半期のものと思われる。以上の遺物から判断して、SE901の時期は13世紀後半から14世紀初頭頃に位置づけられる。

SD901　調査地北東部で検出した。幅1.5m、深さ0.2mの東西方向の溝である。形がはっきりせず、西側には続かない。出土遺物には土師器皿38・39、白磁碗40・41、青磁碗43、同皿44・45、瀬戸美濃焼天目碗46、備前焼擂鉢47、東播系須恵器鉢48、古瀬戸灰釉深皿49、瓦質土器火鉢50・51、梵字文軒平瓦52・53がある(図203)。41は高台とその周囲が露胎で、口縁端部は少し反る。49は口縁端部が折れ曲がり、３つの短い脚がつく形態になると思われる。50・51は３つの脚がつく奈良火鉢で、50には菱形のスタンプ文が施される。52・53はOS92－19次やOS93－47次調査地で見つかっているものと同笵関係にあると考えられている[宮本佐知子1999]。54は第９層出土であるが、一連のものである。以上の遺物は15世紀前半頃に位置づけられる。

ｂ．豊臣前期(惣構普請以前)の遺構と遺物

OS87－100次調査

７層内において溝SD704を検出した(図204)。

SD704　幅2.6m、深さ0.6mあり、N6°Eの方向に直線的に延びる。断面で溝の東には幅2.0m、高さ0.4mの盛土をしているのを確認した。埋土は第６層で、掘削後まもなく埋められたようである。

OS90－31次調査

第７層内で用途不明の遺構や柵もしくは塀を検出した(図204)。

SX701　東西6.5m以上、南北２mほどの範囲に二枚貝を砕いて敷き詰めた部分があり、これをSX701とした。湿気取りの基礎地業とすると上部に建物があった可能性がある。

SA701　礎石を使用する南北方向の柵で３石分を確認した。南側にも続いていたのであろうが、SD702や後代の攪乱によってわからない。

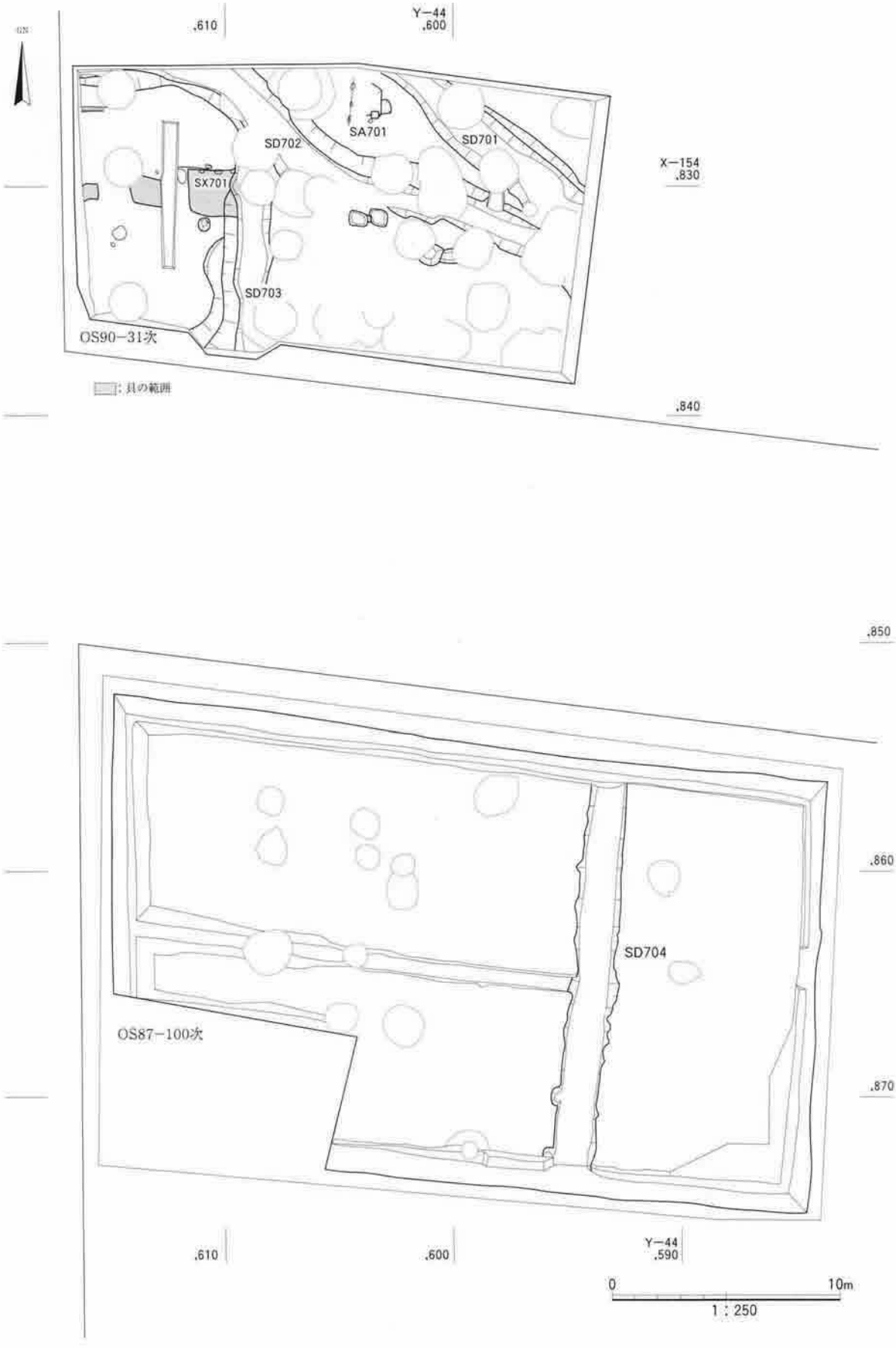


図204　OS87－100および90－31次惣構普請以前の遺構配置図

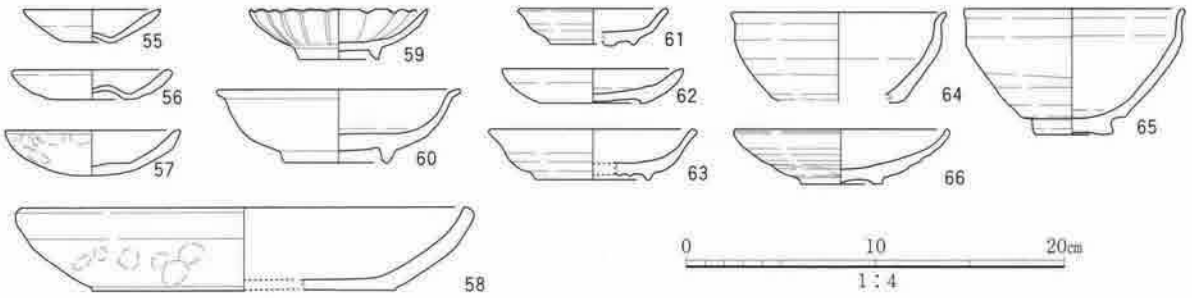


図205　OS90－31次第７層出土遺物

また、第７層上面では幅2.5m、深さ１m程度の溝SD701～703を検出した。埋土は、底部に若干の流水の痕跡が認められるほかは第６層である。

なお、これらの遺構のベースとなる第７層からは土師器皿55～57、丹波焼大平皿58、白磁皿59・60、瀬戸美濃焼丸皿61～63、天目碗64・65、唐津焼丸皿66が出土した(図205)。66は藁灰釉で、唐津焼の初期のものと思われるが、第７層上面の検出時に出土しているため上位の層に含まれる可能性を残す。

ｃ．豊臣前期(惣構普請後)の遺構

OS87－100次調査地では調査開始時にはほぼ第５層まで掘削されており、一部に上層が遺存していたにすぎない。第６層上面にて遺構の検出を行ったため、第５層以上の遺構が混在する。豊臣前・後期のほか、江戸時代以降の遺構も同一面での検出となった。とくに豊臣前期の遺物が少なく各時期と遺構面とを対応させるのが困難ではあるが、第５・６層上面が豊臣前期、第３・４層上面が豊臣後期になると思われる。

第５・６層上面で検出した豊臣前期の遺構には柵SA501、溝SD501～503、土壙SK501・502がある(図206)。

SA501　約１m間隔で礎石が埋め込まれた鉤形に曲る柵で、東西12.0m以上、南北7.5m以上にほぼ正方位に延びる。礎石間隔が密で、礎石も大きいことから荷重のかかる構造物であったと考えられ、築地塀などの可能性がある。SD502の埋土上方に東西方向の礎石２基が存在したが、独立した施設とは考えがたくSA501に付属する施設であろう。切合い関係からはSD502に後出する。SA501の西に位置し、直交する方位にあるSA302も豊臣前期の可能性が残る。

SD502・503　SA501に北接する溝である。深さはそれぞれ0.8m、0.2mと異なるが、埋土は同じである。SA501と同様の位置にあることから、この部分が屋敷境などであった可能性がある。

SD501　断面で確認したのみであるが、南北方向の溝でSD502より後出する。

SK501　調査地北部に位置する土壙で深さ0.8mある。

ｄ．豊臣後期の遺構

OS87－100次調査

当調査地では西端を除いて削平されているため、井戸SE301～303や土壙SK301～305が残っているにすぎない(図206)。さらに西には平坦面が存在し、石列が一部残っていた。斜面の高い部分には南北方向の掘立柱柵SA302がある。

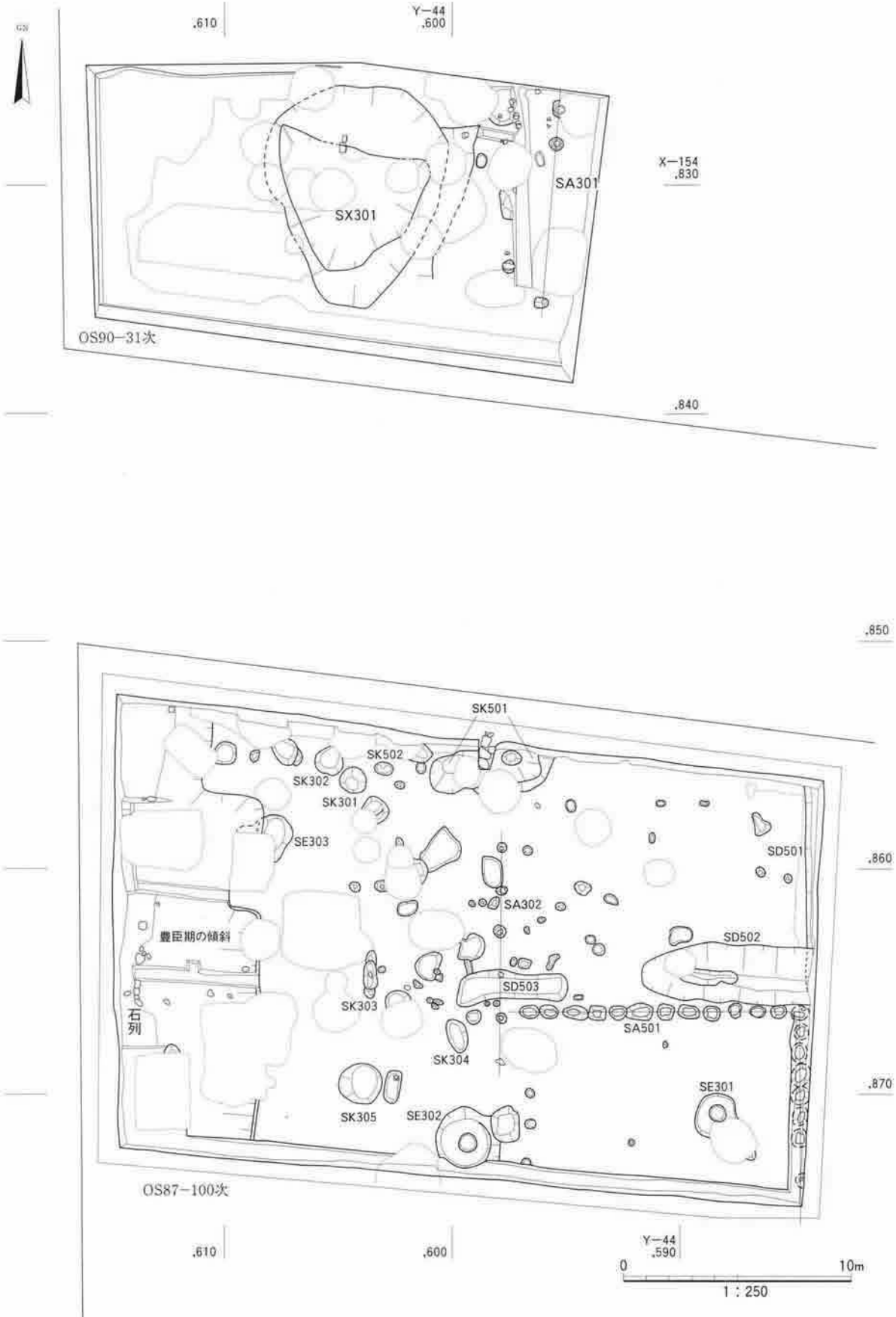


図206　OS87−100および90−31次惣構普請以後の遺構配置図

SA302　花崗岩の根石をもつ正方位の掘立柱柵で、柱間隔は約1.5mである。

SE301・302　上部が瓦組、下部が桶組の井戸である。SE301は完掘され、検出面からの深さは3.5mであった。

SE303　下部で桶組を確認できた井戸である。

SK305　深さ0.8mあり、焼土を埋土とする。

OS90－31次調査

当調査地では焼土層である第2層の下面が西に低くなる傾斜面を呈し、東側の高い部分で柵SA301を、中央部で窪みSX301を検出した(図206)。

SX301　長径10m、深さ1m程度の大きな窪みである。東側の高所より投棄された状況で焼瓦類が出土した。大坂夏ノ陣後の片づけによるものと思われる。

SA301　調査区東側で検出した掘立柱柵である。根石をもち、柱間隔は1.5mである。方位はN5°Eである。

3)まとめ

今回の調査地では古代から近世にいたるまで多数の遺構・遺物を検出した。古代から中世には建物はないが、井戸が多いことからこの地が集落であったことがわかる。

豊臣後期の遺構は削平のため顕著でないが、前期の遺構面にさらに盛土を行って整地していたと思われる。この整地は1598年の三ノ丸築造に伴うものであろう。OS87－100次調査地の西部に見られる斜面は傾斜地を雛壇状に造成した結果と推定できる。ただ、傾斜は緩やかなものであることから、屋敷境となるようなものではなく、同一の屋敷内における傾斜と思われる。「石田旧屋敷」の証拠となるものはなかったものの、調査地には広い屋敷地があったことは想定できよう。建物が建ち並ぶとすればより東側であると推定できよう。

(平田・寺井)

第Ⅳ章　E・F地区の調査

第1節　OS90－130次および91－32次調査

1）調査地と周辺の概要

本節では、大手通に北面するOS90－130次およびOS91－32次調査について報告する(図207)。

OS90－130次調査は、試掘調査によって古代から近世と考えられる地層が遺存していたため調査を実施することとなった。調査に先立ち現代盛土層のみを重機により除去する予定であったが、調査開始時には試掘調査で認められた近世堆積層もすでに失われていた。調査地は江戸時代後半から明治時代の瓦溜や建物の基礎による攪乱などによって半分以上が破壊されていたが、古代から近世の遺構を検出することができた。

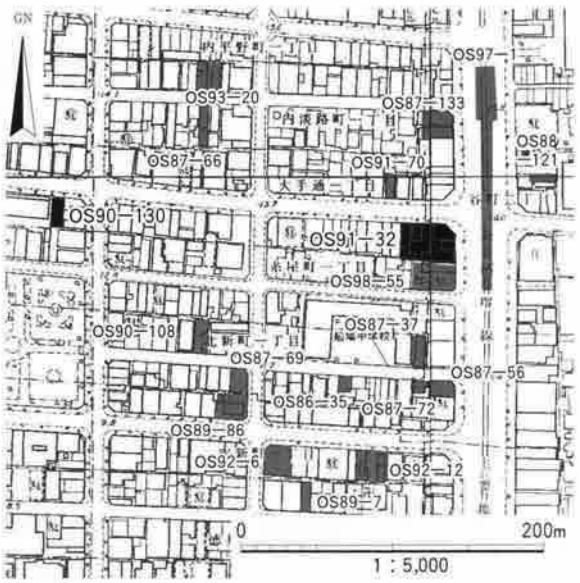


図207　OS90－130次および91－32次調査地位置図

OS91－32次調査は1990年9月13日に試掘調査を行ったところ、豊臣期以前の層準が確認されたことから全域で調査を実施することとなった。後述の第1層まで重機により除去し、以下は人力による掘削で進めた。

調査が進むにつれて、奈良時代以前の建物を中心とする遺構群が検出され始めた。10月19日には現地説明会を開催し、多くの参加者を得た。10月21日に現地での作業を終えた。

2）調査の結果

ⅰ）層序

旧地形から見ると両調査地の間にはOS90－51次(第Ⅲ章第3節)で検出された谷地形と、OS97－1次[大阪市文化財協会1999a]やOS87－133次(第Ⅲ章第4節)で検出された谷地形が合流する地点が存在すると思われる。両調査地ともこれらの谷地形に向う緩やかな傾斜面を検出している。

OS90－130次調査地では包含層が良好に残っていなかったため、OS91－32次調査地の観察結果を基に層序を記述する(図208)。当調査地では中央部で地山は高く検出され、東および西へと緩やかに低くなる。なお、四周に施された土留め工事のため現場における連続した断面図は作成できなかった。

第1層　近現代の整地層で、層厚は約200㎝である。

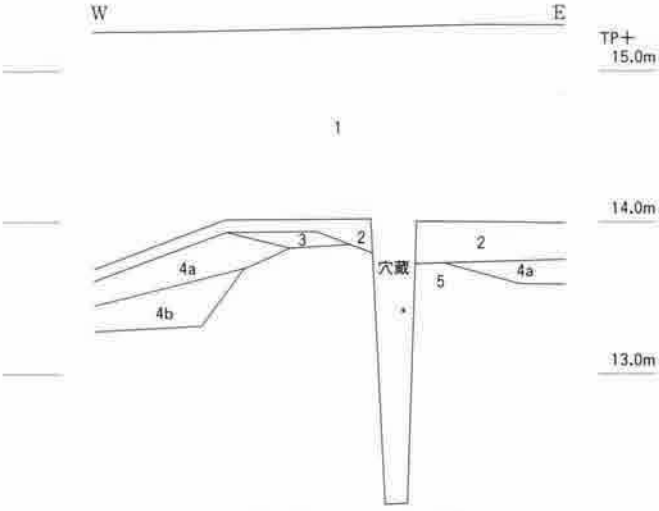


図208　OS91－32次層序模式図

第２層　砂礫を多く含む整地層で調査地東部では層厚30～40cmある。土師器・須恵器のほか、備前焼・瀬戸美濃焼・青花などを含む。これらの出土遺物は豊臣前期に位置づけられ、整地の契機は三ノ丸造成に求められる。なお、肥前磁器・唐津焼や織部など豊臣後期および江戸時代に下る遺物も出土しているが、これらは上層の遺構の見落としによる混入の可能性が高い。

第３層　調査地東部でのみ層厚10cm程度で遺存するが、第２層との区分は明瞭でない。遺物は土師器・須恵器が主体であるが、少量ながら瓦器片も含む。

第4a層　黒色粘土層で、調査地東部および西部に層厚約15cmで堆積する。奈良時代後半から平安時代の土師器・須恵器を含む。

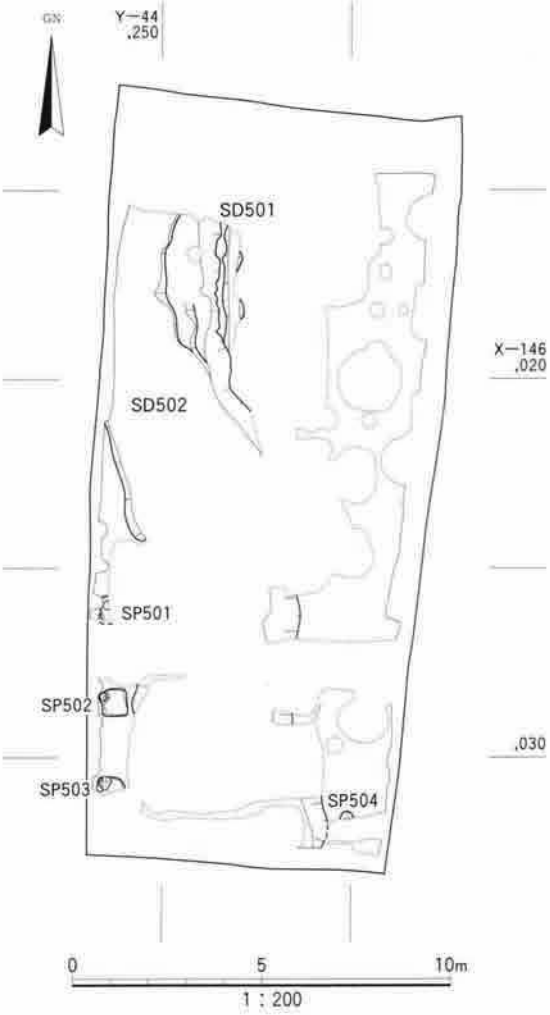


図209　OS90－130次古代の遺構配置図

第4b層　灰白色粘土層で、調査地東部および西部に遺存する。北西部では層厚が約40cmと厚く堆積する。古墳時代から奈良時代の土師器・須恵器を多く含む。

第５層　淡黄白～緑灰色砂質粘土の地山層である。

ii)遺構と遺物

ａ．古代の遺構と遺物

OS90－130次調査

第４層基底面で柱穴３基、溝２条を検出した(図209)。

SP501～503　調査地南西でほぼ正南北に３基並んで検出した。柱間距離は2.4～2.5mあり、掘立柱建物か柵を構成したものと思われる。掘形はいずれも0.7m前後の隅丸方形で、SP502・503の底部には一辺30cm程度の板石が据えられていた(写真22)。柱痕跡との関係から柱を壁沿いに立て、もう一方向を石で固定したと推定できる。遺物は出土しなかった。

SD501　方位は正南北で深さは0.15mである。部分的に確認したのみである。

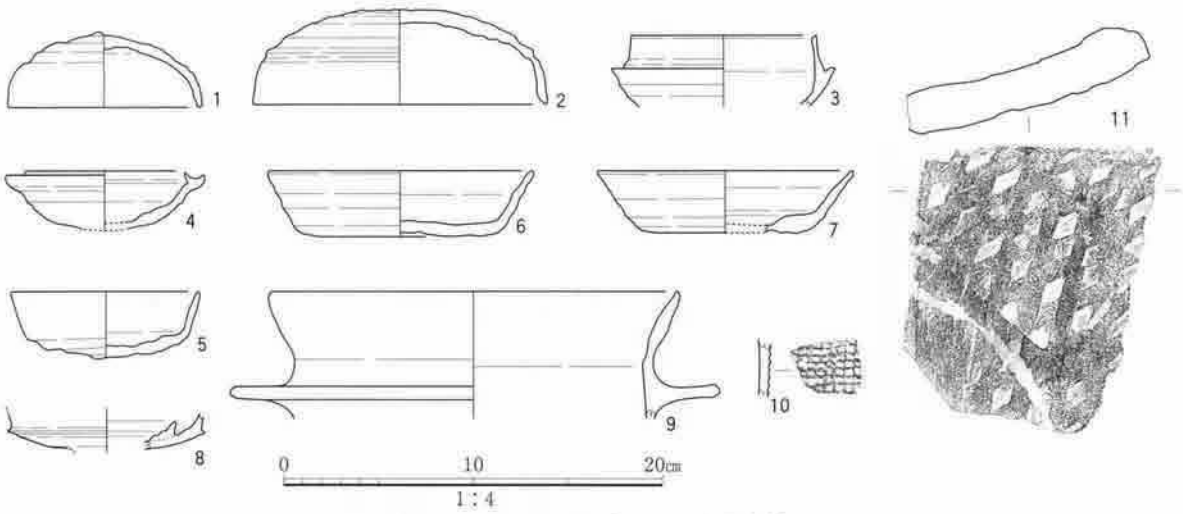


図210　OS90－130次SD502出土遺物

上記の遺構の時期については上位の地層との関係が明らかにできなかったため不明であるが、飛鳥～奈良時代のものであろう。


写真22　OS90－130次SP502の底に置かれた板石

SD502　北北西－南南東方向で幅3.5～4.5m、深さは0.15mある溝状の落込みである。埋土は底部付近が地山層の風化したような層が堆積するほかは、第4層と同じである。須恵器杯H蓋1・2、同身3・4、杯G5、杯A6・7、器台8、土師器羽釜9、正格子タタキの韓式土器片10、平瓦11が出土した(図210)。もっとも古い遺物は3でTK47型式に相当する。2はTK10型式に当る。8は内面に「かえり」状のものが付き、大韓民国慶尚道に類例が求められる陶質土器器台と思われ、日本では松山市船ケ谷遺跡で例がある[松山市教育委員会ほか2002]。6・7は難波Ⅴ古段階に位置づけられ、もっとも新しい時期となる。土師器羽釜9は7世紀代にさかのぼるものであろう。11は凸部に斜格子のタタキを有する平瓦片で7世紀後半ごろの可能性がある。よって、SD502の時期は6・7が示すように、8世紀前半から中頃と考えられる。

OS91－32次調査

第5層上面で豊臣前期の遺構とともに検出した。古代の遺構には建物・柵・土壙がある(図211、図版29上)。このうち建物は調査中に検討して、復元したものである。

SB501　桁行3間(7.8m)以上、梁行1間(2.2m)以上の掘立柱建物で、東側は調査区外に当ると考えられる。柱穴は深さ0.4～0.5mで、南東隅の柱穴には直径20cm前後の柱が遺存していた。桁行の柱穴は正南北に並ぶ。柱穴からはいずれも細片であるが、難波Ⅴ古段階に該当する土師器・須恵器が出土した。20は柱穴から出土した須恵器円面硯である(図212)。

SB502　桁行4間(7.2m)、梁行2間(3.1m)の南北方向に主軸をもつ掘立柱建物として復元したが、梁行方向の柱列および東柱列は柱間寸法が不揃いであるため、西側の柱列のみで柵を構成する可能性

もある。なお、西側の柱穴は正南北に並ぶ。柱穴は深さ0.3～0.4m遺存するものが多いが、深いものや浅いものもある。柱痕跡は直径0.15～0.20mである。柱穴からの出土遺物には土師器杯A12・須恵器杯A13・杯B蓋14・同身15がある(図212)。これらの遺物は難波Ⅴ中段階に位置づけられる。

SB503　桁行2間(3.2m)、梁行1間(1.9m)以上の掘立柱建物で、西にもう1間分延びて2間×2間の総柱建物に復元した。柱穴は深さ0.1～0.4m遺存し、柱は確認できたもので直径0.18mであった。各柱穴からは土師器杯C16、高杯17、須恵器杯G18・19などが出土した(図212)。須恵器杯G18・19の口径がそれぞれ8.9cm、9.8cmと小振りであることから難波Ⅲ新段階に相当し、ほかの遺物も飛鳥時代におさまることから、建物の時期は7世紀中頃と推定される。

SB504　桁行3間(7.7m)以上、梁行2間(4.6m)の掘立柱建物である。柱穴の深さは0.1～0.3mであるが、南西の隅柱は遺存しない。柱は確認できたもので直径15cmである。出土遺物には土師器杯・甕・羽釜、須恵器杯・甕などがあるがいずれも細片で時期を決する遺物はない。

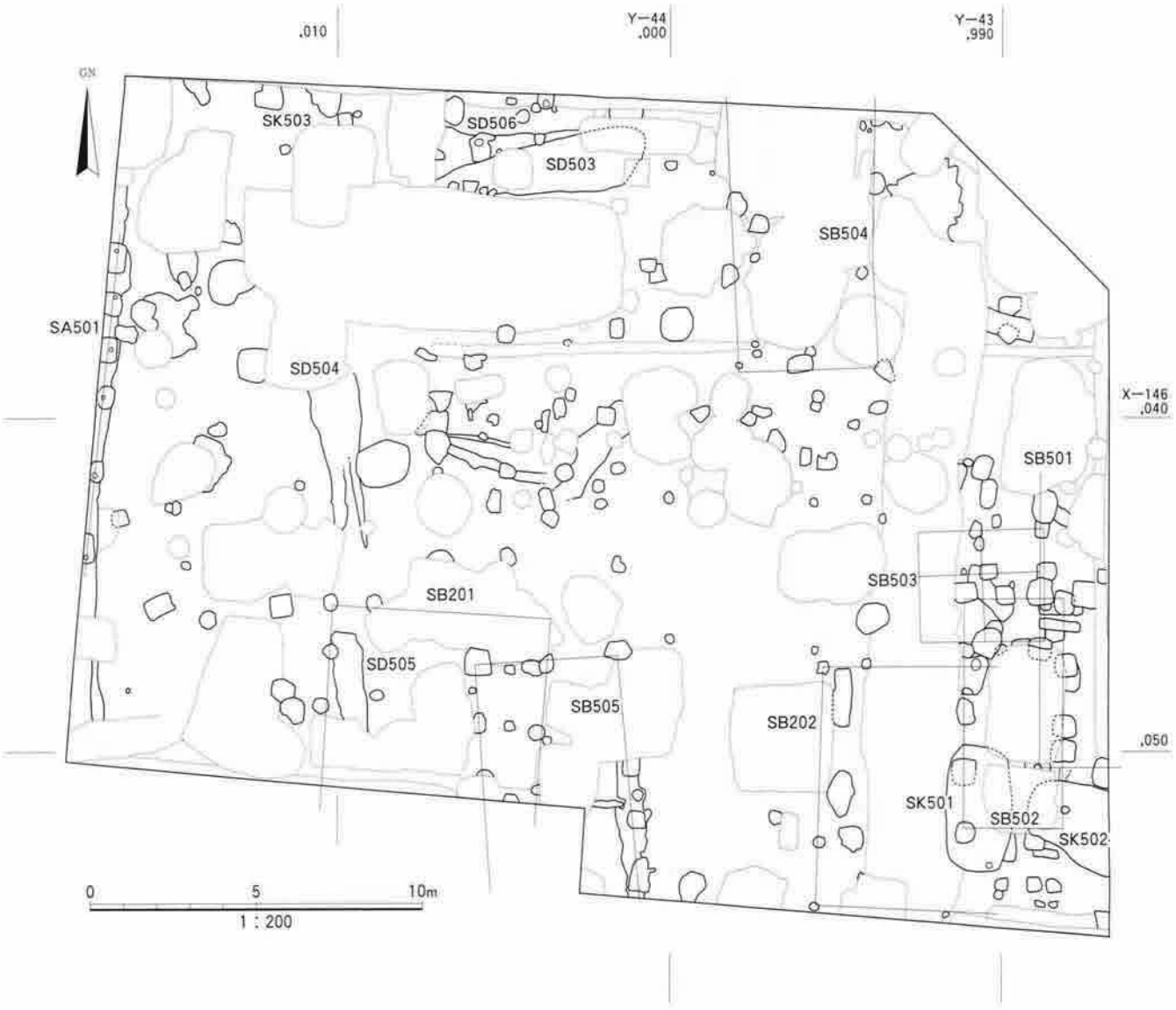


図211　OS91－32次古代および豊臣前期の遺構配置図

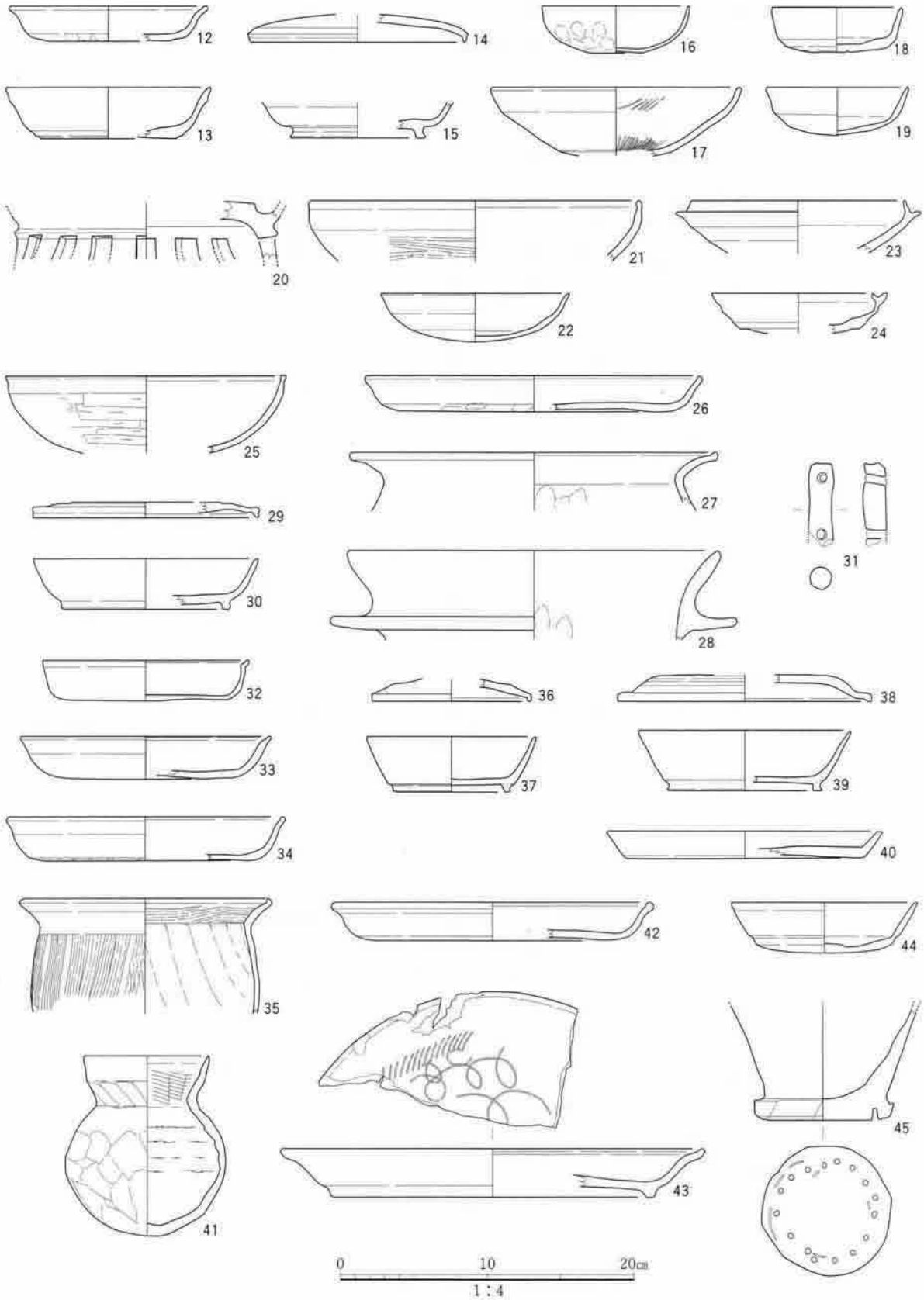


図212　OS91－32次各遺構出土遺物

SB501(20)、SB502(12～15)、SB503(16～19)、SA501(21～24)、SD503(25～31)、SD505(32～40)、SK502(42～44)、SK503(41)、第4層(45)

SB505　桁行４間(6.7m)以上、梁行２間(4.2m)の掘立柱建物である。柱穴の深さは0.25cm程度遺存する。難波Ⅴ中段階に位置づけられる土器片が柱穴から出土した。

SA501(図版29中)　調査地西端で検出した布掘りの柵である。建物の可能性もあるが、柱間距離が不揃いであることから柵と考えた。南北５間(9.4m)分を確認した。柱穴部分は一段深く掘下げられており、深さ0.25m前後遺存する。柱痕跡は直径10cm前後で焼土が入っている。方向はN6°Eである。出土遺物には土師器杯C22、鉢21、須恵器杯H23・24などがある(図212)。これらの遺物はおおむね難波Ⅲに対比しうる。

SD503　調査地北部にある幅約1.7mの溝と認定したものであるが、西では0.05m、東では1.0mと深くなることから土壙と考えるべきかもしれない。出土遺物には土師器皿A26、鉢25、甕27、羽釜28、須恵器杯B蓋29、同身30、土師質の棒状土錘31がある(図212)。26には暗文が施されていない。

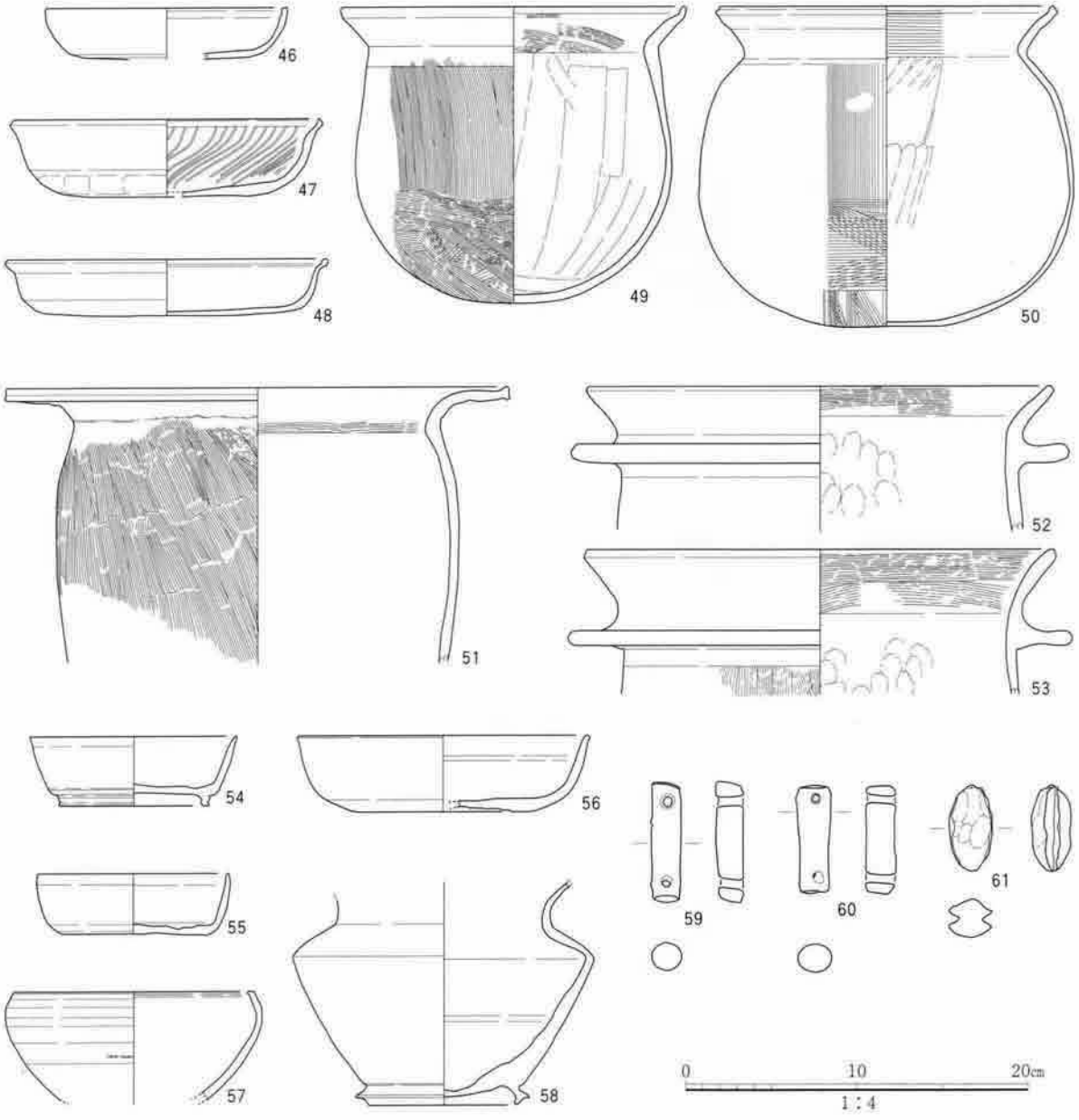


図213　OS91－32次SK501出土遺物

30は高台が底部縁よりやや内側につく。これらの遺物は難波Ⅴ古～中段階に位置づけられる。

SD504　幅1.5m、深さ0.2m程度の溝である。おおむね難波Ⅴ古～中段階に位置づけられる土師器・須恵器が出土した。

SD505　SD504の南に位置する幅0.9mの溝である。出土遺物には土師器杯A32～34、甕35、須恵器杯B蓋36・38、同身37・39、皿40がある。土師器杯Aには暗文が施されず、須恵器杯Bの高台が底部の縁に近いところにつくことから、難波Ⅴ中段階に該当すると思われる。

SD503～505は位置関係や土器の年代観から8世紀後半に位置づけられると思われ、区画などの機能を有する一連の遺構群の可能性がある。

SD506　調査地北端で検出した溝で、北肩は調査区外である。

SK501　調査地南東に位置し、SB502の柱穴に切られる。南北3.8m、東西2.0m、深さ1.5mの平面が隅丸長方形の土壙である。土師器杯A46～48、甕49～51、羽釜52・53、須恵器杯B54、杯A55・56、鉢57、壺58、棒状土錘59・60、有溝土錘61などの多量の遺物が出土した(図213)。

土師器杯Aは47には暗文が施されるが、それ以外にはない。口縁端部は外側に折れ曲がるように外反する。また、図化していないが杯・皿には高台を有する大型のものがある。甕は口縁部が水平に近く外反する大型のものと外反が緩く下膨れの形態で小型のものの両者がある。羽釜はいずれも角閃石を多く含む生駒西麓産の胎土である。須恵器杯B54は口縁部があまり外傾せずにまっすぐ伸びており、高台は底部よりやや内側につけられる。これらの遺物は[佐藤2000]では「土壙1」という名称で、難波Ⅴ古段階の標識資料とされているが、難波Ⅴ古段階でもやや新しい様相を見せるものと思われる。

棒状土錘は6点、有溝土錘は9点出土している。棒状土錘は法量は近似する。有溝土錘は形態は類似するが、長さからは8cm前後(4点)、6.5cm前後(4点)、5cm(1点)の3種に区分することができる。

SK502　南北2.5m、東西2.5m以上、深さ1.5mの土壙で東部は調査区外である。土師器皿A42、同B43、須恵器杯A44などが出土した(図212)。43の内面には放射状と螺旋状の暗文が施される。44の口縁部は外傾して伸びる。時期は同じく難波Ⅴ古段階に位置づけられると思われるが、若干古い様相を示す。遺物の時期や土壙の形状がSK501と類似する。なお、当土壙は[佐藤2000]で「土壙2」と呼ばれたものである。

SK503　一辺0.8mの平面方形で深さ0.5mの土壙である。完形の土師器壺41のほか少量の土師器片が出土した(図212)。41は全体に調整が粗雑で、体部および口縁部外面に粗いナデ調整を施し、屈曲部には強いユビオサエの痕を残す。体部内面は粘土の接合痕が顕著で、口縁部内面にはヨコハケ調整を施す。

ほかにも古代の遺構としては多くの柱穴・土壙があるが、遺物が少なく時期は決しがたい。

これらの遺構群の出土遺物および切合い関係から以下の変遷が考えられる。当調査地についてはSK503などに見られるように古墳時代から集落が形成される。その後、7世紀中葉の柵SA501を最後として8世紀中葉まで顕著な遺構・遺物は認められなくなる。8世紀中葉には再び集落が形成されはじめ、8世紀後半に拡大するのであろう。

b．豊臣前期の遺構

OS91－32次調査地の第５層上面で古代の遺構とともに検出した(図211)。出土遺物から明確に位置づけられたわけではなく、豊臣前期よりも古くなる可能性は十分ある。

SB201　南北３間(5.3m)以上で東西は４間(6.6m)と推定される掘立柱建物で、N3°Eの方向である。柱穴は直径約0.5mの円形で、深さは0.25mある。出土遺物は土師器・須恵器の細片が多く、時期を決することができないが、埋土は古代の遺構と大きく異なっている。また、１点ながら丹波焼の鉢かと思われる小片が出土しており、混入でないとすれば室町時代以降に位置づけられよう。

SB202　南北４間(7.3m)、東西３間(4.5m)以上の掘立柱建物と考えられる。柱穴は直径約0.3mの円形で、深さは0.25m程度ある。出土遺物は土師器・須恵器細片のみで時期を決することはできないが、埋土が**SB201**と類似することから近い時期と推定できる。

また、第２層基底面において、第３層を掘り抜く溝**SD202**を検出した(図215)。幅約0.5m、深さは0.2m前後で断面は「U」字形である。ほぼ正東西に延びる。青磁・青花・瀬戸美濃焼などの陶磁器片が出土した。

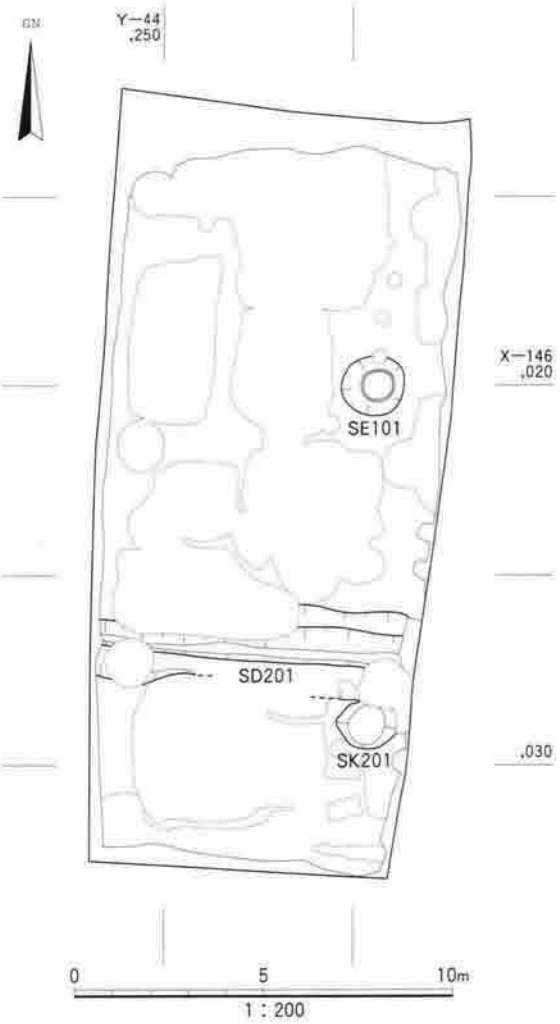


図214　OS90－130次豊臣期以後の遺構配置図

c．豊臣後期の遺構と遺物

OS90－130次調査

第２層上で遺構の検出作業を行ったが、第１層に相当する遺構も多く含まれている。溝・井戸・土壙があり、この中で豊臣後期に該当するのは溝**SD201**・土壙**SK201**である(図214)。

SD201　幅2.3m、深さ0.6mで、E4°Sの方向に延び、現状の道路と平行する。丹波焼擂鉢のほか瓦片が出土し、17世紀前半頃に埋まったと思われる。

SK201　東西1.6m、南北1.3m、深さ0.45mの土壙である。土師器皿62・63、青花碗66、瀬戸美濃焼丸碗68、丹波焼擂鉢70、瓦橙64、土師質火鉢65、瀬戸美濃焼の破片を転用した面子69のほか肥前磁器67がある(図217)。これらの遺物については17世紀初めの可能性が高い。

なお、井戸**SE101**は裏込めから肥前磁器碗など18世紀代の遺物が出土しており、構築年代を示すものであろう。しかし、埋土からは板ガラスが出土しており、埋められたのは近代以降と思われる。

OS91－32次調査

SA201　調査地東部で検出した、N2°Eの方向に延びる柵で、17.0m分を検出した(図215)。途中が

攪乱などによって失われているが、11間分に相当する。柱穴の多くは底に拳大ほどの石が詰められている。出土遺物は少ないが、土師器・瀬戸美濃焼碗・軟質施釉陶器・青花のほか瓦片が含まれ豊臣後期と推定される。また、柱穴の1つには抜取穴に焼土が含まれ、大坂夏ノ陣の焼土に相当する可能性がある。

SA202　E2°Sの方向に延び、**SA201**と直交する柵で、15.0m分を検出した。9間分に当ると思われる。**SA201**より柱間寸法はやや短い。出土遺物は土師器細片のみで時期は決しがたいが**SA201**と同時存在の可能性がある。

SK202　東西11.8m、南北4.3m、深さ1.0mの平面長方形の土壙である。出土遺物には瀬戸美濃焼や信楽焼のほか金箔瓦があり（第Ⅴ章第2節）、豊臣後期に位置づけられる。

なお、第2層より土師器皿**71**・青磁碗**72**・青花皿**73**・瀬戸美濃焼碗**74**・小杯**75**・織部向付**76**・唐津焼向付**77**が出土した（図217）。

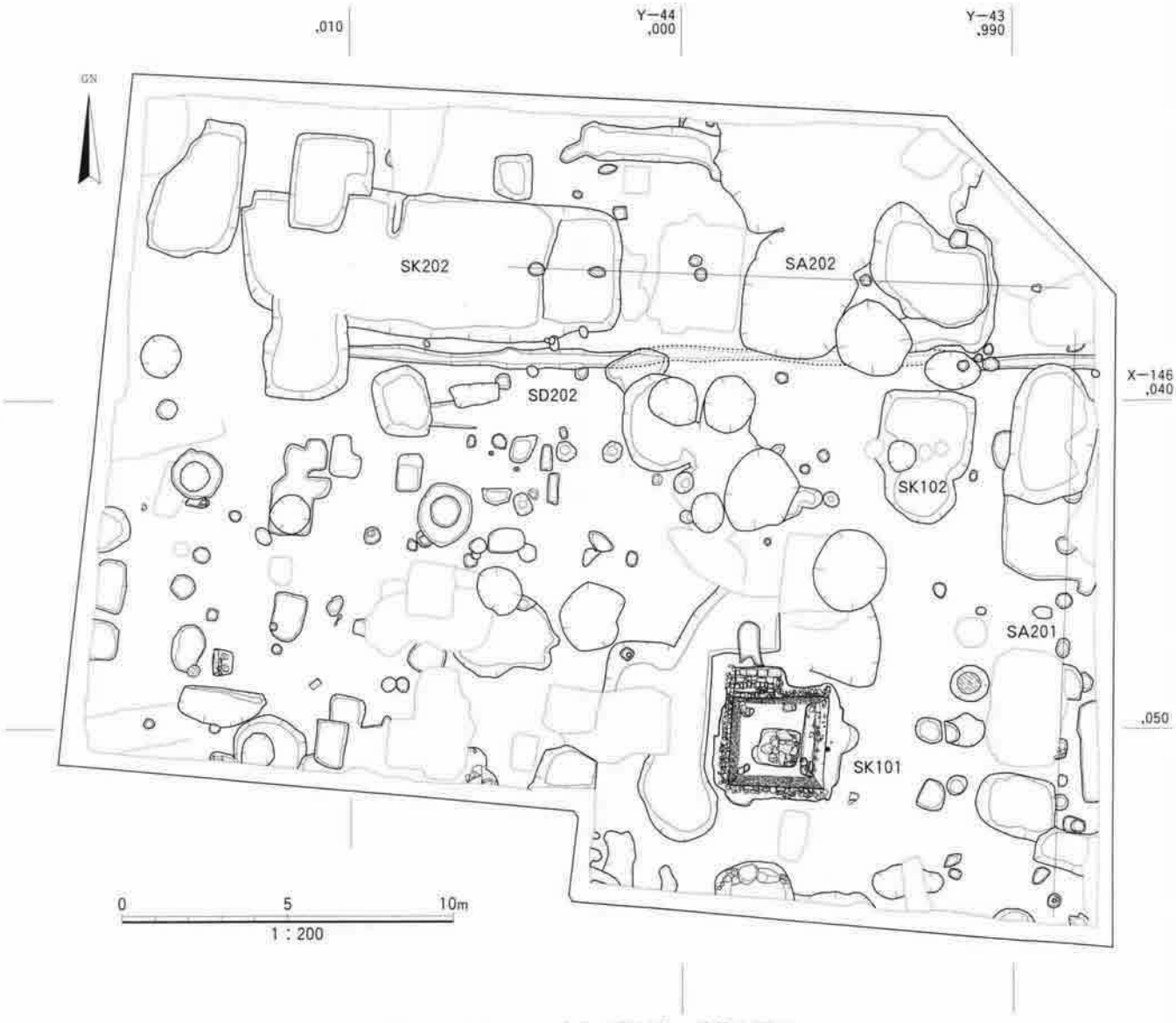


図215　OS91－32次豊臣期以後の遺構配置図

d．徳川期の遺構

OS91－32次調査地で柵・多数の土壙・井戸・穴蔵などを検出した(図215)。17世紀代の遺構は少なく、多くは18世紀後半以降のものである。以下に主要なものについてのみ概略を述べる。

SK101(図版29下)　調査地南東部で検出した穴蔵で、すでに[大成可乃1992]で紹介されている(図216)。一辺2.8mの平面方形で深さは1.5mある。北辺の西側には入口が取りつく。北・南・西壁は瓦積み、東壁の下部は切石の２段積み、上部は木片の痕跡が認められたことから板組であったと推測できる。断ち割り調査の結果、本来は四壁ともに瓦積みで、東壁が崩落したため修復されたことがわかった。入口は切石と瓦敷きによって２段分の階段状となるが、床まではさらに約１mあることから、出入りには梯子を用いたのであろう。壁面の瓦積みはコーナーでは交互に積みあげている。裏込めは認められない。

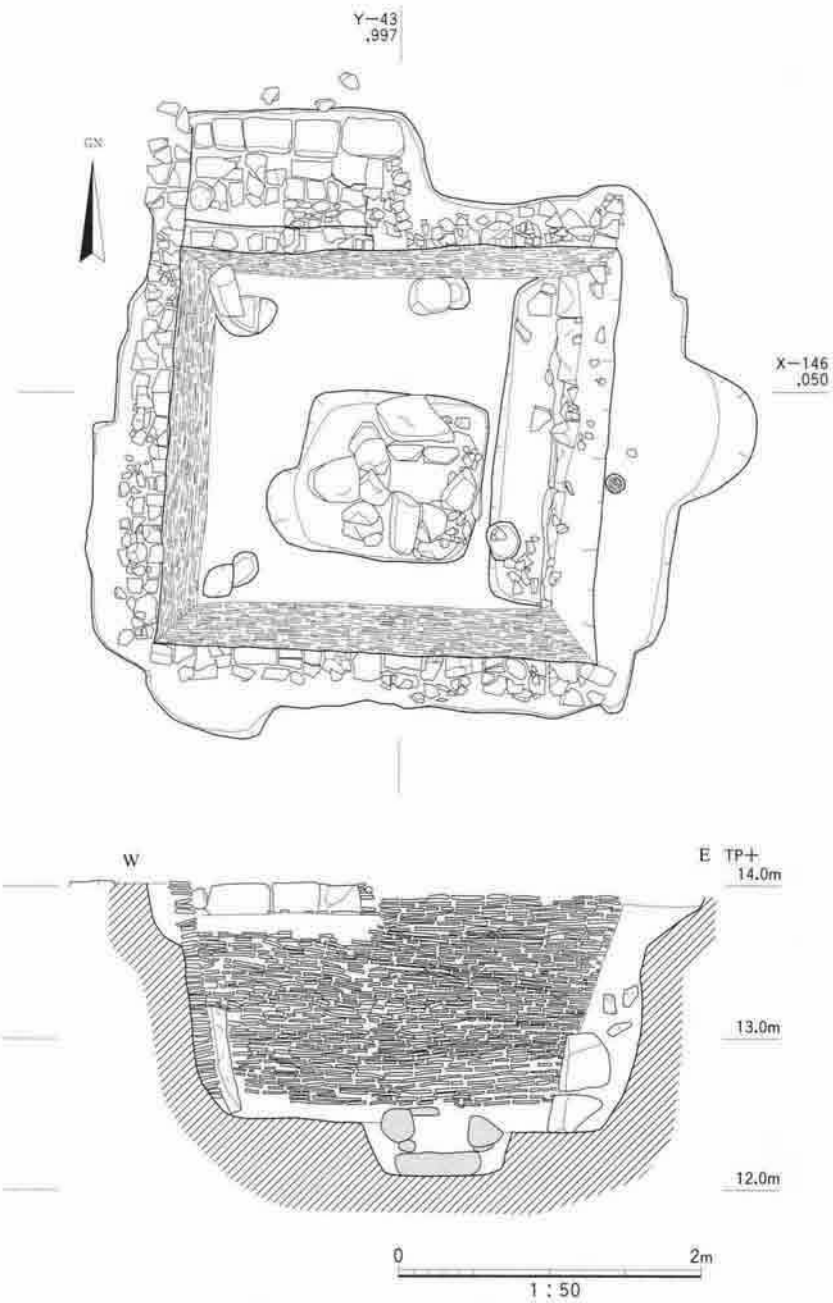


図216　OS91－32次SK101実測図

床面には四隅のほか数個所に礎石および抜取穴が確認されたことから上部構造があったと考えられる。また中央やや南東部に水抜き穴と考えられる、周囲を石で組んだ深さ約0.3mの施設がある。

出土遺物は瓦を主体に土師器・瀬戸美濃焼・備前焼・肥前磁器・瓦質土器などの陶磁器類のほか、丁銀のミニチュア土製品や多くの土人形があった。18世紀後半から19世紀代に位置づけられる。

SK102　調査地の北東部で検出した土壙で、木片を多く含む黒色シルトで埋まっていた。唐津焼天目碗・向付、瀬戸美濃焼徳利、土師器皿、焼塩壺、中

国製青磁や箸、黒漆塗りの椀とともに荷札木簡78が出土した(図217)。肥前磁器が含まれないため、土壙の年代は1620年代以前と考えられる。

78は裏表に「久貝忠…」という人物名が書かれている(図217)。この記載のみから人物を特定することには問題が残るが、元和5(1619)年に大坂町奉行に任じられた「久貝忠左衛門正俊」の名は、遺物の年代観とも一致しており、注目される[植木久・伊藤純・大成可乃1992]。

3)まとめ

本節で報告した遺物でもっとも古い遺物はOS90－130次の5世紀末の須恵器であった。700m南東には古墳時代中期の倉庫群が見つかっており[大阪市文化財協会1992a]、当該期の遺構が今後見つかる可能性がある。

飛鳥時代の遺構としてはOS91－32次のSB503やSA501がある。これらの遺構は7世紀中頃におさまり、それ以後の遺構は継続しない。奈良時代の遺構は多く、8世紀中頃から後葉にかけての時期におさまる。これらの時期はそれぞれ前期・後期難波宮の時期に該当し、当地での遺構の動向が難波宮と連動していることがわかる。奈良時代の状況についてはOS90－50次調査地(第Ⅲ章第1節)と類似するが、平安時代初頭の土器を含まないという点で異なる。同様の状況はOS91－34次調査地でも見られる(本章第4節)。よって、当地での遺構の継続は奈良時代末で一旦終わっており、これは[積山

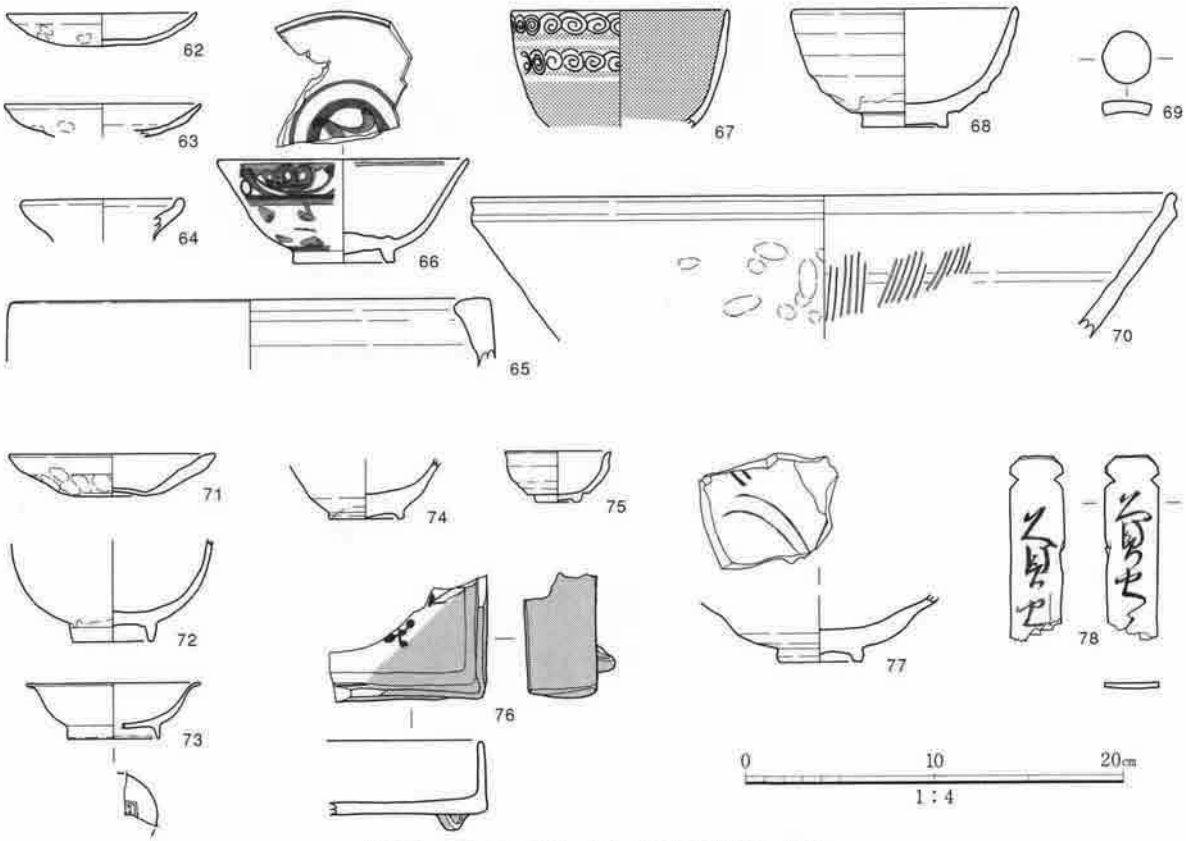


図217　OS90－130・91－32次近世出土遺物

OS90－130次SK201(62～70)、OS91－32次第2層(71～77)、SK102(78)

洋2002]で指摘されているように、大川沿いに遺構・遺物が集中する現象に通じるものである。

豊臣期の遺構には顕著なものは認められず、分布も希薄である。土壙もほとんど検出されなかったことから、幾度かの削平を受けたと推定できる。一つは三ノ丸造成時に伴うものである。ただし、古代の遺構が残されていることから豊臣前期の段階では遺構群が希薄な場所であったのであろう。もう1つは徳川期、おそらくは18世紀以降の削平で、豊臣後期の遺構面は失われたのであろう。

（平田・寺井）

第２節　OS86－35次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

ここで扱う調査地は谷町筋の西側に位置し、北は北新町から南は徳井町の北側街区に含まれるOS86－35・87－37・87－56・87－69・89－７・89－86・90－108・92－６・92－12次調査の９件である（図218）。



図218　OS86－35次などの調査地位置図

この地区は上町台地の西側斜面に位置し、標高が谷町筋に面する所ではTP+15m、西端に位置するOS89－86次調査の南側ではTP+10.8mと、西に向かって低くなっている所である。また、南北方向では北の糸屋町通付近がTP+12.5mあり、それより南の北新町がTP+11.7m、南新町がTP+10.8m、徳井町がTP+10.3mと南に向かって低くなっている。この地区の南にある本町通の地下に埋没している開析谷に向かって低くなる地形があるのであろう。

２）調査の結果

これらは小規模の調査が多く、調査深度も近世の地層までしか達しないものが多く、それより深い、時期のさかのぼる地層や遺構面の調査が十分にできないものが多かった。そのため、ここでは各調査地の層序を検討し、出土遺物から時期を判断した上でこの地区での層序を当てはめていくことにする。また、狭いトレンチ調査が多く、時期のさかのぼる遺構は検出できなかった。地層の残りのよい調査地の断面を図示する（図219）。

ｉ）層序と遺物

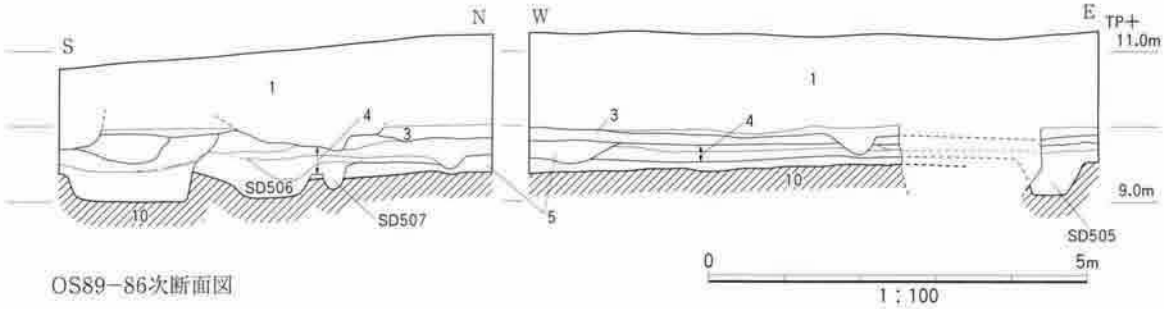
第１層　重機で掘削した地層および近世徳川期の地層である。

第２層　近世初頭の整地層で、大坂夏ノ陣焼土層を覆う。OS87－69次調査地で検出した。

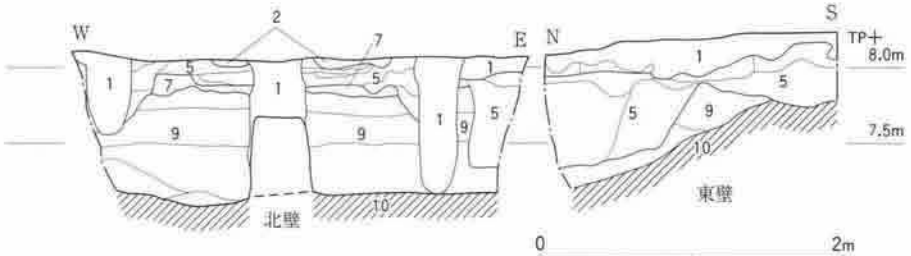
第３層　大坂夏ノ陣の焼土層である。OS87－69・89－86次調査地で検出した。

第４層　三ノ丸造営に伴う整地層と考えられ、地山偽礫を多く含んでいる。OS87－69・89－86次調査地で検出した。OS87－69次調査地の第４層から出土した遺物（図220）には、土師器皿1・2と青花皿3のほか、奈良時代の重圏文軒丸瓦4が出土している。また、OS92－12次調査地の第４層からは瀬戸美濃焼の稜皿5・壺6、青花皿7、土師器の鍋8と甕9が出土した（図221）。この層から出土した陶磁器はやや古い様相を呈している。

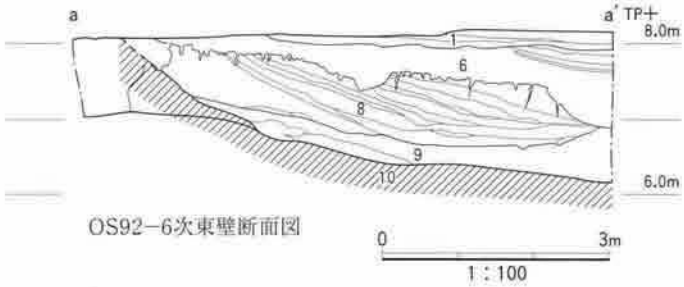
第５層　豊臣前期の地層である。OS89－７次調査地では３層に細分できた。OS92－12次調査地



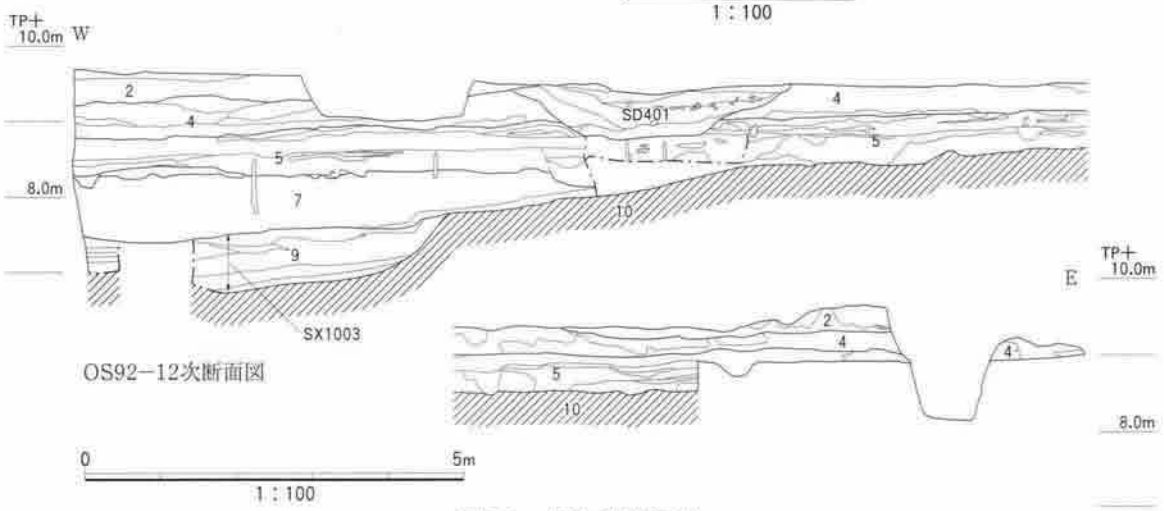
OS89−86次断面図



OS89−7次南区断面図



OS92−6次東壁断面図



OS92−12次断面図

図219　各調査地断面図

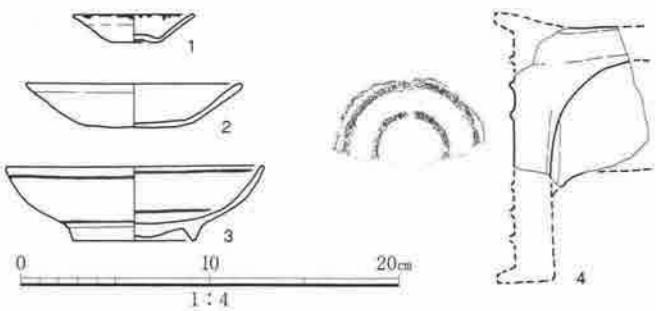


図220　OS87−69次第4層出土遺物

の第5層からは青花碗10、色絵小碗11、白磁碗12・皿14、青花皿13、瓦質土器瓦燈15、木札16・17、小柄の柄18、銭19が出土している(図221)。豊臣前期の様相を示す組成である。19の銭は銭名がなく、外縁や内郭の厚みも認められない。無文銭の範疇に含まれるものであろう。

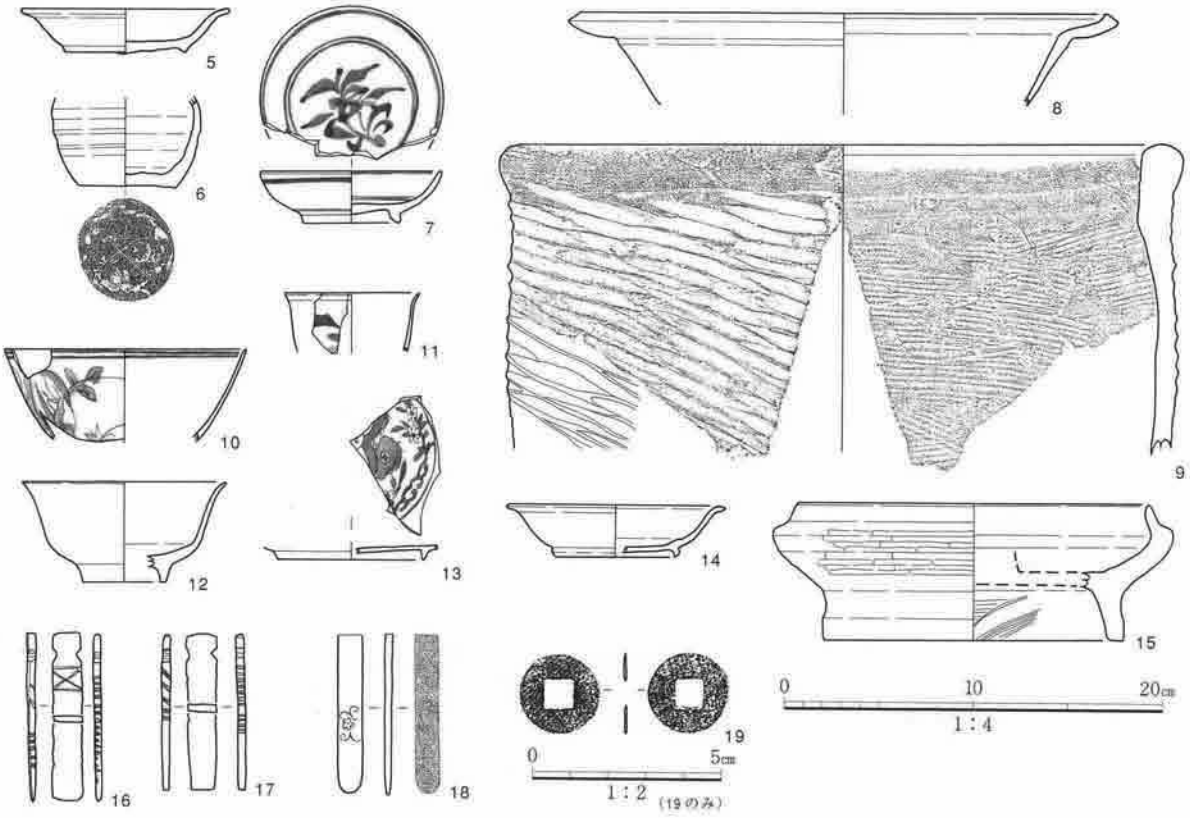


図221　OS92－12次第４・５層出土遺物

第６層　中世の地層で、下位層の上部を攪拌して耕土となった層である。OS92－６次調査地でも耕作痕跡と考えられる平行する溝があり、これらの調査地以外にも広がっている可能性がある。

第７層　中世の遺物包含層で、下位層の上面で検出された遺構の埋土も含んでいる。OS86－35・87－37・87－56・89－７・92－12次調査地に堆積していた。

第８層　古代の整地層である。OS92－６次調査地で検出した。

第９層　古代の地層である。OS87－56・89－７・90－108・92－６・92－12次調査で検出した。

第10層　洪積層の地山である。OS87－56次調査地では地山が南に向かって低くなっていた。OS89－７次調査地の北部ではTP＋７ｍまで掘削したが、地山は検出できなかった。南部では北方向に約20°の傾斜で低くなっていた。OS89－７次調査地の北部に谷地形が埋没しているようである。

ii)遺構と遺物

ａ．古代

この地区で行った調査は調査面積が狭小なため、遺構の全体を把握できたものが少ない。また、古代の遺構面ま

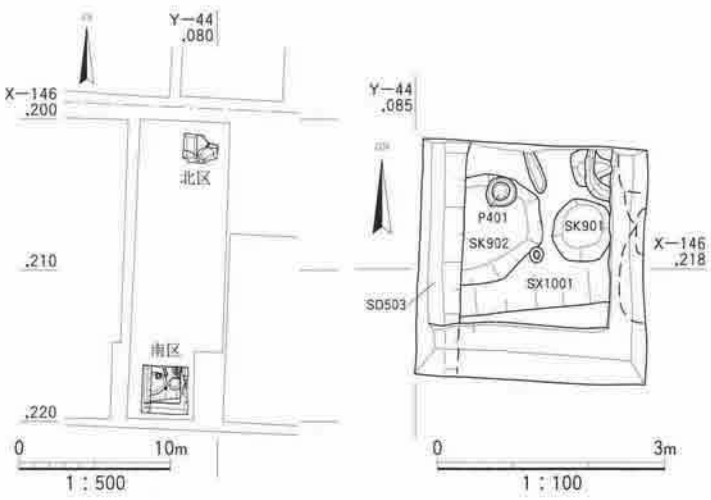


図222　OS89－７次調査地の位置および南区遺構配置図

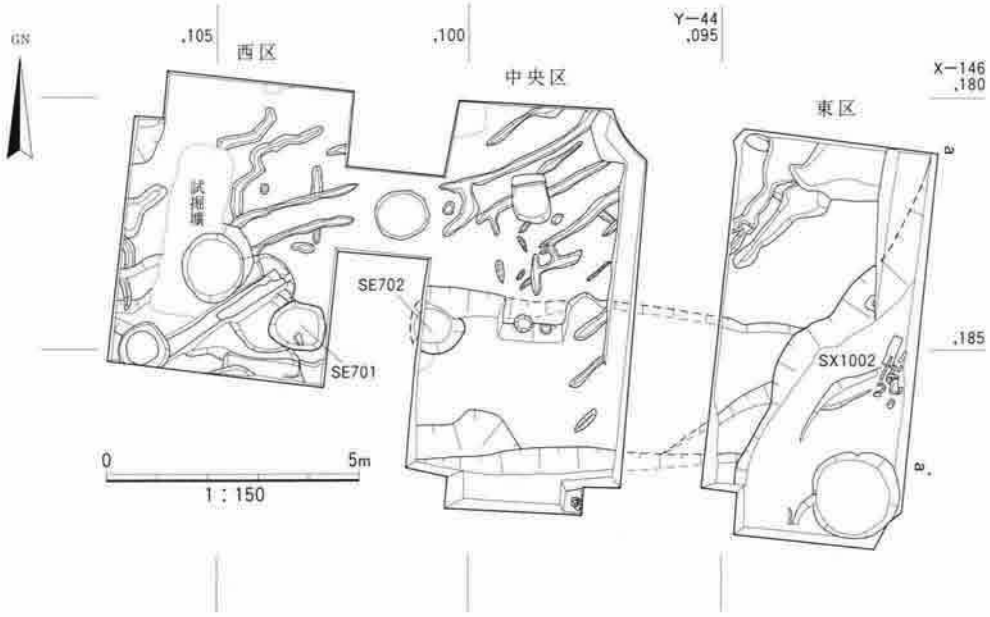


図223　OS92－6次古代および中世遺構配置図

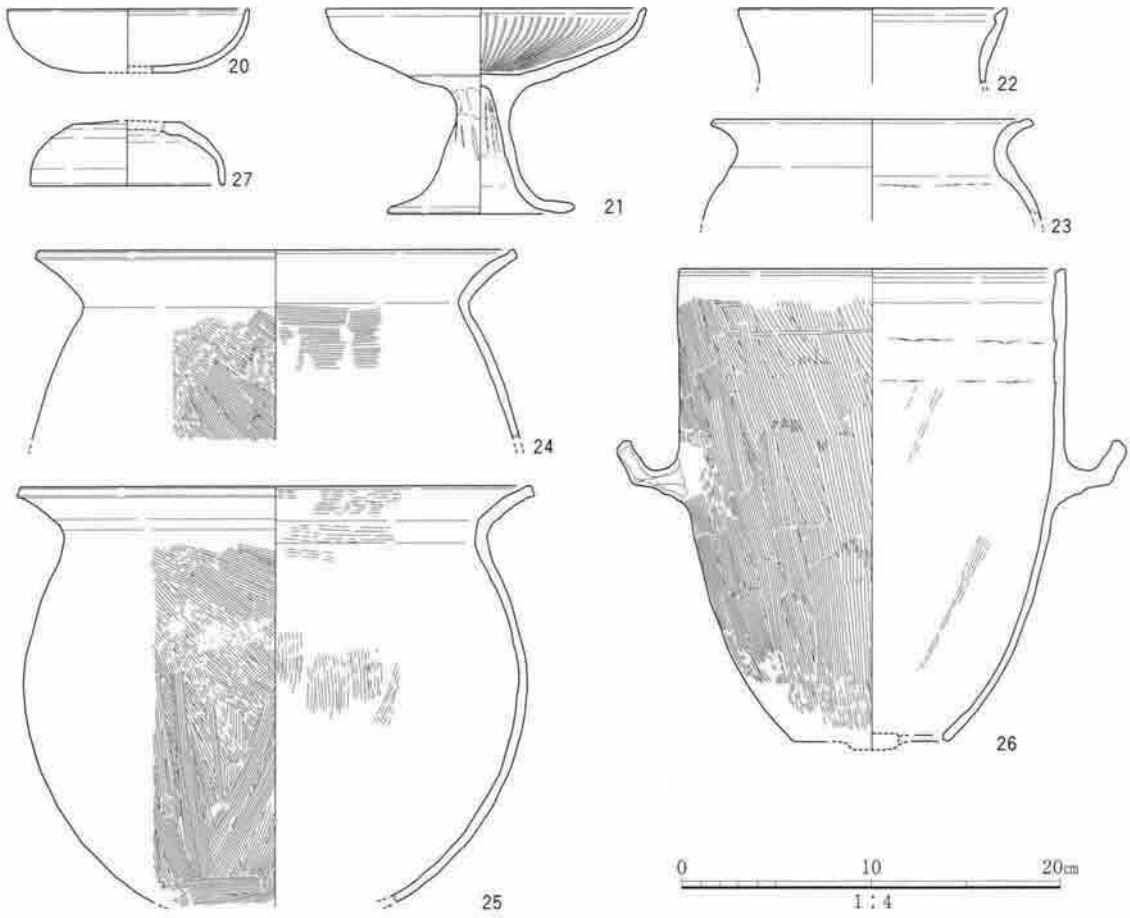


図224　OS89－7次SK901・902出土遺物

SK901(23～26)、SK902(20～23)、第5層(27)

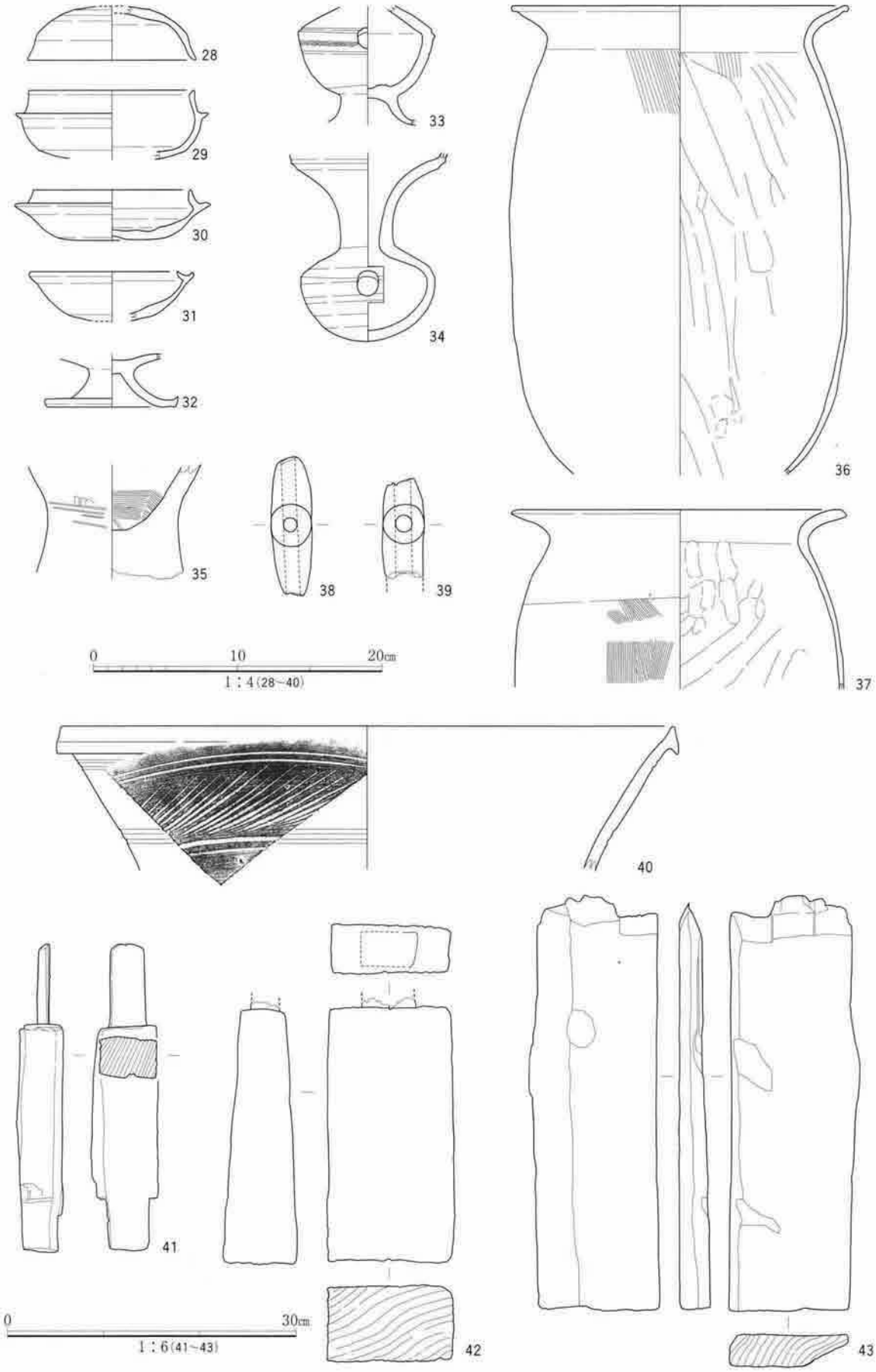


図225　OS92－6次SX1002出土遺物

で届いた調査も少ない。この地区で古代の遺構が検出されたのは、OS89－７次調査地だけである(図版32上・中)。しかし、OS89－７・92－６・92－12次調査地の３個所では上町台地を刻む開析谷の一部を確認し、OS92－６次調査地では上半部を整地層によって埋められていた。

SX1001　OS89－７次調査地南区で地山上面にある落込みである(図222)。南端を一部検出しただけであり、落込みの形状と規模は不明である。調査区の南端に直線的に延びる南肩があり、北に向って低くなっている。深さは0.7m以上で、TP+7.3mまで掘削したが、底には達しなかった。埋土は第８層で、５層に分れる。上部は灰黄色の礫混りシルトで、下部は灰白色の礫混り粘土質シルトである。７世紀代の遺物が出土した。

SX1002　OS92－６次調査地の南東端に検出した地山の落込みである(図223、図版32下)。西側の肩は南西から北東方向に延びており、南東方向に落込んでいる。肩部の高さはTP＋８m付近にあるが、調査地南東隅ではTP+6.2mとなる。埋土は２層に分れ、下部には有機物を含む暗オリーブ灰色礫混り粗粒砂、上部は何枚にも分れる整地層である。主体は灰～オリーブ灰色シルト質粘土～粗粒砂混り細粒砂である。層厚は0.9m以上になる。最上面には小さなクラックがある。

ここから出土した遺物には古墳時代から飛鳥時代までの土器と同時に出土した木器がある(図225)。28～34・40は須恵器である。28は杯蓋でTK209型式、29～31は杯で、29はTK23型式、30はTK209型式、31はTK217型式である。32は高杯の脚部、33・34は鼈で、TK217型式である。40は甕の口縁部で外面にヘラの条線を入れる。

35～39は土師器である。35は台付鉢、36・37は甕、38・39は管状土錘である。

41～43は木器で、41・42は上端に出枘を作り出す。43は図の上端部に出枘を作り、左右は楔状に両面から削っている。１側辺は斜めに削られているように見える。41・42は台の脚部になろう。43の用途は不明である。

SX1003　OS92－12次調査地の深掘りトレンチで検出した落込みである。落込みの全域を掘削できなかったためその規模は不明であるが、東側から西側に向かって低くなっている。この調査地東部ではTP+8.7mで地山が検出されるが、敷地西端ではTP+6.9mまで下がっている。落込みはまだ西に続いており、さらに低くなっている。この落込みの最下部に第９層が堆積し、その上位に第７層が広がっていることから、中世に完全に埋没していると考えられる(図219最下段)。

SK901・902　OS89－７次調査地南区でSX1001を埋める第９層の上面に検出した(図222)。いずれも円形を呈し、SK901が直径0.8m、深さ0.2m、SK902が直径1.5m、深さ0.1mである。埋土は灰白色礫混りシルトの偽礫が混る黄灰色礫混り粘土質シルトである。７世紀代の土師器・須恵器が出土した(図224)。

20～23がSK902出土の土師器で、24～26がSK901出土の土師器である。20は杯、21は高杯、22～25は甕、26が甑である。27は第５層出土の須恵器杯である。出土量が少ないため、時期は７世紀前～中葉の難波Ⅲとしておく。

ｂ．鎌倉時代から大坂本願寺期

この地区には地山が深くなった地点で鎌倉時代の地層や遺構が散発的に発見されている。

遺構が検出されたのはOS86－35次調査地(図版30上)とOS92－6次調査地の2個所で、OS86－35・87－37・87－56・87－69・89－7・92－6・92－12次調査地では第7層の遺物包含層や第6層の作土が広がっている。

SA701　OS86－35次調査地北部の地山が高くなっていたところに東西方向に並ぶ柱列である(図226)。柱間は0.9mで、東部は後世の攪乱のため削平されている。方位はE6°Nで、東でやや北に振る。周囲には組合わないピットがいくつかあり、建替えがあった可能性もある。その内の**SP701**から顎に赤色顔料が付着した唐草文軒平瓦**54**が出土している(図227)。

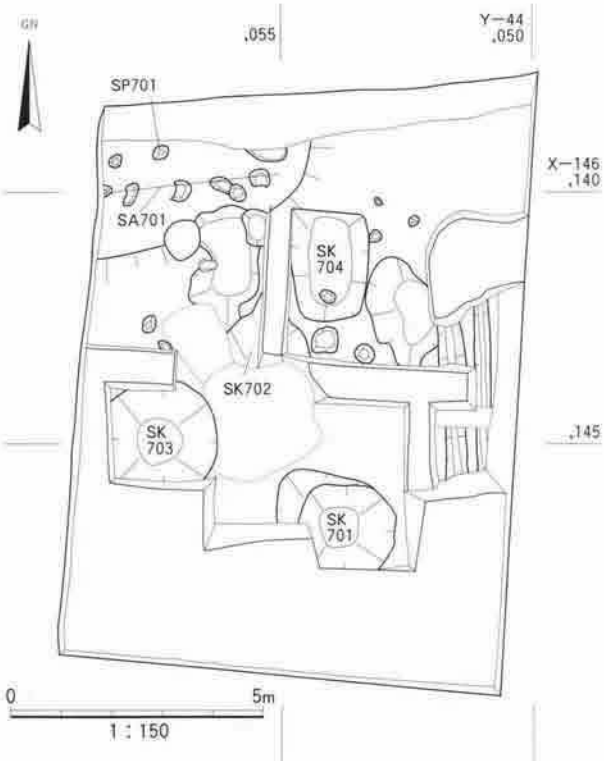


図226　OS86－35次中世遺構配置図

SK701～704　OS86－35次調査地にある4基の土壙である(図226)。いずれも1.5～2.5mの不整円形を呈する土壙である。中から瓦器椀や土師器皿・羽釜などのほか、古代にさかのぼる瓦が出土している(図227)。

44は**SK701**から出土した瓦器椀である。内面には螺旋状暗文があり、底部にはかなり退化した平坦な高台がつく。外面のヨコナデは口縁部付近にしかなく、下半はユビオサエのままである。尾上実編年のⅣ－1と考えられ[尾上1983]、実年代は13世紀中葉になろう[森島1992]。**45**・**46**・**48**・**49**は**SK704**から出土した瓦器椀と土師器皿である。**47**は**SK703**から出土した瓦器椀で、内底面には平行暗文、体部には螺旋状暗文を施す。外面は口縁部付近をヨコナデ、下半部はユビオサエである。底部には退化した低い高台が付く。尾上編年のⅢ－3で、実年代は13世紀前半であろう。**44**は**45**と、**46**は**47**と同じ時期のものであろう。**48**・**49**は口縁部が内湾気味に立上る皿である。**50**～**53**は**SK701**から出土した瓦で、すべて火を受けている。**50**は単弁蓮華文軒丸瓦で、難波宮第85次調査から出土しているものと同笵である[八木1981a]。**51**は重圏文軒丸瓦で、後期難波宮の6016型式である。**52**・**53**は同笵と考える唐草文軒平瓦で、**52**は直線顎である。OS92－6次調査地の井戸**SE701**から出土した瓦**60**と同笵である。この瓦は上町台地北西部でしか出土しておらず、「(難波)京の唐草文軒平瓦」と呼称され、奈良時代末から平安時代初期のものと考えられている[宮本佐知子1999]。**54**は**SP701**から出土した唐草文軒平瓦である。**52**・**53**と同時期かやや下るものであろう。瓦は飛鳥時代後半にまでさかのぼるが、瓦器が13世紀中葉の年代を示しており、この土壙群は鎌倉時代のものであろう。

SE701・**702**　OS92－6次調査地で検出した井戸で、両者は約1.8mと近接し、いずれも直径約1mの不整円形を呈している(図223)。ここから出土した瓦の一群も宮本によって既に紹介されている[宮本佐知子1999]。**SE701**からは重圏文軒丸瓦**55**・**56**、蓮華文軒丸瓦**57**・**58**、重圏文軒平瓦**59**、唐草文軒平瓦**60**などが出土した。**58**は四天王寺出土の瓦(四天王寺古瓦聚成112)と同笵である[四天王

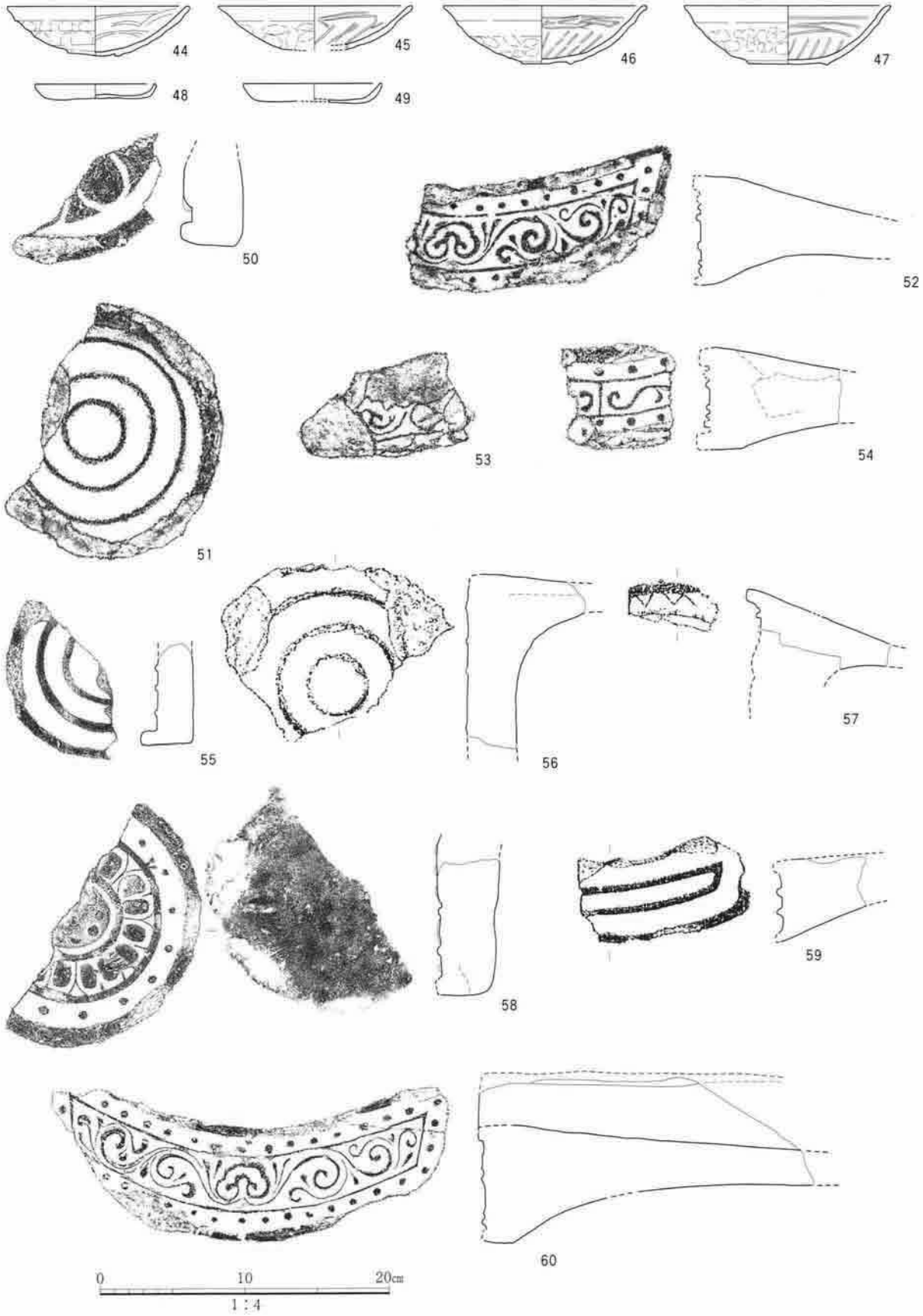


図227　OS86－35・92－６次出土遺物

OS86－35次調査(44～54)、OS92－６次調査(55～60)

寺文化財管理室1986]。60は先述したSK701から出土した唐草文軒平瓦52・53と同笵である。これらの瓦は二次的に火を受けており、煤が付着している。

SE701・702があるOS92－6次調査地は、SK701～704が見つかったOS86－35次調査地から見て南西方向に約60mしか離れていない。同じ瓦当文様を持つ軒瓦が出土していることから、当地に瓦葺きの施設があった可能性がある。

OS92－6次調査地ではSE701・702以外に北東から南西方向に延びる溝群が見つかった(図223)。

幅0.2m程の溝が0.6～0.8mの間隔で平行している。耕作に伴う溝の可能性がある。

この方向は下層のSX1002の方向に近く、地山の傾斜に平行するように畝立てした畠が営まれていた可能性がある。

こうした遺構以外にこの地区ではOS87－37・87－56次調査地のように、中世の遺物包含層が厚く堆積していた(図228・229)。この辺りが上町台地の谷

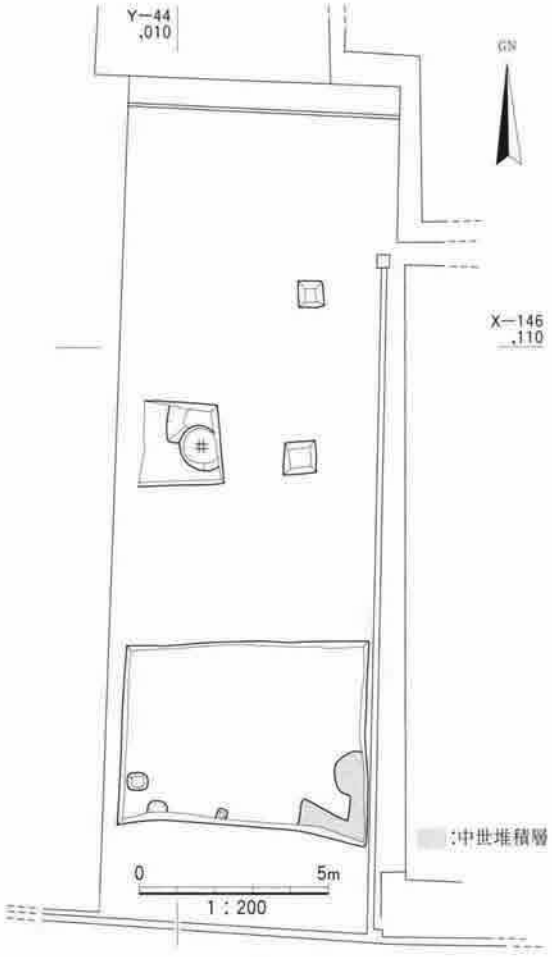


図228　OS87－37次中世包含層分布範囲図

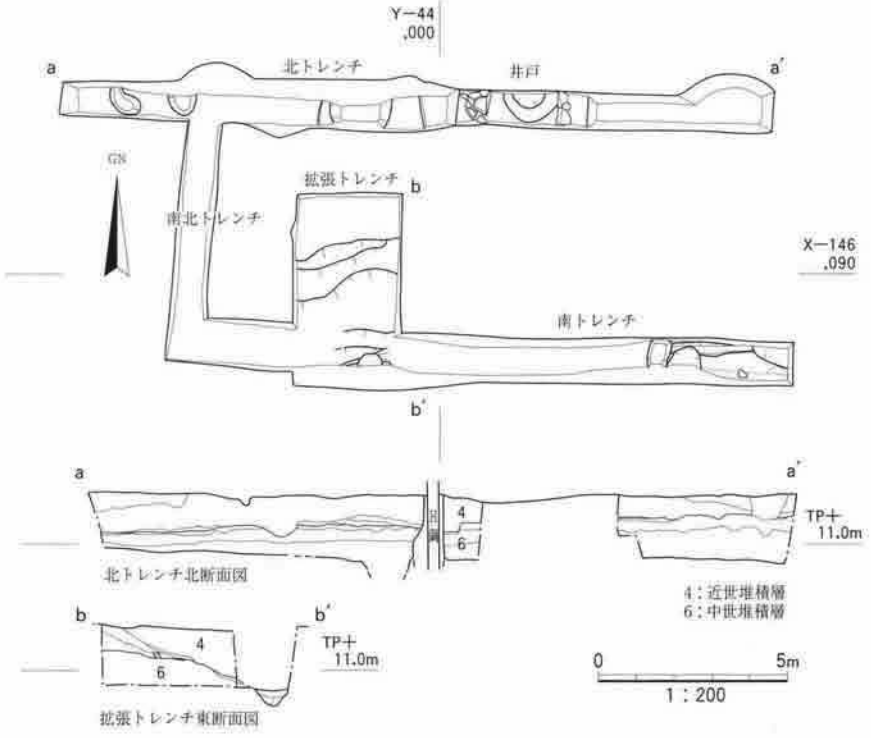


図229　OS87－56次平・断面図

部に当っているため、遺存していたのであろう。

c．豊臣期

豊臣期の遺構はOS90－108次調査地とOS92－12次調査地で建物を検出したが、それ以外の調査地では溝や土壙しか見つからなかった。以下では建物と敷地の方位に係わる溝を中心に記述する。

OS92－12次調査地では豊臣前期の７棟の建物が見つかったが(図231、図版33上・中)、掘立柱建物であるSB502とSB503は建物方位がN10°Eと北で東に振っている。ほかの礎石建物SB504～508は掘立柱建物より１層上位で検出された礎石群により構成され、建物の方位も掘立柱建物とは異なり正方位に近い。前者を豊臣前期でも先行する建物群、後者を後出する建物群と判断した。

SB501　OS90－108次調査地の第５層の基底面で検出した(図230、図版31下)。南北２間以上×東西４間以上の建物で、東西の方位はE12°Sである。

南北柱間は1.9m、東西柱間は1.0～1.1mで、礎石の抜取穴が並んでいる。南東部では礎石も抜取穴も検出できなかった。北側礎石列から南3.8mの位置に礎石状の石が東西に並んでおり、さらに南7.8mの位置にも礎石状の石があるが、同一の建物になるのかどうかは不明である。

SB502　OS92－12次調査地の北東隅で検出した掘立柱建物である(図231)。東西柱間は1.8～2.0m、南北柱間は2.9mある。調査地の北東方向に広がっている。南北の方位はN9°Eと北で東に振っている。

SB503　OS92－12次調査地の南東隅で検出した掘立柱建物である。南北方向の柱列と、東側の攪乱の間に１基の柱穴を検出した。南北柱間は一定しておらず、0.7～1.0m間隔に並んでいる。東西柱間は1.6mである。方位はN5°Eと北で東に振っている。この２棟の建物は方位が共通しており、同時に存在していた可能性がある。

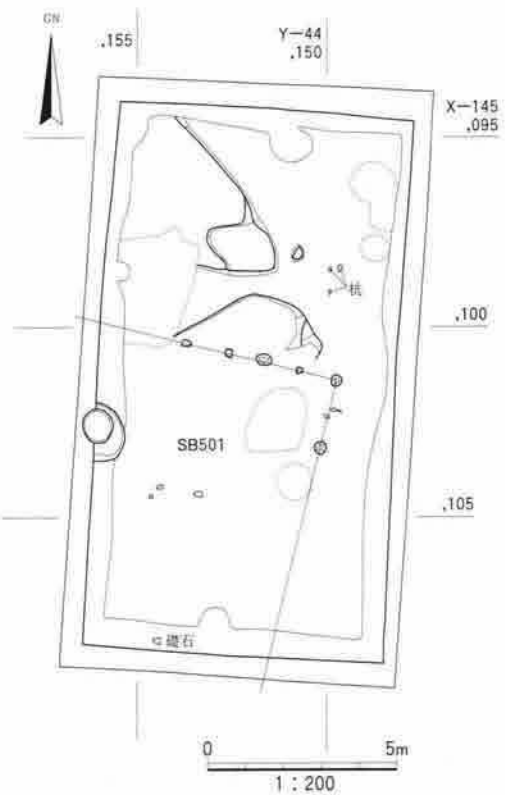


図230　OS90－108次豊臣前期遺構配置図

SB504　SB502・503の間に検出された礎石建物である。南北方向の礎石列が調査地東壁際に並んでおり、それの西側に点在する礎石群で構成される。東側の礎石列の方位はN1°Wと正方位に近い。復元される規模は南北約６m、東西約４mである。この範囲の周囲にも礎石状の石が点在している。

SB505　SB504の西に点在する礎石および抜取穴で構成される礎石建物である。礎石が消失している可能性も考えると、規模は東西５m程度まで復元できる。南北はSK501の南側付近と考えると、７m以上になろう。方位はほぼ正方位である。

SB506　SB505の西側にある礎石建物である。南側に並ぶ東西礎石列と西側にある南北礎石列から建物を復元した。東西６m以上、南北３m以上になる。方位はほぼ

正方位である。

SB507　SB506の南側にある礎石建物である。東西４ｍ以上、南北３ｍ以上の小型の建物で、西側のSB508に繋がる可能性もある。方位はN1°Wとやや西に振っている。

SB508　調査地南西隅に検出した礎石建物である。東側礎石列が南北に並び、北側と南側の礎石列も東西に並んでいる。この建物がもっとも残りがよい。礎石の間隔は東西方向が１ｍであるが、南北方向は一定していない。南側礎石列の南にも同じ方位に並ぶ礎石があり、付属する建物である可能性がある。方位はN2°Wである。

屋敷地の方位を示すと考える溝はOS92－12次調査地のSB504とSB505の間にあるSD501（図231）と、上層のSD401・402（図233）のほか、OS87－69次調査地のSD502（図232）、OS89－７次調査地南区SD503（図222）、OS89－86次調査地のSD504～507（図232）、OS90－108次調査地のSD403・404（図238）がある。このうち、豊臣後期に属するものはOS92－12次調査地のSD401・402とOS90－108次調査地のSD403・404で、ほかは前期に属するものである。

前期と考えた溝から記述する。

SD501　OS92－12次調査地のSB504とSB505の間にある南北溝である（図231）。幅約0.5m、深さ約0.2mで、北の方が低くなっている。途中２個所に東から枝溝が延びている。北側の枝溝の東端は途切れているが、南側の枝溝の東には土壙状の落込みがある。SB504を囲むような配置となっている。

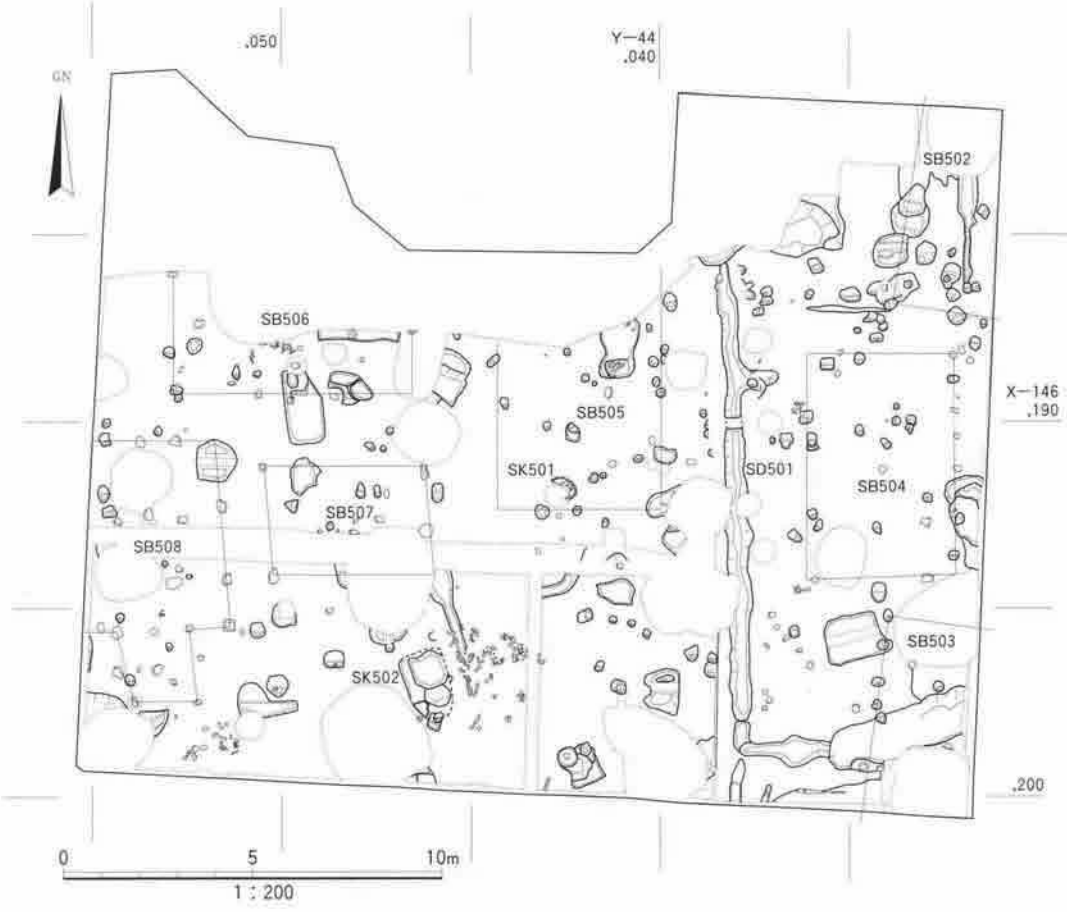


図231　OS92－12次豊臣前期遺構配置図

溝の方位はSB504と同様でN1°Wと正方位に近い。

SD502　OS87－69次調査地の東壁際で検出した南北溝である（図232、図版30中）。溝の西肩の一

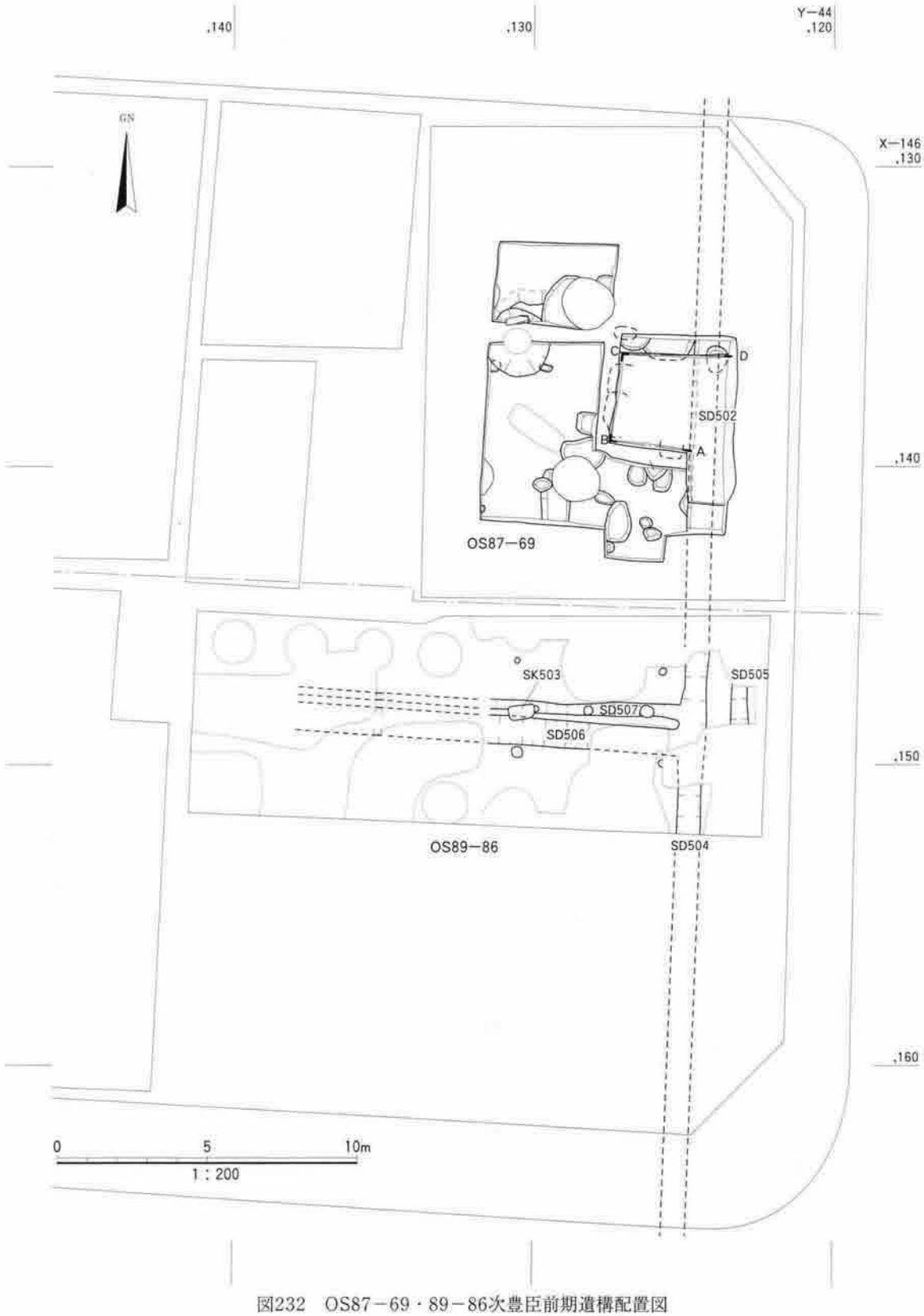


図232　OS87－69・89－86次豊臣前期遺構配置図

部を検出したにすぎないが、この調査地の土壙群より先行するものである。幅1m程と推定され、深さは0.5mで、底は平坦である。底付近には滞水の痕跡があり、上半部は地山の偽礫を含んだ埋戻し土である。この溝の南側延長上にはOS89－86次調査地のSD504があり、同一の溝と推定できる。

SD503　OS89－7次調査地南区の西壁際で検出した南北溝である(図222)。西肩は調査地外にある。調査地内では幅0.6m、深さ0.5mで、復元幅は1m程になろう。埋土は3層に分れる。瀬戸美濃焼天目碗が出土した。屋敷境の溝と考える。方位はN3°Eと北で東に振っている。

SD504　OS89－86次調査地の南北溝で幅0.8m、深さ0.4m程である。現在の敷地の東にある南北道路との境界から約3m離れた位置に東肩がある(図232、図版30下)。北延長上には先に述べたOS87－69次調査地のSD502がある。2つの溝の総延長は約16mとなる。これらはその位置から同一の溝と推定できる。方位はN4°Eで、東側の南北道路の方位がN1°Eであり、SD502およびSD504の方が北で東に振っている。この溝と同じ方位となるものには、現在ここの西側にある敷地境や、南側街区の西側敷地境がある。OS89－86次調査および北側のOS87－69次調査の敷地の方位がこの街区の中では異なっており、東側の南北道路に規制された可能性が高い。このSD504から西方向にほぼ直角に取付いている溝が2条(SD506・507)枝分かれしている。

SD505　OS89－86次調査地の南北溝で、SD504の東肩から0.9mの位置に西肩があり、平行に延

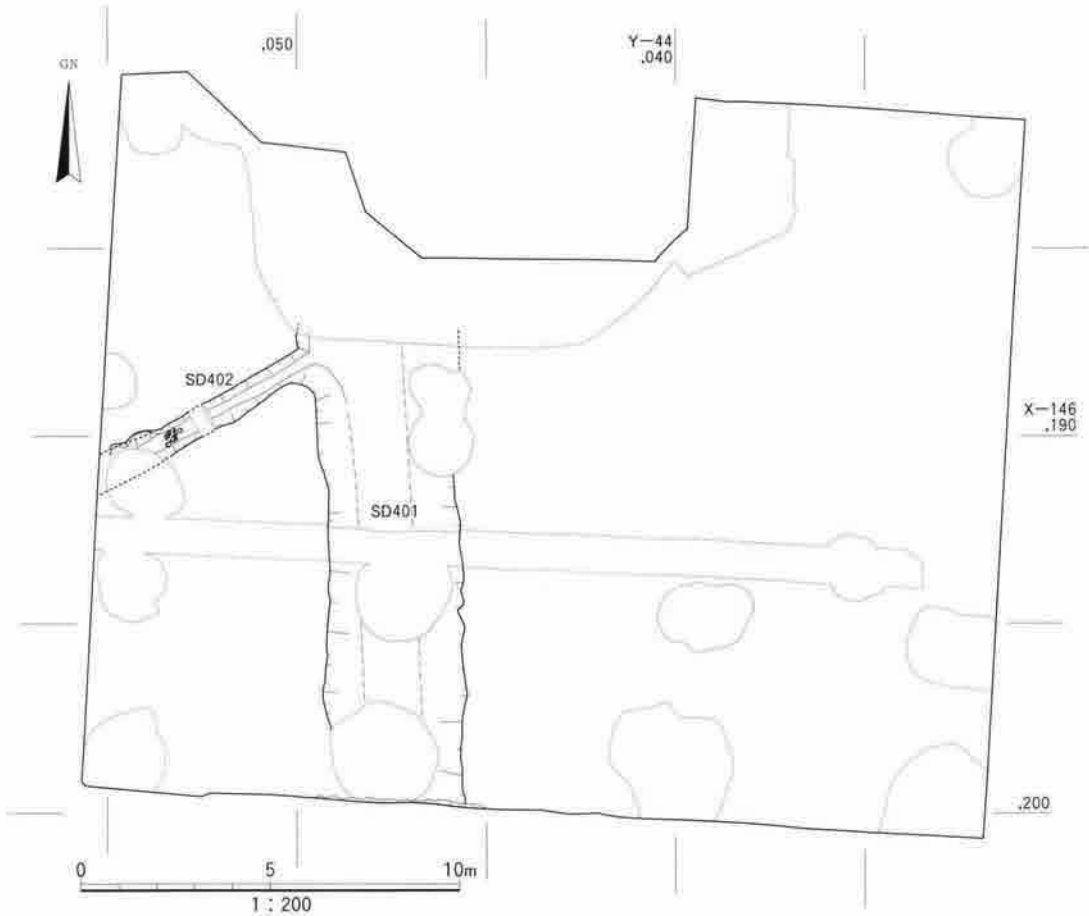


図233　OS92－12次豊臣後期遺構配置図

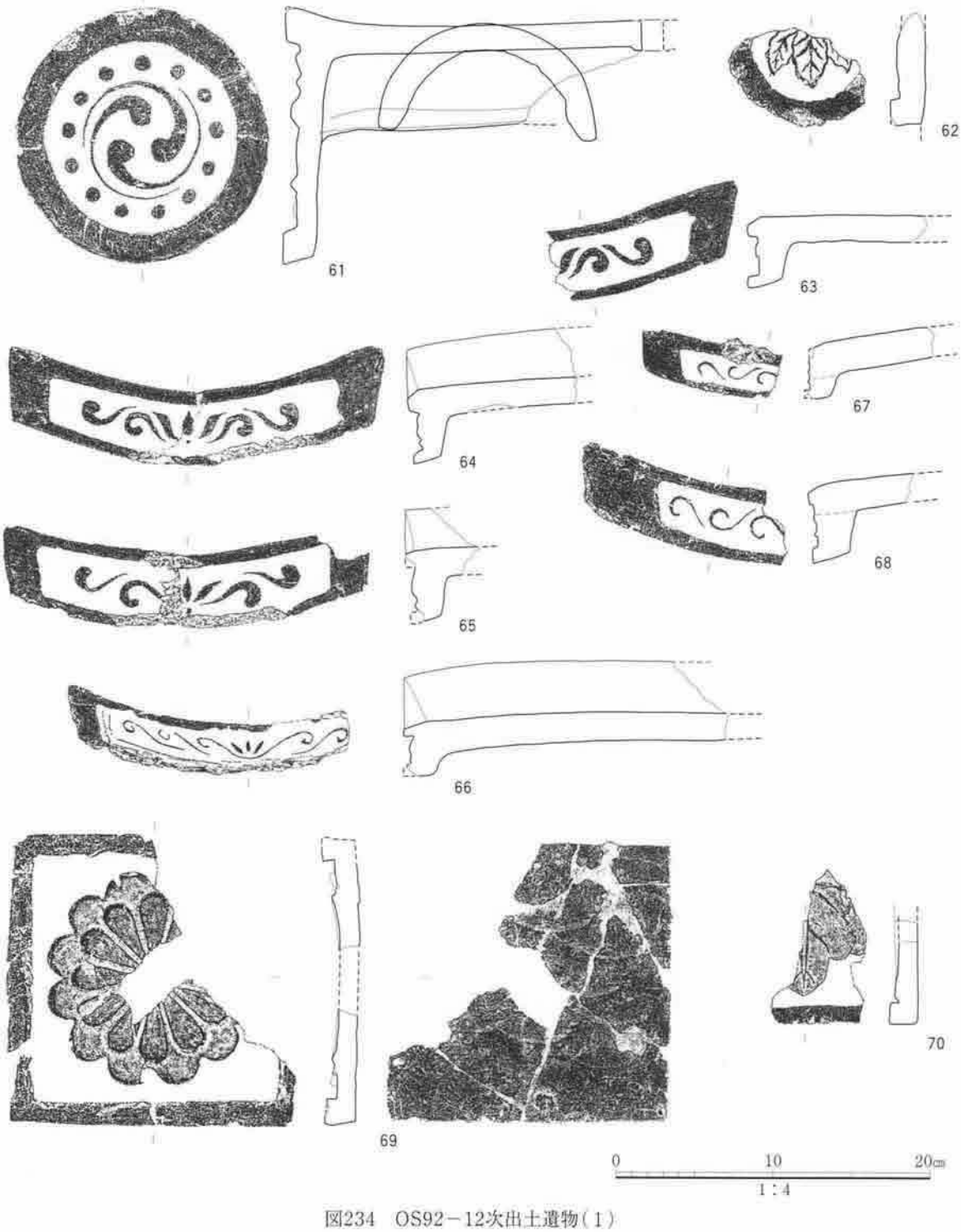


図234　OS92－12次出土遺物（1）

びる。幅0.6m、深さ0.1mである。わずかな範囲しか検出していないため、詳細は不明である。

SD506　OS89－86次調査地の東西溝で、SD504から西に枝分かれしており、同一時期に埋没している。幅約1m、深さ0.3mと大きい。図239の青花皿92が出土している。先のSD504も幅が0.8mと比較的大きく、この両者は敷地境の溝か道路側溝であったと推定している。

SD507　OS89－86次調査地の東西溝で、SD506の北に0.2m離れて平行している。SD504より枝分かれしており、SD504と同時存在していたのであろう。この溝は埋まった後、埋土上から柱穴が掘

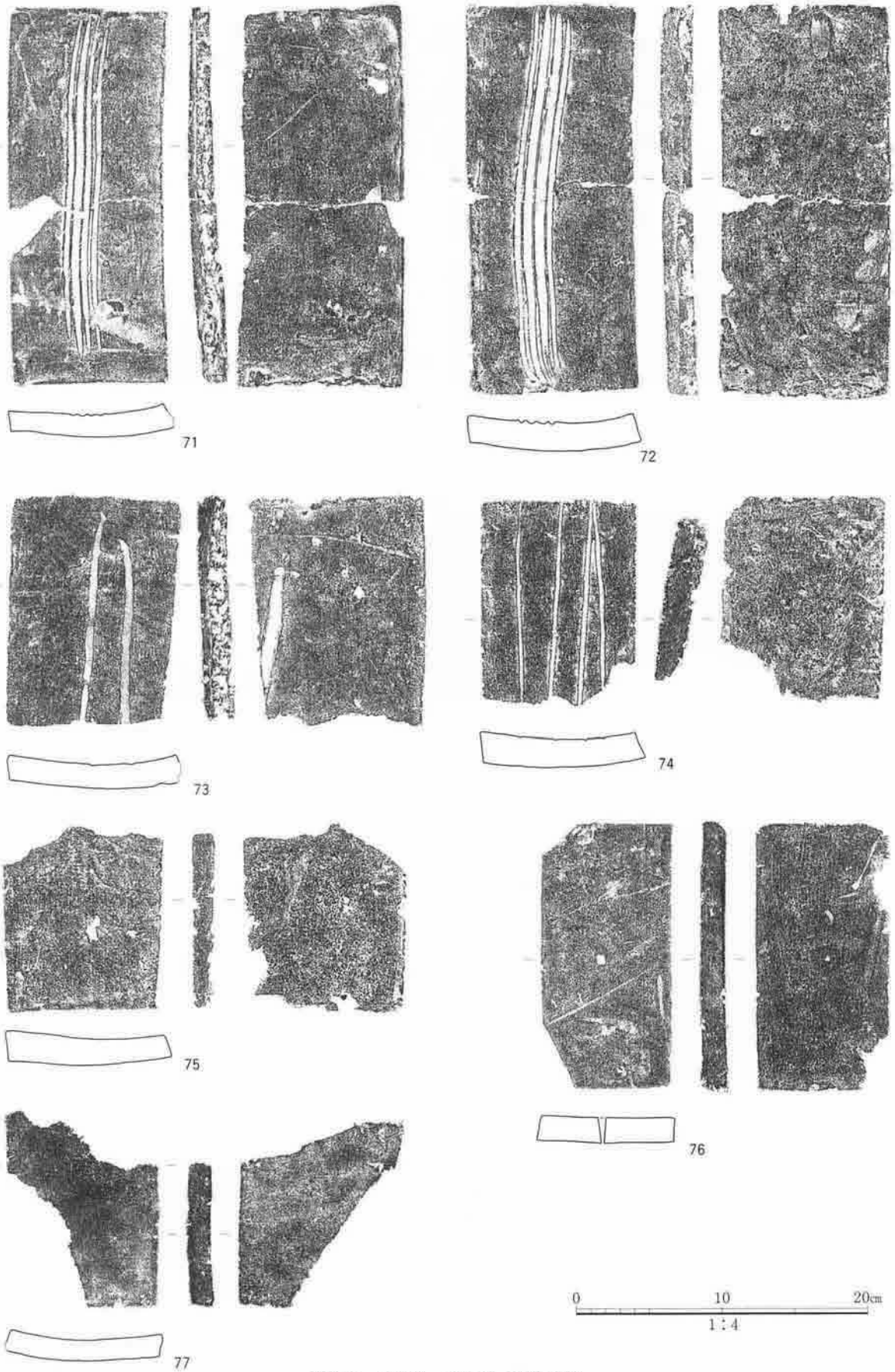


図235　OS92－12次出土遺物（2）

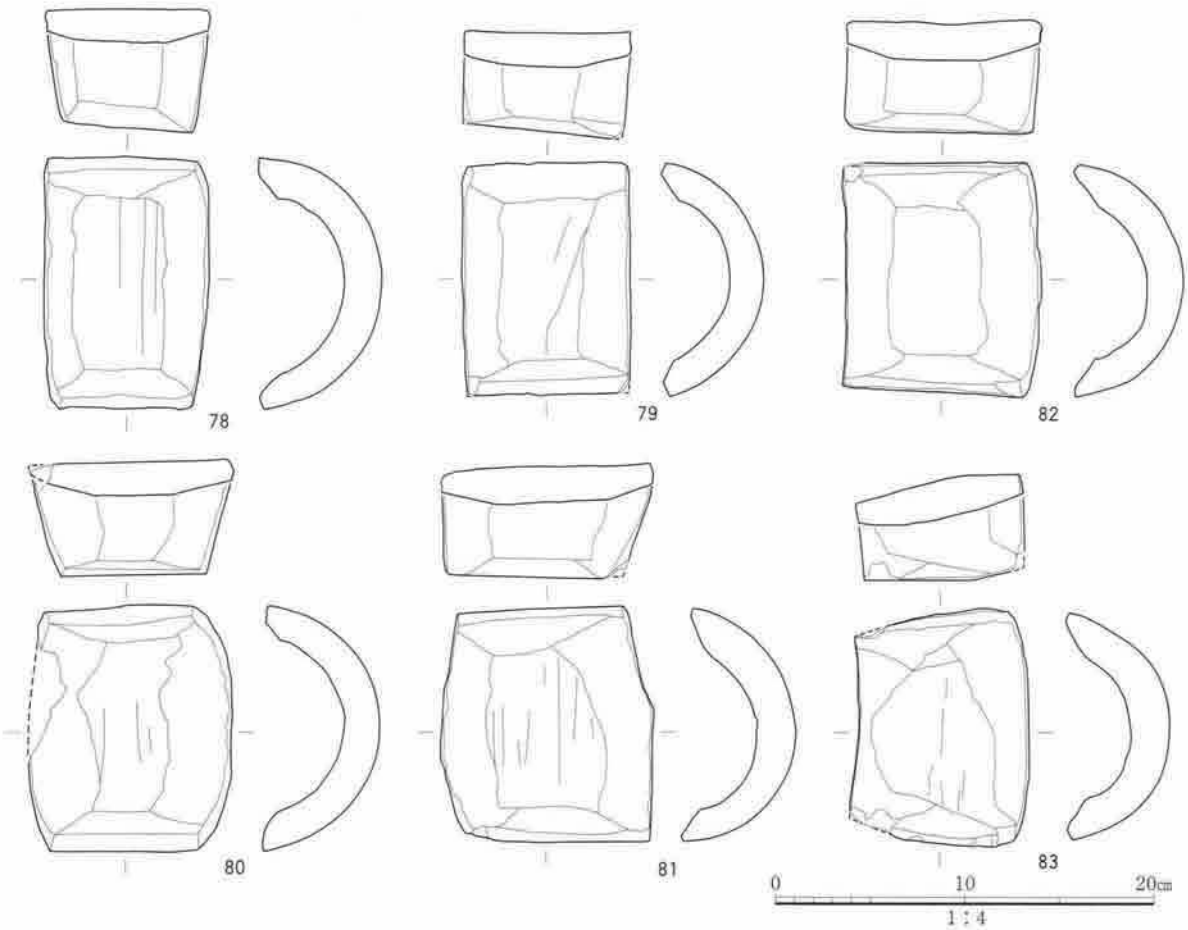


図236　OS92－12次出土遺物(3)

られている。柱穴は溝内に1.9m間隔で3基検出した。柵として再建されたのであろう。

SD401　OS92－12次調査地の中央にある南北方向の溝で幅約3.5m、深さ0.7mもの大きな溝である(図233、図版33下)。埋土は大きく3層に分れ、下層は粘土偽礫を含む褐色粗粒砂、中層は暗オリーブ灰色粘土、上層は焼土や炭化物が混る黄褐色粗粒砂であった。上層に混る焼土は大坂夏ノ陣の焼土である。溝の方位はN2°Wである。中層と上層の間に多量の瓦片が広がっていた(図234～236)。瓦の多くはSD401から出土したものであるが、同時に第4層から出土したものも図示している。

図234の61はSD401出土の巴文軒丸瓦、62は第5層上面のSK502から出土した金箔押桐文飾り瓦(K191)である。63～67は第4層出土で、63は金箔押軒平瓦(H113)である。68は第5層出土の唐草文軒平瓦である。69は金箔押菊文方形板状飾り瓦(K189)、70は金箔押桐文方形板状飾り瓦(K190)で、第4層から出土している。71～77はSD401出土の熨斗瓦で、71・72は凹面に櫛による条線を、73・74はヘラで条線を入れているが、75～77にはそうした条線はない。一側面に破面が残っており、平瓦を縦方向に分割している。分割は平瓦の凹面から行っている。78～83は面土瓦である。78・79は平面形が長方形を呈しているもので、80・81は両側縁が膨らむもの、82・83は一側縁が膨らみ、他縁がやや凹んだ形態のものである。いずれも丸瓦と同じ形態のものを分割して作ったものと考えられるが、凹面の面取りや平面形態を考えると、長方形のものが分割し面取りするだけの手間であるのに対し、ほかの2種は側縁も加工しており、手間がかかっている。

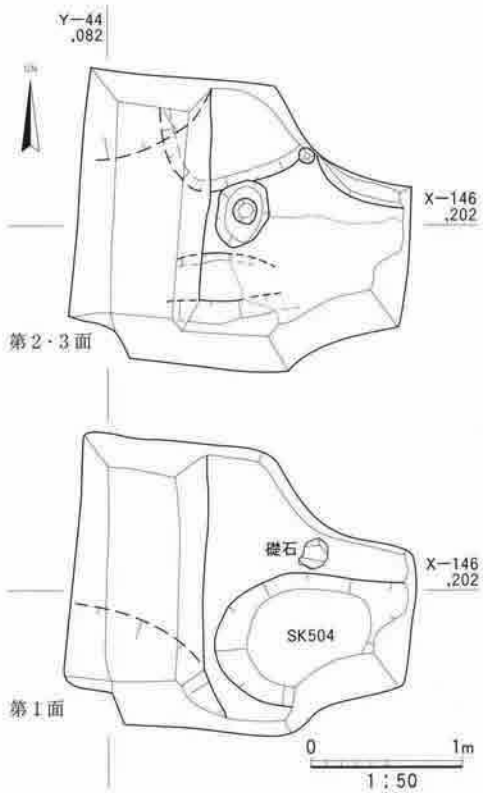


図237　OS89－7次北区豊臣前期遺構配置図

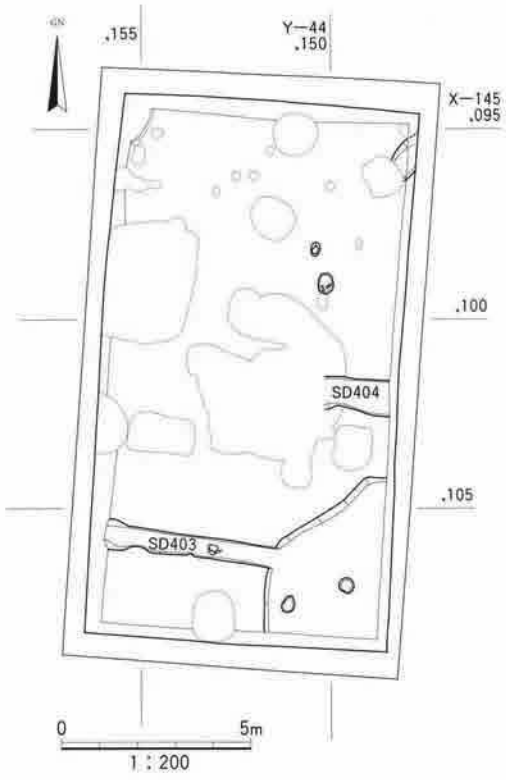


図238　OS90－108次豊臣後期遺構配置図

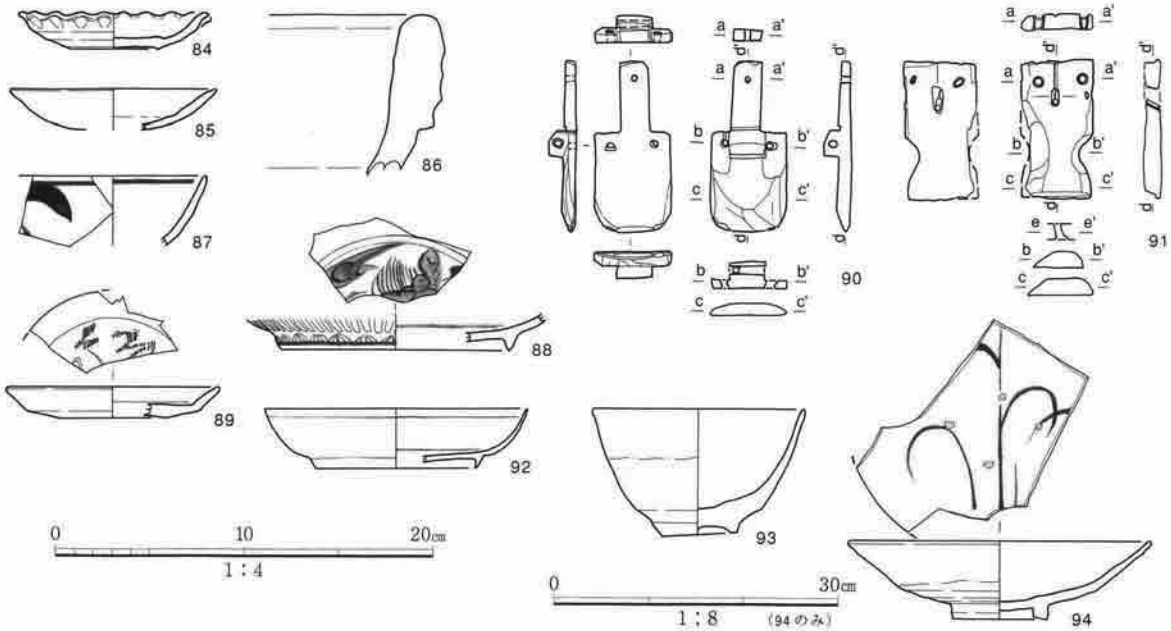


図239　OS89－7・89－86次出土遺物

OS89－7次SK504(84～91)、OS89－86次SD506(92)・SK503(93)・上層土壙(94)

SD402　OS92－12次調査地の**SD401**に繋がる溝である(図233)。幅0.7m、深さ0.25mで、方位はN60°Eと大きく斜行している。人骨が出土している。

SD403　OS90－108次調査地の南部に検出した(図238)。幅0.5～0.8m、深さ0.2mの東西溝で、南東隅にある浅い落込みに続いている。方位はE9°Sである。

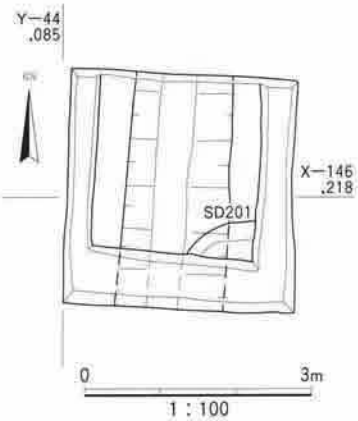


図240　OS89－7次南区
徳川期遺構配置図

SD404　OS90－108次調査地東端で検出した東西溝である。幅0.9m、深さは0.4mあり、中央付近の攪乱で西側が削平されている(図238)。

OS89－7次調査地の北区では豊臣前期の土壙群が見つかっている。いくつもの土壙が重複しており、ゴミ穴が継続的に作られる場所であったのであろう(図237)。

OS89－86次調査地では第4層の上面から唐津焼皿94が出土した土壙を検出した。このほか、OS90－108次調査地ではSD404の北で小型の土壙があり(図238)、OS92－12次調査地では豊臣前期のSB505の南端付近で備前焼甕を埋めるSK501と、金箔押桐文飾り瓦(K191)が出土したSK502のほか、多数の土壙を検出した。

OS89－7次調査地とOS89－86次調査地の土壙から出土した遺物を図示する(図239)。

84～91はOS89－7次調査地のSK504から出土した遺物で、84は瀬戸美濃焼皿、85は土師器皿、86は備前焼甕の口縁部である。87～89は輸入磁器で、87は青花碗、88は青花皿で、89は同安窯系の青磁皿である。89は下層の中世遺構に伴うものであろう。90・91は木器で、90は平面形が杓に似るが、平面には直径5㎜大の木釘孔とさらに小さな穴がある。また、その他面には高さ8㎜、長さ20㎜の突起があり、それにも木釘孔が貫通し、木釘が遺存している。幅の広いほうの先端部は突起のあるほうが削り落され、薄くなっている。91は下部両側縁に抉りを入れるもので、上部に直径5㎜大の木釘孔がある。一つには木釘が遺存する。ともに何かの部材と思われるが、どのようなものかは不明である。ていねいな加工ではない。これらは豊臣前期に属する遺物群であり、OS89－7次調査地では豊臣後期の遺構が削平されている可能性がある。

92～94はOS89－86次調査地の遺構から出土したもので、92はSD506から出土した青花皿である。豊臣前期に属する。93はSD507を切るSK503から出土した唐津焼碗で、94はその上層の土壙から出土した唐津焼皿である。

d．徳川期

徳川期の遺構は19世紀代のものまで検出されているが、今回は17世紀前半と考えるOS89－7次調査地のSD201を報告する(図240)。

SD201　幅1.2～1.4m、深さ0.1mの南北溝で、拳大の礫が底に食込んでおり、底面の凹凸が著しい。周囲で検出されている徳川初期の遺構面の高さから判断すると、この溝は上部を1m以上削平されていると推定される。北側では検出されていない。敷地境の溝になる可能性もあるが、現在の敷地境とは場所が異なっており、別の性格の溝であろう。

3)まとめ

i)古代以前

この地区で行った調査は面積が狭小なものが多く、遺構の全体を把握できたものが少ない。また、

深度が古代の遺構面まで達しなかったものもあり、この地区の古代の景観を描くには資料が不十分な状況である。

しかし、近接しているOS89－７・92－６・92－12次調査地の３個所では、地山が落込む地形を検出し、そこに古墳時代から飛鳥時代の土器が含まれる地層が堆積していた。落込みの方向は東に位置するOS92－12次調査地では東側が高く西に低くなる地形で、この西に位置するOS92－６次調査地では南東方向に低くなる地形であった。また、これらの南側に位置するOS89－７次調査地では北に低くなっている地形であった。こうしたことから、この３個所の中央に南西方向に続く谷地形が埋没していることが判明する。

この落込み内には５世紀末とされるTK23型式の須恵器杯(図225－29)も含まれており、この周辺が古墳時代から人々の活動範囲となっていたことがうかがわれる。また、調査地の南東400ｍの地点では５世紀後半の16棟の大型倉庫群や、その上層にはTK23型式の須恵器高杯を竈の支脚に使っていた竪穴式住居も見つかっており[大阪市文化財協会1992a]、５世紀代の集落の範囲が上町台地の頂部から西側斜面にまで広がっていることがわかる。

一方、ここにあった谷地形は飛鳥時代までは放置された状態であったが、OS92－６次調査では古代の整地層である第８層が落込みを埋めており、平坦面を造成しようとしていることがわかる。

その詳細な時期はこの調査でははっきりしなかったが、後述する本章第４節では８世紀中葉と末の土器を含む整地層が落込みを埋めていることがわかる。この地区の落込みも同様に８世紀代に整地され、平坦になっていったのであろう。

また、この一帯では中世の遺構から飛鳥時代後半の軒丸瓦や、奈良時代の後期難波宮に伴う重圏文系の軒瓦、平安時代の軒瓦が出土している。同笵の平安時代の瓦が出土するのは上町台地上のこの一角と、西側に下りた東横堀川沿いのＤ地区OS87－100次調査地であり(第Ⅲ章第10節)、それと、同笵ではないが平安時代の瓦が出土する場所としてＣ地区OS85－28次調査地がある(第Ⅱ章第４節)。いずれも上町台地の西側斜面の北部に集中しており、この一帯の奈良時代以後の開発をうかがわせる資料である。

本書で扱った上町台地北半部には、奈良時代末以降の遺構・遺物が出土する地点が散見される。第Ⅱ章第１節と第Ⅲ章第１節で記載した谷町筋に近い高台一帯、それから西に下った第Ⅱ章第４節で扱った東横堀川の分流地点の東側一帯、そこから東横堀川を南に行った一帯(第Ⅲ章第９・10節)、そしてここで報告した一帯である。

第Ⅱ章第１節と第Ⅲ章第１節付近は上町台地の西側斜面でありながら、周囲よりも高くなっているところであり、平安初期の建物群が集中しており、公的な施設の存在が推測されるところである。第Ⅱ章第４節で扱った東横堀川の分流地点の東側一帯は、西側に東横堀川の前身であるラグーンが存在していると推定しており、そこには港湾機能があったと推測するところである。その港湾機能をもつ集落に付随する寺院の存在も想定される(註１)。

東横堀川を南に行った第Ⅲ章第９・10節一帯はラグーンの奥まったところであるが、平安時代の井戸も５基見つかっており、人々の集住する地域となっていたようである。

この節で報告した台地の西側斜面は台地上に登ったところで、ここにも寺院などの瓦葺きの建物の存在が想定されるところである。

これら4地区が同一の遺跡として繋がっているとは思われず、平安時代にはこの3個所に瓦を葺いた施設が建立されていたのであろう。

ii)鎌倉時代～大坂本願寺期

この地区には古代以降の地層や遺構が散発的に発見されている。

OS86－35次調査地では4基の土壙が集中しており、古代瓦と一緒に13世紀中葉の瓦器が出土している。13世紀代の瓦器は東側の上町台地頂部の旧大阪市中央体育館地域[大阪市文化財協会1992a]や東側斜面の難波宮域東端部付近でも出土している[松尾1981]。それ以前の12世紀代の瓦器が出土する地点が東横堀川沿いであったものが、この時期になると、台地上にも瓦器が出土する地点が増加してくる。この一帯では耕作痕跡や作土と考えられる地層もあり、集落外に営まれてきた耕作地が次第に広がってきていたのではなかろうか。

大坂本願寺期の遺構は見つかっておらず、先に述べた耕作地が広がっていた可能性がある。

iii)豊臣期

豊臣期には北で東に振った遺構がいくつかの調査地で検出されている。OS87－69次調査地とOS89－86次調査地で検出したSD502・504やそれに直交するSD506・507などは、この地域の城下町の地割方位を示すものであろうし、それ以外でもOS90－108次調査地のSB501、その上層のSD403・404、OS92－12次調査地の下層建物SB502・503がある。SD502・504は北で4°東に振っているが、現在の南北道路とはわずかに方位を異にしている。また、それに直交するSD506・507も現在の屋敷地内にあり、これらの溝を道路側溝であるとすれば、道路の位置が大きく変わっていることになる。

OS92－12次調査地では豊臣前期段階で北で西に振る方位の建物が建設されている。この方位は上町台地西側斜面一帯では少なく、この調査地だけがこの方位になっているようである。下層にある地山の落込みに規制された方位なのであろう。

（松尾）

註)

(1)12世紀末から13世紀前半には渡辺津に「渡辺別所并木屋敷地」があり、そこには浄土堂や倉庫があったとする[平凡社地方資料センター編1986c]。

第３節　OS87－152次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

ここで報告するのは大阪城の南にある東西方向の内本町通に面するOS87－152・92－22次調査地と、西側に位置するOS89－19・92－60次調査地である。（図241）。

周辺での調査には内本町通を挟んで南側街区に位置するOS89－６・91－４次調査地、その西側街区にあるOS91－34・90－112次調査地があり（第４節）、北側にはOS89－７・92－６次調査地などがある（第２節）。東には［大阪市文化財協会2002b］の第Ⅲ章第４・５節で報告した各調査地がある。

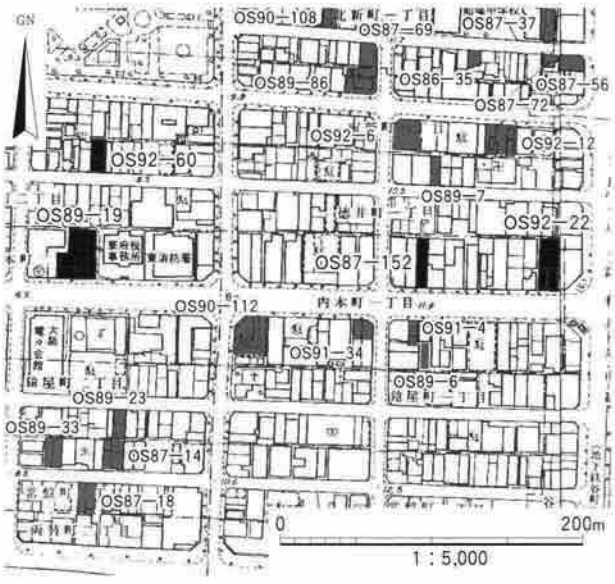


図241　OS87－152次などの調査地位置図

調査地は上町台地の西側斜面にあり、内本町通東端の谷町筋との交差点ではTP+15.4m、OS87－152次調査地前付近ではTP+11.4m、OS89－19次調査地西側交差点付近ではTP+6.9m、西端の松屋町筋との交差点ではTP+6.1mと東側が高く、西側に低くなる地形であるが、南北方向の標高を見ると、起伏のある地形を呈している。内本町通の北５本目の大手通ではTP+13.7mであるが、その南の糸屋町ではTP+12.5m、北新町ではTP+11.7m、南新町ではTP+10.9m、徳井町ではTP+10.5mと最も低くなっており、この内本町ではふたたび高くなりTP+11.4m、南の鎗屋町ではTP+12.2m、常盤町ではTP+12.5mとなっている。内本町の北側の東西通である徳井町が最も低くなっている。前節で報告したように、北側のOS89－７・92－６・92－12次調査地付近には谷地形があることから、その名残で低くなっているのであろう。

ここで報告するOS87－152・89－19・92－22次調査地では豊臣後期の石垣および溝を検出した。石垣は３個所以外に、OS95－26次調査［南秀雄1997］とOS00－32次調査でも検出している［松本啓子2001b・2002］。それらで検出した溝も上町地域の城下町開発に伴うものと考えられる。この一帯の豊臣後期の街区構造を知ることができる重要な成果である。

東端に位置するOS92－22次調査地では重機による掘削は後述の第１層までとし、以下は人力による掘削で進めた。途中、第２層上面にて豊臣期の石垣が検出されたため、この部分についてはこれ以上の掘下げを行わなかった。また、第６層以下については中央部にトレンチを掘削し堆積状況の把握のみを行った。その西側のOS87－152次調査地ではこの石垣を中心に調査を行うとともに一部において深掘りを行い、地表下３ｍまでの地層の観察に努めた。西端に位置するOS89－19次調査地では東から連続する豊臣後期の石垣と溝を検出し、その下層では豊臣前期の遺構面を２面検出した。ここでも豊臣後期と前期の遺構群の方位が変化していることが判明した。OS89－19次調査地の北側街区

に位置するOS92－60次調査地では地表面から約１ｍの深さで地山を検出した。その上位で、豊臣後期の遺構面を検出した。地山が高い所であったため、豊臣前期の遺構面は削平されているものと見られる。

２）調査の結果

ｉ）層序と遺物

OS92－22次調査を中心として記す（図242）。

第１層　江戸時代の整地層で大きく２層に分かれる。下部は後述の石垣の南側を埋立てたもので、上部は石垣を破壊しつつ整地を行ったものである。下部から唐津焼碗38、瀬戸美濃焼灰釉向付39、瀬戸美濃焼志野皿40・蓋41、青花小碗42・皿43、李朝白磁鉢44などが出土した（図243）。出土遺物は豊臣後期のものと同様である。

第２層　石垣構築に伴う厚い整地層で、層厚は120㎝ある。上部が削平されているため本来はもう少し厚かったと考えられる。出土遺物は少ないが、上下の関係から三ノ丸築造に伴う整地層の可能性が高い。上面の高さは削平されているため比較しにくいが、この層の上面にあるSD201の底面の標高を比べると、東側のOS92－22次調査地ではTP+10.7ｍであるが、80ｍ西に位置するOS87－152次調査地ではTP+7.9ｍと2.8ｍも低くなっている。その間にあるOS95－26次調査地ではTP＋９ｍ付近である。OS95－26次調査地の西10ｍの位置にあるOS00－32次調査地ではTP+7.5ｍと西に向かって低くなっている。東端のOS92－22次調査地と西端のOS00－32次調査地での比高が3.2ｍにもなる。

第３層　オリーブ褐色粘土質シルトおよび明黄褐色粗粒砂などの薄層からなる整地層で、層厚は20～30㎝ある。瀬戸美濃焼碗17・折縁皿18・19・鉢20、軟質施釉陶器碗21、備前焼擂鉢22・鉢23、丹波焼大平鉢24、青花碗25・小碗27・皿29、輸入色絵磁器碗26、白磁碗28・皿30・31、李朝白磁碗32・33、土師器鉢34・皿35～37が出土し（図243）、21の軟質施釉陶器碗には黒色の釉が掛かっている。

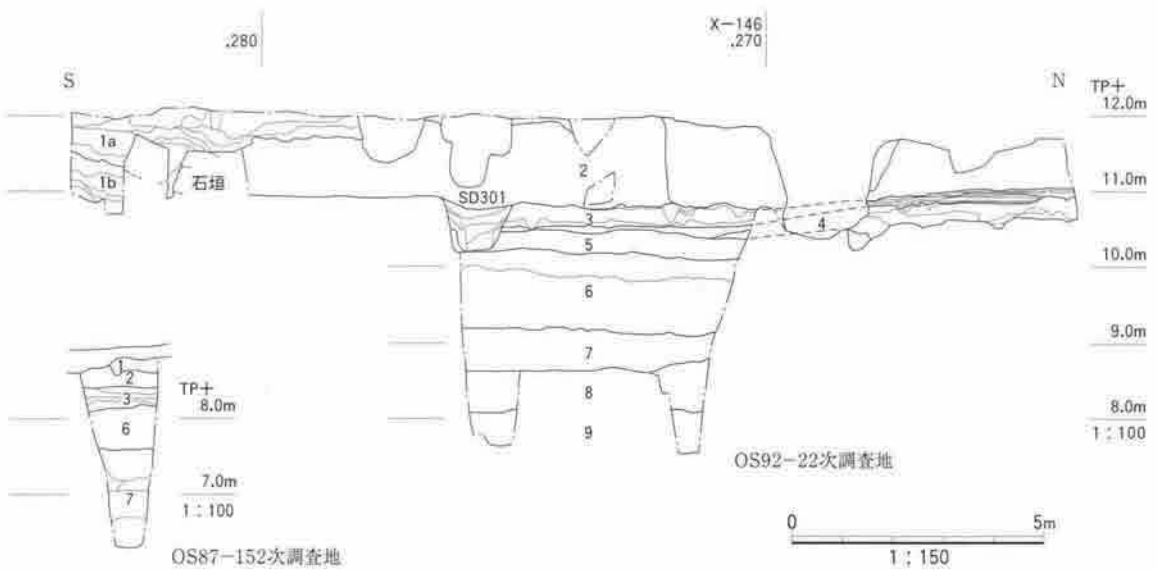


図242　調査地断面図

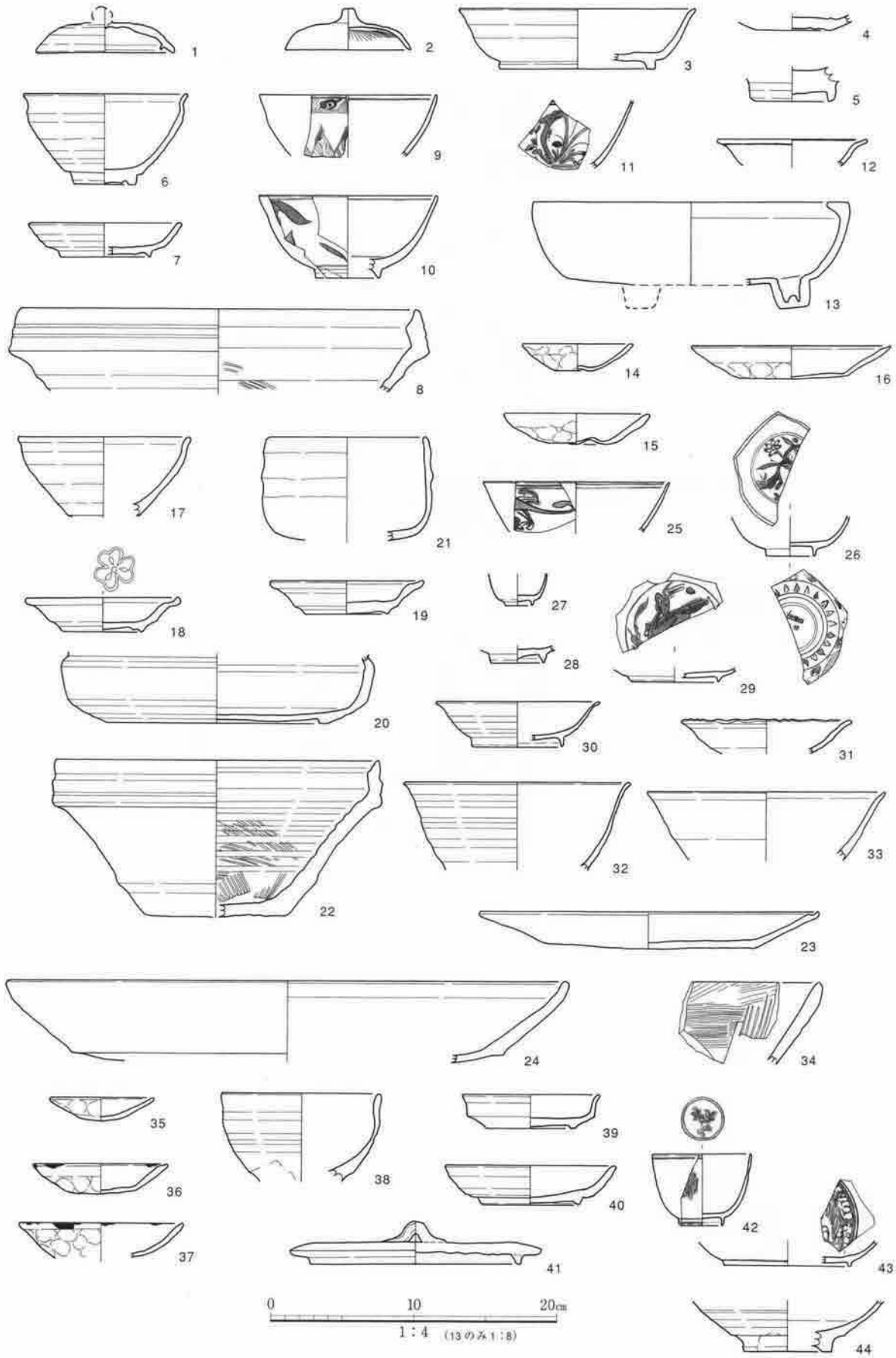


図243　各層出土遺物

第8層(1)、第7層(2・3)、第6層(4)、第5層(5)、第4層(6～16)、第3層(17～37)、第1層(38～44)

26の色絵碗は体部外面に色絵を施しているが、高台内や見込には染付がある。豊臣前期に相当するものである。OS87－152次調査ではいくつかの面をもつ層厚30cmほどの第３層が本層と第４層に対比できようが、２層に分けることはできなかった。本層下面の標高は東側のOS92－22次調査地ではTP+10.5mで、西のOS87－152次調査地ではTP+8.1mと2.4m低くなっている。

第４層　浅黄色粗粒砂および灰黄色シルト質粗粒砂からなる層で、層厚は５～25cmである。OS92－22次調査地の北部に厚く整地されている。瀬戸美濃焼碗6・鉄釉皿7、備前焼擂鉢8、青花碗9～11・皿12、瓦質土器13、土師器皿14～16などが出土した(図243)。青花碗9は芭蕉葉文を描く染付碗C群Ⅰ類[小野正敏1982]で、豊臣期よりさかのぼるものと考えられるが、ほかの出土遺物の年代観より、本層は豊臣前期に属すると判断できる。

第５層　暗オリーブ色粗粒砂質シルトで、層厚は30～35cmある。耕作土の可能性がある。青磁碗の高台5が出土している。

第６層　暗褐色粗粒砂質粘土の上部と黄灰色砂礫混りシルト質粘土の下部からなり、層厚は100cmある。下部から内底面を釉剥ぎした瀬戸美濃焼皿4が出土した。本願寺期に推定できる。OS87－152次調査地では層厚50cmの層を対比させた。

第７層　灰黄色粗粒砂混り粘土質シルトで、層厚は50cmある。土師器蓋2・須恵器杯3などの奈良時代の遺物が出土した。OS87－152次調査では本層以下が４層に分れたが、OS92－22次調査地の各層との対比はできなかった。

第８層　灰オリーブ色中～粗粒砂で、層厚は55cmある。飛鳥Ⅱに属する須恵器杯蓋1が出土した。

第９層　オリーブ黒色粘土で、層厚は50cm以上ある。土師器のほか木片が出土した。OS92－22次調査地ではTP+7.8mまで掘削したが、洪積層の地山は検出できなかった。また、OS87－152次調査ではTP+6.3mでも地山は検出できなかった。かなり深い谷地形が存在している。

この２個所の調査地では古代から中世の地層が２～３mの厚さで整地されている。これによって谷地形が埋没し、現在の地表面はOS92－22次調査地南側の道路上ではTP+14.2mまで嵩上げされ、北側の調査地よりもやや高くなっている。

ii)遺構と遺物

この地区の東部にはOS87－152・92－22次の２個所の調査地があるが、OS92－22次調査を中心として述べ、西部ではOS89－19次調査地の遺構を中心に述べる。

部分的な掘削のため明らかでないが、本調査地は谷地形に当っており、少なくとも本願寺期までには埋戻されていない。この谷地形は周辺で見つかっている谷地形と同一のものである。しかし、調査では豊臣期以前の地層を確認したにすぎず、遺構は検出されなかった。そのため、報告は豊臣期以降に限った。

ａ．豊臣前期の遺構

OS89－19・92－22次調査の第５～３層の各層上面検出遺構が相当する。

OS92－22次調査

第５層上面では礎石建物や溝群を検出した。いずれもE14°Sの方位あるいはそれに直交するもので

ある(図244)。

SD501　敷地南部にある東西方向の溝で、方位は東西軸がE14°Sである。幅は0.7mあり、東西の端は削平されている。後述する礎石建物の南端を限るものであろう。南側は道路になる可能性がある。

SB501　敷地南部に検出した建物で、方位は東西軸がE14°Sである。敷地南東部には約1m間隔で南北方向に並ぶ礎石があり、西側にはこれに平行する礎石列もある。北端は北部の溝群よりも南と推定した。建物の規模は復元することはできなかったが、礎石の配置は北部の溝群と同方位であり、共存していた可能性が高い。

溝群　敷地北部に広がる溝群である。E14°Sの方位が多く、それに直交する方向の溝が東西方向の溝を繋いでいる。これらはほぼ1m間隔で並んでおり、畠の畝間溝の可能性がある。第5層上面では

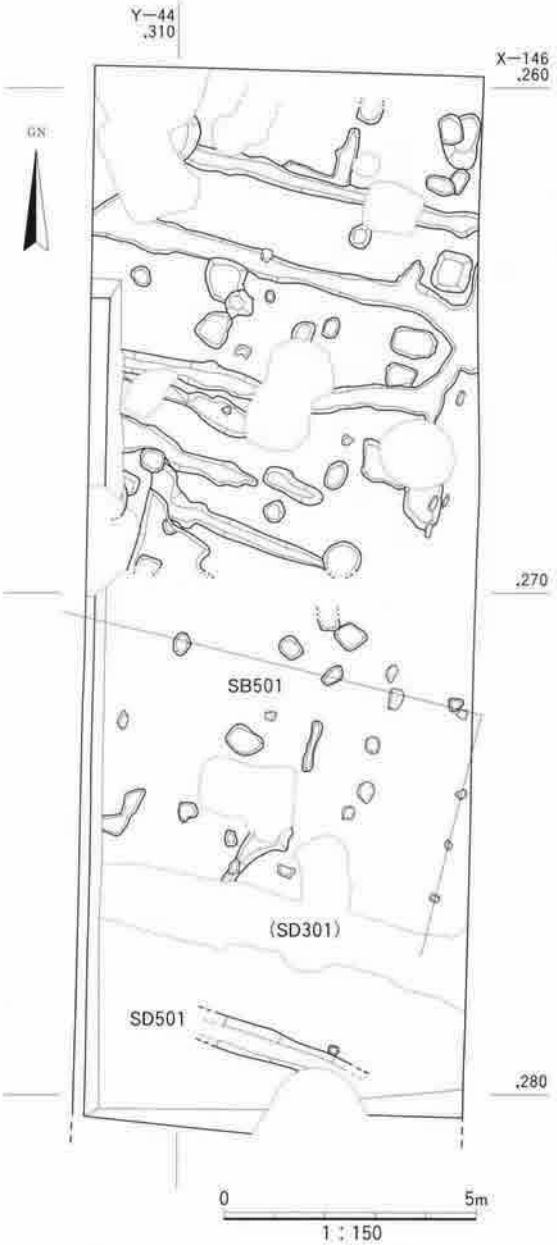


図244　OS92－22次第5層上面遺構配置図

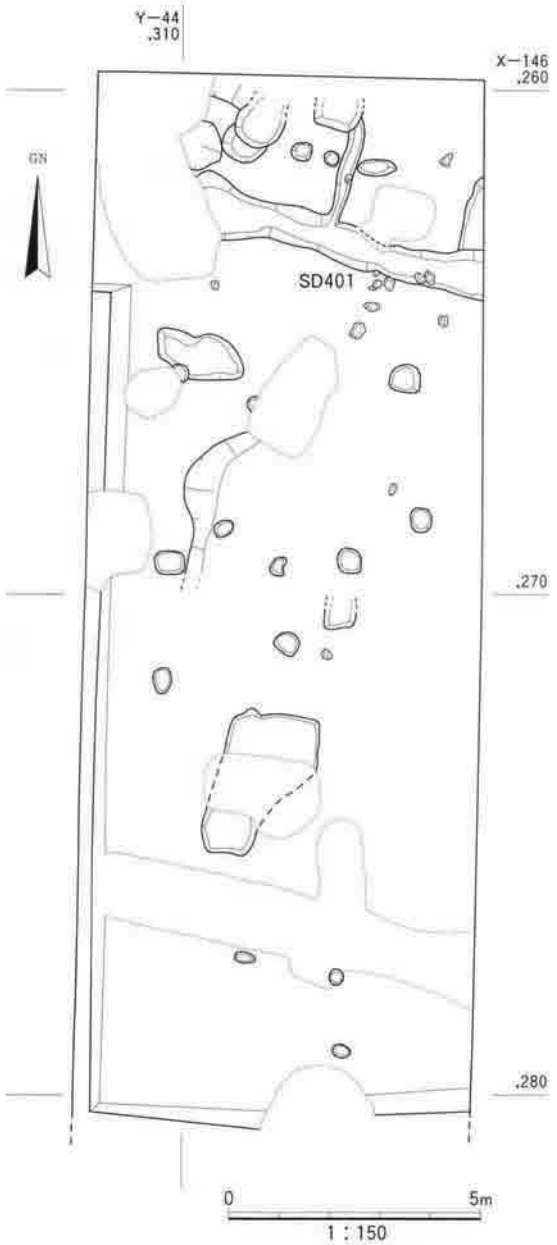


図245　OS92－22次第4層上面遺構配置図

これらの小溝群の間にもピットがあるが、建物として復元できなかった。

第４層上面ではN14°Eの方位をもつ溝のほか、土壙も検出したが総じて遺構は希薄である(図245)。

SD401　敷地北部に検出した東西溝で、幅が0.8～１mとほかの溝より広い。この溝から北に直交する方位で溝が取付いている。耕作地の南限を示す溝の可能性がある。犬形土製品63が出土している(図251)。

小土壙群　SD401の南に点在する土壙群である。建物の柱穴あるいは礎石の抜取穴の可能性もあるが、建物は復元できなかった。この面の溝は第５層上面よりも北に偏在しており、南側に建物空間が広く確保されるようになっている。

第３層上面では礎石のほか２条の溝、竈などを検出した(図246)。

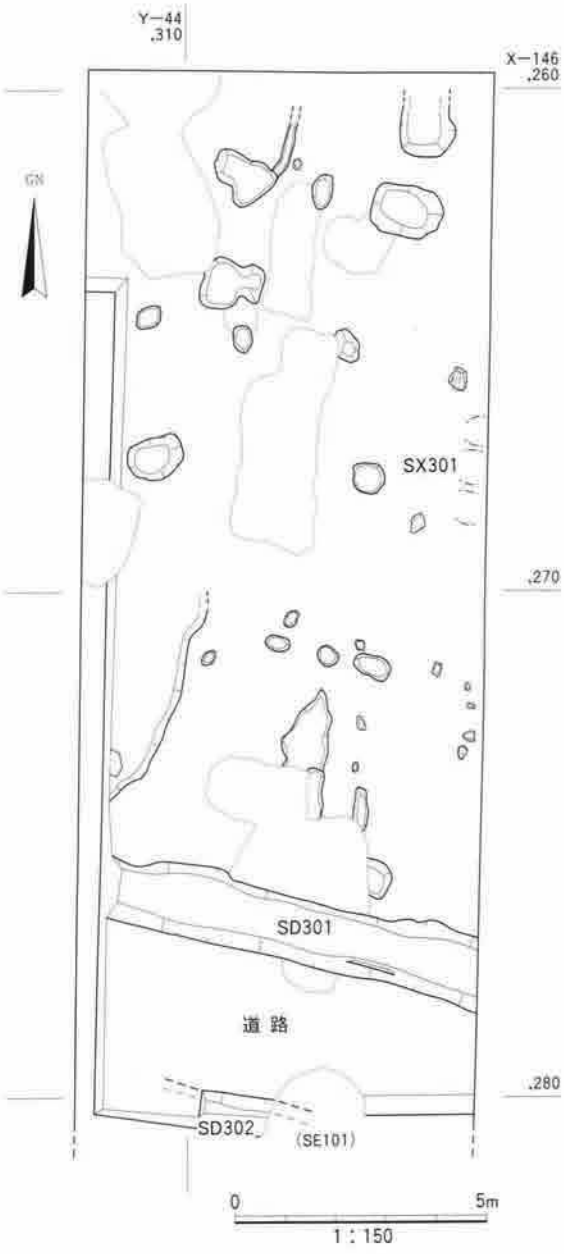


図246　OS92－22次第３層上面遺構配置図

SD301　敷地南部に検出した東西方向の溝である。方位はE14°Sである。幅0.6～0.7m、深さ0.6～0.7mで、一部に杭で止めた板が遺存していた。溝内には多数の杭痕が見られ、本来は両側を矢板で止めていたと考えられる。SD301からは瀬戸美濃焼碗45～49、丹波焼50、備前焼51・52、白磁皿53、青花54～59、土師器60～62が出土している(図251)。遺物の組成は国産陶器では瀬戸美濃焼の天目碗や灰釉ソギ皿があり、青花も豊臣前期に多く出土するものである。

SD302　一部を掘削したにすぎないが、江戸時代の井戸により攪乱を受けた部分の観察からSD301と同様の溝と推定した。SD301の南肩から３m南に位置する。この溝で挟まれた幅３mの部分は粗粒砂や礫を交えて入念な整地が施されており、他の場所に比べて非常に固い。また、遺構もないことから道路であった可能性が高い。

この北側には同方位に並ぶ土壙や礎石があり、復元することはできなかったものの建物が存在してと思われる。また、その間には竈が見つかった。

SX301　燃焼室が３連になる竈で、先のSD301と直交する方向に並んでいるように見られ、SD301の北にあった建物内部の施設と推定できる。上部が攪乱をうけており詳細は不明である。

OS89－19次調査

西端に位置するOS89－19次調査地は、北が高く

南に向って低くなる地形を呈する所で、調査地西壁北端ではTP＋6ｍで、南部ではTP+3.6ｍで、南端では地山がさらに低くなっていた。深掘りトレンチでは中世以前の地層も検出したが、調査は豊臣期の遺構面で終わらざるを得なかった。

地山が高い北部では豊臣後期の遺構面は削平され、後期の整地層の下にある前期の遺構面を検出した。ただ、徳川期以降、現代までの遺構が重複して存在しており、豊臣前期の遺構の多くもそれらに攪乱されていた。地山が低い南部では徳川期の地層の下位に大坂夏ノ陣の焼土層や豊臣期の整地層が検出され、豊臣後期の遺構面と２面の豊臣前期の遺構面を検出できた。

この調査地で検出した２面の豊臣前期遺構面がOS92－22次調査のどの面に相当するのかは、直接連続する地層が不明であるため特定できない。しかし、OS92－22次調査の第５層上面と第４層上面は、部分的な整地によって北部が変更された程度であるが、第３層上面の遺構は第４層上面の全域を整地した後に建設された遺構群であることから、この間に街区変更の画期があると推定した。そこで、OS89－19次調査地の遺構は下位面をOS92－22次調査の第５・４層相当とし、上位面を第３層上面に比定した。上位面の整地層である第３層からは金箔飾り瓦(K129・131・132・135・261)や金箔軒丸瓦(M024・100)、金箔軒平瓦(H047・048・055)が出土している(第Ⅴ章第２節)。金箔軒平瓦(H047)は第Ⅲ章第２節で報告したOS89－58次調査出土の金箔軒平瓦(H053)と接合した。

下位の遺構面にはE15°Nの方位になる東西方向の溝と、それに直交する方位の南北溝があり、それらとほぼ同方向の礎石列や土壙が見つかった(図247)。

SD402　敷地南部で検出した東西方向の溝で、方位はE15°Nである。幅は0.6～1.2m以上になる。調査地の南側の内本町通北側境界の方位がE1°Sの方位をもっており、現在の敷地の方位とは大きく異なる。この溝の北側にはこれに直交する方位の礎石群があり、SB401として復元した。

SD403　SD402の南1.5ｍの位置にSD402と平行して走る東西方向の溝状の落込みである。SD402とSD403の間には遺構がほとんどなく、道路であった可能性がある。しかし、当時の地表面が削平を被っており、詳細は不明である。また、この２条の溝に前後関係があり、両者がともに道路の北側側溝であった可能性もある。

SD404　敷地中央に南北に走る溝で、西側の肩は北部で次第に東方向に湾曲するが、南部ではSD402にほぼ直交している。後世の攪乱によって東側の肩はほとんど検出できなかった。幅約0.8m以上になる。この溝の東側には後述する南北溝が３条検出されるが、西側には溝はない。

SD405　敷地東側に検出した南北方向の溝で、幅約0.6ｍである。方位はSD402にほぼ直交する。北端で西に曲る。SD404より東６～７ｍ付近にある。

SD406　敷地北東端で検出した幅0.7ｍのSD402に平行する東西溝である。この溝の西延長と先のSD405北端の屈曲位置が違っているため、SD406の位置は敷地境にあたるとは考えられない。敷地内の区画溝の可能性がある。

SD407　SD406の東にある南北溝で、幅は0.5ｍである。SD406がこれから枝分かれしている。SD404より東13m付近に当る。

これらの溝は南にあるSD402が基本軸になり、それに直交するSD404・405・407が敷地境の溝と



図247　OS89－19次第５・４層相当層上面遺構配置図

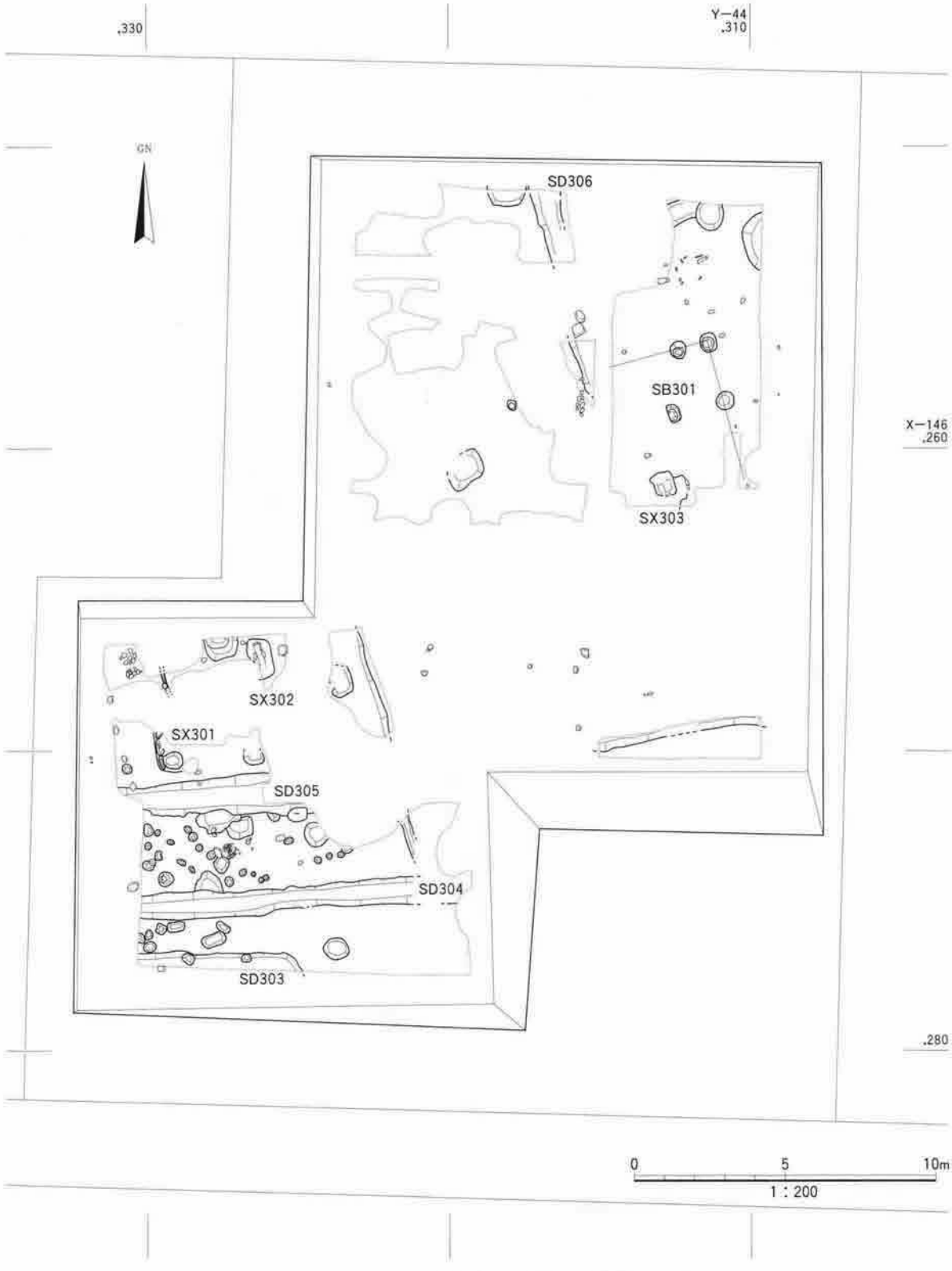


図248　OS89－19次第３層相当層上面遺構配置図

考える。溝によって区画された範囲が屋敷地になろう。以下、各敷地内部の遺構を記述する。

SB401　敷地西端でSD402の北側に検出した礎石列で復元した。SD402に平行あるいは直交する礎石群があり、それを建物範囲と考えた。調査範囲外に延びている。東側の南北礎石列の位置はSD404から約９ｍの位置にある。

これらのほか、SD404とSD405に囲まれた区画内には、南北および東西方向の溝や竈の痕跡があった。溝はSD402に平行あるいは直交している。SD405の東側区画には数基の土壙と竈の痕跡が検出された。それらの方向はSD402と同じ方向をもっており、同時に存在していたものであろう。

ここで検出した溝に囲まれた区画は、間口が狭いことや敷地内に竈が存在していたことから、東西に並ぶ町屋になると推定される。SD402より南側にあった道路に間口を開いていたのであろう。

上位の遺構面では敷地南部に東西方向の溝３条があり、周囲にはピットや竈が散在する(図248)。北部では南北方向の溝と柱列・竈が見つかった。中央部は上位からの削平で遺構は検出できなかった。

SD303　敷地南端にある東西方向の溝で、東端が南に曲るか途切れている。方位はほぼ正東西で敷地の方位に近くなっている。北側にある溝とほぼ同方向にある。

SD304　SD303の北1.2ｍの距離を置いて東西に走る溝で、方位はＥ４°Ｎである。幅は0.8ｍである。

SD305　SD304の北2.5ｍの距離を置いて東西に走る溝で方位はＥ４°Ｎである。幅は1.0～1.4ｍあり、先のSD304と同時に存在する道路側溝と考える。この間の約2.5ｍの間が道路になろう。この方位は下位遺構面の方位であるE15°Nとは大きく異なっている。下位遺構面の道路方位がこの時点で変更されていることがわかる。

SD306　敷地北部に検出した南北方向の溝である。方位はN14°Wで、下位の遺構群と同じ方向に振っている。幅は0.8ｍである。下位のSD405とほぼ同じ位置に検出した。ここからは大型の金箔押方形板状桐文瓦(K136)が出土した。また、この西に広がる瓦溜りから金箔押菊文軒平瓦(H059)が出土している。

この溝が南側の道路に面する屋敷地の境界であるならば、南側のSD303～305は付替えられているにもかかわらず、それに開口する屋敷地の境はSD303～305の方位に直交することなく、旧来の方位が踏襲されているようである。東西方向の道路が変更された後も屋敷地の方向はしばらく以前の形態を保っていたのであろう。

SB301　SD305の東に検出した建物で、方位はSD305と同じ方位に傾いている。内部に竈SX303がある。

SX301　SD304の北側に検出した竈である。南側に燃焼室を置くもので、削平が著しく、燃焼室は１基と考える。

SX302　SX301の北東４ｍの位置に検出した。燃焼室が１基のもので、北側に燃焼室を置く。

SX303　SB301の中にあったと推定できる竈である。被熱した部分しか検出できなかったが、燃焼室は１基と考える。

ピット群　敷地南部に検出したピット群で、道路と推定した部分とその南に多い。

屋敷の規模を復元できる材料は少ないが、SB301のある敷地がSD306とSB301の東側柱で囲まれた

範囲とするなら、東西幅は約4mと復元できよう。また、その西側の敷地はSX302の東にある南北方向の段までとすると、約10mとなる。復元される敷地の広さは下位の区画とさほど変化がなく、上位面でも町屋が軒を並べていたと推定できる。

b．豊臣後期の遺構

OS92－22・87－152次調査

OS92－22次調査地では第2層上面検出遺構が相当する。豊臣前期の面に120cm以上の整地を施している。南面するSW201とその前面のSD201を確認した(図249)。出土した遺物の年代観や、両者とも火をうけていることから、三ノ丸築造に伴い築かれ、大坂夏ノ陣で被災したと考えるのが妥当であろう。

SW201　調査地南端に検出した東西方向の石垣で、南に面をもっている。方位はE7°Sである。もっともよく遺存する個所で高さ1.2m、傾斜角度は約70°である。裏込めはほとんどなく上部ほど大きな石が使用されている。矢穴をもつものもある。胴木の使用は不明である。石の表面には被熱した痕跡がある。

SD201　SW201の基部から0.4～0.5m南にある石組溝である。SW201に平行しており、同一設計基準で築かれたものであろう。幅1m、深さ0.4mである。壁は比較的平坦な石を2段に組む個所が多く、底にも同様な石が敷かれている。底面の高さはTP+10.7mである。石の表面には被熱痕跡があり、大坂夏ノ陣によって被災したものと考える。唐津焼64～67、焼塩壺68などが出土した(図251)。図示した唐津焼のうち、65は体部が外反しており向付になろう。66も筒状の向付、67は内面では口縁部付近にしか施釉しておらず、香炉であろう。石が焼けていることから大坂夏ノ陣で被災したと推定したが、遺物の年代も豊臣後期に位置づけられる。

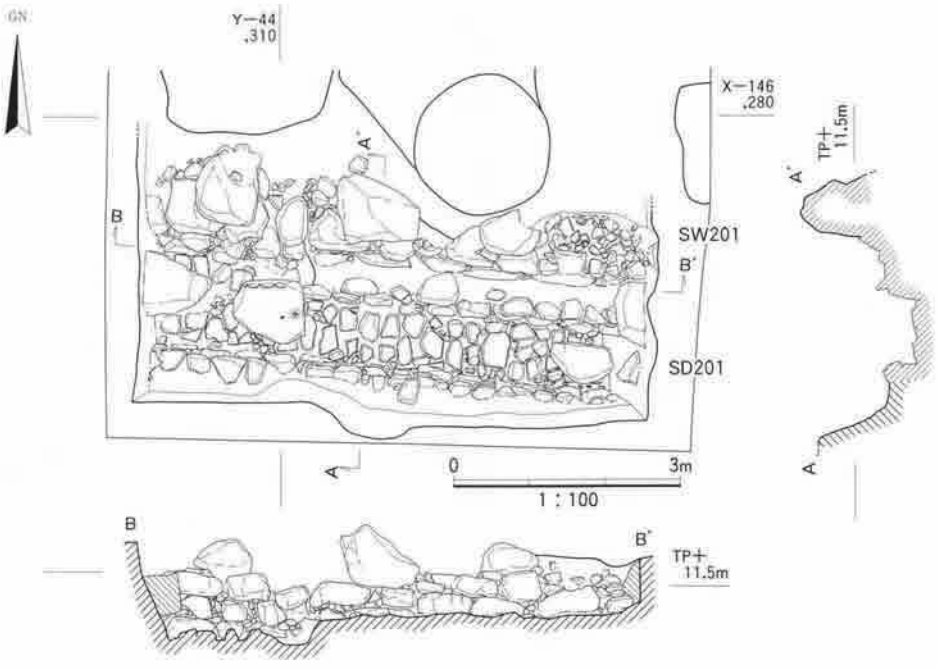


図249　OS92－22次SW201実測図

OS92－22次調査地の西90mにあるOS87－152次調査ではSD201から連続するSD202がある(図250)。OS92－22次調査ではSD201の北に石垣が見つかっているが、ここでは調査トレンチが狭かったため、見つかっていない。大坂夏ノ陣による被災痕跡は確認できなかった。

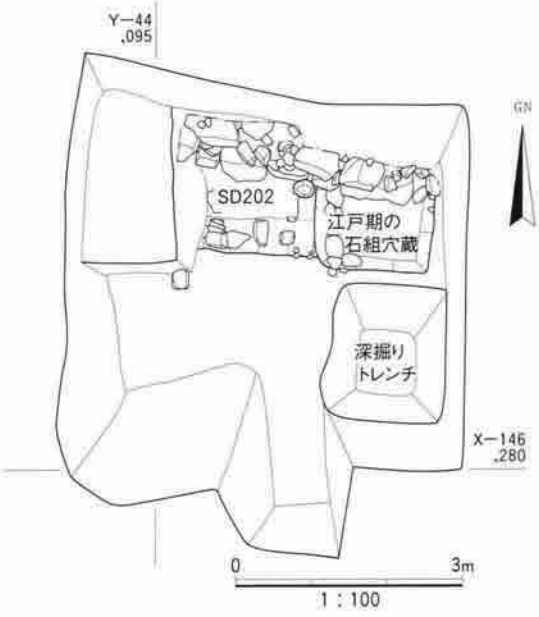


図250　OS87－152次遺構配置図

SD202　江戸時代の石組穴蔵などにより遺存状況は悪いが幅1.3mで、石は2段分0.7mの高さがある。底面の高さはTP+7.9mと、OS92－22次調査地のSD201に比べ2.8m低くなっている。周辺の地形も東から西へ下がることから、西へ排水していたのであろう。

OS89－19次調査

西端に位置するOS89－19次調査地の後期の遺構には、SW201とSD201・202の西側延長線上にある、SW202とSD203を検出した(図252・253)。また、SD203の南側には土壙やピット群を検出した。

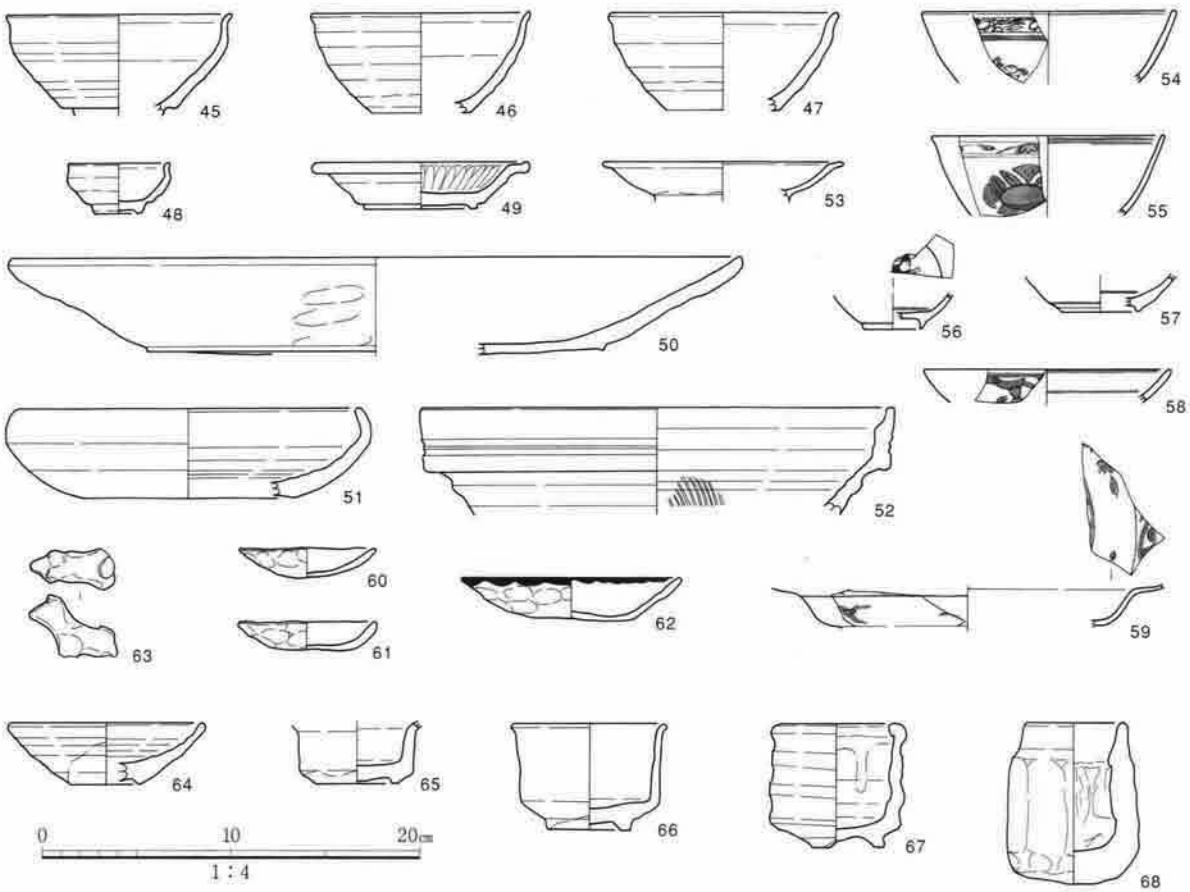


図251　OS92－22次SD401・301・201出土遺物
SD401(63)、SD301(45～62)、SD201(64～68)

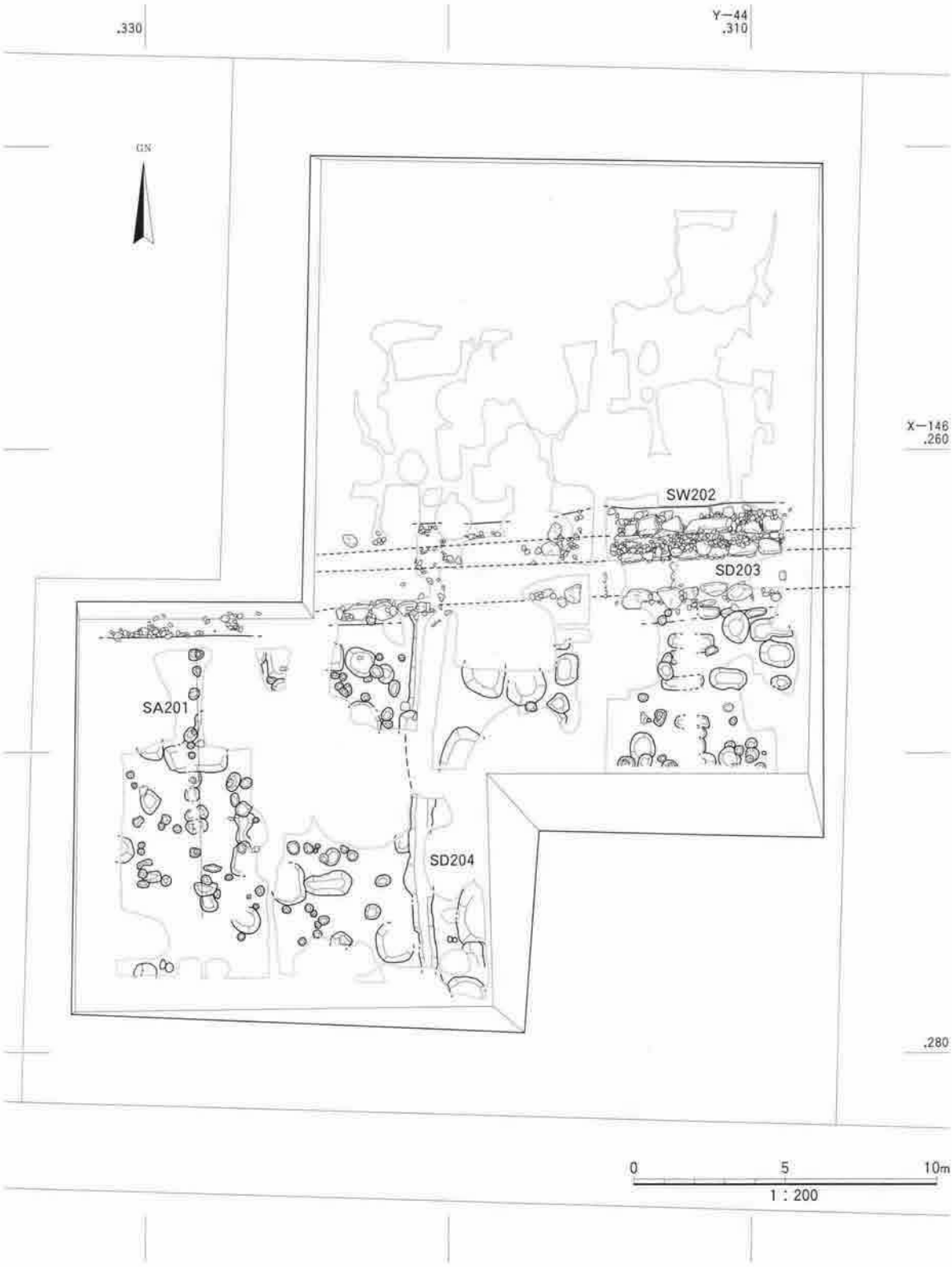


図252　OS89－19次豊臣後期遺構配置図

SW202　調査地中央に検出した東西方向の石垣である。OS92－22次調査地の**SW201**が東で南に振っていたが、この石垣の方位はE3°Nと、東で北に振る方位である。石垣は東部に長さ約５m、高さ1.2m遺存していた。基底部には幅0.5～1.2m、高さ0.2～0.5mの花崗岩を横方向に並べ、その上にひとまわり大きい花崗岩を積んでいる。ここでは最大２段残っていた。２段目に矢穴をもつ石を使用している。西側延長部は後世の攪乱によって石が抜取られ、一部栗石が遺存している。

SD203　**SW202**の南に平行して築かれた石組溝である。調査地を東西に横断するようにあり、先の石垣と同様、東部の調査地のOS92－22次調査地で検出したものと同じ性格のものと考える。この調査地の東部では南北両壁とも遺存していたが、西部では北壁が後世の攪乱によって削平されていた。東部に残っていた北壁基底部には、幅0.5～0.8m、高さ0.4～0.5mの花崗岩を横方向に並べている。この石の上には栗石と考える拳大の石があり、さらに上にも石が積まれていたと考えられる。南壁も同様の構造であり、南北両壁とも２段以上の石組と推定される。溝の幅は0.7m程で、OS92－22次

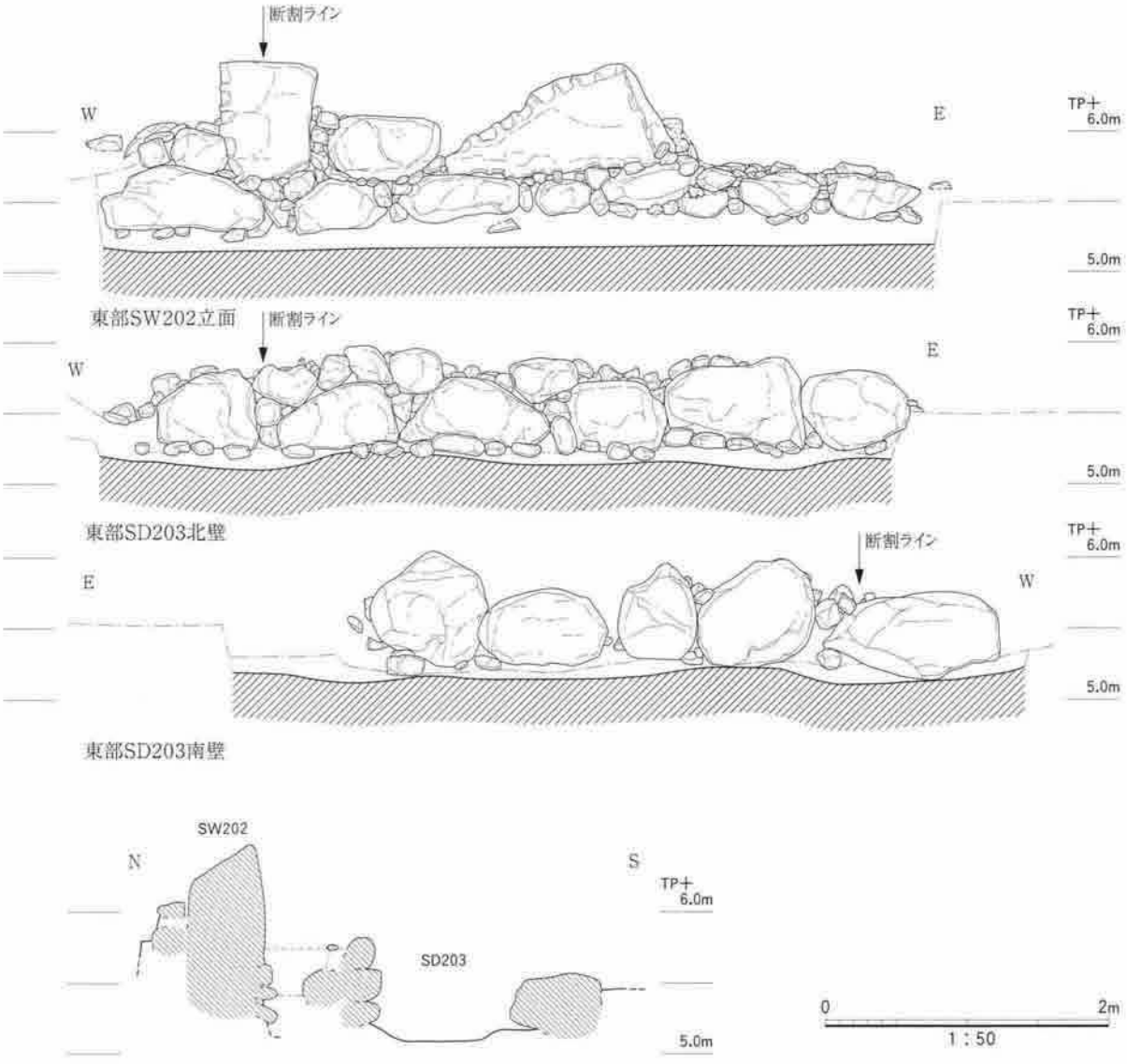


図253　OS89－19次SW202・SD203実測図

調査地よりは狭くなっている。溝の底面の高さはTP+5.2m前後で、OS92－22次調査地のSD201より5.5mも低くなり、西に向ってさらに低くなっている。2000年度に行ったOS00－32次調査でも一連の石組溝を検出している[松本2002]。そこでは溝の埋土の上に木組の排水施設を埋めて溝を作り直しているが、ここに報告した調査地ではそのような構造は見つけられなかった。

この石垣と溝は西のOS89－19次調査地から東のOS95－26・87－152・00－32次の各調査で確認されており、上町台地西側斜面に形成された城下町の東西方向の軸線ともなる遺構であろう。

SD204　SD203から南に延びる幅0.7m程の南北溝である。北端はSD203の南側石によって閉ざされており併存していない。SD203に先行するものであろう。石組溝南側の敷地境になる可能性もある。

SA201　SD204の西約7mの位置にある南北方向の柱列である。北端はSD203まで続いており、屋敷境の柱列になる可能性がある。

この他、石組溝の南側には土壙や柱列が検出された。土壙は石垣に近いところに多く分布しており、その方向は石垣の方向に近い。また、土壙群の南には礎石の抜取穴や柱穴が分布しており、建物が建っていたと考える。

OS92－60次調査

OS89－19次調査地の北に位置するOS92－60次調査地では、地山がTP+7.8mで検出された。OS89－19次調査地の豊臣後期の遺構面より2mも高い。ここでは地山上面で豊臣後期の遺構を検出したが、豊臣前期にさかのぼる遺構は見つからなかった(図254)。

調査地北部には北に低くなる落込みがあり、その南では上部を平坦に削平された地山を検出した。豊臣後期のおもな遺構を記述する。

SX201　敷地北端に検出した不定形の落込みで、0.8m以上の深さがある。調査地の北側に広がっている。

SA202　東西に横切る柱列である。柱間隔は1.8m程で、東西に4間分検出した。

SD205　SA202のすぐ南に平行して走る東西溝である。幅0.6m、深さ0.25mである。溝はこれ以外にもSD206・207の2条の東西溝がすぐ南に見つかった。この敷地中央付近には区画施設と考えられる柱列と溝が集中しており、豊臣期にはこの付近が敷地境であった可

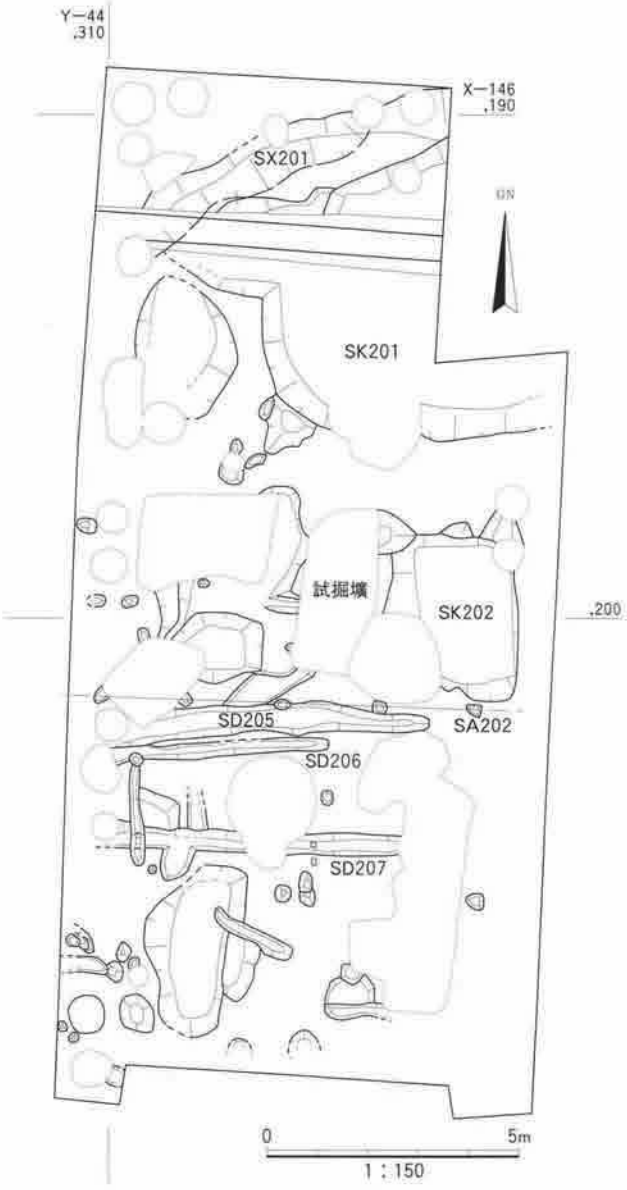


図254　OS92－60次遺構配置図

能性がある。

SK201　敷地北部に検出した土壙で、SX201が埋まった後に掘られている。瀬戸美濃焼織部や唐津焼、青花などが出土した(図255)。69は瀬戸美濃焼の織部皿で、ロクロ成形されたものである。鍔には波状文を施したあと銅緑釉を掛け、見込みには鉄絵文様を描く。70は瀬戸美濃焼の黒織部碗である。体部に彫り文様を入れ、その上から鉄釉を掛ける。71は唐津焼皿で、72は土師器皿である。

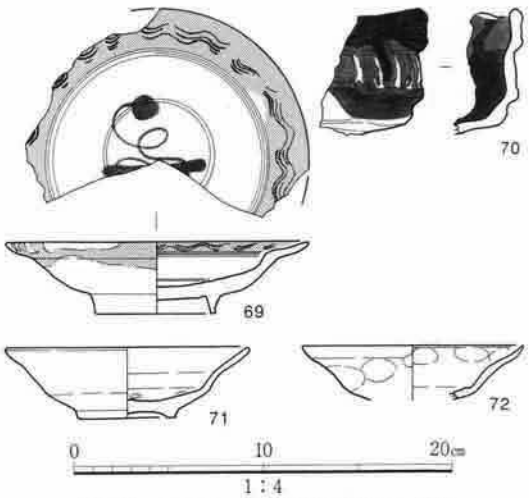


図255　OS92－60次SK201出土遺物

SK202　SK201の南に検出した土壙で、東西2.5m、南北3.3m、深さ0.8mの方形を呈する。SK201と同様の瀬戸美濃焼織部73・74や唐津焼75～79、青花80～82、土師器焼塩壺84・同蓋83・皿85・86などが出土した(図256)。

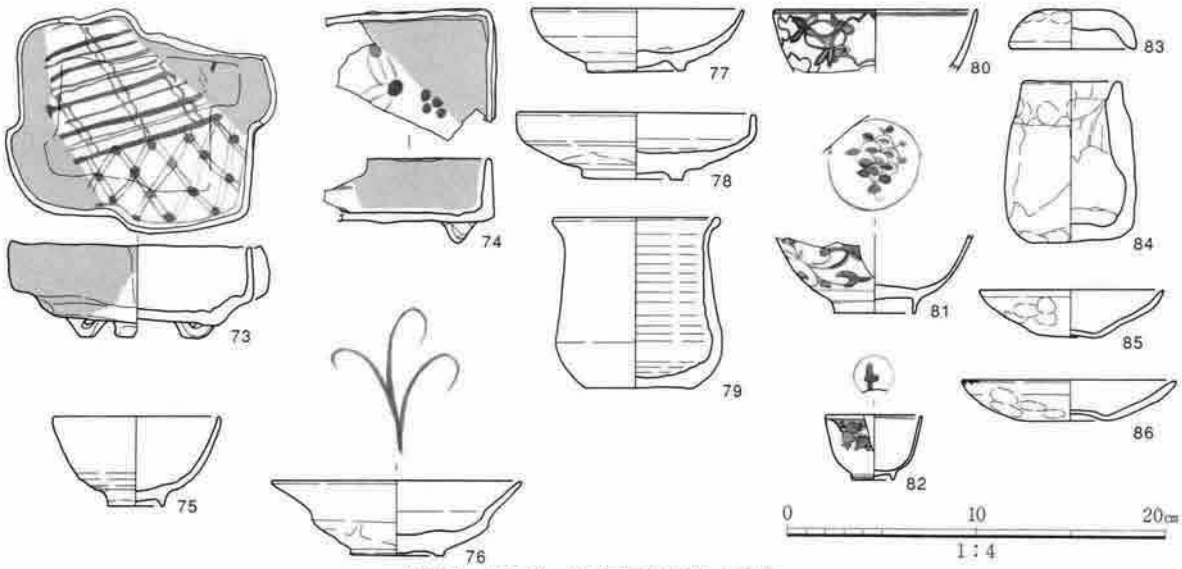


図256　OS92－60次SK202出土遺物

c．徳川期の遺構

OS92－22次調査地の第1層上面で検出した遺構を記述する(図257)。

豊臣期の石垣を埋立て、敷地全域を平坦にしている。規模の大きな遺構のみが遺存しており、遺構面そのものは削平を受けている。穴蔵・井戸・土壙・竈などが検出された。

竈は大型のものが3基確認され、このうちSX101は石組で西の燃焼室と東の作業室より構成される。

SX101　燃焼室の直径は1.7～1.8m、深さは1mが遺存する。作業室は一辺1.5mほどの方形で3辺が遺存している。底部は燃焼室に向って緩やかに下がり、焚口は2つの石を0.25mの間隔で立てて作られている。作業室の南東隅には小型の石で階段状の設備が設けられている。出土遺物から18世紀後半から19世紀初頭と考えられる。

SK101　SX101の北に検出した土壙で東西2.5m、南北6.5mの楕円形を呈する。中から17世紀後半から18世紀初頭の陶磁器が出土した(図258)。この1群は高台も高く、文様もていねいに描いたものが多く、比較的上質のものを含んでいる。87～90・92～104は肥前磁器染付碗で、その内93・98・99～101はていねいな文様を描いている。中でも、99は繊細な絵が描かれ、胎土も精良である。95は帆掛け舟の帆の部分だけを印判で描いている。94は口縁部に雨降り文を描くものであるが、体部下半にも山水文が描かれている。96は宝珠と雲を描いているが、宝珠の中と雲の重なりを表現する部分に墨弾き技法が用いられている。104も雨降り文であるが、文様の下端部が丸くなり、別破片では雨降り文が途切れていることが観察できた。105は肥前染付仏飯器で、印判による桐の文様が器面を覆う。106は肥前染付小杯である。107は肥前白磁碗である。111～115は肥前染付皿で、111は外面に青磁釉を掛け、内面には染付文様を描く青磁染付皿である。112は内面に山水文と草花文を描き、外面には唐草文を描いている。唐草文は縁取りがある。高台内には一重圏線の中に二重方形枠をもつ角福の銘款がある。福の字の示偏の位置にハリササエがある。113は見込に手描き五弁花がある。115は見込に退化した日の字が描かれ、その周りを蛇の目に釉剥ぎする。周囲には二重の圏線を描きその外側に鳳凰(?)が退化したと思える染付がある。116は見込を蛇の目釉剥ぎした白磁皿である。91は唐草文を描く陶胎染付碗である。108・109は肥前陶器碗で、117・118は肥前陶器皿である。

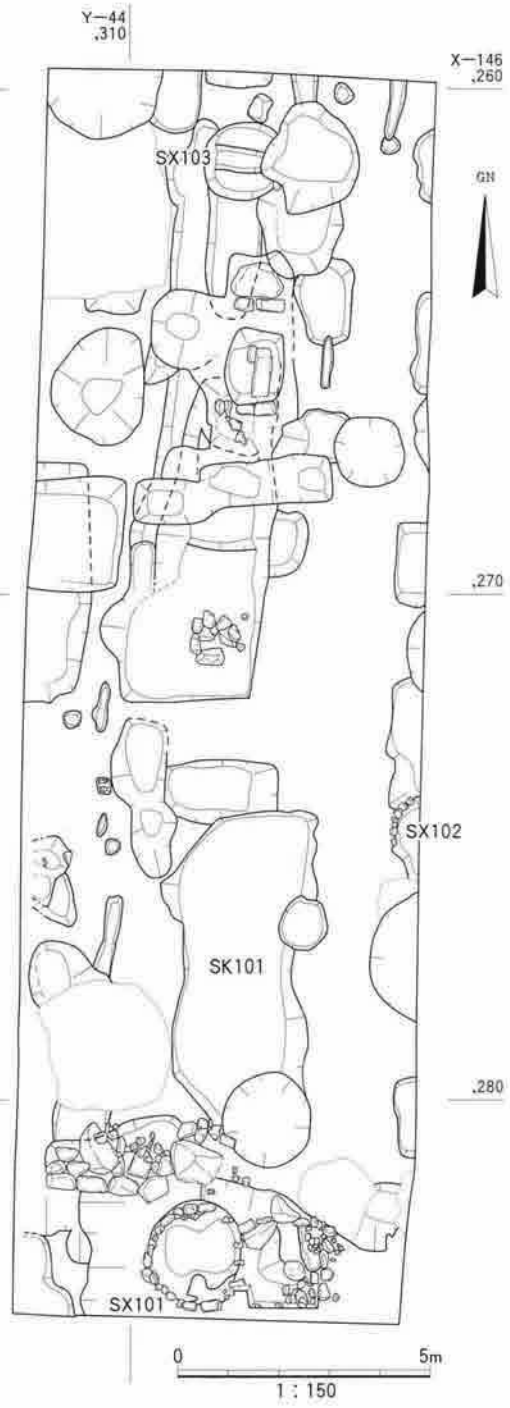


図257　OS92－22次第1層上面遺構配置図

110は軟質施釉陶器碗で、119も軟質施釉陶器の皿である。120は焼塩壺で表面が痛んで遺存状況が悪いが、長方形の刻印の枠が残る。枠の大きさから「泉州麻生」の刻印と思われる。121・122は土師器焙烙である。いずれもD類で、121は口縁部に粘土を貼付け突起状にし、そこに円孔を穿つ。

陶磁器には手描き文様の一部に印判手が施されるものが含まれており、印判手の出現期に位置づけられる。17世紀後半から末、あるいは18世紀のごく初頭の一群であろう。積山編年の7段階としたOS92－22次調査SK140の資料である[積山1995]。

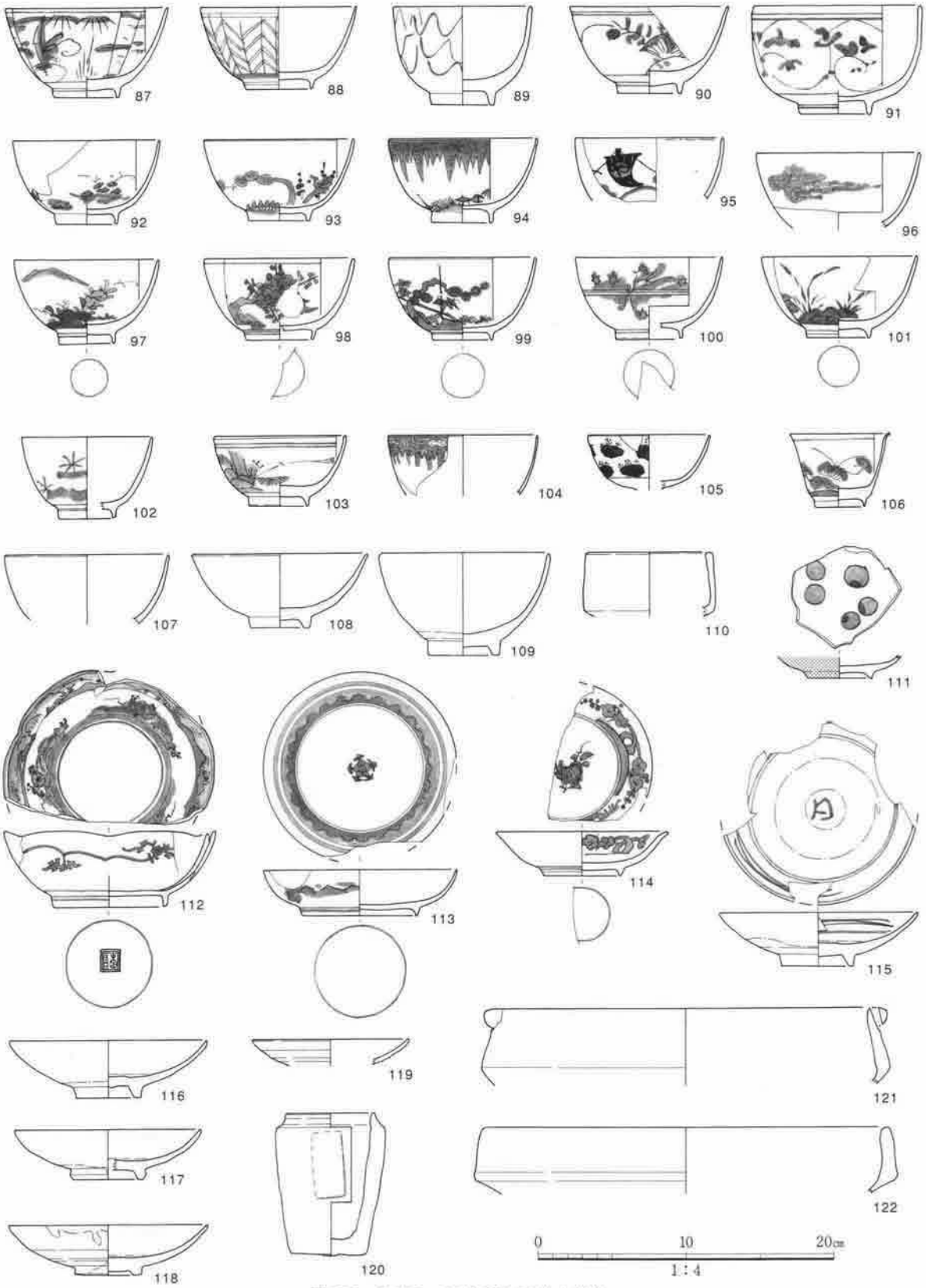


図258　OS92－22次SK101出土遺物

3）まとめ

この地域は内本町通の北側にある調査地を扱ったが、北側や南側の地区で検出した古代や中世の遺構は見つからなかった。しかし、豊臣期の城下町を復元するうえで重要な遺構を検出できた。以下では豊臣期の遺構を中心にこの地区をまとめてみる。

ⅰ）豊臣前期

豊臣前期の遺構には東側のOS92－22次調査地で道路およびその側溝と推定した遺構がある。これらの方位はE14°Sあるいはそれに直交するもので、現在の街区方位とは大きく異なるものであった。また、SD301・302の間を道路と推定したが、その南側の溝SD302は現在の内本町通の位置より北に約10m奥まった位置にあり、その位置は現状とは異なっていると推定できる。この溝の西側延長と推定される溝は今回報告した調査では見つかっていないが、90m西に位置するOS00－32次調査で検出したSD501がその西側延長部に当る可能性がある[松本2002]。これが一連の溝であるなら、谷町筋の西側に豊臣前期段階から広範囲の城下町が設計施工されていたといえる。しかし、SD501の位置は現在の内本町通の位置より北に約15mの位置にあり、現在の内本町通の方向とは異なっていることがわかる。この時期にはこの東西道路の北側には道路に面して建物があり、奥では畠を営む敷地が点在する景観が復元できる。

これらより西側の街区ではこれらの方位とは異なった方位の溝や敷地割が広がっている。西端のOS89－19次調査地の下位面では東のOS92－22次調査地とも異なるE15°Nあるいはそれに直交する方位の溝と敷地割が広がっていた。この上位面では下位面よりやや正方位に近い方向の溝があるが、東側のOS92－22次調査地とも異なるE3°Nあるいはそれに直交する遺構群である。当時の東西道路は現在の内本町通のように直線にはなっていないようである。前期の間にもこの地域の街区が変更されていることがわかる。また、道路に面して検出された屋敷地は基本的には町屋と推定できるものである。先に述べたOS92－22次調査地でも畠がなくなり竈が築かれており、OS89－19次調査地でも同様に敷地奥に竈が築かれている。見つかった竈は地上式の台所の竈とは異なり、半地下式になる産業用のものであり、この地域の住人が第2次産業に専従するようになってきているのであろう。

ⅱ）豊臣後期

豊臣後期になると、再び街区の再編が行われたようで、前期段階の東西道路位置より南側に、やや方位を違えた石垣と石組溝が築かれている。東のOS92－22次調査地の石垣や石組溝の方位はE7°Sで、豊臣前期段階より正方位に近くはなるが、現在の内本町通の方向とは異なっている。また、西のOS89－19次調査地の石垣の方位も前期段階の道路方向よりは正方位に近くなるが、まだE3°Nと東で北に振っている。東と西で約10度も違っており、この段階になっても、石垣や石組溝が直線にはなっておらず、街区ごとに石垣や溝の方向が異なっている可能性がある（図259）。

この石垣の北側と南側では比高が1m以上もあり、これと幅1mの石組溝によって北側敷地と南側敷地を隔てている。こうしたことから、この両者の性格が街区の中央にある町境と考えることもできよう。しかし、これらが敷地境の遺構とすると、北側敷地の間口が現在の内本町通北側の徳井町に面していたことになり、内本町通だけでなく、一帯の東西道路の位置も現在とは違った位置にあったこ

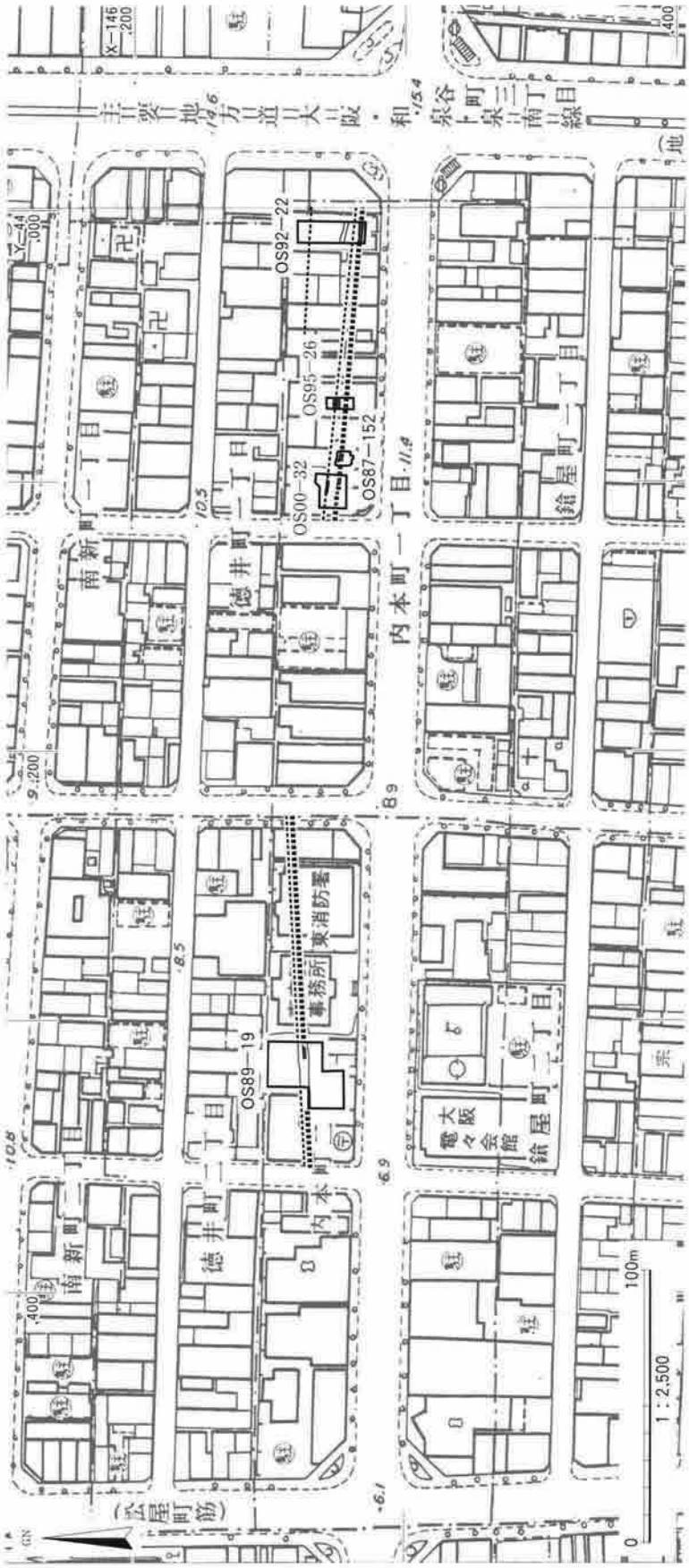


図259　石垣および石組溝推定線

とになる。

敷地境ではなく、石組溝南側が道路であったと仮定すれば、溝北側の敷地は間口に１ｍの石段を備えていたと考えられる。豊臣前期段階の道路より少し南に移動してはいるが、前代を踏襲した道路を復元できよう。しかし、西端のOS89−19次調査地では石垣の南側道路に土壙や柱列がある。この両方の推定も豊臣後期の街区や道路の位置が、現在とは全く異なった位置にあるという復元には達するのであるが、上町地区全体の町割の中で均等に道路と街区を配置していくには、いまだ材料が少ない。今後とも、この地域の調査を積み重ねる必要がある。

これらの石には火災に遭った痕跡が認められ、大坂夏ノ陣までは存在していたと推定され、豊臣後期を通じて、この地区の街区は現在とは異なった構造をしていたといえる。

江戸時代にはこの高低差はさらに克服され、現在の街区が築かれるのである。それと同時に豊臣後期に建設された船場地域の本町通を東に延長して、今の内本町通が直線道路として建設されたのであろう。

（松尾）

第４節　OS89－６次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

大阪城南西角から西に直線で延びる内本町通の南側に位置する調査地である（図260）。豊臣後期には、東にある谷町筋の位置が三ノ丸の西側外郭であったと推定しており、ここで報告する調査地は三ノ丸の西側に広がる惣構内の城下町に含まれる。

また、この一帯は内本町通や徳井町付近が低くなっており、南側の鎗屋町や常盤町、北側でも南新町付近から北が高くなっている。この地形は上町台地を刻む開析谷に起因するものと推定できる。



図260　OS89－６次などの調査地位置図

OS89－６次調査地は現地表面がTP+11.1m前後で、洪積層はTP+9.8mの高さで見つかる。敷地北半が既存の建物で地下深く攪乱されていたため、南半分の調査となった。そこでは豊臣期の遺構が見つかった。

OS90－112次調査地付近は南が高く北に低くなった地形を呈しており、北側の内本町通に向って低くなっている。洪積層は高いところでTP＋８m付近で見つかるが、敷地の東端では南北方向の落込みがあり、TP+6.5m以下まで下がっている。

また、OS91－４次調査地ではTP＋９m付近で洪積層が見つかる。OS91－34次調査地でも南が高く、北に低くなっている。南端での洪積層の標高はTP+8.3mで、北端ではTP＋６mでも検出できなかった。さらに低くなっている様子がうかがえる。

２）調査の結果

ｉ）層序と遺物

この一帯には上町台地の西側斜面を刻む谷地形が存在しており、近世の整地層の下位には谷を埋める中世以前の地層が堆積している（図261）。

第１層　徳川期の整地層である。

第２層　豊臣期の整地層である。OS89－６次およびOS91－34次調査地で検出した。OS90－112次とOS91－４次調査地では徳川期の整地で削平されていた。

第３層　豊臣期以前の整地層である。この地層もOS89－６次とOS91－34次調査地で検出した。OS91－34次調査地では上面に12世紀代の遺構が見つかっている。

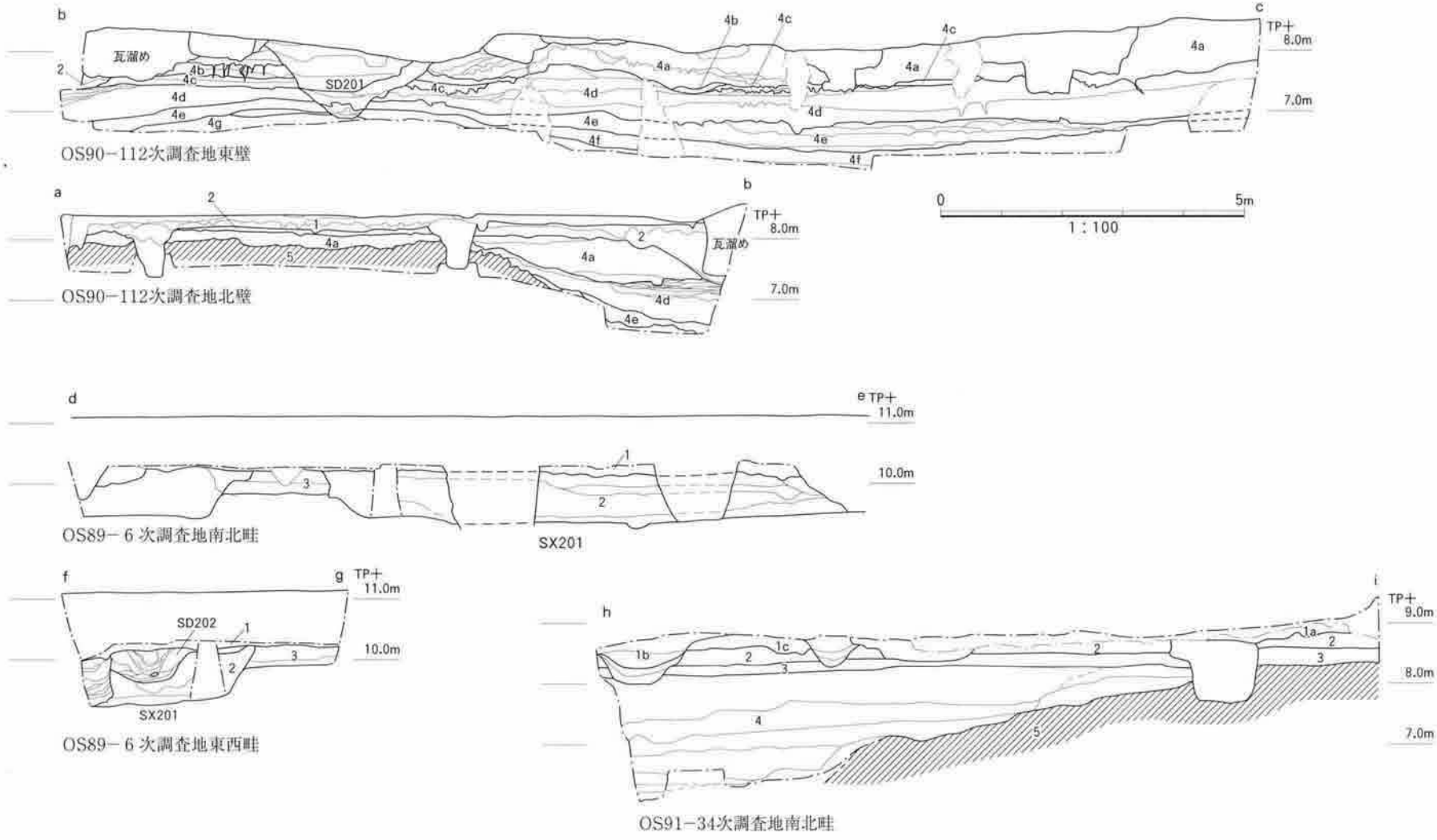


図261　OS90−112・89− 6 ・91−34次断面図

第4層　奈良時代の遺物を含む地層である。OS90－112次およびOS91－34次調査地では地山上の落込みに堆積しており、多くの土器が出土した。

第5層　地山である。

ii)遺構と遺物

a．奈良時代の遺構と遺物

この地区では奈良時代にさかのぼる遺構や落込みが検出された。

SD501　OS91－4次調査地で検出した幅約3m、深さ約0.6mの溝である(図263)。南西から北東方向に走っている。重圏文軒丸瓦(6016型式)をはじめ、土師器・須恵器が出土している。遺物から奈良時代と推定できるが、方向が正方位ではなく、北側にある低地へ流込む自然の流路であろう。

SD502　OS90－112次調査地東端の**SX501**に直交する東西方向の溝である(図262)。同じ位置に上位の**SD201**が重なっており、規模は不明である。深さは西部で1.3m、東部は**SX501**に接する辺りで

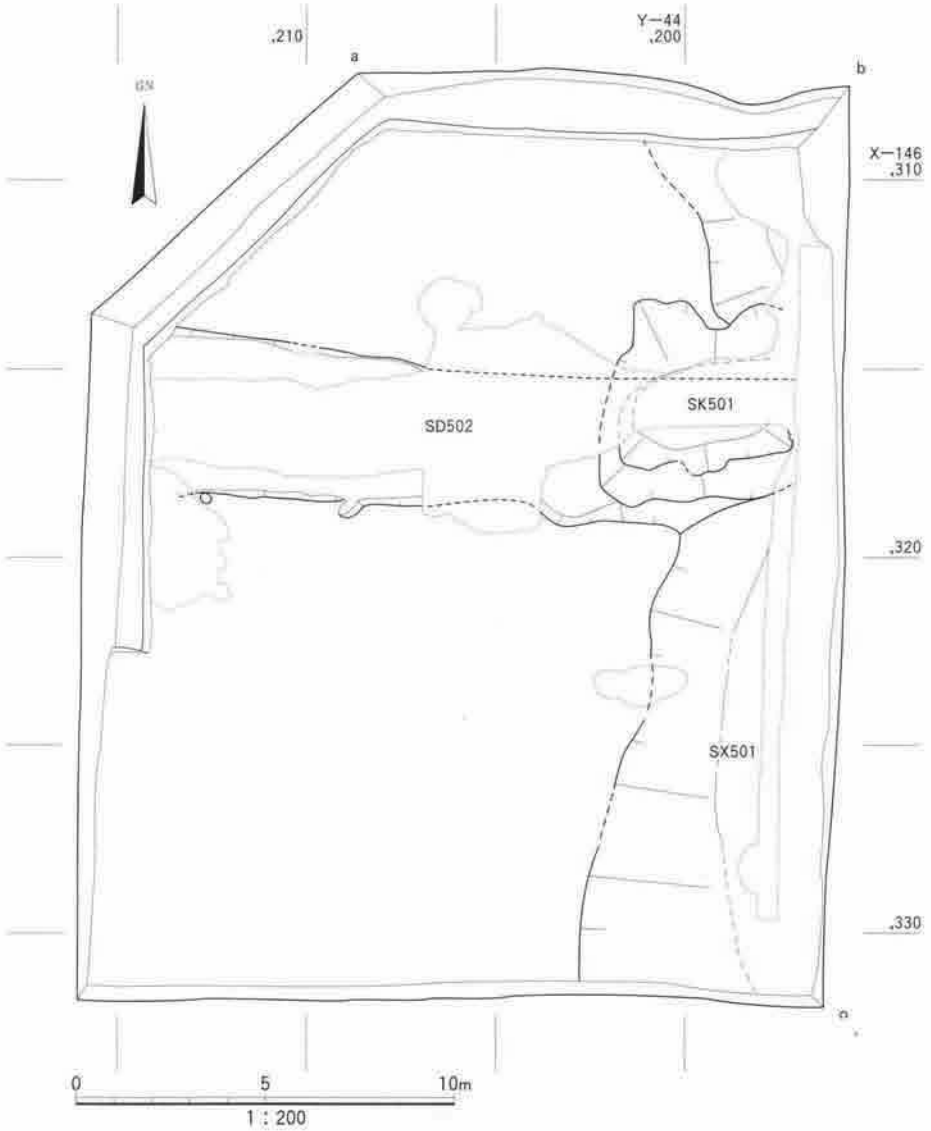


図262　OS90－112次古代遺構実測図

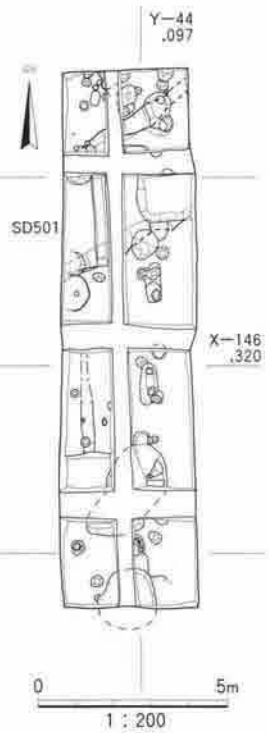


図263　OS91－4次溝SD501実測図

一段深くなり土壙状を呈している。東端では後述するSX501の中に堆積している第4c層のラミナが観察できる細粒砂に相当すると考える。その水成砂層は北に広がっており、SX501の位置で北に曲っていた可能性がある(図261)。

SX501　OS90－112次調査地の東端に検出した落込みである(図262)。幅は調査地内で5m検出したが、調査地東壁際付近に落込みの底面があり、10mほどになると推定される。深さは約1.5mである。埋土は7層に分れる。上位から第4a～4g層とする。最下部の第4g層はオリーブ灰色のシルト質細粒砂層で、汚れが少ない。その上位の第4f層は黒色帯を形成する砂質シルトから粘質シルト層で、自然堆積層であろう。第4e層は炭を含む黒～暗灰色の砂質シルト～粘土とシルト偽礫の薄層が混る層で、滞水状態の中にシルト偽礫が混った層である。第4d層は黄灰色シルト偽礫が混る砂質シルトの整地層である。第4c層はSD502より北ではラミナが観察できる水成の細粒砂層で、南では灰色粘土となり、踏込みが見つかる。第4b層は灰黄色シルトの整地層で、上面に乾痕が見つかる。最上部の第4a層も整地層である。第4e層からは埴輪とともに7世紀代の土師器や須恵器が出土し、第4d層および上位の層からは8世紀中頃の土師器や須恵器のほか、奈良三彩の小壺1が出土している(図265)[松尾1991a]。

奈良三彩の小壺1は器高3.8cm、口縁部径2.8cm、胴部最大径5.1cm、高台径3.5cmと小型で、第Ⅲ章第1節で報告した三彩小壺91(第Ⅲ章第1節p.120)よりひとまわり小振りである。外面には緑色の釉が広く施され、褐色・白色の2色の釉が部分的に掛かっている。高台内や内底面にも薄く釉が掛かる。高台内には3個所に小さな目跡が残っている。

2～10・21は土師器で、2が2段暗文を施す杯A、3・4が杯C、5・6が杯AⅢである。7・8は壺B、9は甕A、10は高杯の脚部、21は移動式竈である。



図264　OS91－34次古代遺構配置図

11～20は須恵器で、11・12は杯B蓋、13は高台をもつ杯で、体部下半に強い屈曲がある。上半部は外反しており、通常の杯Bの器形とは異なり、金属器を模倣した形態のものである。14は杯B、15は杯G、16は壺、17・18は壺Hで、18の底部には焼成後の穿孔がある。19は小型の平瓶、20は円面硯で、脚は下端部で繋がらず、独立している。このうち、5がSK501、6・19がSK503からの出土である。

この落込みから出土した遺物は時期差がある。土器の時期を見ると、2～4・7～9・15は7世紀中頃から後半で、それ以外が8世紀中頃の難波Ⅴ段階に属するものであろう。奈良三彩小壺は後者の時期に含まれる。

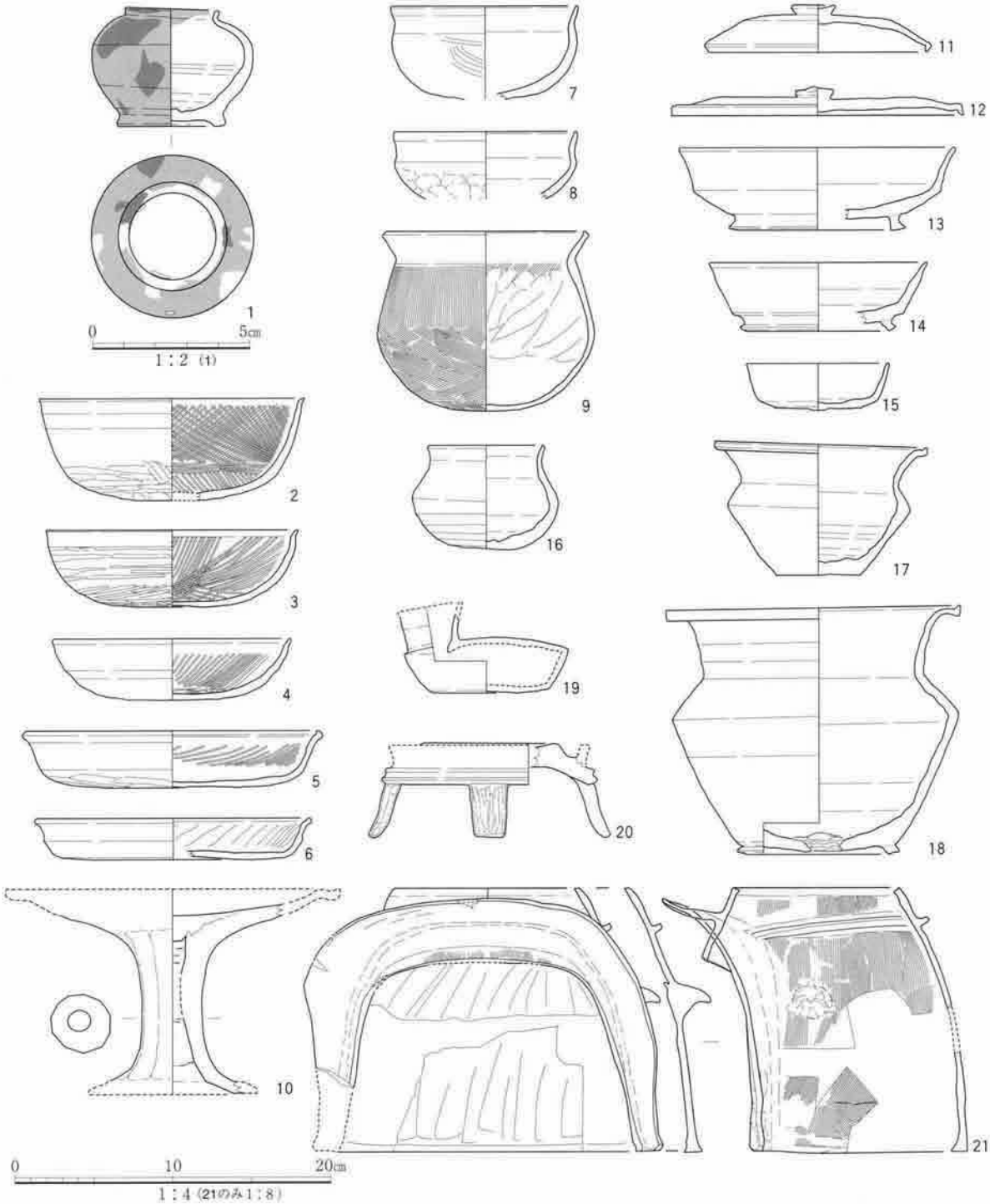


図265　OS90－112次SX501・SK501・503出土遺物

SX501(1～4・7～18・20・21)、SK501(5)、503(6・19)

落込み内最下部の第4f層は黒色帯を形成しており、腐食物が混るような環境での自然堆積層と考えられ、その上位の第4e層も滞水状態の中にシルト偽礫が混った層であることから、長期間、谷の形状を保っていたようである。その後、8世紀代になって人為的に整地を繰返しながら平坦になっていったのであろう。

SX502　OS91－34次調査地で検出した落込みで、地山は南西部が高く、北と東に低くなっている

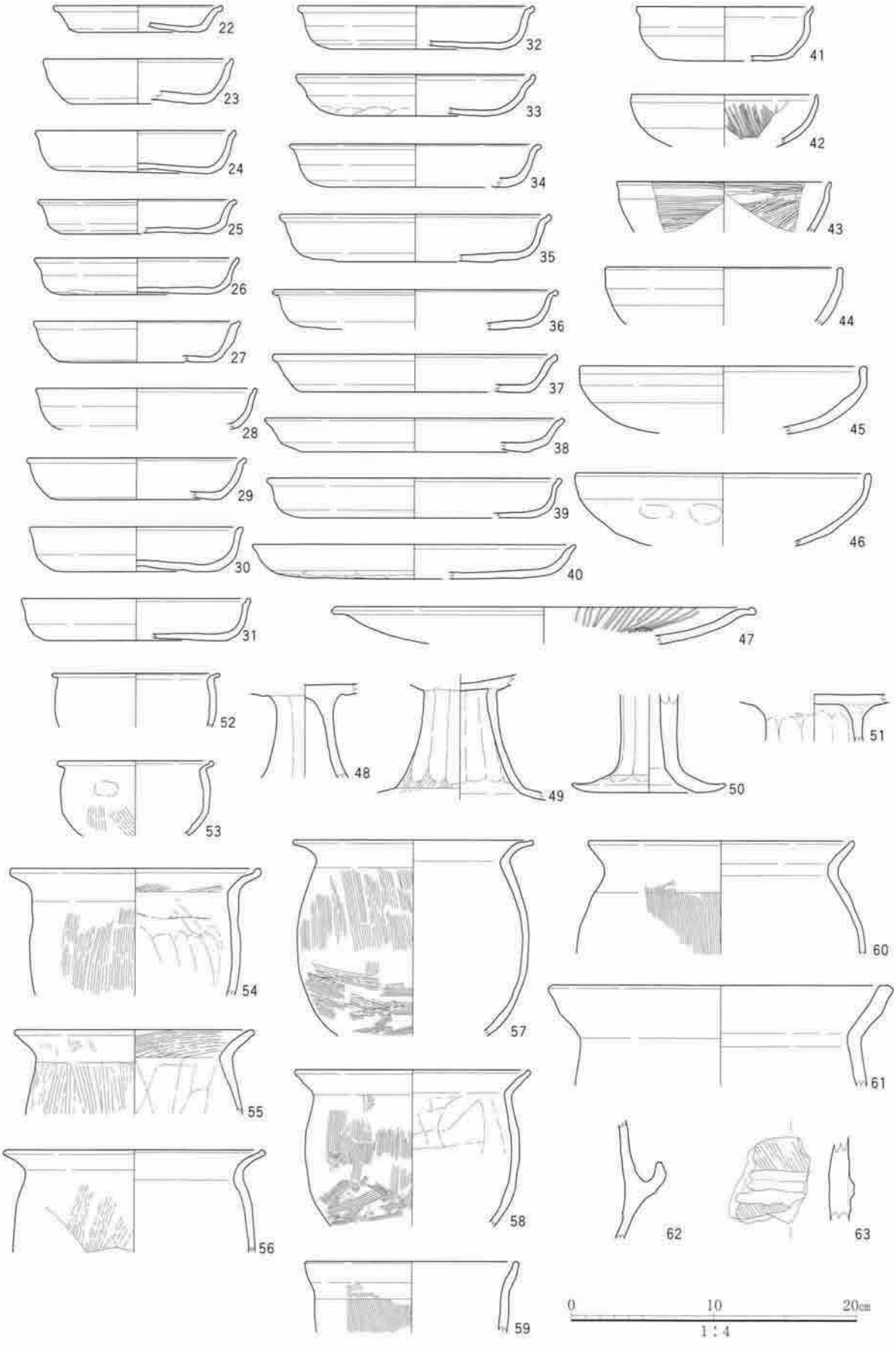


図266　OS91－34次SX502出土遺物（1）

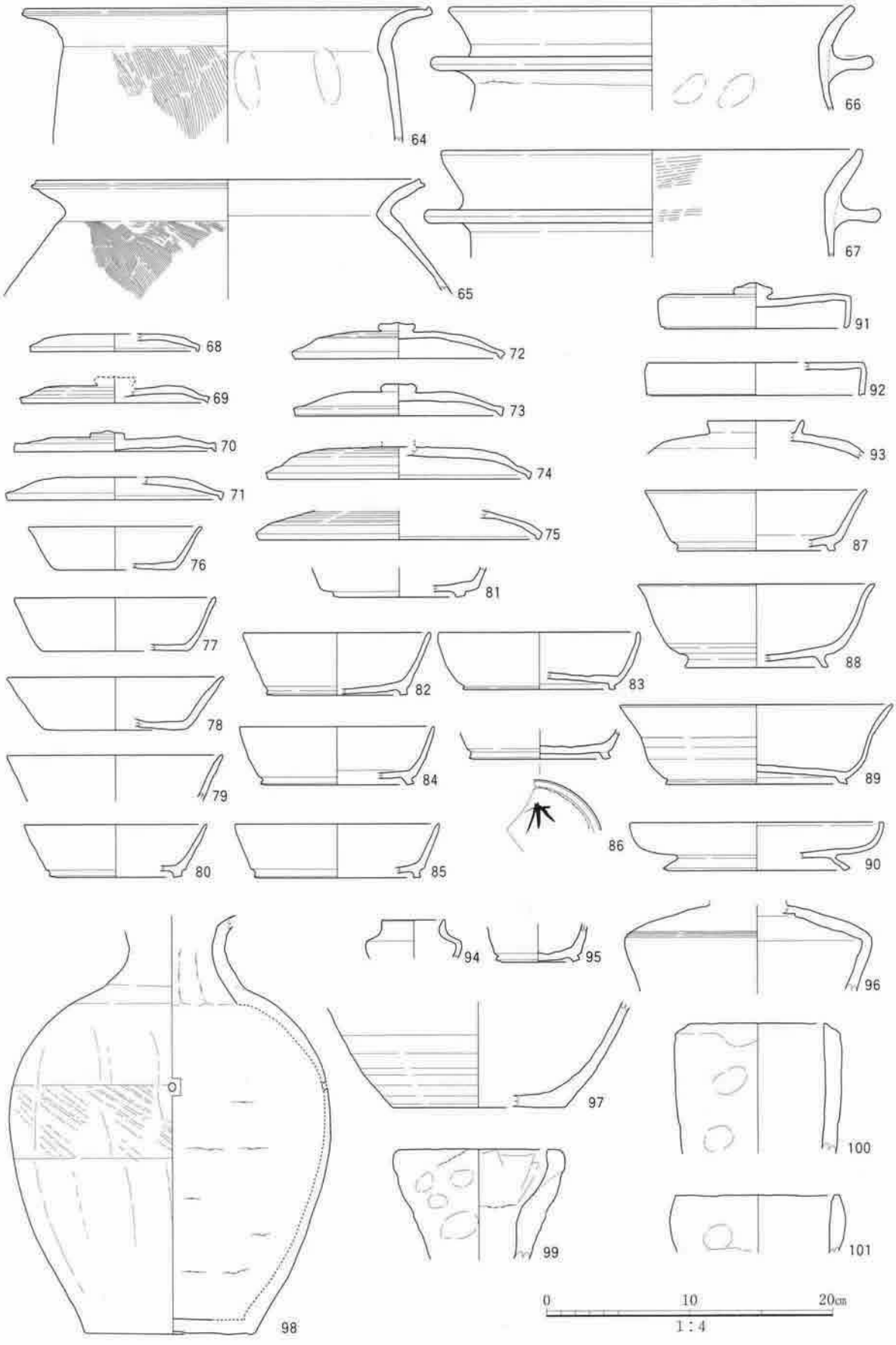


図267　OS91－34次SX502出土遺物（2）

(図264)。この埋土も最下部には黒色粘土が堆積しており、滞水状態であったと推定される。上部には整地層が広がり、平坦になっている。先のSX501と同様の上町台地を刻む谷の一部になろう。ここからも奈良時代後半の土師器や須恵器が大量に出土した(図266・267)。深さ2.5m程まで確認したが、最下部では地山が確認できず、さらに深くなっている状況がうかがえる。

22～62・64～67は土師器である。22～39は杯A、40は皿A、41は椀、42～46は杯C、47～51は高杯で、47は高杯の杯部である。52・53は壺、54～62・64・65は甕、62は把手が付く。64は第5層からの出土である。66・67は羽釜である。63は円筒埴輪で、川西宏幸編年のV期に当る。

68～97は須恵器で、68～75は杯B蓋、76～78は杯A、80～90は杯B、79は高台が無いため不明である。86の高台内には「木」と読める墨書がある。91・92は壺A蓋、93も蓋である。94・95は小型の壺である。96も壺の肩部、97は壺の底部であろう。98は焼成が陶質で頸が細く、口縁部に向って外反している。肩部は張り、やや広めの底部に移る特異な器形の壺である。外面の最終調整はヨコナデであるが、体部最大径付近には粗いタタキメが残っている。また、縦方向にかすかな稜が12個所ほど認められ、胴部の平面形は正円を呈していない。外底面は不調整でわずかな凹凸があり、内面はナデのように見えるが、平たい当て具が用いられている可能性もある。頸部内面にはシボリメを残す。焼成は良好で赤灰色を呈し、胎土内には白色の砂粒を多量に含んでいる。肩部付近に径5㎜ほどの小孔を焼成後に穿っている。中世の陶器のようにも見えるが、国内に類例がなく(註1)、舶載された土器で、時期は中世まで下るものではない。99～101は製塩土器である。

この落込みから出土した土器群は41～47のようにやや古い時期の土器も含まれているが、それ以外は口縁部が緩やかに外反し、内面には暗文をもたないものが主体である。底部の調整もほとんどがナデないし不調整で、口縁部付近までヘラケズリするものはない。8世紀後半～末頃の一群と考える。

二つの落込みは、SX501が8世紀中頃、SX502が8世紀後半の土器を含む整地層によって埋没している。東西60mしか離れていない調査地であるが、この一帯は場所によって整地の時期が異なっていることがわかる。

b．鎌倉時代から大坂本願寺期の遺構

SD301　OS90－112次調査地SD502の北にある東西溝で、南北溝が接続する(図268)。SD201によってその南北溝は切られている。遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。豊臣期にまで下る溝の可能性もある。

SX301　OS91－34次調査地で検出した方形の落込みで、敷地の北東部にある(図272)。南北約5m、東端は調査地外に延びており東西の規模は不明である。深さは0.15mほどであった。瓦器椀102・103が出土した(図269)。102・103は体部のほぼ全面をヘラミガキしており、高台も断面が方形である。尾上編年のⅡ－1に相当し[尾上1983]、12世紀初頭のものであろう[森島1992]。

SX302　OS91－34次調査地北西部に検出した方形の落込みである。南北約5m、西端は調査地外に延びており、東西の規模は不明である。深さは0.2mほどであった。中から瓦器椀104・105が出土した(図269)。これらもSX301から出土した瓦器と同じ時期のものである。

c．豊臣期の遺構と遺物

SD201　OS90－112次調査地で検出した東西方向の溝で、断面はV字状を呈する（図268）。OS90－112次調査地では第3層は広がっていなかったが、ほかの調査地の地層から考えて第2層上面の遺構とした。最大幅が3.5mあり、深さは1.4mである。埋土は3層に分かれ、最下部は粗～中粒砂を主体とする水成砂層で、シルト質粘土が介在する。上位2層はシルト偽礫や粘土偽礫が混るシルト質粗粒砂や砂質シルトの盛土で埋没している（図270）。本願寺期から豊臣期の遺物が出土している。

東端にあるOS89－6次調査地では豊臣期の遺構を検出した（図271）。

SX201　OS89－6次調査地北西部で検出した方形の落込みである。方位は敷地と同じN3°Eであ

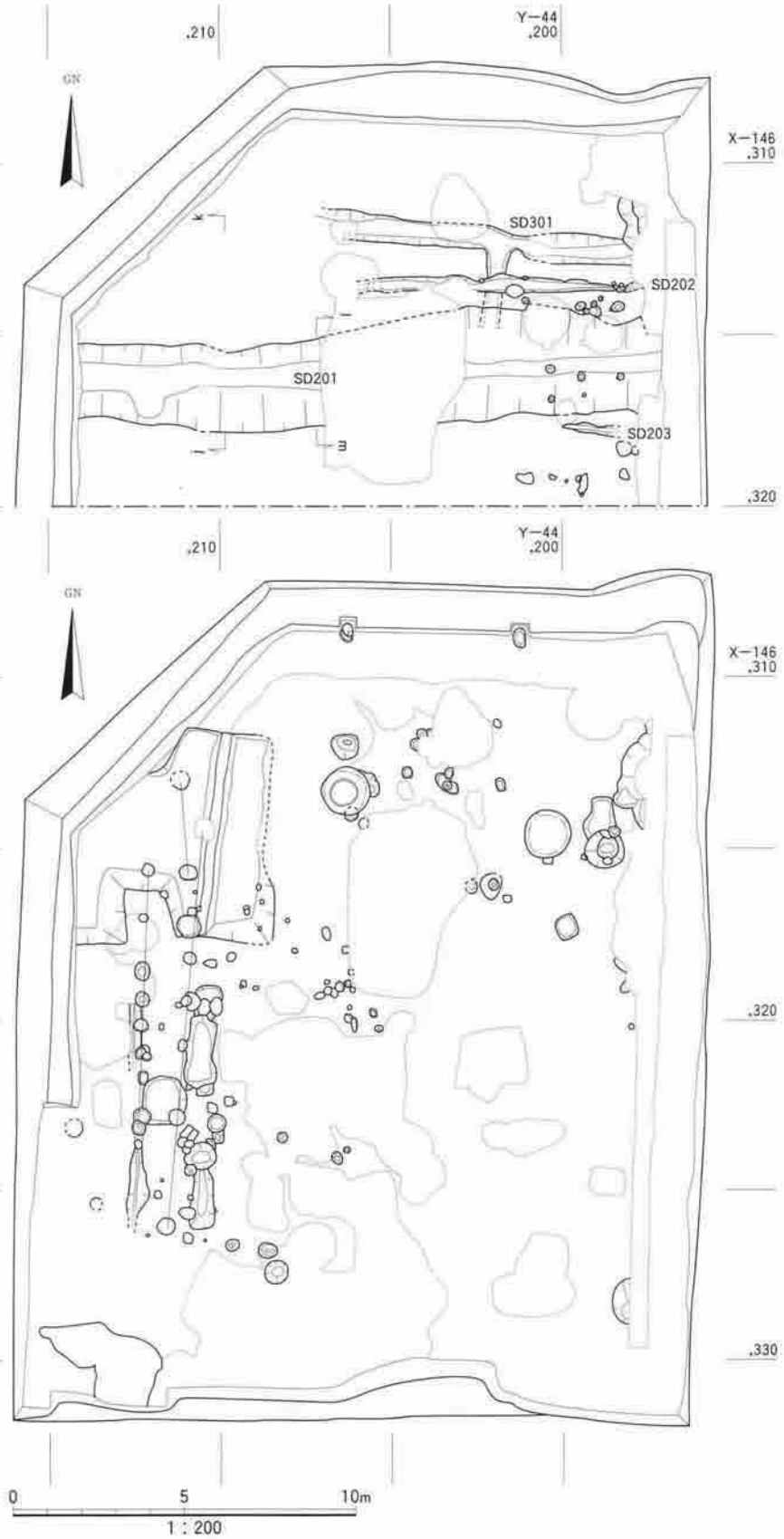


図268　OS90－112次中近世遺構実測図

る。深さは0.9mほどで、底面は平坦になり、そこに東側の肩と平行する溝があった。この遺構が埋った後、SD202が掘込まれている。上町台地の西側斜面を雛壇状にして屋敷地を造成したものと推定する。底面で検出した遺構は西側敷地の遺構になろう。

SD202　OS89－6次調査地で検出した幅1.2m、深さ0.6mの南北方向の溝である。下位のSX201の東端付近にあり、前代の敷地境が踏襲されていると推定される。その方位はN3°Eである。

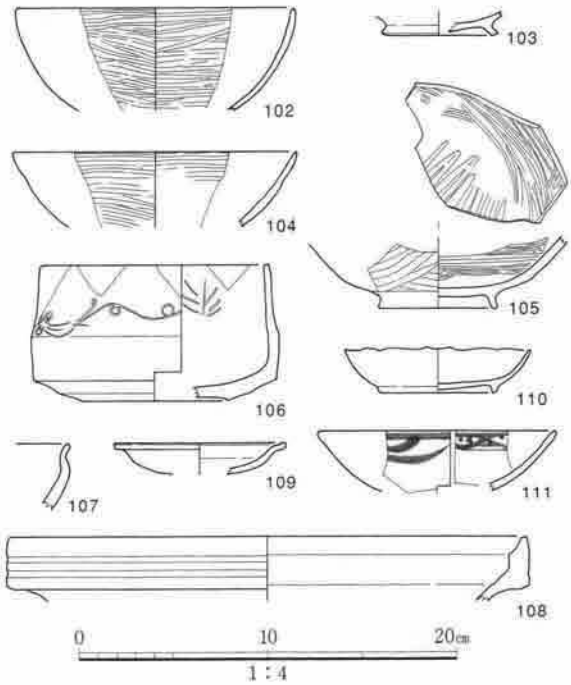


図269　OS91－34次遺構出土遺物
SX301(102・103)、SX302(104・105)、
SD203(107～111)、SD204(106)

SD203　OS91－34次調査地の東端にある南北溝である(図272)。調査範囲の東壁にほぼ平行して延びており、当時の敷地境であったと推定する。この中からは瀬戸美濃焼天目碗のほか、白磁や青花が出土している(図269－107～111)。瀬戸美濃焼天目碗107は口縁部の破片である。108は備前焼擂鉢、109は土師器皿、110は中国製白磁皿、111は中国漳州窯の青花碗である。

溝SD204　OS91－34次調査地の北部に検出した東西溝である。方位は東側で北に傾いており、現在の敷地の方位とは異なっている。この溝からは瀬戸美濃焼黄瀬戸鉢106が出土した。この二つの溝から出土した陶磁器は豊臣前期に属するものである。

d．徳川期の遺構

OS90－112次調査地では南北方向の柱列や土壙

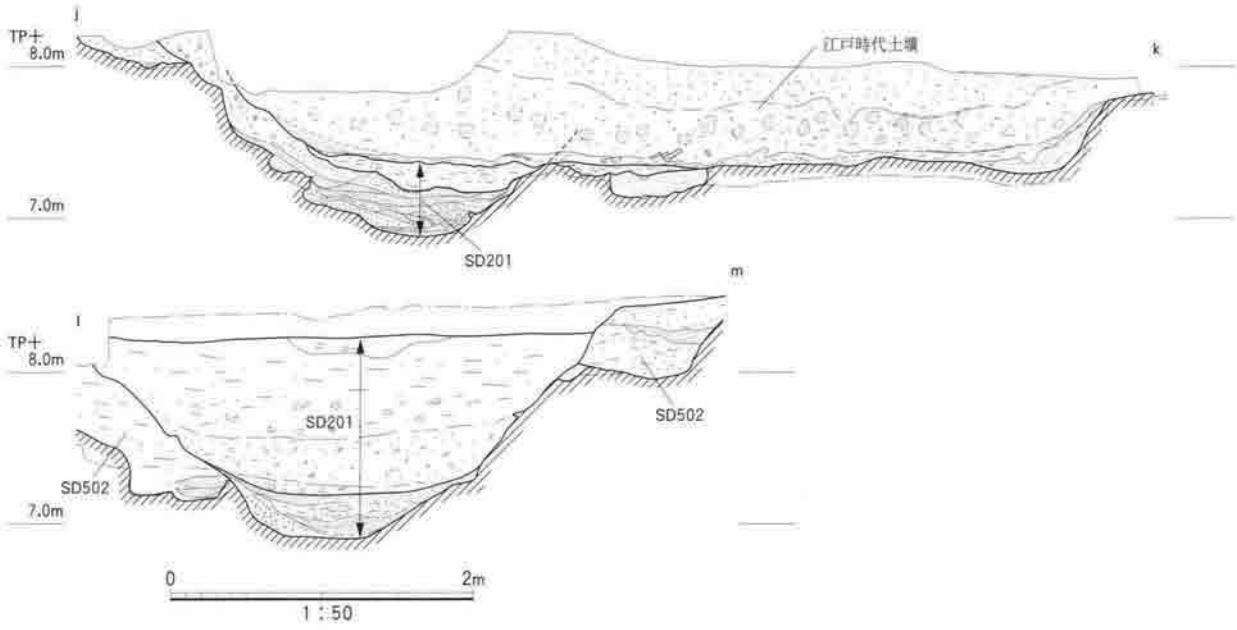


図270　OS90－112次SD201断面図

群のほか、平面形がH字状になる土壙(図268下)、OS91－34次調査地で南北方向の柱列(図272)、OS91－4次調査地で南北方向の柱列や溝を検出した(図262)。上部が削平されており、全体の規模や性格を復元できる遺構はなかった。

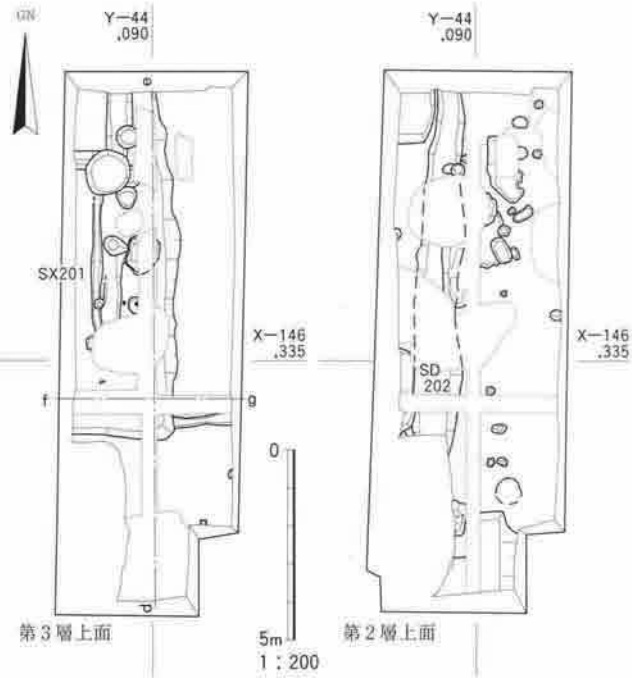


図271　OS89－6次中近世遺構実測図

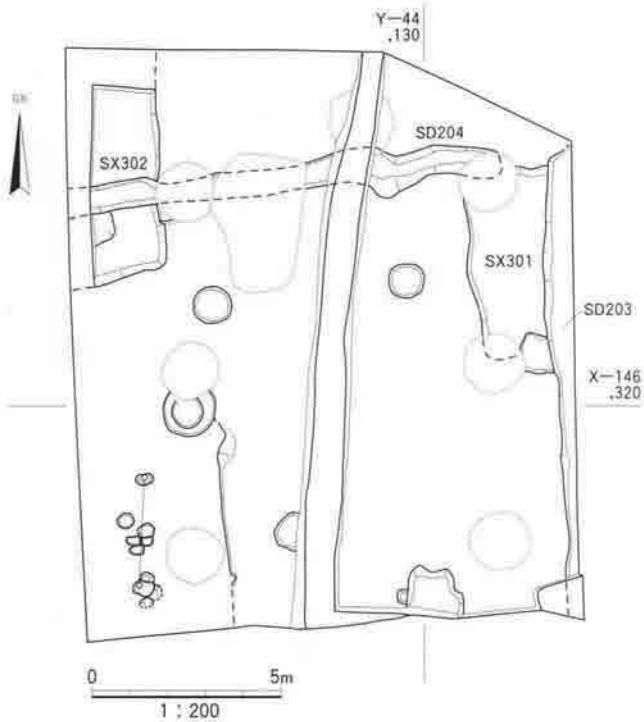


図272　OS91－34次中近世遺構実測図

3)まとめ

i)奈良時代

この地区では上町台地を刻む谷が、8世紀中頃に行われた人為的な整地によって埋没していることが判明した。その整地層からは土師器・須恵器以外に製塩土器や希少な奈良三彩の小壺が完形で出土した。また、OS90－112次調査地ではそれと一時期共存する東西方向のSD502が存在していた。埋土の観察から当初は水が流れていたことがわかり、その後、このSD502も人為的に埋められている。SD502は東側の調査地であるOS91－34次調査地やOS91－4次調査地では見つかっておらず、そのまま東に延長していたのではなく、SX501に合流していたものであろう。ただ、この溝や落込み内から出土した土器資料は、これまで後期難波宮期の遺物が少なかった状況を変えるものである。また、東側調査地OS91－34次調査地ではやや時期が下るが、8世紀後半から末の土器群が出土している。この一群の土器もSX501を埋める整地層から出土しており、上町台地の開析谷を平坦にする過程がわかる。2地点は60mと近接しているが、場所によって谷を埋める時期が異なっていることが判明する。上町台地の西側斜面の平坦化は一度に行われたものではなく、順次広がっていったものと考えられる。

この地区を含む上町台地西側斜面一帯には開析谷がいたる所に確認されており、そうした谷地形でも奈良時代の遺構や遺物が見つかっている。第Ⅲ章第3節で既述したように、谷地形の中で切合って存在する掘立柱建物もあるが、本章第2節で報告したOS89－7・92－6・92－12次調査地の3個所

では落込みを検出し、飛鳥時代以前の土器が含まれる堆積層とその上位の整地層によって落込みが平坦になっていた。難波宮中枢部に近いこの場所では、上町台地の旧地形の克服が飛鳥時代から始まっていたことがわかる。

本節で報告した地区の南には第Ⅳ章第7節で述べる、8世紀後半～末の土器が出土する木枠をもつ井戸SE601も見つかっており、奈良時代には屋敷地が広がっていることがわかる。本節で扱った地域でも、古代の遺構が広がっていたことが判明するが、それらの多くはその後の大坂城築城工事やそれに伴う城下町建設工事によって削平されていったようである。

ii)鎌倉時代～大坂本願寺期

鎌倉時代の遺構にはOS91－34次調査地で見つかったSX301・302がある。全体の規模が不明なため性格はわからないが、平面形が方形になっており、深さ0.2mと浅い落込みである。

出土遺物は12世紀前半の瓦器で、当該期の遺物はD区の西にある東横堀川周辺や(第Ⅲ章第9・10節)、東横堀川の分流地点付近でも出土している(第Ⅱ章第6節)。12世紀代になると、遺構は上町台地西側裾部に集中する傾向が見られるが、本節で扱った地区のように台地斜面にも少なからず遺構が広がり、13世紀代にはここの北側にも広がっていることがわかる(本章第2節)。

室町時代後半の本願寺期には遺構が見つからず、本節で扱った地域は集落の範囲外であったと考えられる。

iii)豊臣期

OS90－112次調査地で検出した東西方向のV字溝SD201がある。方向は現在の内本町通に近い正方位となっている。また、OS91－34次調査地でも溝が2条見つかっているが、この方位は内本町通の方位とは違っており、東でやや北に振る。南北の溝も北で西に振っている。OS89－6次調査地のSX201も北でやや西に振っており、内本町通の南側にある豊臣期の遺構は正方位か北で西に振っていることがわかる。

一方、内本町通の北側一帯の豊臣期の遺構は、北で東に7°傾いた方位が圧倒的に多い。本章第3節で報告した東西方向のSD301の方位も東で7°南に振っている[松本2001b]。内本町通の北側一帯では豊臣期の遺構群は現在の内本町通の方位とは異なっていたことが判明する。

このように内本町通を境に、北側と南側の街区の方位が異なった原因は明らかにできないが、内本町通の南側にある台地の尾根地形の影響によって、街区方位が異なっている可能性もあろう。

(松尾)

註)

(1)愛知陶磁資料館の楢崎彰一氏にご教示をいただいた。

第５節　OS91－64・93次調査

１）調査地と周辺の概要

これらの調査地は上町台地の西側斜面に立地する。豊臣期には惣構内部に位置し、惣構西端付近を南北に延びる松屋町筋より東にある(図273)。現在の地表面の標高はOS91－93次調査地付近ではTP+12mで、OS91－64次調査地付近ではTP＋８mと西側に低くなる。こうした斜面地であるため、それぞれの敷地は西側に石段を築いて雛壇状になっている。



図273　OS91－64・93次調査地位置図

OS91－64次調査は試掘調査の結果、大坂夏ノ陣に伴うと推定される焼土層および豊臣期の整地層が確認されたため、調査を実施することになった。地表下1.8mまで重機により掘削したのちに調査を開始したところ、重機掘削終了面から0.2m下に焼土面が広がっていることと、その下位の整地層が厚さ１m以上であることが明らかとなった。以上から全面的な調査は大坂夏ノ陣の焼土層の下位にあたる第３層の上面までとし、以深の調査は中央部に限って地表下3.5mまで行うこととした。調査着手直後より、直径15cm前後の円形の蓋に把手が付く土器(以下、油煙受皿と呼ぶ)が多く出土したが、これが製墨業に係わるものとわかり、徳川期には墨屋が操業していたことが判明した[松尾1992・1994a]。豊臣期にも地山や整地層の上に遺構が広がっていた。

OS91－93次調査はOS91－64次調査の東80mの位置にあり、先の成果を受けて調査を行ったが、近世の地層は大きく攪乱を受けており、残存する遺構は少なかった。

２）調査の結果

ｉ）層序

層序はOS91－64次調査では良好に残っていたため、それをOS91－93次調査で検出した層序と対比させ、表土層および近世後半の整地層は重機で除去したため、重機掘削以降に残っていた地層について述べる(図274)。

第１層　炭を含む灰オリーブ～オリーブ黒色砂質シルト層で、調査開始時には層厚20cmが遺存していた。徳川初期の整地層である。

第２層　炭・焼土・焼壁を含む整地層である。敷地中央部がもっとも厚く層厚20cmを測る。大坂夏ノ陣に伴う焼土層が攪拌されたものである。

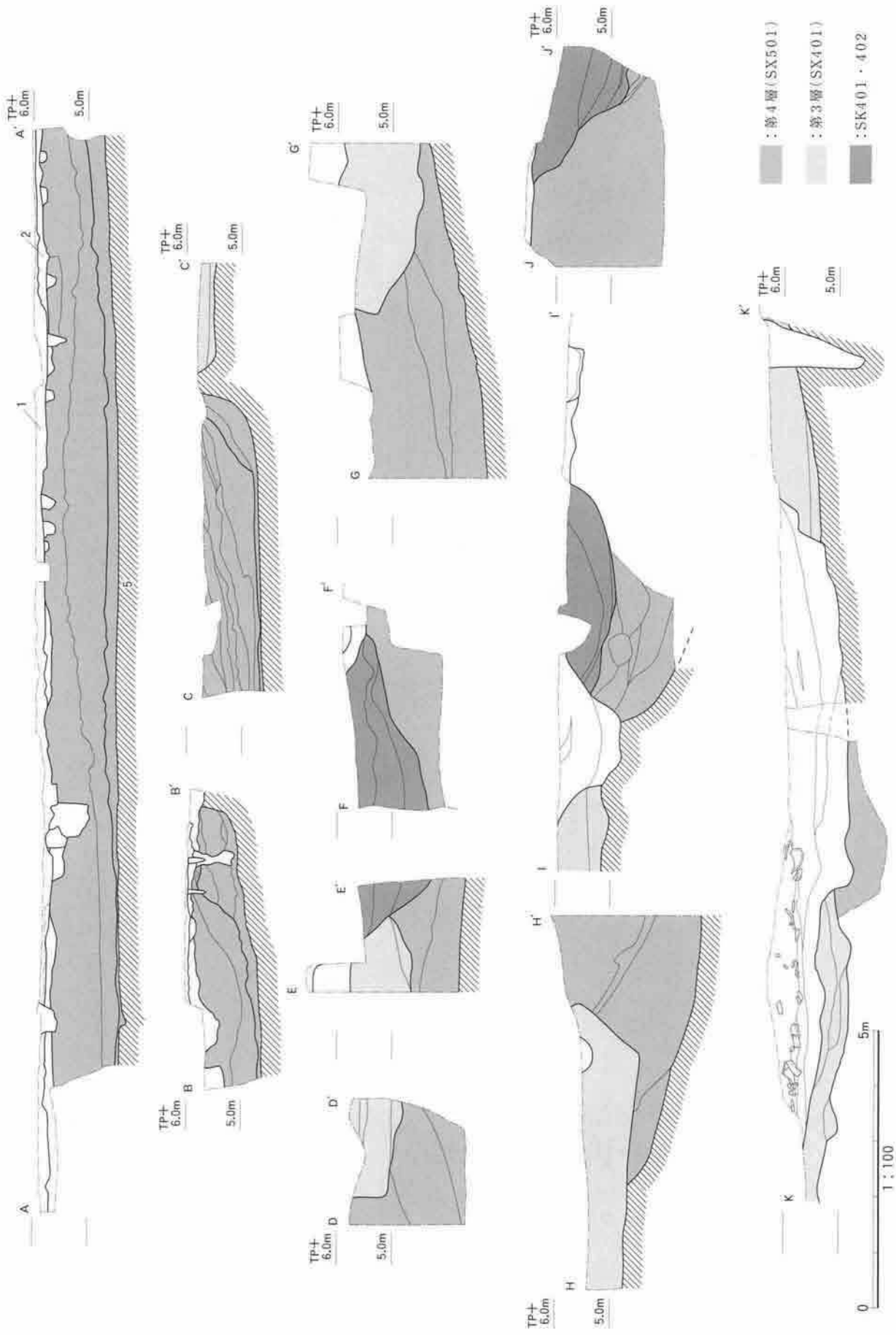


図274　OS91－64次調査地断面図

第3層　調査地東部のSX401内に広がる整地層である。

第4層　厚い整地層で調査地西部に広がるSX501内にのみ認められる。層厚は最も厚い部分で約120cmある。シルト～細粒砂の大きな偽礫を含んでおり、大規模な造成に伴うと考えられる。遺物は青花および青海波文の軒平瓦片などごく少量が出土したのみで、時期を決するだけの根拠はないが豊臣前期の特徴をもつ。

第5層　細粒砂主体の地山層である。

ii)遺構と遺物

a．地山上面(豊臣期)の遺構

OS91－64次調査の地山上面で確認した遺構である(図275)。SX501・401、SK401・402がある。遺構の切合い関係を見るとSX501→SX401→SK401・402の順となる(図274埋土断面図)。

SX501　調査地西部で認められた大規模な落込みで、深さは確認できたところで1.2mある。上端が直線的であることや底面がほぼTP+4.6m付近で平坦になっていることから人為的に加工されていることは間違いないが、性格は判然としない。上端の方位はN15°Eと大きく東に振っているが、豊臣期段階には谷町筋以西では北で東に7～8°振る方位の遺構群が散見されており、このSX501も豊臣期の屋敷地の造成に係わる可能性もある。しかし、底面には遺構は確認できなかった。

SX401　西側の上端がほぼ南北になる、南北24m以上、深さ0.6mの大規模な落込みである。底部には水成層であることを示すラミナが認められ、上部は人為的な埋戻し土である。遺物は出土しなかった。性格は不明である。

SK401・402は平面楕円形を示し、深さは0.6m前後である。遺物は出土し

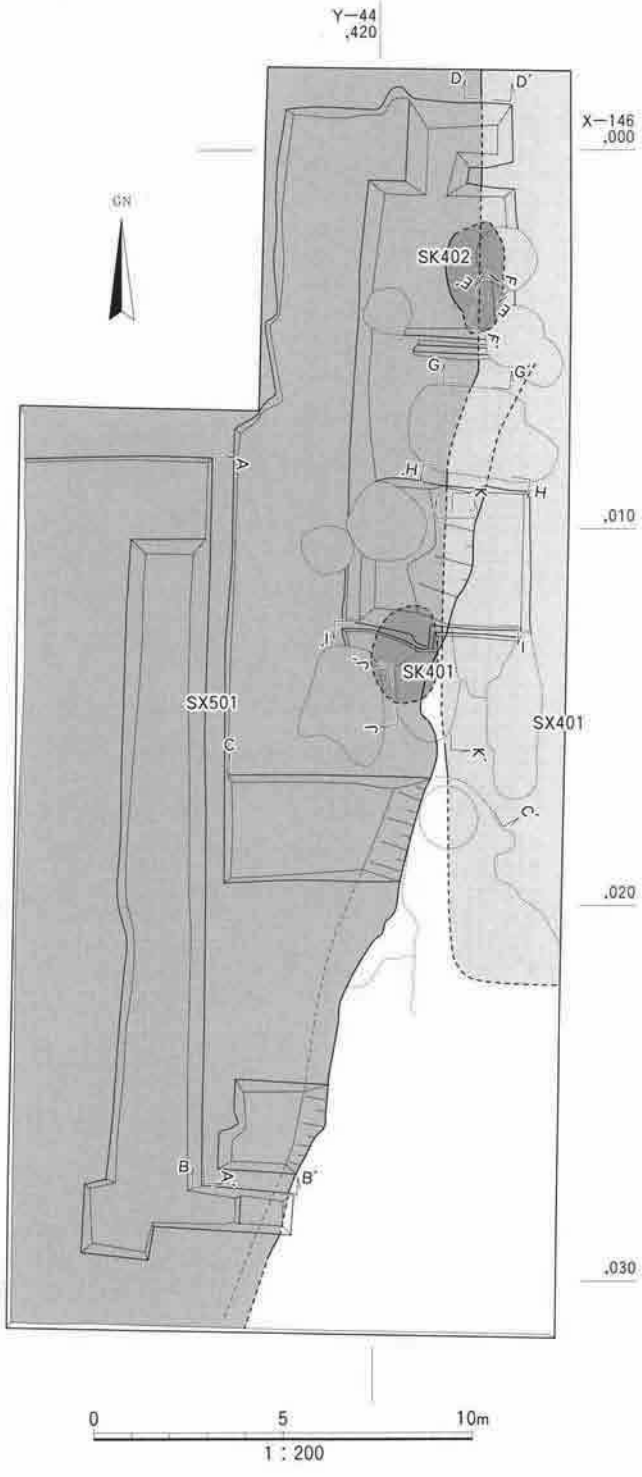


図275　OS91－64次第4層上面遺構配置図

ていない。

b. 豊臣後期の遺構

第3層基底面検出の遺構である。南北方向の柵のほか溝、散在する柱穴群が確認された(図276)。出土遺物は非常に少ないが、豊臣後期の遺構群と考えられる。

SA301・302　いずれも南北方向の柱列であるが、SA301はN4°Eと北で東にやや振る。SA301のピットはごく浅く、削平されたのか、あるいは本来は礎石が据えられていた可能性もある。ピット内には焼土が含まれていた。SA302は掘立柱で、N1°Eとほぼ正南北である。

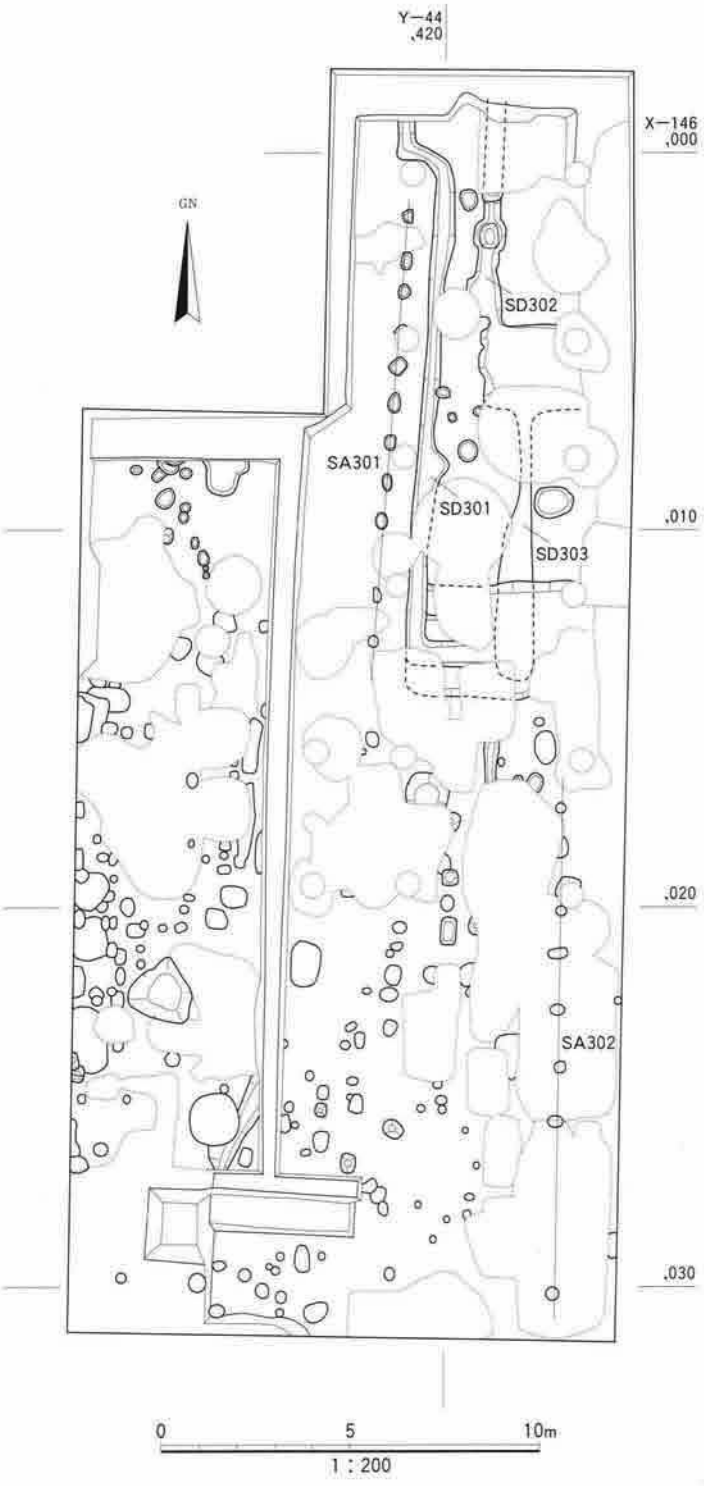


図276　OS91−64次第2層基底面遺構配置図

SD301・302　ともに似たような形状を示し、南北方向の溝の端に方形の浅い土壙状の広がりが取付く。埋土下部には滞水していたことを示す水成層が堆積している。SD301は調査地北端で屈曲してさらに北に延びている。

SD303　SD302の南端の方形落込みから南に延びる南北溝である。埋土がSD302と同じである。SD301に切られており、いずれも埋土には焼土が含まれておらず、大坂夏ノ陣の際にはすでに埋まっていたと考えられる。

遺構の方位から見るとSA301とSD301、SA302とSD302・303が同方位である。とくにSA301とSD301とはSA301が途切れる部分でSD301が屈曲するなど関連性を示す要素が強い。ただし、埋土に焼土層が含まれないことからSD301が先行して埋められた可能性もあろう。

これらが作られている位置は下層のSX501の東肩で、SX401の西肩付近にあり、この付近が前代からの南北方向の敷地境であった可能性もある。また、SD301とSA302の間辺りも東西方

向の敷地境になる可能性もある。

これら以外にも多くのピットが見つかったが、建物や柵は復元できなかった。

OS91－93次調査地では敷地の北端で土壙を２基検出したが、性格は不明である。

ｃ．徳川期の遺構と遺物

重機掘削終了時に検出したもので、多くは第１層に伴う遺構である。南北方向のSW101を挟んで東西の屋敷地に分かれ、東側敷地から多量の油煙受皿が出土したことから、東側敷地には墨屋があったと推定できた(図277)。

SW101　２段程度が遺存していた石列で、西側に面をもつ。明治19年測量の『大阪実測図』や昭和47年測量の『大阪市道路現況図』を見ると(図285)、このSW101の位置が敷地境となっており、徳川期にも敷地境であったと考えられる。前述のようにこの一帯は西側に低くなる斜面地であり、その傾斜を雛壇状にするための石垣であろう。東西の敷地には多くの土壙や竈が展開している。旧地表面は失われており、東側敷地のSX101・102は0.8m以上、西側敷地のSX104は0.4m程削平されていると推定できる(註１)。遺構の遺存状況から考えると、西側敷地より東側敷地の方が0.4～0.5mほど高く、石垣もほぼ同じ高さまで築かれていたと推定できる。

SX101　東側敷地南端部に検出した竈の基底部である。南方向に焚口をもつ。壁となる粘土や塗込められる石は存在していなかったが、中央にある窪みの周囲が焼けており、ここが燃焼室と推定できる。

SX102　東側敷地南部で検出した竈の基底部である(図278右)。北東方向に焚口をもつ。これは燃焼室の基底部の壁とその中に石が塗込められたもので、中央に燃焼室があり、そこには灰の掻出し溝の痕跡がある。また、焚口には石が残っていた。焚口が１つしかない竈である。外径が約1.6m、内径は1.1mである。竈を築くにあたって、地面に穴を掘り、黄褐色砂混りシルトで壁体を作る。壁の厚は0.3mと推定できる。

SX103　東側敷地北部で検出した竈である。焚口を東に向ける。燃焼室が２つあるもので、南側に大型の燃焼室が、北側に小型の燃焼室がある。壁の作り方はSX102と同様で、粘土に石を塗込めて築いている。南側燃焼室の復元内径は東西1.2m、南北1.1mとやや東西に長い。北側は東西0.9m、南北0.7mで、この燃焼室も東西に長い。北側燃焼室には、灰の掻出し溝の石が西側と南側に残る。掻出し溝は長さ0.8m、幅0.2mに復元できる。

SX104　西側敷地の南部で検出した竈で、上部は削平されているがほぼ全形がわかるものである(図278左)。その規模は南北２m、東西1.6mである。南側に方形の作業室があり、北側には円形の燃焼室が１つある。燃焼室は先の竈と同様の作りである。作業室は平瓦を小口状に積上げて粘土で固めている。燃焼室は内径が1.0mで、深さ0.5mが残っていた。灰の掻出し溝は石が抜取られているが、燃焼室の中央は硬く焼締まっており、溝の床面と推定できる。焚口には平坦な石が置かれ、両脇には直方体の石が立っていた。燃焼室の壁は熱のため赤変している。作業室は一辺1.1mの方形で、深さ0.4mが残っていた。床面は焚口に向かって低くなり、炭が薄く広がっていた。作業室の西壁南端部には花崗岩が埋込まれている。作業室への階段石であろう。[大阪市文化財協会2002b]の第Ⅳ章第２節で

報告した竈SX101の規模と比較すると、0.4m程浅くなっており、この敷地が0.4mは削平されていると推定できる。

SX105　西側敷地北端で検出した竈である。調査範囲の北壁に接して焚口を１つ検出しただけで、燃焼室の数は判然としない。しかし、北東部の燃焼室の壁が丸くなっており、燃焼室が１つだけの竈と推定する。東側に燃焼室が、西側に作業室がある。燃焼室の内径は1.1mで、壁には人頭大の礫が塗込められている。燃焼室の灰の掻出し溝の底は熱で固くなっているが、溝を作る石や焚口の石はすべて抜取られている。

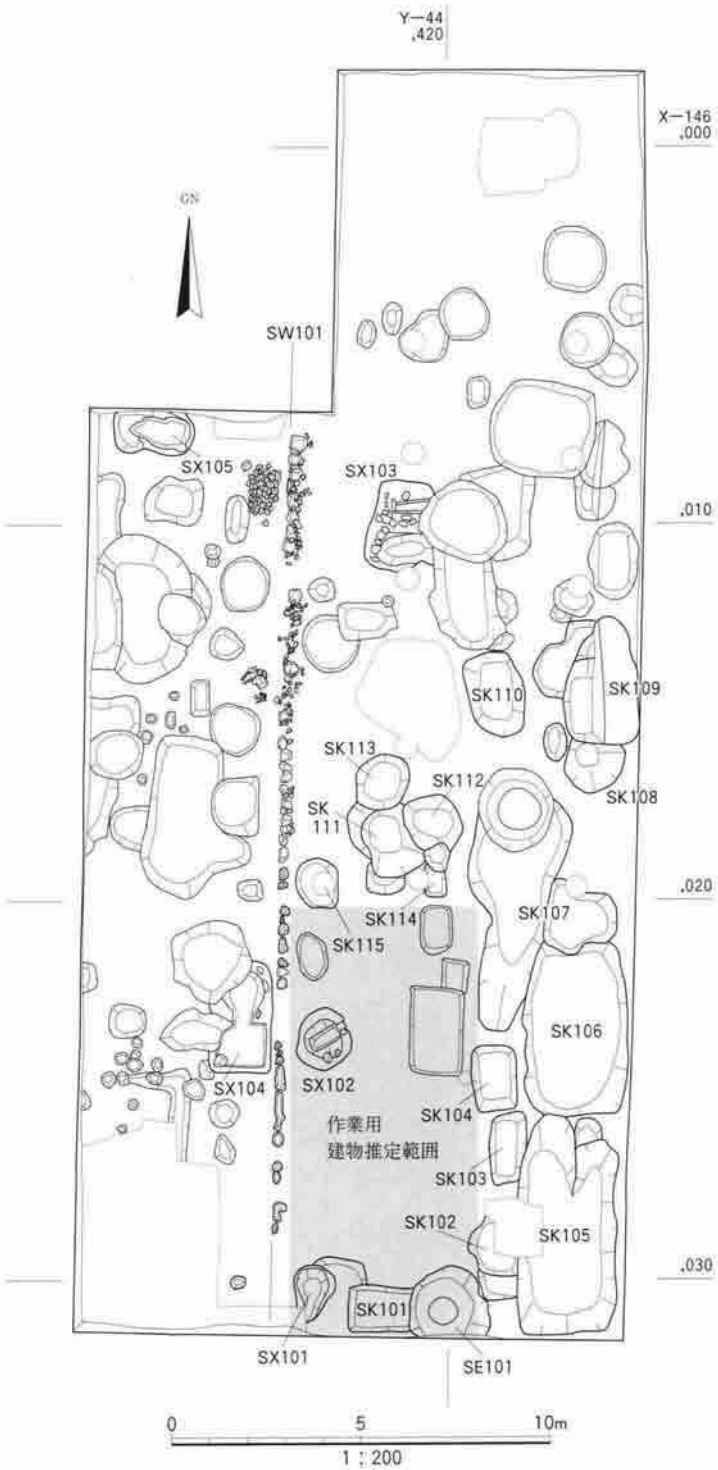


図277　OS91−64次第１層内遺構配置図

ここで検出した竈は住居の台所にあるように地上に構築するものではなく、地面を掘り窪めて燃焼室や作業室を築く半地下式のものであり、産業用のものと考える。

SE101　東側調査地南端で検出した井戸である。掘形の直径は2.1mで、中央に0.7mの桶が井戸側として設置されていた。多量の炭とともに油煙受皿が出土した。出土した遺物には油煙受皿以外に、肥前磁器碗1～5・唐津焼鉢6・丹波焼擂鉢25・26がある（図278）。1・2は染付であり、3は外面に鉄釉、4は青磁釉を、5は内外面に鉄釉を掛けている。6は刷毛目文様を描いている。25の擂目は７本単位であるが、26はかなり密に施している。磁器碗は17世紀前半のものである。

土壙群　東側敷地では南半に炭を大量に含む土壙が多数ある。先にそれらの土壙について述べる。

土壙には平面形が方形のものと、円形のもの、不整形のものがあり、方形のものには大小２種がある。

SK101　南端で検出された東西に長い小型の土壙である。SE101に切られ

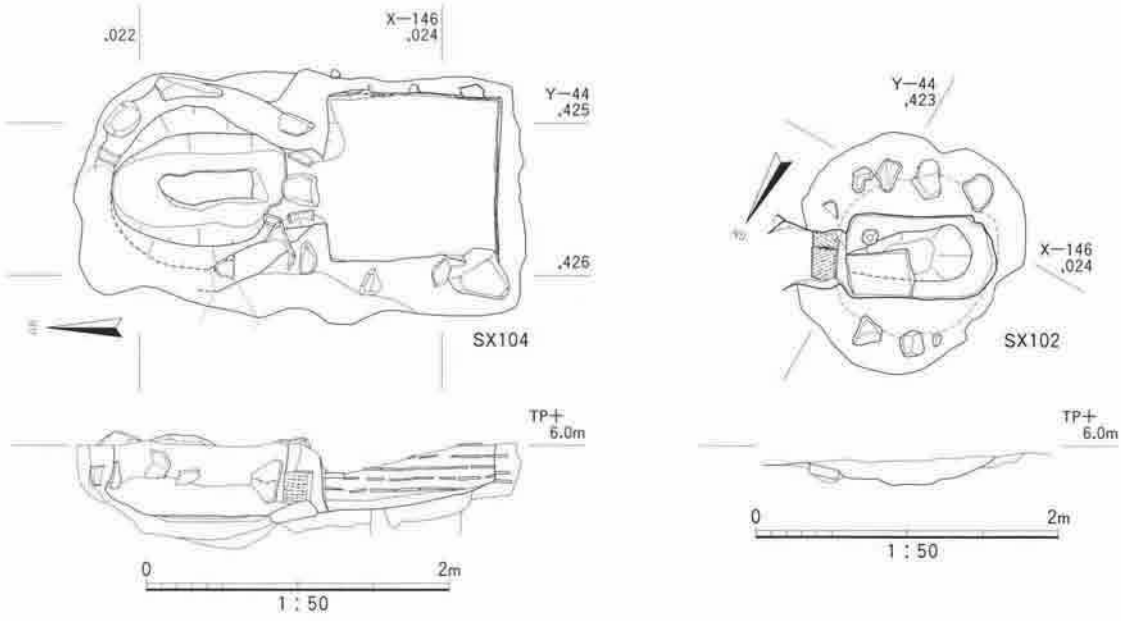


図278　OS91−64次SX102・104実測図

ている。東西1.6m以上、南北1.2m、深さ0.9mで、底および側面には木質が遺存しており、板組の穴蔵であったと思われる。埋土は炭とシルトが互層に堆積し、埋土から大量の油煙受皿とともに瀬戸美濃焼の天目碗7と皿8が出土している(図280)。7は器壁が均一で、釉は黒色を呈し、胎土は灰白色である。連房期の天目碗である。8は志野皿で、これも連房期のものであろう。

SK102～104　東部で検出された南北に長い小型の土壙である。後述する大型のSK105・106の西側に接するように南北方向に並んでいる。これらからも油煙受皿が出土した。SK102から出土した遺物が肥前青磁碗9である。内面も高台内も施釉し、高台の畳付部分だけ釉を掻き取る。SK103からは肥前磁器碗10、肥前磁器染付皿11が出土した。10は一部に染付が残っている。SK104から出土したものには瀬戸美濃焼天目碗12、肥前青磁碗13、肥前染付皿14がある。12の天目碗は器壁が薄く、連房期のものであろう。13は9と同様に畳付部分だけ釉を掻き取っている。14は11と法量・器形・文様も同じである(図280)。

SK105・106　調査地の東端に位置する南北４～５m、東西2.5m、深さ１mもある大型の方形土壙で、南北に並んで見つかった。埋土は大量の煤の間にシルトが薄層となって介在している。肥前磁器とともに油煙受皿が多量に出土した。

これらの土壙群はあまり切合わず、整然と配置され、陶磁器に比べて油煙受皿を大量に出土する特徴がある。このことから、油煙受皿を投棄する目的で掘削され、捨てたあとに埋戻し、次に隣接してあらたに土壙を掘削するといった過程が復元できよう。SK106から出土した陶磁器を報告する(図280)。15～21は肥前磁器である。15・16は一重網目文碗で17世紀中頃、17は17世紀前半の碗であろう。18は皿である。19・20は青磁皿で、21は青磁香炉である。22は備前焼鉢である。23・24は唐津焼鉢で、23には型打ち文様が、24には刷毛目文様が施される。

SK107～110　不整形の土壙で、敷地東端のSK103～106の北に並ぶように掘られている。SK107はSK102～104の北側に連続しており、それらと同時に掘られているように見える。唐津焼碗27は



図279　OS91－93次調査地遺構配置図

SK107から出土した(図281)。SK108～110は少し離れた北側にある。

SK108から絵唐津皿28、砂目積の唐津焼皿29、土師器羽釜30が出土した。28は胎土目であり、古いものが残っている。SK109から出土した瀬戸美濃焼天目碗31は器高が高く器壁も薄いことから、連房期の天目碗である(図281)。

SK110出土遺物では32～35・37が肥前磁器で、32は外面に寿字文を散らし、内底面にも二重圏線の中に寿字文を描く。35は青磁碗である。37は輪花になる皿である。36・38～41は唐津焼で、36が内野山系の碗、38も器壁が薄いことから溝縁皿になろう。39は内面に砂目跡がある大皿で、高台内にヘラ記号がある。41も大皿である。40は口縁部付近を施釉する擂鉢である。42は土師器焙烙のA類である。これらの時期は17世紀代の中頃になろう(図281)。

SK111～113　敷地中央にある円形の土壙である。同位置に重なるように掘削されており、陶磁器類が多く出土する特徴がある。

SK111から出土した陶磁器を図282・283に示した。48・49は瀬戸美濃焼天目碗で、器高が高く、高台の形態などから連房期のものと考えられる。50～52は唐津焼碗で、52は呉器手の碗である。53～62は肥前磁器碗で、53～55は1630～1650年代、56～60は1650～1670年代の染付碗である。61・62は色絵碗で、口縁部端反りの碗61は、型打ちによって口縁部を輪花にする。松竹梅を描いているが、松葉や梅花に金彩を使い、色絵の輪郭を縁取っていない。「仁清手」と呼ばれるものである。内面には型打ちの文様がある。62は小振りの碗である。

63～66は唐津焼の小碗と溝縁皿で、65・66の内面には砂目跡が付く。67は周囲に牡丹唐草文を巡らし、中央に草花を描く。外面にも唐草文を入れる。高台内には方形枠に記号を書く。中央にハリササエが1個所見られる。

68は内外に龍鳳文を描く鉢である。69は染付香炉で、内面は折曲げた口縁部まで施釉し、体部には施釉しない。70は青磁染付の香炉で、獣面の脚が三方に付く。外面に山水文を描く。底部は蛇の目高台状になり、端面には鉄錆を塗っている。高台端面を除き全面に施釉する。

71は唐津焼水指で、外面に刷毛目文様を施す。72は折曲げた口縁部から体部外面に白色の釉を掛ける香炉で、内面にはロクロ目が顕著に残る。生産地はわからない。73・74は青花で、73は徳川初期

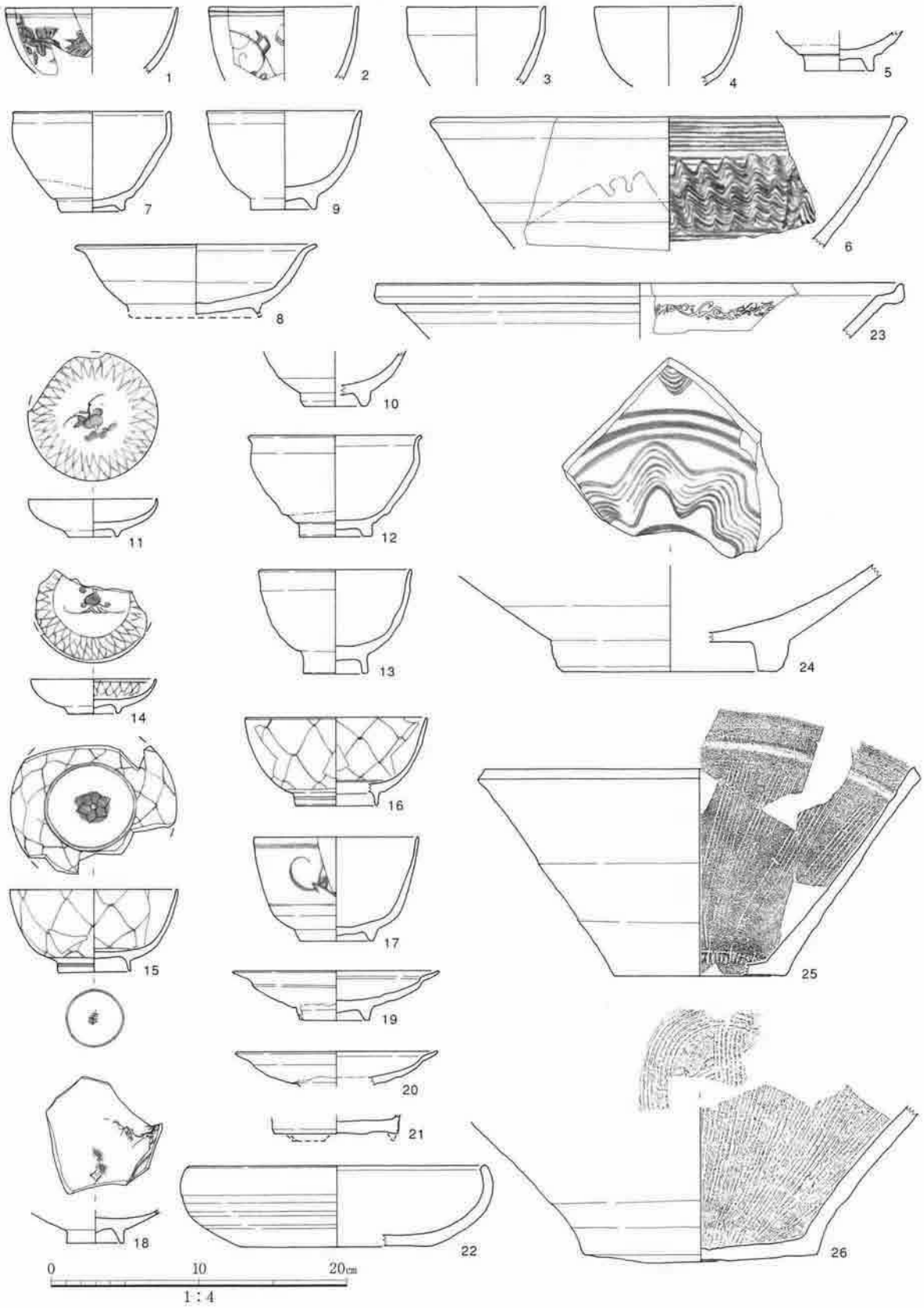


図280　OS91－64次出土遺物（1）

SE101（1～6・25・26）、SK101（7・8）、SK102（9）、SK103（10・11）、SK104（12～14）、SK106（15～24）

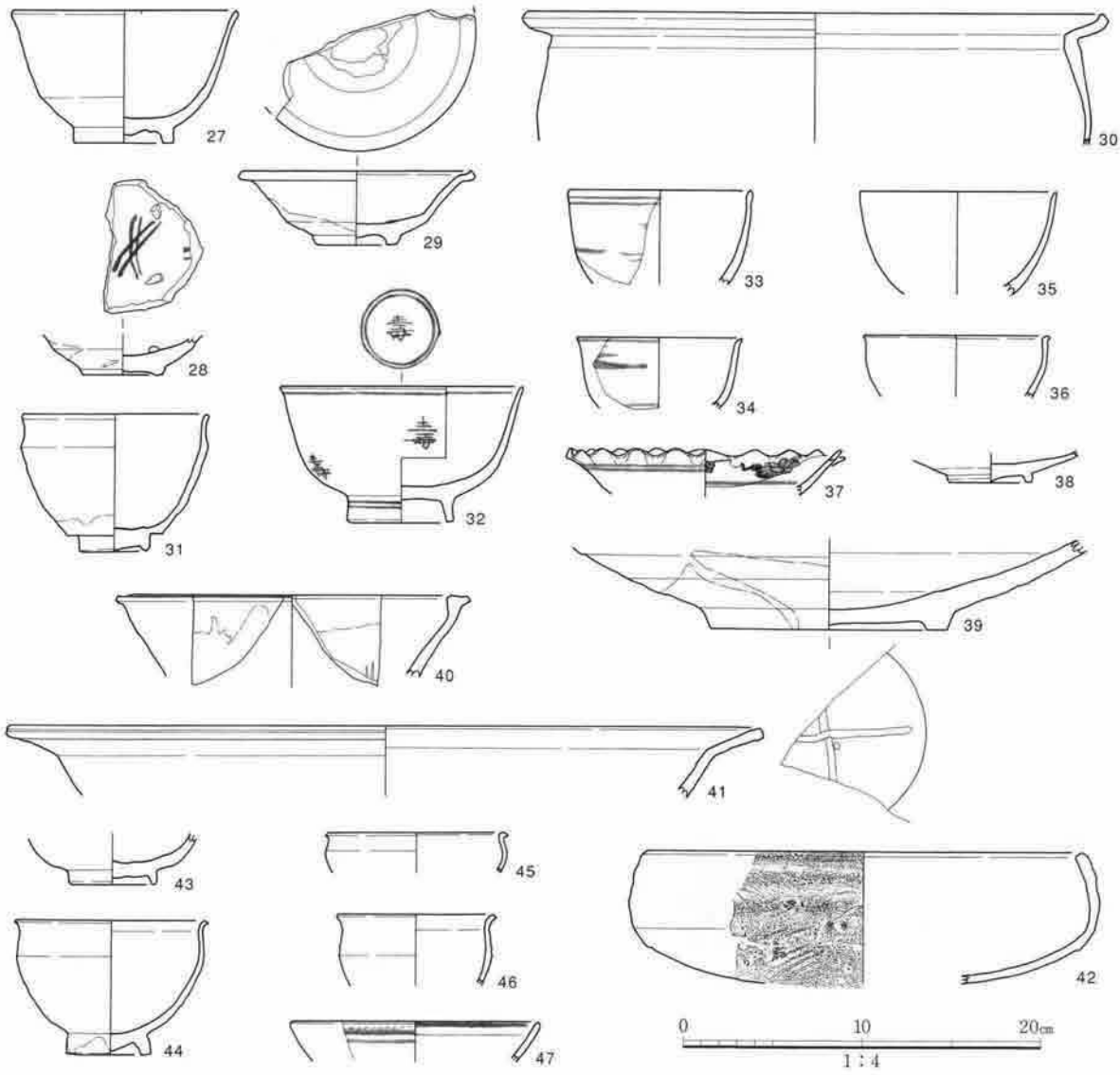


図281　OS91－64次出土遺物(２)

SK107(27)、SK108(28～30)、SK109(31)、SK110(32～42)、SK112(43～47)

になって見る文様の碗である。74は合子の蓋である。75は唐津焼の壺で、耳が四方に付く。外面には平行タタキ、内面には当て具の痕跡がある。76は土師質の土器で、やや硬質である。外面に縦方向の櫛目を施している。産地はわからない。77・78は丹波焼擂鉢である。

79～83は土師器焙烙で、79がＡ類、80～82はＤ類、83はＣ類である。84は大和Ⅰ型の羽釜で、鍔と口縁部が近くなっている。

出土陶磁器は1630年代の肥前磁器も含むが、1670年代までのものも見られることから、廃棄されたのがその頃と考えられる。

SK111から出土した遺物群は、積山洋が大坂の江戸時代土器編年試案(以下、積山編年と呼ぶ)の５段階と設定したOS91－64次調査SK117の資料である[積山1995]。

SK112からは肥前磁器碗43、唐津焼碗44～46、青花47が出土した(図281)。43は染付文様はないが、器形から染付碗と考える。44～46は内野山系の碗である。47は徳川初期に出土例の多い碗であ

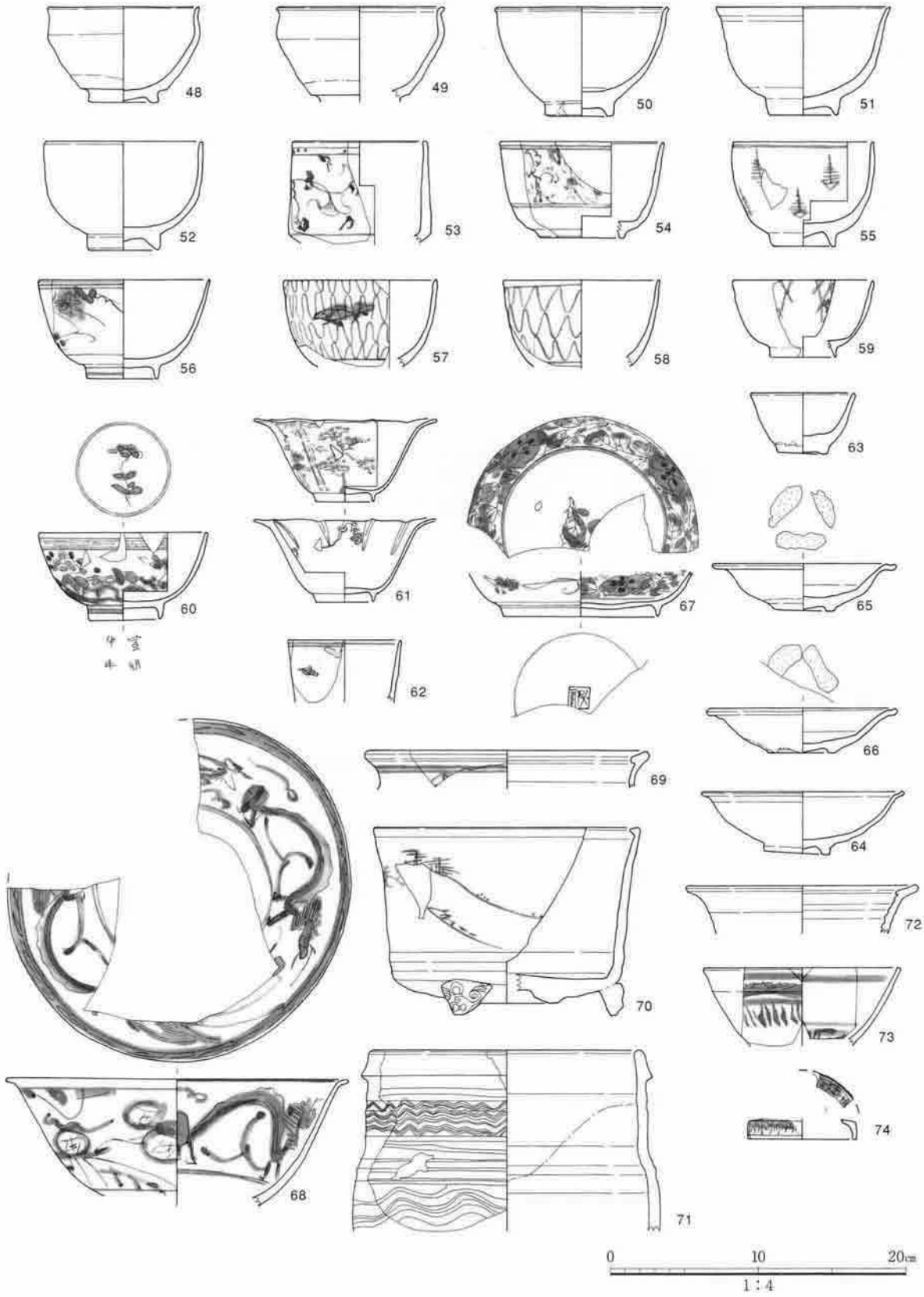


図282　OS91－64次出土遺物（3）
SK111(48～74)

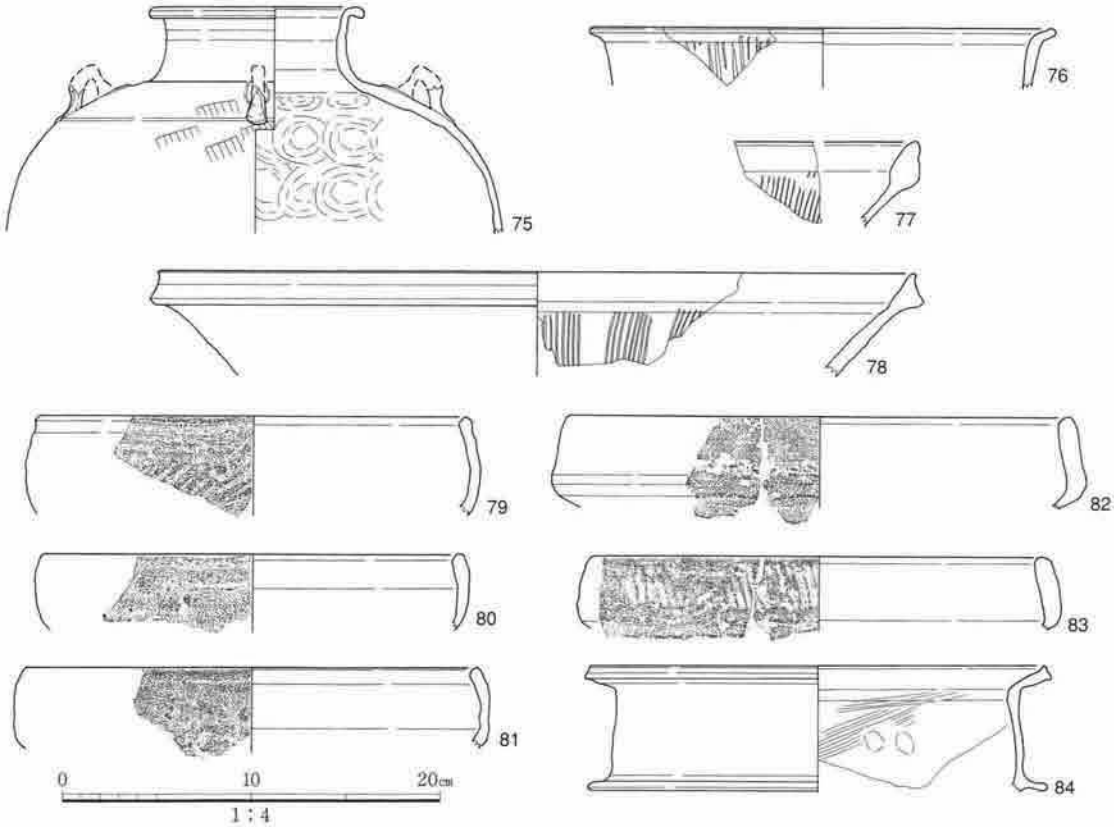


図283　OS91－64次出土遺物(4)
SK111(75～84)

る。

SK114　敷地のほぼ中央で検出した長方形を呈する小型の土壙である。SK111～113と同じ位置にあるが、それらとは形態や規模が異なり、中には混りのない煤だけが堆積していた。余分な煤を廃棄した土壙と思われる。

SK115　敷地北部の中央で検出した楕円形の土壙である。17世紀後半の陶磁器が出土した。

この北側にも竈があるが、この竈の燃焼室は2つあり、ほかの竈とは形態が異なる。別の使用目的があったものと考えられる。

敷地の南部に掘込まれた土壙や井戸内からは大量の油煙受皿と土師器皿が出土した(表12)。

油煙受皿は直径約18cm、器高約3.5cm前後のものと、直径約18cm、器高約3cm前後のものがあり、凸面に半環状の把手が付く。凹面には煤が付着しており、凹面を下に向けて灯心を覆い、煤を集めたものである。凸面の調整手法には2種類ある(図284)。

土師器皿は直径約12cm前後のもので、内外面に油煙が付着している。この皿は油煙受皿で採取する煤を出す炎を灯すもので、数枚の皿を重ねて使用する。調整手法の異なる2種類がある(図284)。

SK101から出土した油煙受皿85は、外面に粘土紐の接合痕やミガキなどの調整痕が明瞭に残る。内面は外面よりていねいにヘラミガキを行っている。口縁端部は摘んでナデており、先端が細くなっている。半環状の把手もていねいなミガキ調整である。これは紐を巻上げた後、外面の調整を行っているのであろう。

SK102から出土した油煙受皿86は、粘土の半環状の把手を貼付けている所のみに調整痕跡がなく、表面に細かな砂が付着しており、粘土の細かな縮れが全面に観察できた。このことから、これは凹形の型で作ったものと考えられる。内面は85と同様、ていねいなミガキ調整である。

土師器皿にも同じ違いが観察できる。87・88は手捏ねの皿で、近世大坂で多く出土するタイプである。89・90の内面はロクロ回転のナデの後、不定方向にナデている。外面上半にはロクロによる回転ナデがあり、下半部には指の圧痕がある。底面には調整痕がなく、粘土の縮れが観察できる。器壁も口縁端部以外は均一で、87・88よりも重い。こうした特徴から89・90は型で作った皿と考えられる。

西側敷地でも多くの土壙を検出したが、性格などは不明なものが多い。

OS91－93次調査地では井戸を２基、土壙を１基検出した。攪乱が著しく、敷地内の建物配置を復元するにはいたらなかった。

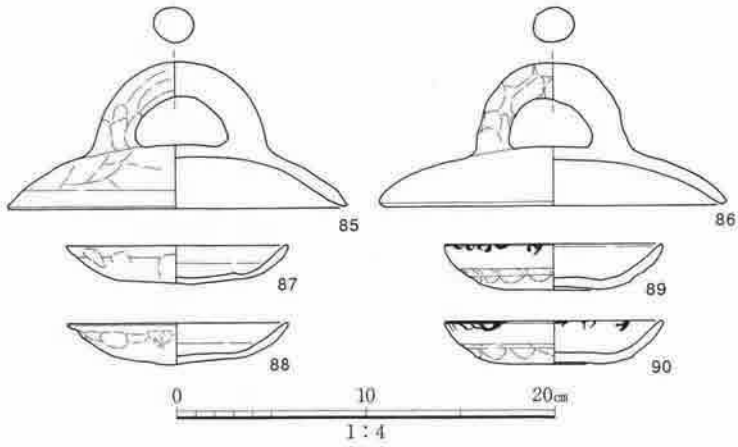


図284　油煙受皿と土師器皿
SK101(85・87・88)、SK102(86)、SK111(89・90)

表12　油煙受皿と土師器皿出土一覧表

遺構番号	把手の数	紐作り(kg)	型作り(kg)	合計
SK101	61	10.3	0.98	11.28
102	4	0.22	0.32	0.54
103	11	0.64	1.55	2.19
104	13	0.76	2.14	2.9
105	51	4.41	3.4	7.81
106	32	7.6	1.5	9.1
107	35	3.87	2.99	6.86
108	3	1.18	0	1.18
109	65	18.32	0.75	19.07
110	6	0.3	0.84	1.14
111	26	3.78	3.7	7.48
112	10	1.93	2.65	4.58
113	19	2.488	2.5	4.988
114	0	0.1	0	0.1
115	9	1.385	0	1.385
SE101	16	2.98	0.68	3.66
遺構出土重量		60.263	24	84.263
遺構出土重量比(約)		2.5	1	
遺構出土把手個体数	361			
その他の遺構	30	5.561	1.196	6.757
0～1層	53	6.95	3.61	10.56
2層	0	0.03	0.008	0.038
総重量		72.804	28.814	101.618
総重量比(約)		2.5	1	
完形品1個の重量		0.38	0.42	
把手総数	444			

3）まとめ

ここではOS91－64次とOS91－93次調査を報告したが、OS91－93次調査地では後世の攪乱のため、豊臣期以前の遺構も徳川期の町割を示す遺構も削平されていた。そのため、以下ではOS91－64次調査地の成果を中心に述べる。

ｉ）豊臣期

OS91－64次調査地の地山上面で検出した遺構群と、その上位の第４層および第３層上面に広がる遺構群は大きく方位を変えている。地山上面のSX501とした落込みは、北で東に15°振っている。SX501の法面はかなりの急角度であり、底面は平坦になっていることから、人為的な掘削による落込みと判断した。上町台地の西側斜面に広い平坦面を確保するために、雛壇状に造成したものではなかろうか。時期を判断できる遺物が出土していないため正確な時期は不明であるが、大規模な工事と考えられ、豊臣期と推定する。

この落込みが埋められた後、新たなSX401が掘込まれている。SX401は東側に低くなるように掘込まれており、その性格は判然としない。深さも0.6mとさほど深くなく、底面も平坦ではない。また、下部に水成層が薄く堆積しており、SX501とは性格が異なっていると考えられる。ただし、SX401の西側上端は現在の敷地の方位に沿っており、落込みを掘込む時点では現在の敷地と同じ方位が基準になっていたようである。

第３層上面の遺構群には小さなピットが多数あり、南北方向の柱列や南北溝がある。これらの方位はSX401と同じように現在の敷地方位に沿っている。ここでは豊臣後期に現在の敷地と同じ方位に則って敷地が割付けられ、建物が配置されていることがわかる。ここでは礎石状の石がまったくないことから、ほとんどが掘立柱型式と思われる。

ii）徳川期

徳川期の遺構群は現在の敷地方位とよく共通しており、中央で検出したSW101は、現在の敷地境と同じ位置にある（図285）。遺構群も敷地の方位に沿って配置されており、現在の方位や敷地境がこの時期以降、踏襲されていることが確認された。ただし、図285を見ると、大手通を挟む街区の各敷地は北で６°東に傾き基本的には大手通に直交しているが、OS91－64次調査地を含む南側街区の中央

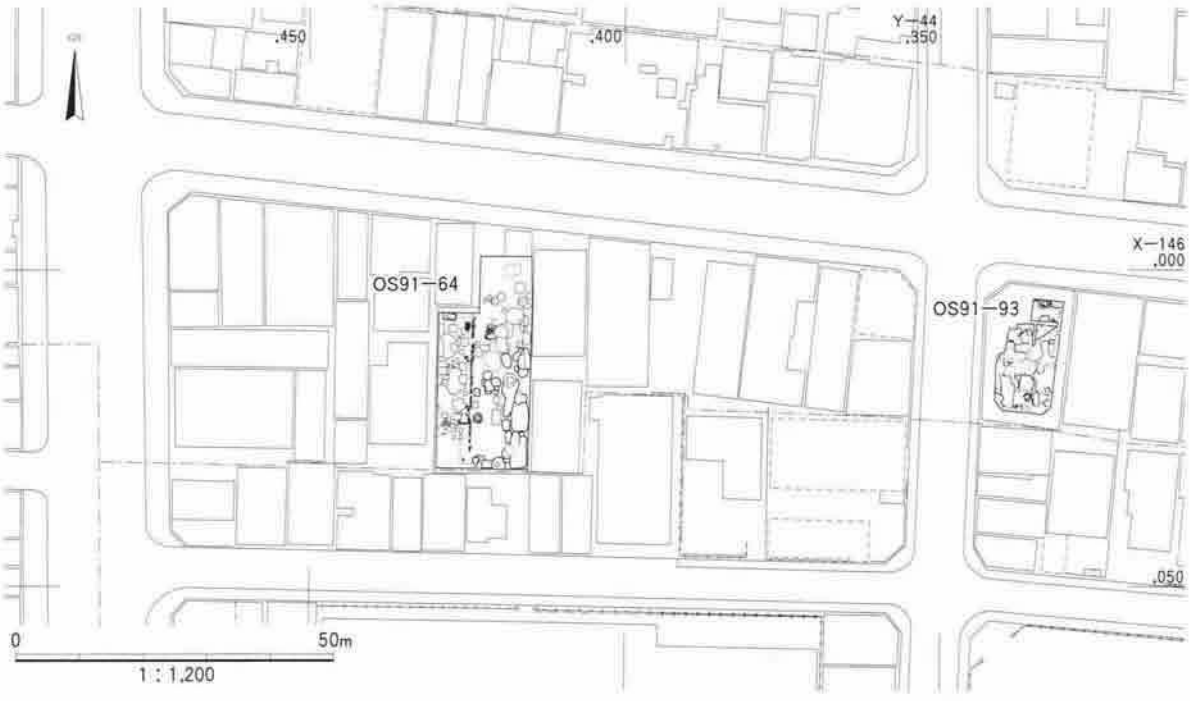


図285　現在の敷地方位と調査地の位置図

部から西部にかけての敷地は西側にある松屋町筋に平行している。この松屋町筋に平行する一角は敷地の奥行きも東部の敷地より長くなっている。東部にある東西方向の町境を西に延長した位置付近は、豊臣後期の遺構配置図(図276)を見れば、SA301と302が途切れる所に当る。豊臣後期にはこの付近が北と南の敷地境であった可能性があり、徳川期以降に敷地境の変更などを伴う街区の再編が行われている可能性がある。

OS91－64次調査地では両側の敷地にあった竈の残存状況から当時の遺構面の高さと敷地境の石列の高さも復元できた。

東側敷地の遺構群の分布状態を見ると、東端に長方形の土壙が南北に並び、その北側延長上にも不整形な土壙があり、長方形土壙の西側に接して小型の方形土壙が並んでいる。土壙の配置から、敷地の東端には土壙を掘ることができるような空間があったと考えられる。

また、敷地境であるSW101から土壙群までの間は、SX101・102をはじめ南端のSE101やSK101が周囲にある程度で、遺構が希薄な部分が広がっている。ここには作業用の建物があったと考えられる。

竈が建物内に築かれると考えられることから、建物の範囲はSX101・202やSE101・SK101までを含むと推定できる。SK101は壁際に木質の痕跡が見つかっていることから、穴蔵と考えられ、建物内部の施設となろう。その範囲は東西ではSW101からSK102～104までの間、南北ではSE101・SK101の南からSK114の南側までと推定できる。東西4.5m、南北11mの広さがあり、これが煤を集める部屋や竈を設置する建物の規模に近いのであろう。

昭和17年発行の『上方』第135号に「古梅園の墨」(古梅園とは奈良の墨屋)という文によれば[高村庄太郎1942]、「煙室は間口２間奥行１間半、更に入口を二重にする為めに外に廊下があって風の吹き入るのを防いである。」とある。昭和初期の墨作りを見学した際のものであろうが、煙室の広さが六畳とあり、ここに復元した建物内に収まる。

２基ある竈は少し離れており、同じ作業に用いたものではないかもしれない。墨作りには集めた煤と膠を混ぜる必要があり、膠を湯煎する作業が必要になる。ただ、1713(正徳３)年刊行の古梅園の『墨談』には、燃焼室が３基並んだ竈が描かれており、ここで検出した燃焼室が１口の竈ではない。業者の規模の違いによると考えて、調査で見つかった竈を湯煎用の竈と推定している。

敷地北半部には本来なら店を含む母屋が存在していたであろうが、削平のため遺構を検出できなかった。

東側敷地の多くの土壙からは油煙受皿が出土したが、『墨談』には同様の道具や使用方法が描かれている。煉瓦状の台の間に土師器皿を数枚重ね、上の皿に油を溜め火をつける。こうして生じた煤を油煙受皿の内面に付着させ採取する。大量に使用する道具であり、出土量が多いことも当然であろう。

油煙受皿は調整手法から、粘土紐を巻き上げてつくったものと型で作ったものの２種が存在し、土師器皿にも粘土紐巻き上げと型作りの両者があることが判明した。ここの墨屋は２個所の土器生産地から油煙受皿や土師器皿を購入していたと考えられる。

油煙受皿の出土遺構と出土量を表12に示したが、把手は同時期の遺構から361個体出土し、上層や上層の遺構から出土したものを含めると444個体となる。粘土紐巻き上げと型作りの比率を出土破片

の重量で比較すると、2.5：1で粘土紐巻き上げの方が多い。また、油煙受皿を廃棄した遺構には偏りがあり、大型で方形および不定形の土壙からの出土が多い。特に多く出土している遺構は移転もしくは廃業に伴う可能性もあろう。

ここで墨作りが営まれていた時期は、出土陶磁器から17世紀中頃から後半にかけてである。これらとほぼ同時期の資料が奈良市奈良奉行所跡(註2)から、時期不明のものが柏原市玉手山遺跡[柏原市教委1987](註3)から出土しているが、形態が異なっている。こうした道具は都市近郊の農村で生産された可能性が高く、大坂近郊でも複数の生産業者があったと推定できる。

発掘調査によって生業がわかる例が少ないなかで、製墨業を特定できたのは大きな成果である。大手通に墨屋が存在した記録はいくつかあり、江戸時代中頃に出版された『難波丸綱目』(延享版)には錦町2丁目に墨師として岡本和泉守が確認できる。また、幕末の1832(天保3)年出版の『商人買物独案内』には大坂上町追手筋錦町に墨屋岡本古松堂が記され、江戸時代初期の正保年間(1644～1647)より連綿と続くという記載がある。正保年間は今回検出の時期よりやや古いものの、ほぼ同時期である。錦町2丁目は今回の調査地よりも2街区東にずれるが、移転などの可能性も考えられよう。

(松尾)

註)

(1)[大阪市文化財協会2002b]の第Ⅳ章第2節で報告した竈SX101の規模と比較して推定した。

(2)奈良女子大学の坪之内徹氏のご好意により、実見させていただいた。

(3)柏原市教育委員会の桑野一幸氏のご好意により、実見させていただいた。

第６節　OS85－36次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

ここで扱う調査地はこの地区の西端部に位置し、上町台地の西側裾部に形成された沖積地に立地する。西側には東横堀川があるが、豊臣期に東横堀川が開削されるまではその前身であるラグーンに近接した所と考えられる。

この地区での最初の発掘調査には、1985年に大阪府教育委員会によって行われた西町奉行所跡がある[大阪府教育委員会1986]。その調査では地表下3.5ｍまでの間に奈良時代の地層が見つかり、上位には室町時代の町屋や豊臣期大坂城の惣構、徳川期の西町奉行所跡の諸遺構が見つかった。この結果を受け、この付近には室町時代までさかのぼる町屋や豊臣期大坂城の惣構関連施設などの存在が予測され、周辺で発掘調査を行うこととなった(図286)。

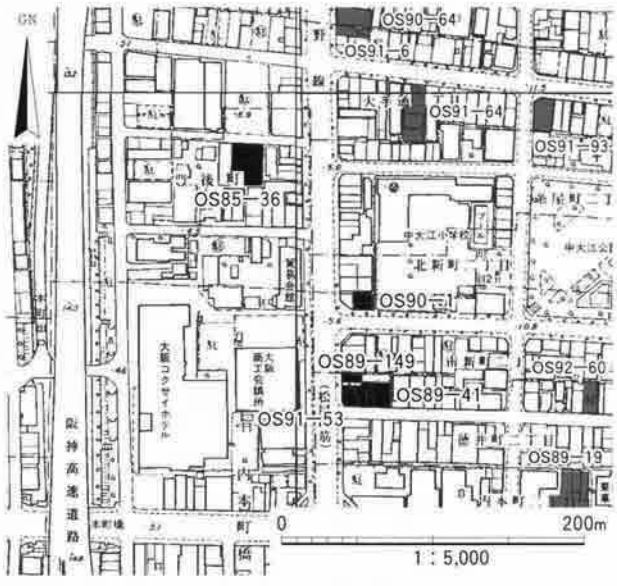


図286　OS85－36次などの調査地位置図

大阪府教育委員会調査地の北側に位置するOS85－36次調査地では、試掘調査によって同様の地層が確認されたため調査を実施することになった。

大阪府教育委員会調査地と松屋町筋を隔てた東側に位置するOS89－41次調査は、試掘調査によって豊臣期と推定できる遺構面が３面検出されたことから実施することとなった。重機による掘削は後述の第１層までとし、以深は人力による掘削で調査を進めた。北隣のOS89－149次調査も試掘調査によって同様の遺構面が検出されたため調査を行うこととなったが、湧水による壁面の崩落が甚だしく、途中からは部分的な調査にとどまらざるを得なかった。南隣のOS91－53次調査では地下受水槽のみを地表下3.5ｍまで調査した。

北側のOS90－１次調査地でも、試掘調査で焼土層が確認されたことから調査を実施することとなった。後述の第２層まで重機により除去したのちに調査を開始したが、試掘調査で焼土した地層は酸化した部分を誤認したことが明らかとなった。面的な調査は第１層内の徳川期の中葉以降の遺物を含む遺構面に対して行っただけで、以下は部分的な調査によって層序の観察を行った。

２）調査の結果

ｉ）層序と遺物

調査地が松屋町筋を挟んで分れているが、東側のOS89－41次調査とOS91－53次調査地の層序を代表して記述する(図287)。

第１層　重機により掘削した地表下1.1～1.2mの地層および後述の第２層上面遺構までの地層を一括して第１層とする。

第２層　層厚10cm以下で部分的に遺存する整地層である。豊臣後期に属すると考えられる。唐津焼1が出土した(図291)。

第３層　粘土偽礫・細礫などを少量含む中粒砂および粗粒砂が主体の整地層で、調査地全域を平坦にしている。層厚は厚い部分で170cmであり、OS89－149次調査では170cm、OS91－53次調査では150cmあった。整地される前と後の地表面の高さはいずれの調査地も一致する。土師器・瀬戸美濃焼を含む。三ノ丸造成に伴う整地層と考えられる。灰釉陶器2・瀬戸美濃焼黄瀬戸3・土師器羽釜4が出土した。

第４層　OS89－149次調査では層厚5cm程度の黒色シルトに対比でき、礎石状の石が見つかった。OS91－53次調査では複数の遺構面を含む層厚20cm程度の整地層で、３層に細分できる。OS89－41次調査では第５層上面の遺構埋土に対比できる。OS91－53次調査では瀬戸美濃焼灰釉皿5、土師器皿6・7、備前焼擂鉢8、銅製の自在鉤9が出土した。豊臣前期に位置づけられる。

第５層　粘土偽礫を含む中粒砂および小礫を含むシルトからなるにぶい黄燈色を呈する。OS89－41次調査地の東端では層厚が130cmと厚く、西では30cmと薄くなるが、西側にあるOS89－149・91－53次調査地では厚くなる傾向が見られる。豊臣前期の惣構工事に伴う整地層と推定する。OS91－53次調査では下位層の第６層上面の傾斜に沿って西側に厚くなっていく。

第６層　黒色細礫混り砂質シルト～粘土質シルト層で固く締まる。OS89－149次やOS91－53次調査地で確認されたが、厚さは調査深度が届かず不明である。層相から古代から中世の遺物包含層と考えるが、詳細な時期は不明である。東側に位置するOS89－41次調査地では見つからなかったことから、OS89－41次調査地の東端付近から西側に広がっているものと推定でき、その付近が豊臣期より前の集落の東端となる可能性がある。

第７層　OS89－41次調査地のベースになる。最上部には粘土が堆積するが、その下位は中粒砂から粗粒砂、さらには砂礫層へと層相が変化する。上町台地の西側斜面から裾部に堆積した水成層の可能性がある。

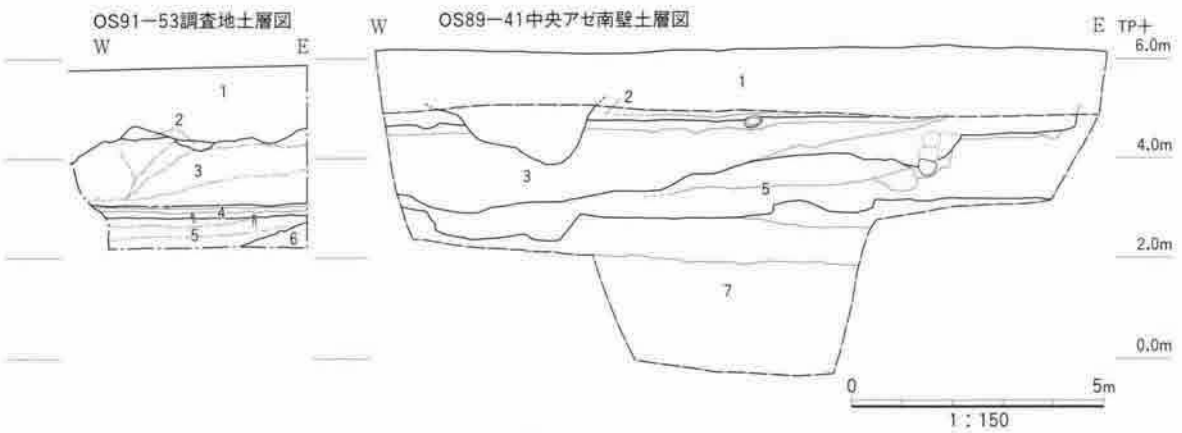


図287　調査地断面図

ii)遺構と遺物

ａ．豊臣前期の遺構と遺物

この地区での調査深度は地表下６ｍのTP±０ｍまでとしたが、豊臣期より前の本願寺期やそれ以前の遺構は見つからなかった。当該期の地層である第６層の東端しか検出できず、それに伴う遺構群はさらに西の低地に広がっているのであろう。

豊臣前期の遺構はOS89－41・149次やOS91－53次調査地の第５層上面や第４層内で見つかった。OS89－41・149次調査地では1594(文禄３)年の惣構工事に伴うと推定する整地層である第５層上面に、OS91－53次調査地では第５層上面とその上位の第４層に伴う遺構が検出された(図288)。

ここでは第５層上面遺構群を先に述べる。

SW501　OS89－41次調査地の東部で検出した南北方向の石垣である(図289)。石垣を構築する第５層は**SW501**の東でTP＋4.5ｍの高さで水平に整地され、調査地東端ではさらに高くなろうとしている。石垣はTP＋4.5ｍの面から掘込まれた掘形内に築かれている。石垣の西ではなだらかに低くなる様子が認められ、水平な平坦面にはなっていない。石垣の石は１段しか残っていなかったが、**SW501**の東側の高さまで積上げたとすれば、あと２段は積まれていたと考える。一抱えほどの花崗岩を西側

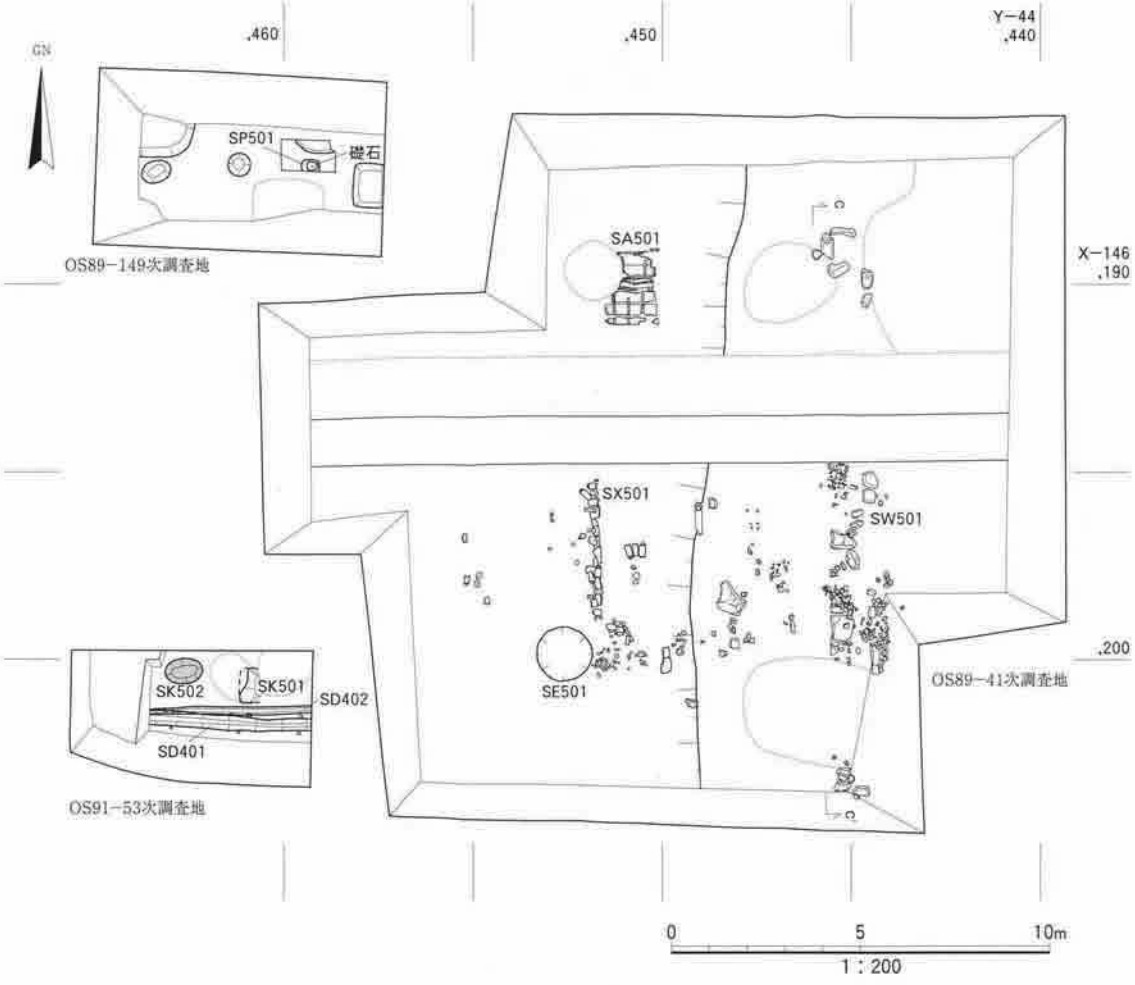


図288　豊臣前期遺構配置図

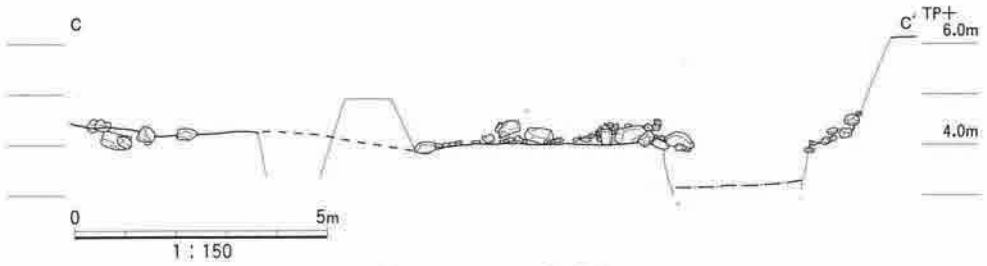


図289　SW501立面図

に面を揃えて並べ、その背後の裏込めには拳大の礫を詰めている。石垣の北端は東に屈曲しており、この位置で途切れていた可能性がある。SW501の東は削平されているため、顕著な遺構は存在しなかった。方位はN1°Wである。石の下から備前焼擂鉢11や壺12が出土した。

SX501　OS89－41次調査地の中央部西寄りで見つかった瓦積み遺構である。SW501より西約６ｍの位置にあり、SW501と平行するように南北方向に延びる。東側に面を揃えるように瓦を粘土で固めている。周辺にも瓦片が散乱しているが、どのような構造に復元できるのか不明で、性格も明らかではない。方位はN1°Wである。下から中国製白磁皿10が出土した。

SA501　瓦積みの北側にある倒れた板塀である。厚さ数㎝の板を６枚連ねた構造で、板と板は鎹で止められ、貫板状の横板が３本の釘で止めている。また、丸太の柱には釘で止めている。板の東端には礎石状の石が３基南北方向に並んでいた。板塀の礎石になる可能性がある。石の位置は先のSX501の位置より1.5ｍ東にある。

SE501　OS89－41次調査地の中央部西寄り、SX501の南にある井戸である。直径1.5ｍの円形の掘形に高さ60㎝、直径50㎝の桶を３段以上積上げたものである。削平されており、最上部の構造は不明である。遺物は出土しなかった。

SK501・502　OS91－53次調査地の第５層上面にある土壙である(図288)。いずれも楕円形を呈し、深さは0.5ｍ程であった。上部は削平されている。遺物は出土しなかった。

SP501　OS89－149次調査地の深掘りトレンチ内で検出した、深さ0.1ｍのピットである(図288)。底に長さ50㎝、厚さ10㎝ほどの礎石を据えている。１個しか検出できず、全体の配置は不明である。

第４層に伴う遺構はOS91－53次調査地で検出した２条の溝がある(図288)。

SD401・402　SD401は３層に細分できる第４層最下層の上面で検出した東西方向の溝である。幅0.3～0.4ｍ、深さは0.03ｍ程である。溝の肩部には杭が数個所残っており、矢板などの施設があったと考えられる。SD402は第４層上面で検出した東西方向の溝で、幅0.2ｍ、深さ0.03ｍ程である。下層のSD401とほぼ同じ位置にあり、第４層の時期には敷地内での建物配置の変化、あるいは町割に大きな変更がなかったと推定できる。方位は下層のSD401がE3°Sで、SD402はE1°N前後である。これらの溝は東隣のOS89－41次調査地の南部には見つかっておらず、そこまでは延びていない。途中で南に曲るのであろう。

ｂ．豊臣後期の遺構と遺物

豊臣後期の遺構はOS89－41次調査地の第３層上面で礎石建物を検出した(図290上段)。

SB301　東西に９個の礎石と、その間に礎石の抜取穴が１個所あった。南北方向の遺存状況は悪い

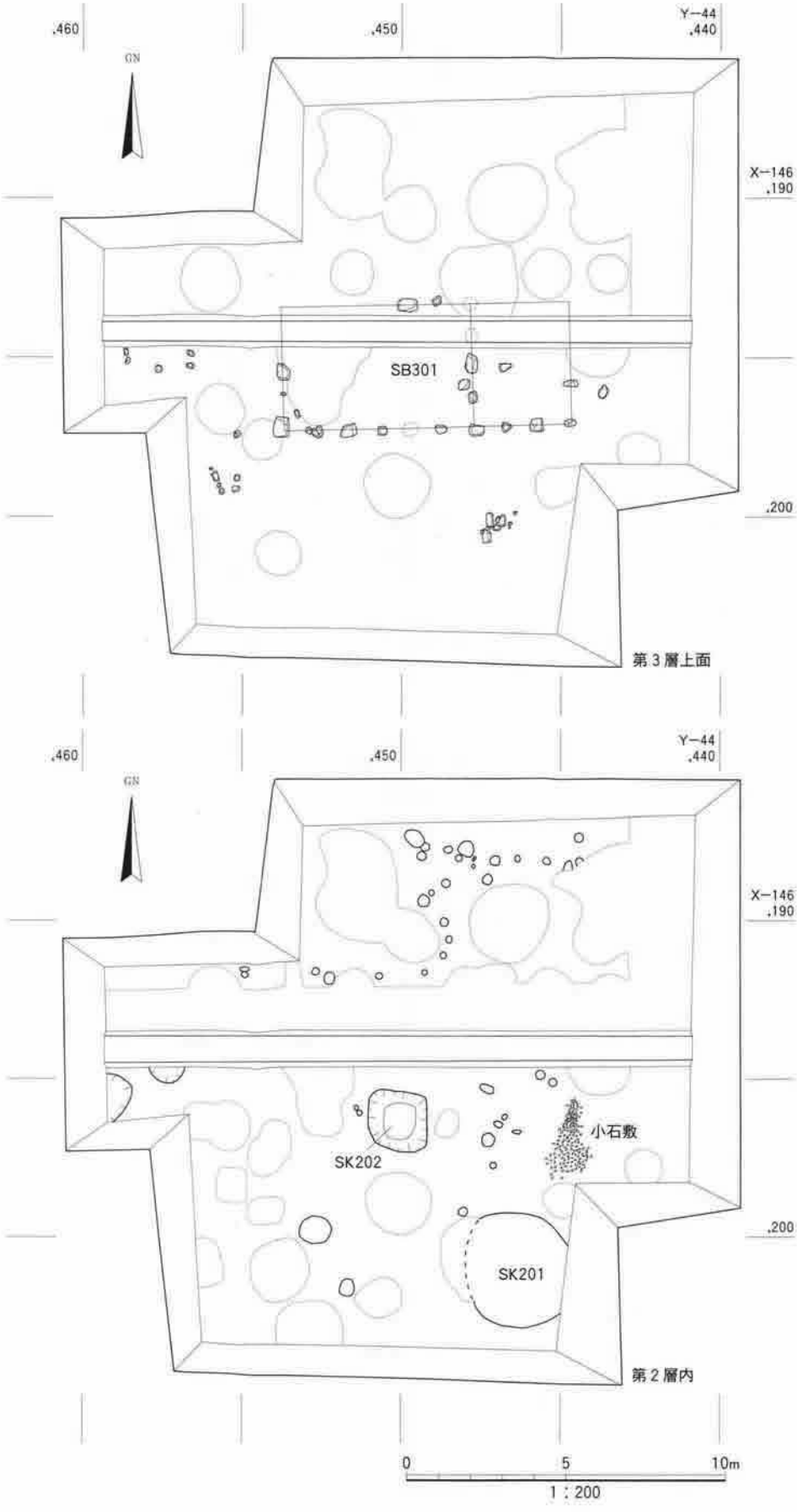


図290　OS89－41次豊臣後期遺構配置図

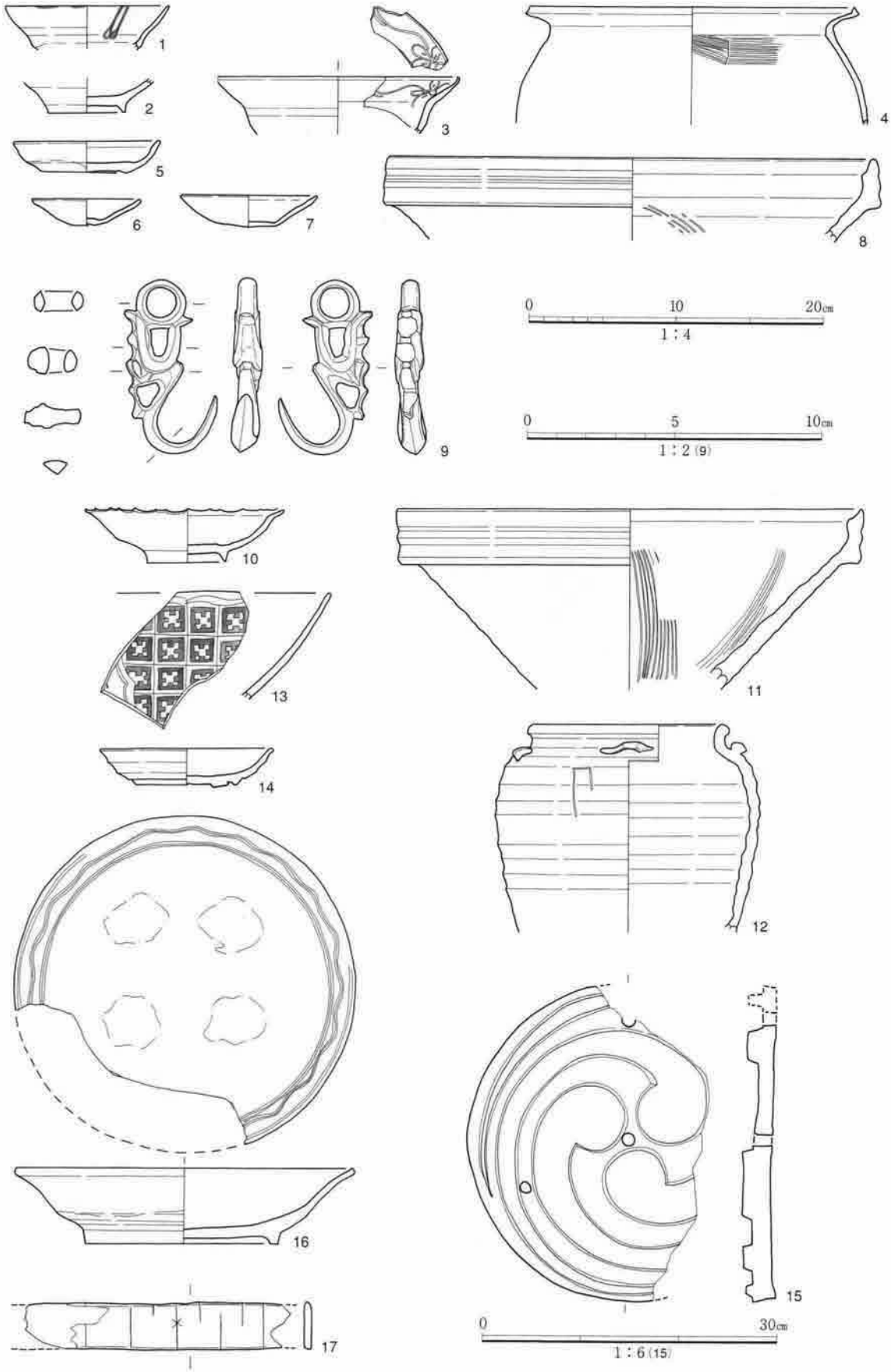


図291　各層および遺構出土遺物実測図

2層(1)、3層(2～4)、4層(5～9)、SX501(10)、SW501(11・12)、SK201(13～15)、SK202(16)、徳川期井戸(17)

が、北４間目の位置に東西に並ぶ石があり、それを北側柱筋と想定した。東西約8.9m、南北約3.9mを測り、東西９間、南北４間の建物となる。１間の長さは0.99m前後である。東から３間目には礎石が南北に並んでおり、ここに間仕切りがあったと考えられる。

第２層内にも遺構面が存在する(図290下段)。そこでは土壙やピットが数基点在し、小石敷が１個所見つかった。ピット群は建物としてまとまる状況ではなく、性格は不明である。土壙SK201からは中国漳州窯の盤13・瀬戸美濃焼灰釉皿14・直径が32㎝もある巴文飾り瓦15が出土した。SK202からは瀬戸美濃焼黄瀬戸大皿16が出土している(図291)。

ｃ．徳川期の遺構

徳川初期の遺構はOS89－41次調査地とOS85－36次調査地で検出した。OS85－36次調査地では焼土層の上位に整地された地層の上面で検出した遺構群がある。

OS89－41次調査地では土壙や井戸が広がっている。それらのいくつかから、徳川初期になって大坂でも認められる内野山系の唐津焼碗や皿のほか、肥前磁器の碗が出土している。

OS85－36次調査地でも土壙が広がっていた。ここで検出した土壙群は敷地の方向に沿うような平面形をしており、周囲には建物が建っていたと推定できる(図292)。また、さらに上層から掘込まれた穴蔵なども見つかった。この穴蔵は周囲に割石を積上げたものである。

また、OS89－41次調査地の井戸の１つから物差し17が出土している(図291)。１寸の長さは３㎝である。

OS90－１次調査地では徳川中期以降の土壙がいくつか見つかったが、屋敷地内の建物配置などは判明しなかった(図版39－下)。

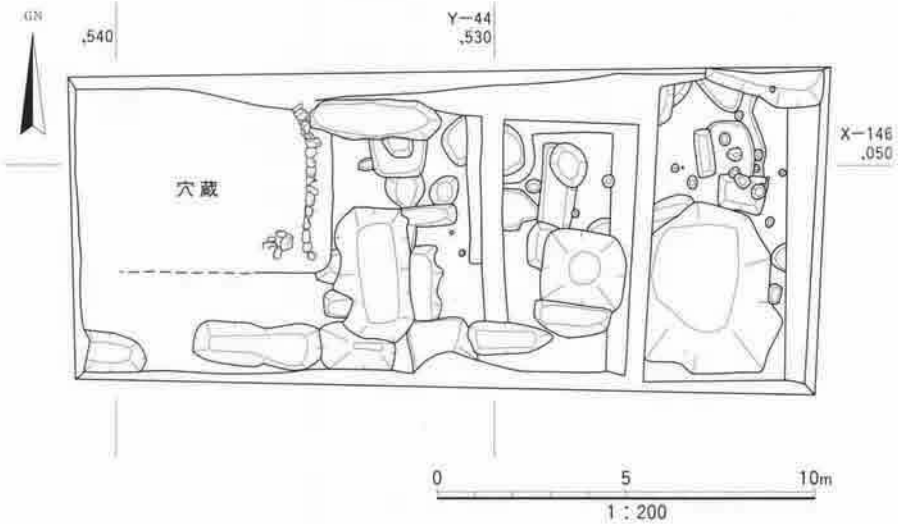


図292　OS85－36次徳川期遺構配置図

３)まとめ

ｉ)豊臣期

それぞれの調査地の層序を観察すると、惣構西端部に位置するこの地区では、豊臣期以前と推定する第６層の上位にシルト質中～粗粒砂が主体の整地層(第５層)が厚く堆積する。また、その上位にもシルト偽礫や中粒砂を主体とする整地(第３層)が再度行われていることがわかる。それぞれの整地層の上面には遺構が検出されている。

これらの大規模な整地の原因を大坂城および大坂の市街地開発の歴史に位置付けるとすれば、下層の第５層が豊臣前期の1594(文禄３)年に行われた惣構工事に、上層の第３層が1598(慶長３)年の三

ノ丸建設工事に伴う整地層と想定できる。

第5層の直上には第4層とした薄い整地が数回行われているが、これは惣構工事以後、三ノ丸工事までの間の生活面として捉えることができる。このように想定した場合、惣構完成以降にはOS89－41次調査地で見つかったような敷地の区画と推定できる石垣や塀などはあるが、整然と敷地が分割され、そこに建物が建並ぶ状況とはいえない。この状況は第Ⅲ章第9節で報告した北側の各調査地も同じである。

東横堀川に面する上町台地西麓一帯は、惣構ができるまでの豊臣前期前半は市街地として整備されている景観ではなく、都市の周辺部であったのではなかろうか。その後、惣構の完成によって都市域に組込まれるが、建物が建込む状況ではなかったようである。その後の三ノ丸造成工事によって前代よりも広く平坦地を確保し、建物が建てられるようになる。平坦面は惣構工事によって生み出されたものより広く、個々の敷地単位ではなく、いくつかの敷地に跨る広がりをもっている。こうして確保された平坦面は各屋敷地に分割され、建物が建並んでいったのであろう。

ii)徳川期

上層部分が削平を被っていたため、徳川期の町割や建物の配置等は明らかにできなかった。ただ、OS85－36次調査地で見たように、土壙や穴蔵は敷地の方向に沿った平面形をしており、規制されていることがわかる。また、穴蔵は建物の地下に、土壙は建物のない所に掘られることが多く、そうした配置からある程度建物のあった所を推定できる。

（平田・松尾）

第７節　OS87－14次およびその周辺の調査

１）調査地と周辺の概要

この地区は上町台地の頂部からやや西に下りた斜面地で、現在の地表面の高さは東端のOS93－28次調査地付近でTP+10.5m前後、西端のOS89－33次調査地付近はTP+8.5mと、この間で２mも西に低くなっている。また、南北方向の起伏は北のOS89－23次調査地ではTP+9.3mであるが、この地区の中央を東西に走る常盤町通がTP+10.6mと高くなって、南の中央大通付近では再び低くなっており、常盤町通が馬の背状に高くなっていることがわかる(図293)。これは、北側の内本町通と南側の中央大通の地下に上町台地を開析する谷が埋没していることを示すものであろう。洪積層の地山の高さも常盤町通が高い。



図293　OS87－14次などの調査地位置図

OS87－14次調査は試掘調査で地表下2.5mで花崗岩の自然石を用いた石列が見つかったため、本調査を行うことになった。あわせて、敷地北端で東西方向の背割下水を調査した。

OS87－18次調査は地表下約0.6mで地山層が確認されたため本調査を実施することになった。調査が進むにつれ、敷地中央部に奈良時代の遺物を含む遺構が存在することがわかり、一部調査区を拡張した。その結果、それが奈良時代の井戸であることが判明し、協議の結果、調査期間を延長することとなった。

OS89－23次調査は東西方向の堀があるOS87－14次調査の北隣にあたり、試掘調査で地山直上に奈良時代の包含層が確認されたことから調査を実施した。地表下1.6mまで重機により掘削したのち調査を開始した。

OS89－33次調査は試掘調査において地山上に遺構が検出されたため調査を実施することとなった。ここは堀が見つかったOS87－14次調査の西側に位置しており、堀の西側延長部が検出されると期待された。調査は重機により地山層上面まで掘削を行った後、着手した。

OS93－28次調査は試掘調査で地山が比較的高く検出されるとともに、17世紀代と推定される鍛冶関連遺構が確認された。また、南北両側の町に跨った敷地であり、背割下水の構造も確認できた。

２）調査の結果

ｉ）層序

この一帯では近現代の表土と徳川期の地層の直下に洪積層の地山が見つかることが多い。地山が周

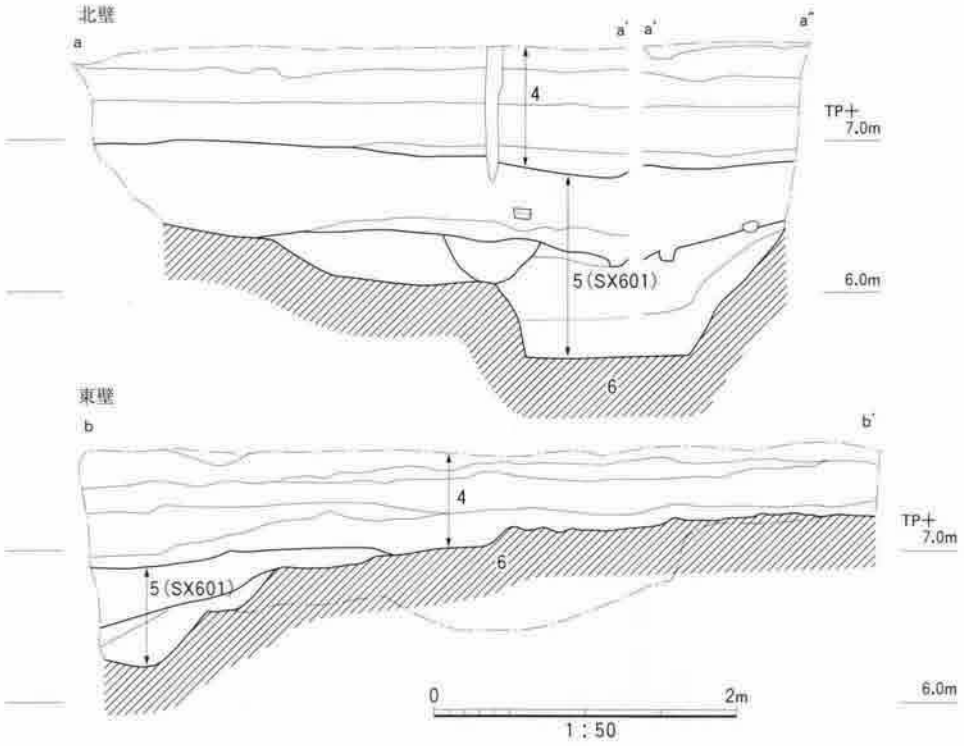


図294　OS89－23次断面図

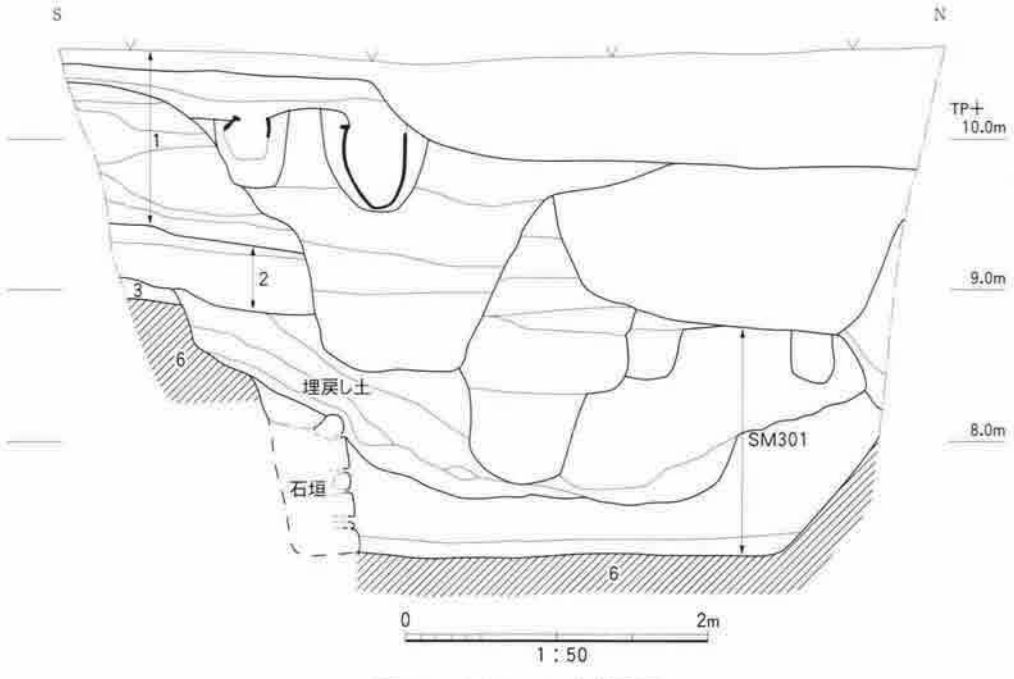


図295　OS87－14次断面図

辺より高かったため、近世以降、平坦面を確保する造成事業で削平されたようである。

ただし、北に位置するOS89－23次調査地では北部で地山がTP＋6m以下まで削られていたが、その落込みに古代や中世の地層が堆積していた(図294)。また、OS87－14次調査では洪積層の上に豊臣期の地層が堆積しており、その上面からSM301が掘られていた(図295)。

第1層　徳川期から現代までの表土層である。OS87－18次・89－33次・93－28次調査地では本

層の直下に洪積層が広がっている。

第2層　OS87－14次調査地にある徳川初期の整地層である。

第3層　OS87－14次調査地の洪積層の直上に堆積していた。この上面にSM301が掘られている。

第4層　OS89－23次調査地の地表下1.6m付近に堆積していた暗灰黄色～褐色を呈する砂混りシルト～粘質土で、5層に細分できる。最上層は豊臣期以前の作土層の可能性がある。最下層からは埴輪片や飛鳥時代の土師器・須恵器のほか、底部に糸切り痕跡を残す中世に属する須恵器が出土している。

第5層　OS89－23次調査地の地山が低くなる北部に堆積する。奈良時代末(難波Ⅴ中段階)の須恵器が出土した。

第6層　洪積層の地山である。この上面でOS87－18次ではSE601・602、OS89－23次調査地ではSX601を検出した。

ii)遺構と遺物

a．奈良時代

OS87－18次調査地の中央で2基の井戸を検出した(図296)。ほぼ同じ位置に重なるように作られており、いずれも隅丸方形の掘形をもっている(図297)。先行するSE602の平面規模がひとまわり大きく、作り直されたSE601は小さい。いずれも底面はほぼ同じ深さで止まっている。この付近に当時の湧水層があったのであろう。SE601の掘形の埋土は黄褐色礫混り粘土質シルトで、井戸側が埋まっていた所は木質が腐食したため暗灰色粘土質シルトとなっていた。その内側の井戸側内が黄褐色砂質シルトであった。掘形の埋土より砂質が強い。SE602掘形の埋土は黄褐色礫混り砂質シルトであった。

以下、それぞれの井戸について記述する。

SE601　東西1.9m、南北2.3mの隅丸長方形の掘形に方形の井戸側を築くものである。

井戸側内は深さ4.1m残っていた。ほぼ垂直に掘込まれるが、掘形の南壁には下部にテラスがあり、底面は隅丸方形となる。その北西部に偏って内法が1mほどの方形の土居組が据えられていた。水溜はない。内部からの出土遺物は少なく、土師器・須恵器の破片が少量出土したにすぎない。井戸側の木組は残りが悪く、部材によっても腐食の進み方が異なっていた(図299・300)。

井戸側最下部の土居組は東側の材4で幅19.5cm、厚さ11cm、長さ137cmが残る。それぞれの角材の両端を相欠きにして方形に組合わせる。北と南の角材を下に置き、東西の角材を上に乗せる。四隅の相欠き仕口部には上下の材を貫通するように10cm大の枘穴を穿ち、そこに柱基部に作り出した枘を差込んで柱を立てる。枘を通すことで土居組がずれないようになる(図298)。東側の土居材の裏面にはえつり穴が23cmの間隔を置いて3個所に残る。また、南側の土居材の中ほどにも枘穴があり、これらの穴は井戸の構造から考えて不必要な穴であることから、転用材と考えられる。えつり穴がほぼ等間隔であることから、この材が垂木の転用である可能性がある。

最も残りの良かった南西隅柱1は幅13.5cm、厚さ11.5cm、長さ90cmが残っていた。柱の基部には約6cm角で、長さ約9cmの出枘が作りだされている。その東面には出枘先端から34cm(出枘基部すなわち土居組の上面から約25cm)のところから、北面には53cm(土居組上面から約44cm)のところから縦6

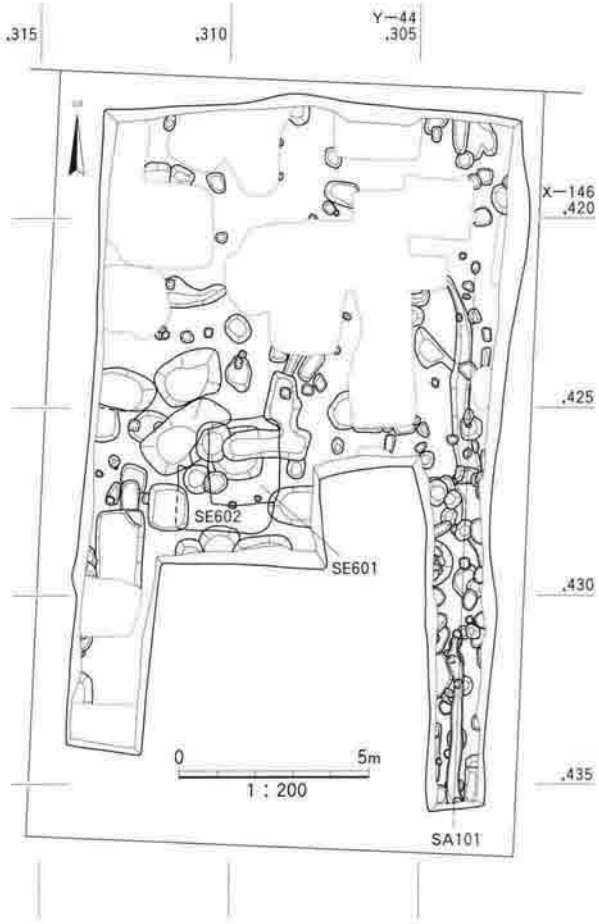


図296　OS87－18次遺構配置図

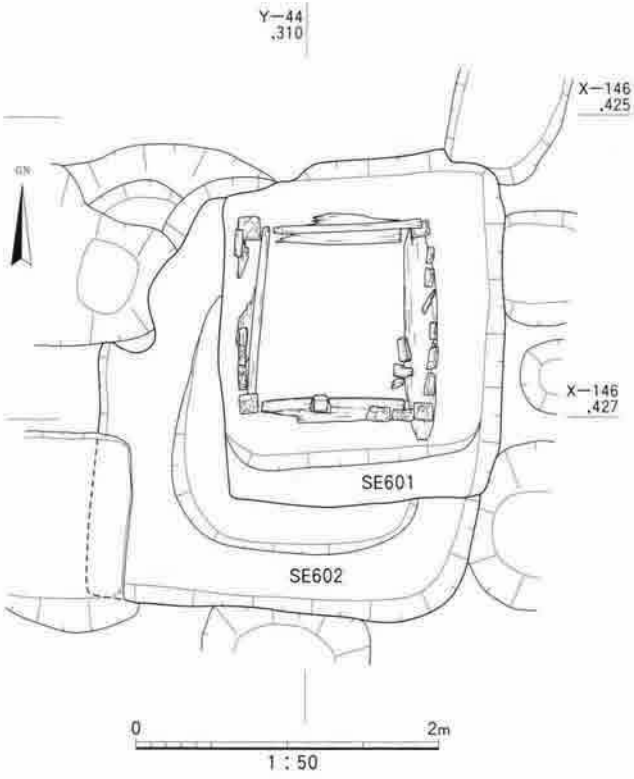


図297　OS87－18次SE601・602平面図

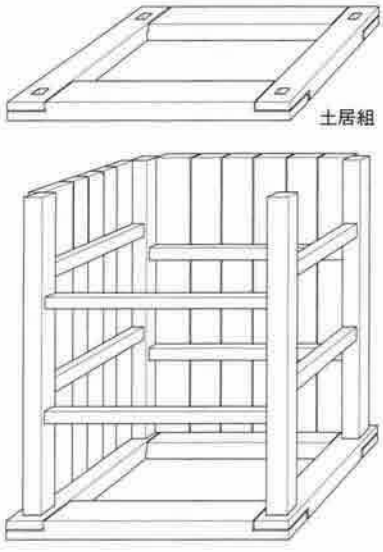


図298　SE601構造復元図

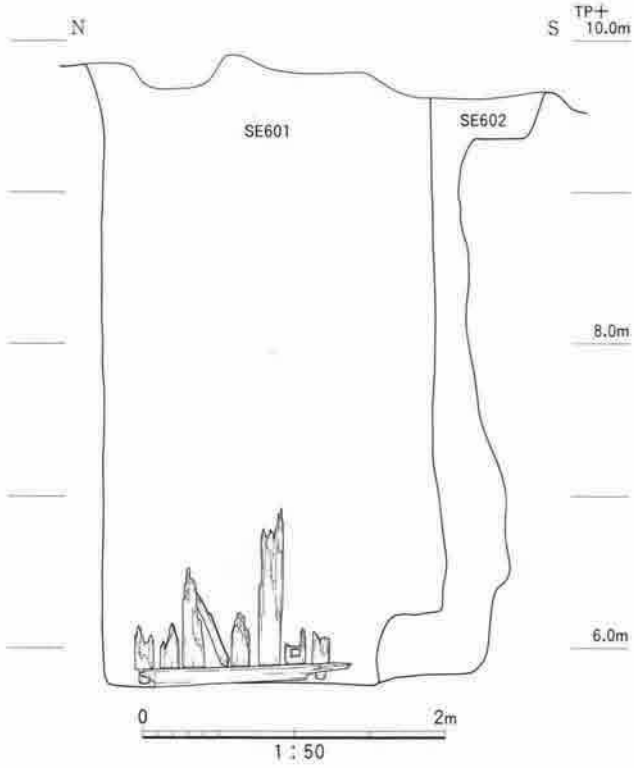


図299　OS87－18次SE601・602断面図

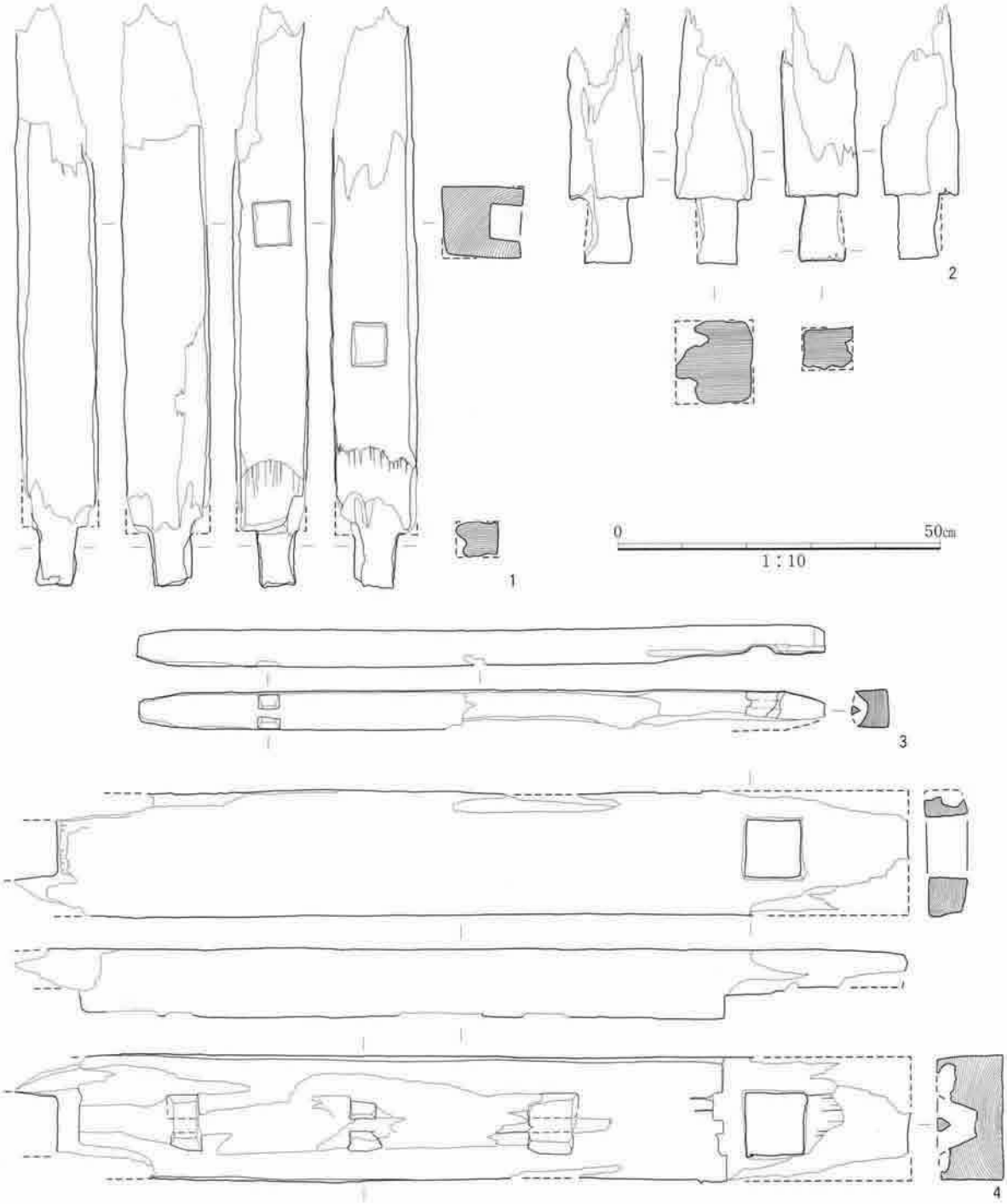


図300　OS87－18次SE601部材

cm×横５cm×深さ５cmの枘穴が穿たれている。この枘穴は横桟を差込むものである。この柱の東面に相対する井戸側の東壁には、約60cm間隔で３個所に横桟が痕跡となって残っていた。また、井戸側の北壁にも約70cm間隔で４個所に横桟の痕跡をとどめていた。2は北東隅の柱で、基部には1と同様の出枘が作りだされている。

北壁にあった横桟の一つ3は幅６cm、厚さ５cm、長さ106cm前後である。両端を細く削り柱の枘穴に差込むようにしている。片面にえつり穴がほぼ完全な形を止めて１個所残っていた。このほかにも２個所にえつり穴があったと推定できる窪みがある。腐食しているため確実ではないが、明瞭に残る

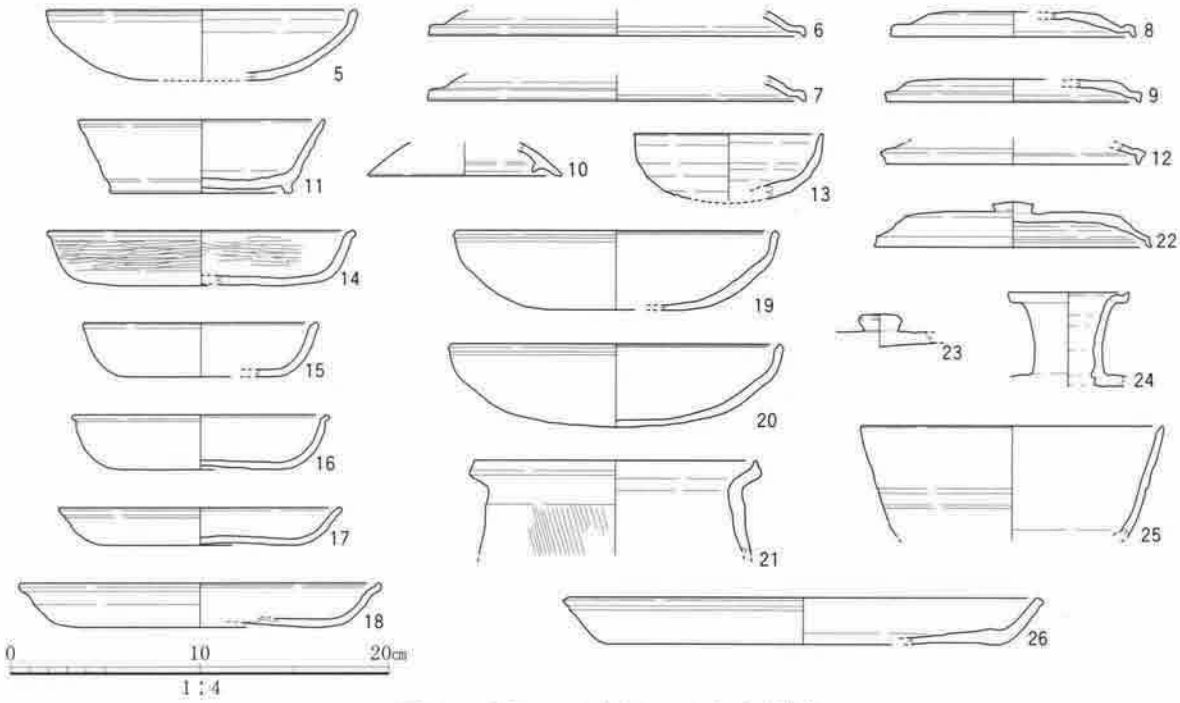


図301　OS87－18次SE601ほか出土遺物

SE601(5～11)、SE602(12・13)、SE601上位の攪乱(14～26)

えつり穴から約30cmと約75cmの位置にある。これも垂木を転用した材であろう。

この外側には縦板材を立てている。縦板材は幅12cm、厚さ3～8cmほどで、上部は腐食している。それぞれの壁には6枚ずつ板が立てられていた。下端付近に4cm角の穴が穿たれているものがあり、これも転用材と考える。

こうした構造の井戸は、宇野隆夫氏の分類による「BⅣ類縦板組隅柱横桟どめ井戸」[宇野隆夫1982]と呼ばれるものに近い。

井戸内から奈良時代後半の難波Ⅴ中段階の土器片が出土した(図301)。また、SE601を覆う近世の攪乱からも出土していたため、それも図示している。

5は土師器椀Cで、6～9は須恵器杯B蓋である。10は杯G蓋の口縁部であろう。11は須恵器杯Bで、難波Ⅴ中段階に属する。14～26はSE601の上位にある攪乱から出土した土器である。

SE602　東西2.6m、南北2.7m以上になる隅丸長方形の掘形をもち、底面には東西1.6m以上、南北1.7m以上の隅丸方形をした窪みがある。ここに井戸側が設置されていたのであろう。深さは4.1mほどである。掘形の壁は下部に抉れがあるが、ほぼ垂直に立っている。井戸側などの構造材は見つからなかった。SE601を掘削する際に抜取られたのであろう。須恵器12・13が出土した。

SX601　OS89－23次調査地の地山が低くなる北部にあった落込みである(図302)。形状は不整形で、北に広がっている。埴輪なども出土しているが、大半が奈良時代の土器である。

b．中世～豊臣期

中世にさかのぼる明瞭な遺構は見つからなかったが、OS89－23次調査地に広がる作土がある。TP+7.6m付近に広がっていた。

豊臣期ではOS87－14次調査地でSM301を検出しただけである。標高が高かったせいか、この一帯

の地山は上部が削平を被っている可能性がある。

SM301　南北幅4.8m以上、深さ1.8mの東西方向の堀状遺構である(図303)。断面は逆台形を呈し、底の幅は2.75mであった。南側の壁には下部に花崗岩の自然石を4段積上げた石垣を築く。その石材は六甲山系と生駒山系のものである(註1)。石垣の高さは1mで、上端面は揃っていた。最上段には一石五輪塔の地輪が2個転用されていた。

石垣の角度は82°で、石の控えは0.2～0.4mと浅く、裏込石はない。石垣より上は30°程の緩やかな斜面であるが、それより上位では65°の急斜面で立上る。北壁には石垣はない。北壁は底から0.8m付近までは50°の傾斜で立上り、それより上位は調査範囲外に続いている。

埋土は2層に大別できる。下層はさらに2層に分かれ、下部が加工時堆積層で、上部が滞水状態での自然堆積層で、漆黒色から灰色の粘土からなる。上部は人為的な埋土で、南側から投入した土砂で埋っている。遺物は出土しなかった。

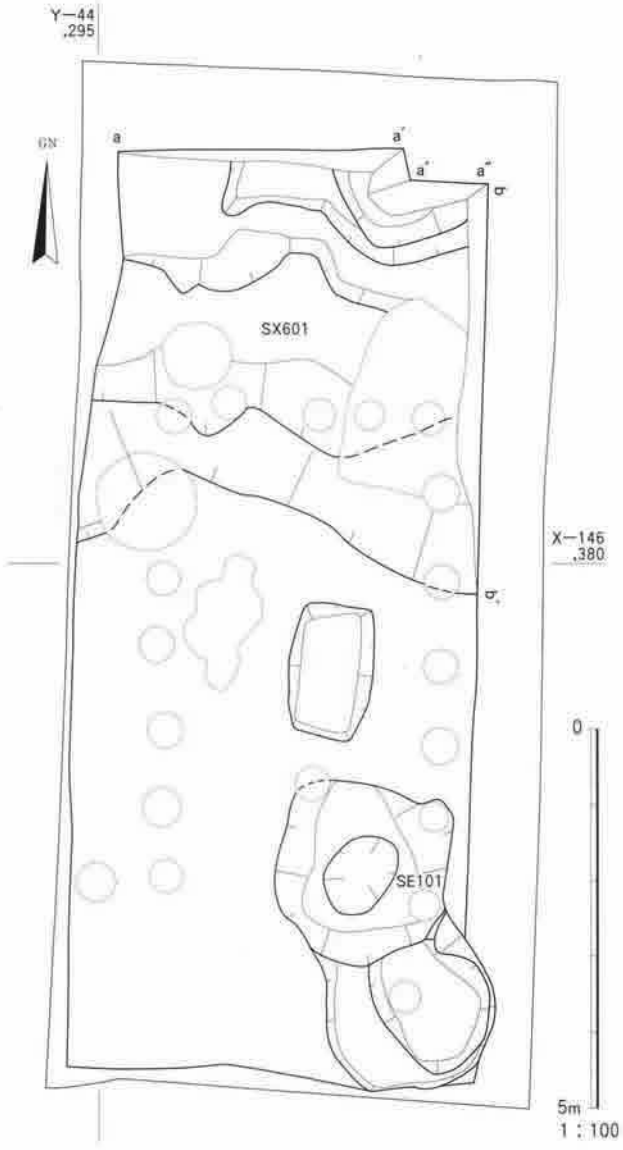


図302　OS89－23次遺構配置図

この東方250mの位置を調査しているが、そこではTP+12.4m付近に地山があり、SM301の延長部は見つかっていない[田中1989b]。また、西側に位置するOS89－33次調査地でもSM301の延長部は存在しておらず、それらの間で止まるか屈曲するものであろう。

c．徳川期

徳川初期にさかのぼる遺構は、OS93－28次調査地のSE102が1基確認されただけで、ほかは17世紀中頃以降に属するものであった。

町割や町屋の構造や性格をうかがえる遺構を報告する(図304)。

SD101　OS87－14次調査地の北端で検出した東西方向の石組溝である。北側の鎗屋町との境界をなす背割下水である。位置を確認しただけの調査で、石組溝の形状や掘込み面を明らかにする調査はできていない。

地表下1.5m(TP+9.13m)付近に溝の蓋板が見つかり、その両側に石組を築く。こうした遺構はこれまで中央区谷町4丁目で行った難波宮第96次調査[八木久栄1981b]や、中央区材木町の難波宮第146次

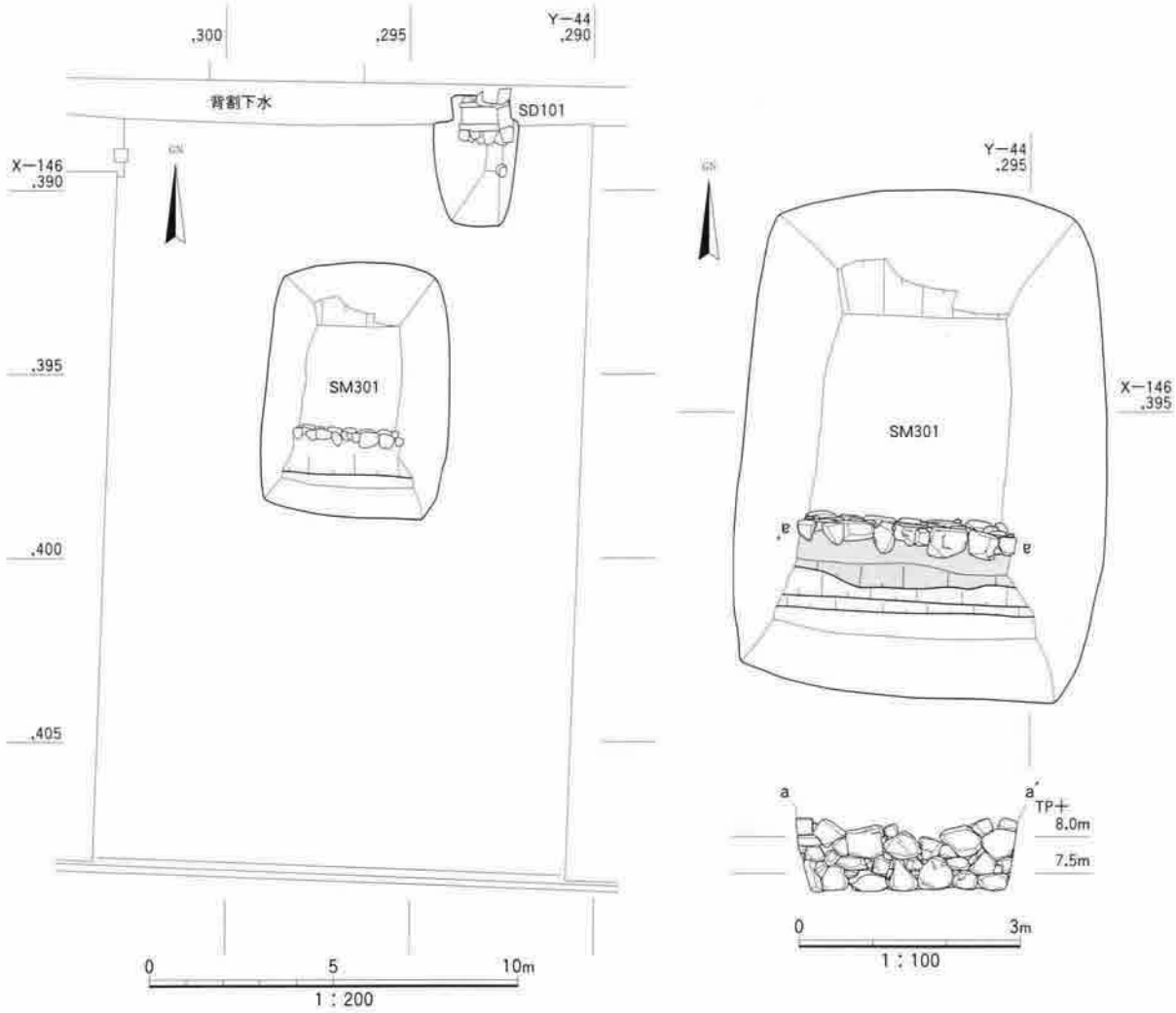


図303　OS87－14次調査位置およびSM301実測図

調査[八木1981c]でも確認しており、同様の構造になろう。材木町の下水は調査時も使用されていたもので、徳川期を通じた改修によって石垣の目地を漆喰で塗込めていた。

SD102　OS93－28次調査地の中央を東西に延びる石組溝である。北側の旧伏見立売町(常盤町)と南側の旧伏見両替町(両替町)の町境にあり、小規模な背割下水である。溝幅は0.4mで、南側石列は間知石に積み直した部分がある。北側石列の掘形から焼継ぎした陶磁器が出土しており、19世紀代に作られた溝と推定できる。また、溝内には土管が設置されており、明治以降まで排水の機能があったことがわかる。

SD103　SD102の南側に平行して東西方向に延びる溝である。SK110に切られる。西端は調査地内で終わっている。埋土は黒色を呈し滞水状態で堆積したものと考える。17世紀後半の遺物が出土した(図307)。

28～42は肥前磁器碗、28・29は白磁碗、30～39は染付碗である。30・31は芙蓉手の碗で、見込みには圏線を描き草花文を施している。39・40は一重網目文の碗である。41・42は内外面に青磁釉を掛ける碗で、42の口縁端部に鉄錆を塗る。このうち33はやや浅く、新しい要素がある。43～45・51は肥前磁器小碗、46～50は同皿である。小碗は端反りになるものが多い。皿46は高台径が広く、や

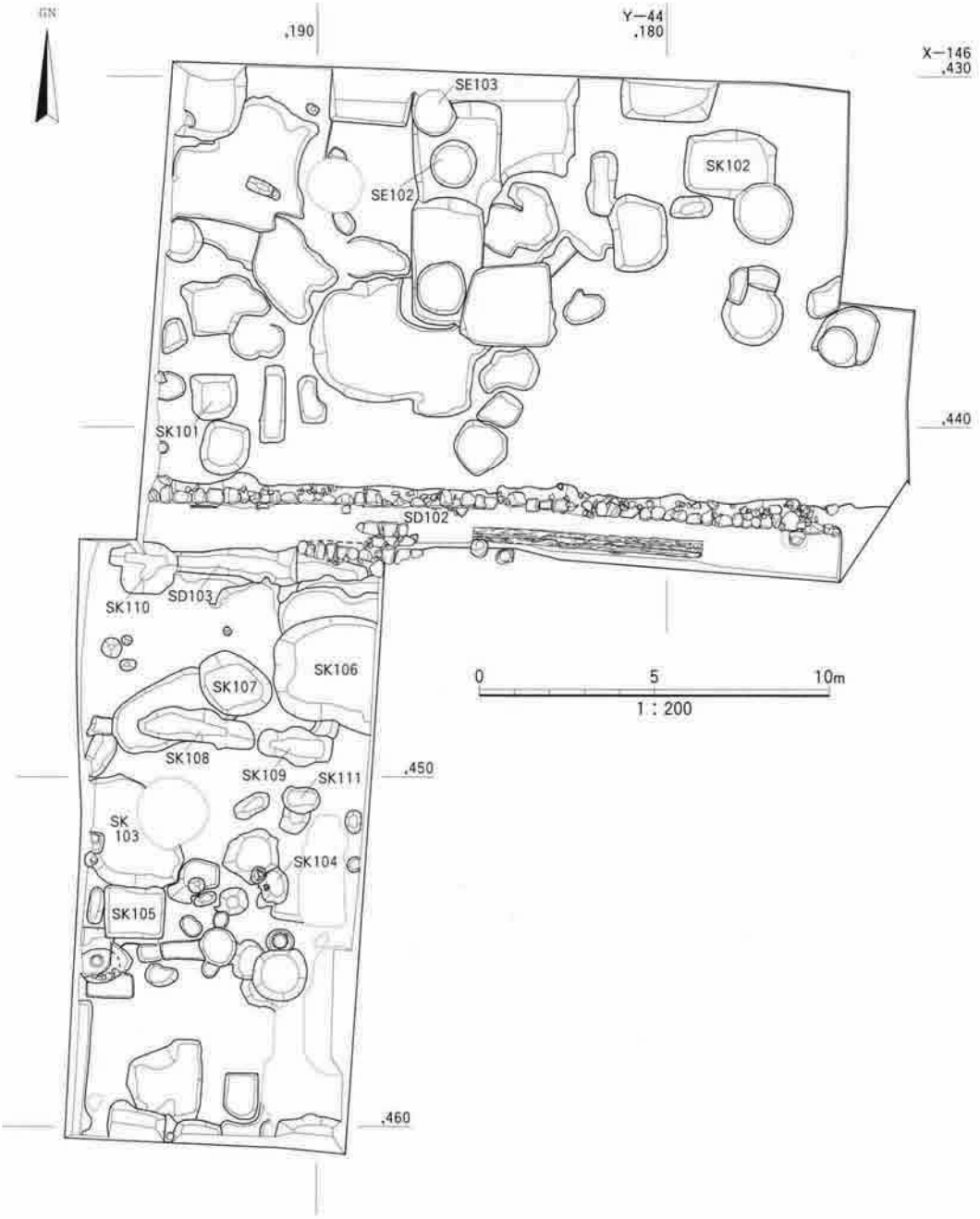


図304　OS93－28次遺構配置図

や新しい要素であろう。47は日字鳳凰文を描いている。

52・53は肥前京焼風陶器碗で、53は高台内にスタンプがある。底部は器壁よりも厚く、高台は小さい。54・55は肥前陶器の呉器手碗である。56は瀬戸美濃焼茶入、57は丹波焼擂鉢である。

58は輸入磁器で、中国福建省漳州窯の製品である。豊臣期から徳川初期に多い。

9～61は土師器焙烙で、59は難波洋三氏のいうC類、60は

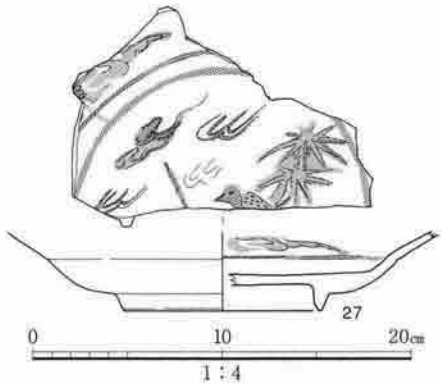


図305　OS89－23次SE101出土磁器

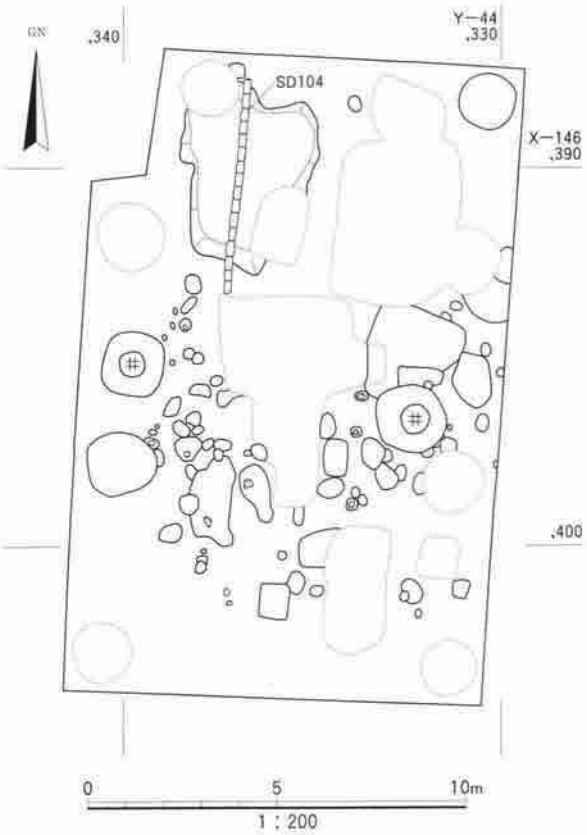


図306　OS89－33次遺構配置図

D類、61はE類である[難波洋三1992]。62～66は土師器皿で、17世紀後半に属すると考える。これらの出土遺物は積山編年の6段階と設定したOS93－28次調査SD02の資料である[積山1995]。

SD104　OS89－33次調査の北部で検出した丸瓦を組合せた暗渠である(図306)。南北方向に延びているが、両端は途中で切れている。北側にはOS87－14次調査地の北端で検出したSD101の西側延長部が存在しており、それに接続するものであろう。調査地では他にも土壙やピットを検出しているが、いずれも18世紀以降のもので、19世紀代の井戸もあった。SD104も18世紀以降に属するものであろう。

SA101　OS87－18次調査地の東部で検出した柵である(図296)。南北方向に柱穴が並んでいるが、現在の敷地境とは異なっている。同じ位置に途切れながら南北溝があり、ある時期には、この位置が敷地境になっていた可能性がある。出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

SE101　OS89－23次調査地の南東部で検出した(図302)。出土遺物には古代の土器も含むが、主体は17世紀後半の陶磁器である。いわゆる「古九谷様式」と呼ばれる肥前色絵磁器の大皿がある(図305－27)。高台径が10.3cmと大きい。内面には圏線を赤で描き、それ以外の文様は残りが悪いため判然としないが、緑色釉で描いていると思われる。

SE102　OS93－28次調査地のSD102より北側の敷地で検出した井戸である。17世紀前半から中葉の陶磁器群が出土した(図308)。積山編年の2段階としたOS93－28次調査SE01の資料である[積山1995]。

67～70は肥前磁器碗で、71は肥前陶器の碗で、72・73は同皿である。73の見込みには砂目跡が残る。74は瀬戸美濃焼水滴、75は丹波焼擂鉢、76～78は中国製の青花である。79・80は土師器皿、81は土師器焙烙A類である。

この遺構から出土した陶磁器のうち、肥前磁器碗は筒形の器形を呈する初期伊万里であり、1610年代から1630年代までのものとされている[九州近世陶磁学会2000]。また、同時に出土した肥前陶器の年代も同様のものである。75の丹波焼擂鉢や焙烙81も同時期の製品とみてよい。青花の端反碗76は住友銅吹所跡の妙知焼焼土層から出土した碗の器形に似ており[大阪市文化財協会1998]、新しい時期のものではないかとも考えたが、17世紀前半から出現している器形なのであろう。77・78は豊臣期から徳川初期に出土するものである。

SK101・102　OS93－28次調査地のSD102より北側の敷地で検出された方形の土壙である(図304)。

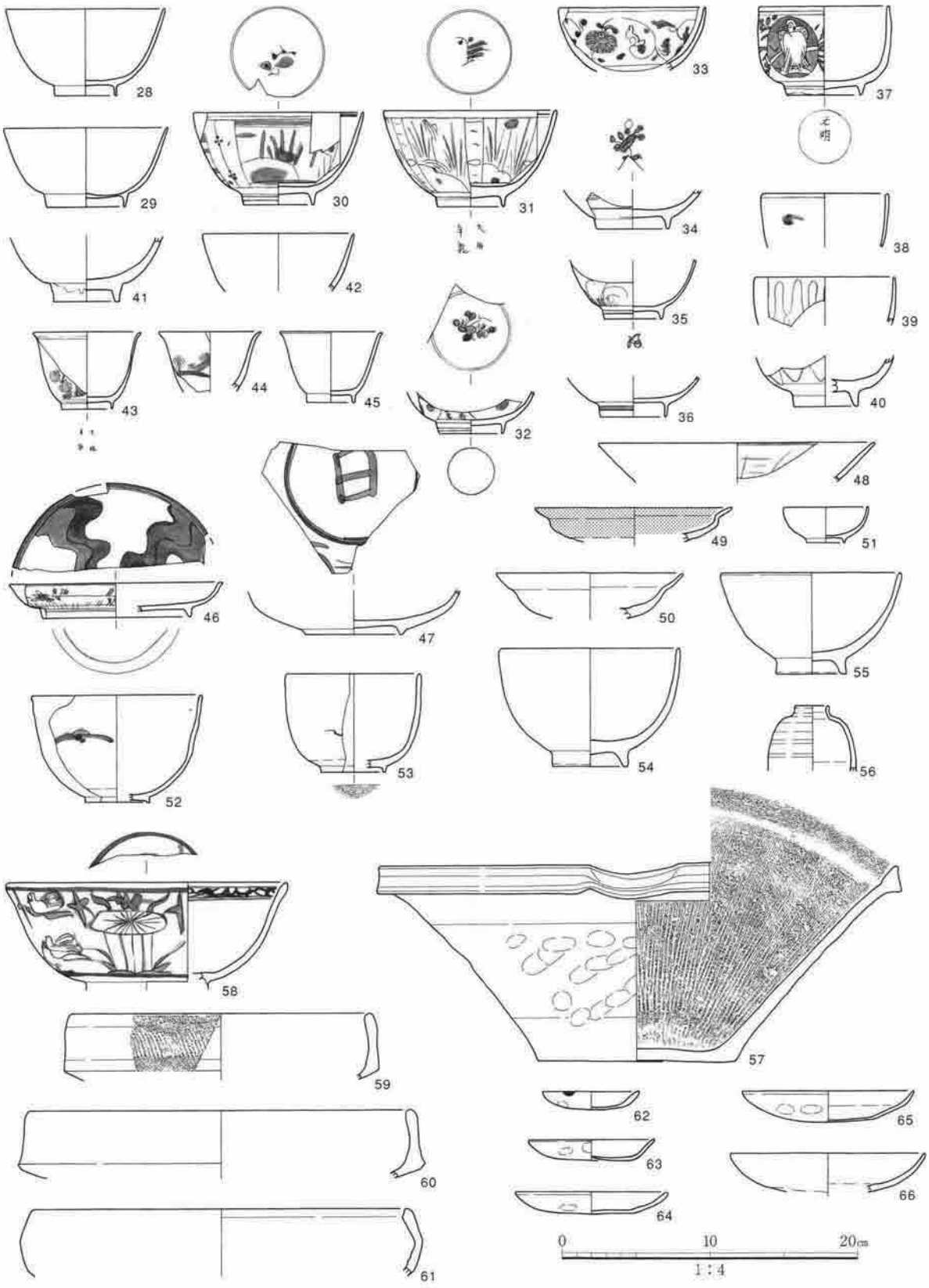


図307　OS93－28次SD103出土遺物

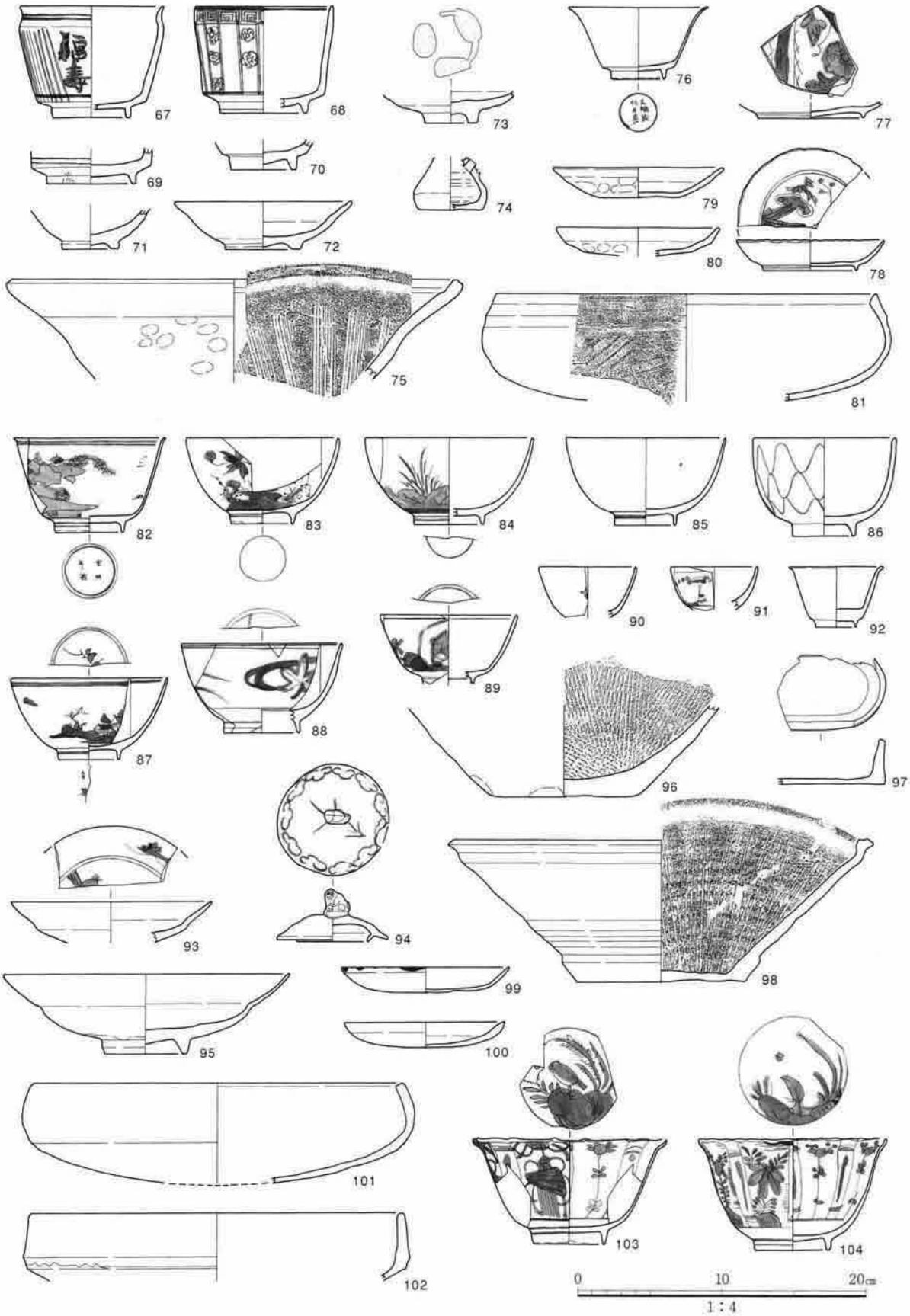


図308　OS93－28次SE102・SK101出土遺物

SE102(67～81)、SK101(82～104)

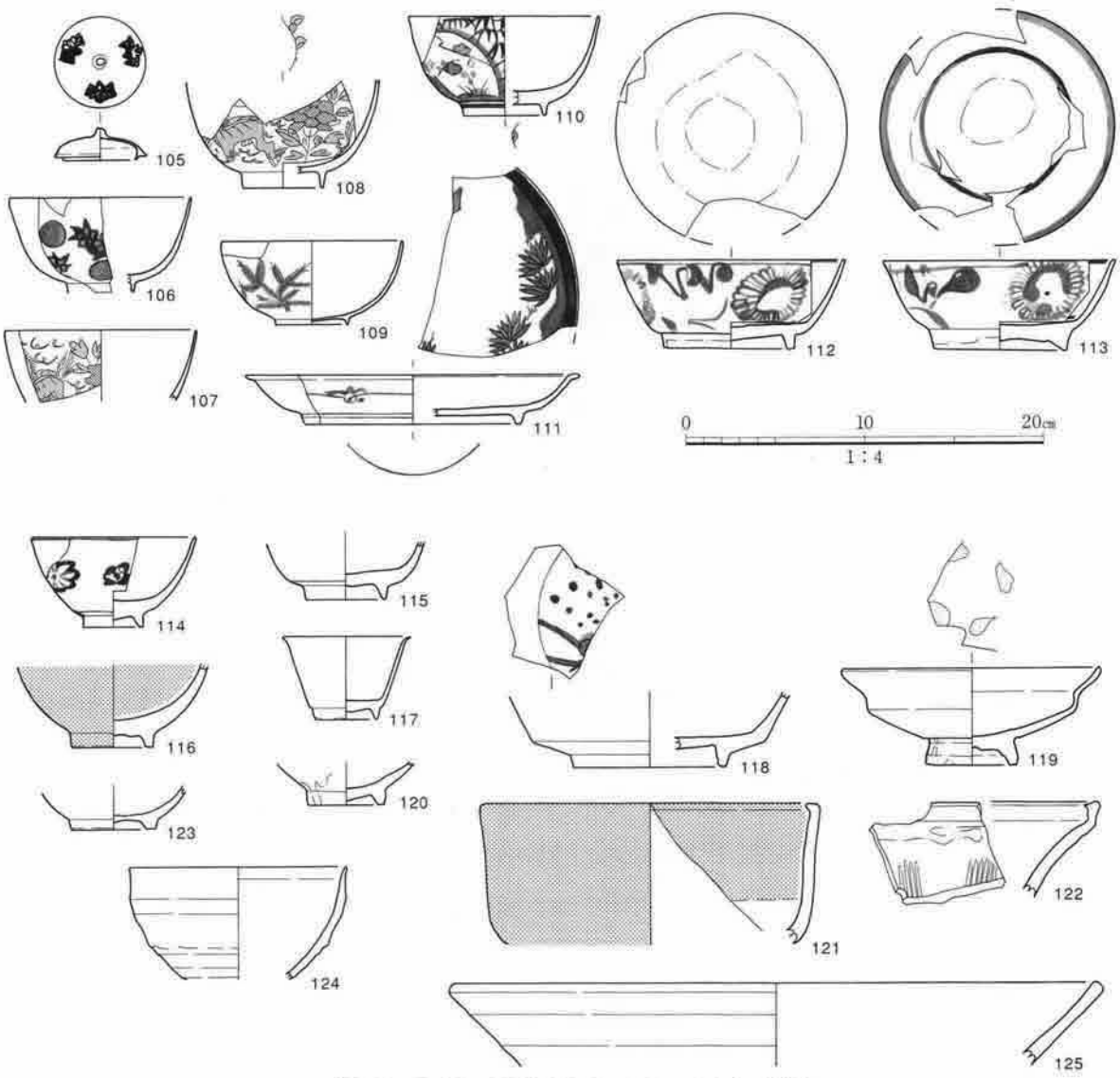


図309　OS93－28次SK102～104・盛土出土遺物

SK102(105～113)、SK103(114～119)、SK104(120～122)、盛土(123～125)

いずれも壁面がほぼ垂直になる。穴蔵であった可能性がある。これら以外にも平面形が方形を呈し、壁面が垂直になる土壙があるが、それらの多くが穴蔵であろう。壁には石や板などの構造物がなく、素掘りと考える。

SK101からは17世紀第３四半期頃の遺物が出土する(図308)。82～89は肥前磁器碗で、90～92は同小碗、93が同皿、94が同蓋である。94の染付蓋は出土例の少ないもので、猿を象った鈕が付く。よく似た例に佐賀県有田町の窯ノ辻窯から出土した、17世紀前半とされている獅子の鈕をもつ小鉢の蓋がある[九州近世陶磁学会2000]。95は肥前陶器皿、96は同擂鉢である。97は瀬戸美濃焼の鬢水入で、98は丹波焼擂鉢である。99・100は土師器皿、101・102は土師器焙烙である。101の焙烙はE類、102はD類である[難波洋三1992]。103・104は中国製の青花である。積山編年の７段階のOS93－28次調査SK34の資料である[積山1995]。

SK102からも17世紀後半から18世紀前半の遺物が出土する(図309)。105は肥前磁器蓋で、印判を

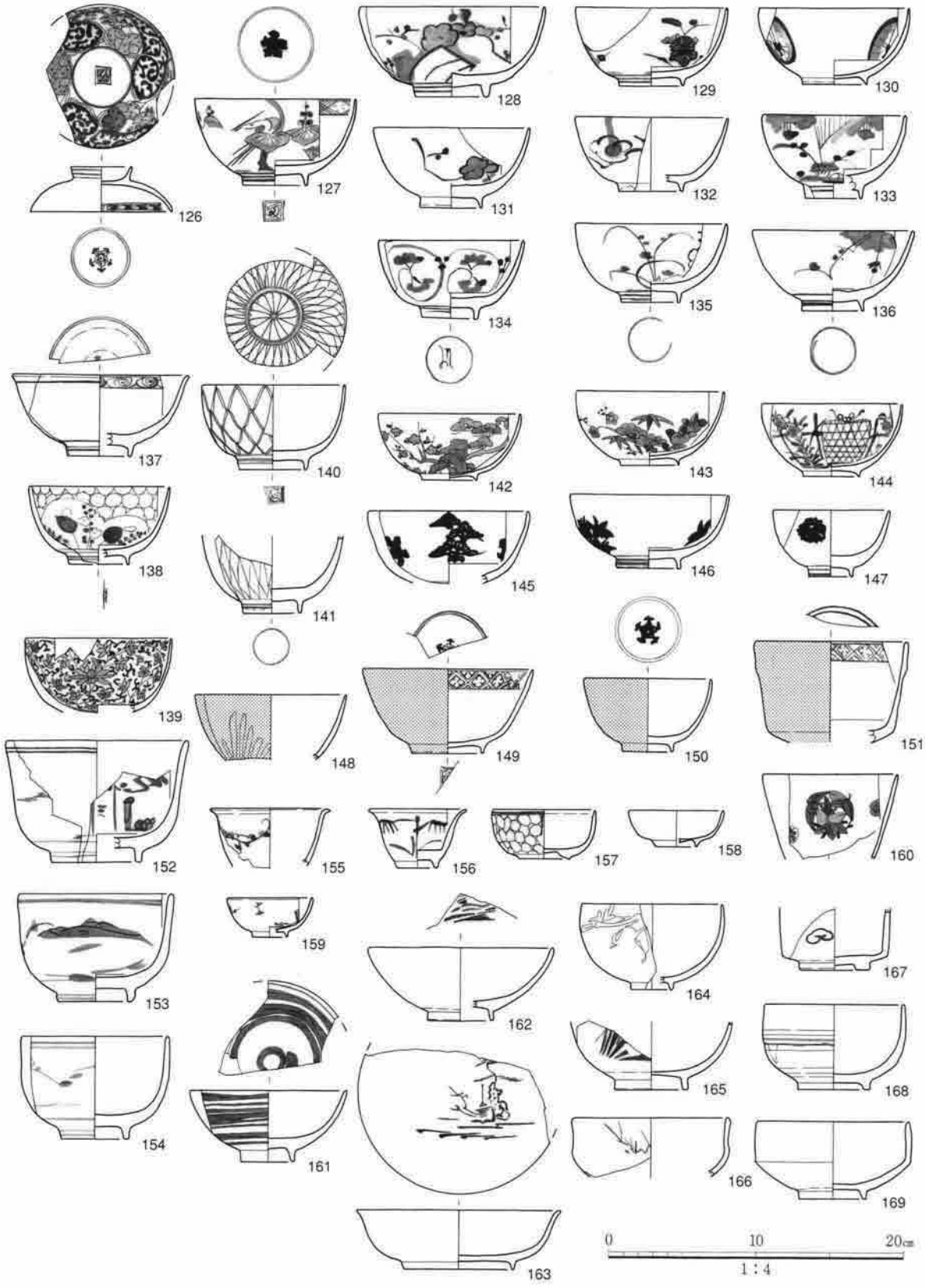


図310　OS93－28次SK105出土遺物（1）

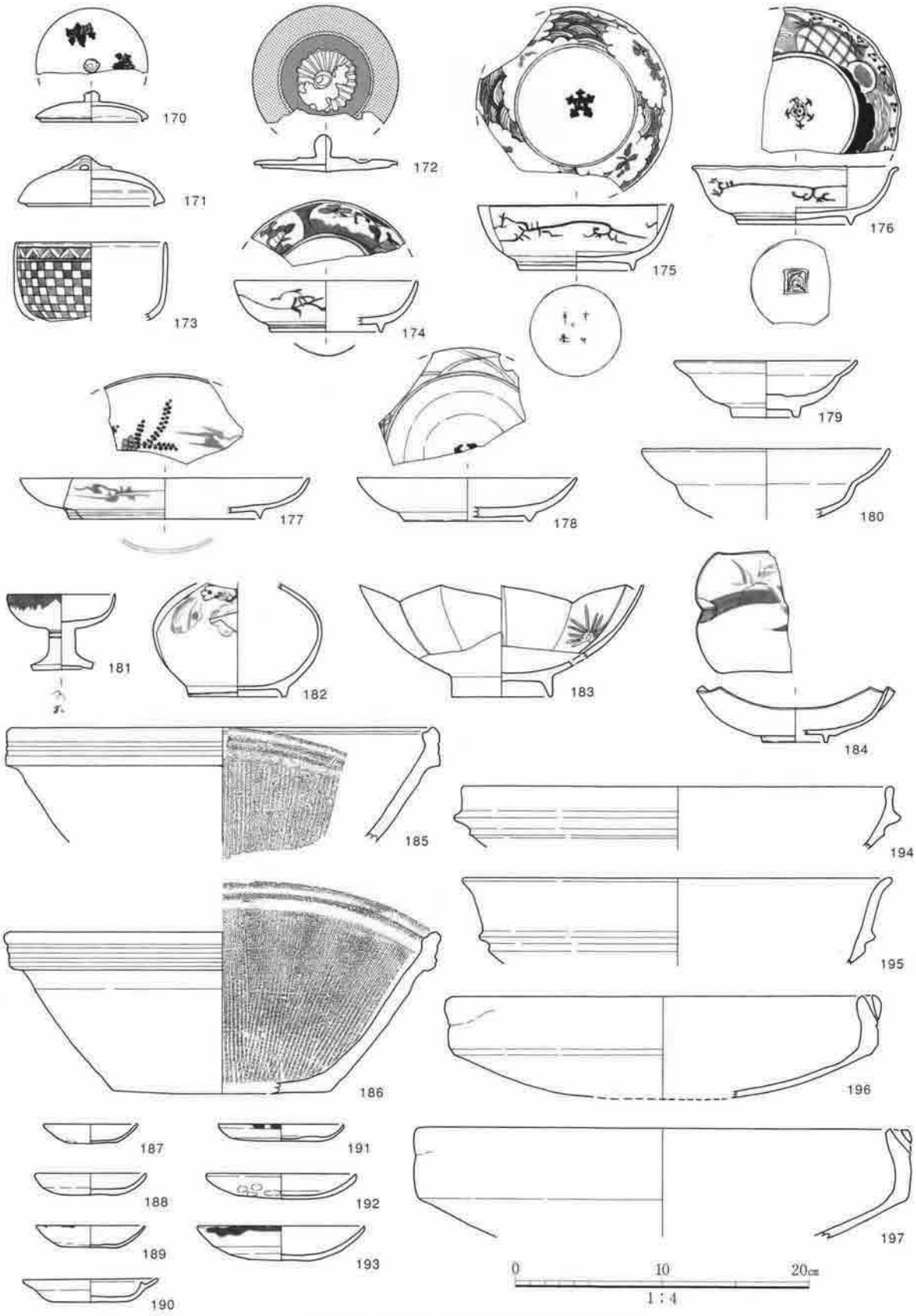


図311　OS93－28次SK105出土遺物（2）

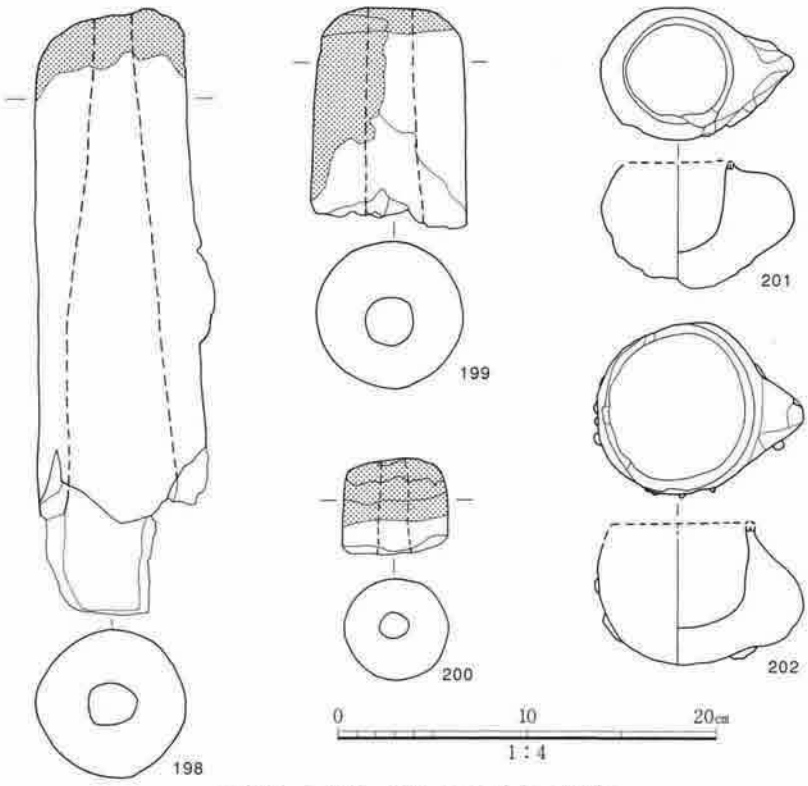


図312　OS93－28次出土金属生産遺物

SK107(198)、SK110(199)、SE103(200)、SK103(201・202)

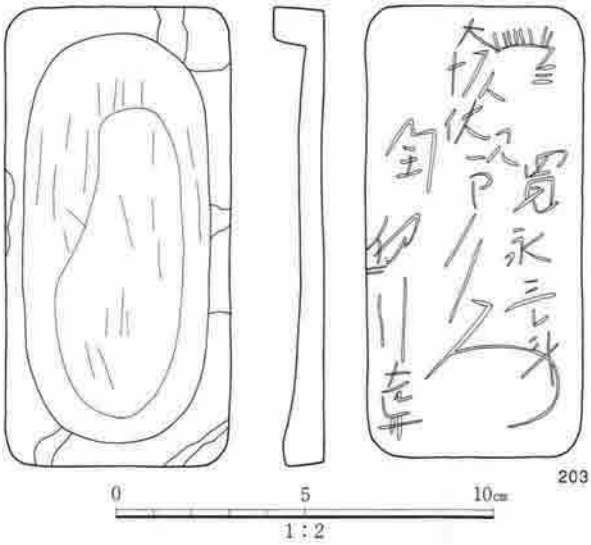


図313　OS93－28次盛土出土硯

施す。106～110は肥前磁器碗で、111は肥前磁器皿である。112・113は中国南部で生産された「印青花」と呼ばれる陶磁器である。これとよく似たものが船場地域の大坂城下町跡の調査でも10個体ほど出土している[森毅1993]。その共伴遺物は18世紀前半の陶磁器群で、SK102の資料と同時期と考えられる。

SK103　OS93－28次調査地のSD102より南側の敷地にある不定形の土壙で、形状から廃棄土壙と思われる。陶磁器とともに多くの羽口や坩堝が出土した。出土した陶磁器のうち114～118が肥前磁器で、114・115が染付碗、116が内外面に青磁釉を掛ける碗、117が白磁小杯で、118が染付皿である。119は砂目の肥前陶器皿である。17世紀中頃の遺物群である(図309)。

共伴した坩堝が201・202である(図312)。201は内径約5㎝、深さ約5㎝、202は内径約7㎝、深さ約5.5㎝を測る。いずれも片面に突起を貼付ける特異な形態のものである。付着している鉱滓を分析したところ銅や亜鉛が抽出され、銅などの地金を調整するために使用されたものと推定できる。

SK104　OS93－28次調査地の南側の敷地にある円形の土壙で、陶磁器とともに羽口や坩堝などの金属生産遺物が大量に出土した。120は内野山系の肥前陶器碗、121が肥前青磁香炉、122が肥前陶器擂鉢である。SK103とほぼ同時期の遺構であろう。これらの土壙の周辺に広がっていた盛土からも17世紀中頃までの遺物が出土する。123は内野山系の肥前陶器碗、124は瀬戸美濃焼の天目碗である。釉調が漆黒色を呈し、胎土が白色であることから連房期の碗と考えるが、体部が緩やかに曲線を描いている。125は藁灰釉が厚く掛かっており、福岡県の上野高取焼の盤であろう(図309)。このほか、

「寛永三年閏卯月吉日」とヘラ書きされた硯203も出土した(図313)。

SK105　OS93－28次調査地の南側の敷地にある方形の土壙で、これも穴蔵と考える。出土した陶磁器は図310・311に示す一群である。126～151・155～160・170～178・181～183が肥前磁器で、126は染付碗の蓋、127～147が染付碗、148～151が青磁染付碗である。155～158は染付小杯、159は色絵の小杯である。160は染付猪口である。170～172は鉢の蓋、173が鉢である。172の蓋は周囲に青磁釉を、その内側に瑠璃釉を掛け、中央の菊文には白泥を塗るものである。174～178は染付皿で、181は染付仏飯器、182は染付壺である。183は白磁の鉢で内面に型押し文様がある。152～154は陶胎染付碗である。161・179・180は肥前陶器で、161が碗、179・180が皿である。162は肥前陶器の京焼風陶器碗である。163は肥前陶器ではなく、関西系あるいは瀬戸美濃製品の可能性がある。164～167・184は京信楽系の陶器で、164～167が碗、184は鉢である。168・169は瀬戸美濃焼の陶器碗である。185は底部が出土していないが堺擂鉢と考える。194～197は土師器焙烙で、194・195がF類、196・197がD類である。187～193は土師器皿である。これらは積山編年の10段階にあたるOS93－28次調査SK61の資料である。

SK106～111　OS93－28次調査地のSD102より南側の敷地に検出された。これらからも金属生産関連の羽口や坩堝が出土している。出土した陶磁器の年代観から、17～18世紀代の遺構と考える。これら以外の遺構からも羽口が出土しており、南側の敷地で金属生産が行われていたことがわかる。残りの良かったSK107出土の羽口198を図312に示す。遺存長27cm、外径は先端が8cm、後端が9cm、内径は先端部が2cm、後端部が5.5cmと送風孔は先端部が極端に細くなっている。ほかに、SD103を切るSK110出土の羽口199や北側敷地のSE103出土の羽口200がある。以下に出土した羽口と坩堝の特徴を報告する。

坩堝　OS93－28次調査地の南側敷地および南北の敷地境付近から、破片を含め64点が出土した。このうち碗形をした坩堝は3点のみで、他は把手が付き口縁部がすぼまるカップ形である。大きさは揃っていない。また、どの個体も同じ側(把手を右手でもった際の親指側)の外面がよく焼けてガラス化している。把手部分の残存するもの(17点)には鉗で挟んだ圧痕が見られる。鉗の先端は長方形のものと丸いものがあり、その幅は1～1.5cmで1.2cm前後のものが多い。

坩堝内面に緑色を呈する錆が付着しているものがあり、この内の6点を分析したところ銅(Cu)・亜鉛(Zn)・鉛(Pb)を検出した(註2)。

以上のことから、黄銅系の合金を溶解した坩堝であることは間違いないが、形や容量、外面の焼け方などから、通常の碗形の坩堝とは異なった用途で使用されたものと考えられる。


写真23　SK107金属生産遺物出土状況

羽口　南側敷地の遺構を中心として多数の羽口が出土した。出土量はSK110が一番多く、

SK107・SK105がこれに続く。先端部が残存しているなど形状が確認できるものが30点ある。総じて規格性が高く、いわゆる手捏ねの羽口は無い。概観すると３つの遺構ごとに異なる特徴をもつ。他の遺構から出土した羽口のほとんどは、この３タイプのいずれかに当る。

SK107出土品を主とする一群は、先端孔径２㎝前後で、製作時の焼きがあまく脆い。フイゴ側端部(基部)まで確認できるものがあるが、胴の中央部が強い熱を受け、そこから割れている。先端に残存するスラグは白っぽい(図312－198)。

SK110出土品を主とする一群は、他の２群と比べて外径が太く、先端孔径も2.5～３㎝程である。３群の中ではもっとも硬く焼きしまっている。先端に付着しているスラグはガラス質で黒褐色であり、設置痕が明瞭に残る。胎土に入る砂粒の大きさは不揃いで、礫が点在する(図312－199)。

SK105出土品を主とする一群は、先端孔径２㎝前後とSK107出土の一群に近いが、外形は少し細い。先端部には粒径２㎜ほどの砂粒が非常に多く、基部には中礫が点在する。火を受ける先端部の耐火性を上げようとする意図が明らかである。

また、図312－200の羽口は前述の３群のいずれにも属さないタイプで他に同種のものは無い。外径・孔径ともに小さいことや北側敷地SE103から出土していることなどから、他の羽口とは異なる作業(職種)に用いられた可能性がある。

３)まとめ

ｉ)奈良時代

この地区で特筆すべきは、奈良時代の井戸を検出したことである。

５個所の調査を報告したが、地山が低くなった所にはOS89－23次調査地のように古代や中世の地層が残っているが、地山が高い場所では豊臣期の大坂城築城工事などで中世以前の地層が後世に削平されていることが多い。そのため、今回の井戸のような深い遺構しか検出できない。

大阪市域北部の難波宮跡・大坂城跡・大坂城下町跡・四天王寺周辺で調査した井戸をあげてみる。周辺部での後期難波宮期に属する井戸の検出例は非常に少なく、南東0.7㎞にある国立大阪病院構内のSE15501と[大阪市文化財協会1984]、北0.7㎞にあるOS87－29次調査SE503(本書第Ⅲ章第１節)が見つかっている。さらに目を広げても、東1.8㎞にあるOS93－７次調査SE501[大阪市文化財協会2002b]、南南東2.3㎞の細工谷遺跡SE505とSE507[大阪市文化財協会1999b]、南2.6㎞にある上本町９丁目所在遺跡の井戸[植木久1986]が知られている程度である。

平安時代に下っても、北東0.6㎞にあるOS97－１次調査SE101[大阪市文化財協会1999a]、北0.7㎞のOS90－50次　SE502(本書第Ⅲ章第１節)、北西0.6㎞のOS87－100次調査SE902・907・914・916(本書第Ⅲ章第10節)、大坂城下町跡OJ92－33次調査SE1104[松尾1999]があるくらいで、検出例はいたって少ない。井戸側の構造がわかるものは、細工谷遺跡のSE505とSE507・OS97－１次調査SE101・OS87－100次調査例、OJ92－33次調査SE1104と今回報告の井戸SE601である。細工谷遺跡SE505の井戸側は刳抜き材を用いた円形を呈している「ＢⅠ･b1類丸太分割刳抜き井戸」、細工谷遺跡SE507・OS97－１次調査SE101・OJ92－33次調査SE1104の３例は宇野氏分類の「ＢⅥ類横板

井籠組井戸」で、OS87－100次調査SE902・907・914・916の井戸側は曲物である。

OS87－18次調査SE601は宇野氏分類の「BⅣ類縦板組隅柱横桟どめ井戸」と呼ばれるものに近いとしたが、基部の構造に違いがある。SE601は基部に土居組を用いていたが、宇野氏の分類ではそれがない。より頑丈な構造といえよう。

1976年時点においては平城宮内ではほとんどが井籠組で、この「BⅣ類」を含む縦板材を用いた井戸は内裏東外郭官衙南半部のSE4205、宮南西隅にある「隼人の楯」を転用したSE1230、1966年の調査で見つかったSE5320の3例があるだけで、非常に少ないという。また、見つかった縦板材の井戸も平城宮の中枢部から離れた位置にあるとのことであり、宮殿遺跡より集落跡で普通に見られる型式の井戸とされる[黒崎直1976]。

「BⅣ類」は宇野氏が考察された時点では、特例とされる弥生時代のものが確認されており、その後、古代に34例、中世に39例、近世4例、近代2例とかなり長期間に作られる構造の井戸である。

草戸千軒町遺跡では「隅柱横桟型井戸」と分類され、草戸Ⅰ期(13世紀中葉から14世紀初頭)に9基、Ⅱ期前半(14世紀前半)には5基が見つかっているが、Ⅱ期後半(14世紀中葉)には2基と次第に減少し、Ⅲ・Ⅳ期の1基を最後に作られなくなっている。ここでも井籠組の井戸は中心区画に分布し、「BⅣ類」と同じ構造の「隅柱横桟型井戸」は中心区画にはなく、それに接する居住地に多いという傾向がある[広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編1996]。時期が下っても敷地の性格の違いが井戸の構造に現われている。

縦板組の井戸であるSE601が見つかったOS87－18次調査地は推定難波宮域の西外に位置しており、上記の傾向と合う。ただし、宮域外と推定されている地点でも、奈良時代の細工谷遺跡SE507や、奈良時代末から平安時代初期のOS97－1次調査SE101とOJ92－33次調査SE1104のように、井籠組の井戸が検出されている例もある。細工谷遺跡は墨書土器から「百済尼寺」の一角と推定される。中心伽藍は井戸の北側に広がると推定されている。この井戸は内径が1.2mもあり、現在までに難波京域で発見された中で最大である。天皇家と密接なつながりをもつ百済王氏の寺院という性格が井戸の構造にも反映しているのであろう。

OS97－1次調査SE101は推定難波宮域の北西外に位置している。この井戸が掘削された時期にはすでに難波宮は廃都となっており、別の施設に付随するものであろう。考えられるのが第Ⅲ章第1節で報告したOS90－50次調査地一帯に広がる公的施設である。OS90－50次調査地でも井戸が見つかっているが井戸側等がなく、廃絶時に抜取られた可能性がある。

翻ってOS87－18次調査地を考えると、重複して2基の井戸が掘られていることから、継続して利用された土地ではあったが、井籠組の井戸ではなく縦板組の井戸であった。この地は中枢部から一定程度距離を置く京域内の居住地であったと考える。ただ、その平面プランから正方位の遺構が展開していたことは推定できる。

ii)豊臣期

この時期の遺構も後世に削平を被り、ほとんど遺存していなかった。唯一、深くまで掘削されたSM301を検出できた。SM301は豊臣期と考えたが、遺物が出土しておらず、この時期のものかどう

かは確実ではない。ただし、徳川期の町割を踏襲している現在の街区の中央にあり、今に残る徳川期の大坂絵図にも描かれておらず、徳川期に下ることはないと考えられる。

SM301は東西方向に延びているが、西30mに位置するOS89－33次調査地にはこの延長部がなく、延長部に当る東250mのOS87－13次調査地でも見つかっていないため、この約280mの間にある堀なのであろう。また、機能時の堆積層は滞水状態で堆積したヘドロ状の粘土であり、水が流れるものではなかったと考えられ、短いものと推定できる。この場所は本章第3節で報告した一帯よりも高く、馬の背状になっている所で、自然地形を利用しているともいい難く、内本町通以北の豊臣期の遺構方位とも異なっている。

堀の南壁に築かれている石垣には花崗岩の自然石が用いられ、豊臣期大坂城石垣に普通に見られる六甲山系と生駒山系の石材である。本願寺期の石垣は検出例が少ないが、石垣石の控が0.2～0.4mと浅く、裏込石はないことから、『大坂城跡Ⅵ』第Ⅲ章第2節のOS94－33次調査SW802に近い。本願寺期の石垣は同書第Ⅲ章第2節のOS90－58次調査SW1101～1103しか検出されていないが、それと比較しても違いが大きい[大阪市文化財協会2002b]。

こうした点から、この堀および石垣を豊臣期と推定した。掘削時期は豊臣前期でも早い時期ではないかと考える。本章第3節ではここより低い谷地形の中に豊臣前期の町屋が建設されていることを明らかにしたが、本節で扱った調査地一帯も同時期から開発が進んでいた可能性がある。また、第Ⅲ章第9節や本章第6節で述べているように、東横堀川付近の市街地化は豊臣後期の三ノ丸造成以降であり、それまでは耕作地が広がる所が多く、大坂城に近い周辺部から市街地化が進行していたと想定している。SM301はこの辺りに町屋が建ち並ぶ前の惣構造成前に掘られた遺構で、城下町が広がる画期となった三ノ丸造成によって埋没したものと考えられる。

この地区は北側の地区よりも洪積層が高くなっている所で、城下町建設には格好の地形といえる。北部では豊臣期の遺構群が確実に存在していることを勘案すれば、この地区の豊臣期の遺構群は、徳川初期の大坂市街地再開発工事によって大きく削平を被ったと考えられよう。

iii)徳川期

徳川期の遺構には建物やそれぞれの敷地の境となる溝などは検出されなかったが、町割を復元する材料になる背割下水が見つかった。OS87－14次調査地のSD101は常盤町(旧伏見立売町)と北側の鎗屋町との境界をなす背割下水であり、OS93－28次調査地のSD102は北側の常盤町と南側の両替町(旧伏見両替町)の町境である。前者はこれまでにも見つかっている背割下水の一般的な形であり、徳川期を通じて改修され、残されたものには石の隙間を漆喰で塗込めているものが多い。後者はかなり規模の小さなもので、幹線の下水路に繋がっていくものであろう。大坂の背割下水には場所によってこのように2種の規模のものが造り分けられているようである。

これらの溝がいつまでさかのぼるかはわからなかったが、OS93－28次調査地では1mほど南に東西方向のSD103があり、それが当初の背割下水の位置であった可能性がある。そこから17世紀後半の陶磁器が出土している。

OS93－28次調査地ではそれよりさかのぼる1630年代の陶磁器がまとまって出土しており、この地

域の大坂夏ノ陣後の再開発が早くから始まっていることが判明する。OS93－28次調査地が所在する常盤町や両替町は伏見町人の移住によって再開発された町で、それは1619(元和5)年のことと言われている[内田九州男1982]。SE102から出土した一括資料はその年代にきわめて近く、再開発と同時に移住してきた人々の生活道具であった可能性が高い。盛土内から出土した硯203には「寛永三年」(1626年)と記されているが、この年は徳川期大坂城の天守が完成するなど、大坂城の再建や市街地の再開発工事の最中である。

この伏見町人による城下町再開発工事の実態が、どの程度の規模のものであったのかはわからない。豊臣期の街区をそのまま踏襲して建物を再建したのか、あるいは、街区の再編も行ったのかは判然としない。ただ、前項で述べたように、この一帯には豊臣期の遺構や遺物がほとんど検出されておらず、豊臣期の地表面が大きな削平を被っている可能性を示唆する。となれば、大坂夏ノ陣以降の元和年間における伏見町人の移住に伴う大坂再建工事は、かなりの規模であった可能性があろう。伏見町人の移住先は[内田1982]で図示されているが、ここに報告した調査地以外に第Ⅲ章や本章各節で報告した調査地が含まれる。それらでは豊臣期の遺構の方位が徳川期に変化した調査地もいくつか存在している。そうした遺構の方位の変化や街区の形態などから、この再建工事の実態を追及することは可能であろう。

この地域では豊臣期から徳川期への町割の変化を確かめることはできなかったが、徳川期の町屋の性格や職種を確認できた調査がある。OS93－28次調査地では、北側敷地と南側敷地で職種が異なる住人が居住していたことがわかる。北側敷地では生業を特定できる材料はないが、17世紀前半から中国製の青花が出土し、18世紀前半になっても中国南部で生産された印青花と呼ばれる陶磁器が10個体出土した。この時期、輸入陶磁器が出土することは少なくなり、まとまって出土しているのは、船場地域の道修町一帯や長堀住友銅吹所跡、第Ⅱ章第6節のOS87－40次調査地と、数個所しかない。北側敷地の住人は輸入陶磁器を所持できる階層だったのであろう。

南側敷地では金属生産にかかわる羽口や坩堝が大量に出土した。それらの時期は陶磁器から見て、17世紀後半以後である。

南側敷地は徳川期には伏見両替町に属し、江戸時代前半の延宝期や元禄期には刀鍛冶が多く居住していた所として知られている[森口隆次1989]。また、刀鍛冶の関連業種である彫物屋や研屋・鞘屋・鞘塗師・柄巻・鮫屋等の業者も近隣に居住しており、一帯は刀鍛冶と関連業種が集まる所となっていたようである。

大坂の刀鍛冶は大坂夏ノ陣で離散したが、すぐに復興され、元和年間にはすでに生産を始めている。徳川初期には船場地域の周辺部に居住していたようで、両替町(旧伏見両替町)一帯に居住し始めるのは延宝期(1673～1681)以降といわれており、出土した陶磁器の年代と一致している。しかし、坩堝は銅などの地金を調整したものとみられ、刀鍛冶と直接結びつかない。刀鍛冶の関連業種である加工業の職人がこの敷地で刀の装飾品の生産を行っていた可能性はあろう。

羽口と坩堝の関連が気になるところではあるが、同一地点から相伴って出土したものはほとんどないことや、羽口は他地点で見つかっている鍛冶のものに非常に近い特徴をもっていることから、現時

点で双方を積極的に結びつけることはできない。

（松尾）

註）

（1）築城史研究会の藤井重夫氏から御教示を得た。

（2）大阪歴史博物館の文化財用エネルギー分散型蛍光X線分析装置（EDAX DX95改良型）を用いて非破壊で表面の分析を行った。

第８節　Ｆ地区の調査

１）調査地と周辺の概要

ここではOS90－27・88－73・89－40・91－73・93－２・93－６次調査の６件を対象とする。この地域は調査が非常に少ないうえに、検出される多くの遺構が徳川期以降であったことから、惣構内でありながら豊臣期の様相がよくわからなかった(図314)。しかし、2002年４月～７月に行われたOS02－８次調査では豊臣期の瓦窯が計９基検出され、世間の注目を浴びた[小倉徹也ほか2002、宮本佐知子ほか2002、小倉徹也ほか2003]。



図314　Ｆ地区の調査地位置図

本節で報告する調査地はいずれも調査面積が狭く、大半が徳川期の整地層以下が地山である。その中で、OS90－27次調査は豊臣期以後の遺構面が比較的良好に残っていたため、この成果を中心に報告することにする。なお、OS88－73・89－40次調査では基準点測量を行っていないため、道路現況図を基に座標を求めた。また、OS88－73次調査は既に報告されていることから、概要に留める[藤田幸夫1990]。

２）調査の結果

ｉ）層序

ここでの対象地域は上町台地の西斜面に当る。現地形では谷町筋から西は緩斜面が続き、松屋町筋の手前から惣構の西側の堀に当る東横堀川にかけて急激に下がる。検出された地層や地山上面の標高もそれを反映しており、OS88－73次調査ではTP+2.4mまで地層

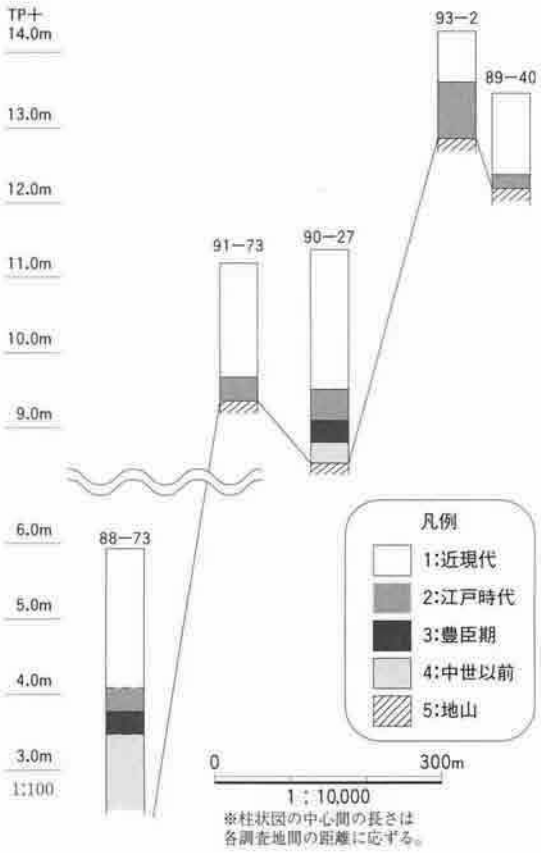


図315　Ｆ地区の地層柱状図

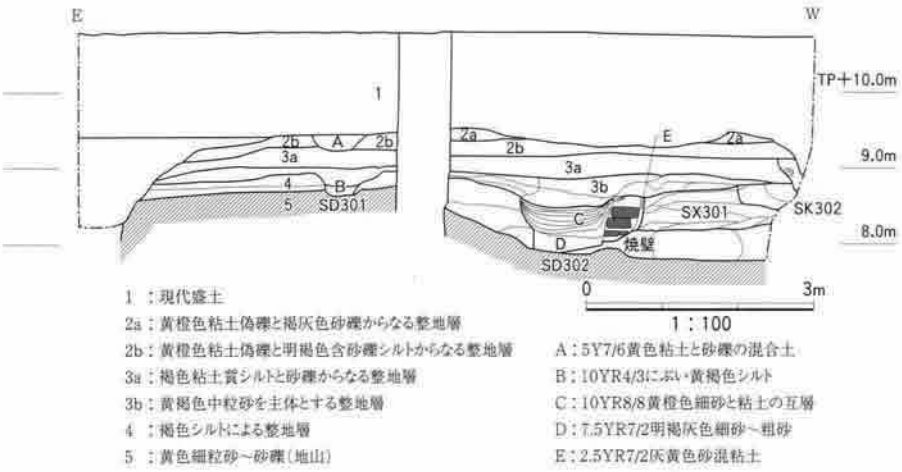


図316　OS90－27次南壁断面図

の記録を行ったが、地山層は確認することができなかった。一方、OS89－40・91－73・93－2次の各調査では地山層より上は江戸時代以後の地層のみで、OS90－27次調査ではその下に豊臣期や中世の地層が残っていた。OS90－27次調査地にはそこを通って、周囲より低い北側に抜ける谷地形が存在することが推測され、そのために削られなかったが、逆に前3調査地は江戸時代以後の開発で削平されたため、それ以前の地層が残っていなかったのであろう（図315）。なお、この想定される谷地形は、調査地の北側で東から西に延びる谷地形に合流するものと思われる。

本地区ではOS90－27次調査地の地層を基準に以下のように区分した（図316）。

第1層　近現代の盛土である。

第2層　地山の粘土や礫を多く含む江戸時代の整地層である。

第3層　豊臣期の整地層で、江戸時代のものより礫が少ない。第3b層は黒色砂質シルトと黄褐色砂質シルト・中粒砂が互層になっていた。

第4層　台地上では褐色シルト質砂礫層で、低地部のOS88－73次調査では砂礫が優勢の地層が厚く残り、下位に時期不明の地層が続く。OS90－27次調査地では中世の瓦や古代の土師器・須恵器が含まれていた。

第5層　明黄褐色粘土から砂礫で構成される洪積層の地山である。

ii）遺構と遺物

a．古代の遺構

OS93－6次調査では本調査が行われる前に、2度にわたる試掘調査（OS92－53・66次）が行われた。1回目の試掘では敷地の中央を掘削し、古代の遺物を含む地層を検出した。この地層は厚さ90cm以上あり、GL－2.15m（TP+12.3m前後）でも地山が検出できなかった。2回目の試掘では敷地の北端と南端の2個所を掘削したが、地山がGL－0.8～1.0m（TP+13.5m前後）で検出された。このことから敷地中央に谷状の窪みが存在することが想定され、本調査にいたった。しかし、本調査では掘削深度の問題もあり、古代の地層を検出したのみで詳細はわからなかった。なお、ここで想定される谷地形は現在の谷町筋に沿って存在すると思われる谷地形につながるものであろう。

b．中世の遺構

OS90－27次調査地では、地山（第5層）上面で東から西に階段状に下がる落込み**SX401**を検出した（図317左）。その上を覆う第4層からは古代の土器とともに中世に下る瓦片も出土している。

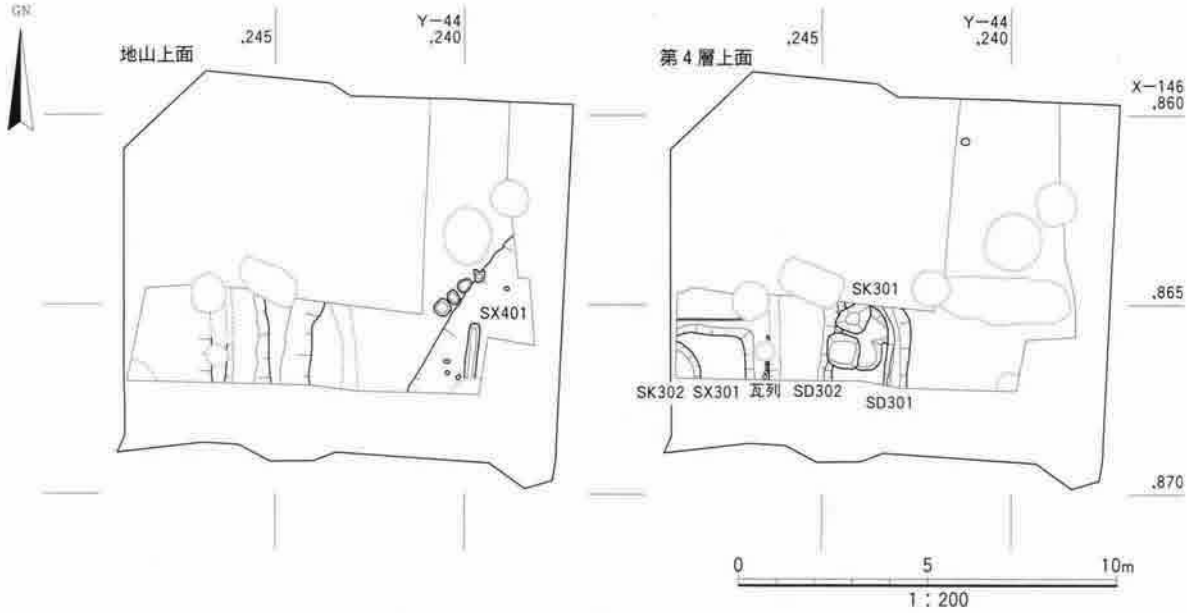


図317　OS90－27次遺構配置図

c．豊臣期の遺構

OS90－27次調査

第３層上面で溝、土壙、整地遺構を検出した(図317右)。

SD301　幅0.8m、深さ0.3mの南北方向に延びる溝である。

SD302　幅1.2m、深さ0.9mある。西側は整地層を掘込んでから、その掘込み面に粘土を塗り込み、直方体の焼土塊を積んで肩を作り出している。一方、東側は第６層を掘込み、そのまま肩になっている。埋土下層は明褐灰色細粒砂～粗粒砂で、青花、瀬戸美濃焼天目碗、瓦質火入れなどが出土した。上層は黄橙色細粒砂と粘土が互層になった水成層である。

SX301　第４層を掘込み、砂層と炭層を互層に積んでいる。

SK301・302　いずれも焼土や被熱した瓦・壁土を埋土に含む。SK302はSX301の上から掘込まれていた。

OS88－73次調査

TP+3.5m付近で検出された第３層上面で、ほぼ正東西方向に平行して延びる２条の溝SD303・304、数個の礎石、ピットを検出した(図318)。SD303は幅1.1m、深さ0.6mある。南肩は瓦を積み、北肩は横矢板を杭で留めて土留めを行っていた。SD304は幅1.7m、深さ0.4mあり、両肩は横矢板を杭で留めて土留めされていた。これらの溝は道路側溝になるか、敷地を区画するものではないかと思われる。

第３層途中面では礎石やピットが検出されたが、調査面積が狭く、建物の全容はわからなかった。

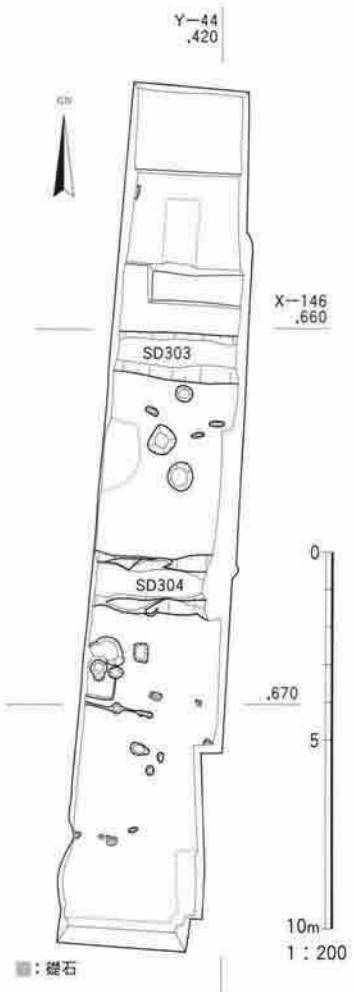


図318　OS88－73次豊臣期遺構配置図

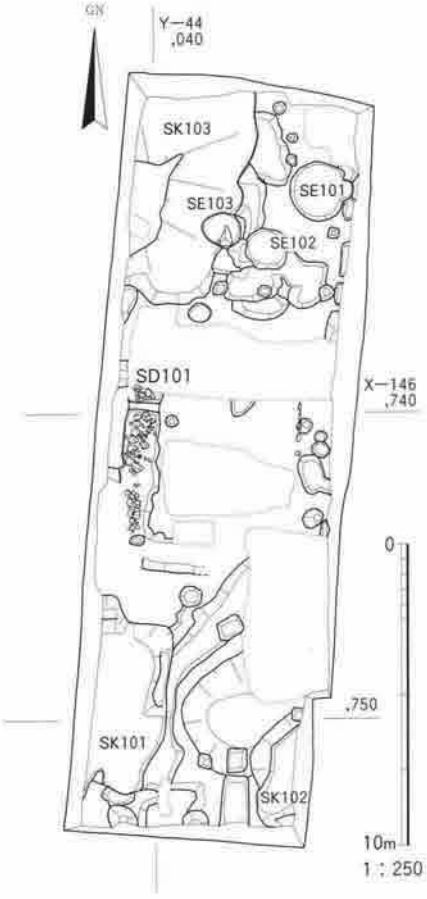


図319　OS89－40次遺構配置図

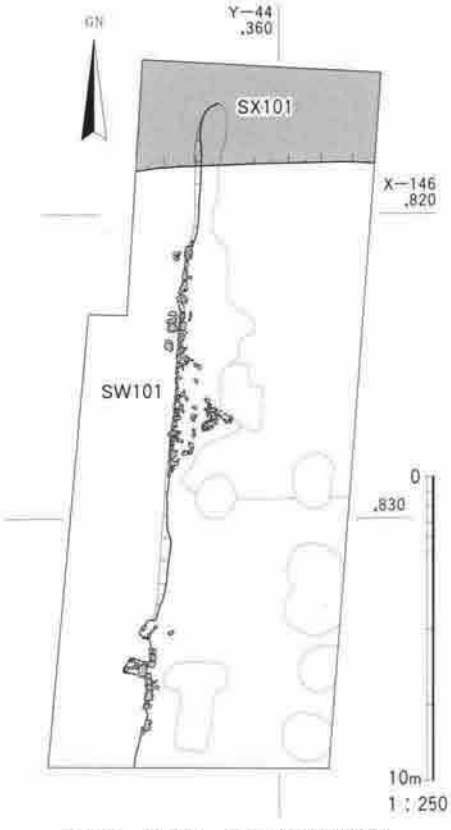


図320　OS91－73次遺構配置図

d．徳川期の遺構

OS89－40次調査

土壙・井戸・石組溝を検出した。石組溝SD101はほぼ正南北に延び、現在の街区とほぼ同じ方向である(図319)。

OS91－73次調査

石垣SW101を検出した。N7°Eの方向に延び、この方向は現在の街区とほぼ同じである。裏込めから18世紀頃の陶磁器が出土したことから、構築されたのはこれ以降である。

また、SW101を構築する前には、北側に急激に落ちる落込みSX101が存在した。明代の染付や埴輪片が出土した。北側で東西方向に延びる谷地形の斜面になると思われる(図320)。

OS93－２次調査

17世紀中葉以降の遺構面を４面調査した。18世紀代の石組の穴蔵などを検出した(写真24)。

３)まとめ

本節で扱ったＦ地区は他の地区よりも調査数が少なく、不明な点が多い。特に豊臣氏大坂城の惣構内でありながら、豊臣期の様相が不明瞭なのは、徳川期の削平を受けたことが理由の一つと思われる。その一方で、OS02－８次調査で明らかになった瓦窯の存在は、当地が本書のＣ～Ｅ地区とは異なる土地利用がなされていたことを示しているのかもしれない。いずれにせよ、今後の調査の蓄積を待ちたい。

(寺井)



写真24　OS93－２次で検出した石組穴蔵の基礎

第Ⅴ章　遺構と遺物の検討

第１節　豊臣氏大坂城惣構内の町割

１）はじめに

本書で報告した地域は大阪市を南北に縦断する上町台地北部の西側斜面一帯である。この地域には1583(天正11)年に豊臣秀吉によって大坂城が築かれると同時に、その城下町が建設されたと考えられる。初期の城下町は大坂から四天王寺に続く上町台地の頂部に建設された平野町城下町と、大坂城西側の上町台地西側斜面に建設された上町城下町の２個所であった。平野町城下町については、内田九州男氏によって詳細な検討が加えられているが[内田1989]、今回報告した上町一帯の城下町の構造については文献などの記録もなく、その実態については不明といわざるを得ない。

この地域には北で東に振る方位の町割があり、鈴木秀典はこの中でも地区ごとに道路の方向が異なっていることを指摘しているが[鈴木1989c]、地下から見つかる遺構群を検討したものではなかった。また、この地域を検討された伊藤毅氏も京都に施工された天正地割の淵源ではないかと考えられている[伊藤毅1987b]。

今回、この地域内の考古学調査で得られた当該期の遺構の方位や発見された建物などから、その形態や空間構造を検討してみることにする。また、豊臣氏大坂城期の城下町はそれ以前に存在していた集落を取込んだ可能性もあり、豊臣期以前の景観から復元を進める。中世末から豊臣期にいたる大坂の景観や都市構造については先に推定図を提示したが[松尾2003]、今回報告した調査成果を踏まえて再検討してみる。

２）城下町前史

ｉ）大坂本願寺期以前

豊臣秀吉によって大坂城が築かれる以前には、そこに一向宗の本山である本願寺とその寺内町が建設されていたが、さらにさかのぼる中世前期には、台地の西側に「窪津」あるいは「渡辺津」と呼ばれた港湾集落が存在していた。その位置は今回の報告で東横堀川が大川から分流する地点付近と推定した。

本書第Ⅱ章第４～６節で報告したが、Ｃ地区西部の東横堀川分流地点では12～14世紀代の瓦器などとともに中国製の輸入陶磁器や古瀬戸、滑石製の石鍋なども発見され、広域に流通する商品がこの地に搬入されていることが判明した。こうした広域流通品は港湾機能や商業の盛んな都市的な場に多く出土するもので、この地がそうした性格を有していた所であるとの推測が成り立つ。発掘調査ではこの集落の構造や広がりについては解明できなかったが、先に述べたような遺物から長期間にわたる集落がそこに形成されていることがわかる。

また、地形的には日下雅義氏によって復元されたように、東横堀川の前身であるラグーンが上町台地の西側裾部に形成されており[日下1991]、大川とそれが合流する地点付近には港湾機能が存在していたと推測する。この西側の船場地域北部にも同時期の遺物や遺構が発見される地点が多く[松尾1999]、東横堀川分流地点付近が港湾施設の位置としてもっともふさわしいところである。

これより南側では中世の集落と推定できる地点として、第Ⅲ章第７～10節で報告した東横堀川に面する所がある。この一角は平安時代の井戸なども見つかっており、かなり早くから人々が集住していた地域である。その中でも、Ｄ地区内平野町西端一帯では、OS87－100次調査地で中世までの井戸が16基、OS93－47次調査地で６基、OS90－31次調査地でも１基と、23基もの井戸を検出しており、この一帯には集落が形成されていたことが明らかである。出土した土器や陶磁器も多岐にわたり、輸入陶磁や国産の古瀬戸平鉢・常滑焼甕や石鍋などもある(第Ⅲ章第９・10節)。先の東横堀川分流地点と同様の遺物群が出土している。また、この地域では平安時代から室町時代の瓦が多く出土し、寺院の存在さえ推測できる。東横堀川の前身となるラグーンがこの付近まで延びていた可能性がある。

Ｄ地区内平野町西端一帯より南東に約600ｍ地点の台地上でも、平安時代から室町時代の土器や瓦が出土する。第Ⅳ章第２節で報告したＥ地区OS86－35・92－６次調査では平安時代から室町時代の遺物が多く出土している。また、この一帯から出土した瓦は先の内平野町西端一帯から出土したものと同笵であり、この台地上にも寺院が存在していることを推定させる。

こうしてみると、平安時代から室町時代の遺物が多く出土する地点は東横堀川分流地点、それより南方300ｍ付近の東横堀川東岸一帯、それと台地上の３個所である。先の２個所は東横堀川の前身となるラグーンやその東側を南北に走る松屋町筋に沿った、南北に連なった集落となっていた可能性もある。もう１個所の台地上の集落は先の２個所とはやや離れた位置にあり、別の集落と考えられる。こうした集落は第Ⅲ章第１節で報告した平安時代の公的な施設と推定される地域を囲うようにあり、Ｄ地区北東部一帯に広がる公的な施設を核として、集落が周囲に展開していた可能性がある。

ii)大坂本願寺期

15世紀末から16世紀後半までの大坂本願寺期になると遺物も少なくなってくる。前代に集落が形成されていると推測した３個所のうち、Ｄ地区内平野町西端のOS93－47次調査地のSM1101から16世紀前半の遺物群が出土しているが(第Ⅲ章第９節)、その他の地区では当該期の遺物は少なく、本願寺期には集落が縮小あるいは移動していった可能性が高い。ただ、上町台地北端にこの時期と推定する堀が検出されている。OS87－81次調査でも16世紀代の溝SD501があり、それは現在の敷地と同じ方向に延びる。SD501の位置は中央区島町の北側街区のほぼ中央にあり、方向は島町通の方位と同じであった。この溝はOS87－81次調査の東西で行った調査では検出されておらず、それほど長く延びているものではないため、この一角を囲う溝の可能性がある。このほか、第Ⅱ章第１節の「まとめ」でふれた堀群がある。これらは自然地形に規制された方位をもつものであるが、自然地形の高台を取巻く、あるいはその斜面に直交する堀が集中しており、堀の規模やその位置からそれらに囲まれる一帯が、いわゆる「石山合戦」の際に織田信長方が築いた「籠(樓)の岸砦」ではないかと推定される。

「籠(樓)の岸」の位置については、「浄土堂」と隣接しているという説や、「浄土堂」が「渡辺」と同一あ

るいは近接しているという説から考えると[仁木1994・藤田2000]、「渡辺」の東にあたるこの一帯の高台が「籠(樓)の岸」と呼ばれる地域であったと推測できる。

この時期上町台地北端部では、東に大坂寺内町、西に「渡辺」が存在し、その間は砦が築けるような集落域の外側であったと考えられる。上町台地北端部で行われている調査ではこの時期の耕作地が数個所で発見されており[松尾2001]、そうした推測を裏付けよう。

3)上町地域にある街区方位の検討

本書で扱った上町地域に広がる現在の道路方位は、鈴木が指摘したように大きく5地区に分かれている[鈴木1989c]。それらが豊臣期の城下町成立時の道路方向を継承しているのか、あるいは、その後の改変で現在のように5地区に分れたのかを、検出された遺構の方位で再度検証してみる。

鈴木は現状の南北道路と東西道路の方向を観察して5地区に分割したが、現在の道路は拡幅工事や車社会の要請によって直線的に変更されたものも存在すると考えられることから、今回は道路に囲まれた街区内を通る町境線と街区内の敷地の方位を基に検証を進める。記述を進めるにあたって、東西方向の道路は各町の名前を冠した通の名称を用い、南北方向の道路は東端の谷町筋から、西に1本目を善安筋、2本目を御祓筋、3本目を内骨屋町筋、4本目を松屋町筋と呼ぶことにする。

i)C地区

第Ⅱ章で報告したC地区は町境が東で南に約7°振っているが、敷地の奥行きは街区ごとに異なっている。北側には大川に向って低くなる崖面があり、その部分では傾斜変換線と南側から敷延する街区方位が混在した街区となっているようである(以下、図321参照)。

この地区南端のD地区との境界になる島町通は、豊臣期大坂城天守と船場地域の高麗橋通を直線で結ぶ道路で、城下町の基本軸とされている[宮本雅明1989]。これの北側に面する街区の各敷地は島町通に直交する方向の敷地となっている。

島町の北の石町通は東部でやや北に偏り、島町とは平行になっていない。そのため、石町南側街区の各敷地の奥行きは西部が短く、東部がやや長くなっている。ただ、各敷地は石町に直交した方位の敷地となっている。

約120m間隔にある南北方向の道路も島町通に直交しており、島町が基準軸になっていたといえる。ただ、松屋町筋と東横堀川に挟まれた一角は敷地が南北方向の道路に平行した敷地割も混在している。後世に南北道路を軸にした区画整理が行われ、当初の方位と折衷している可能性がある。

この地区の町の南北幅は、北端の土佐堀通は大川沿いの片側町であるため検討できない。その南の石町は北側街区が長く、南側街区が約20mと短いが、全体の幅は約60～70mである。島町は逆に北側街区が約20mと短く、D地区に含めた南側街区の奥行きは約40mである。奥行きの短い島町北側街区と石町南側街区を合わせた長さが約40mとなり、島町通の南側敷地の奥行きとほぼ同じになる。

ii)D地区

第Ⅲ章で報告したD地区では、島町通から内平野町通までの東西道路は、東で南に約7°振っているが、南部にある内淡路町通は内骨屋町筋より東が正方位に近くなっている。そのためか、南の大手通



図321　大阪城西側の市街地

も御祓筋以東が北の方に振っている。その影響で、内平野町の南側敷地の奥行きは東に行くに従って短くなり、内淡路町の南にある大手通北側敷地の奥行きも西側より長くなっている。南北方向の道路は島町より１本南の釣鐘町付近から東西道路に直交せず、正南北に近い方位に変わっている。

東西道路に面する各敷地は、島町西延長部の松屋町筋以西と内平野町通の御祓筋以東の南側敷地を除いて、それぞれが面する道路に直交する敷地割となっている。松屋町筋以西は、Ｃ地区で見たように南北道路に沿った敷地割と、東西道路に直交する方位の敷地が混在している。内平野町東部の南側敷地は内平野町通に斜行しており、南側の内淡路町通に面する敷地と同じ方位になっている。また、南北方向の道路に面する角地は南北方向の道路と同じ方向の敷地になっている。

松屋町筋以西では、Ｃ地区で見たように松屋町筋の方位と同じ方位の敷地は松屋町筋に面する角地だけであり、他の敷地は東西方向の道路と直交する敷地割となっている。

町の南北幅は北の釣鐘町から南の大手通まで約60mと均一であるが、東西道路が直線ではなく敷地方位が東西道路に直交しない街区では長短が見られる。

iii）Ｅ地区

第Ⅳ章で報告したＥ地区の東西道路は、北の大手通が東で約７°南に振っているが、１本南の糸屋町では内骨屋町筋以西がほぼ正東西に偏向している。さらに、北新町から南では少しずつ傾きがなくなり、中央付近の徳井町以南ではほぼ正東西の方位になっている。また南北道路は内本町通までは北から直線で続いているが、内本町通以南では再び北で東に振る方位になっている。また、東西道路に面する敷地の方向は、大手通西部の内骨屋町筋と松屋町筋の間では西半分が東西道路に直交せず、西側の松屋町筋の方向に近い。また、町の南北幅は糸屋町と北新町では約50m、南新町では東部で約50m、西部で約60mと東部が狭い。徳井町では東部が約55m、西部では約60m、内本町では約90mと他の町より長い。その南の鎗屋町は約55m、常盤町でも約55mと再び短くなり、中央大通のある南農人町では約90m、和泉町では約80m、内久宝寺町では約80m、粉川町では約65mとなっている。大手通から中央大通までの間の街区では、内本町通の街区の奥行きが長くなっている。

こうして各地区の街区の方向や敷地の方位を子細に観察すると、同じ方位の街区が地区ごとに集まっている。また、町の南北幅を街区ごとに見ると、Ｄ地区では約60mとほぼ一定している。一方、Ｃ地区は60～70mで、Ｅ地区では内本町が約90mと広いが、その北の徳井町より北では約50m、南では約55m・約80m・約65mと一定していない。

４）豊臣期の遺構の方位

先に見た形態の町が当初の姿であったのか、あるいはそれ以後の造成工事によって生じたものかを各調査地で検出した遺構群の方位などによって検証してみる。なお、遺構の方位は現在の敷地の方位に沿うものか否かを見ていく（以下、図322参照）。

ｉ）Ｃ地区

島町の街区の東端にあるOS93－54次調査では、現在の敷地方位より東で南に振る建物SB201が見つかっている（第Ⅱ章第１節）。この敷地は東の谷町筋に面しており、敷地そのものが谷町筋の方向に

なっている。他の地区でも谷町筋に面する東端の敷地は同じ街区内でも異なっている。豊臣期には敷地が谷町筋とは異なった方向になっていたと考えられる。その西のOS90－66次調査では現在の敷地と同じ方位のSA202と北で少し東に振るSA201がある。SA201は小規模な柱で構成される柱列で、SA202は直径0.3m前後の柱穴で構成される柱列である。現在の敷地方位と同じ方位の建物が建設された所と考えられる(第Ⅱ章第1節)。

島町の中央付近にあるOS87－26次調査では豊臣前・後期とも現在の敷地方位と同じ遺構が検出されている。前期には現在の敷地と同じ方位の溝SD401が現敷地を南北に縦断し、その周囲には同方向の土壙や小規模の溝が集中している。金属生産関連の遺物が多く出土する。後期には現敷地と同じ方位の方形の土壙群が広がる。出土遺物や遺構の形態などから、この調査地の性格が変化していると推定できる所である(第Ⅱ章第2節)。

大川に面する土佐堀通にあるOS90－20次調査やOS88－113次調査では、現在の敷地と同じ方位の建物や土壙が豊臣前・後期を通じて検出される。前期段階にこの方位の地割が出現していると見てよい(第Ⅱ章第3節)。石町西部にあるOS85－28次調査の前期の遺構のうち、北部の遺構は現敷地の方位よりやや北で東に振っているが、南半の遺構は現敷地の方位に近い。この西側のOS87－78次調査では前期の遺構は現在の敷地方位と同じであるが、後期の遺構には現敷地の方位より北でやや東に振った門SB401と築地塀SA401がある。これらは東のOS85－28次調査の前期の遺構群とほぼ共通しており、前期と後期の間には大きな変更はなかったと推定する(第Ⅱ章第4節)。

松屋町筋の東で島町通に面するOS87－81次調査では、現在の敷地と同じ方位のSD401・SB401・SA401がある。ここで検出したSD401は土留め矢板をもつもので、それに接してSA401も存在していることから敷地境であった可能性がある。これが当時の地割であったのなら、現在までの間に敷地境の位置が変化していることになる(第Ⅱ章第5節)。

松屋町筋の西側のOS86－22・87－40・92－1次調査では豊臣前期の遺構は調査できなかったが、後期では北部に正南北に近い建物群が、南部では南側の東西道路に平行する建物群が広がっていた。これらの建物群は同時に存在していたもので、同一敷地に二通りの基準線が存在していたことがわかる。それぞれの建物の建設時期の違いを示しているのか、詳細は不明である(第Ⅱ章第6節)。

この南のOS88－56次調査では豊臣後期に属する、現敷地と同じ方位の段がある。前期の遺構は調査できなかったため、前期との違いがあるのか不明である。OS89－148次調査では前期段階には現敷地方位より北で東に振るSB801と堤状盛土SX601があり、後期には北で東に振るSB302と、正方位に近い現敷地と同じ方位のSB301・303・SD301がある。前期には現在の敷地と異なる方位の建物が存在し、後期になって現敷地と同じ方位の建物が出現していることが看取できる(第Ⅱ章第7節)。

ii) D地区

釣鐘町東端のOS90－50次調査では、豊臣期と推定したSA201の他、周辺のOS88－1・87－29次調査でも現敷地と同じ方位の遺構が見つかっている(第Ⅲ章第1節)。この一帯は現在の敷地と同じ方位の地割が広がっていたのであろう。ただ、島町南街区にあるOS87－29次調査ではSX201とSA204があり、東西に並んでいた地割の境になると推定した(第Ⅲ章第1節)。また、釣鐘町南街区の奥で行っ

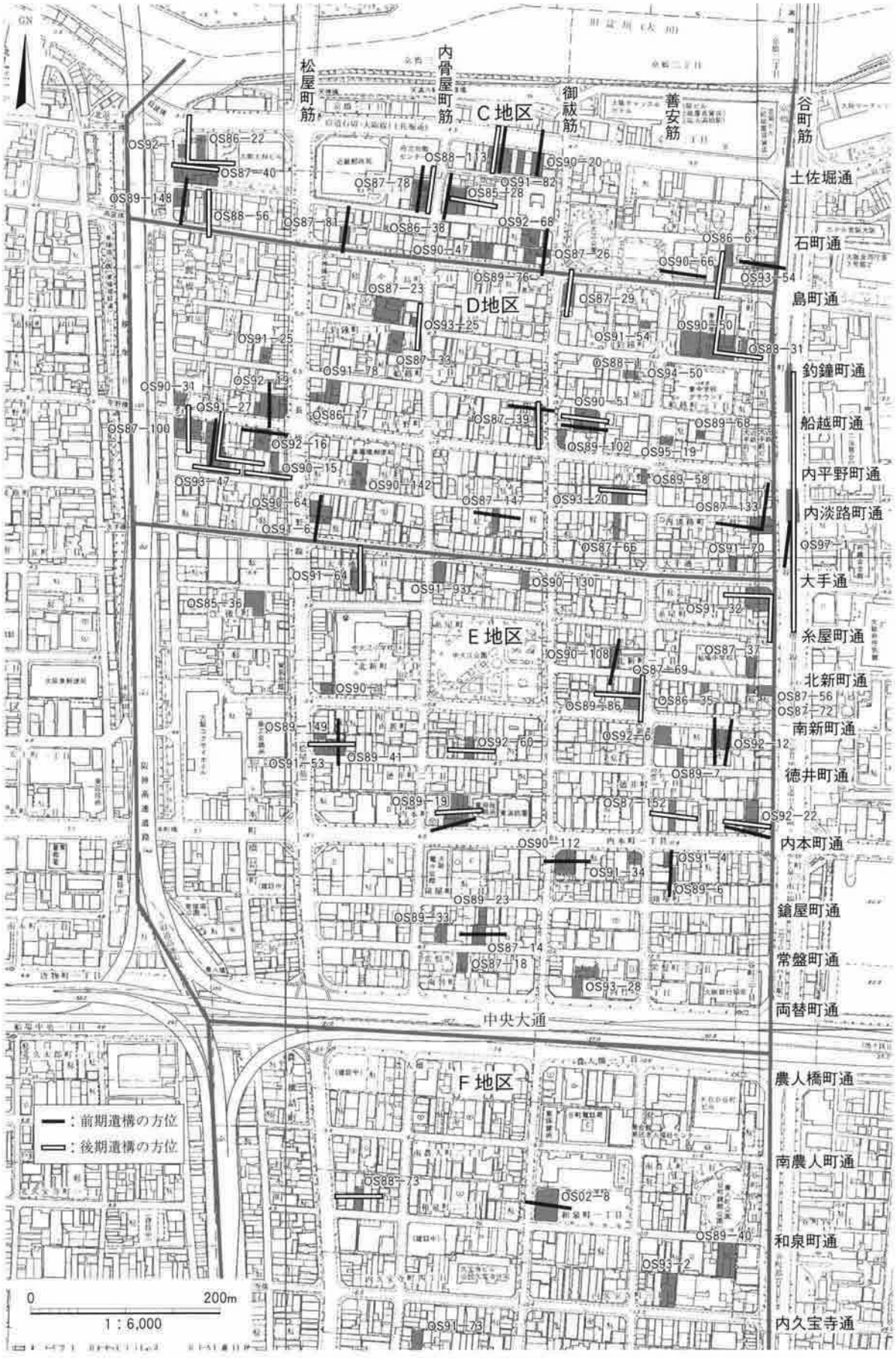


図322　豊臣期の遺構方位

たOS88－１次調査では、現在の敷地の中央に東西方向のSD201やSA203が見つかっている。これらは現敷地方位とは同じであるが、SD201やSA203が南北の地割境であるなら、町境の位置が変更したことになる(第Ⅲ章第１節)。

OS88－１次調査の西方のOS93－25次調査では、現敷地の方位に近いSW201を検出した。北で東に4°振る方位であり、東側にある南北道路の内骨屋町筋がほぼ正方位であることから、内骨屋町筋の方位とは異なり、東西道路である釣鐘町の方位に近い(第Ⅲ章第６節)。

船越町のOS90－51次調査は現地表から３ｍも深い所に豊臣前期の遺構面があり、そこに現敷地方位とほぼ同じ豊臣前期のSD301・302と、東で北に振るSA301とSX301があった。後期にはその上に２ｍ近い整地を行うが、遺構の方位は前期の方位と同じであった。２ｍの整地をしながら前代の遺構方位が踏襲されているのである(第Ⅲ章第３節)。OS90－51次調査地の西40ｍの位置にあるOS87－39次調査では、方位の異なる遺構を検出したが、前期の遺構SB301・302・SA302が北側の船越町通に沿い、後期の遺構であるSA303・304・SD307が東側の御祓筋に沿っている。前期と後期で遺構の方位が変化している。前期のSA302が調査地を東西に横切るように見えるが、この位置が町の境界であった可能性がある(第Ⅲ章第３節)。

内淡路町東端の谷町筋に面したOS87－133次調査では、豊臣前期の古い段階にはSD202が掘られ、新しい段階にはSD202が埋まり、SB201～203・SD201などが建てられている。その方位は両者とも現在の敷地方位より北で東に振り、現敷地方位とは異なっている(第Ⅲ章第４節)。この東の谷町筋内で行ったOS97－１次調査では、豊臣前期に属する同じ方位の遺構群が広く検出されている。この時期には、現在の谷町筋の位置にその前身となる南北方向の道路は存在していないようで、谷町筋内には北で東に振る方位の遺構が展開している。なお、OS97－１次調査の豊臣後期の遺構は現在の谷町筋とほぼ同じ方位である[大阪市文化財協会1999a]。

OS87－133次調査の西にあるOS93－20次調査では、現敷地の奥にあたる調査地北端部に東西方向のSA201とSD201があった。SA201とSD201は現敷地方位より東で南に振っているが、それ以外の遺構は現在の敷地と同じ方位の遺構である。両者は時期が異なり、前者が豊臣期で、後者は徳川期に下る可能性がある。SA201とSD201を北側にあった屋敷地との境界とすれば、現在の町境から南にずれた位置にあたり、町境の位置が動いたことになる(第Ⅲ章第２節)。

内骨屋町筋と御祓筋の間の内淡路町南街区にあるOS87－147次調査では、道路に近いところで豊臣後期の東西方向のSD603・604、SX601、SW601が見つかっている。これらは現敷地の方位とは方向が異なり、東で南に振っている。この位置は報告でも図示したように、内骨屋町筋より西側街区の東西道路の方向と一致していることがわかる(第Ⅲ章第５節)。

内淡路町を松屋町筋まで下ったOS90－64・91－６次調査では、中世と豊臣前期の遺構群が見つかっている。中世の建物は北で東に10°振っており、豊臣前期のそれは北で約７° 東に振る。中世から北で東に振る方位の遺構がここにはある。また、豊臣前期の遺構には、調査地西端に当時の地割と考えるSD201がある(第Ⅲ章第８節)。

内平野町の西部で、松屋町筋より西側一帯では比較的面積の広い調査を行っており、内平野町通に

面する遺構方位の変化が追える。内平野町の北側街区東端にあるOS92－19次調査では、豊臣前期には南部に内平野町通には直交せず、東側を走る南北道路である松屋町筋と同じほぼ正方位のSB201・202やSX201があり、後期になると北で東に振る南側の内平野町通に直交する方向に変わっている。興味深いことに、下層の中世と推定する第3層上面遺構は、北で東に振っているように見え、この間にも方位の変化がある(第Ⅲ章第7節)。この西端にあるOS90－31次調査では、南側の内平野町通に直交する柱列があるが、時期が惣構構築以降としか判断できなかった(第Ⅲ章第10節)。

南側街区の東端にあるOS92－16次調査では、豊臣後期以降、内平野町通に沿う方向の掘立柱建物や塀が作られる(第Ⅲ章第9節)。この街区の中間にあるOS93－47次調査では、豊臣後期には内平野町通に直交・平行する方向のSD701・702やSB701～704などの建物があるが、徳川期になると正南北に近くなっている。この調査地南端のSD702は南側の内淡路町に平行する石組溝で、道路側溝であろう(第Ⅲ章第9節)。このSD702は東のOS90－15次調査でも延長部が見つかっており、当時の道路の北端が現在の敷地南端から北6m付近にあったのがわかる(第Ⅲ章第9節)。西端のOS87－100次調査では、前期には内平野町通に直交する溝があったが、後期以降は内平野町通に直交せず、松屋町筋の方向になっている(第Ⅲ章第10節)。

D地区の豊臣期の地割とそこに作られた建物などの方位は、前期には遺構の検出例が少なく判然としないが、後期には内平野町通の方向と同じになり、徳川期に継承されている。ただ、東横堀川に接する所では東横堀川の影響があるようで、内平野町の方向とは異なっている。

iii)E・F地区

大手通の南側街区東端にあるOS91－32次調査では豊臣前期の遺構がなく、後期以降のものであった。その方位は徳川期の遺構と同じで、現在の大手通の方向に一致する(第Ⅳ章第1節)。御祓筋西側のOS90－130次調査では大手通に平行する後期の溝があり(第Ⅳ章第1節)、さらに西のOS91－64次調査では大手通の方向ではなく、松屋町筋に近い南北方向の柱列などが見つかった(第Ⅳ章第5節)。

北新町の善安筋より西のOS90－108次調査では、東西道路や現敷地の方向よりもさらに東に振った豊臣前期の建物があり(第Ⅳ章第2節)、善安筋に面するOS87－69・89－86次調査では、東西方向の道路に平行する後期の東西溝とそれに直交する溝がある。東西溝の位置は南新町の北側街区の北部にあり、この溝が当時の町境とすれば、町境の位置が変化していることになる。同じように南北溝の位置は善安筋より西にあり、これも道路側溝とすれば善安筋の位置も動いていると考えられる(第Ⅳ章第2節)。

南新町の東部にあるOS92－12次調査では前期には南新町通の方向ではなく、北で西に振る方位の建物が見つかった。周辺にはない方向の建物群である。後期には南新町通に直交する溝があり、ここでは前期と後期で方向が異なっている(第Ⅳ章第2節)。

徳井町西部の北側街区にあるOS92－60次調査では、現敷地内に徳井町通に平行する東西柱列や溝がある。当時の地割と考えられ、町境の位置が変化している可能性がある(第Ⅳ章第3節)。西端の松屋町筋に面するOS89－41・89－149・91－53次調査では豊臣前期の遺構が徳井町通に沿っており、徳川期にいたるまで変化がない(第Ⅳ章第6節)。

この南の内本町通では北側街区に前期の道路状遺構と、後期の石垣と石組溝が東西に検出されている。前期の道路状遺構は、善安筋より東では東で南に振る方位で、前述のC・D地区の豊臣期の遺構と共通するが、御祓筋と内骨屋町筋に挟まれたOS89－19次調査では東で北に振る方位となっている。それも前期の早い段階にはその傾きがより北向きで、新しくなると真東の方向に近くなる(第Ⅳ章第3節)。OS89－19次調査地付近は北部や東部とは異なった方位となっているようである。

内本町通の南側街区ではOS89－6次調査で敷地境としたSX201がある。この位置は街区の南部にあり(第Ⅳ章第4節)、北側のOS87－152次調査にあった石垣・石組溝より約60mの位置にあたる(第Ⅳ章第3節)。南にある常盤町のOS87－14次調査では東西方向のSM301があったが、これは東西方向に長く続いてはおらず、町境などの施設ではないと考えたものである(第Ⅳ章第7節)。

これより南のF地区では豊臣期の町割を検討できる遺構は多くはないが、2002年度に和泉町で行ったOS02－8次調査で、豊臣前期にさかのぼる9基の達磨窯と桐文の木製瓦笵が発見された[小倉ほか2002]。この瓦窯群の間にSD101が見つかっている。この溝が掘削された年代は窯と同時期と考えられるが、その後数度の改修が行われ、最終的に埋没したのは18世紀初頭頃である。溝の方位は東で南に7°前後振っており、現在の街区方位とは異なり、C・D地区一帯で見た豊臣前期の遺構と同じである。また、この西のOS88－73次調査では正東西方向のSD303・304があった。前期と後期で街区の方位が変化している可能性がある(第Ⅳ章第8節)。

5)豊臣期城下町の町割の復元

長々と現在の敷地方位と豊臣期遺構の方位が異なる調査地点をあげたが、この成果と現在の各町の奥行きを基に豊臣期城下町の復元を進めてみる。

C地区では東端の谷町筋に面する地域と西端の松屋町筋以西の地域の一部に、現在の敷地方位とは異なる遺構が存在しているが、中央付近では現在の東西道路と同じ方位の遺構が見つかっている。

ここではC地区とD地区の境とした島町の奥行きが、南側街区は約40mであったが、北側街区は約20mしかなかった。しかし、北側街区と石町南側街区を合わせると約40mとなり、島町通の南側街区の奥行きとほぼ同じになる。また、これに直交している南北道路は約120m間隔で配置されている。

D地区でも東端の谷町筋に面する所では遺構方位が現在の敷地と異なるが、それ以外に、東西道路の位置が変更されたと推定できた地点があった。内淡路町のOS87－147次調査地である。内淡路町は内骨屋町筋以西では北の各町通と同じように東で南に振っているが、内骨屋町筋でやや北に折れ、それより東では現敷地の方位も変化している。道路方向が変わった街区にあるOS87－147次調査地では、西側から続く道路の南端を直線で延長した位置に溝や段・石垣が見つかった。これを当時の道路と敷地の境界とすると、当時の道路は直線で東に延びていたと解釈できよう。現在の市街地図を見ると、この調査地がある内淡路町は北側の内平野町とは平行ではなく、北に偏り内平野町南側街区の奥行きが短くなっている。南側街区は内骨屋町筋より東街区は、西側の街区に比べ奥行きよりも長くなっている。さらに、内淡路町では松屋町筋より西でも北側道路側溝と推定できる石組溝が発見されており、それは現在の内淡路町の方向と同じであった。

また、同じ内淡路町の御祓筋と善安筋の間の北側街区にあるOS93－20次調査では、調査地北部に当時の敷地境と推定した東西方向の柱列や溝があったが、ここは北側の内平野町と船越町の境から約60mの位置で、御祓筋以西の内淡路町と内平野町の境の延長上に当る。この町境は御祓筋以東で方向を北に変えており、北側にある内平野町の敷地の奥行きが短くなっている。豊臣期にはOS93－20次調査の柱列や溝が町の境界となっていたと推定される。

D地区の町幅は約60mと一定していたが、E地区では北部各町の町幅は約50mと狭くなり、内本町では90mと長くなり、その南では一定していない。こうした町幅の違いが当初のものであったのか、町割の改造に基づくものであるのかは今回の調査地では検討材料が少なかった。ただ、内本町北側街区にある豊臣前期の道路状遺構と後期の石垣と石組溝が、当時の町割を復元する重要な遺構になる。

前期の道路状遺構は、善安筋以東では東で南に7°前後振っており、北部C・D地区の街区と同じ方位の傾きである。この付近も北部と同じ方向の町割が広がっていた可能性がある。ただ、御祓筋の西では東で北に振る方位であった。どうやらこの道路は直線になっていないようである。

後期の石垣と石組溝も、東部では東で南に振っているが、西部では東でわずかに北に振っており、東西を一連の石垣とすると、これも直線ではない。この石垣と石組溝の性格は2通り考えられる。

これを町の境界と考えた場合、この南北に奥行き30m未満の町があり、間口を開く道路の位置が現在とは異なっていたと考えられ、一方、石垣・石組溝より南が前代を踏襲した道路であったとしても、内本町通が現在とは違った位置になり、北の徳井町の南側街区とはほぼ同じ奥行きとなる。

この遺構が町の境界か道路との境界か、いずれとも判断しがたいが、D地区から南北60mという町幅をこの地域まで単純に割付けてくると、ほぼこの石垣付近に町の境界が来そうである。

石垣と石組溝は大坂夏ノ陣によって被災しており、豊臣後期を通じてこの位置に石垣と石組溝が存在していたことになり、豊臣期の街区が現在とは大きく異なっていたことは間違いない。現在の内本町の町幅が90mと周囲の町よりも長いこともその結果なのであろう。現在の位置に内本町通が形成されたのは大坂夏ノ陣以降の可能性が高い。

これより南部では後世に削平されていることも考えられるが、試掘調査でも大坂夏ノ陣の焼土層が見つからず、地山上面には徳川期の遺構しか見つからなくなる。

そうした一帯で見つかった和泉町OS02－8次調査の豊臣前期の瓦窯は[小倉ほか2002]、この一帯の当時の環境を推測する材料になろう。瓦窯は火を扱い多量の煤煙を出すため、人々が多く居住する所には築かれなかったと考えれば、この瓦窯が見つかった付近は、道路や街区はある程度施工されたにもかかわらず、建物が建ち並ぶまでにはいたらなかったのではなかろうか。

以上の検討結果から上町城下町の構造を描いてみる(図323)。

初期の城下町は大坂城から東横堀川分流地点付近の「渡辺」を繋ぐ、東で南に7°前後振る方位であり、その直線上に町幅が約80m(約40間)の島町が基本軸となり、長さが約120m(約60間)の長方形街区が基本となって東西に並んでいた。「渡辺」は上町台地周辺では、四天王寺門前町に次ぐ都市的な場であり、早くから港湾集落として繁栄していた。そこを取込むことを目的とした町が、この島町だったのではなかろうか。

東で南に7°前後振る方位の島町通は、宮本雅明氏が述べたように大坂城築城と同時に成立した道路である可能性もある[宮本雅明1989]。しかし、自然地形の制約の結果かもしれないが、前段階にはC・D地区でそれと同じ方向の大坂本願寺期にまでさかのぼる堀や溝が見つかっているのである。この方位は、本願寺期に西の「渡辺」と東の「大坂寺内」を直線で結ぶ方位でもあり、豊臣期以前から存在していたと推定できよう。

島町は大坂城から四天王寺に続く城下町である北平野町地区の城下町と同じように、大坂城の西にあった港湾集落「渡辺」へと続く線状の町で、初期の大坂は南の四天王寺方面だけでなく、西の「渡辺」へも線状に町が延びていたと推定できる。「渡辺」の西には当時の幹線水路である瀬戸内海や西国への陸路があり、流通の拠点として掌握しようと目論んだのではなかろうか。

島町の南に広がる町は南北幅が約60m(約30間)と狭く、なおかつ南北道路が島町の南の釣鐘町辺りから方向を変えており、遅れて開発された可能性がある。同時に計画されていたのであれば、島町と同じ規格の町になっていたと考える。約60m(約30間)の地割は、同時期に秀吉によって造営された京の天正地割と同じであり[伊藤毅1987b]、同規格の町割が大坂でも施工されていたのであろう。ただ、大川に沿った土佐堀通に面する街区は、明治19年測量の『大阪実測図』で測ると約30mの奥行きであるが、大川南岸の位置が徳川期と同じかそれより南にあったと想定されることや、京からの街道が存在していたと考えると、この街区の奥行きは当初から約30mであった可能性もあろう。

今回報告した地域は台地の斜面地にあたり、台地を刻む谷地形が存在している。図323に示した等高線は各調査地で検出した地山の高さから推定したものである。この上位には古代や中世の地層が広がるところもあり、豊臣期の地形を表したものではないが、島町付近には平坦面が広がり、釣鐘町以南には開析谷が入り込んで複雑な地形を呈しているのが読み取れる。起伏が顕著な地域では東西の基本軸を踏襲しつつ、台地西端までの斜面地に地割を施工し、南部に拡大していったのであろう。

今回報告したC～E地区の東を限る谷町筋内にも柱列や土壙、自然地形の谷などが残っており、その位置に現在のような南北道路はなかったようである。ただ、谷町を東に越えた現在の府庁舎一帯には広大な武家屋敷やそれに付随する小規模の地割があり、谷町筋西側とは様相を異にしている。豊臣前期から谷町筋付近を境に大坂城に面する一帯は武家地になっていたのではなかろうか。

C・D地区に広がる町割は三ノ丸造成工事以後も踏襲され、整備された街区に建物が建ち並ぶようになる。東側の谷町筋の位置には、三ノ丸の西側外郭と推定した南北方向のSA301やそれに沿う幅5m以上になるSD301があり、東側の武家地と西側の上町城下町との境界が明瞭になる。ただ、南北塀の西に谷町筋の前身となる南北道路が敷設されていたかどうかは先の調査ではわからなかったが[大阪市文化財協会1999a]、上町の東西道路が取付く南北道路が存在していた可能性はあろう。

豊臣後期には惣構の西の低地に、三ノ丸造営と同時に建設された船場城下町がある。そこはほぼ正方位の、40間四方の街区が並ぶ町割である。この報告で見た上町地区の町割とは大きく異なっている。上町の町割が後期に新設されたものであれば、同じような町割の街区になると考えられ、上町の町割が前期からのそれを踏襲しているという一つの証左になろう。

東西方向の道路については、調査で得られた推定町割から復元が可能であるが、南北方向の道路に

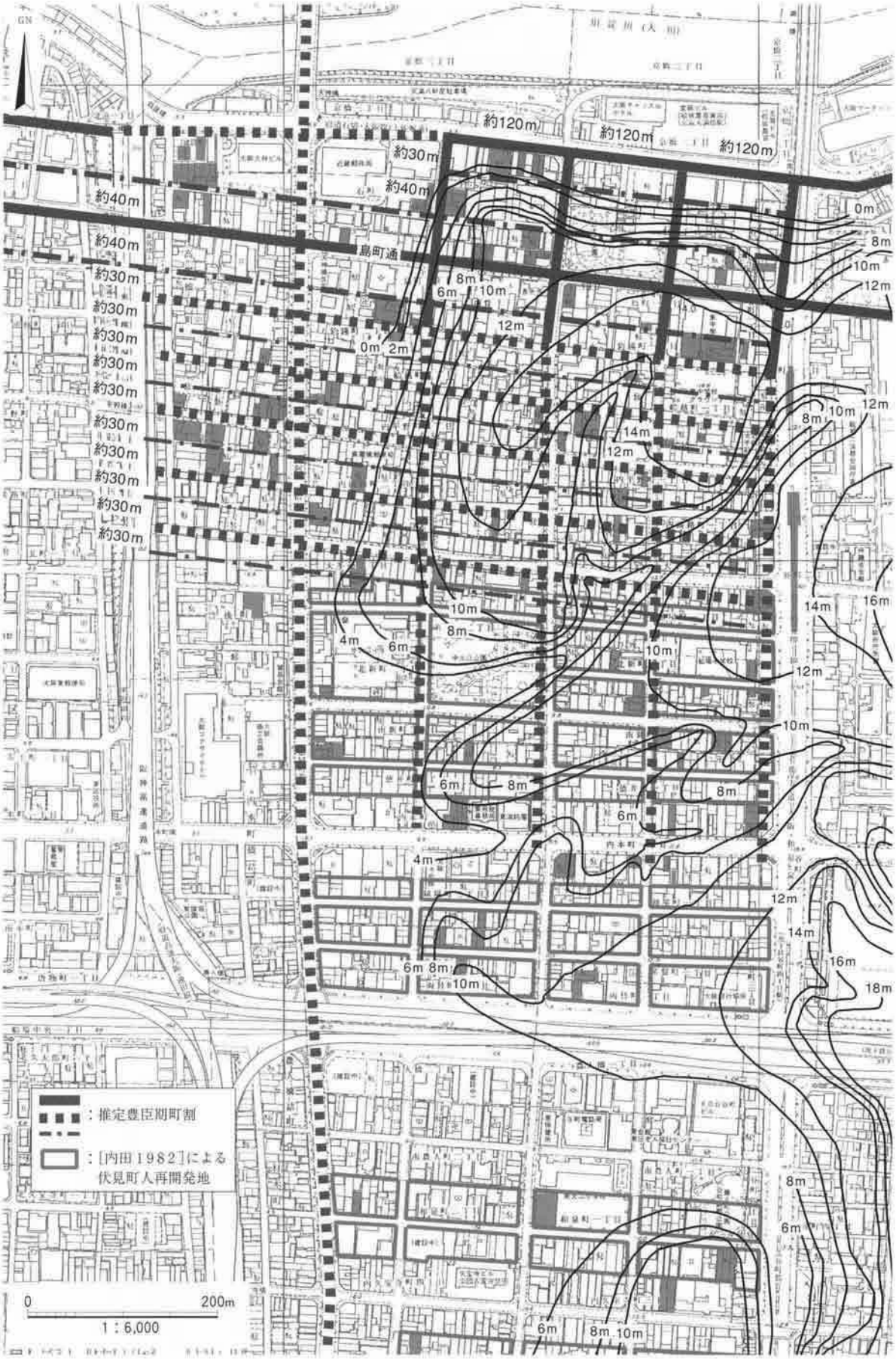


図323　推定される豊臣期町割と元和期の伏見町人再開発地

関しては十分に検討できる材料がない。秀吉の城下町建設は主要街道の上に線状の都市を築くという共通性があるとされているように[伊藤毅1987b・2003]、大坂も京都と南にある四天王寺門前町、さらには国際貿易港である堺を繋ぐ交通路の上に位置している。

大坂城の北に京からの街道が取付き、京橋を渡って大坂市中に入り、四天王寺の北に建設された北平野町城下町を貫く南北道路を通って、四天王寺や堺へと続く南北の主たる街道が存在していたと考えられる。その南北街道は大坂城の西側の上町城下町のどこかに存在していたのであろうが、南北道路に間口を開いた町屋群を検出できず、現在と同じ東西道路に間口を開く地割であった。南北方向の街道については今後の課題としたい。

6）おわりに　―徳川期城下町へ―

豊臣期の城下町が東で南に7°傾く南北約60m幅の町割とすれば、内平野町以南のD～F地区に残る街区はそれとは異なっており、その後に町割の整備が行われたことになる。内本町の北側街区にあった豊臣後期の石垣や石組溝の位置も、現在の街区の中にあり、現在とは異なる方位であった。

最後に、現在の敷地方位や奥行きが異なっている地域を再度検討し、徳川期における上町の再開発について予察を述べる。

内平野町の御祓筋より東の街区では敷地の奥行きが短く、その南の内淡路町では内骨屋町筋より東が短い敷地となっている。大手通では松屋町筋に近い街区で敷地の方位が大手通に斜行している。また、糸屋町以南は敷地奥行きが短く、東西道路も北部と比べると正東西に近くなり、内本町でも街区内に道路や敷地境となる遺構が見つかっている。

これらの方位や町幅が異なっている各町の広がりは、大坂が幕府直轄地となった1619（元和５）年以降に、伏見町人の移住によって進められたとされる大坂市街地の再開発地区とよく一致している[内田1982]。その再開発工事の内容がどのようなものであったのかはわからないが、大坂夏ノ陣によって荒廃した大坂に新たな道路を敷設し、新たな街区を誕生させた可能性もある。D～F地区にある敷地奥行きが短い町や、正東西を指向する町、東西方向の道路が船場城下町からの延長線上にある町などが、この時に出現した街区ではないだろうか。

また、内本町通もこの時に船場城下町の本町通を東に直進させて敷設したと考えたい。また、C～F地区の東を限る谷町筋は、豊臣後期の三ノ丸外郭であるSA301の位置に、その方向を踏襲して南北に通した道路であろう。この時に谷町筋に面するC～F地区東端の敷地は、谷町筋と同じ方向となったのであろう。谷町筋東側の谷町筋に面する敷地もこの時に誕生したと推定する。

内田氏は相当数の町が伏見よりの移住地として紹介されており（[内田1982]表１・図１）、移住してきた伏見町人の数も相当なものであったのであろう。C地区およびD地区北半とは異なる街区方位をもつD地区南半とE・F地区の町は、その受皿として十分な規模である。

（松尾）

第２節　大阪市内出土の金箔瓦

１)はじめに

豊臣氏大坂城跡およびその周辺で2000年度までに出土した金箔押し瓦(以下、「金箔瓦」と称する)は約1,000点に上り、その内訳は軒丸瓦が252点、軒平瓦が131点、飾り瓦は使途不明の瓦も含めて約600点(註１)である。これらの一部については中川信作氏や中村博司氏によって報告されているが[中川信作1974、中村博司1982]、本稿ではあらためて集成を行い、検討を加えることにした。

なお、本稿での遺物番号は大阪市文化財協会における金箔瓦の整理番号をそのまま用いる。番号はゴシック体で示し、前についたアルファベットは、Mが軒丸瓦、Hが軒平瓦、Kが飾り瓦を意味する。また、出土層位・遺構名については本書で報告したものも含め明朝体で表現し、出土調査地については表13に示した数字に従って、第○地点というように表記する。時期については大坂城跡の調査で用いられている時期区分を採用するが、三ノ丸の整地層に関しては厳密には後期に属するが、遺物組成では前期の様相を示すので、前期に含めている。

２)金箔瓦の概要

ｉ)金箔瓦の種類と出土地点の概要

出土した瓦の種類は軒丸瓦・軒平瓦と飾り瓦がある。飾り瓦には鬼・鯱・鳥衾・雁振・熨斗・輪違い・青海波・菊丸・面戸瓦や、垂木先瓦・留蓋瓦があり、棟を飾る円形や方形の板状飾り瓦と、花狭間と呼称している透し文様の瓦や(註２)、軒丸・軒平瓦以外の用途不明の金箔瓦についても飾り瓦として扱うことにする。また、金箔が押されていない朱塗りの大面瓦も金箔瓦として扱っている。

金箔を押してる部位は、軒丸瓦では外縁と内区である。文様が巴文で珠文を巡らす場合は、珠文に金箔を押すものと押さないものがある。軒平瓦の内区文様も同様で、外縁に押した金箔は上下縁だけで、屋根に葺いたときに隠れる脇縁には原則的に押していない。巴文軒丸瓦で珠文を巡らせるものは、珠文に箔を押さないものの方が押したものよりわずかに多い。軒平瓦の場合も主文に箔を押さないものが、押しているものを上回っている。このように金箔を節約して用いている状況がうかがえる。

桐文・菊文瓦は各所から出土している。家紋瓦ではあるが特定の個人の家紋ではなく、特に認められた大名屋敷で使用されたものと考えられる[黒田1995]。そのためにこの稿では一般的な文様として桐文・菊文という用語を使用した。

また、大坂城跡および大坂城下町跡、天満地域での金箔瓦出土地点を図324と表13で示した。本稿では[大阪市文化財協会2002b]で定めた地区分けを基にして、各地区の出土金箔瓦の概要を記すことにする。調査の疎密も関連あると思われるが、Ｂ地区やＧ地区に多く、逆にＦ・Ｈ地区で長堀通より南では遊離資料も含めて、まったく出土していないのが現状である。各時期ごとの検討についての詳細は後に述べたいと思う。

ii)棟飾り瓦と滴水瓦

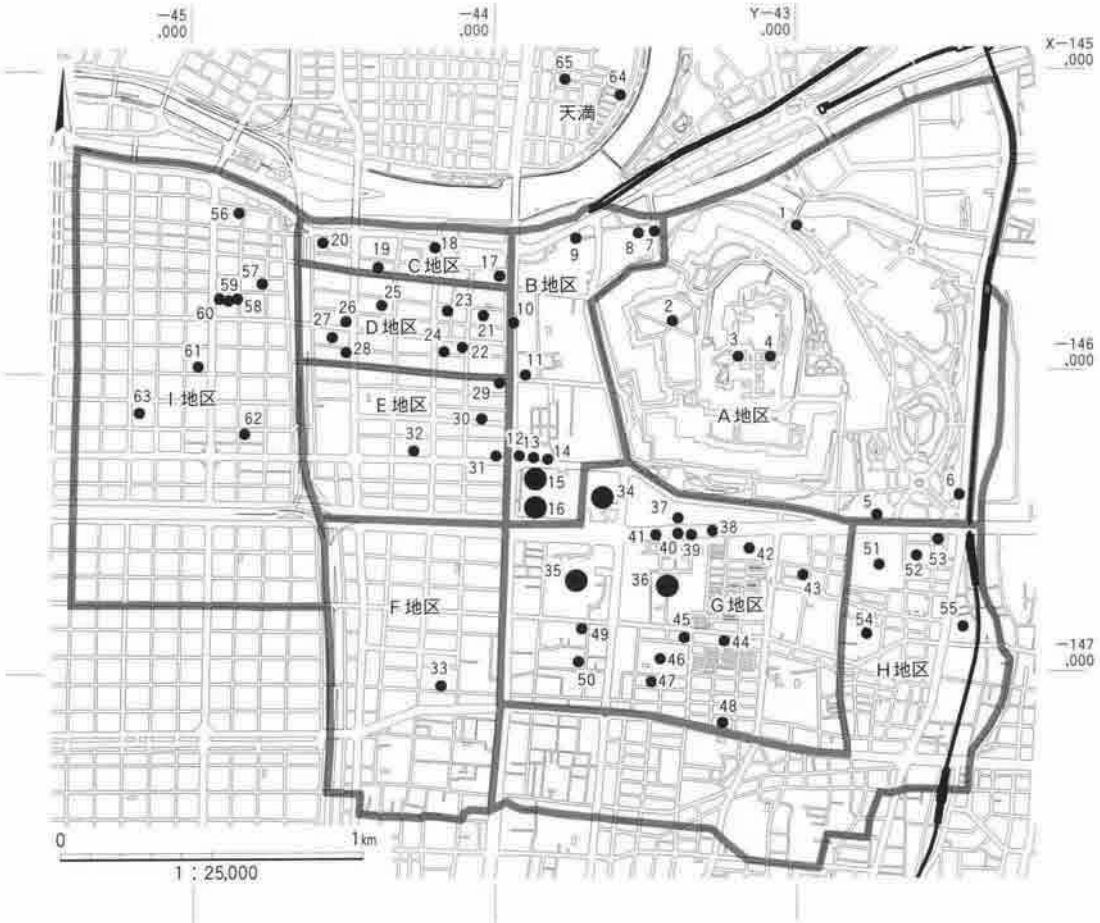


図324　金箔瓦出土調査地

表13　金箔瓦出土調査地一覧(註3)

地区	番号	調査地	豊臣前期			豊臣後期			徳川期			不明		
			丸	平	飾	丸	平	飾	丸	平	飾	丸	平	飾
A	1	OS86−32				●	●	●						
	2	OS83−14												●
	3	OS82−20												●
	4	OS84−17				●	○	●	●		●			
	5	OS88−23					●							
	6	OS92−74				●		●						
B	7	OS83−15				●	●	●			●	●		
	8	OS87−93							●		●	●		
	9	OS94−33	●		●									
	10	OS97−1				●	●	●						
	11	OS88−121				●			●					
	12	OS89−90						●						
	13	OS89−74				●	●			●				
	14	OS86−34				●								
	15	北調査地				●	●	●	●	●	●			●
	16	南調査地				●	●	●						
C	17	OS93−54	●											
	18	OS90−20			●									
	19	OS87−81			●									
	20	OS86−22						●						
D	21	OS94−50									●			
	22	OS89−58										●		
	23	OS90−51	●											
	24	OS96−52	●											
	25	OS87−33	●											
	26	OS92−19						●						
	27	OS93−47				●	●				●			
	28	OS97−45						●						
E	29	OS91−32				○	○							●
	30	OS92−12		●	●									
	31	OS92−22	●			●								
	32	OS89−19	●	●	●									●

※○は豊臣期だが前期・後期のいずれかが不明なものを指す。

地区	番号	調査地	豊臣前期			豊臣後期			徳川期			不明		
			丸	平	飾	丸	平	飾	丸	平	飾	丸	平	飾
F	33	OS99−59	●	●		○								
G	34	旧中央体育館跡	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●
	35	国立大阪病院内	●			●	●	●	●		●	●		●
	36	難波宮史跡公園内				○	○	○	●		●	●	●	●
	37	NW17												●
	38	阪神高速				●		○					●	
	39	NW6											●	
	40	NW11										●		
	41	NW8										●		
	42	NW80−9						●						
	43	NW77												●
	44	NW32										●		●
	45	NW41											●	
	46	NW93−19				○								
	47	NW95−10·11									●			
	48	NW171							●		●			
	49	NW90−7	●			○	○	○						
	50	NW97−2								●				
H	51	MR98−2	●	●										
	52	MR3・4				●	●	●						
	53	MR94−8	●											
	54	NW88−14							●					
	55	OS94−20	●		●	●								
I	56	OJ96−13				●								
	57	OS86−20								●				
	58	OU97−3				●		●						
	59	OJ91−11						●						
	60	OJ92−18				○				●	●			
	61	OJ92−33						●						
	62	OJ96−11									●			
	63	OJ97−6							●					
TN	64	TN93−3						●		●				
	65	TW98−1							●					

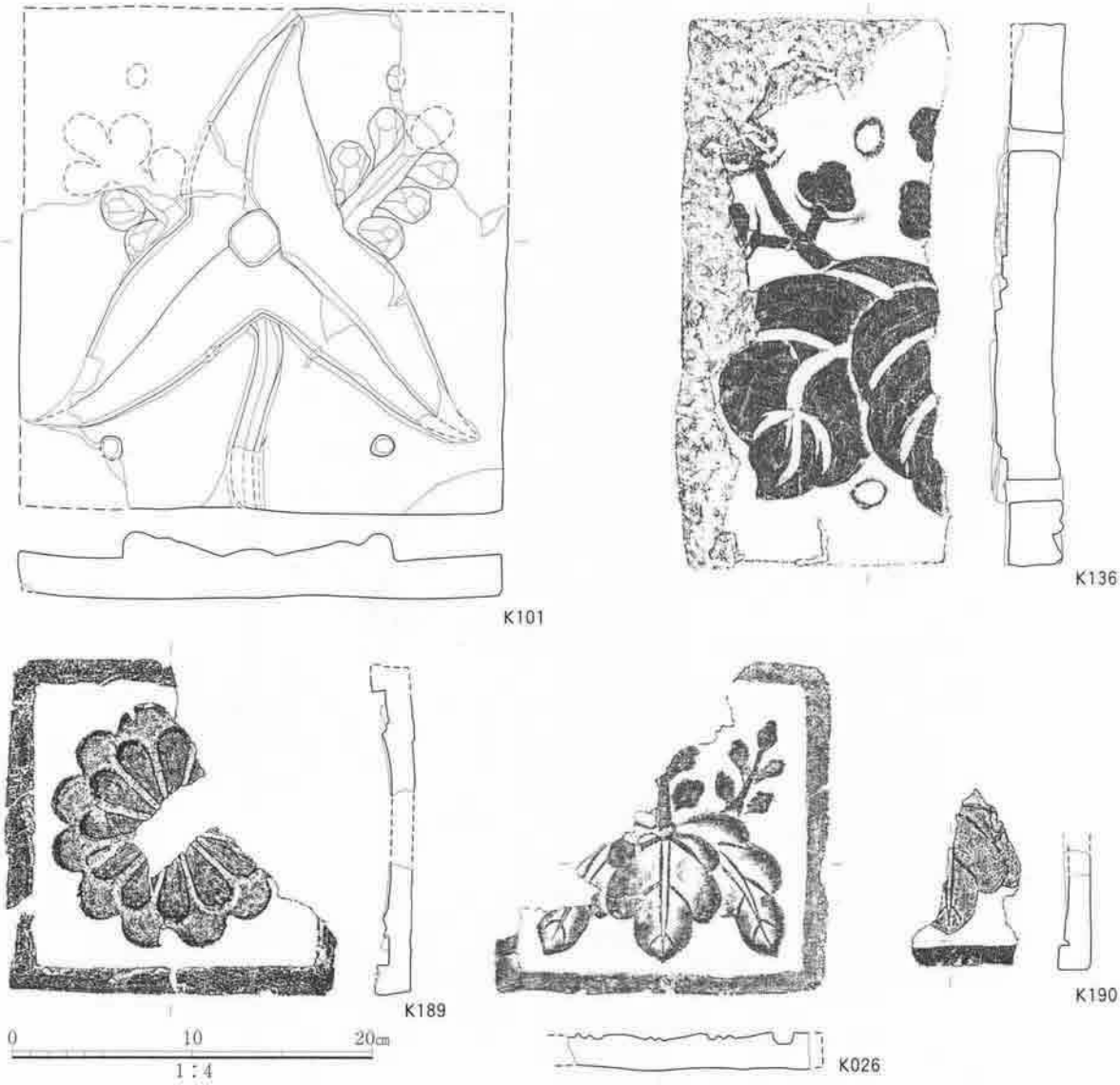


図325　金箔押棟飾瓦(1)

金箔瓦を記述する上で、棟飾り瓦と滴水瓦はそれを葺いていた建物の規模や性格を考える手掛りになる。棟飾り瓦の大きさは棟の高さを反映するもので、ひいては建物規模を推し量る一助となるものなので、大中小を記述した。出土した平面形が方形と円形の板状飾り瓦(以後方形・円形板状飾り瓦とする)は、『大坂夏の陣図屏風』などから大棟に飾るものと考えられる(図325・326)。

方形板状飾り瓦はバラエティーに富み、一定の規格があったかは判断できないが、正方形のものと長方形で横長のものとがあり、正方形にはおおまかに大小がある。長方形のものは正方形のものより小さいが、大きさが一定しない。

正方形で一辺28～30cm前後ある大型のK101・136は外縁がなく、厚さ約2～3.5cmである。一辺18cm前後である中型のK189・026は、外縁があり、厚さ約2cmである。内区文様は大型には沢瀉紋K101と桐文K136を飾るものがあるが、中型は現在までのところ桐文K026・190と菊文K189だけである。

小型とした横長のものは大きさにばらつきがあり、共通するのは外縁が無いことと横長の中に家紋や桐文を飾ることである。大きさは縦14.3cm、横25.4cm、厚さ1.2～2.3cmの大きなK345・340から縦9.2

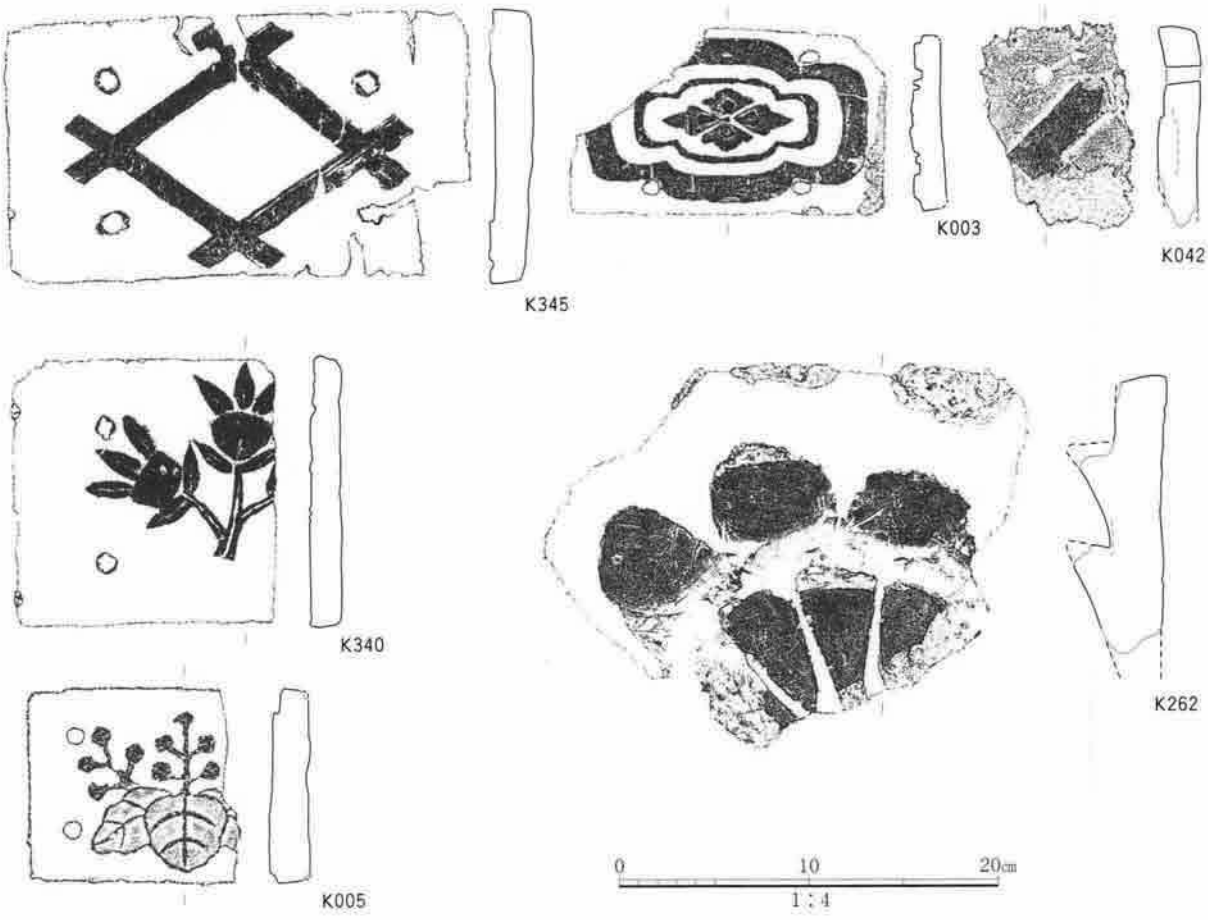


図326　金箔押棟飾瓦(2)

cm、横17cm、厚さ1.2cmと小さなK003まで個体差がある。

また、透し文様を飾った花狭間瓦K028(図329)は方形で、復元した大きさは、縦24cm、横53cmを測る。これら以外に大型方形板状瓦よりもさらに大きく、花弁を1枚ずつ立体的に表現しているK262があり、種類はもっと多いと思われる。大半の方形板状瓦は表面が広く、裏面が狭い逆台形を呈しており(註4)、隣同士に同じような瓦を飾ると、表面がぴったりと揃うように工夫されている。

円形板状飾り瓦は、三ノ丸内から以前に出土したとされるものに直径45cmの菊文円形板状飾り瓦が1点あるが(註5)、発掘調査で出土しているものは出土数が少なく、数値を基準にして分類できない。

続いて、滴水瓦について検討する(図327)。滴水瓦は全国的にも多くの城跡から出土しており、現在葺かれている姫路城では主要な建物にしか葺かれていない。大坂城跡でも滴水瓦が主要な建物に葺かれていたと想定されるため、それを重視しここで取り上げる。

滴水瓦は瓦当面の下外縁が突き出し、平瓦との接合角度が鈍角であることが基本形であり、朝鮮の影響を受けてつくられた瓦である[渡辺誠1990]。平瓦部と瓦当面の接合角度はわかるものは少ないが、90°前後のものと、それよりも広く鈍角のものがある(図327)。大坂城では瓦当面の下外縁が逆三角形のものはないが、軒平瓦の瓦当面の下への滴水の状況と文様から、3類4種に分類することができる。

A類は瓦当面全体が下向きで、特に下外縁が中心近くでさらに引き下げられた形である。その結果、


H002
H079
H011
H066
H076
H044
H008
H052
H043
H006
H005
H046
H003
H063
H108
0
10
20cm
1:4

図327　金箔押滴水瓦

内区厚は中心部が厚く、脇は薄くなっている。

A－1類はH079・066・044・043の４点で、周縁幅は同じである。文様は中心が菊と波で、２回転の唐草を配する。文様に違いがあり、笵は２種以上ある。残存破片で接合角度のわかるものはない。

A－2類はH002・011・076・008・052・006の６点で、脇外縁幅が広くなっている。中心文様は向いあった唐草と波で、１回転の唐草文を配す。平瓦との接合角度は90°に近いH002とやや広がるH006とがある。

B類はH046の１点で、瓦当の下外縁の中央部を下に突出させた形で、文様は唐草文である。接合角度は鈍角である。

C類もH005の１点で、瓦当脇と下の外縁が蕨手状の文様を構成し、中央部が下に突出気味である。内区に文様はなく、接合角度は不明である。

このほかに分類できない滴水瓦片(H063・003・108)が３点出土している。

滴水瓦の使われた時期について、A－1類４点のうちH079とA－2類のH076が、前期の遺構からの出土である。[中井均1995]によると、文禄・慶長の役に参戦した大名の居城に好んで採用されたということであるが、大坂城跡ではそれ以前の例があるということになる。出土点数が少なく、この瓦を使っているところが有力大名の屋敷になるかは明らかではないが、軒平瓦の中でも特殊なものであり、図327では特に断面を強調して表現した。

３)金箔瓦の出土地

ｉ)A地区の金箔瓦(図328、[大阪市文化財協会2002b]の第Ⅱ章)

この地区では６個所の調査地で41点の金箔瓦が出土している。現在の大阪城本丸内の第４地点では桐文の軒丸瓦M070や飾り瓦K069をはじめ、軒丸瓦M076・078・067、軒平瓦H114・028・029、鯱

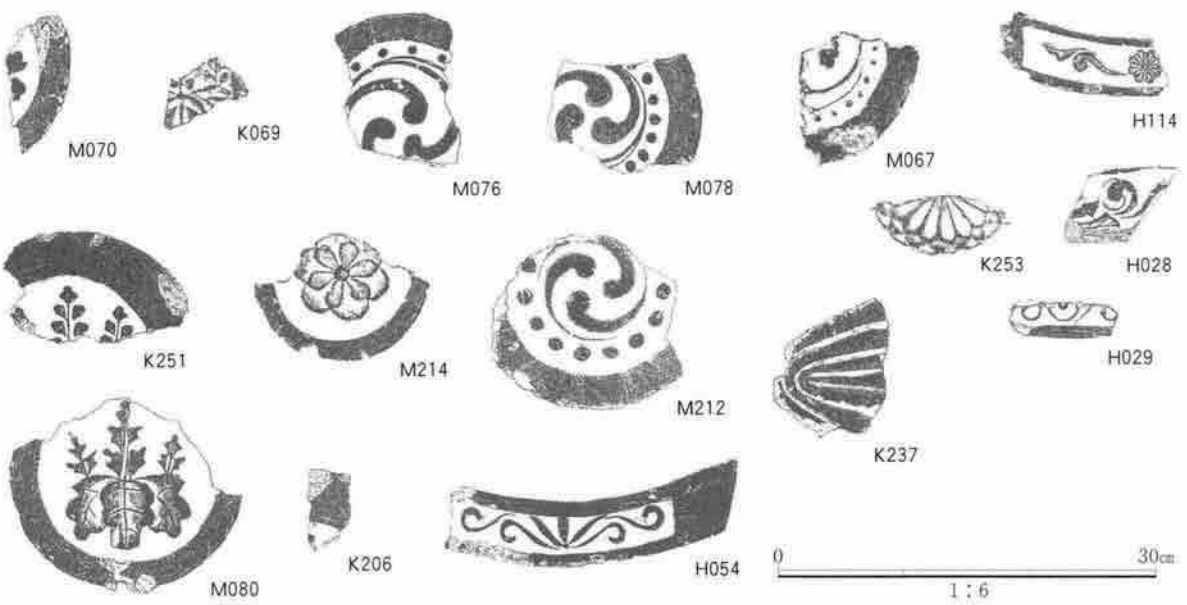


図328　A地区出土金箔瓦

K237・鳥衾・菊丸K253・熨斗瓦がある。西ノ丸公園の第2地点では桐文鳥衾K251が、また、天守閣南方の第3地点で大型花弁状飾り瓦と考えられるものが徳川期以後の地層から出土している。天守閣東方の第1地点では豊臣後期の層に伴って、桐文軒丸瓦M080と軒平瓦・雁振瓦が出土している。

大阪城公園南端の第5地点では1点の軒平瓦H054が豊臣後期の埋土から出土した。第6地点はJR森ノ宮駅の北西に位置し、南北方向の石垣と堀を検出した。菊文1点を含む軒丸瓦M214・212など3点、鯱瓦2点を含む鬼瓦、鳥衾K206などの棟瓦6点が堀埋土など豊臣後期の層から出土している。

ii) B地区の金箔瓦(図329、[大阪市文化財協会2002b]の第Ⅲ章)

当地区の大手前1丁目では、83－15(第7地点)・87－93(第8地点)・88－78次調査と大阪府教育委員会が行った調査地[大阪府教育委員会1994]において、推定三ノ丸の北を画す東西方向の石垣が150mにわたって続いて検出された。第7・8地点では巴文軒丸瓦M081・046と桐文M056・菊文M085の軒丸瓦各1点、鬼瓦・鳥衾K056・熨斗瓦などが出土した[大阪市文化財協会1988・2002b]。M081・M046・K056が豊臣期に伴うもので、ほかは徳川期以降の層からである。第8地点では熨斗・菊丸K088・輪違いK091と菊文・巴文軒丸瓦などが出土している。1点の飾り瓦と巴文軒丸瓦が、三ノ丸の石垣の面から出土したが、そのほかは石垣廃絶後(徳川期)の層からである。

この西側の第9地点では22点の金箔瓦が見つかっている。この調査で推定惣構の北面した石垣を検出し、豊臣後期の層から軒丸瓦M223をはじめ3点が出土した。下層の前期の盛土から出土したのは、軒丸瓦や鬼・熨斗・菊丸・煽り台面と、方形板状飾り瓦が7点である。方形板状飾り瓦の文様は、桐文K224～226・藤紋K221と文様不明のK217・219などである。

推定三ノ丸西端の南北塀と柵を検出した第10地点では、その東側の屋敷で使ったと思われる金箔瓦が多数出土した[大阪市文化財協会1999a]。それは井桁紋軒丸瓦M261と井桁紋小型方形板状飾り瓦K345・橘紋小型方形板状飾り瓦K340である。ほかに熨斗瓦が約300点出土しているが、小さく割れたものが多い。1614年の大坂冬ノ陣に備えて破棄されたことが共伴遺物や状況から明らかである。その後さらに整地をし、夏ノ陣を迎えている。その整地層中から巴文鳥衾K336・井桁紋軒丸瓦・唐草文軒平瓦・菊文K337・桐文K338と思われる板状飾り瓦の破片などが出土した。その南側では輪宝紋軒丸瓦M265が上層から1点出土している。この南には輪宝文を家紋にしている大名屋敷があった可能性が考えられる。

大手前4丁目の第15地点では夏ノ陣以前の埋土から金箔瓦が数多く出土した。巴文軒丸瓦M030・031・026をはじめ17点、中心飾りに桔梗紋をもつ軒平瓦をはじめ軒平瓦H013・022・019・018など12点、飾り瓦は28点を数える。小形の方形板状違い釘抜き紋がK042の1点とK028などの花狭間片が多数出土した。棟に飾るのになぜ透しにしなければならないかは不明であるが、他の方形板状飾り瓦と同じように使われたものであろう。他に大型桐文鬼瓦K031も出土している。漆塗りの煽り大面瓦K039も出土した。

第16地点では後期の堀から軒丸瓦M095と溝から1点の巴文軒丸瓦が、後期の層から滴水瓦B類のH046が1点と、焼土層中から鯱瓦K139が1点出土した。

北側調査地の道を隔てた北に位置する第13・14地点では、豊臣前期に北側敷地と画す東西方向の

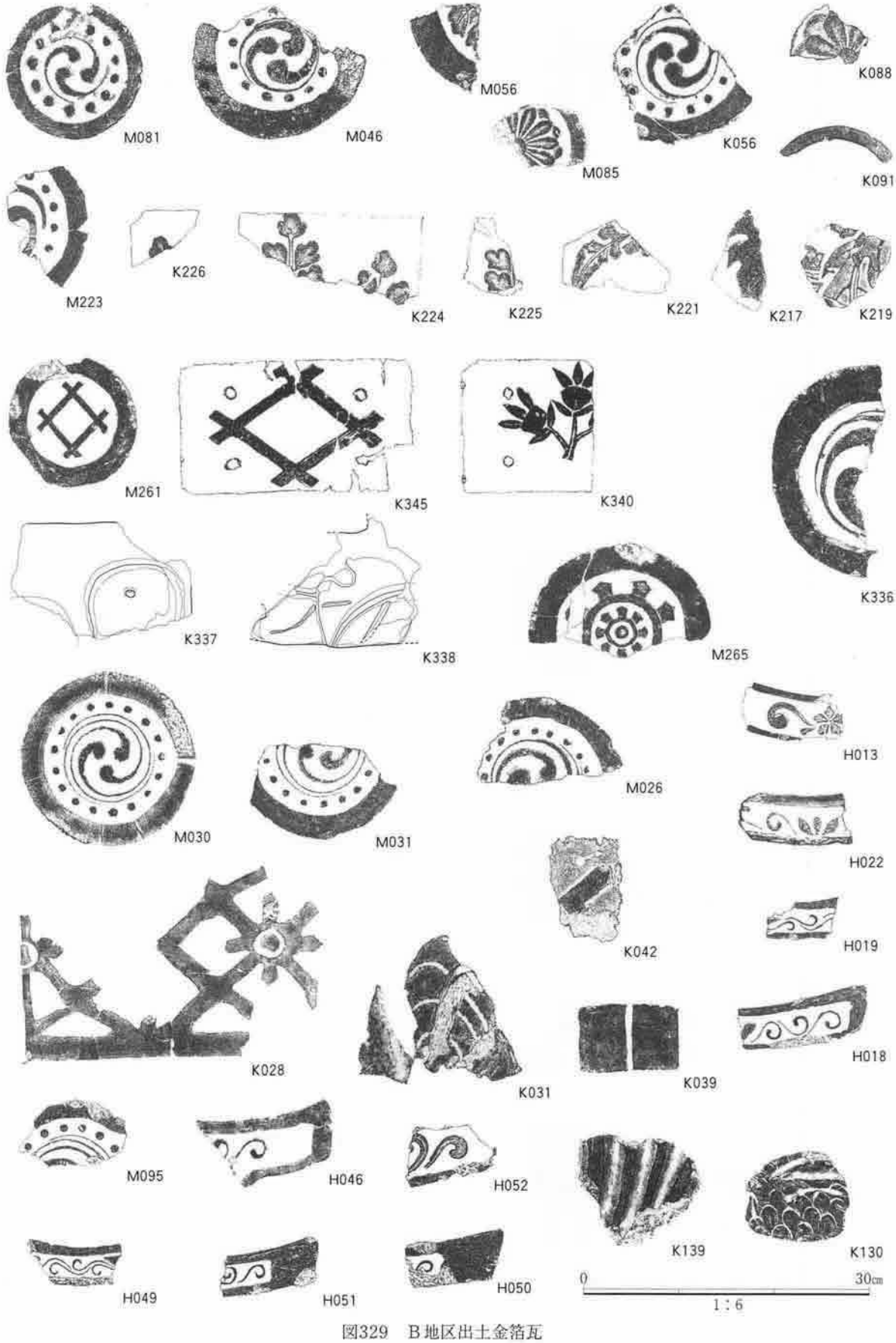


図329　B地区出土金箔瓦

柵が続き、その南の土壙や溝などから滴水瓦Ａ－2類のH052と、軒平瓦H049～051、軒丸瓦３点が出土した。その西側の第12地点は、谷町筋と本町通の交差点北東側に当り、西向きの南北方向の石垣が検出されている。石垣が造られる以前の豊臣期の面は、東が高く西は低い。その高所の土壙から鯱瓦K130が出土した。

iii）Ｃ地区の金箔瓦（図330）

推定大坂城惣構北西隅に当る北浜東の調査では、大名屋敷の顕著な遺構を検出した。しかしその中で金箔瓦が出土したのは北部の第20地点で、豊臣後期の土壙から鯱瓦K071が出土したのみである（第Ⅱ章第６節）。

土佐堀通（近世の京街道）に面した北浜２丁目の第18地点では、前期の建物や穴蔵などを検出し、その南の土壙から鬼瓦の破片が１点出土した（第Ⅱ章第３節）。この調査地では金箔瓦ではないが、他にあまり例のない大型の桐文軒平瓦（幅22㎝、長さ48㎝）が出土し、「大工」などの文字をスタンプした大型の丸瓦や平瓦を伴っている。

島町２丁目所在の第19地点では前期の礎石建物を検出した。その近くのSK401から、全形は不明であるが、桔梗紋か剣花菱紋の飾り瓦K128が出土した（第Ⅱ章第５節）。

谷町筋と高麗橋通との交差点西側の第17地点では、豊臣前期の井戸SE201の中から巴文軒丸瓦M211が１点出土した（第Ⅱ章第１節）。

iv）Ｄ地区の金箔瓦（図330）

東横堀川に近い第27地点は豊臣後期に蔵があり、夏ノ陣で焼失している。他に建物は明らかではな

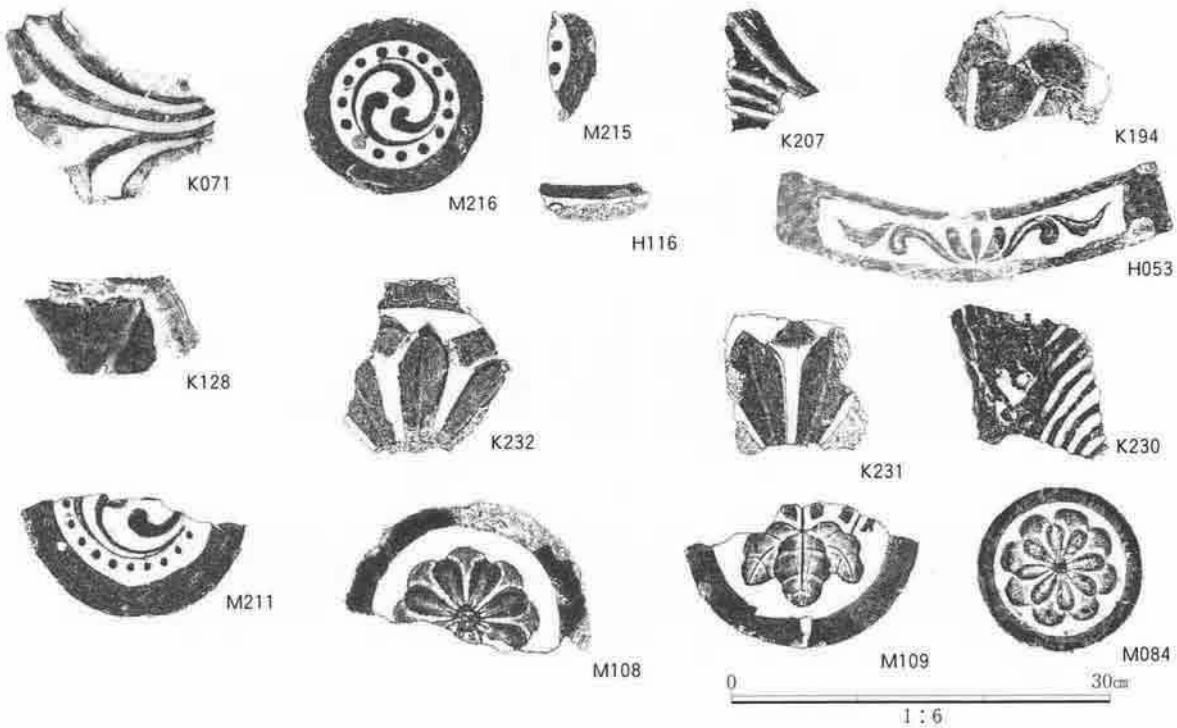


図330　Ｃ・Ｄ地区出土金箔瓦

K071・128、M211がＣ地区出土で、そのほかはＤ地区出土

いが、後期の層から巴文軒丸瓦M216が、後期の土壙から軒丸瓦M215と軒平瓦H116が出土した。また、徳川初期の土壙からも鯱瓦K207が出土した(第Ⅲ章第９節)。さらに東の第26地点では、豊臣後期のSK201から大型の菊文飾り瓦と思われるK194が出土した。この下層では礎石列が検出されている(第Ⅲ章第７節)。内淡路町と松屋町筋の交差点南西に位置する第28地点では、北で西に曲がる豊臣期の堀を検出し、その埋土から焼土とともに方形板状飾り瓦１点が出土している。他には金箔を押してない桐文鬼瓦が共伴している[黒田1999a]。

釣鐘町１丁目に所在する第21地点では、地山上の徳川期の整地層から鯱瓦K230や大型の円形板状菊文飾り瓦K232と方形板状菊文飾り瓦K231が各１点出土している。豊臣期の建物はこの調査では検出していない(第Ⅲ章第１節)。

内平野町１丁目に所在する第22地点では、地山上の堆積層中から１点の軒平瓦H053が出土した。地山上のピットから建物の復元はできない(第Ⅲ章第２節)。出土した軒平瓦は南西に約400m離れた第32地点出土瓦H047と接合した(第Ⅳ章第３節)。

船越町１丁目に所在する第23地点では、豊臣前期の掘立柱建物を検出した。その後三ノ丸造成に伴う大規模な整地を行った地域であり、その整地層に当る第3a層の下部から菊文M108と桐文M109の軒丸瓦が各１点出土している(第Ⅲ章第３節)。

内淡路町１丁目に所在する第24地点では、谷を埋めた前期の層から巴文軒丸瓦が出土した[大阪市

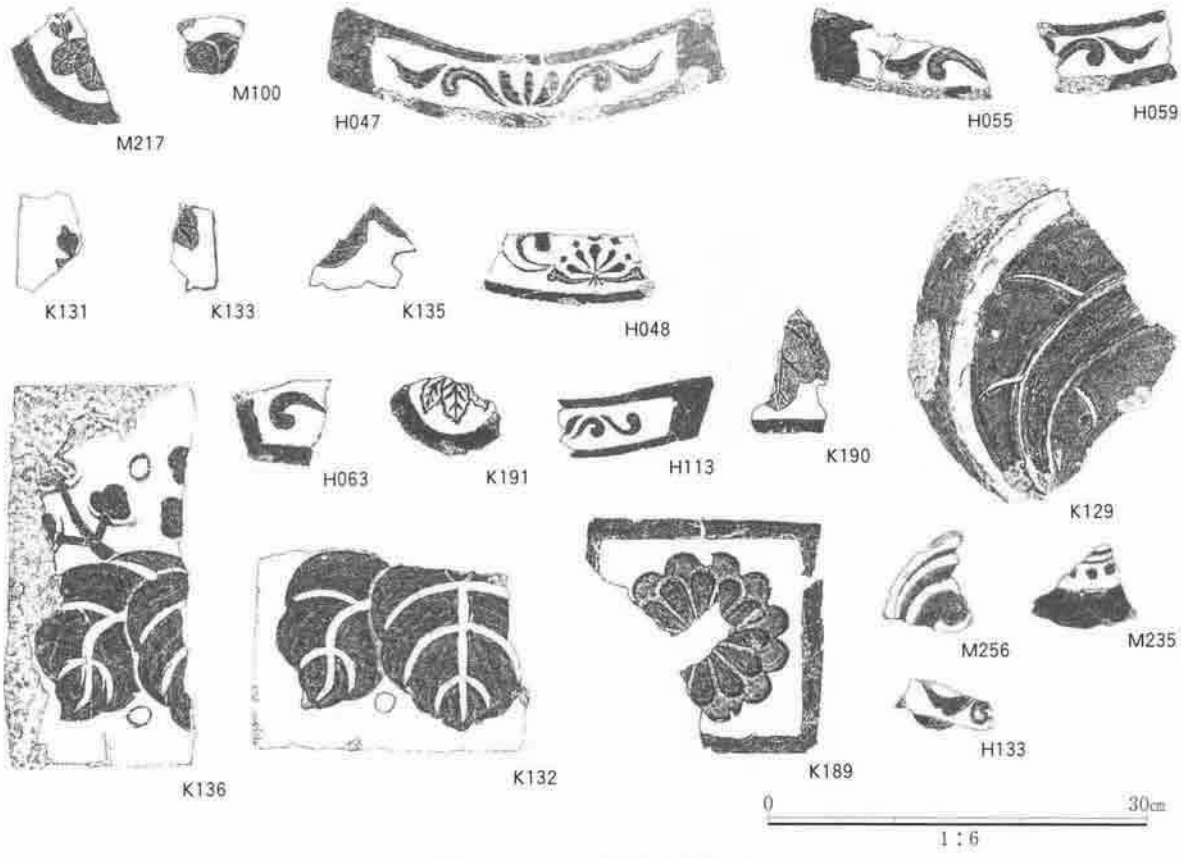


図331　E・F地区出土金箔瓦

M256・235、H133がF地区出土で、そのほかはE地区出土

文化財協会1999d、pp.170－178]。釣鐘町２丁目に所在する第25地点では、三ノ丸造成に伴う整地層の下で検出した井戸SE201から菊文軒丸瓦M084が出土した。調査面積は狭く、建物跡は検出していない(第Ⅲ章第６節)。

ｖ)Ｅ地区の金箔瓦(図331)

本町通の北側の第31・32地点では谷町筋から西に続く南面する石垣を検出した。第31地点では前期の礎石や竈を検出し、その上を三ノ丸築造時の盛土が覆い、その盛土中から桐文軒丸瓦M217が出土した(第Ⅳ章第３節)。第32地点では菊文軒丸瓦M100を含む２点の軒丸瓦と、同文の軒平瓦H047・055・059の３点をはじめ、中心飾りが菊花文の唐草文軒平瓦H048と、飾り瓦の大型方形板状桐文瓦K136・K132や大型の飾り瓦K129、桐文方形板状飾り瓦K131・133と文様不明の板状飾り瓦K135などの９点が前期の層や遺構から出土した(第Ⅳ章第３節)。軒平瓦のH047は北東の約400ｍの地点に位置する第22地点の、豊臣期と思われる地層から出土した破片(H053)と接合した。

谷町筋と大手通の交差点南西側の第29地点は地山が高く、豊臣期の区画の柵が検出された(第Ⅳ章第１節)。唐津焼を含まない土壙から軒丸瓦と破片で分類できない滴水瓦H063が出土し、鳥衾が表面採集で見つかった。第30地点では桐文飾り瓦K191が前期のピットから、また、軒平瓦H113、中型の菊文K189と桐文K190の方形板状飾り瓦なども出土した(第Ⅳ章第２節)。図324では示していないが、第30地点の約50ｍ北の地点に位置するOS86－35次調査でも軒平瓦の破片が出土しているが、建物との関係は不明である(第Ⅳ章第２節)。

ⅵ)Ｆ地区の金箔瓦(図331)

第33地点は安堂寺町２丁目に所在する[辻2002b]。巴文軒丸瓦M256・235を含め５点と軒平瓦H133が豊臣前期の土壙や層から出土した。この調査では溝や柵・柱穴などを検出している。周辺での調査例は少なく、この地区内では他に金箔瓦の出土例はない。

ⅶ)Ｇ地区の金箔瓦(図332・333)

法円坂１丁目の難波宮史跡公園内と周辺の調査では、多くの金箔瓦が出土した。この地域の調査の多くは1980年以前であり、詳細な編年が完成していなかった段階であったのに加えて、徳川期の土取りや近代の建物に破壊され、時期不明のものが多い。

難波宮史跡公園内での調査[大阪市文化財協会1995bなど]や、阪神高速道路建設に伴う調査[大阪市文化財協会1981b]では、巴文軒丸瓦M001・004・114・008に加え、桐文M003・005・011・006や菊文M044の軒丸瓦が出土している。軒平瓦はH001・004・120以外に滴水瓦Ａ－２類のH006・002(図327・332)が３点、Ｃ類が１点(H005)、分類不明１点(H003)の５点がある。

棟飾り瓦では円形板状菊文飾り瓦K049・小型方形板状桐文K005・小型方形板状木瓜紋K003と大型板状菊文飾り瓦K011などがある。菊文の中心部分の破片K051や、鬼瓦K233・鯱瓦K199も見つかっている。中央に釘穴のある垂木先瓦K050も１点出土している。公園より東側では夏ノ陣で焼亡した建物跡を検出し、その近くの第38地点の瓦敷から方形板状巴文飾り瓦K010が出土した。その周辺の盛土から巴文軒丸瓦M014・菊文軒丸瓦M010・菊文飾り瓦K009が出土した。攪乱からＡ－２類の滴水瓦H008が出土した。

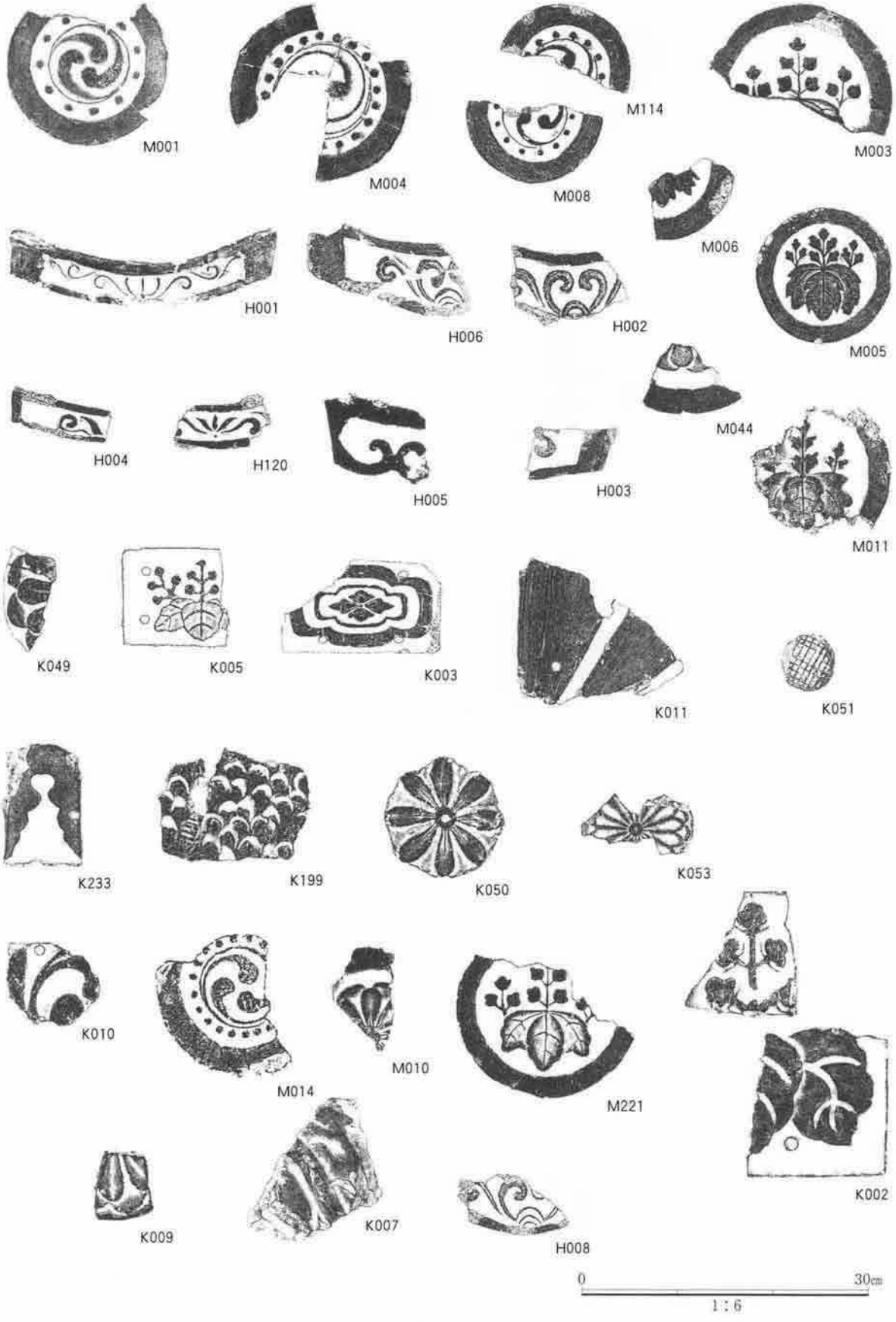


図332　G地区出土金箔瓦(1)

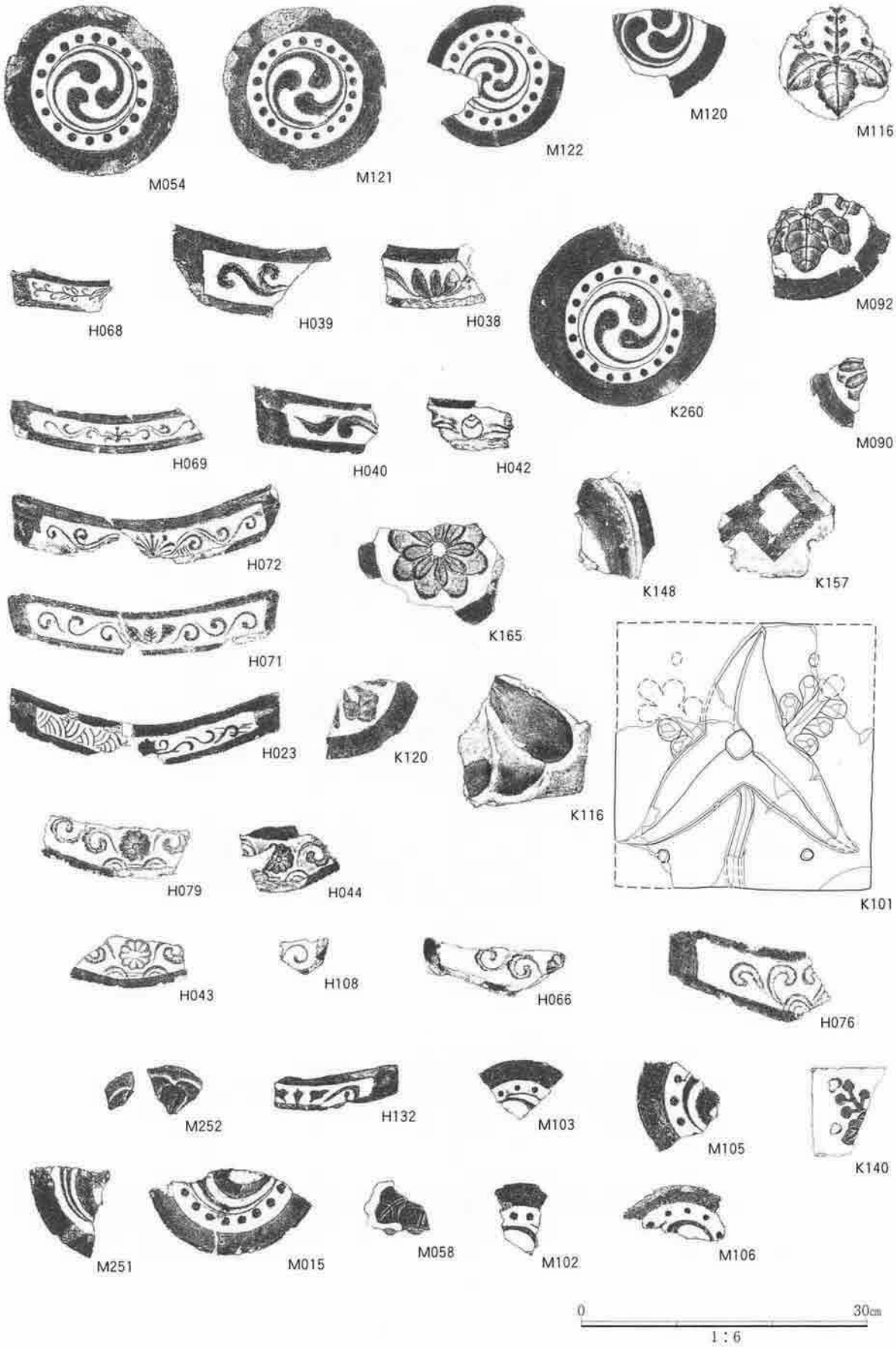


図333　G地区出土金箔瓦(2)

公園東方の第42地点で豊臣後期の層から菊丸瓦K053が１点出土している。さらに東の森ノ宮中央１丁目の第43地点で厚さ5.2㎝もある桐文鬼瓦K007の破片が出土しているが、出土した層の時期は不明である[大阪市文化財協会1981a]。

公園南側の東西通である内久宝寺通(上堺町通)に面した上町１丁目所在の第44地点では、復元すると一辺30㎝以上になる大型方形板状桐文瓦K002と軒丸瓦１点が近世初頭の土壙から出土した[大阪市教育委員会1969]。敷地内では建物の跡は不明である。その西側約100mの第45地点で柱穴がまとまって検出され、表土層から軒平瓦が１点出土している。

上町１丁目では南方の第46地点から豊臣期の落込みの中から桐文軒丸瓦M221が、さらに南の第47地点では徳川期の層から熨斗瓦が見つかっている。

第48地点は長堀通に面し、北東へ低くなっていく地形にある。それを埋め立てている徳川初期の層から熨斗瓦が３点出土した[大阪市教育委員会1981]。

大手前４丁目の上町筋に面した第34地点はすでに報告済で、その結果、敷地が東側の南北に長い敷地Ａと、西側は北の敷地Ｂ、南の敷地Ｃの三つの屋敷地に当ると推定された[大阪市文化財協会1992b](註６)。調査で出土した金箔瓦の多くは豊臣前期の瓦溜から出土している。

M054・090・092・116・120～122などの軒丸瓦は120点出土しており、その内の桐文M092・116と菊文M090は敷地Ａからである。

軒平瓦は66点出土し、敷地ＡではH038～040・042を含む23点が出土し、大型のものが多い。敷地ＢではH023・068・069・071・072を含む43点が出土し、敷地Ｃでは１点も出土していない(註７)。滴水瓦はＡ類と分類不可能なH108が認められる。Ａ－１類であるH079・043・066・044は敷地Ａのみで出土している。Ａ－２類のH076も敷地Ａから１点出土した。分類不明のものは敷地Ｂからの出土である。

飾り瓦は90点出土し、敷地Ａから54点、敷地Ｂは33点、敷地Ｃは２点である。使われている家紋では沢瀉紋が敷地Ａで数点出土した。小型の板状違い釘抜き紋飾り瓦K157は敷地Ｂから出土している。大型の鳥衾K260は敷地Ｂからである。獅子口瓦には剣花菱紋K120や菊文K165があり、敷地Ａから出土している。敷地Ａは沢瀉紋の大型方形板状飾り瓦K101をはじめ、獅子口や鯱・鬼などの大型の飾り瓦K116ほか数多く出土している。敷地Ｃでは数が少ないが、東端で大型の円形板状巴文飾り瓦がK148が出土している。

その南の第35地点は現在の国立大阪病院敷地に当り、近世近代に攪乱されて豊臣期の建物跡は残存していないが、敷地内各所で金箔瓦が出土している[大阪市文化財協会1984]。NW99－23次[大阪市文化財協会2000]などの調査で豊臣後期の井戸や土壙などから鯱瓦や熨斗・円形菊文軒丸瓦M252・鬼瓦・軒平瓦H132が出土し(図333)、約50m離れたNW122次とNW93－4次調査出土の鯱瓦が接合できたが[清水和1993]、これらは徳川期の地層・遺構に伴っている。後世の層や遺構からは巴文M251・M015・菊文・桐文軒丸瓦M058と軒平瓦が出土している。

第35地点の南側の東西道路を隔てた内久宝寺２丁目の第49地点では、豊臣前期の南北方向の溝が検出され[清水ひかる1990]、その中から巴文軒丸瓦が２点(M103・105)出土した。豊臣期の層や土

壙からも軒丸瓦の巴文M102・106など５点・文様不明１点・軒平瓦片３点と、小型の方形板状桐文飾り瓦K140が出土している。さらに南の第50地点では徳川期の地層から軒平瓦の破片が出土した。

viii)Ｈ地区の金箔瓦(図334、[大阪市文化財協会2002b]の第Ⅳ章)

この地区は上町台地の東側傾斜地から東に低くなっているところに位置している。森ノ宮中央２丁目の第52地点[難波宮址顕彰会1978]で、桐文M023と巴文M020・021をはじめとする８点の軒丸瓦と、滴水瓦Ａ－２類のH011を含む軒平瓦H009～012の４点、飾り瓦は中型板状方形菊文K015・K022・中型方形板状桐文K021・026と円形板状菊文K014・方形板状K016・鯱瓦など13点が、おもに豊臣後期の層から出土している。建物の有無は不明である。隣地の第53地点[大阪市文化財協会1996b]では軒丸瓦M227が豊臣前期の整地層から出土した。

第52地点より標高の高い第51地点で豊臣前期の三ノ丸造成時と思われる厚い盛土があり、その中から軒平瓦１点のほか、飾り瓦と雁振と思える破片が出土した[大阪市文化財協会1999e]。第52地点の南東で、さらに標高が低い第55地点では、豊臣前期の落込みSX202から巴文軒丸瓦M220と亀形の留蓋瓦K211が１点出土した[大阪市文化財協会2002b]。また、豊臣後期のSD202からも巴文軒丸瓦M219が出土した。この調査地内の北部には柱穴や土壙群があり、屋敷地の一部と考えられる。

玉造２丁目の第54地点では徳川期の層から軒丸瓦の破片が１点出土している。

ix)城下町の金箔瓦(図335)

船場地区(Ⅰ地区)では、道修町の通に面し、堺筋との交差点近くの道修町１丁目の第58～60地点で金箔瓦が出土している。第58地点では大型の方形板状菊文飾り瓦K262が、大坂冬ノ陣の焼土の下面から出土した[森1999]。堺筋に面した第60地点では、徳川期の層から軒丸瓦M218や鬼瓦が見つかっ

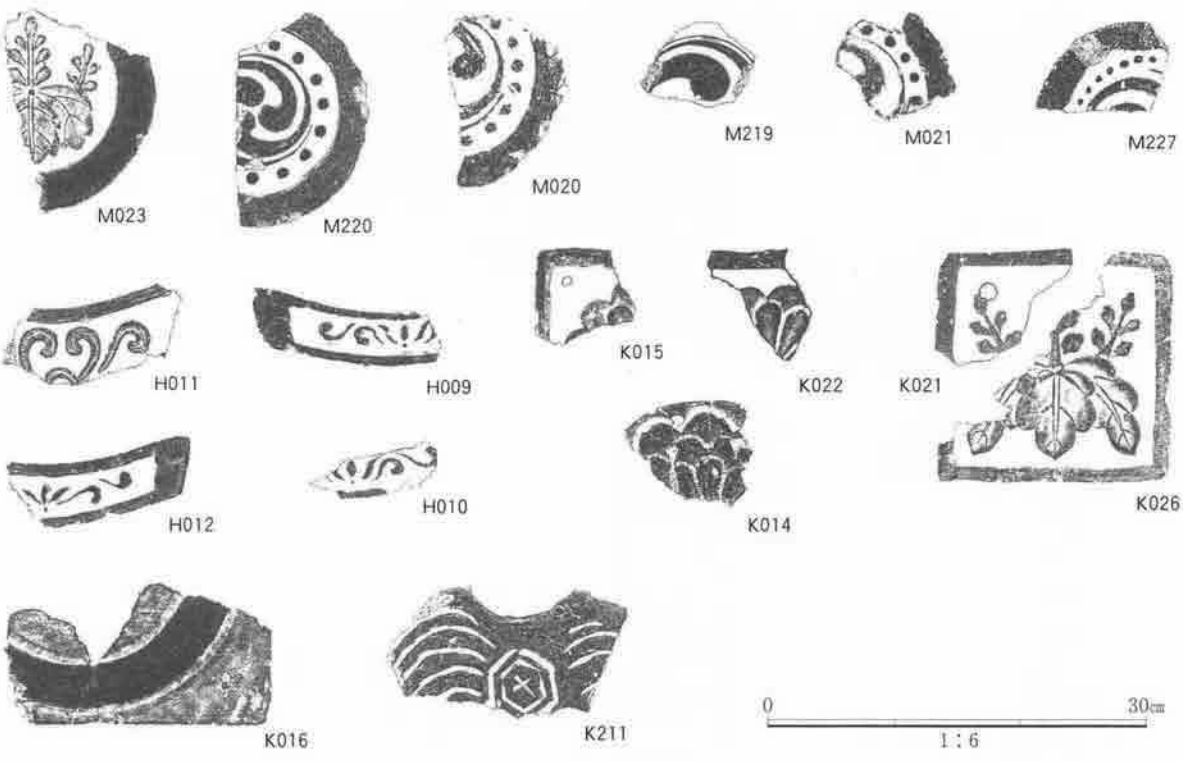


図334　Ｈ地区出土金箔瓦

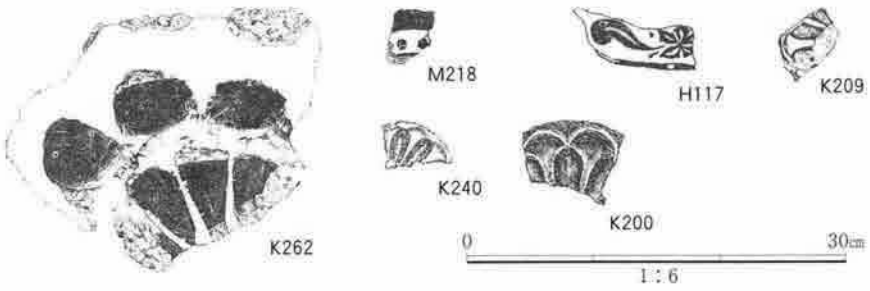


図335　城下町出土金箔瓦

ている。第59地点では豊臣後期の南北に並んだ建物跡を検出し、金箔瓦は円形菊文板状飾り瓦K200が出土した[大阪市文化財協会1994]。道修町に面してさらに東側の第57地点でも、徳川期の遺構から軒平瓦が１点出土した。

船場地域でほかに豊臣後期の遺構から金箔瓦が出土したのは２個所である。瓦町２丁目の第61地点では飾り瓦が、北浜１丁目の第56地点では軒丸瓦が出土した[豆谷浩之1999]。両調査地点とも周辺で豊臣期の建物を検出しているが、関連は明らかでない。他に徳川期以降の層から金箔瓦が出土したのは第62[黒田1999b]・63地点[清水和・平田洋司2001]であるが、豊臣期の建物との関係は明らかではない。

天満地区では第65地点で徳川初期の層から軒丸瓦が出土し[大阪市文化財協会1999f]、第64地点の豊臣後期の層や土壙からは、煽り大面や菊丸瓦K209・鬼瓦など、徳川期の層からは軒平瓦H117が出土した[大阪市文化財協会1995ａ]。

４）まとめ　－分布状況から見た金箔瓦－

まず、出土した金箔瓦の出土地点について、豊臣前期、豊臣後期、徳川期以降の順に見てみよう。なお、最初にもふれたように、三ノ丸造成に伴う整地層については、本書の時期区分の基準では豊臣後期に含まれるが、この整地層は前期の地層を動かしたものであり、遺物組成では豊臣前期であることから、三ノ丸整地層出土の瓦については豊臣前期に含めている（註８）。

まず、豊臣前期に位置づけられる金箔瓦は、図336上のような地点で出土している。この中で第34地点からは軒丸瓦70点以上、軒平瓦40以上、飾り瓦40点以上が瓦溜などから出土しており、この地点での建物に伴っていた可能性が高い[大阪市文化財協会1992]。次いで多いのが第９地点で、飾り瓦16点、軒丸瓦１点が出土しているが、いずれも細片で三ノ丸造成に伴うと思われる整地層から出土していることから、別のところから移動した可能性がある。そのほかの地点で出土した金箔瓦についても移動した可能性が高いが、この中には桐文と菊文が同じような大きさのセットで出土することがしばしばあり、高所の特定の場所から運ばれた土がそのままとまって同一地点の整地に使われたのであろう。

豊臣後期では図336下のような地点で出土している。第４地点で出土したものについては点数は少ないが、本丸内に位置することから、本来建物に伴っていたのであろう。第７地点は三ノ丸の北辺の石垣に当り、石垣上に金箔瓦を使用した建物が存在したことが考えられる。このほか、第10・15地点でも大量に出土している。第10地点で出土した金箔瓦は前述のとおり、その地の建物に伴っていた可能性が高い。一方、第15地点は出土している瓦が第34地点のものと共通するものが多く、整地層

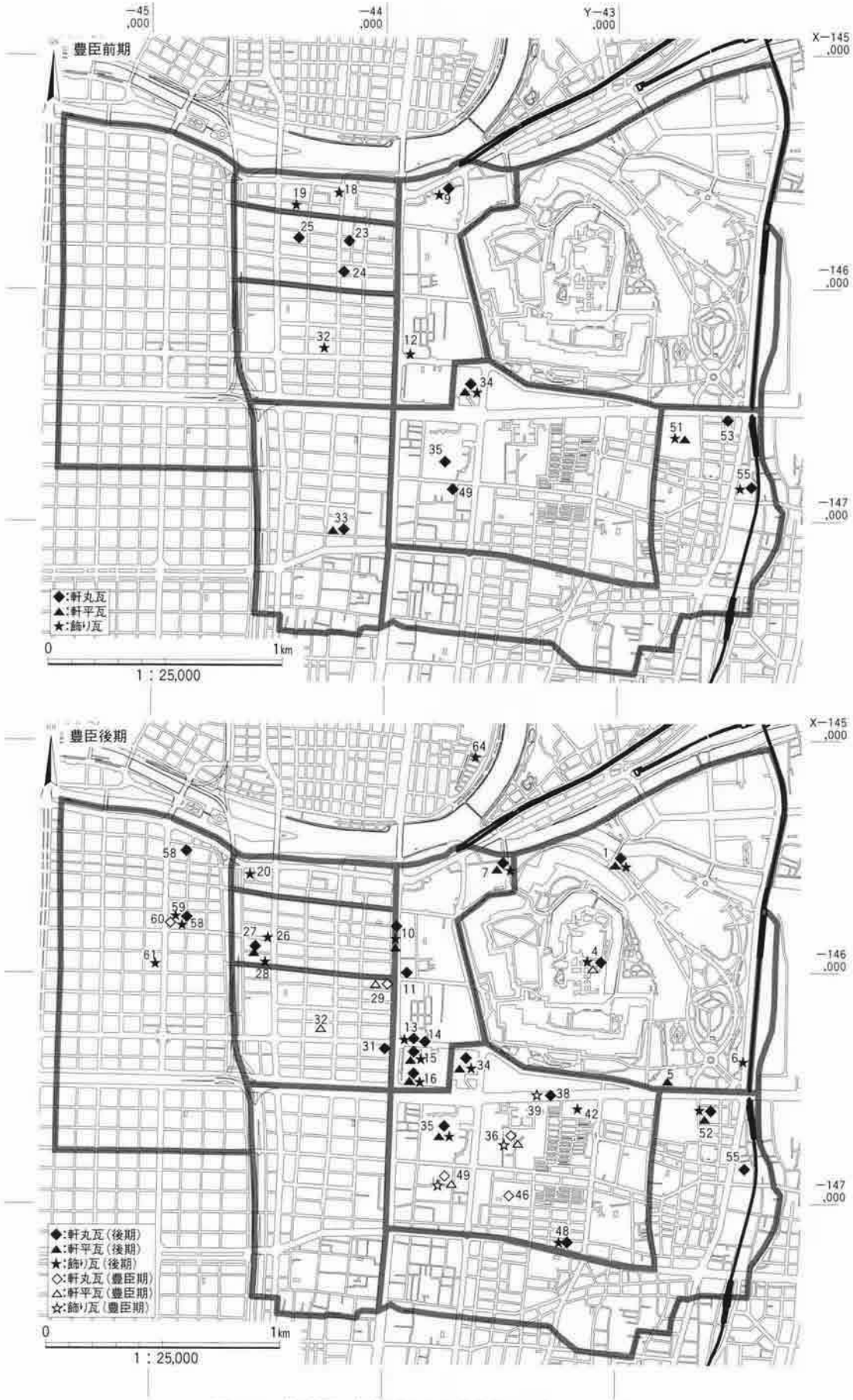


図336　豊臣期の金箔瓦出土地点(番号は表13に倣う)

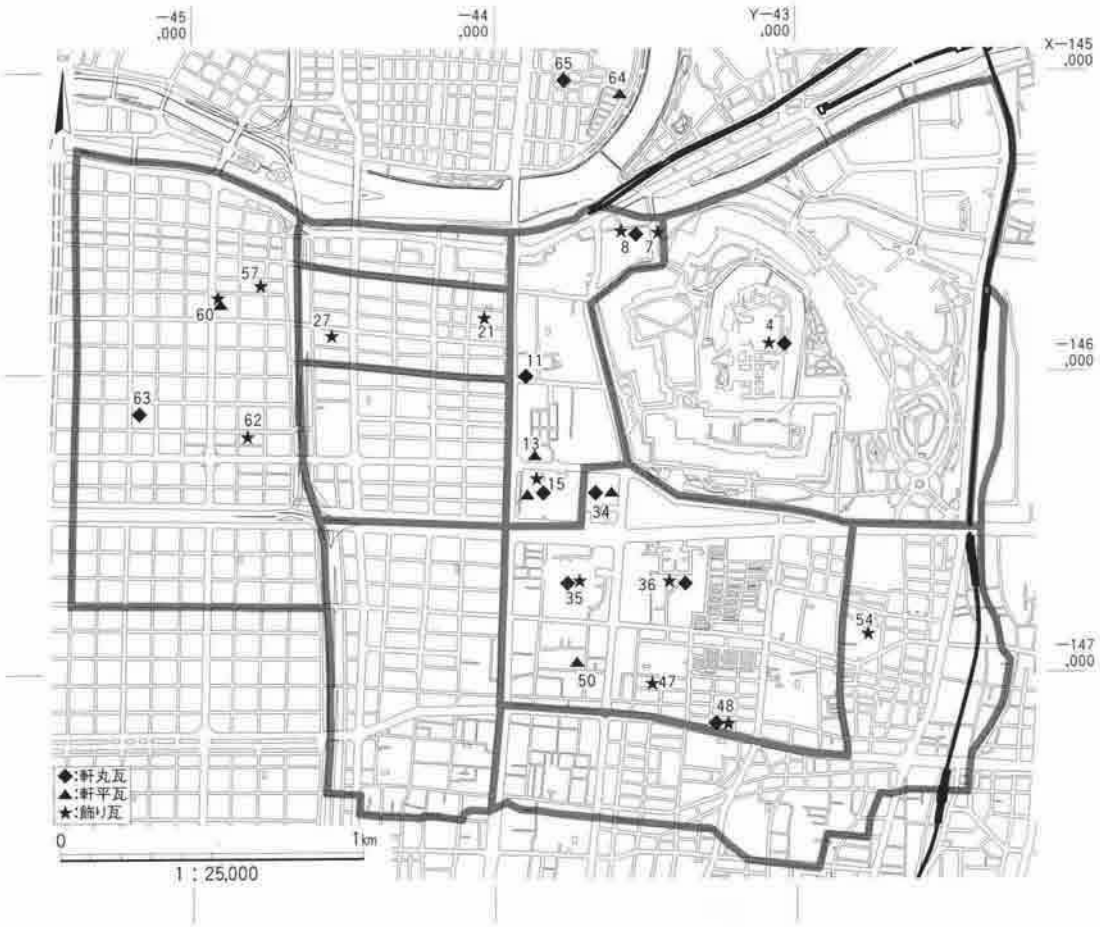


図337　徳川期以後の金箔瓦出土地点(番号は表13に倣う)

から多く出土していることから、第34地点から移動したのであろう。

また、上記の調査地以外では出土地点の範囲は大坂城下町跡や天満にまで及ぶが、１地点当り数点の出土である。これは調査面積が小さかったことも考慮しなければならないが、細片が多く、瓦溜からは出土していないことから、その地で建物に伴っていたとは考えにくい。

徳川期出土のものは豊臣後期と同様の分布状況を示している(図337)。豊臣期では数点しか確認できなかった第35・36地点で多く出土しているのは、本来豊臣期に伴っていたものが、遊離したものと思われる。ただし、当地で豊臣期の建物が存在し、それに伴っていた可能性が高い。

出土状況から豊臣前期と後期にわたって指摘できるのは、建物に伴っていたと考えられるものは本丸・三ノ丸内に限られるということである。特に、第10地点では、豊臣後期の三ノ丸西端の南北塀と柵を検出し、その東側の屋敷で使ったと思われる金箔瓦が多数出土した。第34地点では特に前期に多量の金箔瓦が出土しており、金箔瓦を用いた屋敷が存在した可能性がきわめて高い。一方、Ｂ地区北端の第７・８地点でも、石垣の南側に金箔を葺いた建物が考えられる。惣構内に該当するＣ～Ｈ区の標高の低い地点出土のものについては、破片で少数の出土であったり、三ノ丸造成に伴うと思われる整地層に含まれている場合が多い。このことから、これらの金箔瓦はＢ区の南部やＧ地区の北部といった標高の高いところから土ごと移動されたのであろう。

続いて、桐文・菊文が施された金箔瓦の出土地点を見てみよう(図338)。桐文・菊文は豊臣家から

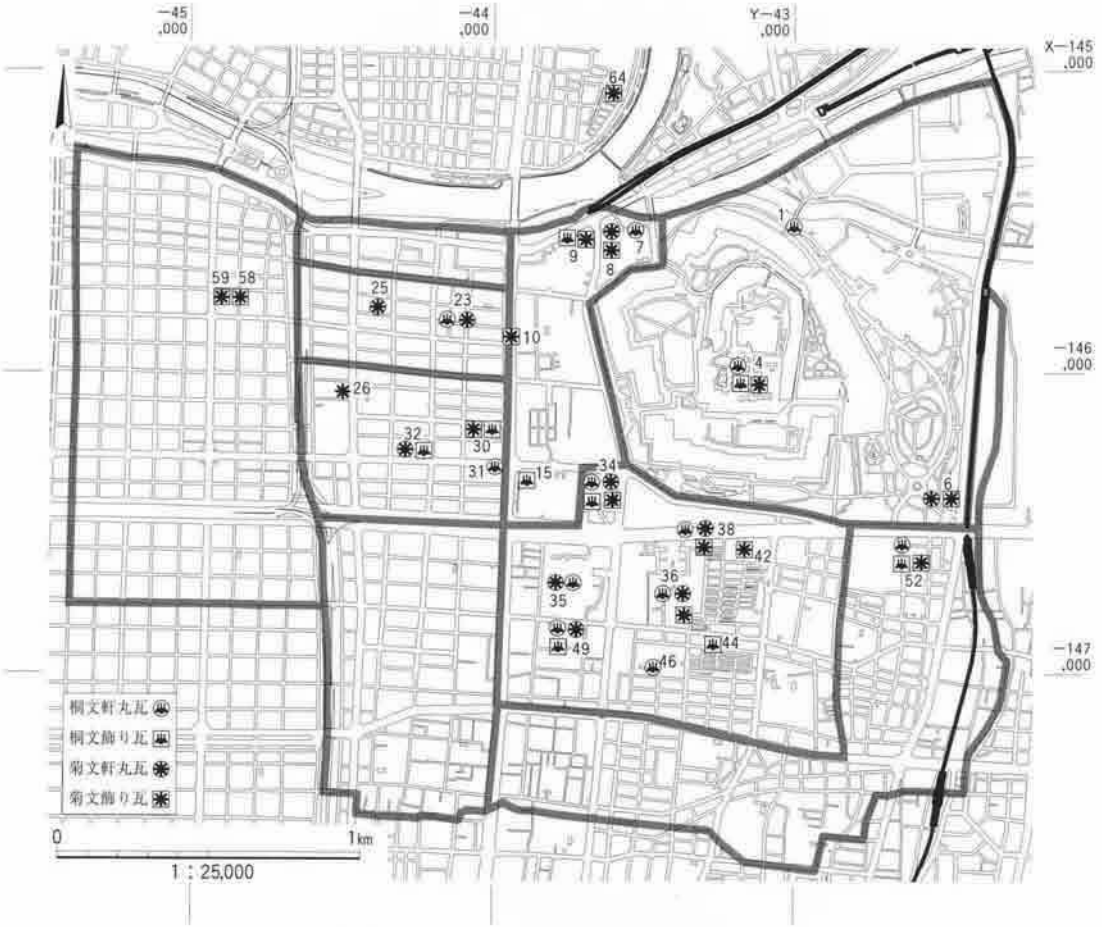


図338　桐文・菊文の金箔瓦出土地点(番号は表13に倣う)

下賜されて初めて使用することができるものであり、有力大名などさらに限定された階層の屋敷に用いられたと考えられる。

豊臣前期で本来存在した地点で出土したと考えられるのは第34地点のみである。ここでは軒丸瓦に桐文・菊文が使われ、獅子口瓦や板状飾り瓦にも菊文が使われていた。これだけまとまって桐文・菊文をふんだんに使う屋敷は他にはない有力大名の屋敷であろう。豊臣後期では本丸の第４地点で桐文の軒丸瓦や桐文飾り瓦が出土しているが、これは周辺の御殿に使われていたものと思われる。ここでは調査面積が小さく、前期については明らかでないものの、当然前期までさかのぼって御殿が配されていたのは間違いない。また、第35・36地点は豊臣後期と徳川期の出土であるが、出土数が多く、桐文や菊文の出土がある。豊臣期の遺構の残りは悪いが、本来は豊臣期の大名の屋敷地が存在したのであろう。

以上、大坂城跡とその周辺における金箔瓦とその出土地点の検討を行った。高価な金箔を使うということで、限られた階層(豊臣家や大名)の屋敷に用いられていたものと考えられる。現状で見るかぎり、本丸に加え、Ｂ地区の第７地点やＧ地区の北半に金箔瓦を葺く建物が存在したと考えられ、それはつまり豊臣後期の大坂城三ノ丸が存在した地点に当る。これは豊臣前期の段階から上記の地区に武家屋敷が存在し、三ノ丸完成後もそれがほぼ継承されることを反映している。本章第１節でふれたように、惣構内には町屋が広がっていたと考えられ、三ノ丸造成はまさに三ノ丸と惣構を分離し、大坂

城内での身分による居住者の区分という社会的空間構造を成立させたのである。

（宮本佐知子・寺井：註９）

註）

（１）飾り瓦については細片で出土する場合が多く、さらに同一遺構から破片がまとまって出土する場合もある。ここで挙げた数字は確実に同一個体と認定できたもの以外は別個体として扱っている。しかし、同一個体と認定できなかったものについても、同一個体である可能性も残され、その場合、ここで挙げている数よりも少なくなる。

（２）この瓦の呼び名は、難波宮の調査と金箔瓦の調査研究を続けられた故中川信作氏の命名によるものである。しかし、名前が特に明らかではないので、このような方形の透し文様の瓦の呼称として使うことにする。

（３）この表では調査地が密集している地区を一つにまとめている。北側調査地(15)や南側調査地(16)はそれぞれ『大坂城跡』Ⅵの第Ⅲ章で用いられた地区名である[大阪市文化財協会2002b]。前者はNW81－29・82－24・OS87－123次調査地を指し、いずれの調査でも金箔瓦が出土している。後者はOS86－49・87－112・88－88次調査地を指し、OS87－112次調査地で出土している。旧中央体育館跡は現在の大阪歴史博物館・ＮＨＫ大阪放送局とその南側の敷地内の調査を指し、NW84－40・87－20・88－１・89－１・91－５・97－３次調査で金箔瓦が出土している。また、国立大阪病院内、難波宮跡史跡公園内はそれぞれの敷地内の調査を指し、前者ではNW97・122・81－１・82－34・84－４・93－12・95－24・99－23次調査で、後者ではNW23・36・37・84－30・85－22・91－20・93－24・94－15・97－12・98－９・00－11次調査で金箔瓦が出土している。「阪神高速」は1975～77年度に行われた高速道路建設に伴う調査を指し、NW75･93･100･112・121次調査で金箔瓦が出土している。

（４）当協会の黒田慶一より、飾り瓦の断面を逆台形に仕上げるのは、瓦職人の間で「スリヨセ」と呼んでいるという教示を受けた。

（５）この瓦は現在大阪城天守閣所蔵(大阪城天守閣復興四十周年記念　大阪城展1971年大阪城天守閣)になっていて、合同庁舎一号館から出土したとされているが、1953年に同地を発掘調査した報告書「大阪城の研究」２(大阪城址研究会1953年)にその記述はない。

（６）[大阪市文化財協会2002b]では西側の屋敷地Ｂ・Ｃをさらに東西二つに区分できると想定している。

（７）敷地Ｃの中心部は『大坂城跡』Ⅵで報告済みであり、かつて『難波宮址の研究』第九で報告された溝に区切られたＣ区になるところから出土した金箔瓦は大型の円形板状飾り瓦だけである。

（８）豊臣期であることが確認できているものの、前期か後期かわからないものについては、豊臣後期に含め、豊臣後期のドットとは異なるものにして区別している。

（９）本稿は１）～３）まで宮本が、４）は宮本・松尾・寺井が討議の上で寺井が執筆した。

表14　金箔軒丸瓦一覧(1)

番号(図)	次　数	出土時期	ｺﾋﾞｷ	内区文様	使用漆	漆の範囲 主文	珠文	外縁	文　献
M001(332)	NW8	不明		巴+珠文	朱	●		●	大文協1988:Fig115-1
M002	NW11	不明		巴+珠文	朱	●	●	●	大文協1988:Fig115-4
M003(332)	NW23	不明	?	桐	朱	●		●	
M004(332)	NW37	不明		巴+珠文	黒?	●		●	大文協1988:Fig115-2
M005(332)	NW37	不明		桐	黒?	●		●	大文協1988:Fig115-7
M006(332)	NW37	不明		桐	不明	●		●	大文協1988:Fig115-8
欠番									
M008(332)	NW37	不明		巴+珠文	不明	●		●	大文協1988:Fig115-3
M009	NW93	不明		欠+珠文	朱	欠		●	
M010(332)	NW93	不明		菊	朱	●		●	大文協1988:Fig115-9
M011(332)	NW93	豊臣後期		桐	朱	●		●	大文協1988:Fig115-6
M012	NW100	豊臣期		巴+珠文	黒	●		●	
M013	NW112	豊臣期		巴+珠文	黒	●	●	●	
M014(332)	NW121	豊臣期		巴+珠文	不明	●		●	大文協1981b:図44-8
M015(332)	NW122	豊臣前期		巴+珠文	黒	●		●	大文協1984:図51-50
M016	MR3	豊臣後期		巴	黒	●	欠	欠	
M017	MR3	豊臣後期		巴+珠文	黒		●	●	
M018	MR3	豊臣後期		欠+珠文	黒		●	●	
M019	MR3	豊臣後期		欠	黒	欠	欠	●	
M020(334)	MR3	豊臣後期		巴+珠文	黒	●		●	顕彰会1978:fig84-5
M021(334)	MR3	豊臣後期		巴+珠文	黒	●	●	●	顕彰会1978:fig84-4
M022	MR3	豊臣後期		巴+珠文	黒	●	●	●	
M023(334)	MR3	豊臣後期		桐	黒	●		●	顕彰会1978:fig85-12
M024	OS89-19	豊臣前期		欠	黒	欠	欠	●	
M025	NW81-29	夏陣以前		巴+珠文	黒	●	●	●	
M026(329)	NW81-29	夏陣以前		巴+珠文	黒	●		●	
M027	NW81-29	夏陣以前		欠+珠文	黒			●	
M028	NW81-29	夏陣以前	A	欠	不明	欠	欠	●	
M029	NW82-24	夏陣以前		巴+珠文	黒	●		●	
M030(329)	NW82-24	夏陣以前		巴+珠文	黒	●		●	
M031(329)	NW82-24	夏陣以前		巴+珠文	黒	●		●	
M032	NW82-24	夏陣以前		欠	黒	欠	欠	●	
M033	NW82-24	夏陣以前		巴+珠文	不明	●		欠	
欠番									
M035	NW82-24	夏陣以前		欠+珠文	黒	欠		●	
M036	NW82-24	夏陣以前	?	巴+珠文	黒	●		●	
M037	NW82-24	徳川期初		巴+珠文	黒	●	●	欠	
M038	NW82-24	夏陣以前		巴+珠文	黒	欠	●	●	
M039	NW82-24	夏陣以前		欠+珠文	不明	欠	●	●	
M040	NW82-24	豊臣後期		巴+珠文	黒	●		欠	
M041	NW82-24	夏陣以前	?	欠	黒	欠	欠	●	
M042	NW82-24	夏陣以前		巴+珠文	黒	●		●	
M043	NW37	不明		巴	朱	●	欠	欠	
M044(332)	NW37	不明		菊	朱	●		●	大文協1988:fig115-10
欠番									
M046(329)	OS83-15	豊臣後期		巴+珠文	黒	●	●	●	大文協1988:fig111-1224
M047	OS83-15	豊臣後期	?	欠+珠文	欠		●	●	
M048	NW84-40	豊臣前期	A	巴+珠文	生	●		●	
M049	NW84-40	豊臣前期		巴+珠文	朱	●		●	
M050	NW84-40	豊臣前期	A	巴+珠文	朱?	●		●	大文協1982a:図96-3508
M051	NW84-40	豊臣前期		巴+珠文	朱?	●		●	
欠番									
M053	NW84-40	豊臣前期	A	巴+珠文	朱	●		●	
M054(333)	NW84-40	豊臣前期	A	巴+珠文	朱	●		●	大文協1982a:図96-3507
M055	NW84-40	豊臣前期		巴+珠文	朱	●		●	
M056(329)	OS83-15	不明		桐	黒	●		●	大文協1988:fig111-1220
M057	NW84-40	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
M058(333)	NW84-40	不明		桐	朱?	●	欠	欠	
M059	NW84-40	豊臣前期		巴+珠文	黒?	●		欠	
M060	NW84-40	豊臣前期		欠+珠文	黒				
M061	NW84-40	豊臣前期		欠+珠文	黒				
欠番									
M063	NW84-40	豊臣前期		巴+珠文	黒	●		欠	
M064	NW84-40	豊臣前期		巴+珠文	朱?	●	●	●	
M065	NW84-40	豊臣前期		巴+珠文	朱?	●			
M066	OS84-17	夏陣前		巴+珠文	黒	●	●	欠	
M067(328)	OS84-17	夏陣前		巴+珠文	朱	●		●	
M068	OS84-17	夏陣前		欠	黒	欠	欠	●	
M069	OS84-17	夏陣前		欠+珠文	黒	●		●	
M070(328)	OS84-17	夏陣前		桐	朱	●		●	
欠番									
M072	OS84-17	夏陣前		欠	朱			●	
M073	OS84-17	夏陣前		巴+珠文	黒	欠	欠	欠	
欠番									
欠番									
M076(328)	OS84-17	豊臣期		巴+珠文	朱	●		●	
欠番									
M078(328)	OS84-17	徳川期		巴+珠文	朱	●		●	
M079	OS84-17	豊臣後期	?	欠	黒	欠	欠	●	
M080(328)	OS86-32	豊臣後期		桐	不明?			●	大文協2002b:図48
M081(329)	OS83-15	豊臣後期	?	巴+珠文	黒	●			大文協1988:fig111-1232
M082	OS86-32	豊臣後期		欠	黒	欠	欠	●	
M083	NW84-30	豊臣		欠	黒	欠	欠	●	
M084(330)	OS87-33	豊臣前期		菊	黒	●		●	
M085(329)	OS87-93	不明		菊	黒	●		●	
M086	OS87-93	徳川期	?	欠	不明	欠	欠	●	
M087	NW87-20	不明		巴+珠文	朱?	●	●	●	
欠番									
M089	NW87-20	豊臣前期	B	巴+珠文	不明	●		●	
M090(333)	NW87-20	豊臣前期		菊	朱	●		●	大文協1992a:図116-3766
欠番									
M092(333)	NW87-20	豊臣前期		桐	朱	●			大文協1992a:図96-3501
M093	NW88-14	徳川期		欠	不明	欠	欠	●	
M094	OS87-112	豊臣後期	?	巴+珠文	不明	●		●	大文協2002b:図163-95
M095(329)	OS87-112	豊臣後期	A	巴+珠文	黒	●		●	大文協2002b:図163-96
M096	OS89-74	豊臣後期		巴+珠文	朱	●		欠	
M097	OS89-74	豊臣後期		欠	不明	欠	欠	●	
M098	OS88-121	豊臣後期		巴+珠文	黒	●		●	
欠番									
M100(331)	OS89-19	豊臣前期		菊	朱	●	欠	欠	
M101	NW90-7	豊臣期		巴+珠文	朱	●	●	欠	
M102(333)	NW90-7	豊臣前期		巴+珠文	黒	●		●	清水ひかる1990
M103(333)	NW90-7	豊臣前期		巴+珠文	黒	●	●	●	清水ひかる1990
M104	NW90-7	豊臣期		巴+珠文	黒	●	●	欠	
M105(333)	NW90-7	豊臣期		巴+珠文	黒?	●	●	●	
M106(333)	NW90-7	豊臣期	?	巴+珠文	黒	●	●	●	
M107	NW90-7	豊臣期		欠	黒?	欠	欠	●	
M108(330)	OS90-51	豊臣前期	?	菊	朱	●		●	
M109(330)	OS90-51	豊臣前期		桐	黒	●		●	
M110	NW85-22	不明	B	桐	朱	●		●	
M111	OS91-32	豊臣期		欠+珠文	黒?			●	
M112	OS91-32	豊臣期		欠	朱	欠	欠	●	
欠番									
M114(332)	NW91-20	不明	B	巴+珠文	不明	●	●	●	
欠番									
M116(333)	NW89-1	豊臣後期		桐	生	●	欠	欠	大文協1992a:図96-3502
M117	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	朱	●		●	大文協1992a:図96-3509
M118	NW89-1	豊臣前期	A	巴+珠文	生	●	●	●	大文協1992a:図96-3506
M119	NW89-1	豊臣前期		右巴+珠文	生	●		●	大文協1992a:図97-3513
M120(333)	NW89-1	豊臣前期		巴	生	●		●	大文協1992a:図96-3503
M121(333)	NW89-1	豊臣前期	A	巴+珠文	生	●		●	大文協1992a:図97-3511
M122(333)	NW89-1	豊臣前期	A	巴+珠文	生	●		●	大文協1992a:図96-3510
M123	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●	●	●	大文協1992a:図96-3504
M124	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●	●	欠	大文協1992a:図105-3608
M125	NW89-1	豊臣前期	A	巴+珠文	生	●		●	大文協1992a:図97-3512
M126	NW89-1	豊臣前期	A	巴+珠文	不明	●		●	大文協1992a:図96-3505
M127	NW89-1	豊臣期		欠	生?	欠	欠	●	
M128	NW89-1	豊臣期		巴+珠文	不明	●		欠	
M129	NW89-1	不明		巴+珠文	生	●		●	
M130	NW89-1	豊臣期		巴+珠文	不明	●			
M131	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	不明	●		●	
M132	NW89-1	豊臣前期		欠	生?	欠		●	
M133	NW89-1	豊臣前期		欠	生?	欠		●	
M134	NW89-1	豊臣前期		右巴+珠文	不明	●		●	

(註)文献について「顕彰会」は「難波宮址顕彰会」、「大文協」は「大阪市文化財協会」を指す(他の表についても同じ)。

表15　金箔軒丸瓦一覧(2)

番号(図)	次　数	出土時期	ｺﾋﾞｷ	内区文様	使用漆	漆の範囲			文　献
						主文	珠文	外縁	
M135	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	朱?	●		●	
M136	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	朱?	●		●	
M137	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	不明	●		●	
M138	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
M139	NW89-1	豊臣前期	A	巴+珠文	不明	●	●	●	
M140	NW89-1	豊臣前期		巴	生?	●		●	
M141	NW89-1	豊臣前期		巴	生?	●		●	
M142	NW89-1	豊臣前期		巴	生	●		●	
M143	NW89-1	豊臣前期		巴	生	●		●	
M144	NW89-1	豊臣前期		巴	朱?	●		●	
M145	NW89-1	豊臣前期		巴	生	●		●	
M146	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	朱?	●	●	●	
M147	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		欠	
M148	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		欠	
M149	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
M150	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●	●	●	
M151	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	不明	●		●	
M152	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
M153	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
M154	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生?	●	●	●	
M155	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	不明	●		●	
M156	NW89-1	豊臣前期		右巴+珠文	不明	●		欠	
M157	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
M158	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●	●	●	
M159	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	朱?	●		●	
M160	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●	●	●	
M161	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	不明	●		欠	
M162	NW89-1	豊臣前期		右巴+珠文	朱?	●		●	
M163	NW89-1	豊臣前期		右巴+珠文	朱?	●		●	
M164	NW89-1	豊臣前期		右巴+珠文	生	●	●	●	
M165	NW89-1	不明		巴+珠文	生	●	●	●	
M166	NW89-1	不明	A	巴+珠文	生	●	●	●	
M167	NW89-1	不明	?	欠+珠文	生	欠	●	●	
M168	NW89-1	不明		巴	生			●	
M169	NW89-1	不明		欠+珠文	生	欠		●	
M170	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	不明	●		●	
M171	NW89-1	豊臣前期		右巴+珠文	生	●		●	
M172	NW89-1	豊臣前期	A	欠+珠文	生		●	●	
M173	NW89-1	豊臣前期	A	巴+珠文	生	●	●	●	
M174	NW89-1	豊臣前期		欠+珠文	生			●	
M175	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		欠	
M176	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		欠	
M177	NW89-1	豊臣前期	A	巴+珠文	生?	●		●	
M178	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
M179	NW89-1	豊臣前期		欠	生	欠	欠	●	
M180	NW89-1	豊臣前期		巴	生	●		●	
M181	NW89-1	豊臣前期		欠+珠文	生	欠		●	
M182	NW89-1	豊臣前期		巴	不明	●	欠	欠	
M183	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		欠	
M184	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
M185	NW89-1	豊臣前期		欠+珠文	生	欠	●	●	
M186	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●			
M187	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		欠	
M188	NW89-1	豊臣前期	A	巴+珠文	不明	●		●	
M189	NW89-1	豊臣前期	A	欠+珠文	不明	●		●	
M190	NW89-1	豊臣前期	A	巴+珠文	不明	●		●	
M191	NW89-1	豊臣前期	?	巴+珠文	不明	●		●	
M192	NW89-1	豊臣前期		巴	不明	●	欠	欠	
M193	NW89-1	豊臣前期		巴	生	●		●	
M194	NW89-1	豊臣後期		巴+珠文	不明	●		欠	
M195	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
M196	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
欠番									
M198	NW88-1	豊臣前期		巴	不明	●		●	
M199	NW89-1	豊臣前期	?	欠+珠文	不明	欠		●	
M200	NW89-1	豊臣前期	?	欠	不明	欠	欠	●	
M201	NW89-1	豊臣前期		欠	不明	欠	欠	●	

番号(図)	次　数	出土時期	ｺﾋﾞｷ	内区文様	使用漆	漆の範囲			文　献
						主文	珠文	外縁	
M202	NW89-1	豊臣前期		欠	不明	欠	欠	●	
M203	NW89-1	不明		欠	生	欠	欠	●	
M204	NW89-1	豊臣前期	A	欠	不明	欠	欠	●	
M205	NW89-1	豊臣後期		巴	不明	●	欠	欠	
M206	NW89-1	豊臣後期		巴	不明	●	欠	欠	
M207	OS92-22	豊臣後期		欠	生?	欠	欠	●	
M208	NW171	徳川期		巴	生	●	欠	欠	
M209	NW90-7	豊臣期		巴+珠文	朱	●		●	
M210	NW93-24	不明		巴+珠文	?	●		●	
M211(330)	OS93-54	豊臣前期		巴+珠文	生	●			
M212(328)	OS92-74	豊臣後期		巴+珠文	朱	●			大文協2002b:図58-367
M213	OS92-74	豊臣後期		欠+珠文	朱か	欠			大文協2002b:図58-371
M214(328)	OS92-74	豊臣期		菊	生	●		●	大文協2002b:図58-375
M215(330)	OS93-47	豊臣後期		欠	生			●	
M216(330)	OS93-47	豊臣後期		巴+珠文	?	●	●	●	
M217(331)	OS92-22	豊臣前期		桐	生	●		●	
M218(335)	OJ92-18	豊臣期		巴+珠文	朱	●	●	●	
M219(334)	OS94-20	豊臣後期		巴	朱	●	欠	欠	
M220(334)	OS94-20	豊臣前期		巴+珠文	朱	●			
M221(332)	NW93-19	豊臣期		桐	朱	●			
M222	OS94-33	豊臣前期		欠+珠文	朱		●	●	大文協2002b:図84-113
M223(329)	OS94-33	豊臣前期		巴+珠文	朱	●	●	●	大文協2002b:図84-112
M224	OS94-33	豊臣前期		欠+珠文	朱		●		大文協2002b:図84-114
M225	OS94-33	豊臣前期		巴	朱	●	欠	欠	
M226	OS94-33	豊臣前期		欠	朱	欠	欠	●	
M227(334)	MR94-8	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	大文協1996b:図96-643
M228	OS86-34	夏降以前		欠	生	欠	欠	●	
M229	NW89-1	豊臣後期		巴+珠文	不明	●			
M230	OS88-121	徳川期初		欠	生	欠	欠	●	
M231	NW32次	不明		欠	生	欠	欠	●	
M232	NW89-1	豊臣前期	?	欠	朱	欠	欠	●	
M233	NW89-1	豊臣前期		欠	生	欠	欠	●	
M234	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
M235	OS99-59	豊臣前期		巴		●		●	辻2002b:図5-21
M236	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	朱	●		●	
M237	NW89-1	豊臣前期		巴	生	●		●	
M238	NW89-1	豊臣前期		欠	朱	●	欠	欠	
M239	OJ96-13	豊臣後期		巴+珠文	朱	●	●	●	
M240	NW89-1	豊臣前期		巴	生	●	欠	欠	
M241	OS96-52	豊臣前期		巴+珠文	生	●		●	
M242	OU97-3	豊臣後期	A	欠+珠文	不明		●	●	
M243	NW98-9	豊臣期	?	巴+珠文	不明	●			
M244	NW98-9	豊臣期	B	巴+珠文	不明	●	●	●	
M245	NW98-9	豊臣期		桐	不明	●	欠	欠	
M246	TW98-1	徳川期初		巴+珠文	生	●	●	●	
M247	NW89-1	不明		巴+珠文	不明	●	●	●	
M248	NW89-1	豊臣前期		巴+珠文	不明	●	●	●	
M249	OJ97-6	近世		欠	朱	欠	欠	●	
M250	NW99-23	徳川期		巴	朱	●	欠	欠	
M251(333)	NW99-23	徳川期		巴	不明	●	●	●	
M252(333)	NW99-23	豊臣前期		菊	朱	●			
M253	NW99-23	豊臣前期		巴+珠文	朱	●	●	欠	
M254	NW99-12	徳川期		欠	不明	欠	欠	●	
M255	NW99-12	徳川期		巴	生	●	欠	欠	
M256(331)	OS99-59	豊臣前期		巴	不明	●	欠	欠	
M257	OS99-59	豊臣期		欠	不明	欠	欠	●	
M258	OS99-59	豊臣前期?		欠	朱	欠	欠	●	
M259	OS99-59	豊臣前期?		巴+珠文	朱?	●	●	●	
M260	NW00-11	豊臣期		巴+珠文	不明	●	●	●	
M261(329)	OS97-1	豊臣後期		井桁紋	朱?	●			大文協1999a:図62-412
M262	OS97-1	豊臣後期		井桁紋	朱?	●		●	大文協1999a:図62-413
M263	OS97-1	豊臣後期		井桁紋	朱?	●		●	大文協1999a:図62-414
M264	OS97-1	豊臣後期		井桁紋	朱?	●		●	大文協1999a:図65-451
M265(329)	OS97-1	豊臣後期	B	輪宝紋	朱	●		●	大文協1999a:図82-619
M266	OS97-1	豊臣後期	?	井桁紋	朱?	●		●	
M267	OS97-1	豊臣後期		欠	朱	欠	欠	●	

表16　金箔軒平瓦一覧

番号(図)	次　数	出土時期	文様・巻数	中心飾	使用漆	漆の範囲 主文	漆の範囲 外縁	報　告　書
H001(332)	NW6	不明	唐草3	三葉一珠	黒	●	●	大文協1988:fig115-11
H002(332)	NW23	不明	唐草1	波と唐草	朱	●	●	図327
H003(332)	NW36	不明	唐草	欠	黒?	●	●	図327、大文協1988:fig115-16
H004(332)	NW37	不明	唐草1	三葉?	不明	●	●	大文協1988:fig115-15
H005(332)	NW37	不明	蕨?	欠	黒	●	●	図327、大文協1988:fig115-17
H006(332)	NW37	不明	唐草	波と唐草	朱	●	●	図327、大文協1988:fig115-19
H007	NW41	不明	唐草1	三葉	黒	●	●	大文協1988:fig115-14
H008(332)	NW75	不明	唐草1	波と唐草	不明	●	●	図327
H009(334)	MR3	豊臣期	唐草2	三葉一珠	朱	●	●	錦彩会1978:fig85-18
H010(334)	MR3	豊臣後期	唐草2	三葉一珠	朱	●	●	
H011(334)	MR3	豊臣後期	唐草1	波と唐草	黒	●	●	図327、錦彩会1978:fig85-19
H012(334)	MR3	豊臣後期	唐草2	三葉一珠	朱		●	大文協1988:fig115-12
H013(329)	NW82-24	徳川期初	唐草1	桔梗	黒	●	●	
H014	NW82-24	徳川期初	唐草2以上	欠	朱		●	
H015	NW82-24	豊臣後期	唐草3以上	欠	黒		●	
H016	NW82-24	豊臣後期	唐草3以上	欠	黒		●	
H017	NW82-24	豊臣後期	唐草3	三葉	黒		●	
H018(329)	NW82-24	豊臣後期	唐草3	葉?	黒		●	
H019(329)	NW82-24	徳川期初	唐草3以上	欠	黒		●	
H020	NW82-24	豊臣後期	欠	欠	黒	欠	●	
H021	NW82-24	豊臣後期	唐草2以上	欠	黒		●	
H022(329)	NW82-24	豊臣後期	唐草2以上	三葉一珠	黒	●	●	
H023(333)	NW84-40	豊臣前期	青海波・唐草4	宝珠	朱		●	大文協1992a:図106-3625・3632
H024	NW84-40	豊臣前期	唐草2以上	三葉一珠	朱		●	大文協1992a:図106-3634
H025	欠番							
H026	NW84-40	豊臣前期	唐草3	三葉	朱	欠	●	
H027	OS83-15	豊臣後期	欠	欠	不明	欠	●	
H028(328)	OS84-17	豊臣期	唐草2以上	葉+?	朱	●	●	大文協2002b:図18-37
H029(328)	OS84-17	豊臣期	唐草3?	欠	黒		●	
H030	OS84-17	豊臣期	欠	欠	黒	欠	●	
H031	OS84-17	豊臣期	唐草1以上	欠	?	●		
H032	OS86-32	豊臣後期	欠	欠	黒	欠	●	
H033	OS86-35	不明	欠	欠	朱	欠	●	
H034	OS86-20	徳川期以降	唐草2以上		朱		●	
H035	NW84-30	豊臣期	唐草1+葉	欠	朱	●	●	
H036	OS87-123	豊臣後期	唐草1	桔梗?	黒	●	●	
H037	OS87-123	豊臣後期	唐草1以上	三葉	朱		●	
H038(333)	NW87-20	豊臣前期	唐草1以上	三葉	不明	●	●	大文協1992a:図106-3618
H039(333)	NW87-20	豊臣前期	唐草2	欠	不明	●	●	大文協1992a:図106-3619
H040(333)	NW87-20	豊臣前期	唐草1+葉	欠	朱		●	大文協1992a:図106-3622
H041	NW87-20	徳川期	唐草1以上	欠	不明	●	●	大文協1992a:図106-3628
H042(333)	NW87-20	豊臣前期	唐草1以上	宝珠	不明	●	●	大文協1992a:図106-3624
H043(333)	NW87-20	豊臣前期	唐草1以上	菊と波	不明	●	●	図327、大文協1992a:図106-3617
H044(333)	NW87-20	豊臣前期	唐草1以上	菊と波	不明	●	●	図327、大文協1988:fig115-10
欠番								
H046(329)	OS87-112	豊臣後期	唐草1以上	欠	黒	●	●	図327、大文協2002b:図151-84
H047(331)	OS89-19	豊臣前期	唐草1	三葉	朱	●	●	
H048(331)	OS89-19	豊臣前期	唐草1以上	蕨手	黒	●	●	
H049(329)	OS89-74	豊臣後期	唐草4以上	不明	黒?	●	●	
H050(329)	OS89-74	豊臣期	唐草1以上	欠	黒?		●	
H051(329)	OS89-74	豊臣後期	唐草2以上	欠	黒	●	●	
H052(329)	OS89-74	徳川期	欠	欠	朱	●	●	図327、隅瓦
H053(330)	OS89-58	不明	唐草1+葉	三葉	朱		●	
H054(328)	OS88-25	豊臣後期	唐草2	三葉	黒?	●	●	
H055(331)	OS89-19	豊臣期	唐草1+葉	三葉	朱	●	●	
H056	欠番							
H057	欠番							
H058	欠番							
H059(331)	OS89-19	豊臣前期	唐草1+葉	欠	朱	●	●	
H060	NW90-7	豊臣期	唐草?	欠	黒	●	●	
H061	NW90-7	豊臣期	唐草?	欠	黒	●	●	
H062	NW90-7	豊臣期	唐草?	欠	黒	●	●	
H063(331)	OS91-32	豊臣期	唐草1以上	欠	黒	●	●	図327
H064	NW91-20	不明	唐草1	三葉?	朱	●	●	
H065	NW89-1	豊臣後期	唐草・4転	欠	不明	●	●	大文協1992a:図106-3630
H066(333)	NW89-1	豊臣後期	唐草2	菊と波	朱	●	●	図327、大文協1992a:図106-3616
H067	NW89-1	豊臣前期	唐草?	欠	生	●	●	大文協1992a:図106-3621
H068(333)	NW89-1	豊臣前期	唐草・?転?	蕨	不明		●	大文協1992a:図106-3626
H069(333)	NW89-1	豊臣前期	唐草3	五葉	不明		●	大文協1992a:図106-3629

番号(図)	次　数	出土時期	文様・巻数	中心飾	使用漆	漆の範囲 主文	漆の範囲 外縁	報　告　書
H070	NW89-1	豊臣前期	唐草7?	蕨	生		●	大文協1992a:図106-3627
H071(333)	NW89-1	豊臣前期	唐草3	三葉	不明		●	大文協1992a:図106-3631
H072(333)	NW89-1	豊臣前期	唐草3	蓮華と草	不明		●	大文協1992a:図106-3633
H073	欠番							
H074	NW89-1	豊臣前期	唐草2以上	欠	不明		●	大文協1992a:図106-3635
H075	NW89-1	豊臣前期	唐草3以上	三葉?	生		●	大文協1992a:図106-3636
H076(333)	NW88-1	豊臣前期	唐草1	波と唐草	不明		●	図327、大文協1992a:図106-3638
H077	NW89-1	豊臣前期	唐草	蓮華	不明		●	
H078	NW89-1	豊臣後期	唐草	欠	朱	●	●	
H079(333)	NW89-1	豊臣前期	唐草	菊花	生	●	●	図327
H080	NW89-1	豊臣前期	不明	不明	朱	欠	●	
H081	NW89-1	不明	唐草3以上	三葉?	不明		●	
H082	NW89-1	豊臣前期	唐草3以上	三葉?	朱		●	
H083	NW89-1	豊臣前期	唐草2以上	三葉?	不明		●	
H084	NW89-1	豊臣前期	唐草1以上	三葉	不明		●	
H085	NW89-1	豊臣前期	不明	不明	生		●	
H086	NW89-1	豊臣前期	唐草3	三葉?	生?		●	
H087	NW89-1	豊臣前期	唐草3	五葉	生?		●	
H088	NW89-1	豊臣前期	唐草2以上	五葉	生?		●	
H089	NW89-1	豊臣前期	唐草3以上	五葉	不明		●	
H090	NW89-1	豊臣前期	唐草3	五葉	生		●	
H091	NW89-1	豊臣前期	唐草4以上	不明	不明		●	
H092	NW89-1	豊臣前期	唐草1以上	五葉	不明		●	
H093	NW89-1	豊臣前期	唐草1以上	蓮華	不明		●	
H094	NW89-1	豊臣前期	唐草2以上	欠	不明		●	
H095	NW89-1	不明	唐草3以上	欠	不明		●	
H096	NW89-1	不明	唐草3以上	欠	生		●	
H097	NW89-1	豊臣前期	唐草1以上	欠	不明		●	
H098	NW89-1	豊臣前期	唐草3	三葉	朱?		●	
H099	NW89-1	豊臣前期	唐草1以上	欠	不明		●	
H100	NW89-1	豊臣前期	唐草2以上	欠	生?		●	
H101	NW89-1	豊臣前期	唐草2以上	欠	不明		●	
H102	NW89-1	豊臣前期	欠	欠	不明	欠	●	
H103	NW89-1	豊臣前期	唐草1以上	五葉	不明	●	●	
H104	NW89-1	豊臣前期	唐草1以上	欠	不明		●	
H105	NW89-1	豊臣前期	唐草2以上	欠	生?		●	
H106	NW89-1	豊臣前期	唐草4以上	欠	不明		●	
H107	NW89-1	不明	唐草1以上	三葉	不明		●	
H108(333)	NW89-1	不明	唐草1以上	欠	不明		●	図327
H109	NW89-1	豊臣前期	欠	欠	不明		●	
H110	NW89-1	豊臣前期	欠	欠	生?	欠	●	
H111	NW89-1	豊臣前期	唐草?	欠	生		●	
H112	NW87-20	豊臣前期	欠	欠	不明		●	
H113(331)	OS92-12	豊臣前期	唐草2	三葉	朱	●	●	
H114(328)	OS84-17	豊臣期	唐草1+葉	菊	不明	●	●	
H115	OJ92-18	徳川期	欠	欠	朱		●	
H116(330)	OS93-47	豊臣後期	唐草	欠	生	●	●	
H117(335)	TN93-3	徳川期初	唐草1以上	桔梗	朱	●	●	大文協1995:fig28-302
H118	NW89-1	豊臣前期	唐草7以上	蕨	朱		●	
H119	NW89-1	豊臣前期	欠	欠	生	欠	●	
H120(332)	NW97-12	近代	唐草1以上	一点三葉		●	●	
H121	MR98-2	豊臣前期	欠	欠	黒		●	
H122	NW97-3	豊臣期	欠	欠	朱		●	
H123	NW97-2	江戸	唐草	欠	朱	●	●	
H124	NW89-1	豊臣前期	欠	欠	生		●	
H125	NW89-1	豊臣前期	欠	欠	生		●	
H126	NW89-1	豊臣前期	欠	欠	生		●	
H127	NW89-1	豊臣前期	唐草2以上	欠	生	●	●	
H128	NW89-1	豊臣前期	欠	欠	生		●	
H129	NW89-1	豊臣期	欠	欠	生		●	
H130	NW89-1	豊臣前期	欠	欠	生?		●	
H131	NW99-23	豊臣後期	欠	欠	生?		●	
H132(333)	NW99-23	豊臣後期	唐草1	三葉	生		●	
H133(331)	OS99-59	豊臣前期	唐草1+葉	欠	生	●	●	辻2002b:図5-22
H134	NW99-23	豊臣後期?	唐草	不明	生?	●	●	
H135	NW00-11	豊臣期	唐草	不明	生?	●	●	
H136	OS97-1	豊臣後期	唐草3	欠	朱?	●	●	大文協1999a:図65-453
H137	OS97-1	豊臣後期	唐草	一点三葉	朱	●	●	

表17　金箔飾り瓦一覧(1)

番号(図)	次数	出土時期	形態	文様	使用漆	文献・備考
K001	NW17	不明	板状	大菊?	朱	
K002(332)	NW32	不明	板状方形縁無(大)	桐	黒	中川1974:fig43-26
K003(332)	NW37	不明	板状方形縁無(小)	木瓜	黒	図326，中川1974:fig43-25
K004	NW37	不明	板状方形縁無(小)	木瓜	不明	
K005(332)	NW37	不明	板状方形縁無(小)	桐	不明	図326、中川1974:fig43-24
K006	NW37	不明	板状方形縁無(小)	木瓜	不明	
K007(332)	NW77	不明	不明	桐	朱	大文協1981b:fig33
K008	NW97	不明	不明	沢瀉	朱	
K009(332)	NW100	豊臣期	板状円形縁無	菊	不明	大文協1981b:45-21
K010(332)	NW112	豊臣期	板状方形縁有	巴	黒	大文協1981b:45-20
K011(332)	NW112	豊臣期	板状	菊	朱	大文協1981b:45-22
K012	NW112	徳川期	鯱	竜面	朱・黒	大文協1984:図51-47
K013	NW81-1	徳川期	不明	無地	黒	大文協1984:図51-48
K014(334)	MR3	豊臣後期	板状円形縁無	菊	朱	顕彰会1978:fig85-13
K015(334)	MR3	不明	板状方形縁有(中)	菊	朱	
K016(334)	MR3	豊臣後期	板状方形縁無(大)	円形凸帯文	黒	顕彰会1978:fig85-15
K017	MR3	豊臣後期	板状方形縁有(中)	桐	朱	
K018	MR3	豊臣後期	方形板状	無地	朱	
K019	MR3	豊臣後期	板状方形縁有(中)	菊	朱	
K020	MR3	豊臣後期	板状方形縁有(中)	桐	朱	
K021(334)	MR3	豊臣後期	板状方形縁有(中)	桐	朱	
K022(334)	MR3	豊臣後期	板状方形縁有(中)	菊	朱	顕彰会1978:fig85-14
K023	MR3	豊臣後期	不明	桐?	黒	
K024	MR3	豊臣後期	不明	菊	朱	
K025	MR4	不明	不明	巴?	黒	
K026(334)	MR4	不明	板状方形縁有(中)	桐	朱	図325、顕彰会1978:fig84-9
K027	NW81-1	徳川期	花弁状	花弁?	朱	大文協1984:図51-49
K028(329)	NW82-24	徳川期	方形花狭間	透瓦	黒	
K029	NW82-24	豊臣期	方形花狭間	透瓦	黒	
K030	NW82-24	豊臣後期	方形花狭間	透瓦	黒	
K031(329)	NW82-24	豊臣後期	不明	桐	朱	
K032	NW82-24	豊臣後期	方形花狭間	透瓦	黒	
K033	NW82-24	豊臣後期	不明	桐	朱	
K034	NW82-24	豊臣後期	偏り大面	無地	朱	
K035	NW82-24	豊臣後期	方形花狭間	透瓦	黒	
K036	NW82-24	豊臣後期	方形花狭間	透瓦	黒	
K037	NW82-24	豊臣後期	方形花狭間	透瓦	黒	
K038	NW82-24	豊臣後期	不明	無地	朱	
K039(329)	NW82-24	豊臣後期	偏り大面	無地漆付	黒	
K040	NW82-24	豊臣後期	偏り大面	無地漆付	黒	
K041	NW82-24	豊臣後期	偏り大面	無地漆付	黒	
K042(329)	NW82-24	豊臣後期	板状方形縁無(小)	違い・釘抜き	黒	図326
K043	NW82-24	豊臣後期	偏り大面	無地	黒	
K044	NW82-24	豊臣後期	方形花狭間	透瓦	黒	
K045	NW82-24	豊臣後期	方形花狭間	透瓦	黒	
K046	NW82-24	豊臣後期	偏り大面	無地漆付	黒	
K047	NW82-24	豊臣後期?	方形花狭間	透瓦	黒	
K048	OS82-20	明治	不明	花弁	朱	
K049(332)	NW37	不明	円形板状縁無	菊	黒	
K050(332)	NW37	不明	垂木先	花(8葉)	黒	
K051(332)	NW37	不明	不明	格子状	朱	
K052	NW37	不明	なすび形	不明	黒	
K053(332)	NW80-9	1614年以前	菊丸	菊	朱	
K054	OS83-15	豊臣後期	不明	不明	黒	大文協1988:図版90-1441
K055	OS83-15	豊臣後期	鬼	無地	黒	大文協1988:図版90-1442
K056(329)	OS83-15	豊臣後期	鳥衾	巴	朱	大文協1988:fig111-1402
K057	OS83-15	一徳川期	賀斗	無地	黒	大文協1988:fig112-1431
K058	NW84-40	不明	不明	不明	生	大文協1992a:図117-3786
K059	OS83-15	豊臣後期	不明	無地	黒	
K060	NW84-40	豊臣前期	獅子口	無地	生	大文協1992a:図112-3734
K061	NW84-40	豊臣前期	方形花狭間	透瓦	黒	
K062	NW84-40	豊臣前期	不明	無地	不明	
K063	NW84-40	豊臣前期	偏り大面	無地漆付	生	大文協1992a:図117-3779
K064	NW84-40	豊臣前期	菊丸	菊	生	大文協1992a:図116-3763
K065	NW84-40	豊臣前期	板状方形縁無(大)	沢瀉	朱	大文協1992a:図114-3749
K066	NW84-40	不明	不明	無地	生	大文協1992a:図116-3770
K067	OS84-17	豊臣期	賀斗	無地	黒?	
K068	OS84-17	豊臣後期	賀斗	無地	朱	
K069(328)	OS84-17	豊臣後期	不明	桐	朱?	
K070	NW85-22	不明	不明	無地	朱	
K071(330)	OS86-22-1	豊臣後期	鯱	鯱	朱	
K072	OS86-32	豊臣後期	懸振り?	無地	朱	
K073	NW84-30	豊臣期	賀斗	無地	黒	
K074	NW89-1	豊臣前期	鳥衾	巴+珠文	生?	大文協1992a:図105-3608
K075	OS83-15	豊臣前期	不明	無地	黒?	
K076	OS87-93	徳川期初	輪違い	無地	黒	
K077	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K078	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K079	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K080	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K081	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K082	OS87-93	不明	賀斗	無地	黒	
K083	OS87-93	不明	賀斗	無地	黒	
K084	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K085	NW82-34	豊臣	不明	円凸帯?	朱	
K086	OS87-93	徳川期初	輪違い	無地	黒	
K087	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K088(329)	OS87-93	徳川期初	菊丸	菊	黒	
K089	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K090	OS87-93	徳川期初	輪違い	無地	黒	
K091(329)	OS87-93	徳川期初	輪違い	無地	黒	
K092	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K093	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K094	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K095	OS87-93	不明	輪違い	無地	黒	
K096	OS87-93	徳川期初	賀斗	無地	黒	
K097	OS87-123	不明	不明	無地	朱	
K098	NW84-40	不明	偏り大面	無地	生	大文協1992a:図117-3780
K099	NW87-20	豊臣前期	懸振	無地	生	大文協1992a:図117-3789
K100	NW87-20	不明	鬼	沢瀉	朱	大文協1992a:図111-3722
K101(333)	NW87-20	豊臣期	板状方形縁無(大)	沢瀉	朱	大文協1992a:図114-3748、図325
K102	NW87-20	豊臣期	鬼	桐	朱	大文協1992a:図111-3723
K103	NW87-20	豊臣期	板状方形縁無	沢瀉	朱	大文協1992a:Tab.16-(3)-3806
K104	NW87-20	豊臣期	板状方形縁無	沢瀉	朱	大文協1992a:Tab.16-(3)-3802
K105	NW87-20	豊臣期	板状	沢瀉	朱	大文協1992a:図114-3750
K106	NW87-20	不明	不明	沢瀉	朱	大文協1992a:図115-3755
K107	OS89-19	不明	鬼	不明	黒	
K108	NW87-20	豊臣期	板状円形縁有	沢瀉	朱	大文協1992a:Tab.16-(3)-3807
K109	NW87-20	豊臣期	板状円形縁有	沢瀉	朱	大文協1992a:図114-3751
K110	欠番					
K111	NW87-20	豊臣前期	板状	沢瀉	朱	大文協1992a:Tab.16-(3)-3803
K112	NW87-20	豊臣前期	不明	沢瀉	朱	
K113	NW87-20	不明	不明	沢瀉	朱?	
K114	NW87-20	豊臣前期	板状円形	菊	生	大文協1992a:図113-3738
K115	NW87-20	豊臣前期	板状	菊	生	大文協1992a:図113-3737
K116(333)	NW87-20	豊臣前期	板状方形	菊	朱	大文協1992a:図113-3736
K117	NW87-20	豊臣前期	板状	菊	生	大文協1992a:図113-3740
K118	NW87-20	豊臣期	獅子口	菊	朱	大文協1992a:図112-3729
K119	NW87-20	豊臣期	不明	菊	不明	
K120(333)	NW87-20	豊臣期	獅子口	剣花菱	生	大文協1992a:Tab.16-(3)-3800
K121	NW87-20	豊臣前期	方形板状	桐	生	大文協1992a:図113-3747
K122	NW87-20	豊臣前期	鬼	笹りんどう	生	大文協1992a:図111-3721
K123	NW87-20	豊臣前期	板状	不明	朱	大文協1992a:図113-3742
K124	NW87-20	豊臣前期	板状円形	沢瀉	朱	大文協1992a:図115-3752
K125	NW87-20	豊臣前期	鯱	鱗とヒゲ	生	大文協1992a:図111-3718
K126	NW87-20	豊臣前期	青海波	無地	生	大文協1992a:Tab.16-(3)-3814
K127	NW87-20	豊臣前期	円形	巴?	不明	
K128(330)	OS87-81	豊臣前期	方形板状	剣花菱	不明	
K129(331)	OS89-19	豊臣前期	桐形	桐	黒	
K130(329)	OS89-90	豊臣後期	鯱	鱗	朱	
K131(331)	OS89-19	豊臣前期	板状方形縁無	桐	黒	
K132(331)	OS89-19	豊臣前期	板状方形(大)	桐	朱?	
K133(331)	OS89-19	不明	板状方形	桐	朱?	
K134	OS89-19	豊臣前期	不明	不明	不明	

表18　金箔飾り瓦一覧(2)

番号(図)	次数	出土時期	形態	文様	使用部	文献・備考
K135	OS89-19	豊臣前期	板状方形縁無	不明	不明	
K136(331)	OS89-19	豊臣前期	板状方形縁無(大)	桐	黒	図325
K137	OS87-93	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K138	OS87-93	不明	熨斗	無地	黒	
K139(329)	OS87-112	豊臣後期	鯱	尾	黒	大文協2002b:図148-28
K140(333)	NW90-7	不明	板状方形縁無(小)	桐	黒	
K141	OS90-20	豊臣前期	鬼	無地	生	
K142	NW89-1	豊臣後期	菊丸	菊	生	大文協1992a:図116-3760
K143	NW89-1	豊臣前期	菊丸	菊	生	大文協1992a:図116-3762
K144	NW89-1	豊臣前期	菊丸	菊	生	大文協1992a:図116-3761
K145	NW89-1	豊臣前期	偏り大面	無地	朱	大文協1992a:図117-3777
K146	NW89-1	豊臣前期	偏り大面	無地	朱	大文協1992a:図117-3778
K147	NW88-1	豊臣前期	板状円形縁有	巴	生	大文協1992a:図115-3757
K148(333)	NW88-1	豊臣前期	板状円形縁有	巴	生	大文協1992a:図115-3756
K149	NW89-1	豊臣後期	板状	菊	生	大文協1992a:図113-3739
K150	NW89-1	豊臣前期	板状	桐	生	大文協1992a:図113-3746
K151	NW89-1	豊臣前期	板状	桐	生	大文協1992a:図113-3746
K152	NW89-1	豊臣前期	熨斗	無地	生	大文協1992a:Tab.16-(3)-3816
K153	NW89-1	豊臣前期	不明	不明	生	大文協1992a:図113-3743
K154	NW89-1	豊臣期	板状方形	無地	生	大文協1992a:Tab.16-(3)-3813
K155	NW89-1	徳川期	輪違い	無地	生	大文協1992a:図116-3768
K156	NW88-1	豊臣期	板状方形縁無	沢瀉	朱	大文協1992a:Tab.16-(3)-3801
K157(333)	NW89-1	徳川期	板状方形縁無(小)	違い釘抜き	生	大文協1992a:図113-3741
K158	NW89-1	徳川期	方形花狭間	透瓦	生	大文協1992a:図116-3774
K159	NW89-1	豊臣前期	板状	沢瀉	朱	大文協1992a:図115-3753
K160	NW89-1	豊臣前期	不明	不明	生	大文協1992a:Tab.16-(3)-3797
K161	NW89-1	豊臣前期	不明	不明	生	大文協1992a:Tab.16-(3)-3798
K162	NW89-1	豊臣前期	谷丸瓦か経の巻	無地	生	大文協1992a:Tab.16-(3)-3818
K163	NW89-1	豊臣前期	不明	菱?	生	大文協1992a:図111-3720
K164	NW89-1	豊臣前期	輪違い	不明	生	大文協1992a:Tab.16-(3)-3817
K165(333)	NW88-1	不明	獅子口	菊	朱	大文協1992a:図112-3728
K166	NW88-1	不明	不明	沢瀉	朱	大文協1992a:Tab.16-(3)-3804
K167	NW89-1	不明	板状	沢瀉	朱	大文協1992a:Tab.16-(3)-3808
K168	NW89-1	豊臣前期	獅子口	巴	生	大文協1992a:図112-3733
K169	NW89-1	豊臣前期	鯱	ヒゲ	生	大文協1992a:図111-3719
K170	NW89-1	豊臣前期	不明	花	生	大文協1992a:Tab.16-(3)-3799
K171	NW89-1	豊臣前期	獅子口	巴	生	大文協1992a:図112-3735
K172	NW89-1	豊臣期	輪違い	不明	生	大文協1992a:図116-3767
K173	NW87-20	豊臣前期	青海波	無地	朱	大文協1992a:図116-3775
K174	NW87-20	豊臣前期	青海波	無地	朱	大文協1992a:図116-3776
K175	NW89-1	豊臣後期	板状	不明	生	大文協1992a:図117-3787
K176	NW89-1	豊臣前期	輪違い	無地	生	大文協1992a:図116-3769
K177	NW87-20	豊臣	面戸	無地	生	大文協1992a:図117-3785
K178	NW88-1	豊臣前期	板状円形縁有	巴	不明	
K179	NW88-1	豊臣前期	板状円形縁有	巴	生	
K180	NW87-20	豊臣前期	熨斗	無地	生	
K181	NW88-1	豊臣前期	板状円形縁有	巴	不明	
K182	NW89-1	豊臣前期	不明	不明	生	
K183	NW89-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K184	NW89-1	豊臣前期	不明	無地	生	
K185	NW89-1	豊臣前期	不明	不明	不明	
K186	NW87-20	不明	不明	不明	朱	
K187	NW89-1	不明	不明	無地	朱	
K188	NW87-20	豊臣前期	不明	無地	朱	
K189(331)	OS92-12	豊臣前期	板状方形縁有(中)	菊	朱	図325
K190(331)	OS92-12	豊臣前期	板状方形縁有(中)	桐	朱	図325
K191(331)	OS92-12	豊臣前期	円形縁有	桐	生	
K192	OJ92-33	豊臣後期	不明	桐?	生	
K193	OJ92-18	徳川期	鬼	無地	不明	
K194(330)	OS92-19	豊臣後期	板状(大)	菊	朱	
K195	NW171	徳川期	熨斗	無地	生	
K196	NW171	徳川期	熨斗	無地	生	
K197	NW171	徳川期	熨斗	無地	生	
K198	NW93-24	不明	板状	不明	朱?	
K199(332)	NW93-24	徳川期	鯱	鱗他	?	
K200(335)	OJ91-11	冬ノ陣頃	板状円形縁無	菊	生	
K201	OS92-74	豊臣後期	鬼が?	不明	朱	

番号(図)	次数	出土時期	形態	文様	使用部	文献・備考
K202	OS92-74	豊臣後期	鬼	無地	生	大文協2002b:図58-386
K203	OS92-74	豊臣後期	鯱	尾	生	大文協2002b:図58-387
K204	OS92-74	豊臣後期	鬼	無地	生	大文協2002b:図58-388
K205	OS92-74	豊臣後期	棰振	無地	生	
K206(328)	OS92-74	豊臣後期	鳥衾	巴?	生	
K207(330)	OS93-47	徳川期初	鯱	尾	朱	
K208	TN93-3	豊臣後期	偏り大面	無地	朱	大文協1995a:fig28-308
K209(335)	TN93-3	豊臣後期	菊丸	重弁菊	朱	大文協1995a:fig28-307
K210	TN93-3	豊臣後期	鬼	無地	朱	大文協1995a:fig28-303
K211(334)	OS94-20	豊臣前期	留蓋	亀	生	
K212	OS94-33	豊臣前期	菊丸	菊	朱	
K213	OS94-33	豊臣前期	熨斗	無	朱?	
K214	OS94-33	豊臣前期	熨斗	無	生?	
K215	OS94-33	不明	鬼	不明	朱?	
K216	OS94-33	不明	偏り大面	無地	朱?	
K217(329)	OS94-33	豊臣前期	板状方形縁無	鳥?輩?	朱	大文協2002b:図84-121
K218	OS94-33	豊臣前期	偏り大面	無地	朱	
K219(329)	OS94-33	豊臣前期	板状	鳥?輩?	朱	大文協2002b:図84-120
K220	OS94-33	豊臣前期	鬼?	無地	朱?	
K221(329)	OS94-33	豊臣前期	板状方形縁無	桐	朱	大文協2002b:図84-119
K222	OS94-33	豊臣前期	偏り大面	無地	朱?	
K223	OS94-33	豊臣前期	偏り大面?	無地	朱?	
K224(329)	OS94-33	豊臣前期	板状方形縁無	桐	朱	大文協2002b:図84-116
K225(329)	OS94-33	豊臣前期	板状方形縁無	桐	朱	大文協2002b:図84-117
K226(329)	OS94-33	豊臣前期	板状方形縁無	桐?	朱	大文協2002b:図84-115
K227	OS94-33	豊臣前期	板状方形縁無	唐草?	朱	大文協2002b:図84-118
K228	OS94-33	豊臣前期	不明	無地	朱	
K229	OS94-33	豊臣前期	偏り大面?	無地	朱	
K230(330)	OS94-50	徳川期	鯱	鱗	生	
K231(330)	OS94-50	徳川期	板状方形縁無	菊?花?	朱?	
K232(330)	OS94-50	徳川期	板状円形縁有	菊?花?	朱?	
K233(332)	NW94-15	徳川期	鬼	無地	朱	
K234	NW95-10-11	徳川期	熨斗	無地	朱?	
K235	OS84-17	徳川期	菊丸	重弁菊	朱	
K236	OS84-17	夏陣以前?	不明	花?	?	
K237(328)	OS84-17	徳川期	鯱	鱗他	?	大文協2002b:図19-72
K238	NW94-15	徳川期	鬼	無地	朱	
K239	NW91-5	豊臣後期	板状方形縁無(大)	沢瀉	朱	
K240(335)	OJ96-11	徳川期	菊丸	重弁菊	朱	
K241	NW89-1	豊臣期	熨斗	無地	朱	
K242	NW89-1	豊臣前期	板状	花?菊?	朱	
K243	NW89-1	豊臣前期	方形花狭間	透瓦	生	
K244	NW89-1	不明	不明	不明	不明	
K245	NW82-24	豊臣後期	鳥衾	無地	黒	
K246	NW89-1	不明	板状	桐	生	
K247	NW89-1	不明	方形花狭間	透瓦	不明	
K248	NW89-1	不明	方形花狭間	透瓦	不明	
K249	NW89-1	豊臣前期	偏り大面	無地	生	
K250	NW89-1	豊臣前期	板状方形縁無	菱?	朱	
K251(328)	OS83-14	不明	鳥衾	桐	朱	
K252	OS84-17	徳川期	鳥衾	欠損	不明	
K253(328)	OS84-17	徳川期	菊丸	菊?	不明	
K254	OS84-17	不明	菊丸	菊?	朱	
K255	OS91-32	不明	鳥衾	無地	朱	
K256	NW91-20	不明	不明	無地	朱?	
K257	NW81-29	不明	鳥衾	無地	黒	
K258	NW93-24	豊臣後期	鯱	竜面	朱	中川1987、清水和1993
K259	OS84-17	豊臣期	鳥衾	巴	黒	
K260(333)	NW84-40	豊臣前期	鳥衾	巴	生	
K261	OS89-19	豊臣前期	不明	無地	不明	
K262(335)	OU97-3	豊臣後期	方形板状(大)	重弁菊	不明	森1999:図8-34、図326
K263	OS97-45	豊臣後期	方形板状	不明	不明	
K264	OS92-74	不明	不明	菊	不明	
K265	MR98-2	近世	不明	無地	黒	
K266	MR98-2	豊臣前期	不明	無地	黒	
K267	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K268	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	

表19　金箔飾り瓦一覧(3)

番号(図)	次数	出土時期	形態	文様	使用漆	文献・備考
K269	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K270	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K271	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K272	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K273	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	朱	
K274	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K275	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K276	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K277	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K278	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K279	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K280	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K281	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K282	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K283	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K284	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K285	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K286	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K287	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K288	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K289	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K290	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K291	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K292	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K293	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K294	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K295	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K296	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K297	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K298	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K299	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K300	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K301	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K302	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K303	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K304	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K305	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K306	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K307	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K308	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K309	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K310	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K311	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K312	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K313	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K314	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K315	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K316	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K317	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K318	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K319	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K320	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K321	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K322	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K323	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K324	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K325	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K326	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K327	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	大文協1999a:図63-436
K328	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K329	NW89-1	豊臣前期	熨斗	無地	生	
K330	NW89-1	豊臣前期	熨斗	無地	朱	
K331	NW99-23	豊臣後期	熨斗	無地	不明	
K332	NW99-23	豊臣後期	不明	無地	不明	
K333	NW99-23	豊臣後期	鬼	無地	不明	
K334	NW99-23	豊臣後期	円形	無地	朱	
K335	NW99-12	豊臣期	鬼瓦	無地	朱	

番号(図)	次数	出土時期	形態	文様	使用漆	文献・備考
K336(329)	OS97-1	豊臣後期	鳥衾	巴	朱?	大文協1999a:図65-454
K337(329)	OS97-1	豊臣後期	円形	菊	黒	大文協1999a:図65-455
K338(329)	OS97-1	豊臣後期	方形か	不明	朱	大文協1999a:図65-456
K339	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	橘	朱?	大文協1999a:図63-431
K340(329)	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	橘	朱?	大文協1999a:図63-428, 図326
K341	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	橘	黒	大文協1999a:図63-430
K342	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	橘	不明	大文協1999a:図63-433
K343	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	橘	不明	大文協1999a:図63-429
K344	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	橘	朱?	大文協1999a:図63-432
K345(329)	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	大文協1999a:図62-415, 図326
K346	OS97-1	不明	方形板状(小)	井桁	朱	大文協1999a:図62-416
K347	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	大文協1999a:図62-418
K348	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	大文協1999a:図62-421
K349	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	大文協1999a:図62-424
K350	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	大文協1999a:図62-427
K351	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	大文協1999a:図62-417
K352	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	大文協1999a:図62-420
K353	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	大文協1999a:図62-423
K354	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	朱	大文協1999a:図62-426
K355	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	大文協1999a:図62-419
K356	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	大文協1999a:図62-422
K357	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	大文協1999a:図62-425
K358	OS97-1	徳川期	鬼瓦	不明	朱?	大文協1999a:図86-636
K359	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	
K360	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	橘	不明	
K361	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	不明	不明	
K362	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	朱	
K363	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	
K364	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	
K365	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	
K366	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	朱	
K367	OS97-1	不明	方形板状(小)	井桁	不明	
K368	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	
K369	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	不明	欠	
K370	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	
K371	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	
K372	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	黒	
K373	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	不明	欠	
K374	OS97-1	豊臣後期	方形板状(小)	井桁	不明	
K375	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K376	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	大文協1999a:図63-434
K377	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K378	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K379	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K380	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K381	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K382	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K383	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K384	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K385	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K386	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K387	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K388	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K389	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K390	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K391	OS97-1	不明	熨斗	無地	黒	
K392	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	大文協1999a:図63-438
K393	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K394	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K395	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K396	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K397	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K398	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K399	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K400	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K401	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K402	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	

表20　金箔飾り瓦一覧(4)

番号(図)	次数	出土時期	形態	文様	使用漆	文献・備考
K403	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K404	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K405	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K406	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K407	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K408	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K409	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K410	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K411	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K412	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K413	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K414	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K415	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K416	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K417	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K418	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K419	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K420	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K421	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K422	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K423	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K424	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K425	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K426	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K427	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K428	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K429	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K430	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	大文協1999a:図63-439
K431	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K432	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K433	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K434	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K435	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K436	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K437	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K438	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K439	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K440	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K441	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K442	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K443	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K444	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K445	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K446	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K447	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K448	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	大文協1999a:図63-437
K449	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K450	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K451	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K452	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K453	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K454	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K455	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K456	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K457	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K458	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K459	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K460	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K461	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K462	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K463	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K464	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K465	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K466	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K467	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K468	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K469	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K470	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K471	OS97-1	不明	熨斗	無地	黒	
K472	OS97-2	不明	熨斗	無地	黒	
K473	OS97-3	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K474	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K475	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K476	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K477	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K478	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K479	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K480	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K481	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K482	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K483	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K484	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K485	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K486	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K487	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K488	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K489	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K490	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K491	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K492	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K493	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K494	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K495	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K496	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K497	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K498	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K499	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K500	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K501	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K502	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K503	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K504	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K505	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K506	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K507	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K508	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K509	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K510	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K511	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K512	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K513	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K514	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	大文協1999a:図63-438
K515	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K516	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K517	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K518	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K519	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K520	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K521	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K522	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K523	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K524	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K525	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K526	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K527	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒	
K528	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K529	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K530	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K531	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K532	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K533	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K534	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K535	OS97-1	不明	熨斗	無地	黒?	
K536	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	

表21　金箔飾り瓦一覧(5)

番号(図)	次数	出土時期	形態	文様	使用漆	文献・備考
K537	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K538	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K539	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K540	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K541	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K542	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K543	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K544	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K545	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K546	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K547	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K548	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K549	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K550	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K551	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K552	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K553	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K554	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K555	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K556	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K557	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K558	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K559	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K560	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K561	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K562	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K563	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K564	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K565	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K566	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K567	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K568	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K569	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K570	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K571	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K572	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K573	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K574	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K575	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K576	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K577	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K578	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K579	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K580	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K581	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K582	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K583	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K584	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K585	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K586	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K587	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K588	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K589	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K590	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K591	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K592	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K593	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K594	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K595	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K596	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K597	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K598	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K599	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K600	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K601	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K602	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K603	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	
K604	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	大文協1999a:図63-435
K605	OS97-1	豊臣後期	熨斗	無地	黒?	

引 用・参 考 文 献

伊藤純1991a、「西成郡美努郷の一隅」：大阪市文化財協会編『葦火』30号、pp.1－3

1991b、「スタンプのある土器三例」：大阪市文化財協会編『葦火』34号、p.8

1991c、「緑釉陶器の優品」：大阪市文化財協会編『葦火』35号、p.8

伊藤純・佐藤隆1991、「珍しい陶硯の一例」：大阪市文化財協会編『葦火』31号、p.8

伊藤毅1987a、「船場の成立」：『近世大坂成立史論』 生活史研究所、pp.143－165

1987b、「近世の大坂」：『近世大坂成立史論』 生活史研究所、pp.127－142

2003、「近世の都市空間」：『都市の空間史』 吉川弘文館、pp.198－274

植木久1985、「難波宮および難波京内出土の墨書土器」：大阪市文化財協会編『葦火』4号、p.8

植木久・伊藤純・大成可乃1992、「大阪・大坂城跡」：『木簡学会』第14号 木簡学会、pp.52－53

植木久・宮本佐知子1991、「角田豊太郎氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS89－68)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成元年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57－64

上田秀夫1982、「14～16世紀の青磁碗の分類」：日本貿易陶磁研究会編『貿易陶磁研究』№2、pp.55－70

内田九州男1982、「大坂三郷の成立」：『大阪の歴史』7 大阪市史編纂所、pp.38－63

1989、「豊臣秀吉の大坂建設」：佐久間貴士編『よみがえる中世』2 平凡社、pp.34－55

宇野隆夫1982、「井戸考」：『史林』第65巻第5号 史学研究会、pp.1－39

大阪市教育委員会1969、『昭和43年度第31・32・33次難波宮跡調査報告書』

1981、『昭和54年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.23－25

大阪市文化財協会1981a、「宮域東辺の調査略報」：『難波宮跡研究調査年報1975～1979.6』、p.72

1981b、『難波宮址の研究』第七、pp.126－132

1984、『難波宮址の研究』第八

1988、『大坂城跡』Ⅲ、pp.186－211

1991、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1992a、『難波宮址の研究』第九

1992b、「豊臣期の遺構と遺物」：『難波宮址の研究』第九、pp.112－234

1994、『大坂城下町跡』Ⅰ

1995a、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅰ

1995b、『難波宮址の研究』第十

1996a、『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ

1996b、『森の宮遺跡』Ⅱ、pp.127－128

1998、『住友銅吹所跡発掘調査報告』

1999a、『大坂城跡』Ⅳ

1999b、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅰ

1999c、『堂島蔵屋敷跡』

1999d、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1996年度－』

1999e、『日本生命保険相互会社による建設工事に伴う森の宮遺跡等発掘調査(MR98－2)完了報告書』

1999f、『学校法人福田学園による建設工事に伴う天満1丁目所在遺跡発掘調査(TW98－1)報告書』

1999g、「"船場"の古代史」：大阪市文化財協会編『大阪市立博物館展示コーナー大阪市の考古学』展示解説No18

2000、『国立大阪病院による建設工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW99−23)完了報告』

2002a、『大坂城跡』V

2002b、『大坂城跡』VI

大阪市立中央図書館1967、『大阪編年史』第1巻

大阪府教育委員会1986、『大坂城惣構・西町奉行所跡発掘調査概要』

1992、『萱振遺跡』 大阪府文化財調査報告書第39輯

1994、『ドーンセンター(府立女性総合センター)建設に伴う発掘調査』

大阪府文化財センター2002、『大坂城跡発掘調査報告』I

大成可乃1992、「町人と穴蔵」：大阪市文化財協会編『葦火』36号、pp.6−7

小倉徹也・宮本佐知子・田中清美2002、「大阪市内ではじめて発見!! 達磨窯」：大阪市文化財協会編『葦火』100号、pp.1−5

尾上実1983、「南河内の瓦器椀」：古代を考える会編『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』、pp.689−705

尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』、pp.315−337

小野正敏1982、「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」：『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会、pp.71−87

香川県埋蔵文化財センター1994、『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第十冊 金蔵寺下所遺跡・西碑殿遺跡

梶山彦太郎・市原実1972、「大阪平野の発達史」：『地質学論集』第7号 日本地質学会、pp.101−112

1985、『續大阪平野発達史』 古文物学研究会

柏原市教委1987、『玉手山遺跡』1983・1984年度

川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.95−164(川西1988『古墳時代政治史序説』に再録)

川村紀子1988、「ニュー東ビル建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS86−17)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和61年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.40−45

木戸雅寿1995、「信楽」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』、pp.401−411

木下尚子2000、「銭貨からみた琉球列島の交流史」：『古代文化』第52巻第3号 古代学協会、pp.57−65

木原克司1981、「第117次調査概要」：大阪市文化財協会編『難波宮跡研究調査年報』1975〜1979.6、pp.107−108

九州近世陶磁学会2000、『九州陶磁の編年』

京嶋覚1989、「(仮称)竹中ビル新築に伴う大坂城跡発掘調査(OS87−66)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和62年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.106−112

1990、「鳥居ビル建設に伴う大坂城跡発掘調査(OS88−31)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和63年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.76−82

日下雅義1991、『古代景観の復原』 中央公論社

黒崎直1976、「平城宮の井戸」：『月刊文化財』151号、pp.25−35

黒田慶一1994、「近世の砲弾作り」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財論集』、pp.331−354

1995、「豊臣時代の桐紋瓦について」：織豊城郭研究会編『織豊城郭』2号、pp.187−217

1997、「(株)ビルドによる建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS95−19)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成7年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.64−70

1999a、「OS97－45次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1997年度－』、pp.73－78
1999b、「OJ96－11次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1997年度－』、pp.79－85
2002、「OS99－48次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.77－83
黒田慶一・豆谷浩之1994、「大坂の陣で焼けた土蔵」：大阪市文化財協会編『葦火』53号、pp.1－3
古代の土器研究会編1992、『古代の土器1　都城の土器集成』
栄原永遠男1993、「日本古代銭貨の国際的位置」：『日本古代銭貨流通史の研究』　塙書房、pp.203－228
佐久間貴士1989、「天下一の城下町」：佐久間貴士編『よみがえる中世』2　平凡社、pp.110－132
櫻井久之1987、「東区島町発見の奈良三彩小壺をめぐって」：大阪市文化財協会編『葦火』10号、pp.1－4
1989、「北川氏による事務所ビル建設に伴う大坂城跡発掘調査(OS87－29)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和62年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.74－86
1999、「鞆飾板の文様」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp.289－304
2002、「中央区内平野町3丁目の埴輪」：大阪市文化財協会編『葦火』99号、p.8
櫻木晋一1993、「九州出土の皇朝十二銭」：『古文化談叢』第30集(中)、pp.639－648
佐藤隆1994、「大坂城跡」：古代の土器研究会編『都城の土器集成』Ⅲ、pp.74－75
1996、「中世後期の陶磁器・土器について」：大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ、pp.81－92
2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253－265
志賀剛1977、『式内社の研究』第3巻　雄山閣、pp.401－402
式内社研究会編1977、『式内社調査報告』第5巻　皇學館大學出版部、pp.320－325
四天王寺文化財管理室1986、『四天王寺古瓦聚成』
清水和1993、「国立大阪病院出土の金箔押し龍面鯱瓦」：大阪市文化財協会編『葦火』47号、p.8
清水和・平田洋司2001、「OJ97－6次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1998年度－』、pp.75－93
清水和明1992、「(株)三和産業建設による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS90－142)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成3年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.16－25
清水ひかる1990、「豊臣時代の板留め溝」：大阪市文化財協会編『葦火』28号、p.5
清水靖夫編1995、『明治前期・昭和前期大阪都市地図』　柏書房
新海正博2002、「古代の鉄生産遺構」：大阪府文化財センター編『大坂城跡発掘調査報告』Ⅰ　自然科学・考察編、pp.307－317
菅原正明1983、「畿内における土釜の製作と流通」：『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会、pp.725－758
鋤柄俊夫・森毅1999、「豊臣期大坂城跡における三の丸築造以前の基準資料」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp.143－182
鈴木秀典1987、「発掘された豊臣期大名屋敷」：大阪市文化財協会編『葦火』11号、pp.1－5
1989a、「武士の屋敷」：佐久間貴士編『よみがえる中世』2　平凡社、pp.105－109
1989b、「山田邸新築に伴う大坂城跡発掘調査報告」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和62年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.35－43
1989c、「大坂城内の町割と町割の方位」：佐久間貴士編『よみがえる中世』2　平凡社、pp.136－137
積山洋1993、「律令制期の製塩土器と塩の流通－摂河泉出土資料を中心に－」：『ヒストリア』第141号　大阪歴史学会、

pp.69－92
1994、「大坂出土、18・19世紀の陶磁器」：関西近世考古学研究会編『近世陶磁器の諸様相』　第６回関西近世考古学研究大会資料、pp.１－13
1995、「近世大坂出土の土師質土器編年、素描」：大阪府埋蔵文化財協会編『研究紀要』３、pp.225－272
2002、「難波京の変容－奈良末から平安前期の様相をめぐって－」：『条里制・古代都市研究』第18号　条里制・古代都市研究会、pp.117－136
瀬戸市埋蔵文化財センター1997、『研究紀要』第５輯
高橋克壽1988、「器材埴輪の編年と古墳祭祀」：『史林』第71巻第２号　史学研究会、pp.69－104
高村庄太郎1942、「古梅園の墨」：『上方』第135号、pp.115－119
田中清美1989a、「豊臣期武家屋敷出土の桔梗紋鬼瓦」：大阪市文化財協会編『葦火』18号、pp.１－３
1989b、「細見邸新築工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS87－13)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和62年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.44－52
田辺昭三1966、『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古クラブ
1981、『須恵器大成』　角川書店
辻美紀2002a、「NW99－15次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.43－61
2002b、「OS99－59次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.84－89
2002c、「OS99－72次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.95－103
寺井誠2002a、「前期難波宮成立前後の清水谷地域」：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅴ、pp.57－62
2002b、「大坂城跡出土銭の概要」：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅵ、pp.237－241
天坊幸彦1957、『上代浪華の歴史地理的研究』　大八州出版
鳥居信子・豆谷浩之1993、「大坂城跡」：『木簡研究』15、pp.53－55
中井均1995、「滴水瓦に関する一考察－なぜ城郭建築に多く葺かれたか－」：織豊城郭研究会編『織豊城郭』２号、pp.64－98
中尾芳治1995、「難波宮跡出土の「拒鵲」鴟尾について」：『難波宮の研究』　吉川弘文館、pp.265－292
中川信作1974、「難波宮跡発掘時の「金瓦」資料」：難波宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報』、pp.83－99
1987、「豊臣氏大坂城金箔瓦のこと」：大阪市文化財協会編『葦火』７号、pp.７－８
中野晴久1995、「常滑・渥美」：中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』、pp.383－400
中村博司1982、「大坂城金箔瓦の基礎的研究」：『日本城郭史研究叢書８大坂城の諸研究』、pp.181－239
難波宮址顕彰会1974、『難波宮跡研究調査年報』
1978、『森の宮遺跡第３・４次発掘調査報告書』、pp.117－123
奈良県教育委員会1955、「和同開珎発見地名表」：『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第５号
1959、『室大墓』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第18冊
奈良国立文化財研究所1974、『平城宮跡発掘調査報告Ⅵ－平城京左京一条三坊の調査－』　奈良国立文化財研究所第23冊
1986、「坂田寺跡５次調査」：『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』16、pp.68－72
南淡町教育委員会・淡神文化財協会1995、『平松遺跡』
難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の焙烙」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.373－400

仁木宏1994、「大坂石山寺内町の空間構造」：上横手雅敬監修『古代・中世の政治と文化』 思文閣出版、pp.653－684
原三正1986、「古代の渡来銭」：坂詰秀一編『出土渡来銭－中世－』 ニュー・サイエンス社、pp.6－12
平田洋司1995、「室谷(株)による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS93－20)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成5年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.30－38
1999、「豊臣氏大坂城の三ノ丸の構造」：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅳ、pp.119－132
2000、「豊臣氏大坂城の三ノ丸造成を巡って」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第3号、pp.15－30
平林悦治1938、「大阪市内発掘刳舟伴出の木製盤」：『考古学雑誌』第28巻第11号 考古学会、pp.27－30
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編1996、『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅴ
福岡市教育委員会1973、『下山門遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集
1982、『海の中道遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集
1986、『柏原遺跡群』Ⅱ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集
藤澤良祐1995、「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」：『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3輯、pp.77－256
2002、「中世の施釉陶器 古瀬戸の生産と流通」：東洋陶磁学会編『東洋陶磁史 その研究の現在』、pp.158－165
藤田実2000、「寺内町大坂(石山)とその地理的環境」：『大坂城と城下町』 渡辺武館長退職記念論集刊行会、pp.369－393
藤田幸夫1990、「川端氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS88－73)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和63年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.83－91
古市晃1999、「OJ97－7次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1997年度－』、pp.99－105
平凡社地方資料センター編1986a、「坐摩神社」：『大阪府の地名』Ⅰ 日本歴史地理大系第28巻、pp.459－460
1986b、「大江岸」：『大阪府の地名』Ⅰ 日本歴史地理大系第28巻、p.395
1986c、「渡辺津」：『大阪府の地名』Ⅰ 日本歴史地理大系第28巻、pp.393－394
松尾信裕1981、「ＭＰ－6」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第七、pp.66－71
1991a、「二個目の三彩」：大阪市文化財協会編『葦火』32号、pp.1－3
1991b、「萬所三郎氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS89－58)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成元年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.48－56
1992、「大手通にあった墨屋」：大阪市文化財協会編『葦火』37号、pp.4－5
1994a、「江戸時代大坂城下の墨屋の調査」：江戸遺跡研究会編『江戸時代の生産遺跡』 江戸遺跡研究会第7回大会発表要旨、pp.33－48
1994b、「大坂の武家屋敷」：宮崎勝美・吉田伸之編『武家屋敷－空間と社会－』 山川出版社、pp.63－91
1999、「船場地域における大坂城下町下層の遺跡」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp.399－427
2001、「中世の上町台地北辺の景観」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第4号、pp.161－172
2003、「戦国時代の大坂」：萩原三雄・小野正敏編『戦国時代の考古学』 高志書院 2003年5月刊行予定
松本啓子1993、「大坂出土のオランダ色絵壺」：大阪市文化財協会編『葦火』45号、pp.1－3
1999、「大坂城下町出土のオランダ壺の源流をもとめて」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp.339－353
2001a、「大坂城下町出土のマジョリカ陶について」：『ファエンツァ国際陶芸博物館所蔵 マジョリカ名陶展』日本経済新聞社、pp.166－172
2001b、「惣構で見つかった大坂城の石垣」：大阪市文化財協会編『葦火』92号、pp.6－7

2002、「OS00－32次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.113－134
松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2002、『船ケ谷遺跡－４次調査－』 松山市文化財調査報告書88
豆谷浩之1995、「大坂城跡出土のイギリス陶器」：大阪市文化財協会編『葦火』54号、p.7
1996、「五輪塔を転用した井戸」：大阪市文化財協会編『葦火』61号、p.5
1999、「OJ96－13次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1997年度－』、pp.86－91
南秀雄1997、「尾崎氏による建設工事に伴う発掘調査(OS95－26)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成７年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.71－81
宮本佐知子1989、「福島氏による共同住宅建替に伴う大坂城跡発掘調査(OS87－33)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和62年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.87－98
1991、「梵字瓦からみた中世の大坂」：大阪市文化財協会編『葦火』35号、pp.４－５
1994、「国内出土の権衡資料」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財論集』、pp.261－289
1999、「出土瓦から見た難波京から大坂築城まで」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第２号、pp.323－337
宮本佐知子・小倉徹也2002、「日本初!! 木製瓦笵見つかる!」：大阪市文化財協会編『葦火』101号、pp.１－３
宮本佐知子・佐藤隆1996、「四天王寺とその周辺出土の古代瓦」：大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ、pp.93－119
宮本雅明1989、「初期大坂の都市空間と都市デザイン」：大阪都市協会編『まちに住まう』、pp.117－133
向日市教育委員会1986、「長岡京跡左京第120次(7ANFZN－２地区)～二条大路、東二坊第一小路、東二坊坊間小路交差点～発掘調査概要」：『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集、pp.83－260
森毅1992、「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.40－52
1993、「江戸時代の唐物と和物」：大阪市文化財協会編『葦火』43号、pp.１－３
1999、「OU97－３次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1997年度－』、p.7
2001、「大坂出土の李朝陶磁」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第４号、pp.211－222
森口隆次1989、「大坂新刀の誕生と主要刀工」：『新修 大阪市史』第三巻 新修大阪市史編纂委員会、pp.1054－1064
森島康雄1990、「中河内の羽釜」：『中近世土器の基礎研究』Ⅵ 日本中世土器研究会、pp.55－62
1992、「畿内産瓦器椀の併行関係と碾年代」：大和古中近研究会編『大和の中世土器』Ⅱ、pp.113－127
2000、「畿内」：『畿内・七道からみた古代銭貨』 出土銭貨研究会、pp.18－20
森田克行1984、「屋瓦」：高槻市教育委員会編『摂津高槻城』、pp.129－142
八木久栄1981a、「第85次発掘調査概報」：『難波宮跡研究調査年報1975～1979.６』、pp.81－84
1981b、「第96次発掘調査概報」：『難波宮跡研究調査年報1975～1979.６』、pp.89－96
1981c、「第146次発掘調査概報」：『難波宮跡研究調査年報1975～1979.6』、pp.124－127
山本忠尚1998、『鬼瓦』 日本の美術第391号 至文堂
渡辺誠1990、「滴水瓦の製作技術について－韓国における考古学、民族学的研究Ⅳ」：『名古屋大学文学部研究論集』107 名古屋大学文学部、pp.131－148
渡辺三男1976、「銭が左右する合戦の勝敗」：渡辺三男著『日本の紋章』 毎日新聞社、pp.95－98

あ と が き

本書は、1985年から始まった大坂城跡における発掘調査の集大成である。

報告した地域は豊臣氏大坂城の西側に広がる惣構と呼ばれる地域で、大坂城築城と同時に城下町が形成された所である。

この地域には古代以来大坂城築城までの長い歴史が存在していたが、本書では豊臣初期の大坂城下町の構造復元を主たるテーマとして報告した。これまで、大坂城の南に建設された北平野町城下町や西の船場地域の城下町は、文献史学や考古学からいくつかの提案がされてきたが、この上町地域の城下町については初期に建設されたことは周知されていたものの、その実態は不明のままであった。

今回、ここに埋もれていた建物や溝などの遺構の方位から城下町の規模や構造を推定し、城下町の誕生から拡大する過程の姿を提示できた。そこに現れてきた地割は、大坂城と同時に建設された北平野町の城下町と同じ姿の城下町であった。また、大坂城跡全域から出土した金箔瓦の分析から、豊臣期の大坂における社会的空間構造も浮かび上がってきた。

報告や検討が不十分な点も多々あるが、大方の忌憚なきご批判を請いつつ、本書が古代から近世の都市研究の一助となることを願ってやまない。

（松尾信裕）

索　引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

T　TK47型式 …… 213, 228, 241
TK209型式 …… 159
TK217型式 …… 228
あ　朝顔形埴輪 …… 9, 10, 152, 177, 178
上野高取焼 …… 314
穴蔵 …… 14, 20, 30, 31, 33, 34, 36, 37, 105, 132, 142, 149, 150, 156, 175, 196, 220, 254, 258, 281, 289, 297, 298, 311, 315, 324, 347
い　鋳型 …… 101, 104
イギリス陶器 …… 175, 193
石垣 …… 52, 55, 56, 59, 147～150, 155, 156, 243, 244, 253, 254, 256～258, 261, 262, 279, 293, 294, 298, 305, 306, 318, 324, 334, 335, 338, 345, 347, 349, 354, 356
石組溝 …… 175, 189, 191, 192, 253, 256, 257, 261, 262, 305, 306, 333～335, 338
（滑石製）石鍋 …… 83, 163, 203, 325, 326
井戸 …… 8, 13, 14, 20, 24, 25, 34, 55, 57, 62, 64, 90, 92, 101, 103, 105～107, 113, 114, 117, 121, 124, 126, 128, 132, 142, 149, 150, 154, 172, 175, 180, 181, 187, 196, 200, 202～204, 206, 208, 210, 218, 220, 229, 241, 248, 258, 280, 286, 287, 294, 296, 297, 299, 301, 303, 304, 308, 316, 317, 324, 326, 347, 349, 352
移動式竈 …… 118, 120, 266
イヌ …… 24, 165, 166
犬形土製品 …… 82, 141, 152, 248
印青花 …… 314, 319
う　魚市場 …… 42, 58, 59
ウマ …… 89
馬形埴輪 …… 177
埋甕 …… 25, 49, 50, 59, 103
え　永楽通寶紋軒丸瓦 …… 15, 122
円筒埴輪 …… 9, 177, 187, 196, 270
円面硯 …… 213, 266
お　（大坂）夏ノ陣 …… 7, 17, 27, 38, 39, 51, 55, 61, 67, 69, 74, 81, 84, 85, 89, 90, 95, 98, 104, 105, 107, 132, 134, 140, 147～150, 155, 157, 159, 167, 169, 175, 176, 189, 191, 192, 198, 199, 210, 219, 223, 238, 249, 253, 254, 262, 275, 278, 319, 335, 338, 341, 345, 347, 349
（大坂）冬ノ陣 …… 345, 353, 363
（大坂）本願寺期 …… 8, 10～12, 14, 15, 17～19, 25, 36, 46, 57, 65, 66, 69, 82, 93, 94, 105, 121, 122, 137, 138, 142, 176, 180, 185, 196, 200, 201, 228, 242, 246, 270, 271, 274, 293, 318, 325, 326, 336
鬼瓦 …… 55, 59, 204, 206, 345, 347～349, 352～354, 364
折縁（ソギ）皿 …… 12, 13, 19, 33, 99, 189, 244

か 開元通寶 …… 105, 115, 116, 126～128
開析谷 …… 1～3, 15, 124, 143, 223, 228, 263, 273, 336
灰釉 …… 19, 27, 33, 62, 64, 75, 82, 99, 163, 165, 185, 206, 208, 244, 248, 292, 297, 314
灰釉陶器 …… 114, 127, 292
飾り金具 …… 78, 80
鍛冶 …… 156, 299, 319
瓦器 …… 8, 11, 61, 62, 64, 65, 82, 83, 94, 107, 122, 128, 144, 162, 163, 170, 176, 180, 181, 183, 187, 202, 212, 229, 242, 270, 274, 325
花崗岩 …… 33, 69, 210, 256, 293, 299, 305, 318
甲冑形埴輪 …… 177, 183
竈 …… 33, 36, 37, 50, 51, 85, 87, 90, 99, 101, 103, 104, 132, 192, 193, 241, 248, 252, 258, 261, 279, 280, 286, 289, 290, 349
窯道具 …… 20, 22
唐草文軒平瓦 …… 9, 11, 139, 154, 180, 183, 185, 202, 204, 229, 231, 238, 345, 349
唐津焼 …… 7, 13, 28, 34, 39, 40, 42, 58, 61, 73～75, 79, 82, 98, 99, 107, 123, 132, 142, 167, 169, 172～174, 176, 192, 193, 208, 212, 219, 220, 240, 244, 253, 258, 280～282, 284, 292, 297, 349
瓦窯 …… 3, 321, 324, 334, 335
き 輝安鉱 …… 85
金箔飾り瓦 …… 166, 249, 362～366
金箔軒平瓦 …… 249, 361
金箔軒丸瓦 …… 13, 249, 359, 360
く 蔵 …… 49, 55, 59, 87～89, 91, 94, 97, 175, 189, 347
け 蛍光X線分析 …… 114, 127, 128, 320
下駄 …… 39, 50, 152, 163
花瓶 …… 62, 64, 94
剣頭紋軒平瓦 …… 46, 58
こ 後期難波宮 …… 9, 128, 221, 229, 241, 273, 316
耕作 …… 39, 163, 225, 229, 231, 242, 246, 248, 318, 327
皇朝十二銭 …… 126～128
黒色土器 …… 10, 114, 200, 202
古九谷様式 …… 308
古式土師器 …… 176
古瀬戸 …… 62, 64, 83, 84, 93, 94, 163, 206, 325, 326
古染付 …… 72
コビキB …… 15, 122
木舞 …… 31, 52
さ 堺擂鉢 …… 315
三ノ丸 …… 2, 4, 7, 16, 39, 49, 94, 96, 100, 104, 106, 129, 132, 134, 142, 145, 152, 156, 159, 167, 169, 174, 176, 187, 196, 199, 210, 212, 222, 223, 244, 253, 263, 292, 298, 318, 336, 338, 339, 342, 345, 348, 349, 353, 354, 356, 357
し 信楽焼 …… 141, 185, 219
地鎮 …… 89
志野 …… 72, 74, 75, 82, 98, 99, 123, 131, 141, 176, 192, 244, 281
鯱瓦 …… 345, 347～349, 352, 353
重圏文(軒丸・平) 瓦 …… 9, 114, 128, 223, 229, 241, 265
焼土層 …… 7, 17, 27, 38, 39, 61, 67, 69, 74, 80, 90, 92, 97, 98, 103, 105, 107, 134, 140, 151, 157, 159, 167, 175, 176, 192, 199, 210, 223, 249, 275, 278, 291,

297, 308, 335, 345
新羅土器 …… 106, 112
神功開寶 …… 114, 126, 127, 159
人骨 …… 239
『信長記』 …… 15, 16
す 錘 …… 78, 81
水滴 …… 39, 114, 308
硯 …… 50, 204, 314, 315, 319
砂目 …… 165, 282, 308, 314
墨屋 …… 275, 279, 289, 290
素焼き …… 21, 22
スラッグ …… 109, 114, 127, 152, 193
せ 製塩土器 …… 10, 118, 121, 270, 273
青花 …… 7, 12, 19, 20, 28, 33, 39, 61, 63, 72, 76, 77, 79, 80, 82, 97, 99, 101, 140, 154, 165～167, 169, 176, 187, 189, 192, 195, 212, 218, 219, 223, 224, 236, 240, 244, 246, 248, 258, 272, 277, 284, 308, 311, 323
青磁 …… 4, 12, 20, 33, 61, 64, 82, 83, 94, 162, 163, 174, 176, 180, 183, 185, 206, 218, 219, 221, 240, 246, 259, 280～282, 306, 314, 315
整地層 …… 2～4, 7, 16, 17, 24, 25, 27, 28, 36, 38, 39, 42, 46, 49, 55, 61, 67, 69, 90, 98～100, 106, 107, 129, 132, 134, 135, 145, 147, 151, 156, 158, 159, 169, 170, 175, 176, 196, 199, 200, 211, 212, 223, 225, 228, 241, 244, 249, 263, 266, 270, 273～275, 277, 292, 293, 297, 298, 301, 321～323, 339, 345, 348, 349, 353, 354, 356
赤壁賦 …… 69
瀬戸美濃焼 …… 7, 11～13, 19, 27, 28, 33, 37, 39, 40, 50, 55, 57, 61, 64, 65, 72～74, 79, 98, 99, 101, 121, 123, 131, 138, 140, 141, 152, 162, 163, 165～167, 169, 170, 172～174, 176, 185, 187, 189, 192, 193, 206, 208, 212, 218～220, 223, 235, 240, 244, 246, 248, 258, 272, 281, 282, 292, 297, 307, 308, 311, 314, 315, 323
背割 …… 299, 305, 306, 318
前期難波宮 …… 156
洗 …… 83, 84, 93
塼 …… 87, 89, 101, 118
塼列建物 …… 101, 102
そ 惣構 …… 1～4, 7, 16, 38, 39, 49, 59, 66, 94, 96, 101, 145, 159, 167, 170, 175, 176, 196, 199, 200, 206～209, 263, 275, 291～293, 297, 298, 318, 321, 324, 325, 327, 329, 333, 335, 336, 345, 347, 356, 357
総塗籠式 …… 189
礎石 …… 14, 19, 24, 25, 30, 31, 33, 38, 48～50, 52, 55, 58, 63, 64, 69, 82, 84, 85, 87～92, 103, 132, 144, 145, 154, 155, 163, 170, 172, 189, 191, 193, 195, 196, 206, 208, 220, 232, 233, 247～249, 252, 257, 278, 288, 292, 294, 297, 323, 348, 349
礎石建物 …… 19, 24, 27, 30, 31, 33, 36, 38, 39, 48～50, 52, 55, 63, 64, 66, 67, 84, 85, 87～89, 91, 92, 101, 105, 143～145, 157, 163,

170, 189, 192, 193, 198, 232, 233, 247, 294, 347
た 胎土目 …… 172, 282
大名屋敷 …… 1, 339, 345, 347
蛸壺 …… 163
縦板組隅柱横桟どめ井戸 304, 317
盾形埴輪 …… 177, 183
丹波焼 …… 39, 72, 74, 79, 172～174, 183, 192, 208, 218, 244, 248, 280, 284, 307, 308, 311
ち 鋳造関連遺物 …… 100, 104
丁銀形土製品 …… 149
地割 …… 37, 96, 104, 145, 242, 261, 325, 327, 329, 330, 332, 333, 336, 338
つ 築地塀 …… 38, 51, 52, 59, 208, 330
壺金具 …… 39
て 滴水瓦 …… 339, 341～345, 347, 349, 352, 353
鉄釉 …… 12, 19, 20, 33, 62, 64, 99, 138, 165, 189, 246, 258, 280
と 銅滓 …… 169, 172, 173, 175, 196
東播系須恵器 …… 176, 183, 185, 206
銅吹所 …… 174
常滑焼 …… 61, 62, 65, 82, 176, 180, 181, 203, 206, 326
土錘 …… 9, 62, 65, 82, 163, 204, 216, 217, 228
な 難波Ⅲ …… 10, 112, 113, 115, 116, 144, 152, 156, 214, 216, 228
難波Ⅳ …… 10, 113
難波Ⅴ …… 109, 112, 114, 115, 117, 121, 137, 159, 213, 214, 216, 217, 266, 301, 304
奈良三彩 …… 105, 121, 126, 127, 266, 273
軟質施釉陶器 …… 21, 33, 37, 39, 141, 219, 244, 246, 259
に 仁清手 …… 282
は 白磁 …… 4, 12, 18, 20, 28, 33, 61, 66, 72, 75, 79, 82, 94, 101, 140, 162, 163, 165～167, 172, 181, 183, 185, 192, 206, 208, 224, 244, 248, 259, 272, 294, 306, 314, 315
羽口 …… 19, 25, 168, 314～316, 319
白泥 …… 315
畠 …… 55, 187, 231, 248, 261
波頭文軒平瓦 …… 183, 185
ひ 肥前磁器 …… 20, 69～72, 97, 134, 156, 167, 172～174, 176, 193, 212, 218, 220, 221, 259, 280～282, 284, 297, 306, 308, 311, 314, 315
備前焼 …… 11, 12, 39, 40, 50, 61, 62, 74, 79, 82, 101, 103, 132, 140, 141, 154, 163, 174, 176, 183, 185, 206, 212, 220, 240, 244, 246, 248, 272, 281, 292, 294
火鉢 …… 22, 185, 192, 195, 206, 218
ふ 輪羽口 …… 101, 109, 112, 114, 127, 152, 172, 173
風字硯 …… 114
武家屋敷 …… 16, 27, 38, 51, 58, 59, 66, 67, 85, 96～98, 104, 132, 336, 357
伏見町人 …… 319, 337, 338
分銅 …… 28, 39, 78～81, 99
へ ベトナム陶器 …… 193
ほ 墨書 …… 14, 39, 52, 89, 105, 111, 114, 120, 121, 126, 195, 270, 317
堀 …… 7, 10, 12, 15, 25, 46, 47, 57, 60, 105, 121, 138, 142, 183, 187, 196, 204, 299, 305, 318, 321, 326, 336, 345, 348

梵字文軒平瓦 …… 163, 185, 206
本丸 …… 344, 354, 356, 357
ま マジョリカ陶アルバレッロ … 167, 175, 195
み 妙知焼 …… 24, 67, 90, 92, 97, 157, 175, 308
む 無文銭 …… 224
も 木簡 …… 40, 42, 44, 46, 48, 58, 126, 173, 195, 221
木製瓦笵 …… 334
や 焼塩壺 …… 39, 79, 82, 85, 140, 141, 192, 195, 220, 253, 258, 259
弥生土器 …… 159, 176, 183, 204
槍 …… 80, 87
ゆ 油煙受皿 …… 172, 275, 279～281, 286, 287, 289, 290
靭形埴輪 …… 177, 179, 180
ゆりかす …… 167, 168, 196
ら ラグーン …… 65, 66, 93, 94, 167, 241, 291, 326
り 李朝 …… 33, 40, 75, 79, 80, 140, 165, 176, 187, 244
隆平永寶 …… 105, 115, 126, 127
緑釉陶器 …… 9, 10, 109, 112, 114, 120, 126, 163
る 坩堝 …… 152, 168, 172, 173, 314, 315, 319
れ 蓮華文軒丸瓦 …… 9, 100, 103, 112, 159, 180, 204, 229
連珠文軒平瓦 …… 180
わ 脇差 …… 87
和鏡 …… 78, 80, 81, 97
和同開珎 …… 116, 126, 127

〈地名・遺跡名など〉

い 糸屋町 …… 243, 329, 338
和泉町 …… 6, 329, 334, 335
今池遺跡 …… 128
う 上町城下町 …… 65, 325, 335, 336, 338
上町筋 …… 352
上町台地 …… 1～4, 7, 15～17, 27, 36, 38, 60, 65, 66, 93, 94, 126, 128, 148, 152, 156, 176, 223, 228, 229, 232, 241～243, 257, 263, 270, 272～275, 288, 291, 292, 298, 299, 321, 325～327, 335, 353
内淡路町 …… 5, 169, 174, 327, 329, 332～335, 338, 348
内久宝寺町 …… 329
内平野町 …… 5, 326, 329, 332～335, 338, 348
内骨屋町筋 …… 327, 329, 332, 334, 338
内本町 …… 6, 243, 329, 335, 338
お 大川 …… 1, 4, 17, 27, 36, 37, 57, 59, 65～67, 93, 94, 124, 127, 128, 142, 222, 325～327, 330, 336
(大坂)(本願寺) 寺内 … 36, 60, 65, 69, 325, 327, 336
大坂城下町跡 …… 42, 58, 104, 126, 314, 316, 339, 356
(大坂)西町奉行所跡 … 291
(大坂)本願寺 …… 15, 25, 60, 142, 325
大手通 …… 1, 2, 5, 6, 143, 169, 211, 243, 288～290, 329, 333, 338, 349
御祓筋 …… 327, 329, 332～335, 338
か 柏原古墳群 …… 126
河内国府 …… 112
河内国分寺跡 …… 112
き 北新町 …… 6, 223, 243, 329, 333
北平野町 …… 336, 338
京街道 …… 1, 27, 37, 347

く　草戸千軒町遺跡 …… 317
　　窪津(王子) …… 4, 36, 58, 325
け　景徳鎮(窯) …… 72, 80
こ　高麗橋 …… 4, 5, 103
　　鴻臚館 …… 105, 127
　　石町 …… 4, 5, 327, 330, 334
さ　宰相山遺跡 …… 128
　　細工谷遺跡 …… 128, 316, 317
　　堺 …… 338
　　猿投(窯) …… 114, 127
　　坐摩神社 …… 46, 57
し　四天王寺 …… 39, 94, 100, 103, 128, 204, 229, 316, 325, 335, 336, 338
　　寺内之浦 …… 36
　　島町 …… 65, 105, 326, 327, 329, 330, 334～336, 347
　　漳州(窯) …… 72, 80, 167, 272, 297, 307
　　上手堂 …… 60
　　浄土堂 …… 60, 242
す　住友銅吹所跡 …… 37, 67, 69, 94, 97, 174, 308, 319
せ　摂津国府 …… 105
　　摂津職 …… 105, 126, 127
　　善安筋 …… 327, 333～335
　　船場 …… 16, 58, 262, 314, 319, 326, 327, 336, 338, 353, 354
た　谷町筋 …… 1～3, 7, 10, 16, 124, 143, 145, 223, 241, 243, 261, 263, 277, 321, 322, 327, 329, 330, 332, 334, 336, 338, 347, 349
　　玉手山遺跡 …… 290
つ　釣鐘町 …… 5, 105, 151, 329, 330, 332, 336, 348, 349
て　天満 …… 94, 339, 354, 356
と　常盤町 …… 6, 243, 263, 306, 318, 319, 329, 334
　　徳井町 …… 6, 223, 243, 261, 263, 329, 333, 335
　　土佐堀通 …… 1, 27, 34, 36, 37, 59, 67, 94, 96, 151, 327, 330, 336, 347
　　豊臣秀吉 …… 325, 336, 338
な　長岡京 …… 118
　　長堀通 …… 339, 352
　　長柄砂州 …… 65, 66
　　難波津 …… 93, 128
　　難波宮跡 …… 1, 316, 358
　　奈良奉行所跡 …… 290
ね　猫間川 …… 1
は　八軒屋 …… 36
ひ　東横堀川 …… 1～3, 17, 36, 42, 60, 65, 66, 93, 94, 100, 103, 104, 167, 199, 241, 242, 274, 291, 298, 318, 321, 325～327, 333, 335, 347
ふ　船越町 …… 5, 332, 335, 348
へ　平城宮 …… 317
ほ　本町通 …… 223, 262, 338, 347, 349
ま　松屋町筋 …… 2, 3, 59, 65, 94, 96, 151, 169, 243, 275, 289, 291, 321, 326, 327, 329, 330, 332～334, 338, 348
み　南新町 …… 6, 223, 243, 263, 329, 333
　　南農人町 …… 329
や　鎗屋町 …… 243, 263, 305, 318, 329
も　森の宮遺跡 …… 1
り　琉球列島 …… 126～128
　　両替町 …… 306, 318, 319
ろ　籠の岸（樓の岸） …… 15, 16, 25, 60, 326, 327
わ　渡辺津 …… 4, 36, 60, 242, 325

Archaeological Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan

Volume VII



July 2003

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text.

SA : Palisade or Fence
SB : Building
SD : Ditch
SE : Well
SK : Pit
SM : Moat
SP : Pit or Posthole
SW : Stone wall
SX : Other features

CONTENTS

Foreword

Explanatory Notes

Chapter I Outline of the researches and the area reported in this volume 1

Chapter II Researches on the C area 7
S.1 Researches on the OS86-6 and the surrounding 7
1) Outline of the Researches and the surrounding 7
2) Results of Current Researches 7
3) Conclusion 14
S.2 Researches on the OS87-26 and the surrounding 17
1) Outline of the Researches and the surrounding 17
2) Results of Current Researches 17
3) Conclusion 25
S.3 Researches on the OS88-113 and the surrounding 27
1) Outline of the Researches and the surrounding 27
2) Results of Current Researches 27
3) Conclusion 36
S.4 Researches on the OS85-28 and 87-78 38
1) Outline of the Researches and the surrounding 38
2) Results of Current Researches 38
3) Conclusion 57
S.5 Researches on the OS86-38 and 87-81 61
1) Outline of the Researches and the surrounding 61
2) Results of Current Researches 61
3) Conclusion 64
S.6 Researches on the OS86-22 and the surrounding 66
1) Outline of the Researches and the surrounding 66
2) Results of Current Researches 67
3) Conclusion 93
S.7 Researches on the OS88-56 and 89-148 98
1) Outline of the Researches and the surrounding 98
2) Results of Current Researches 98
3) Conclusion 103

Chapter III Researches on the D area 105
S.1 Researches on the OS90-50 and the surrounding 105
1) Outline of the Researches and the surrounding 105
2) Results of Current Researches 106
3) Conclusion 124
S.2 Researches on the OS93-20 and the surrounding 129
1) Outline of the Researches and the surrounding 129

2) Results of Current Researches 129
3) Conclusion 132
S.3 Researches on the OS90-51 and the surrounding 133
1) Outline of the Researches and the surrounding 133
2) Results of Current Researches 133
3) Conclusion 142
S4 Researches on the OS87-133 and 91-70 143
1) Outline of the Researches and the surrounding 143
2) Results of Current Researches 143
3) Conclusion 145
S.5 Researches on the OS87-147 and 91-16 147
1) Outline of the Researches and the surrounding 147
2) Results of Current Researches 147
3) Conclusion 150
S.6 Researches on the OS87-33 and the surrounding 151
1) Outline of the Researches and the surrounding 151
2) Results of Current Researches 151
3) Conclusion 156
S.7 Researches on the OS92-19 and the surrounding 157
1) Outline of the Researches and the surrounding 157
2) Results of Current Researches 158
3) Conclusion 167
S.8 Researches on the OS90-64 and the surrounding 169
1) Outline of the Researches and the surrounding 169
2) Results of Current Researches 169
3) Conclusion 174
S.9 Researches on the OS93-47 and the surrounding 175
1) Outline of the Researches and the surrounding 175
2) Results of Current Researches 175
3) Conclusion 196
S.10 Researches on the OS87-100 and 90-31 199
1) Outline of the Researches and the surrounding 199
2) Results of Current Researches 199
3) Conclusion 210

Chapter IV Researches on the E and F area 211
S.1 Researches on the OS90-130 and 91-32 211
1) Outline of the Researches and the surrounding 211
2) Results of Current Researches 211
3) Conclusion 221
S.2 Researches on the OS86-35 and the surrounding 223
1) Outline of the Researches and the surrounding 223
2) Results of Current Researches 223
3) Conclusion 240
S.3 Researches on the OS87-152 and the surrounding 243
1) Outline of the Researches and the surrounding 243
2) Results of Current Researches 244

3) Conclusion 261
S.4 Researches on the OS89-6 and the surrounding 263
1) Outline of the Researches and the surrounding 263
2) Results of Current Researches 263
3) Conclusion 273
S.5 Researches on the OS91-64 and 91-93 275
1) Outline of the Researches and the surrounding 275
2) Results of Current Researches 275
3) Conclusion 287
S.6 Researches on the OS85-36 and the surrounding 291
1) Outline of the Researches and the surrounding 291
2) Results of Current Researches 291
3) Conclusion 297
S.7 Researches on the OS87-14 and the surrounding 299
1) Outline of the Researches and the surrounding 299
2) Results of Current Researches 299
3) Conclusion 316
S.8 Researches on the F area 321
1) Outline of the Researches and the surrounding 321
2) Results of Current Researches 321
3) Conclusion 324

Chapter V Examination of features and artifacts 325
S.1 City street plan in Sogamae fortress of Toyotomi Osaka Castle 325
1) Introduction 325
2) Before the Osaka Castle town in Sogamae fortress 325
3) Examination of the city street direction in present Uemachi area 327
4) Direction of the features in Toyotomi Era 329
5) Reconstruction of the city street plan in Toyotomi Osaka Castle Town 334
6) Conclusion －to Tokugawa Osaka Castle Town－ 338
S.2 Consideration of the roof tiles with gold leaf unearthed in Osaka Castle Site 339
1) Introduction 339
2) Outline of the roof tiles with gold leaf 339
3) Unearthed positions of the roof tile with gold leaf in the Osaka Castle Sites and the surrounding 344
4) Conclusion 354

Bibliography and References 367

Postscript

Index

English Contents

Reference Card

報告書抄録

ふりがな	おおさかじょうあと 7
書名	大坂城跡 Ⅶ
編著者名	松尾信裕・平田洋司・寺井誠
編集機関	財団法人　大阪市文化財協会
所在地	〒540-0006　大阪市中央区法円坂１－１－35　　TEL 06−6943−6833
発行年月日	西暦　2003年７月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおさかじょうあと 大坂城跡	中央区谷町・北浜東・石町・島町・釣鐘町・船越町・内淡路町・大手通・糸屋町・北新町・南新町・徳井町・内本町・槍屋町・常磐町・東高麗橋・本町橋	27128	―	34°41′03″	135°31′43″	19851125 ～ 19950629	18,461㎡	大阪市教育委員会などの公共事業のほか、民間の建設工事。計91件。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
大坂城跡		弥生時代		弥生土器
		古墳時代		土師器・須恵器・埴輪
	都城	飛鳥時代	掘立柱建物・土壙・井戸	土師器・須恵器・瓦
	都城	奈良時代	掘立柱建物・溝・土壙・井戸	土師器・須恵器・瓦・奈良三彩・和同開珎・神功開寶・墨書土器
	集落	平安時代	掘立柱建物・溝土壙・井戸	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・隆平永寶・開元通寶・墨書土器
	集落	鎌倉・室町時代	溝・井戸・畠	土師器・須恵器・瓦器・瓦・輸入陶磁器
	城郭・城下町	豊臣期	石垣・掘立柱建物・礎石建物・堀・塀・溝・土壙	陶磁器・土師器・瓦質土器・鋳造関係遺物・瓦・木器・木簡・金属器・銭貨・人骨・動物遺体
	城下町	徳川期	石垣・礎石建物・掘立柱建物・土壙・溝	陶磁器・土師器・木器

原色図版

OS87−78次調査地
SB401・SA401と
東側の南北道路（北から）





OS86−22次調査地　SB601・602、SX601、SD601（南から）



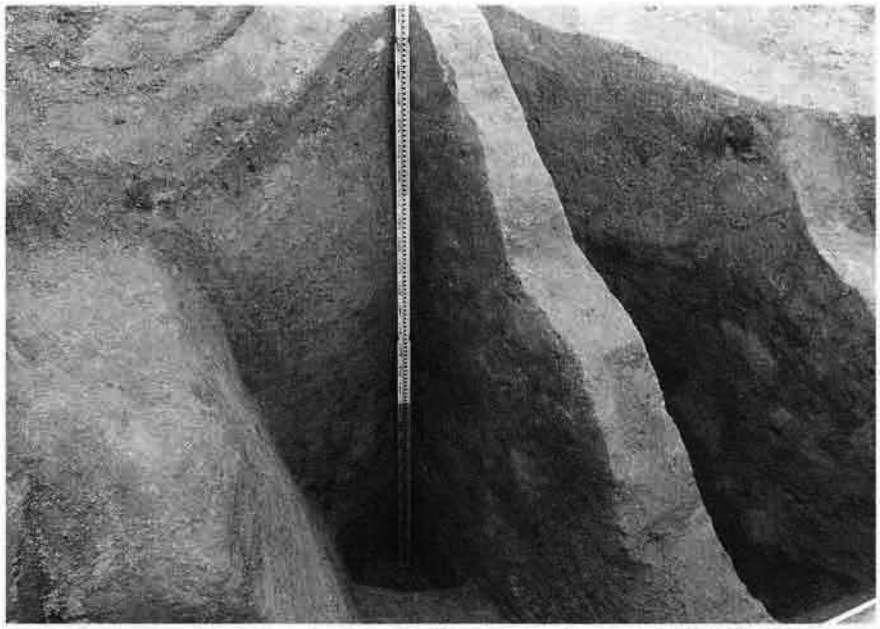
奈良三彩(左：OS87－29次、右：OS90－112次)



マジョリカ陶アルバレッロ(OS92－19次)

図　　版

OS86－6次SX501



OS86－6次SM401
断面（西壁）



OS93－54次SK201





SD502・503(北から)



SD502・503
(南東から)



第4層上面検出状況
(北から)

OS90－47次全景
（東から）



OS90－47次SD504
（南東から）



OS92－68次全景
（東から）



図版四　OS88—113・91—82次調査の遺構



OS88－113次全景
（東から）



OS88－113次SK508
（南西から）



OS91－82次全景
（南から）

図版五　OS90—20次調査の遺構

全景（南から）



SK501（北から）



SK501壁の構造
（北西から）



図版六　OS85—28次調査の遺構（一）



北部全景（東から）



SM701（南東から）



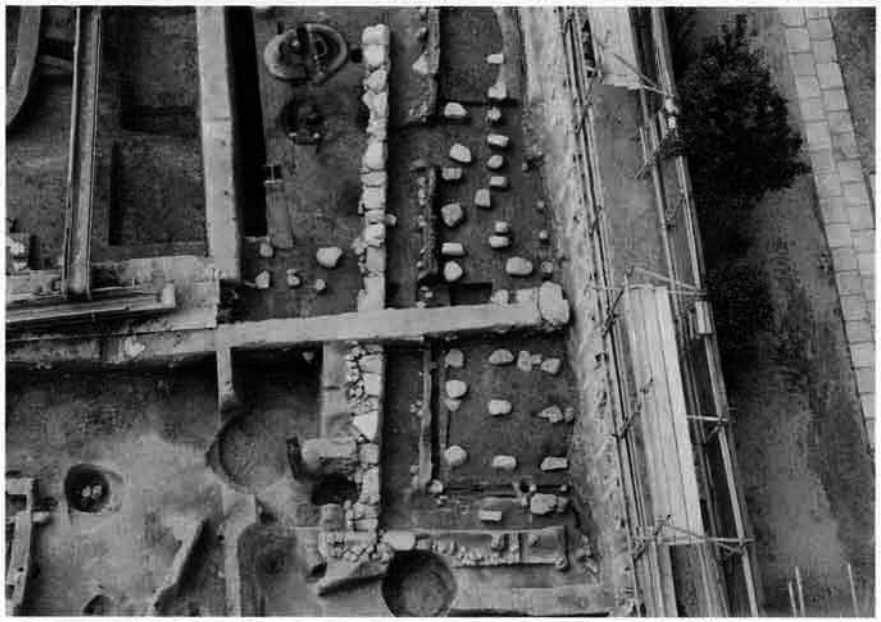
SB602（西から）

図版七　OS85—28次調査の遺構(二)

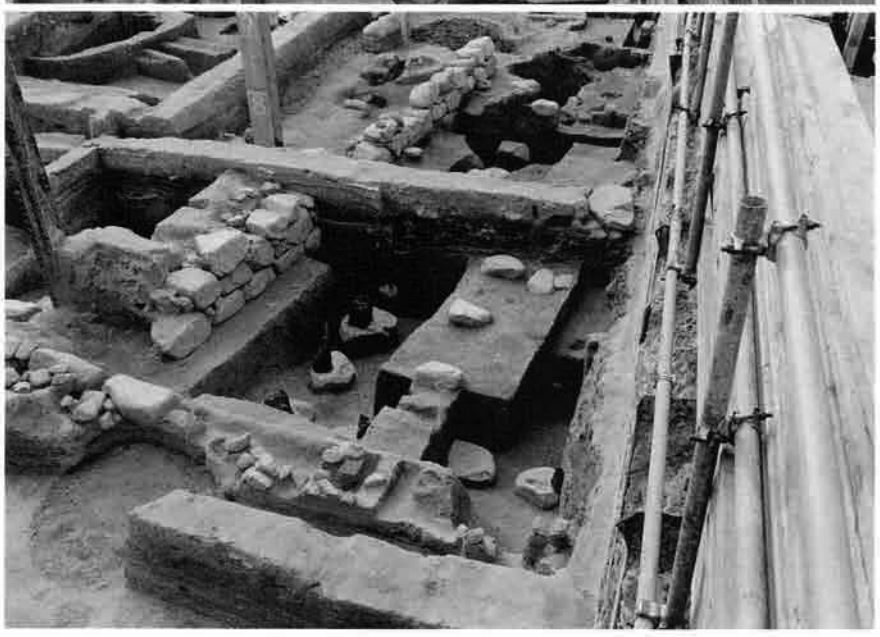
SD606(西から)



SB404(東から)



SB404礎石検出状況
(北東から)



図版八　OS87—78次調査の遺構（一）



第6層上面全景
（西から）



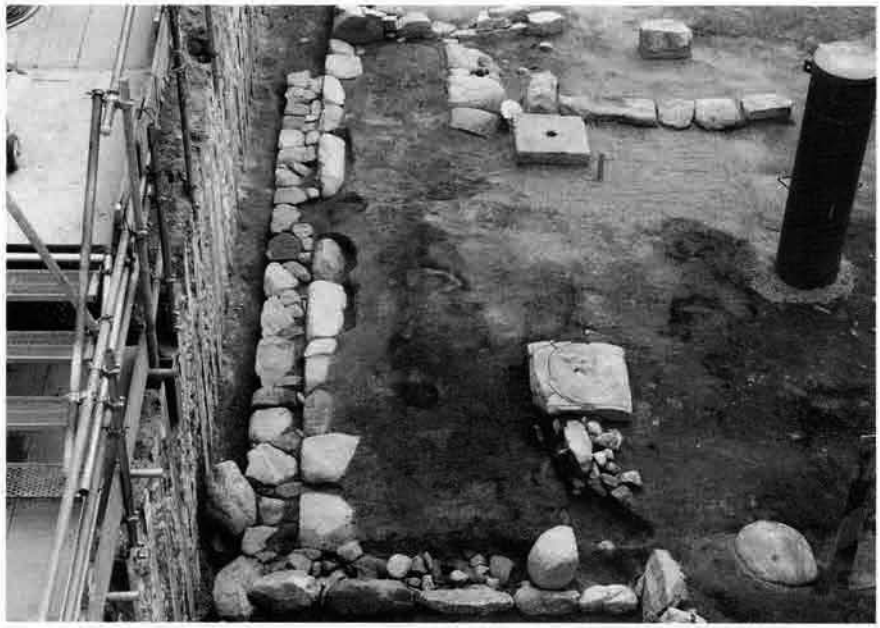
SB601およびSA401
（南から）



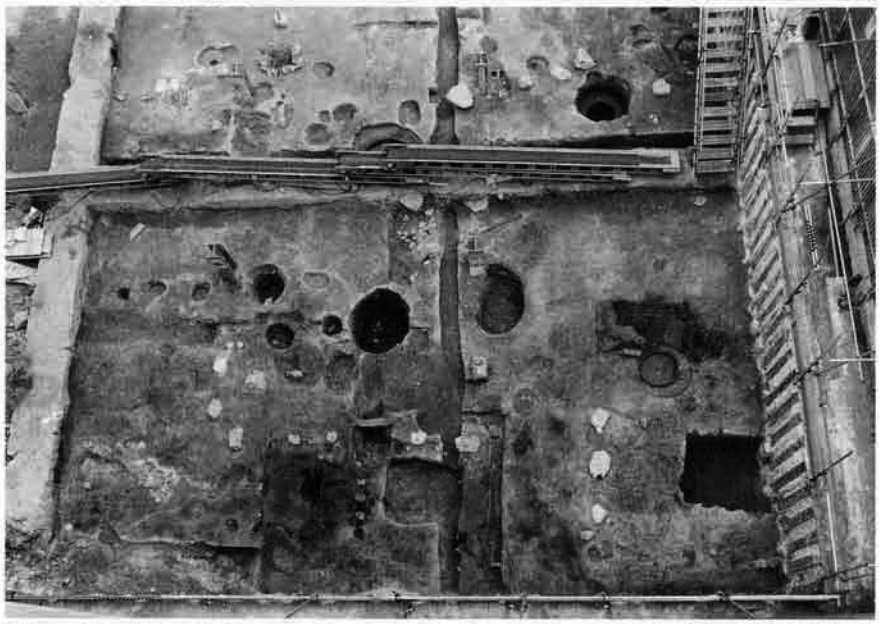
SB401・SA401と
南北道路の位置関係
（北から）

図版九　OS87—78次調査の遺構(二)

SB401(北から)



第4層上面西部
(西から)



SB403(北から)





OS86−38次
遺構検出状況（西から）

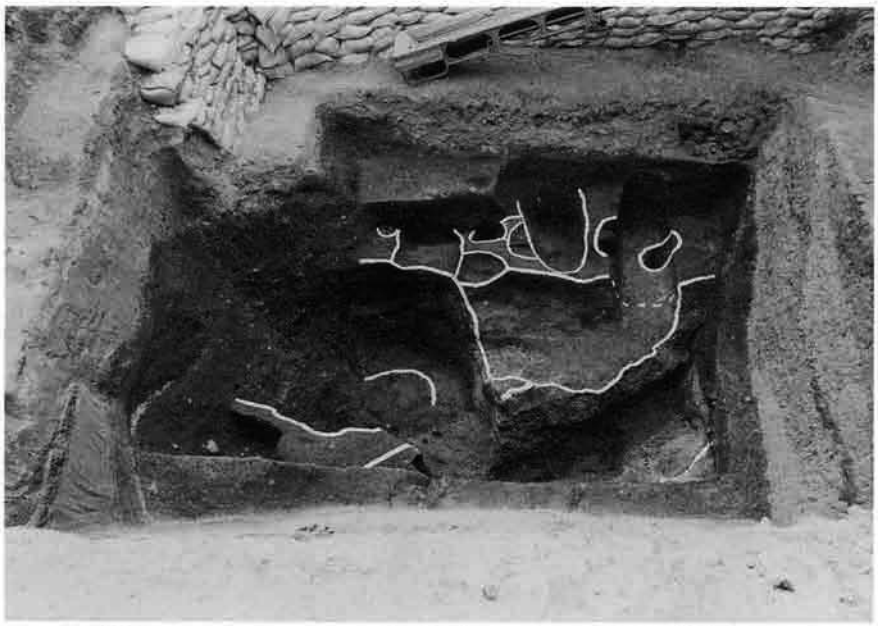


OS87−81次
第6層上面検出状況
（南から）



OS87−81次
第4層上面検出状況
（南から）

第10層上面検出状況
（東から）

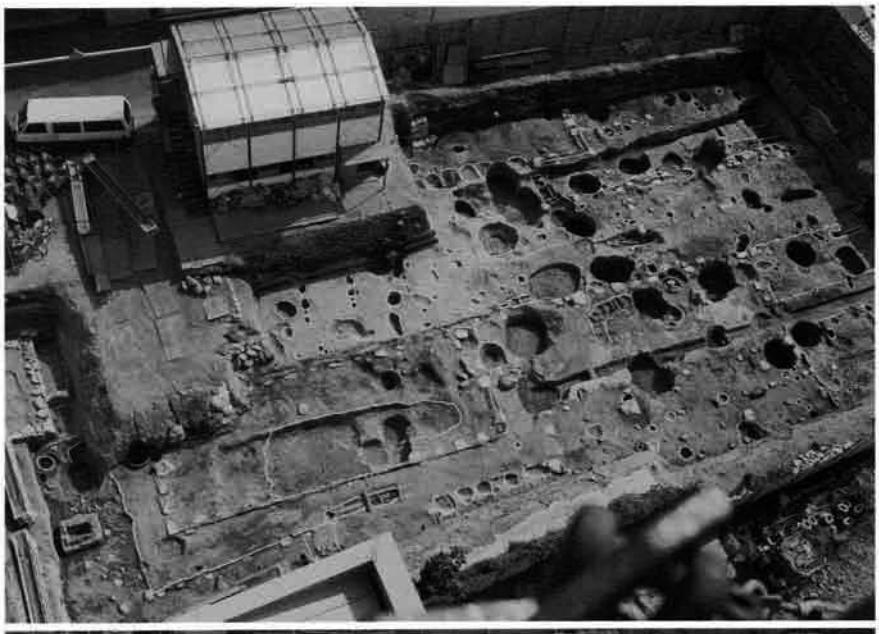


第６層上面検出状況
（南から）



SD501・SB503
（東から）





第５層上面検出状況
（北東から）



SB505・507・510・511
（北から）



第3b層上面検出状況
（北西から）

第6・5層上面検出状況
（北から）



第3b層上面検出状況
（北から）



第3a層上面検出状況
（北から）





OS88－56次
第３層上面検出状況
（南から）

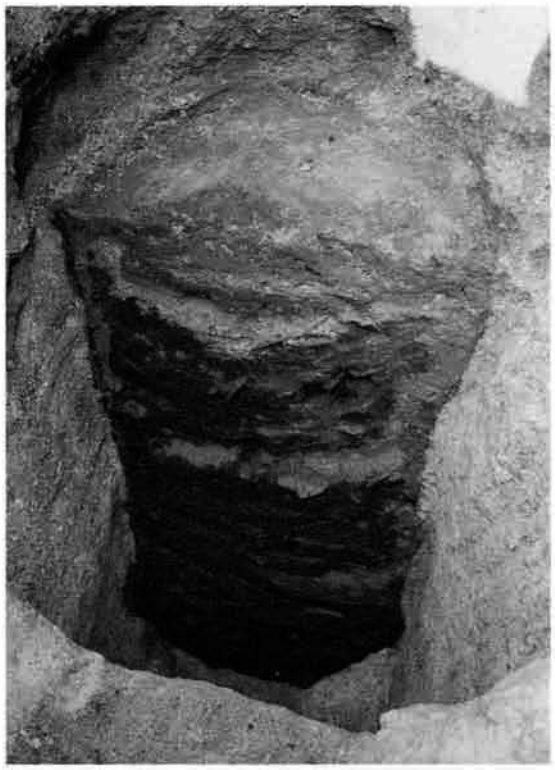


OS88－56次SX501
（南から）



OS89－148次SB302
（西から）

OS87－29次SE503断面



OS88－31次古代の遺構
（北から）



OS88－1次SM401
（南西から）



図版一六　OS90—50次調査の遺構（一）



遺構検出状況
（東から）



SB503（西から）



SB506（西から）

SB507（南から）



SK505断面

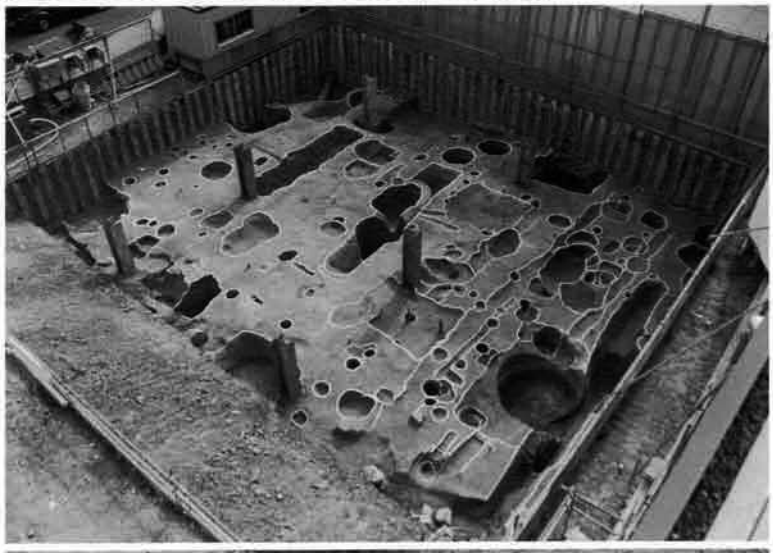


SE502





OS93－20次SA201
（西から）



OS93－20次全景
（北東から）



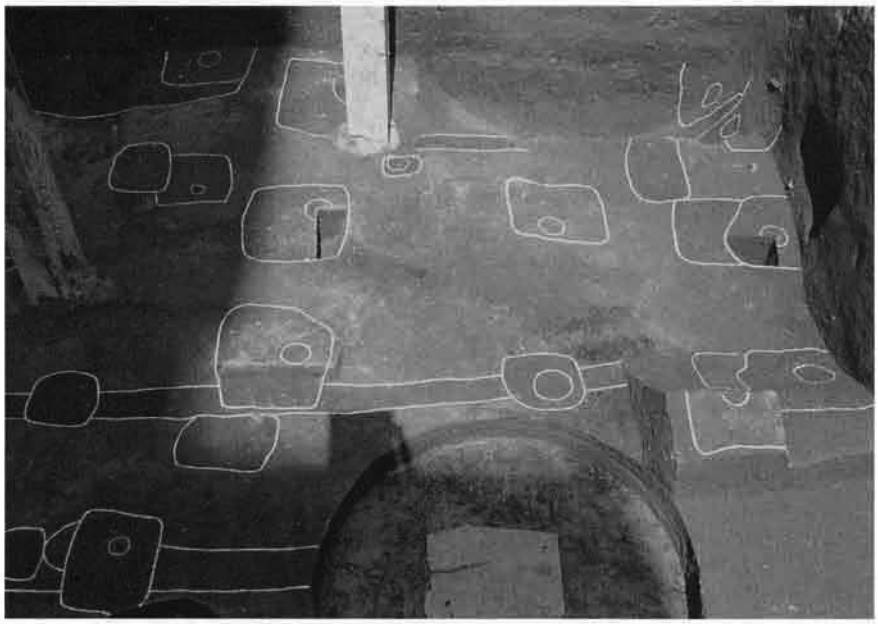
OS89－58次SX101

図版一九　OS90—51次調査の遺構

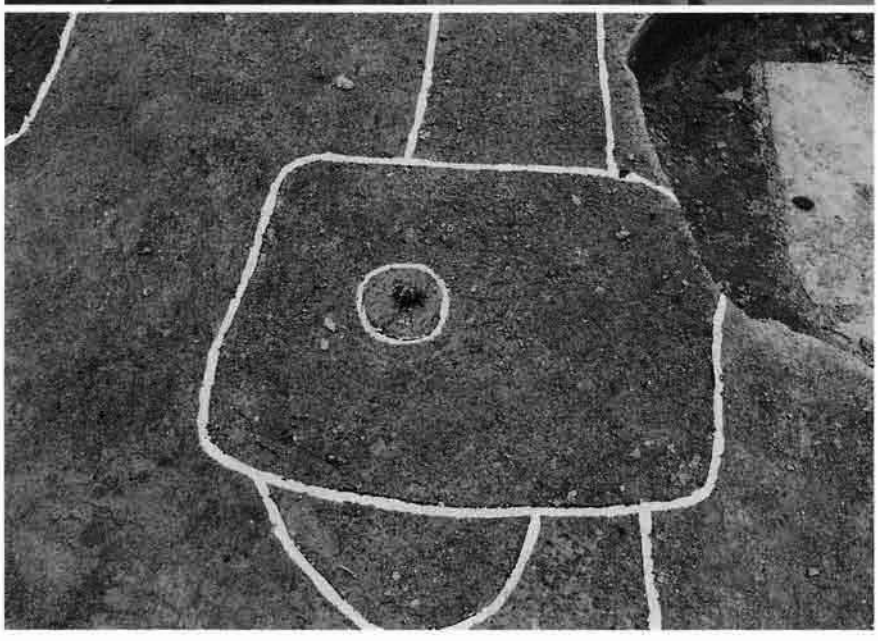
第３・４層の堆積状況



第５層内遺構検出状況



柱根が残る柱穴





谷地形の堆積状況



SB201・202
（東から）

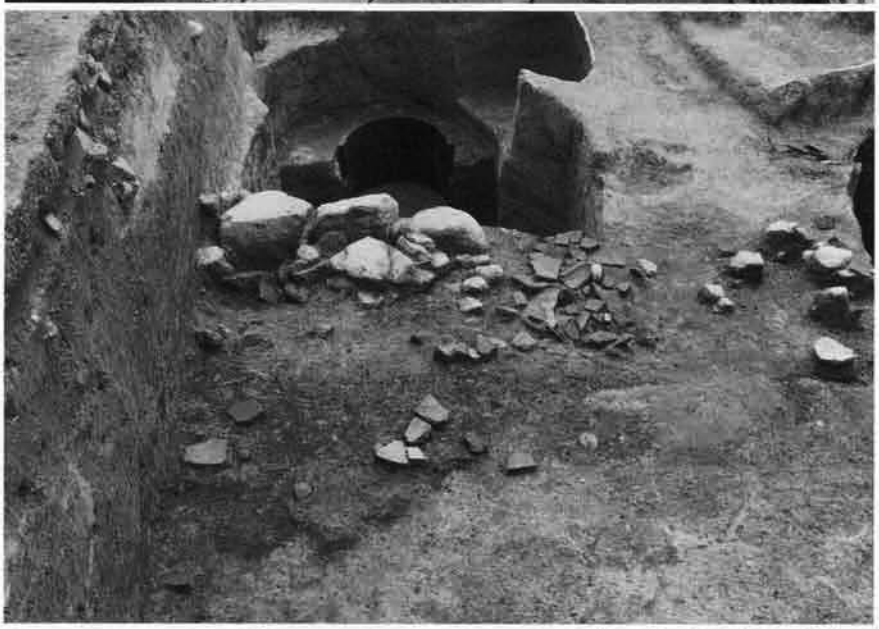


SD202断面

徳川期遺構検出状況
（南から）



SX601・SW601
（北から）



SD603・604断面
（東壁）



図版二二　OS87—33・93—25次調査の遺構



OS87−33次
第4層（古代）の堆積状況



OS87−33次SE201



OS93−25次SW201

図版二三　OS92—19次調査の遺構

地層



SX401（南から）



第2c層基底面検出状況
（調査地西側：南から）





三ノ丸造成以前の礎石
（第2c層上面）



北西炉群検出状況



SD104・105断面

SD702（北東から）



SD702を埋める焼土



SW501（南から）





A地区南壁断面



SM1101遺物出土状況
（B地区：東から）



SE1101（A地区）

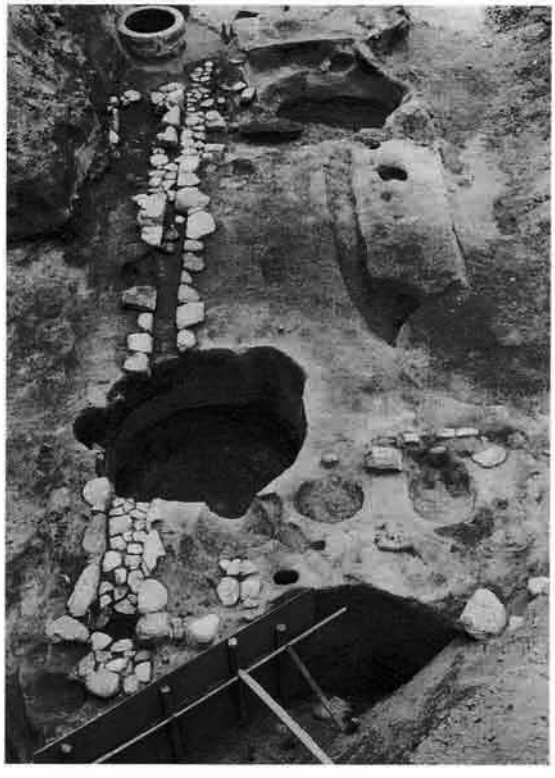
SM901断面
(B地区東壁)



SB701検出状況
(A地区：南から)



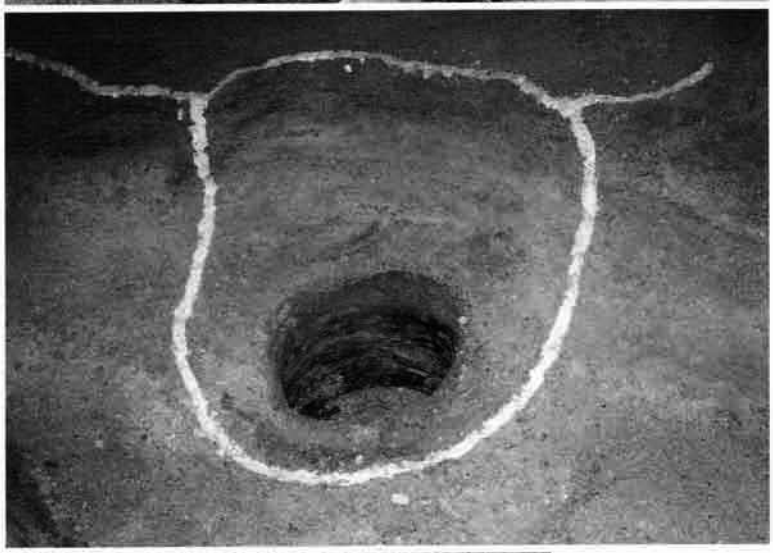
SD701検出状況
(C地区：北から)



図版二八　OS87—100・90—31次調査の遺構



OS87－100次西壁南半断面



OS87－100次SE914検出状況



OS90－31次SE901

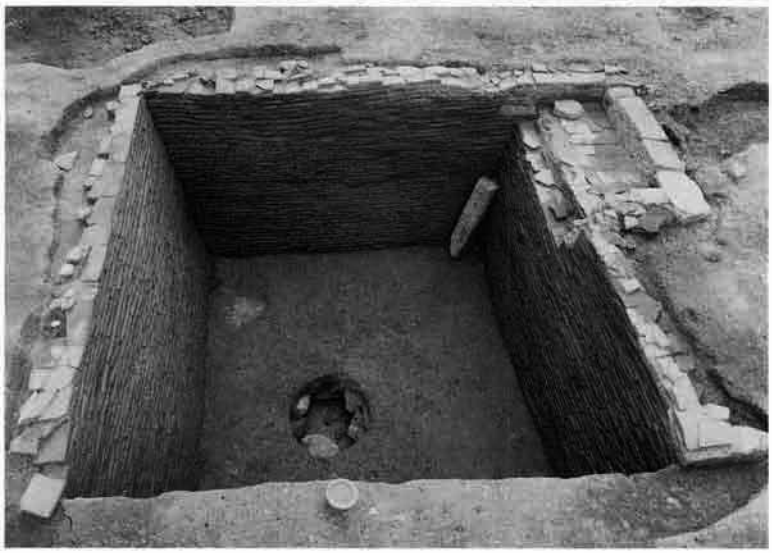
完掘状況（調査地西側）



SA501（南から）



SK101（東から）



図版三〇　OS86—35・87—69・89—86次調査の遺構



OS86－35次
遺構検出状況
（北東から）



OS87－69次SD502
（東から）

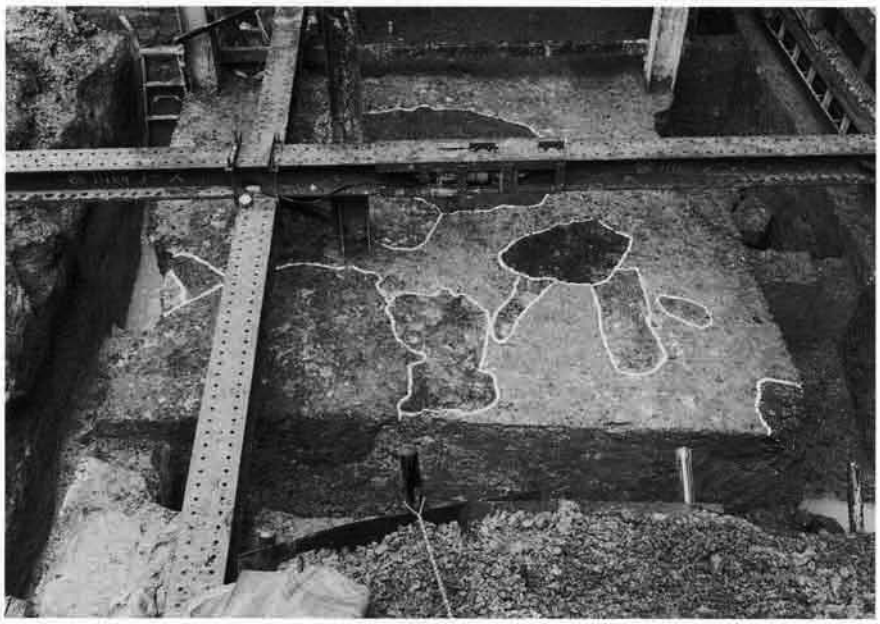


OS89－86次
SD504～507（東から）

OS87－37次
中世包含層分布状況
（南から）



OS87－56次
調査地全景（西から）



OS90－108次
SB501（南東から）



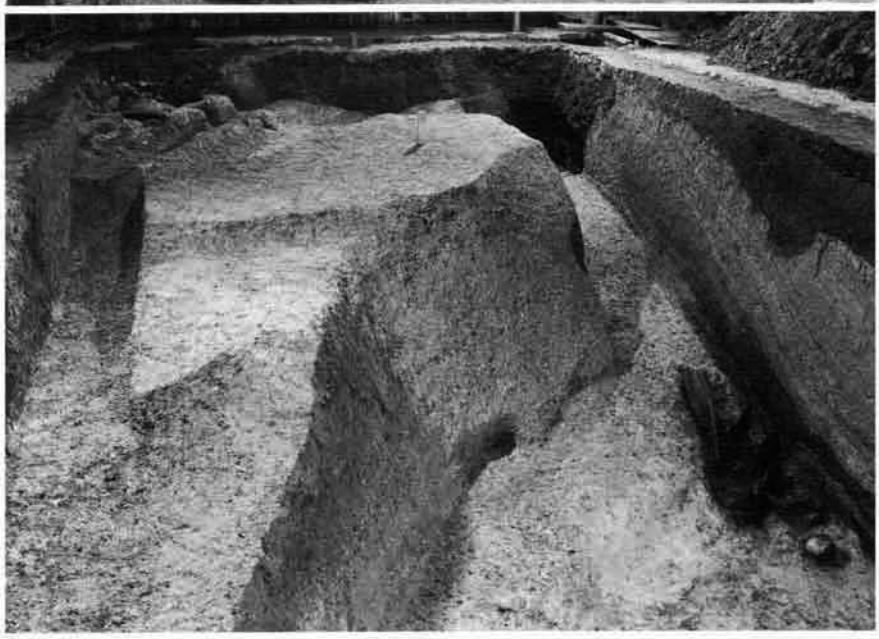
図版三二　OS89—7・92—6次調査の遺構



OS89－7次北区
遺構検出状況
（南から）



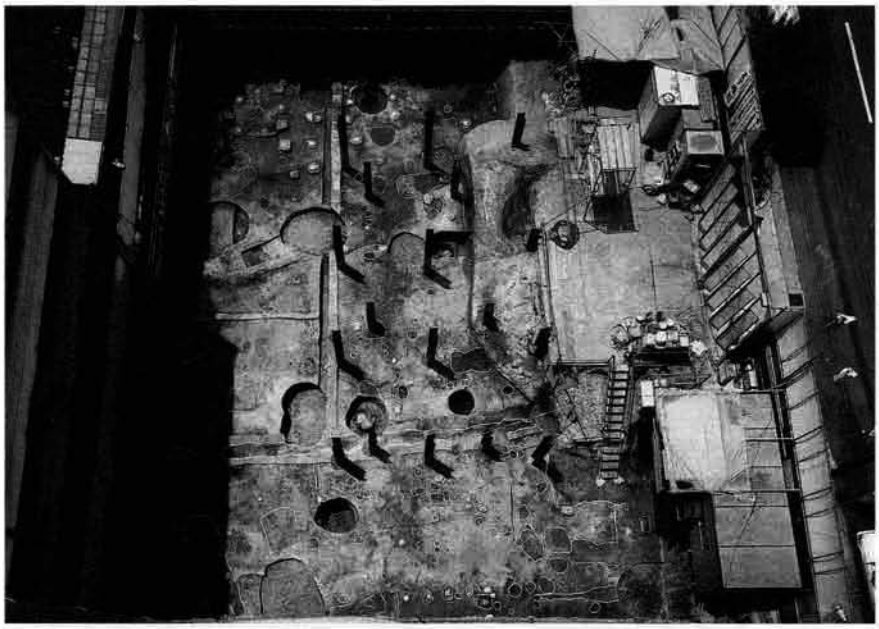
OS89－7次南区
遺構検出状況
（東から）



OS92－6次SX1002
（南から）

図版三三　OS92—12次調査の遺構

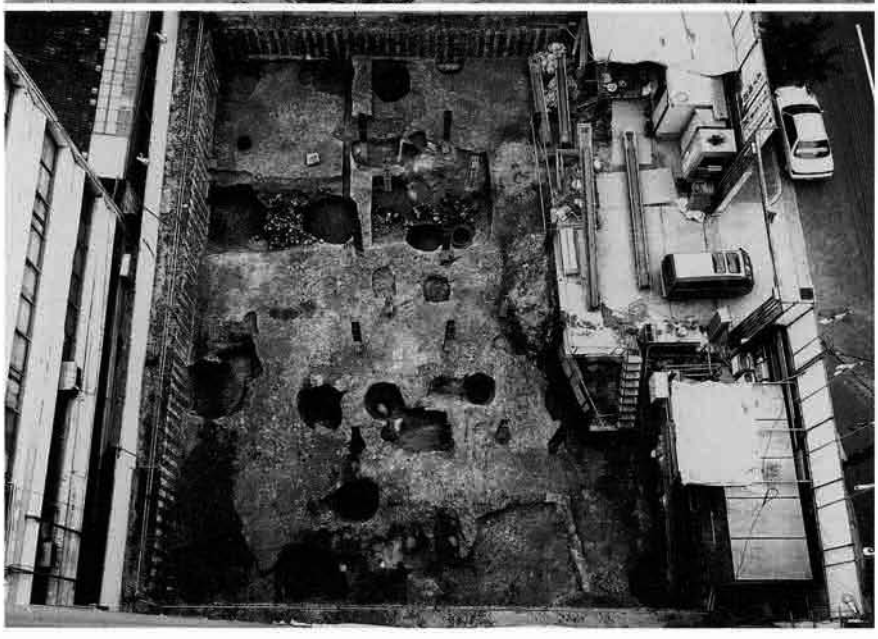
豊臣前期遺構検出状況
（東から）

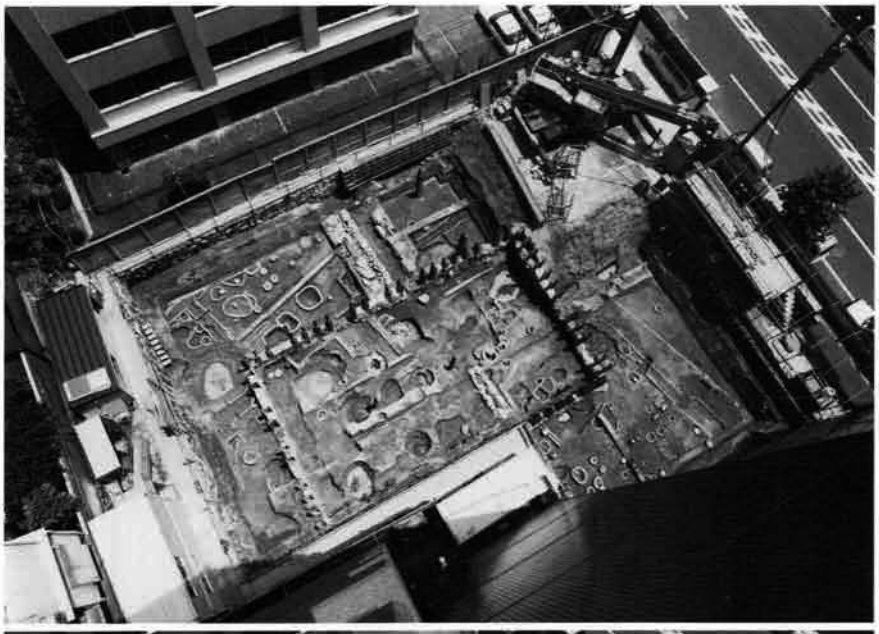


豊臣前期SB505～508
（北から）



豊臣後期遺構検出状況
（東から）





第５・４層相当層上面
検出状況
（北西から）



第３層相当層上面検出
状況
（北西から）

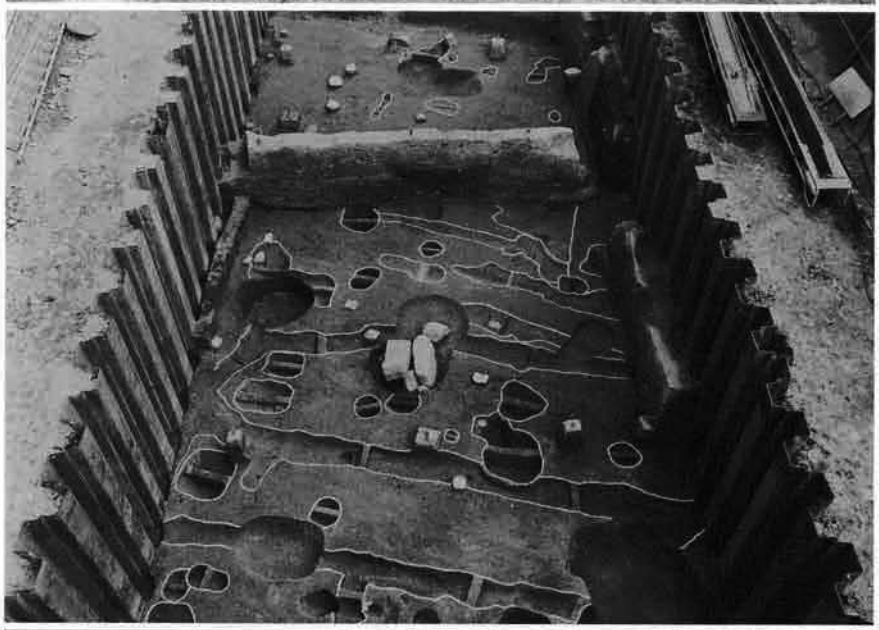


SW202・SD203
（南東から）

OS87－152次SD202
（南東から）

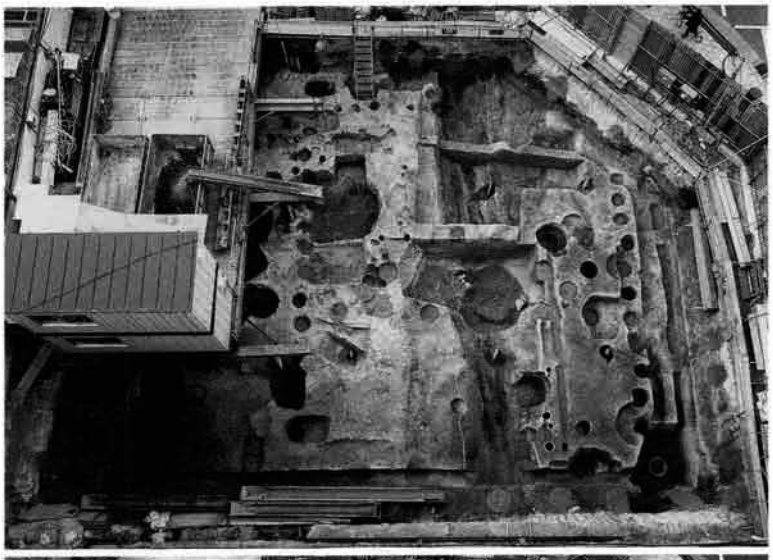


OS92－22次
第５層上面検出状況
（北から）

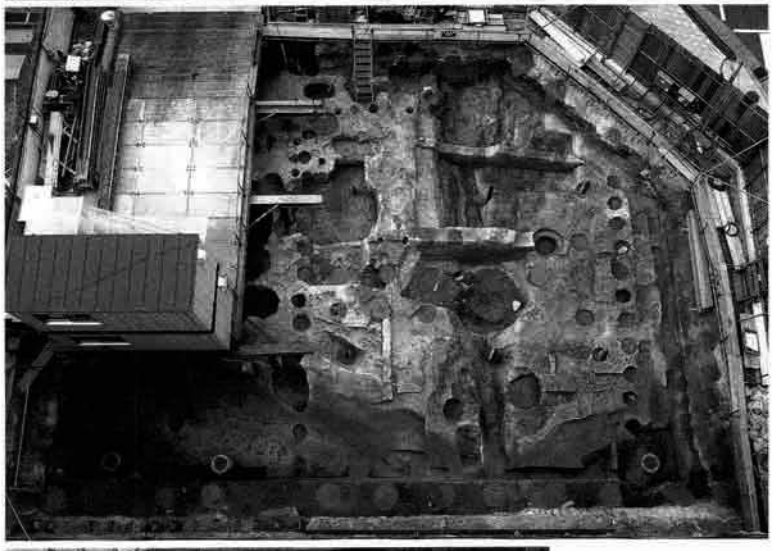


OS92－22次
SW201・SD201
（南東から）

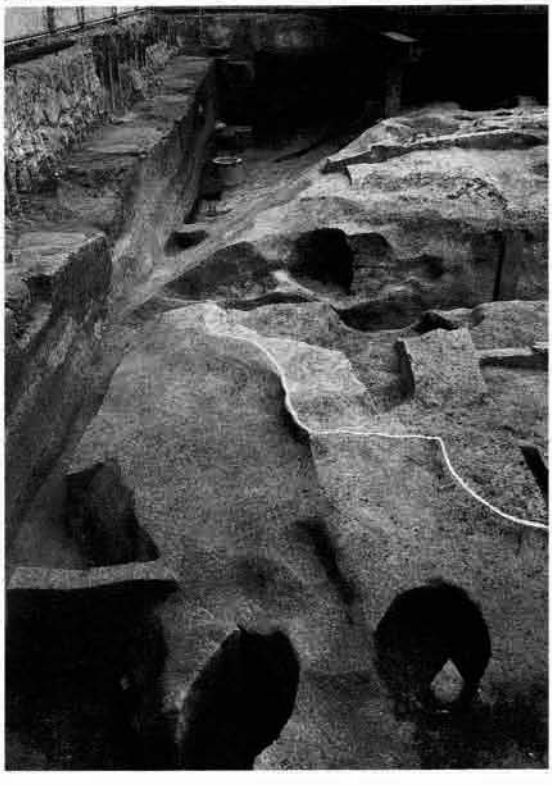




SD201（東から）



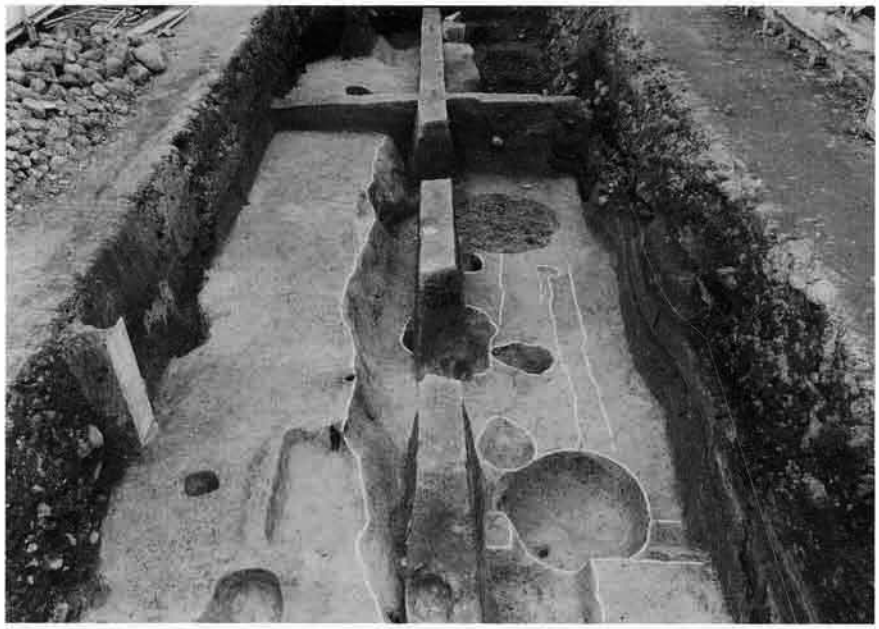
SX501（東から）



SX501（北から）

図版三七　OS89—6・91—4・91—34次調査の遺構

OS89－6次SX201
（北から）



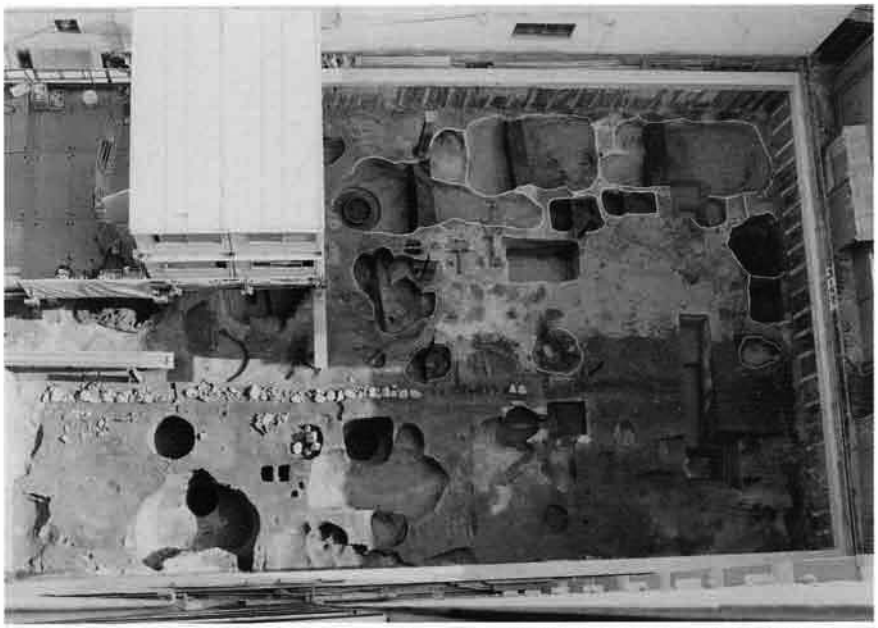
OS91－4次SD501
（南から）



OS91－34次
SX301・302、
SD203・204
（南から）



図版三八　OS91—64・91—93次調査の遺構



OS91－64次
遺構検出状況
（西から）



OS91－64次
遺構検出状況
（北から）



OS91－93次
整地層内の礫集積
（南から）

OS85－36次
徳川期石組穴蔵
（西から）



OS89－149次
深掘りトレンチ（北から）



OS90－1次
徳川期遺構検出状況
（東から）





OS89－41次
SW501・SX501
（南から）

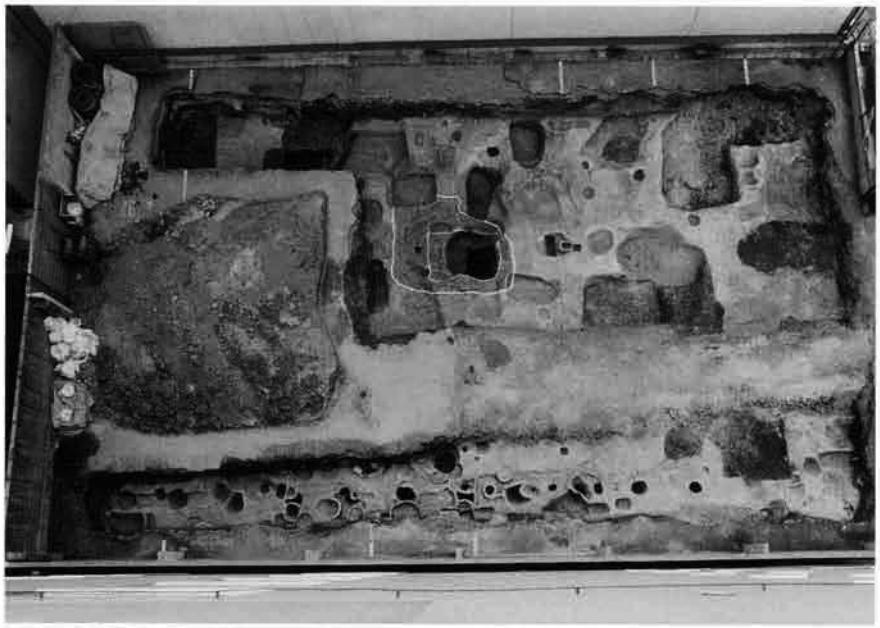


OS89－41次SA501
（東から）



OS91－53次
SD401・402（南から）

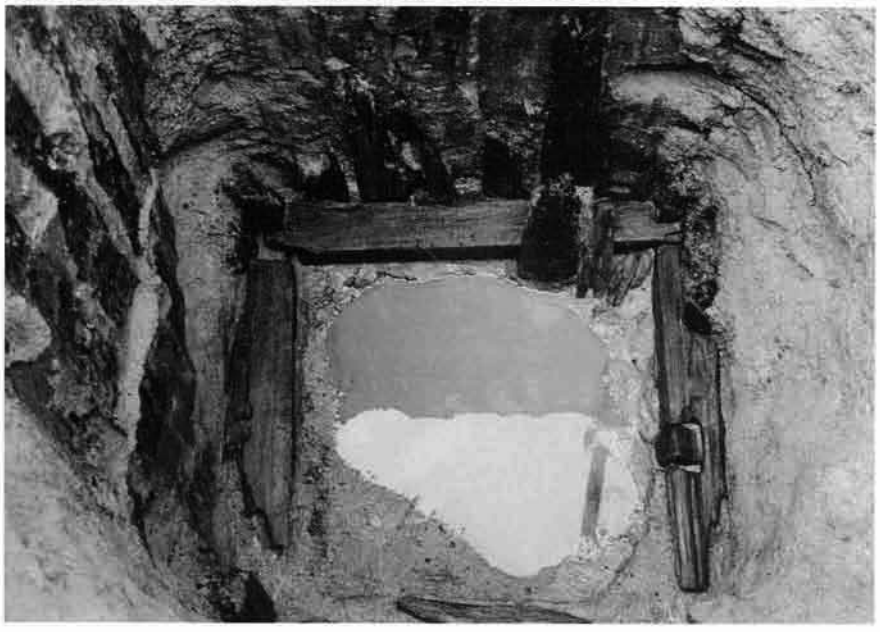
SE601検出状況
（東から）



SE601井戸枠遺存状況
（西から）



SE601土居組
（西から）





OS87－14次SM301
（北東から）



OS87－14次SD101
（西から）



OS89－23次調査地全景
（南から）

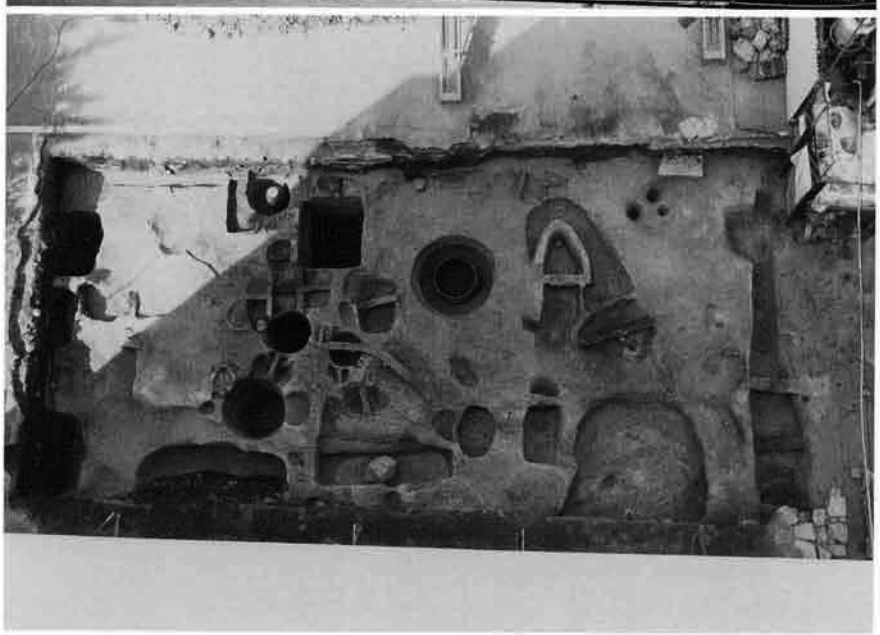
OS89－33次調査地全景
（南から）



OS93－28次北側調査地
（南から）



OS93－28次南側調査地
（東から）



図版四四　OS90—27・88—73次調査の遺構



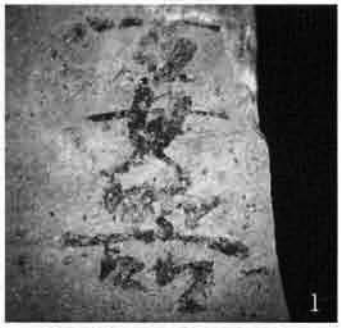
OS90－27次南壁断面



OS90－27次
第3層上面完掘状況
（東から）



OS88－73次
礎石検出状況（北から）



















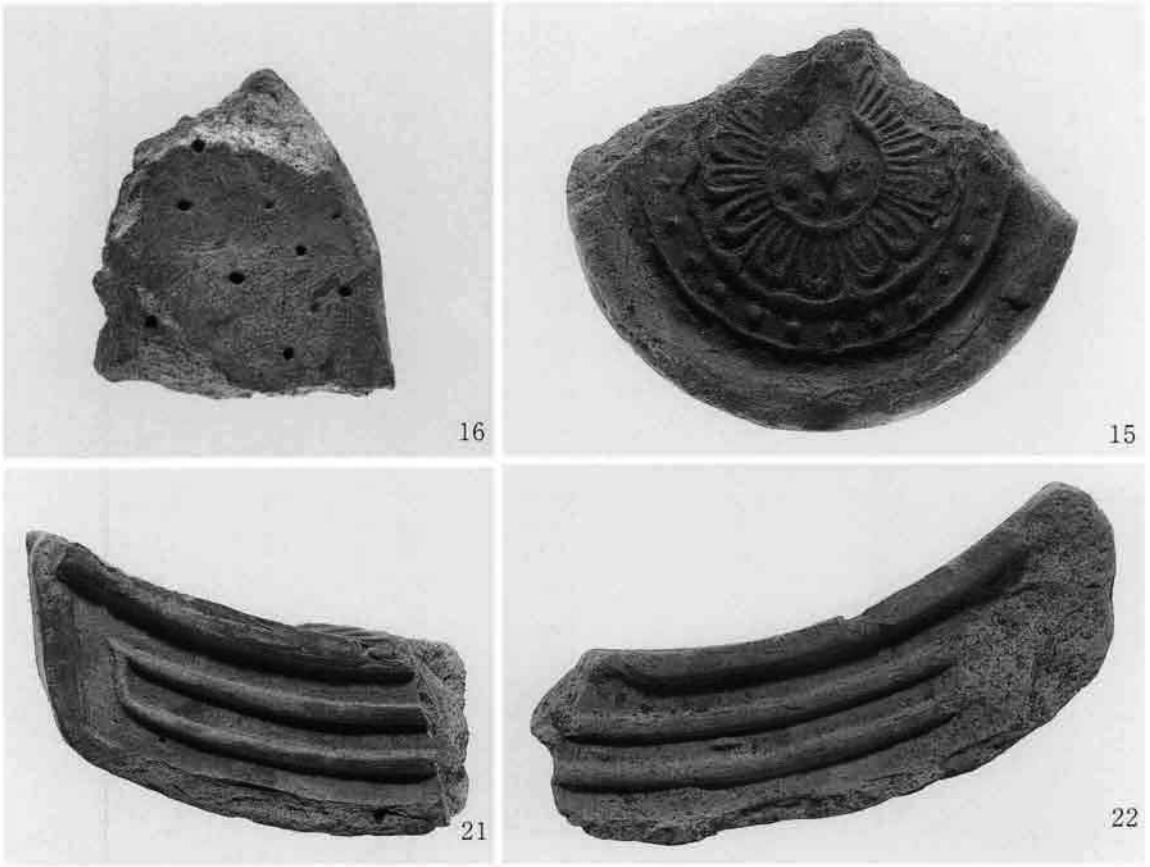


5′

墨書土器(括弧内は報告番号・次数)
1：「万女器」(29・OS90−50次)
2：「厨」(25・同上)
3：「厨」(28・同上)
4：「厨」(27・同上)
5：「厨」(26・同上)
6：「浄」(30・同上)
7：「攝」(94・OS87−29次)
8：「十上」(92・同上)
9：「木」(95・同上)
(1〜6は赤外線照射による撮影)



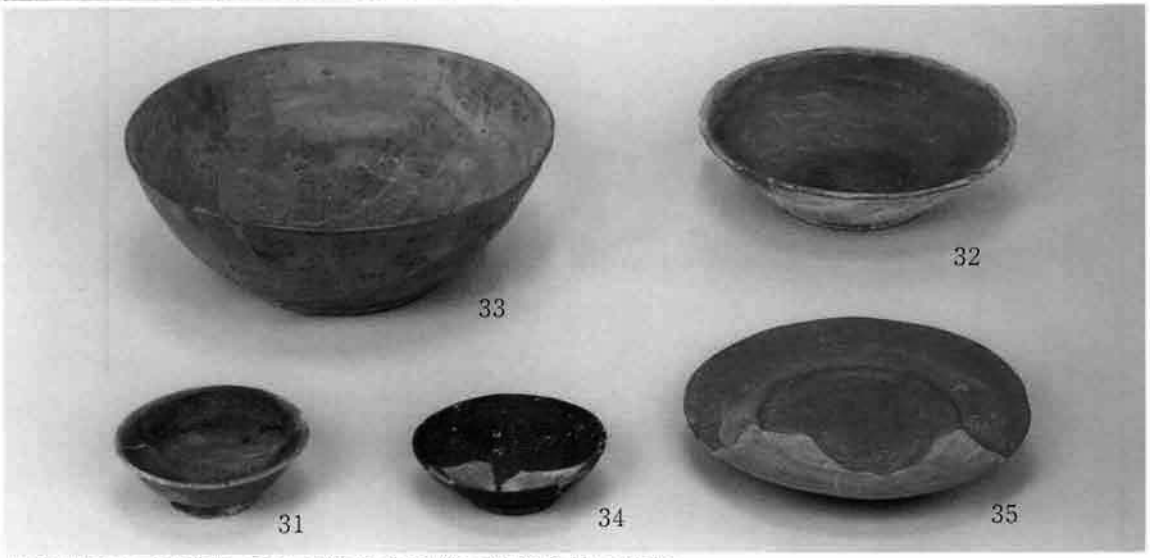
OS87−29次SE503出土土器



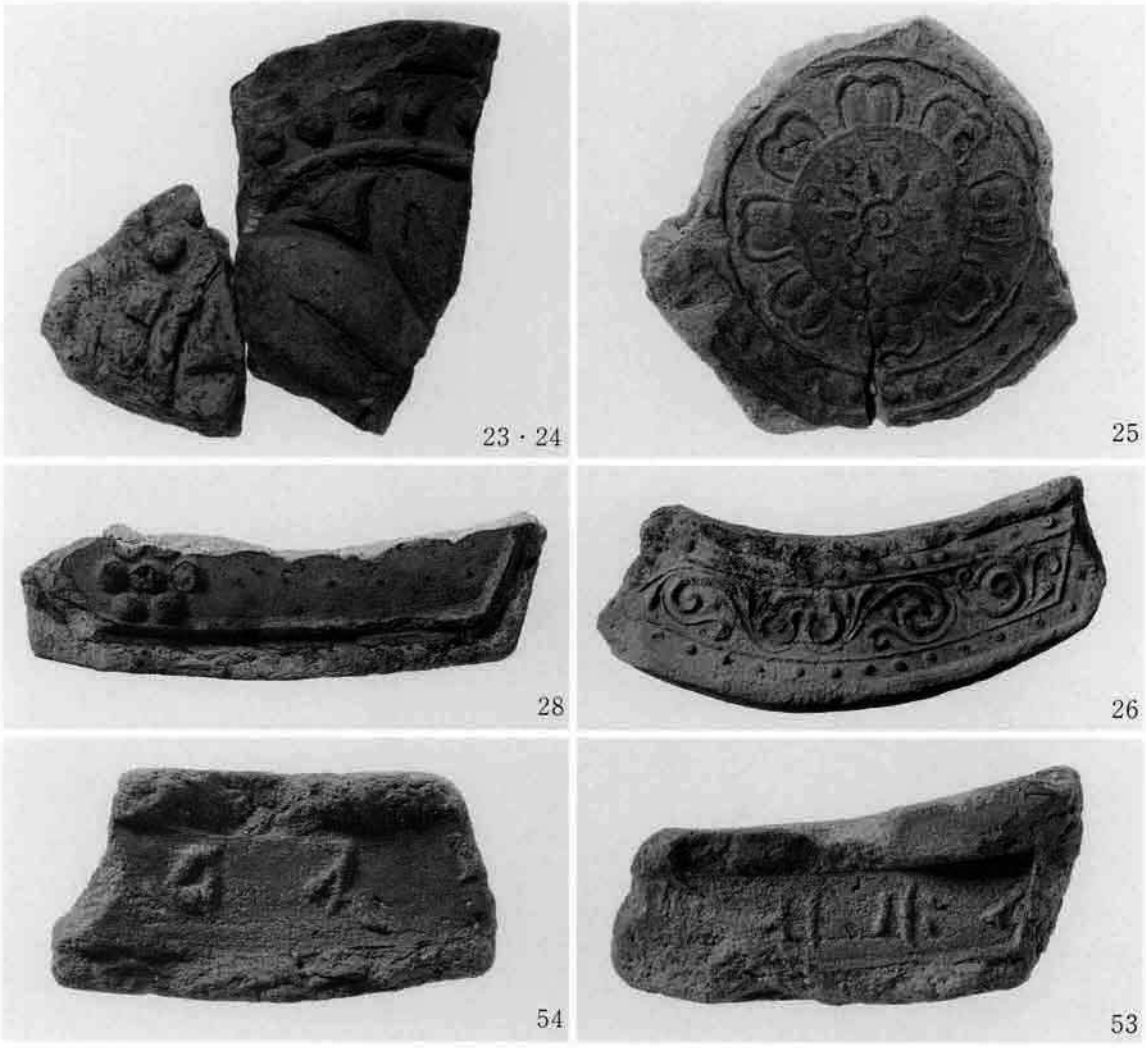
出土瓦（番号は第Ⅲ章第1節の遺物番号に対応）



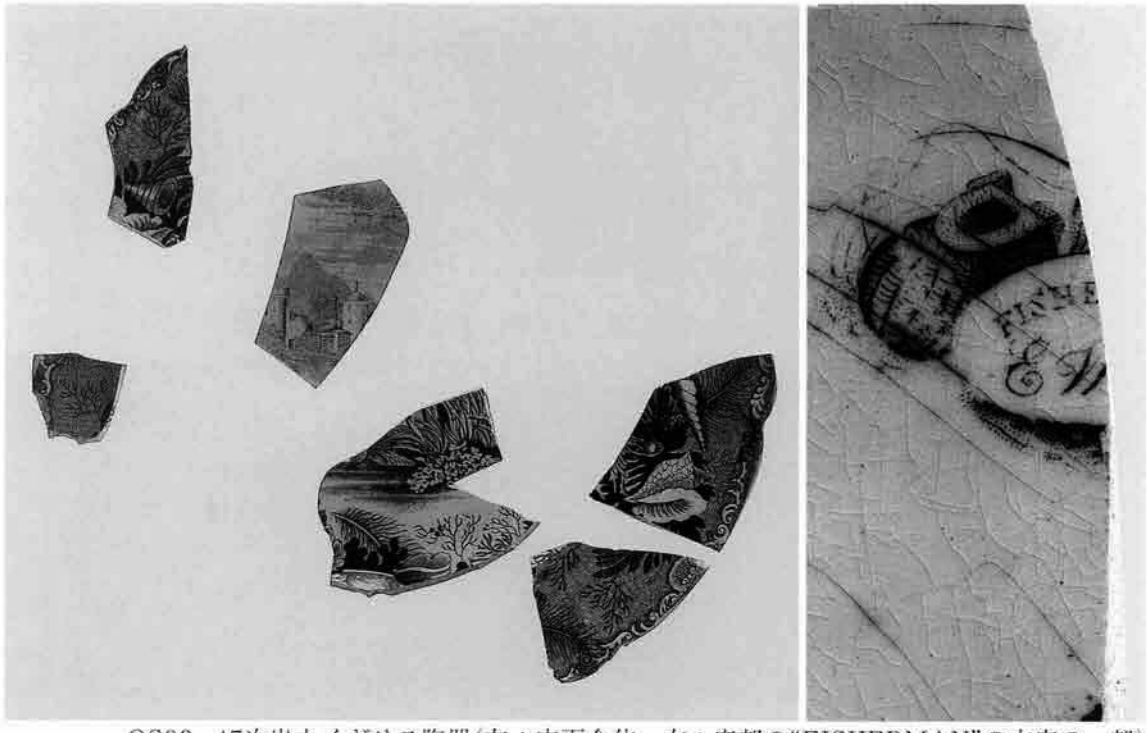
水滴と風字硯（番号は第Ⅲ章第1節の遺物番号に対応）



緑釉陶器と灰釉陶器（番号は第Ⅲ章第1節の遺物番号に対応）



OS87—100・90—31次出土瓦（番号は第Ⅲ章第10節の遺物番号に対応）

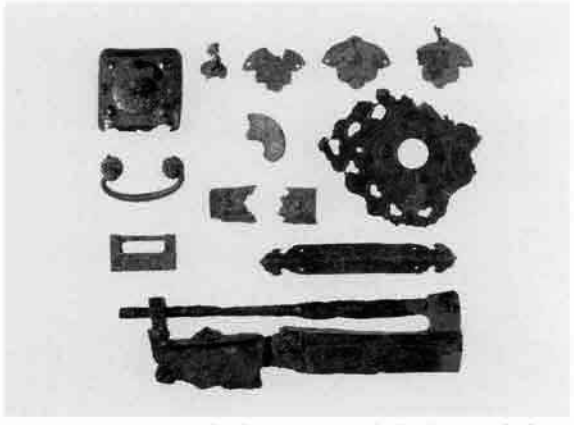


OS93—47次出土イギリス陶器（左：内面全体、右：底部の“FISHERMAN”の文字の一部）

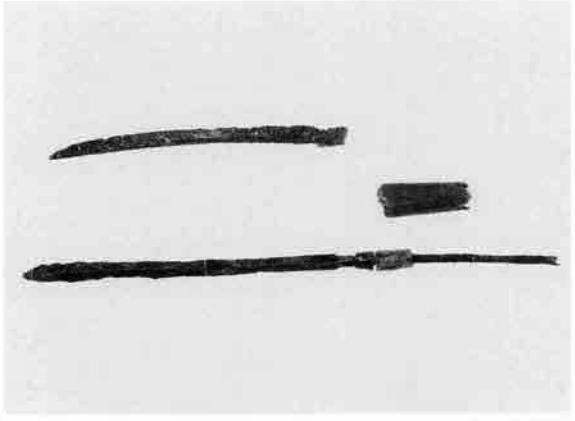
図版四八　OS85—28・87—40・87—78・89—148・92—1次出土遺物



1．OS87－78次桔梗紋鬼瓦



2．OS87－40次(上)・87－78次(下)出土壺金具



3．OS87－40次出土槍・刀・飾り金具



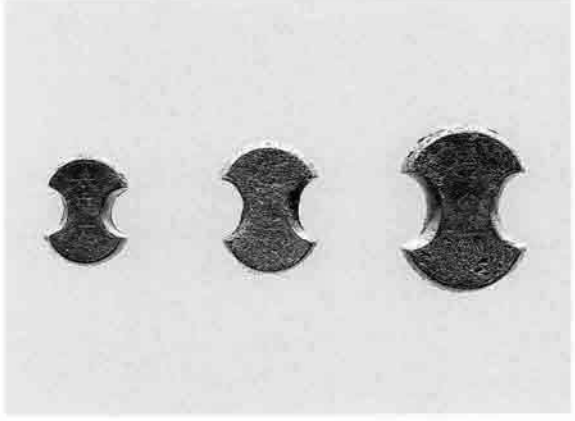
4．OS85－28次出土小柄



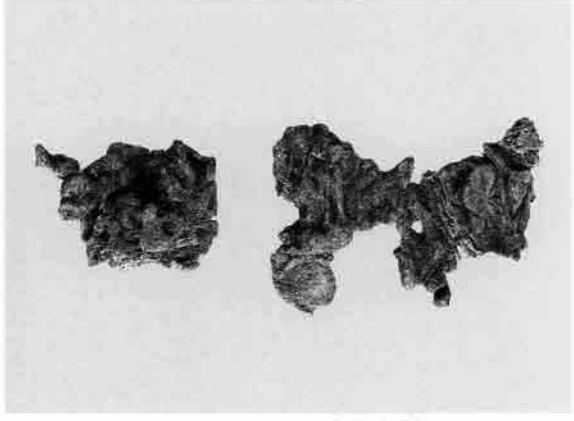
5．OS87－40次出土飾り金具



6．OS89－148次出土鋳型



7．OS92－1次出土分銅



8．OS92－1次出土鉛

大坂城跡Ⅶ

ISBN 4 －900687－73－ 1

2003年7月31日　発行 ©

編集・発行　財団法人 大阪市文化財協会

〒540－0006　大阪市中央区法円坂 1－1－35

（TEL.06－6943－6833　FAX.06－6920－2272）

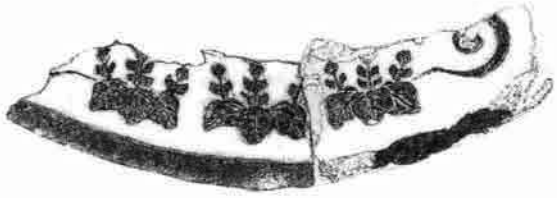
http://www.occpa.or.jp/

印刷・製本　ヨシダ印刷株式会社　大阪営業所

〒532－0003　大阪市淀川区宮原 5 － 1 －18

Archaeological Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan

Volume VII

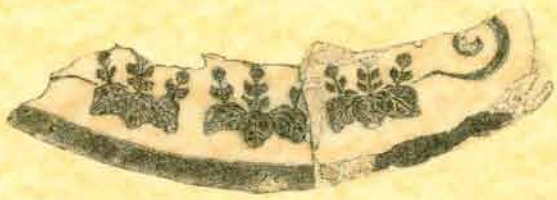


July 2003

Osaka City Cultural Properties Association

Archaeological Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan

Volume VII



July 2003

Osaka City Cultural Properties Association